

---

# 魔法戦記リリカルなのはSchool? ~ 10年後の物語 ~

酔仙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはSchool? ～10年後の物語～

### 【Nコード】

N7903V

### 【作者名】

酔仙

### 【あらすじ】

ヴァロット達の卒業から10年、スクールは開校から12年目の夏を迎えようとしていた。

スクールは既に最強の魔導士を育てる教育機関としてその地位を確立し、

管理局からは絶大な信頼を寄せられ、生徒達は引く手あまたの武装隊員として将来を囑望されていた。

でも、1年生の連中は相変わらず問題児が多く困った事を起こす

のもまた日常だった。  
そんな彼らは先生や先輩達の強さに引つ張られ高みを目指して成長する。

ちよつとお馬鹿でちよつと熱血でほのぼのとした日常の彼らを描いていこうと思います。

時に恋愛有り、時にケンカや実戦、大事件も起きたりします。

その度に現れてその強さを見せ付ける卒業生達、

その神にも匹敵する強さを見て、自分達の弱さを噛み締める生徒達、そのギャップに苦しみながらどう成長していくのか？

彼らの成長を温かく見守ってやって下さい。

なのはですら最早ちよい役、卒業生達チート過ぎ、はやてさんはロード・オブ・ザ・魔王、

やばいキャラ多数、スカさん復活？、ヴァロットは最強のチート、何故ガンダム？、

ナカジマ家増殖しすぎて最早收拾付かず、新世代キャラ続々登場っ  
て感じです。

## 登場人物紹介1（前書き）

今度の主役は、空手野郎と剣術少女だ！

## 登場人物紹介1

主人公

今度の主役は、空手野郎と剣術少女だ！

1 - 1

ジョン・ハミルトン16才(男)

空手を習っている。学園のトラブルメーカー

ケンカ次元世界1を目指す男、体力と根性はなかなか見上げた物。

グラナガン都市予選で優勝賞した経験の持ち主、その後出場したミ

ツドチルダシリーズで、

スクールの生徒にフルボッコにされ現実の厳しさを知る。

根はまっすぐな奴なんだが……馬鹿でスケベ、単細胞、結構熱血、

憎めない奴、

リンに気があるのだが……

デバイスは小手型アームデバイス。

1 - 2

リン・ヤマザキ16才(女)

宮ノ内示現流を習う、クラスのムードメーカー

ちよつと抜けた所がある。

明るくて天然な性格。

デバイスは新素材で作られた日本刀「飛梅」

兄は生徒会副会長

父は日本出身、北辰一刀流7段、現在管理局で剣道教室を開いている。

幼少の頃より父に鍛え上げられた為、剣の腕はかなりの物、

加えて宮ノ内示現流を学んでいる為かなりの強さがある。

新素材オリハルコングラファイト合金：

EC兵器に対応する為開発された合金、硬度9.97を誇り、強度はダマスカス鋼をも上回る。ただし、余りの硬度と強度故、一旦成型すると形状の変化や、大きさの変化が出来ない欠点を持つ。

その為、常にデバイスをそのままの大きさで持ち歩かなければならない。

使われているのは熱硬化シリコン、オリハルコン、ミスリル、カーボン

チタニウム、コバルトなど数十種類の金属を絶妙の割合で配合している。

オリハルコングラファイト合金は元々ヴァロットが研究していた物、ダマスカス鋼以上の強度で、量産可能な素材として開発された。

一旦はヴァロットが研究を放棄した物の、マリーさんがそれを引き継いで完成させた。

コスト的には安くはないが、日本の職人にダマスカス鋼の刀を発注するより安い。

## 学校関係

### 教師

ロサード・デ・ラグリマ27才

1-1担任、ソリスと結婚し子供が一人いる。

ソリス・デ・ラグリマ（ソリス・カオール）27才

1-2担任、ロサードと結婚し、子供が一人いる。

子供の名前はロベール7才

ビリー・ブラック57才

1 - 3 担任

奥さんと二人暮らし、

娘が居るが、本局勤めで一緒には暮らしていない。

ピノ・不破 (ピノ・グリーンジョ) 25才

1 - 4 担任、

お見合いの末、ケン・不破と結婚、

1 児の母、息子ジョージ3才

最近現場復帰した。

月村 隼 26才

2 - 1 担任、

現在結婚相手を物色中。

エリオ・モンディアル 30才

2 - 2 担任、キャロと結婚し二人の子供が居る。

ティアナ・グランセニック (ティアナ・ランスター) 37才

2 - 3 担任、ヴァイス・グランセニックと結婚し、子供が一人いる。

子供はジェラルド 6才

キャロ・モンディアル (キャロ・ル・ルシエ) 30才

2 - 4 担任、エリオと結婚、2 児の母である。

子供は、マティス 9才、パルティ 8才

ヴィータ???

教頭先生、相変わらず中間管理職として頭の痛い毎日を送っている。

高町なのは 40才

我らが校長先生、最近は卒業生達の活躍で、現場に出る事は一切無

い。

娘ブレオは士官学校2年14才

息子ユウキは9才

娘ヴィヴィオは現在聖王教会に暮らす。

ヴィヴィオに娘が居る。既におばあちゃんだ。

アステイ・ロシエット（アステイ・スプマンテ）27才

転送講座の講師、最近現場に復帰した。

8人の子持ち ロシエット家で紹介

ヴァンサン・ロシエット1佐27才

指揮官研修を一手に引き受ける。

詳しい事は、ロシエット家およびスペシャルフォースで紹介

陳 劉邦

中国拳法の特別講師

チャチャイ

ムエタイ・ムエボーランの特別講師

佐藤さん

剣術の特別講師、宮ノ内示現流を教える。

スー・与那覇

校医・空手の特別講師

12代目生徒会

会長

2-4FB



クロスリード・カマンサツク17才(男)

12期生最強を誇る使い手、御式内、御神の剣を習っている。魔力も非常に高く、既にSS級有ると言われている。

統率力が高く、先生方からの信頼も厚い。

指揮官適性試験でも10年ぶりに満点合格している。

執務官補佐の資格を持っており、この冬の執務官試験でも満点合格の期待が掛かる。

とても出来る人、あだ名はミスターパーフェクト

副会長

2-2GW

ヒビキ・ヤマザキ17才(男)

宮ノ内示現流を習っている、既に佐藤先生と互角なぐらいに戦える。非常に物静かな性格、でも、怒った瞬間性格が変わる。

あだ名は大魔神、オリハルコングラファイト合金の剣(日本刀、銘：呑龍)を持つ

妹を溺愛している。「妹に付く悪い虫は俺が斬る!」

第1書記

2-3CG

カティ・サーク(女)

かなりの美少女、男子からの人気が高い。でも怒ると所構わずぶつ放す。

TRG-21狙撃銃型アームドデバイス所有、マルチポートで実弾も撃てる。

多彩な砲撃の持ち主、装弾数は10発

第2書記

2-4FB

ラフロ・イグ(男)

アフロではない、ラフロだ！  
でも髪型はアフロだ！  
エマルジョンコレクトSDの使いこなしはかなりの物、  
他に変な収納魔法を持っている。  
アフロの中にいろいろな物を収納している。  
御式内を習っている。あだ名は勿論アフロだ！

#### 第1会計

2 - 2 G W

アード・ベック（男）

太極拳・棍術を習っている。

太極拳の様につかみ所のない性格

だが、計算高く意外と黒い1面がある。

デバイスは鉄棍（エナジーパック仕様）

#### 第2会計

2 - 1 F A

イスズ・ナカジマ（女）

スクラテイの妹、一番人数が多い世代。

ISは振動破碎、技名は削岩拳、削岩機のような衝撃波を打ち込んでくる。

ムエタイ・ムエポーランを習っている。

かなりきつちりした性格（A型体質）で、僅かな服装の乱れや、物の置き方が悪いのが許せない。

だから、常に拭き掃除をしたり、整理整頓をしている。

一番ギンガに近いIS特性を持っている。

#### 第1庶務

2 - 3 C G

グレン・モーレンジイ（男）

H&amp;K・MP5のアームドデバイス、連射性に優れている。  
マルチポートで実弾も撃てる。装弾数30発  
多彩な砲撃の持ち主、他に幻惑魔法を得意とする。

## 第2庶務

2-1FA

アヤメ・ナカジマ（女）

スクラティの妹、一番人数の多い世代。

ISは振動破碎、周波数1Hz、そう人造魔王一味のアルファの量産機の一人、

技名はジャイアントインパクト、ただアルファほどの破壊力はない、でも非常にタフな所や、大雑把な性格はそっくり、スクラティを超える大食漢、

デバイスは小手型アームドデバイス、

李氏八極拳を習っている。

ジャイアントインパクトを発願に乗せる事でアルファ級の破壊力を出せる。

## 1年生

1-1

ジョン・ハミルトン（男）

冒頭で紹介したのでパス

マリー・ボーン（女）

ジョンの事が気になっている、

太極拳を習っている、かなり非凡な才能の持ち主

鎌型アックス（カルトベーター）を使う。

http://www.rivertop.ne.jp/rivertopsabu/omosiro/buki/axs/ta66.html

バランタイン・ファイネスト(男)

こいつもかなりのスケベ、女子からスケベ3人衆と呼ばれる内の人、

デバイスは、ツインブレイドhttp://www.rivertop.ne.jp/rivertopsabu/nif/wt054dx.html

御式内を習っている、かなり非凡な才能の持ち主

ツバキ・ナカジマ(女)

スクラテイの妹、一番人数の多い世代。

ISは振動破碎、スクラテイと同じウルトラソニックウェーブを足から打ち出す。

李氏八極拳を習っている。結構積極的な性格

1-2

ジョニー・ウオーカー(男)

空手を習っている。

デバイスはトンファー型デバイス。

リンの事が気になるのだが……

リン・ヤマザキ(女)

冒頭で紹介したのでパス

フェイマス・グラス(男)

クロウナイフのデバイスを持つ(エナジーパック仕様)

(http://www.rivertop.ne.jp/riv

[ertopsabu/nif/jd01.html](http://ertopsabu/nif/jd01.html)

かなりねっちこい性格、太極拳を習っている。

ツグミ・ナカジマ(女)

スクラテイの妹、一番人数の多い世代。

ISは振動破碎、高周波を圧縮して打ち出してくる。

スバルに最も近いIS特性を持っている。

空手を習っている。

1 - 3

デュワーズ・ホワイト(女)

大型アーチェリーのデバイスを持っている。

魔力の矢をつがえて飛ばしてくる。

多彩な砲撃が持ち味、

近接戦闘用に、御式内を習っている。

ジャック・ダニエル(男)

M82A1対戦車ライフル型デバイスを持つ、装弾数11発、

デバイスが大きい為普段はモドリリースしている。

連射が利かないが、その分大きな砲撃が可能、

実弾も撃てるマルチポート仕様。

銃衝術以外に空手を習っている。

ヘンリー・マッケンナ(男)

S & W - M500二丁拳銃のデバイスを持つ、

左右合わせて10発(片方で5発)しか装弾出来ない。

ピリー先生からファイブオンワンを叩き込まれる事になる。

銃衝術、ムエタイの両方を習っている。

実弾も撃てるマルチポート仕様。

サクラ・ナカジマ（女）

スクラティの妹、ISはエネルギードレイン、相手の魔力を吸い取ってしまう。

砲撃専用デバイス、ボウモアキャノンを持っている。

ガンマの量産機ではないかと思われる。

普段はデバイスがあまりに大きい為、モードリリースを余儀なくされている。

1 - 4

4組は全員ストレージデバイスで、オリハルコングラファイト合金製の小太刀と杖（いずれもアームドデバイス）を渡されている。

ブラントン・ゴールド（男）

御式内を習っている

女好きな性格、かなりのスケベ、ジョンと一緒に何かやらかす事が多い。

今の所まだ魔力は低い、この先どれだけ伸びるやら？

ジム・ビーム（男）

御式内を習っている。

かなりの悪戯者で、とんでもない悪戯を仕掛けてくる。

ナギに気があるらしい。

ナギ・ナカジマ（女）

スクラティの妹、ナカジマ家にしては珍しくISの発現が見られない。

代わりに転送能力を持っている。御式内を習っている。

かなり引つ込み思案な性格、御式内はかなりの腕前（小学校の頃からスクラティに叩き込まれた）

デルタの量産機ではないかと思われる。

エヴァン・ウィリアムス（女）

御式内を習っている。

他に幻術を使う。

山田ウィルスに冒されている。

自らを腐女子と称する山田信奉者、

山田2号的な性格、余りお近づきになりたくない。

#### 士官学校

FAモミジ・ナカジマ

プレオの同級生でチームメイト。

スクラテイの妹に当たる。

明るく活発な性格、人当たりが良く悪戯者

よくプレオと一緒に悪戯をする。

3才の頃からの付き合いでプレオと最高のコンビネーションで動ける。

小さな頃からスクラテイに御式内を叩き込まれ、既に御神の剣も使う。

ISはまだ発現していない。

ウェンディによく似ている。

GW高町・プレオ

校長先生の娘にして士官学校生徒会長。

カリスマ的美少女であるが、かなりの悪戯者。

よくモミジと組んで悪戯を仕掛ける。

統率力に優れ、高い魔力を持っている。

ナカジマ家の子供達と一緒に育ったせいかわち的には余り良くない。

小さな頃から御式内と御神の剣を叩き込まれている。

多彩な魔法が持ち味、性格的にはヴィヴィオとヴァロットをミックスした感じ  
物怖じしない大胆不敵な性格と言うべきか？  
未だにピーマンが克服出来ていない。

CG テイント・ペスケラ

プレオとは中学の頃からの付き合い、  
どっちかというと後先考えず突っ走るタイプ、  
砲撃馬鹿という感じ、高町家に遊びに来る様になってなのはに鍛えられた。

高い魔力と多彩な砲撃が持ち味で、かなりの無茶をする。

槍型インテリジェントデバイス「ガ・ジャング」を持っている。  
御式内杖術を習っている。

FBカエデ・ナカジマ

プレオの同級生でチームメイト。  
スクラティの妹に当たる。

よくプレオと一緒に悪戯をする。  
3才の頃からの付き合いでプレオと最高のコンビネーションで動ける。

小さな頃からスクラティに御式内を叩き込まれ、既に御神の剣も使う。

ISはまだ発現していない。

恐らくデルタの量産機と見られISの発現はない物と思われる。  
転送能力を持っていて、エマルジョンコレクトSDを使いこなす。  
かなり天然ボケな性格で、何処でも寝る。

スクラティの妹達、スクラティも含めて発見された当初は個体識別番号しかなく、



名前はなかった、スクラティの名付け親はマリーさん、  
それ以外はゲンヤさんが付けた様だ。

模擬戦のチームを組む場合

生徒会Aチーム

FA イスズ・ナカジマ GW アード・ベック CG カティ・サーク  
FB クロスリード・カマンサック

生徒会Bチーム

FA アヤメ・ナカジマ GW ヒビキ・ヤマザキ CG グレン・モ  
レンジイ FB ラフロ・イグ

1年Aチーム

FA ジョン・ハミルトン GW ジョニー・ウォーカー CG ジャッ  
ク・ダニエル FB ブラントン・ゴールド

1年Bチーム

FA マリー・ボーン GW リン・ヤマザキ CG デュワーズ・ホワ  
イト FB エヴァン・ウィリアムス

1年Cチーム

FA バラントイン・ファイネスト GW フェイマス・グラウス C  
G ヘンリー・マッケンナ FB ジム・ビーム

1年Dチーム(7代目ナカジマシスターズ)

FA ツバキ・ナカジマ GW ツグミ・ナカジマ CG サクラ・ナカ  
ジマ FB ナギ・ナカジマ

おまけ

THEティージャーズ

FAロサード GWエリオ CGティアナ FBキャロ

ティージャーズに関しては、ロサードと隼、エリオとソリスがそれぞれ交代する事もある。

チームTN2T

士官学校最強チーム、その実力はスクール2年の中堅チームにも匹敵する。

FAモミジ・ナカジマ GW高町・プレオ CGティント・ペス

ケラ FBカエデ・ナカジマ

## 登場人物紹介2

### 管理局関係

キュベ・エリカ27才

航空武装隊現場隊長兼戦技教導官

教導隊で教え子をフルボッコにしている事が多い。

最近、士郎がお見合い話を進めている。

キュベの一族はちよつと変わっていて、ファミリーネームが先に来る一族、

更に男子は名前の前に「サン」が就く

マリエル・アテンザ

第4技術開発室室長

八神はやて40才

ご存じ！地上本部長、日々地上本部の改革に力を入れる怖い人、麻雀が得意、2児の母、管理局の最終兵器でもある。

息子タケル9才、娘ウズメ7才

ヴェロツサ・A・八神

はやての旦那、地上本部事務次官

シグナム

地上本部作戦指令室長

地上本部で唯一はやてをどつく人

クロノ総局長

フェイトの兄、総局長になってからは殆どちよい役

シヤマル先生、  
地上本部高度医療センター所長兼外科部長兼クラナガン大学医学部  
外科教授

なのはや卒業生達から絶大な信頼をされているスーパードクター

ポメちゃん（ルイーズ・ポメリー）

本局職員厚生課、職員厚生第1課長

管理局は職員の数膨大に多い為職員厚生課は1課から10課まで  
有り、

それぞれに仕事を分担している。

レヴ・ゴールドート（レヴ・ドトーヌ）執務官27才

本局警防部刑事課捜査一課所属、

捜査一課は広域凶行犯が専門の部署

ティアナがスクールの教師になる前にいた部署

ミュスカと結婚した。子供4才が居る。

最近現場復帰したばかり。

山田・錦 捜査官27才

本局警防部刑事課捜査二課所属

捜査二課は単一世界の凶行犯が専門の部署

グレイス・甲州27才

本局警防部刑事課捜査四課所属

捜査四課は窃盗犯・侵入犯が専門の部署

ミュスカ・ゴールドート26才

本局警防部警備課スワット隊3番隊隊長

レヴの旦那、鬼の警備隊長として鳴らしている。

ヴァイス・グランセニック  
地上本部警備課スワット隊現場隊長（1番隊隊長兼任）  
ティアナの旦那  
子供が一人いる。

クロ・デ・ロバック27才  
地上本部警備課SP隊所属、SP現場隊長  
スクール一期生、御神の剣を使う、他にも変身制御などを使いきな  
す。

リオ・ウエズリー25才  
スクール4期生  
教導隊教導官、近接戦闘のスペシャリスト、  
毎日の様に生徒をボコる怖い教導官

スペシャルフォース  
スペシャルフォースは現在5つの小隊と5名のロングアーチ、  
副部隊長と部隊長、融合騎1名？戦艦の整備員15名の合計43名  
からなる。

ヴァンサン・ロシエット1佐27才  
部隊長、次元世界最強の男  
現在武装隊20名を抱える。  
スクールの指揮官研修を一手に引き受けている。  
ミッドチルダーの子作り名人と言われる。  
エマルジョンコレクトの開祖であり、  
4組の生徒にエマルジョンコレクトを教える事もある。

アマローネ・D・ヴァルポリーチェ27才

3佐、執務官にして副部隊長

ヴァロット不在時には指揮を任せられている。

「誰か嫁にもろて」

アプリリア???才、身長27センチ

ヴァロットが道ばたで拾った融合騎、

自分の名前以外何も覚えていなかった。

その後転送魔法を中心に各種の魔法を覚える。

現在はロシエツト家のマスコツトおよび、ブラシカのパイロットを務める。

背中にトンボの様な4枚の羽がある。

融合する事で、ロードに風系、水系の攻撃魔法を与える能力を持つ

チームウィンド：全員が神速か飛毛脚を使いこなす。速い動きからの奇襲戦を得意とする。

アンナ・ベルク1尉27才

チームウィンド小隊長、FA

御神の剣、御式内を使いこなす。

未だにバローロに振られた事を引きずっている。

チームフォレスト：全員が霞み技を使う、攻撃力は高くないが、謀報戦を得意とする。

キュベ・ユウコ（不破祐子）2尉22才、通称ユウコ

チームフォレスト小隊長、GW

不破一族の出身、魔力はない

セルジユと結婚している。

御神の剣を使いこなす。アステイ以上の霞技の使い手  
まだ子供は居ない。 士郎の姪に当たる。

チームファイヤ：全員高い魔力と大火力砲撃の使い手、攻撃力は非  
常に高い

キュベ・サン・セルジユ1尉24才、通称セルジユ

チームファイヤ小隊長、CG、スクール5期生

エリカの弟、非常に強力な砲撃の持ち主、砲撃の種類も多彩、

ピリーの愛弟子、M16のデバイスを持っている。

セカンドモードはレールガンにチェンジする。

士郎の薦めでお見合いし、ユウコと結婚した。

チームマウント：全員がエマルジョンコレクトSDを使いこなす。  
防御力は最強

アヴェイ・ド・レランス1尉23才、通称アヴェイ

チームマウント小隊長、FB、スクール6期生、元生徒会会計

レットのライバル的存在、エマルジョンコレクトSD、御神の剣を  
使う。

防御に定評がある。

チームフリーダム：はみ出し者ばかりで構成されたチーム、だが有  
る意味最強。

レニエ・ロシエツト1尉23才、通称レット

チームフリーダム小隊長 スクール第6期生

ヴァロツトの弟、ポジションはFB

転送魔法、エマルジョンコレクトSDなどの魔法を使う、

格闘術は御式内、御神の剣、御式内一刀剣を使う。  
御式内一刀剣で御神の剣と渡り合うほどの使い手  
ヴァロットから貰ったバイク（バンディット1250F）を乗り回す。

ロンググーチ

グリフィス・ロウラン一尉

ロンググーチ小隊長

主に情報処理を担当している。

戦闘時はブラシカの戦況オペレーターを務める。

ルキノ・ロウラン（ルキノ・リリエ）曹長

グリフィスの妻、普段は経理事務をしている。

戦闘時はブラシカの操舵手（アプリリア不在時）をこなす。

アルト・クラエッタ陸曹

完全に行き遅れちゃった人、

普段は業務管理をしている。

戦闘時はブラシカの通信士、

プティ・シッド一等陸士20才

士官学校卒

普段は労務管理が仕事

戦闘時はブラシカの測的手兼砲撃手（アプリリア不在時）

シノン・ピカセ2等陸士19才

高卒、普段は庶務（雑用）係

デバイスマスター3級を所持



デバイスの簡単な修理や調整程度なら出来る。  
戦闘時は、オフィスの留守番

108部隊

ヴィーニヤ・御神 (ヴィーニヤ・デルマル) 27才

旦那の名前は御神誠二(御神誠の息子)

子供3才と2才が居る。

現在育児休暇中、

キアンティ・クラシコ27才

第8警防署警部

現在結婚相手を探している。

### 登場人物紹介3

#### 次元航行隊

フェイト・T・ハラオウン 40才

次元航行隊筆頭提督（実質的な部隊長）

娘セシル9才が居る。

家はなのはの隣だったりする。

カルロ・T・ハラオウン（カルロ・ロッシ）

フェイトの旦那、最近はフェイトさんの尻に敷かれる生活らしい。

カレル・ハラオウン 25才

次元航行隊の一提督、執務官兼任、

ハラオウン家の跡取り息子

間もなく静音と結婚秒読み段階と言われている。

スクール三期生にしてエリート中のエリート

何でもそつなくこなしている。

御神の剣、御式内を使いこなす。

リエラ・ハラオウン 25才

次元航行隊の一提督、執務官兼任

現在士郎がお見合い話を進めている。

スクール3期生

御神の剣、御式内、エマルジョンコレクトSDを使いこなす。

バローロ・R・ブツシア 27才

次元航行隊特殊部隊SEALS部隊長、

ブラシカ型2番艦キャノーラ提督、執務官兼任

かなりの遊び人との噂有り

SEALS武装隊はスクール出身者ばかりで固めた最強の特殊部隊  
武装隊50人からなる。

ロラン・ジェリド26才

次元航行隊特殊部隊SEALSの現場隊長、執務官兼任  
ヴィレと結婚した。

現在子供が二人いる。

ヴィレ・ジェリド（ヴィレ・クレッセ）26才

次元航行隊特殊部隊SEALSの現場副隊長  
隊員達からは姉さんあねと呼ばれる。

子供が二人いる。

ヘレン????才

SEALSが以前急襲した違法研究施設にいた融合騎、  
全部で6人居た内の一人、他は次元航行隊の別の部隊へ就職、  
今はキャノーラの操縦要員

ネロ・ハラーナ（ネロ・ダヴォラ）27才

次元航行隊機動兵器部隊隊長  
機動兵器運用艦ラベルダ提督、執務官兼任

フィノと結婚した。子供が3人いる。

フィノ・ハラーナ27才

次元航行隊機動兵器部隊現場隊長  
現在カトリーヌちゃんは、Zガンダムからストライクガンダムへ外  
装が変更された。

次元航行隊機動兵器部隊：疑似モビルスーツ22機、サポート武装  
隊28名からなる。

他に整備士58名、艦橋スタッフなど入れると130名からなる部隊  
疑似モビルスーツは隊長機がストライクガンダム、副隊長機がスト  
ライクルージュ

隊員は、ガーナード・ザク・ウォーリア又はザクノフロントムとな  
る。

疑似モビルスーツ：召喚獣「イド」にモビルスーツの外装を被せた  
物に、

コクピットを組み込み、操縦できるようにした物。

何故疑似モビルスーツなのかというと、魔力炉は幾ら小型化しても、  
モビルスーツに組み込める大きさまでは小型化が出来なかった。

またジュエルシードの様なエネルギー結晶では出力が小さすぎて、  
モビルスーツは動かない。

ではジュエルシードを大量に使用したエネルギーパックでは？ 稼

働時間が短い、

パック交換の瞬間をどうするのか？など問題が多い他、

動力伝達システムの開発など膨大なコストがかかる。

しかし、イドならそう言う手間が一切無く、栄養剤を与えておけば  
死ぬようなことは一切無い。

開発コスト、パワー、扱いやすさから着ぐるみモビルスーツを機動  
兵器として用いる事にした。

万が一の魔力切れがない様に、大型エナジーパックを8機搭載して  
いる（全ての疑似モビルスーツに共通）。

また、宇宙空間での使用を考え、大型酸素ボンベを搭載しており、  
宇宙空間での戦闘は、最長36時間可能である。

また、ガーナード・ザク・ウォーリアは砲撃専用に背中に大型魔力  
タンクを背負っており、

数万発の大火力砲撃を可能にしている。

なお、疑似モバイルスーツには共通して、ANF装甲、エマルジョン  
ジョンコレクトSDが組込まれており、  
操縦出来れば誰でも攻防一体の強い魔導士になれる。

ユニゾンリンクシステム：現在疑似モバイルスーツ用、戦艦用の2種  
類が確認されている。

このシステムは、機体と操縦者の感覚を共有させる物で、  
掴んだ物を握り潰したりしない様に繊細な感覚を操縦者に自分の感  
覚として認識させる他、  
損傷を受ければ痛みとして操縦者にもダメージが来る。

要は究極の脳波操縦システムである。

ただし、シンクロ率を上げすぎると融合事故を起こすという欠点がある。

現在はリミッターが設定され事故は基本的に起きなくなった。

(パイロットがリミッターを解除した場合、事故が起きる事もある)  
ユニゾンリンクシステムの効果その2として、

召喚獣とマスターの魔力値を足して2倍しただけの魔力を出すこと  
が可能で、

相当な攻撃力を持たせることが出来る他、マスターと召喚獣の間で  
魔力を循環させて、

長時間に渡って高い魔力を維持する事が可能。魔力切れの心配は皆  
無。

このシステムは、ユニゾン適性のある人間にしか操縦出来ない。

## 登場人物紹介4

日常関係

高町家

高町士郎

今は年金生活者、ミッドチルダに引っ越してからも一族の為にお見合い話をあちこちで進めている。

住所はクラナガン88番街27-1（ヴァロットの家の近く）

高町桃子

士郎の奥さん、翠屋ミッドチルダ店をオープンさせ軌道に乗せる事に成功した。

翠屋の実質的経営者、

高町美由希

二人の子供が居る。

士郎の養女、次期翠屋店主

高町吉行

美由希の旦那、御神一族の出身、（旧姓鮫島）

バニングス貿易の社員、かなりのエリート

今は次元世界同士の貿易に携わっている。

高町小雪17才

美由希さんの長女、クラナガン大学2年、

次期御神当主に決定した。

龍鱗を美由希から受け継いでいる。

御神の剣を使えばほぼ無敵。

美由希以上の使い手らしい。  
因みに美由希さんの子供だから「小雪ちゃん」と付けたのは、なのはだ。

高町沙由紀 15才

美由希さんの次女

次期翠屋の跡取り、現在クラナガン第一高校2年、  
母と姉から御神の剣を叩き込まれている。

翠屋は、現在かなりの繁盛を見せている喫茶店兼、スイーツ屋として  
ミッドチルダグルメ界からも注目を集めている。

月村家

月村恭也

士郎の息子、月村財閥総帥、

現在、次元世界に事業展開を広げつつある。

月村忍

恭也の妻、三人の子供が居る。

月村雫 26才

月村家長女、現在結婚相手を物色中。

スクールの教師、御式内、御神の剣を教える。

月村拓也 25才

月村家長男、次期月村財閥総帥、士郎がお見合い話を進めている。  
八景を恭也から受け継いでおり、次期不破流当主でもある。

月村静音24才

月村家次女、御神の剣はかなりの物、近々カレルと結婚する？

月村鈴香40才

現在は結婚してドイツに暮らす。

月村傘下のヨーロッパ支部を取り仕切る。

子供が二人いるらしい。

ファリン&ノエル

月村家のメイド

ロシエツト家

ヴァンサン・ロシエツト1佐27才

スペシャルフォース部隊長、スクール2期生

2代目生徒会長を務めた。

次元世界最強の男であり、8人の子持ちである。

アステイ・ロシエツト27才

ヴァロツトの妻、子供が8人いる。

スクールにいる頃長男を身ごもった。

もう生むのは限界との事で最近は避妊している。

現在スクールの特別講師、教導隊に教えに行く事もある。

グルナツシュ・ロシエツト9才

ロシエツト家長男、両親から御式内と転送魔法を習っている。

デトウール・ロシエツト8才

ロシエツト家次男、両親から魔法と御式内を習って居る。



スアーニヤ・ロシエツト7才

ロシエツト家長女、両親から魔法と御式内を習って居る。

ジョセフ・ロシエツト6才

ロシエツト家三男、今年から魔法と御式内を習い始めた。

ルアンヌ・ロシエツト

コリーヌ・ロシエツト

ロシエツト家次女および三女

ともに5才、双子、両親以外に見分けられない。

フレデリック・ロシエツト

クロード・ロシエツト

ロシエツト家4男及び5男

ともに4才、双子、

メルキュレ・ロシエツト

ヴァロットの父、腕の良い漁師、

時々孫の顔を見に来る事を楽しみにしている。

ドメーヌ・ロシエツト

ヴァロットの母、肝っ玉母さんぶりは健在

マチユウ・ロシエツト29才

ヴァロットの兄、腕の良い漁師、

ヴァロットの所へ時々魚を届けてくれる。

現在は結婚して3人の子供が居る。

ジョエル・ロシエツト25才

ヴァロットの弟、次元航行隊所属、  
旗艦クラウディアの操舵手をしている。  
次元航行隊の寮（本局）に暮らす。  
結婚相手を物色中

レニエ・ロシエツト23才

ヴァロットの弟、スペシャルフォース所属、  
フリーダム小隊の小隊長  
マンションに一人暮らし  
やりたい盛りのお年頃

アプリリア

道端に倒れていた（落ちていた、ヴァロット談）所を助けられ、  
ロシエツト家に居着いてしまった融合騎、

現在ロシエツト家の居候兼スペシャルフォース隊員

ヴェレナーさん、ミツシエルさん、ユツファーさん

ロシエツト家に住み込む3人のメイド、非常に忙しい日々を送っている。

三人とも下世話な話が大好き。

パビィ

雄、アスティの召喚獣、基本的に何もしない。  
子供達の遊び相手にはなってくれる。

居間のソファの上が指定席、

ジライオウ

2匹いる。

ヴァロットとアスティのそれぞれの召喚獣  
ただ飼っているだけになってしまった。

外の厩舎に一部屋ずつ貰ってそこで暮らしている。

スプマンテ家

シャルル・スプマンテ29才

あの後社員と結婚、二人の子供が居る。

スプマンテ鉱業社長、アステイの姉

ピアンコ・スプマンテ

スプマンテ鉱業会長、アステイの父

その後、スプマンテ鉱業は次元世界に君臨する巨大鉱山会社に成長した。

ナカジマ家

ゲンヤ・ナカジマ67才

今は良いお爺ちゃん、孫達の面倒を見つつ、お爺ちゃんライフを楽しんでいる。

士郎とは時々将棋を指したりしている様だ。

ギンガ・ナカジマ三佐37才

あれから結婚して3人の子供が居る。

ナカジマ三佐と言えば今はギンガさんを差す。

陸士108部隊部隊長

スバル・ナカジマ35才

本局防災局総務課長、かなり出世しました。

息子レオ10才、娘ハツキ10才がいる

ヴォルツ・ナカジマ

スバルの旦那、相変わらず防災司令センターの所長をしている。

ノーヴェ・ナカジマ

あれから結婚して二人の子供が居る。

現在第八防災署の防災指令（現場隊長）

ウエンディ・ナカジマ

あれから結婚して3人の子供が居る。

現在第七防災署の防災指令（現場隊長）

デイエチ・ナカジマ

あれから結婚して子供が一人いる。

現在第九防災署の防災指令（現場隊長）

チンク・ナカジマ

108部隊の捜査官の一人、頭脳労働担当。

もの凄く切れる頭で犯人を追い詰める。

スクラティ・ナカジマ（27才）

108部隊捜査官（現場担当）、

108部隊最強の使い手、妹や甥、姪達に御式内と御神の剣を教えている。

EC兵器や、大規模テロに対する切り札、地上のエースオブエースとも呼ばれる。

シヤマルがお見合い話を進めている。

ナカジマ家は、現在あまりに人数が増えすぎてしまい全てを紹介する事が出来ません。

申し訳ない。m（――）m  
ただ、この一族ちょっと変わっていて、一つ屋根の下で全員生活を共にしている。  
その方が子育ての効率が良くて、育児休暇を取る心配がないのだそ  
うだ。

因みに、家はもう一棟建て増しし、1階部分が繋がっている。  
総勢81名で生活している。ミッドーの大所帯だ。

## 聖王教会

カリム・グラシア

ヴィヴィオ様の秘書長をしている他、

希少技能『プロフェーティン・シュリフテン』を教えている。

シャツハ・ヌエラ

聖王教会を裏から取り仕切る怖い人。

高町・ヴィヴィオ・ゼーゲブレヒト

聖王にして教会最高司祭、管理局名誉統括官（総務統括官）

非常に忙しい日々を送っている。

最近プロフェーティン・シュリフテンを覚え、カリム以上に使いこなす。

アーサー（アインハルト）と結婚し、娘（ステラ5才）が居る。

アーサー・クラウス・グリナム・ストラトス・イングヴァルト（ハ  
イディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルト）

名前なげーよ！（因みに王様は結婚しても名前が変わらないってル  
ールがあるの知ってた？）

ヴィヴィオの旦那、まあ、王位は継げないけれど、それなりの地位

にはある。

聖王特別警護隊部隊長も務める。

高町・ステラ・ゼーゲブレヒト5才、  
ヴィヴィオの娘、小さい頃のヴィヴィオにそっくり。  
もの凄い甘えん坊、本を読むのが大好き。

コロナ・ティミル

プライベートではヴィヴィオと名前で呼び合う仲、  
聖王特別警護隊1番隊隊長。

セイン、ティード、オットー

教会騎士3人衆、シャツハの忠実な部下

オカマバージェリーフィツシュ

オカマバー「ジェリーフィツシュ」のママ

「キャサリンって呼んでね？」

地上本部前駅のすぐ近くにあるオカマバーのママ、  
筋肉ムキムキで、しゃべりはパプワくんのキモイでんでん虫、  
かなりやばいキャラだ。

正体は、武装隊を辞めたあの雷使い。まさかあの人が……

この手のキモイキャラを全く受け付けられないシグナムにとって天敵

シャルルマーニュさん

この人も武装隊を辞めた口、今はジェリーフィツシュのホステス？

「もう、どんだけえ〜？」が口癖、シグナムの天敵

バー・モンサンミシエル

86番街にあるバー、翠屋とは道を挟んだ反対側にある。  
良くヴァロットが飲みに来ている。

マルジナルさん

バーテンダー兼店長

何故か裏の世界に精通している。

レ・ミレリ

ホステス、21才

その他

怪盗ジャヌヴィア

誰も素顔を見た事のない泥棒、盗みの腕は超一流。

変身制御、幻術の使い手で誰にでも何にでも化けられる。

他にも転移・転送魔法も使いこなす。

今の所直接人を傷付けたという報告はない。

依頼を受けて盗みを働いたり、盗んだ物を売り捌いたりしている。

宇宙人ジョーンズ

何故かミッドチルダ調査中

## プロローグ（前書き）

ヴァロット達の卒業から10年、

スクールは開校から12年目の夏を迎えようとしていた。

そして今年も元気の良い1年生達がしごかれる。

強くなる為に、その強さを持って何をすべきかを学ぶ為に



## プロローグ

「コラあああああああ！おまえらあああああああ！  
毎年の事ながら一勝も出来んとは何事かあああああああ  
あ！」

ビリー先生が怒鳴っている。

ここに入学して2ヶ月と少し、初めての模擬戦大会は惨憺たる物だった。

2年生強すぎだよお！何であんなに化け物ばかり揃って居るんだか？  
お陰で私たちは地獄を見た。

完膚無きまでにフルボッコ、浴びせかけられる言葉が厳しかった。  
生まれて初めての挫折、結構強いと思っていた自分が弱すぎて話にもならなかった。

「さ、流石にばてる事はなくなったけど、体力強化授業はきついよね？」（リン）

「リンは良いわよ、まだエリートだし私達の中じゃあ最強だもん」  
（マリ）

「お兄さんは結構ハンサムだし、生徒会副会長だし、サムライの血筋なんでしょ？」（ツバキ）

「ま、まあそんなところかな？」（リン）

私達は午前の授業を終えて今シャワーを浴びて着替える所だった。  
私はリン・ヤマザキ（山崎凜）お兄ちゃんはヒビキ・ヤマザキ（山崎響）生徒会の副会長をしている。

因みにお父さんは元次元漂流者で、山崎白州やまざきしらくにと言つ。

97番世界にある日本という国の出身で、元刑事、北辰一刀流7段の剣術使い。

今は、本局、地上本部、教導隊を回つて剣術を教えている。

お母さんは管理局の魔導士ラヴィーユ・ヤマザキ、今は前線を離れて教導隊の教導官をしている。

昔、校長先生に鍛えて貰った事があるんだつて。航空防衛隊にいた時は同僚だつたらしい。

私達兄妹は、物心付く前から剣道を教え込まれ、それなりに強いと思つていた。

確かにミッドチルダの大会では優勝する事さえさえ何度もあった。

でも、お父さんに言わせるとまだまだ弱いとか、まだ未熟だとよく言われたけど、

まさかここまで弱かつたとは思わなかつた。

ちよつとと言うか、相当凹んだ。

この学校に入つてからは驚きの連続だつた。

いろんな武術を教えて貰える。

この学校ではまともな勉強は教えてくれない、教えてくれるのは強くなる為の方法だけだ。

まあ、執務官を目指している人には法務関係の勉強を教えてくれるし、

アルケミックを身に着けたい人には物理学を教えてくれる。

でも基本的は勉強を教えてはくれない。

それに先生達はみんな化け物ばかりだし、強くない方が可笑しいかな？つて言うぐらい凄い所だ。

それにこの卒業生の先輩方は凄い人ばかり、次元世界にその名を知られた人ばかりだつたりする。

中でもスペシャルフォーエス部隊長ヴァンサン・ロシエット一佐は、次元世界最強の使い手として知られている。何でも来月行われる指揮官研修適性試験に受かると3月まで授業があるそうだ。

お兄ちゃんはその人を神をも超える化け物だって言ってた。どんな人なんだろう？

「ぐふふふふ、良い眺めですなあ？」

「全く」

小さな穴を覗いて喜んでいるスケベが二人……彼らはまだ身に降りかかる不幸を知らない。

「！」「（リン）」

「どうしたの？リン」（サクラ）

「のぞきよー！」（リン）

「やべ！見つかった」（ジヨン）

シュパッ シュパッ

その瞬間、直径30センチほどに丸く切り取られた天井が2カ所、そこから二人が足を踏み外して宙ぶらりんになる。

丁度胸の所で引っかかって止まった感じだ。

服装からして男子だ、リンが飛梅を振り抜いていた。

「まあ、誰だかは分かってるけどさあ、このまま帰すのも勺よね？」

「やっちゃん?」

「やっちゃんいますか?」

女子達の手がベルトに伸びる。

「うあああああああああつ! やめて! やめてくれえええええええつ!」(ジヨン)

「たつ、助けて……」(ブラントン)

ズボン所かパンツまではぎ取って、晒し者に……

「まあ、こんな事で縮み上がっちゃって可愛い」

「引っ張ると結構伸びるわよ?」

「何処まで伸びるのかしら?」

「うあああああああああ! 引っ張るなああああああ! 引っ張らないでくれえええええええ!」(ブラントン)

「ブラントン、この恨みは次の大会で必ず晴らすぞ?」(ジヨン)

「おお、必ずはらしてやる!」(ブラントン)

馬鹿二人は手に手を取り合って堅く誓い合った。

「……たく、覗きがばれた挙げ句散々遊ばれてここに突き出され

たと……」

俺達は校長先生の前で正座させられてお説教だった。

「はあく、頭痛い」

なのはは流石に困っていた。

この所何年かはここまでの馬鹿は居なかった。

元気が良いというか、アホというかこれはまた随分と手を焼かせてくれる。

こんな馬鹿は開校以来の事じゃあないだろうか？

いや、あの時の4馬鹿よりも更に激しい馬鹿、何でこんなのを入学させてしまったのだろう？

そう考えると頭が痛い、この先どうやって教育しようかと悩むのはだった。

「いい加減学習しなさい、覗きは犯罪です、それに毎回ワンパターの様に捕まるし、

このまま行くと初の退学者にしますよ？」

「……」

「まあ良いです。今日から補修メニュー3倍の刑にしますから」

校長先生、それ洒落になっていません、ただでさえ毎日補修なのに、そんな事をされたらそれこそ死にますよ。

こうして馬鹿二人は更なる補修を追加されて今日もお説教を受ける。そして最後の仕上げはディバインバスターでどこか遠くの方まで吹っ飛ばされる毎日を送っていた。

午後からの授業、スクールは5年前からその授業内容を大きく見直していた。

クラスやコースによって必須授業がある物の自由に自分の学びたい武術を選択できるようになっていた。

ただし、召喚士には転送・召喚の授業は必須だし、御式内の習得が義務付けられていた。

3組はビリー先生の射撃の授業を毎日一時間、必ず受講だし、執務官コースの生徒は執務官試験対策講座を受ける事になっている。これにより、自分に合った武術を学びより質の高い人材を送り出せる体勢を取れる様になった。

スクールは開校から12年、その教育機関としての価値を管理局に認められ、

今や無くては成らない重要な人材育成機関となっていた。

## ブローグ（後書き）

次回：生徒会から1学期の残りの予定が発表される。

一方、ヴァロットが講師として授業にやってくる。

## 恐怖の洗礼（前書き）

特別授業にヴァロットが呼ばれた。  
毎年恒例の恐怖の洗礼が始まる。



## 恐怖の洗礼

馬鹿二人を職員室に突き出した私達は、お昼を食べていた。

「あれ？メール入ってる？生徒会からだよ、ホームページ更新しましただって」（リン）

「重要なお知らせもあるみたいだよ」（サクラ）

私達はデバイスを取り出してメールを確認する。

「嘘お、何この強行日程」（ツバキ）

7月5日、執務官補佐採用試験、

7月10日、指揮官適性試験、キャリア幹部採用試験（選抜者のみ）

7月18、19日、模擬戦大会（一般参加有り）

7月20日、終業式

8月5～10日、林間学校

9月1日、始業式、体力測定、魔力測定

「林間学校やるんだね？」（ナギ）

「次の模擬戦大会まで1ヶ月ちょっとしかないよ？今度こそ1勝しないとまたきつい補習が来るよ？」（リン）

私達は強くなるしかなかった。

今のままでは弱すぎる、こんな事じゃあいつになったら勝てる様になるか分からない。

「あ、あの馬鹿達だ、泳ぐの随分早くなっただね？かなり遠くまで飛ばされたのに」(ツグミ)

ジョン達はスクールの前までようやく泳ぎ着いていた。

その様子を見つめる女子達、学食の窓からそんな様子が見て取れる。

「ち、畜生、随分遠くまで飛ばしやがって、もうすぐ昼休みが終わっちゃう」(ジョン)

「っ、疲れたああ！」(ブランドン)

この二人、さっきのディバインバスターでクラナガン湾の真ん中近くまで飛ばされたらしい。

こうしてそれぞれの昼休みは終わっていった。

そして午後の授業、いつもならそれぞれの武術に分かれて授業なのだが今日は違っていた。

先生方も緊張している。

そう、今から海上訓練施設を使って特別授業だった。

「良いかおまえ達、今から稽古を付けて頂くのは次元世界最強の男だ。

今日は非常に忙しい中、時間を作って頂いた。

今から特別授業をして頂く、おまえ達もその強さを感じて少しでも近付いてみる、

あの神をも超えると言われる強さを身をもって体験してみる、

まずはその強さを感じてそれを目標にしてみる、いつか必ずあの強さに追い付いて見せる！」

ビリー先生はそう言って、生徒達に檄を飛ばす。

「よう、俺がヴァンサン・ロシエットだ、ヴァロットと呼んでくれ」

そこにやって来たのは、ちょい悪親父風な男だった。

怖そうだけど、そんなに強そうに見えない。

でも、それはまだ1年生が知らないだけの事、今からその恐怖の洗礼が始まるうとしていた。

生徒会長のクロスリードはそんな様子を職員室から眺めていた。

今彼はティア先生の下で補佐をしながら執務官を目指している。

「あの恐怖は尋常じゃあないからな、あいつら何処まで耐えられるかな？」（クロス）

「あら？クロス君どうしたの？」（ティアナ）

「いや、今からヴァロット先生の授業なんですよ、今年の1年はどれだけ耐えられるかなって？」（クロス）

「そっか、今年はちょっとあの授業の日が遅れてるもんね？」

でも毎年の事ながらあの洗礼はきついよね？」

これで逃げ出したり気を失ったらもう落ちこぼれ決定だもんね？」

（ティアナ）

二人で職員室の窓から海上訓練施設を見下ろす。

その時だった。

ヴァロットはリミッターを解除してフルドライブする。

巻き起こる巨大な魔力はミッドチルダその物を振るわせるほどの力

を見せ付ける。

1年生達にとつて、信じられないほどの物だった。まさに化け物、戦ったら確実に殺される、いや塵も残さずに消されるほどの力だ。

1年生達はその圧倒的な力の前に茫然自失だった。

このスクールに残る伝説の先輩、クラナガンの悲劇の主人公としてこのスクールに来て最高に強くなった男として伝説に名を刻む男、伝説のイージスは生徒達にその力を見せ付け自分達の弱さを噛み締めさせる。

更に居竦みを放つヴァロット、先生達はどうか耐えるが当然1年生では耐えられない。

その恐怖に動く事も声を出す事も出来ずにいた。

そしてヴァロットはリミッターを元に戻す。

すっかりその魔力に当てられた1年生はもうその場にへたり込むしかなかった。

「おいおい、これからが特別授業の本番なのに、こんな事じゃあダメだぞ、

本気で強くなりたかったらこのくらいの恐怖を克服して見せろ！」

「すっげー、何だ今のは？俺達も頑張ったらあそこまで強くなれるのか？」(ジョン)

やたらと元気な馬鹿が一人いた。

「おっ、今年は見込みのある奴が居るな？」(ヴァロット)

(何だよ？あのバカは？あの怖さが分からないのか？)

1年生達はそう思った。

でもヴァロットの意見は違う物だった。

強さに対する憧れが居竦みの恐怖から一瞬で立ち直る事が出来た要因だった。

「こいつは今は滅茶苦茶弱いけど、鍛えれば幾らでも強くなる、鍛え方によってはかなりの強さを手に入れるだろう」

後から職員室でそう語っていた。

「さあ、授業本番だ、40人ずつ相手をしてやる、かかって来い、ハンデとして魔法は無し、居竦みも使わん、それにこれも使おう」

そう言ってヴァロットは目隠しを取り出した。

目を塞ぎ、木刀の小太刀を持って生徒達の前に立つ、普通これで相手の攻撃をかわす事など不可能なのだが、それが出来る所がヴァロットの凄さだった。

それぞれ10チームずつヴァロットを囲む、そしてデバイスを構える物の、

簡単には攻撃出来ない、まるで隙がない。

それでも飛びかかったのはジョンだった。

その瞬間簡単に腕を取られ一瞬で投げられる。

まるで歯が立たない、他の連中はそれを見て慎重になる。結局全員打ち倒された。

「嘘だ、見えていないのに何で攻撃が見えるんだ？

それにあの速さは一体？人間の強さじゃあない！」

1年生達はその強さを味わって戦慄する。  
強いとか怖いとかそう言うレベルじゃあ無かった。  
強さその物の質が違う、強さの桁がまるで違う、  
このスクールの模擬戦なんてお遊びに見えるほど強い。

「あれが伝説の勇者イージス」

今年の1年生達にもその強さは刻まれた。

「おまえ達、今度の指揮官研修適性試験に通った者はヴァロット先生の授業を受けられる事になる。  
心して試験に臨む様に」

ビリー先生はそう言って授業を締めくくった。

「ご苦労さん、ヴァロット」

ロサードはそう言って声を掛けた。

「どおだ、定時上がりなんだろ？飲みに行かないか？」

「そうだね、飲みにいきたい所だけど……ソリスが許してくれるかな？」

「おまえ最近は尻に敷かれてるのな？」

「そう言えばアステイは？」

「今日は教導隊でエマルジョンコレクトの授業だ」



## 恐怖の洗礼（後書き）

次回：クロスリードとヒビキがヴァロットを語る。



## ヴァロットを語る(前書き)

「リン、今日は怖かっただろう?」(ヒビキ)

お兄ちゃんはそう話しかけてきた。

「怖いなんて物じゃあないよ、何?あの化け物?あれでも本当に人間なの?」(リン)

「って言うかあのバカでかい魔力は何?どうやったらあんな化け物になれるの?」(ツグミ)

## ヴァロットを語る

「お兄ちゃん、一緒に帰る？」（リン）

「ああ、良いけどまた団体か？」（ヒビキ）

「そうなるよね？」（リン）

後ろにはナカジマシスターズが揃っている。

実はこのスクールにはナカジマ家の人たちが9人もいる。

そして私の家はそのナカジマ家のご近所さんだったりする。

地下鉄の86番街で乗って東クラナガン駅で降りて歩いて15分、通学には40分ぐらいかかる。

まあ、そんなに遠くなくて楽だけど。

「あれ？クロス今日は定時上がりなのか？」（ヒビキ）

「まあね、この所平和すぎてろくな事件もないし、

実習で逮捕出来る犯罪者も居ないからね、裁判ぐらい回してくれれば良いんだけど、

裁判もろくにならないから稼ぎが少なくてね？大きな民事裁判に加われると良いんだけど？」（クロスリード）

そう執務官補佐になってしまうとアルバイトは出来なかったりする。

おまけに学生だし実習時間だけの労働だから月給は半額、月17万ぐらいだって、

因みにクロスさんは地上本部近くに自宅がある。

私達は生徒会活動が終わるのを待つて帰る事にした。

「リン、今日は怖かっただろう？」（ヒビキ

お兄ちゃんはその話しかけてきた。

「怖いなんて物じゃあないよ、何？あの化け物？あれでも本当に人間なの？」（リン

「って言うかあのバカでかい魔力は何？どうやったらあんな化け物になれるの？」（ツグミ

「あの人はな、スクール始まって以来の天才と呼ばれた人だ。でも始めはとんでもない落ちこぼれだったんだぞ、

入学してきた時は魔力Bクラス、格闘技なんか全く出来なかったんだ」（ヒビキ

「嘘？そんなの信じられないよ？」（リン

「嘘じゃあない、過去の模擬戦大会の映像が生徒会のホームページにあるから、

チエックしてみると良い、あの人の成長して行く様はつきりと分かる。

どれだけきつい事をしたらあそこまで強くなれるのか？

成長と成長の合間を想像してみるとよく分かるだろう？

本気で強くなりたかったら先生方に聞いてみると良い、

あの人の抱えた孤独と悲しさを教えてくれる、あの人がどうして強くなったのか、

どうして強くならなければならなかったのか、

その理由を知った時、自分の生きる道を見つける事が出来るだろう

？」(ヒビキ)

「それに、あの防御魔法、エマルジョンコレクトを開発したり、インテリジェントデバイスセキュリティや戦艦の防御システム何かを開発した天才だしね？」(クロスリード)

「そう言えばお姉ちゃん同期生であの人と一緒に戦った仲間だよ  
ね？」

当時の事はあんまり話してくれないけど？」(ツバキ)

「そりゃそうだろう、あんな事が有れば話せないさ、第2期生の人  
たちは心に深い傷を抱えて居るんだ。」

一番傷付いたのはヴァロツトさんだ、それを抱えて生きる事の辛さを  
思えば誰もが口が重くなる」(ヒビキ)

そう、ミッドチルダ3大悲劇と呼ばれるクラナガン襲撃事件、その  
中心にいた人物、

それがあのヴァンサン・ロシエツト一佐、何度もTVドラマになり  
ながら、

その実際の戦闘映像なんかはついに公開されなかった悲しいお話、

この生徒会に成ればその全てを見る事は可能らしいけど、

それなりの覚悟がないと見る事も叶わない、見ては行けないと言わ  
れる衝撃の映像らしい。

「それに、あのエマルジョンコレクトはあの人の魂なんだよ、  
あれは守る為、誰も死なせない為に作られた最強の防御魔法だ。

その理念からして凄いと思うよ、誰も傷付けない、傷付けさせない  
為に作られている。

でも、今使っているSDと真・エマルジョンコレクトは違うらしい、  
真・エマルジョンコレクトには危険極まりない魔法が入っているか

ら簡単には教えてくれないし、プログラムさえ貰えない、まだ真エマルジョンコレクトを許された人は数えるほどしか居ないんだ。だから俺はそれが欲しい、それを許されるだけの使い手になりたい、あの人の横に肩を並べたい」(クロスリード)

何かクロスさんてこの話になると熱いよね？でも、それだけ凄い魔法だという事はよく分かる。

開発した本人以外で許されているのは4人だけ、使い手の少ない、希少な魔法で簡単には許して貰えない事もよく分かる。

奥義を教えて貰えないのと同じ事だと思う。

逆にそれを許して貰えるという事は、師匠にそれなりの人間だと認められたという証、それだけ出来る人間になったという証、クロスさんはそういう人を目指して居るんだ。

「さあ、着いたぞ、じゃあなクロス、また明日」(ヒビキ)

「ああ」(クロスリード)

こうして私達は帰宅した。

(強くなるか？一体どうやったら、どれだけの努力をしたらあそこまで強くなれるんだろう？)

入ったばかりは私より遙かに弱かったのに……それに、クラナガンの悲劇ってどれ位の惨劇があったんだろう？)

私はまだ小さかったし、あの時は本局に住んでいたから何も知らない、

ただ、ミッドに来てから時々感じる巨大な魔力の正体があの人だという事ははっきり分かった。

お父さんもお兄ちゃんもこう言う、「人は悲しみを乗り越えて何倍も強くなる」と……

その頃、

「海上訓練施設15週って洒落になんねーぞ！」（ジョン

まだ補習中のジョン達2名だった。

「しかし、凄いやね？どうやってたらあれだけ強くなれるんだろう？」（ブランドン

「わかんねーけど、もの凄い努力をしたって聞いてるぞ？」（ジョン

「ビリー先生か校長先生に聞いてみる？」（ブランドン

彼らは知らない、人の何倍も課せられた補習が自分達を強くしている事を、

そしてやがて知る事になるヴァロットの悲劇を、それを知って自分の向かうべき道を、

それを知る時、彼らは強さの階段を上り始める。

彼はやがて強くなる覚悟を知る事になる。

その覚悟を知り、努力する大切さを知る時彼らは新しい伝説を紡ぎ出す。

それはやがてスクールの伝統になっていく、そうやって強さを、その強さを持って人を救い悪を挫く心を伝えていく、

それは、管理職の責任である。

ヴァロットを語る(後書き)

次回：授業の様子を公開



## 強くなる為に（前書き）

あいつの違った所はあくまで勝ちに拘る姿勢だった。

強くなるために欲しい魔法が有れば先生方に聞いて歩いた。

教えてくれるまでは絶対にその場を後にしなかった。

格闘技にしたってそうだ、

新しい技を教わる為に教えられた事を出来るようになるまで練習を止めない、

出来るようになれば新しい技を教わりに来る。

そして、自分より強い奴を倒すための方法を常に考えていた。

## 強くなる為に

今日も朝からきつい授業。

その中でビリー先生は語る。

「お前たち、よく聞け、あのヴァロットは入学当時は今のお前たちより遙かに弱かった。

でもな、あいつは絶対に負けなかった。

実際に負けたのは2回だけ、それ以降は誰にも負けていない。

負けなかったために、勝つために努力し続けたんだ。

勝つために、何をすればいいか？ 負けなかったためにどうやったら良いかを考えることに長けていた」

「先生、実際の所それは才能だと思えます。

才能のない人間にとってそれを考えつくことは不可能だと思えます」

生徒の一人がそんなことを口にする。

「馬鹿者！ 才能なんかじゃあないんだよ、

あいつの違った所はあくまで勝ちに拘る姿勢だった。

強くなるために欲しい魔法が有れば先生方に聞いて歩いて歩いた。

教えてくれるまでは絶対にその場を後にしなかった。

格闘技にしたってそうだ、

新しい技を教わる為に教えられた事を出来るようになるまで練習を止めない、

出来るようになれば新しい技を教わりに来る。

そして、自分より強い奴を倒すための方法を常に考えていた。

勝つことに対する貪欲さが誰よりも強かった。ただそれだけだ。

でも、ただそれだけの事すら出来ていないお前たちでは勝つことは

できない、  
勝ちたかったらもつと貪欲になつて見る、  
どんなせこい手を使つても勝つ位のことを考えてみる、  
それが出来て初めてあそこまで強くなれるんだ」

1年生達にとってそれは、最も大切な、そして自分達にとって一番必要なことだった。

そう、確かに授業だけでもそれなりには強くなって行く、  
しかし、それだけでは大した強さにはなれないのだ。  
そしてあの恐怖の洗礼は、この話の為の布石だったりする。

次の模擬戦大会まで後一ヶ月と少し、彼らにとって本気で鍛えるには良い機会だった。

こうして、また彼らは強さの階段を上る、遙かなる高みを目指して、その頂に居るあの人を目指して強くなることを学んだ。  
でもそれは遠く困難な道であることには変わりなく、  
彼らは自分たちの弱さを噛み締めながら、せめて1勝出来るだけの強さを目指して汗を流す。

でも、彼らは知らない、今年もまたとんでもなく強いのが出てきていると……

「特にジョン、お前は覗きなんかやってる暇は無いだろう？  
お前らは授業が遅れているしな？」

午後の授業は遅刻したり、へばつたりするなよ、  
強くなりたかったらそんなことをしている暇なんか無いぞ！  
強くなる為の努力こそ最も時間の掛かることなんだ」

ビリー先生にまで釘を刺されるジョン、彼もまた強くなる為にこの学校に入ってきた人間、  
これ以上負け続ける訳にも行かなかった。

そう、それは2年前のこと、ジョンは元々ストライクアーツをやっていた。

道場では若手ナンバーワンと言われ、クラナガン代表戦をも制した。でもそれだけだった。

大陸選手権5位、そして迎えたミッドチルダ代表戦では完膚無きまでに叩きのめされた。

手も足も出なかった。

毎年の事ながらスクール代表は、特別枠でミッド代表戦にしか出てこない。

相当世間を舐めていると思った。

でもそれは違っていた。

強すぎて相手になる人間が居ないから、最初から出てしまうと大会がそこで終わってしまうから、

それ故の特別枠だった。

強いと思っていた自分がまるで相手にならず、10秒持たずに完膚無きまでに叩きのめされた。

悔しかった、でもそれは仕方のないこと、自分が弱すぎるから負けたのだ。

彼は思った、強くなる為にはスクールに入るしかない、このリベンジはスクールに入ってすれば良い、

このスクールに入って強くなり、今度こそミッドチルダを制してみせる。

この星ナンバーワンになってみせると……

そして昨日、目指すべき強さを見つけた。

それは人知の及ばない桁外れの強さ、こんな化け物がここに居ようとは思わなかった。

それと同時に考えた、どうやったらそこまで強くなれるのか？と……

その日のお昼前、ジョン達は珍しく覗きをしなかった。いや、そんな余裕はなかった。

これ以上授業で遅れることは許されない、誰にも負けるわけにはいかないから、

そんな余裕の無さが彼らを追いつめていた。

「変ねえ？そろそろあの子達が突き出されても良い頃なのに？」

バスターをぶっ放す気満々で待っていたのはにとって肩透かしだった。

ジョン達はこの時模擬戦大会の映像をチェックしていたのだった。

その日のお昼、私たちはほとんどの1年生達は模擬戦大会の映像をチェックしながらお昼を食べていた。

「なんか最初の方って、ガキの嫌がらせだよな？蛇や蛙をぶついたり、ジライオウを餌で釣ったり、やってることがセコ過ぎて涙出てくるわ」

「でも2学期からはかなりパワーアップしてるね？夏休みの間に相当鍛えたみたい？」

「仕入れた情報だと、夏休みの間に実戦を経験したみたいよ」

「私たちに実戦は無理だよ、人を殺すかもしれないんだよ？そんなことはとても出来るとは思わないし……」

「1期生、2期生、3期生の人たちは実際やったらしいよ、その時何人も敵を殺しているって言う話もあるの」

「なんか住んでいる世界が違いすぎてピンと来ないな？」

「でも、大会を重ねる度に強くなってる。もの凄い成長力だよな？」

「ヴァロットさんて生徒会長になったんだ？」

「その後は12月まで大会に出ていないんだね？」

「でもこの時には化け物のような強さになっている！」

「一体どうやったらここまで強くなれるの？この間に有った事って……？」

「クラナガン襲撃事件だよ、あの悲劇の時、

それと引き替えに化け物じみた強さを手に入れたんだよな？  
ドラマでもやってたし……」

「でもあれってTV局の人が作った話なんだよね？」

「真実は未だに公開されていないし……」

やはり1年生達にとってあのクラナガン襲撃事件以降、12月迄に何が有ったのか？

それが一番気になる所だった。

一方ジョン達

「くそう、モザイクが邪魔で見えそうで見えん」

「でも一つだけはっきりしたよね？覗きで捕まれば怒られるけど、堂々と脱がせれば怒られることは無いね？」

「俺も召喚士に成れば良かった。  
そうすればあのすっぱんぽん光線だって手に入ってたはずだ」

「でも、あの人は化け物だよね？」

「一体クラナガン襲撃事件の時何が有ったんだろう？」

「ドラマでやっていたみたいに仲間を殺されてブチキレたら、  
本来の力が覚醒したのかな？あの人は元々そんな力を持っていたの  
かな？」

「よく分からん、放課後に生徒会室に行ってみよう？」

強くなる為に（後書き）

次回：多くの1年生が生徒会室を訪れる。

そして見せられるヴァロットの真実、

それを見た時、彼らは何を思っているのか？



## 違う世界（前書き）

「さすがはヴァロット君効果ね？1年生のやる気が違うわ」

なのは嬉しそうに校長室から訓練施設を眺めていた。

毎年の事ながら1年生にあの恐怖の洗礼をさせる。

その強さに触れた後、彼らは人が変わった様にやる気を見せる。

## 違う世界

午後の授業、1年生達のやる気が違う。どうしても強くなりたくて、負けるわけには行かなくて、

そしてあの強さに触れてしまったから、あの強さをを目指す為に、今覚えなければいけないことを少しでも早く覚え、次の技を教えるもらうこと、

1年生は2年生を超える為に少しでもその技を盗もうとその練習を注意深く見るようになった。

### こちらは空手の授業

「良いか、前にも話したように空手は己が肉体を凶器に変えて戦う武術だ。

極めれば魔法を使う必要さえ無い、但し相手を殺してしまうかも知れんかな？」

スー先生はそう言って杭の上にビール瓶を置いた。

「これを斬ってみろ！出来る者はいるか？」

「はい！俺やります！」

元気よく手を挙げたのはジョンだった。

でも、ビール瓶に手刀を喰らわせた所で割れたりしない、その衝撃ではじき飛ばされて、飛んでいって割れるだけだった。周りから失笑が起きる。

でも、それが今の1年生の実力、所詮その程度だ。

「馬鹿者、ただ力で叩いても切れたりはいしない、よく見てろ」

そしてまたビール瓶を杭の上に置く、そして斜めに振り下ろした手刀がすっぱりと瓶を切り落とす。

まるで柔らかい物を刃物で切断するが如く切り落とされるビール瓶、でもそれだけで終わらなかつた。

返す拳で、裏拳でサククリとビール瓶の胴を抉りさらに足刀でビール瓶残った部分を輪切りにする。

1年生達にとつてとても信じられる物ではなかつた。

どうやったら手よりも堅いビール瓶を斬ることが出来るのか？

どこまで鍛えたらそんなことが出来るのか？

「お前達には後一ヶ月でこれが出来る様に鍛えてやる、但し逃げることもサボることも許さんぞ？」

スー先生はそう言って1年生を鍛えることにした。

「乱取り始め！」

こちらは佐藤先生の授業、実戦形式で教える。

こちらの特徴は、基本一対一で、時には一対多数での乱取りを行いながら、

その中で技を教えていく。

練習なのでデバイスではなく、竹刀を使っている物の生傷が絶えない授業だったりする。

まあ、名医が居る訳だし竹刀なら痛いかも知れないがそれほど酷い怪我をする訳じゃあない。

そうやって痛みと共に体に刻んだことは、一生体が忘れないそうだ。

「おらあ！撃って撃って撃ちまくれ！確実に的に命中するまで撃ちまくれ！」

「そうやって確実に当てる技術を身につける！」

ビリー先生はそうやって命中精度の向上を図る。

「確かにエマルジョンコレクトは驚異の防御魔法だ、  
だがやり方によっては抜き方はいくらでも存在するんだ！」

ビリー先生はまず命中精度を向上させ、

それからどんな体制でもどんな状況でも的を外さない練習に時間を  
割く、

援護射撃とは何時如何なる状況に有っても見方を守る為に必要不可  
欠な技術なのだ。

「さすがはヴァロット君効果ね？1年生のやる気が違っわ」

なのはは嬉しそうに校長室から訓練施設を眺めていた。

毎年の事ながら1年生にあの恐怖の洗礼をさせる。

その強さに触れた後、彼らは人が変わった様にやる気を見せる。

伝説のイージスはそうやって毎年のように強者達を生み出していく、  
それが新たに伝説を大きくしているとも知らずに……

その日の放課後だった。

多くの1年生達が生徒会室の前に集まっている。

「会長、クラナガン襲撃事件の真実を、それ以降のヴァロットさん  
がどうやって強くなったのか？」

「真実を教えてください」



「あれはオーバードライブ？普通あんな事したら死ぬかも知れないのに？  
本当に命を捨てるつもりだったの？」

それは、あまりに悲惨な戦いだった。

死なせてしまった親友の為、自分も死ぬつもりだったのか？  
オーバードライブを平然とやってのけたヴァロットが居た。  
そしてその代償に酷く傷付き病院に転送される。

それはあまりに過酷だった。

生徒会長という責任、そして死なせてしまった責任、  
それを受け止めた上で敵を抹殺する覚悟、あまりに違う世界に身を  
置くようになったヴァロット、  
その苦しさを思えば誰もそれを口にしなくなるだろう？

「この後だ、あの人は修羅に落ちた」(クロスリード)

それは86番街銀行強盗事件の映像、そこには一瞬にして倒れる  
犯人達が居た。  
なぜ倒れたのか分からない、後からそのやり方を聞いて戦慄を覚え  
る1年生達、

「あれは針を心臓に転送したんだよ、いずれも心臓を一撃で射抜  
いている。

こんな芸当が出来るのはあの人だけだ」(クロスリード)

その話に既に人知を越えた世界に到達してしまったヴァロットを  
思う。

「あの人はどんな悪も許さない、守る為なら平然と殺すことさえする人だ。」

それに軍隊を向こうに回して一戦交えたこともある」(クロスリード

そう、スプールスでの一件、戦艦を相手にあつという間にそれを沈めてしまったヴァロット、

最早人間のやる事じゃあなかった。

神をも超える存在と言われ、ミッドチルダの守護神とか伝説の勇者イージスと呼ばれる男、

その原点は血塗られた惨劇と深い心の傷を受け、それでも戦う一人の漢だった。

1年生達はその事実を突き付けられて初めて強くなるこの意味を知った。

強くならなければ守ることさえ出来ない現実を突き付けられた。

自分の愛する者を守る為には時には非情に成らなければいけないことを知った。

「だからお姉ちゃんはその時の事を話してくれないんだ？」(ツグミ

それを思えば誰もが口を閉ざすと言ったヒビキの言葉が頭を過ぎる。

そして彼らは思う、今ここで自分たちが学んでいること、それは強さ以上の厳しさなのだ……

「それからな、林間学校の場所だけど、スプールスであるの戦闘のあった場所だからな？」

結構一杯死んでるし、マジで幽霊が出るスポットだから楽しみにしておけよ！」(クロスリード

その言葉に1年生達は真っ青になった。

## 違う世界（後書き）

次回：なのはや卒業生達の日常。



## それぞれの日常（前書き）

まあ、こんな感じで日常が展開している。

この三人と云うか、スクールのほとんどの教師はあの飲み屋にやってくる。

スクールの多くの生徒がバイトする飲み屋、一番最初にヴァロット達がバイトしていたあの飲み屋へ。

## それぞれの日常

「よう、劉邦、チャチャイ、終わったら飲みに行かないか？」

佐藤は二人にそう声をかけた。

この三人、元々はレティ本部長の護衛をやっていた5人なのだが、彼女の引退に伴い解雇になる彼らをなのはが引き抜いたのだ。残り二人は既に定年退職し、悠々自適に生活している。

因みに佐藤先生は今年度一杯で定年退職の予定である。

「良いねえ、行こうか？」

まあ、こんな感じで日常が展開している。

この三人と言うか、スクールのほとんどの教師はあの飲み屋にやってくる。

スクールの多くの生徒がバイトする飲み屋、一番最初にヴァロット達がバイトしていたあの飲み屋へ。

一方こちらは校長先生、

「なんか、昨日から手持ちぶさたなのよね？」（なのは

「そりゃあ、いつもの3人が突き出されてきませんからね？」（テ  
イアナ

そう、思いつきりバスターで吹っ飛ばそうと思っていたのに、今の所その気配がない。

実はこの学校には困った1年生が3人いる。

やることがガキで、スケベで常にやらかしては職員室に引つ張られる3人、

1-1 ジョン・ハミルトン、バラнтаイン・ファイネスト、1-4  
ブランドン・ゴールド

この3人を女子達はスケベ3人衆と呼ぶ、覗きの常習犯だ。

「まあ、ヴァロット君効果がある内は来ないでしょうね？」（ティ  
アナ

「だよね？あれで人生観が変わっちゃう子も多いしね？」（なのは  
そう、あの特別授業は大きな意味を持っている。

まだ将来を決め兼ねている1年生にとって、  
人生の道標を示されるあの授業は彼らにとっても大きな転機になる  
のだった。

こちらはスペシャルフォース、

「アマネさん、あの書類出来てる？」（ヴァロット

「さっき、ヴァイゼン地上本部と機動4課に送っておきました。  
これで当分暇になるでしょう？」（アマローネ

そう、ヴァロット達スペシャルフォースは、  
先週までヴァイゼンで起きた重大事件の助っ人に行っていた。

まあ、ちよっと手の付けられないロストログアが暴れて困ったこと  
になっただけなのだが、

それも無事に解決し、捜査資料も無事に送れたようだ。  
これでまた暫くの間は平和な日々がおくられそうだ。

「でも、戦闘の際にチームフリーダムとチームファイヤがぶつ壊した町の請求書が……」

「こんなに来て居るんですが……」(アマローネ)

「知らん、ヴァイゼンの地上本部に払わせろ、こつちだって少ない予算の中でやりくりして居るんだ。」

もし文句を言ってきたらこう言ってやれ、俺が戦闘に出なかっただけマシだったと」(ヴァロット)

大体、これで話を通してしまおうのがこのスペシャルフォースの凄  
い所だったりする。

彼が本気で暴れたらどうなるのか？人造魔王事件の結果、

世界が一つ滅んでいることから考えても彼が出ること自体危険なの  
だと誰もが認識している。

まあ、脅しの一つで片が付くというのもまだ管理局の連中がいか  
にへタレなのかよく分かる。

「隊長おおー、一緒に帰りましょ~~~~~」

元気に飛んできたのはアプリリア、彼女はピトツとヴァロットの  
頭に張り付く。

もういつもの光景だった。

アプリリアはリンやアギトと同じ融合騎、古代ヴェルカ式だ。

ヴァロットの肩の上が指定席だったりする。

「こら、アプリーまだ仕事は終わってないぞ？残り15分ある」  
(ヴァロット)

怒られてちょっとむくれるアプリリア、ちょっとかわいい。

これが彼らの日常だったりする。

そのころ教導隊

ドオオオオオオオン

「キヤアアアアアアアアアアアア！」

エリカが自分の砲撃を喰らって撃墜される。  
いくらエマルジョンコレクトが使えると言ってもアステイの方が1枚上手だった。

おまけに足下にはリオが打ち倒されて転がっていた。  
それを見ている研修生達は呆然としている。  
彼らにとって、ここでの研修は非常に意味が大きかった。

この5年、研修内容は大きく見直された。  
年に一度3週間の研修は上級クラスのみで、それ以外は3年に一度3ヶ月間の研修だったりする。  
ある程度の長期研修の方がレベルアップを図る効果が大きく、各部隊とも驚異的に殉職者が減り、  
武装隊は全体的なレベルがじわじわと上がっていた。

そんな訳で、本日の教導の仕上げに模擬戦を見学の訳だが、  
あの強いエリカ先生とリオ先生が完膚無きまでにやられていた。  
さすがはインターカップを制しただけのことはある。  
その強さは折り紙付きだった。  
何せ二人がかりで手も足も出せなかったのだ。

こうして模擬戦は終わり、本日の研修は終了した。

「ねえ、今からみんなで食事に行かない？」（エリカ

「良いよ、やっぱりあの居酒屋？」（リオ）

「私はパス、子供達が待ってるし、もうすぐヴァロットも帰ってくるし……」（アステイ）

「相変わらずのろけおって、付き合い悪いぞ？」（エリカ）

「そう言えば先輩、来週は本局なんですよね？」（リオ）

「うん、来週は本局でエマルジョンコレクトの使いこなしの授業かな？」（アステイ）

こちらは次元航行隊

「バロー口提督、本日の演習無事終了しました」

「ん、ご苦労」

「で、この後飲みに行きませんか？」

「済まない、まだ書類仕事が残ってるんだ、来週大きな民事裁判があるからな？それまでに纏めなきゃ成らん書類が山のようにある」

「提督も稼ぎますねえ？」

「ん、まあな、金はいくらあっても邪魔には成らんしな？」

バロー口もまた非情に忙しい日常を送っていた。

就職して10年、その名を知られた提督として、優秀な執務官として、部隊を率いる指揮官として、

管理局幹部として将来を嘱望される出世頭だった。

将来は局長か？と言われる実力者として頑張っている。

因みに、弁護士の資格も取得し、敏腕弁護士としても有名である。

まあ、こんな感じでそれぞれの日常が展開する。

それぞれの日常（後書き）

次回：突撃！高町家の晩ご飯と言いついでなのは達の団らん風景など  
……



## 突撃、高町家の晩ご飯（前書き）

と言うわけでユーノと編集者だけほつといてみんなで食事、

ユーノの不遇は何時になったら解消されるのだろうか？

この現象はやがて家庭内不遇という言葉を生み出す。

## 突撃、高町家の晩ご飯

「ただいまー」（なのは

「あ、ママお帰り」（プレオ

「お帰り〜」（ユウキ

「すぐにご飯にするね？さてとあの人は……」（なのは

「先生えええええ〜早くして下さいいいいいいい〜」（編集者

せっかく定時で帰って来られても缶詰にされているユーノだった。

「また原稿落としそうなの？困った物ねえ？」（なのは

そう、ユーノは無限書庫司書長、クラナガン大学人文学部考古学  
教室教授、

そして作家という三つの職業を掛け持ちしている。  
非情に忙しいのだ。

そして今日は金曜の夜、せっかく定時に上がれても直ぐさま捕まっ  
て缶詰である。

「いい加減連載を減らせばいいのに？」（なのは

「それがせっかく書き終わってもすぐに次の小説を頼まれるんだよ  
お、

せっかく休みが取れるかと思ったのに〜（泣）（ユーノ

まあ、これが高町家の日常だったりする。

コンコン

誰かが玄関のドアをノックする。

「あ、フェイトちゃん、どうしたの？」

「今日から船の整備で一週間休暇なんだ、だから多めに食事を作ったの？」

みんなで一緒にどう？」「（フェイト

「丁度良かった、今夜何を作ろうか考えてた所だったんだ？でもユーノ君がね？」（なのは

「またあゝ？ユーノも本当に懲りないわね？」（フェイト

と言うわけでユーノと編集者だけほつといてみんなで食事、ユーノの不遇は何時になったら解消されるのだろう？この現象はやがて家庭内不遇という言葉を生み出す。

「そう言えばカレルから連絡来たよ、夏休みに入ってすぐ入籍するって、

その時結婚式を挙げるからって？」（フェイト

「じゃあ司祭はヴィヴィオだね？こつちも準備に入らないとね？」（なのは

「おじさんから明日あたり連絡来るんじゃないの？」（フェイト

「多分ね？」（なのは

そう、カレルもまたスクールを卒業し、今は次元航行隊の提督をしている。

そして、士郎が進めていたお見合いはカレルと静音だった。

それがようやく実り、この夏結婚が決まったのだ。

実はこう言う所は全て士郎の掌の上である。

士郎としては一族を増やすだけではなかった。

一族に魔力を持った者を増やすこと、

そして出来る限り財産と権力のある者を一族に取り込むことも目標としてきたのだ。

そう、カレルは正に打って付けだった。

地球で言えばアメリカ大統領の息子と縁談を進めているような物だ。それだけ時空管理局長の息子と言うのは地位も名誉もある。

おまけに結構な魔力を持ち、ルックス抜群、頭脳明晰と来れば言うことなしだ。

孫の嫁入り先にこれ以上の所があるだろうか？

士郎は着々と御神一族と次元世界の絆を強く太い物に成長させていた。

そして今リエラも狙われていたりする。

リエラは拓也との縁談が持ち上がっているのだ。

こうして高町家、月村家、ハラオウン家の絆はより一層強い物になっていく。

更にこの縁談、リンディさんも一枚咬んでいたりする。

「フェイトちゃん、今日はありがとね？またこの埋め合わせはするから」（なのは

「別に良いよ、なのは、それよりね？」

フェイトが指さした先ではユウキが何か照れくさそうだ。最近、ユウキはセシルを意識するようになった。

セシルもまた満更ではない様子。

二人は思う、（これはひよっとするとひよっとするかも知れない？まだ子供とはいえ、もう初恋に目覚めようとしている二人を温かく見守りながらも、

何とかして二人をくつつけたいと願っている二人の母親だったりする。

「あ、アルフ後片付け手伝って？」（フェイト

「はーいなのだ」（アルフ

アルフはフェイトが結婚してからはまたフェイトの所に戻ってきていたりする。

それにセシルにとって家を空けがちな両親に代わって遊んでくれる遊び相手だったりする。

更に時々二人して高町家におよばれたりなんて事も良くあったりする。

まあ、持ちつ持たれつの関係だったりする。

そしてアルフもまたセシルとユウキの関係を頬笑ましく温かく見守っているのだ。

そう、なのはの息子ユウキ、フェイトの娘セシル、新たな恋の物語が始まるうとしていた。

因みにユウキはなのはの血を色濃く引き継いだ為か？亜麻色の髪にユーノ似のグリーンの瞳、

意志の強そうな眼差し、まるでなのはの様に負けん気が強い。

そして生まれながらに高い魔力を持っている。

セシルは両親ともブロンドの髪だけ有って見事なブロンド、フェイトの赤い瞳に対してカルロの青い瞳、その両方の遺伝子を受け継いだ為紫の瞳をしている。

小さい頃のフェイトのような美少女だ。やはり高い魔力を持っている。

生まれた時からお隣同士の同級生、そして最近はなのは達から格闘技や魔法を習っていて、

一緒に過ごす時間が多い、そんな二人がお互いを男女だと意識し始めていた。

なのは達は思う、この関係を絶対に崩さないで欲しい、出来れば結ばれて欲しいと……

「所で、プレオ、ユウキ、夏休みどうする？良かったら林間学校に付いて来ない？」

「わ、私は遠慮します、その間はお姉ちゃんの所へ厄介になるから良いです（ブルブルガクガク）」

実はプレオは去年林間学校に付いて来てとても怖い目に遭っているのだ。

「ママ怖すぎだから絶対付いていかない！」（プレオ）

「ユウキとセシルちゃんは どうする？」（なのは）

そんな様子に冷や汗を流しながら付いていくのは止めようと思う二人だった。

結局3人と1匹は協会にお泊まりすることにしたのである。

さて今年も林間学校は楽しそうなことになりそうだ。(笑)  
なのは黒い笑いを浮かべていた。

時間は少し巻戻ってこちらはスペシャルフォー

「さて今日の当直は？」(ヴァロット)

「アルトさんと、チームウィンドです」(アマローネ)

「了解した、じゃあ後は頼んだぞ？」(ヴァロット)

そしてヴァロットは帰っていく、低く野太いエンジン音を響かせて……

因みにアプリリアの指定席はヴァロットの肩の上、寒い時期は懐の中にいたりする。

彼女にとってここは非情に居心地の良い、最高の居場所だった。

**突撃、高町家の晩ご飯（後書き）**

次回：と言う訳で次回はロシエツト家の一家団欒風景

+ アプリリアとの出会い



## ロシエット家の団らん（前書き）

そしてヴァロットとアステイは庭に出る。

ライトアップされた庭で今から子供達に御式内の稽古を付ける。

この時はかりはアプリリアもフルサイズになって一緒に稽古に励んでいる。

## ロシエツト家の団らん

「ただいまー」(ヴァロット)

「ただいまー」(アプリリア)

「あ、お父さんお帰り〜」(スアーニャ)

その声に子供達が集まってくる。

「あのね、あのね、さっきおじいちゃん達がお魚届けてくれたの」  
「(ルアンヌ・コリーヌ)

二人でハモっているのは次女と三女のルアンヌとコリーヌ、まるでコピーしたかのような双子だ。  
実は両親以外どちらがどちらなのか全く見分けが付かない。

「あ、あのー、旦那様申し訳ございません、私たちでは魚が大きすぎて捌くことが出来ません、  
お願いしてもよろしいでしょうか？」(ヴェレナー)

「良いですよ、ヴェレナーさん、で魚は何？」(ヴァロット)

「南洋マグロです、それと鮫も1匹」(ヴェレナー)

そうか？そろそろそんな時期だったな？

そう、この時期、夏の少し前南洋マグロが北上してくる。

普段は赤道付近にいる魚だが、夏になると北の方へやって来るのだ。そして夏が終わるとまた南に帰っていく。

この時期にクラナガンの沖でも釣れるようになる。  
クラナガンの人たちにとって夏の始まりと終わりを告げる魚として  
親しまれている。

「しかしでかいな？」（ヴァロット）

目の前には2メートルを超えるマグロと3メートルを超える鮫が  
横たわっていた。

「あの二人本当に化け物だな？良くこれだけでかいのを担いでこら  
れるな？」

そう、トラックから担ぎ下ろすだけで洒落にならないほど重い、  
それを悠然とやってのける辺りは化け物としか言いようがない。

まあ、それだけ鍛えられているって言う証拠だ。

何せあの二人はテグス一本でこんな巨大な魚とやり取りをして釣り  
上げる。

尋常な体力の持ち主じゃあないのだ。

その時だった、部屋の中に転送魔法陣、そこから出てきたのはア  
ステイだった。

「ただいま〜」（アステイ）

「アステイ、今日は魚だぞ、手伝ってくれ」（ヴァロット）

そして魚の解体が始まる。

まずは鮫から、こいつは早いこと捌かないとアンモニア臭くて食べ  
られなく成ってしまうから厄介だ。  
まずは鱭を切り落とす。

処理はお手伝いさんに任せて本体を解体に掛かる。

「にゃ〜ん」

後ろからパヴィイがその巨大な顔をすりすりする。

この巨大猫食っちゃ寝するだけのペットに成り下がってる。

少しぐらい召喚獣としてのプライドが欲しい所だ。

そして魚を分けて貰おうと媚びを売りに来た。

「はいはい、今分けてやるから」

ブロックで鮫の肉を分けてやると喜んで銜えていく。

取り敢えず、鮫はブロックに切り分けたのをアステイとお手伝いさんが切り身にしていく、

一部はつけだれに漬け込んでおいて明日の食事、残りはフライにしてから冷凍する。

こうすればもう傷むことはないし、長期間の保存が可能だ。

再度揚げ直せばいつでも美味しく食べられる。

まあ、これで当分魚づくしだろうな？

次にマグロを解体、マグロは短冊にして冷凍、

嬉しいことにアプリリアが冷凍魔法を使えるので瞬間冷凍するには楽で良い。

これでいつでも新鮮なマグロが食べられる。

まずは今日の食べる分を確保、切り身にしたらマグロ用のつけだれへ、

これでづけ丼は確保、あとは刺身と焼き物に、

中落ちは明日の朝のスープと勿体ないがパヴィイの餌になる。

あの猫さっきのブロックを平らげてもうおねだりに来た。

最近、体重の増加で居間のソファが良く壊れる。

牛並みにでかいだけにもつと頑丈なソファでないと持ちそうにないな？

まあ、2時間ほどで解体作業は終わりちょっと遅めの夕食になる。その間子供達は後ろからずっと作業を眺めていた。親のこういふ姿を見せるのも一つの教育だと思う。

「ミッシェルさん、さっきの鮫の肝臓は肝油にしているね？」（ヴァロット）

「まあ、肝油ですって、またお子様が増えますわよ、ムフッ」（ユツファー）

「肝油って精力剤ですものね」（ヴェレナー）

こいつら何でもこういう下世話な話が大好きかな？とつくづく思う。

まあ、確かに精力剤も成るけど、健康的なサラダオイルとしても使用出来る。

ドレッシングなんかに向いているな？

そう言う話をしながらロシエッタ家の夕食は過ぎていく。

食べ盛りの子供達が居るお陰で、あつという間に全て消えて無くなる。

まあ、これがいつものロシエッタ家の団らん風景だったりする。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」（子供達

「じゃあ、後片付けを頼みましたよ」（アステイ）

そしてヴァロットとアステイは庭に出る。

ライトアップされた庭で今から子供達に御式内の稽古を付ける。  
この時ばかりはアプリリアもフルサイズになって一緒に稽古に励んでいる。

何が有っても自分の身は自分で守れるようになるのが目標だったりする。

アプリリアは元々ロシエット家には居なかった。

それどころかスペシャルフォースの一員でもなかった。

それは3年半前のこと、ある作戦の途中だった。

「ふっ、どうやら片付いたようだな？」（ヴァロット

「あの、部隊長どちらへ？」（アマローネ

「まあ、ジュースの1本でも買ってきてやるさ、

ご苦労さんぐらい言ってやらないとな？」（ヴァロット

そう言っただけの自販機を探す。

丁度良い具合に道ばたに自販機があった。

ジュースを買おうとしたその足下にぼろぼろの人形が落ちている。

衣服は小汚いぼろ切れ、髪はぐしゃぐしゃで背中の羽もかなり酷く千切れていた。

「誰だよ、こんな所にゴミを捨てる奴は？」（ヴァロット

つまみ上げて目の前の屑籠に捨てようとした時だった。

つかんだ感触が可笑しかった。妙に生暖かい、それにちょっと動いた。

なんと生きていた。

やばいと思ったヴァロットはモニターを開く、

「シャマル先生！急患です、瀕死の患者を転送しますので見てやって下さい」

これが彼女との出会いだった。

その後彼女は病院で意識を取り戻した。

怪我の影響なのか、それとも相当恐ろしい目に遭ったからか？

彼女は自分の名前以外何も覚えていなかった。

その後捜査が進んでも彼女は何の事件に巻き込まれてそうになったのか？

一切分からず仕舞いだった。

それに捜索願さえ出ていなかった。

普通誰かの融合騎なら捜索願が出されても可笑しくは無いのだが一切それはない。

何か大きな事件が起きていたと思うのだが、結局アプリリアの記憶が戻らなければ何も捜査出来ない。

それから一ヶ月、彼女は退院を迎えようとしていた。

「あのお、医療費をお支払いするお金がないのですが……」（アプリリア）

アプリリアはそうシャマルに泣きついた。

「しゃーねーな、俺が立て替えてやるわ、その代わり体で返せよ？」

（ヴァロット）

「いあああああああ！この人変態です！スケベです！ロリコンです！」（アプリリア）

「そう言う意味じゃあない、働いて返せって言ってるんだ！」（ヴァロット）

「ちょっとぶざけて見ただけです」（アプリリア）

「じ、じいじ……」（ヴァロット）

「でも実際問題私が働ける場所があるのでしょうか？」（アプリリア）

「まあ、うちで良かったら使ってやるぞ？時給1000でどうだ？  
住み込みのベビーシッターだけだな、家は子供が多いから人手が欲しいんだ」（ヴァロット）

そしてアプリリアはロシェット家の一員として迎えられた。  
その後彼女はスペシャルフォースにもやって来るようになり、  
3等空士として採用され、今は空曹にまで出世している。



ロシエツト家の団らん（後書き）

次回：月村家の結婚事情

## 雫先生の結婚事情（前書き）

もの凄く不機嫌なのは雫だった。

そう、静音とカレルの結婚が決まり月村家はその準備に入っていた。ミッドチルダに引越してきて8年、実に平和な日々だった。

その間に雫は男を捕まえるべきだったのだが、天性ののんびりした性格と、

どうにも男に目移りしてしまう優柔不断さがここまで特定の彼氏を作れなかった理由だった。

## 雫先生の結婚事情

「ちよとおおおおおおお、何で一番年下が先に行くのよおおお  
おおおおお？」

もの凄く不機嫌なのは雫だった。

そう、静音とカレルの結婚が決まり月村家はその準備に入っていた。  
ミッドチルダに引越してきて8年、実に平和な日々だった。

その間に雫は男を捕まえるべきだったのだが、天性ののんびりした  
性格と、

どうにも男に目移りしてしまう優柔不断さがここまで特定の彼氏を  
作れなかった理由だった。

そして今、もの凄く敗北感を味わっている。

まさか妹に先を越されるとは思わなかった。

まあ仕方がないといしか言いようがない、ドイツにいた頃は知らなか  
つたけれど、

日本に帰ってきてからはご近所さんで幼なじみの二人、くつついて  
も可笑しくはなかった。

それに、弟の拓也もリエラと付き合っている。  
完全にフリーなのは自分だけだったりする。

地球にいた時のように、任務があるからとかそう言うことを言っ  
たら、

振られてしまうなんて事はこっちの世界ではなかったりするけど、  
やっぱり出会いが欲しい、燃えるような恋がしてみたい。

と願いつつ、そんな運命の出会いも無いままにこの歳まで過ぐして  
しまった。

このままでは不味い、これでは売れ残ってしまう。

そう言う焦りが募る今日この頃、どうしよう？こつなったらお見合  
いでもしてみようか？

彼女は最近そう思うようになってきた。

月村家の次期当主、不破流の次期当主は拓也に決まり、自分は何  
もない。

このまま行かず後家で過ごすのも辛い、彼女はとてつもない焦りを  
感じていた。

それに父と母はそんな雫に構っている余裕はなかった。

まずは静音の結婚準備だ。

その次は拓也とリエラの縁談を纏めて結婚の準備に入らなければな  
らない。

それに傘下の会社のこともある。

今地球では長らく続く大不況の為、会社を潰さないだけの経営をす  
るだけでも大変なことだった。

(くっ、こつなったら叔母さんみたいにギリギリまで粘るか、それ  
とも誰かに相談してみるか？)

雫は最近そんなことを考えながら悶々とした日々を過ごしている。

「何？雫先生が男を欲しがっている？」

「そうなの、静音さんに先を越されちゃったからかなり焦ってる感  
じ、」

そろそろ誰が良い相手を見つけてあげないと……」

「そつだな？でもあそこは相当な名家だからな？」

あんまり信用度のない奴は紹介出来ないだろう？

家柄とか地位とか権力とか財産とかそう言うことを言ってきたらどうだ  
しな？」

「結構厳しいわよね？」

「でも一人だけ心当たりがあるぞ？間違いないく出世しそうな凄  
い奴が……」

「彼ね？彼なら大丈夫だとは思っけど……」

「明日仕事帰りに土郎先生の所に行ってみないか？」

どうせなら俺たちの時のようにみんなしてくっつけるってのも面白  
そうだしな？」

「うん、その作戦乗った」

と良からぬ作戦を立てているのはヴァロットとアステイだったり  
する。

そして翌日

「何だお前達も同じ事を考えていたのか？」

「じゃあ、土郎先生も？」

「もう先生はよしてくれよ、俺はもうただの老人で年金生活者だ」

定年退職して9年、頭になりに白い物が混じりすっかり老けてし  
まったが、

あの頃の鋭い眼差しは健在な土郎だった。

士郎は、やはり栗のことを心配していくつかの縁談を準備し始めていた。

「こう言う事は情報の漏洩が一番恐ろしいぞ？それからもっと仲間を増やさないとな？」

「はやてさんとクロノ提督、リンディさんも巻き込みますか？」

後、校長先生にフェイトさんも仲間になってくれると良いんですけど？」

良からぬ企みが進行しつつあった。

そのころスクール、

「いやあああああああ！何で私が林間学校の引率に選ばれるのよおおおおおおお！」

栗先生が悲鳴を上げていた。

完全にデフォで引率なのは、キャロ、エリオ、ピノ、スー、の四人となのはなのだが、

残り二人はくじ引きだった。もう一人はビリー先生だ。

そう、教師達としては絶対に一緒に行きたくない、特になのはとだけは一緒に行きたくない。

あの恐怖を味わいたくはないから、あそこだけはやばすぎるから行きたくないのだ。

他の教師達は思う、行かなくて良かったと……そしてご愁傷様と……  
一体林間学校はどれだけパワーアップしたのだろうか？

もうすぐ7月、模擬戦大会に向けて、いろいろな試験に向けて生徒達は追い込みに入っていた。

「わかんねええええ！」

参考書を片手に頭を抱えているのはジョンだったりする。

執務官を目指している訳じゃあないから執務官講座には出ていない、でもせめて指揮官研修には出られるようにならないと、

このままでは学校一の落ちこぼれになってしまう。

それどころかどこにも居場所が、就職先さえなくなってしまっ、ミッドチルダーの称号も手にするなんて夢のまた夢に終わってしまった。

目の前には高く厳しい頂がいくつも連なっている。

それを一つ一つ乗り越えない限り自分の夢に辿り着く事なんて出来はしない。

そう、まずは目指すなら学園最強、でもそれ以前に学年最強にならなければどうしようもない。

それすらも出来ていないどころか学年最弱に近い。

今になって後悔する事、

それは覗きなんかにつつつを抜かしている場合じゃあなかったって事だった。

入学した時その瞬間から既に戦いは始まっていたのだ。

人より多く鍛えて強くなる事、勝ち抜く事、それ以外この学園で名を上げるすべはなかった。

ある程度強くなって注目されれば人生いろいろ特典があるのだが、サボっている奴は誰から見放され、孤独に朽ち果てていくしかない人生だった。

せめて指揮官適性試験ぐらいは受かってみせる、あの人に強くなる方法を教えて貰いたい、

それが切なる願いだった。

「こちらはリン達、

「この法律の所難しくてよく分からないよ？」（リン

「よく似た法律があるからややこしいわよね？

同じ管理局法でも、世界によって解釈が違ったりする所もあるし、  
地域によっては条例の方が強い所もあるしね？」（ティアナ

今、執務官補佐採用試験に向けて勉強中、ティアナ先生に難しい  
所を教えて貰っている所だ。

みんな執務官を目指す仲間達、難しい法律の勉強に余念がない。

こちら生徒会

クロスリードとヒビキも参考書を片手に難しい勉強をしていた。

彼らは執務官補佐に合格し、指揮官研修も取った。

後はキャリア幹部採用試験に合格する事を目標にしているのだが、  
簡単には行かない試験だったりする。

「まったく化け物だよな？あの人は？何でこんなに難しい試験を満点  
合格出来るんだ？」（ヒビキ

そう、あれから10年、現役でのキャリア幹部採用試験に受かっ  
たのは数えるほどしか居ない。

中でも満点合格は、ヴァロットとバローロの二人だけだった。

「頭の出来が違うんじゃないの？あの人は天才と呼ばれてたから  
？」（クロスリード



そう、二人はキャリア幹部になる事を目指して勉強を続けているのだ。

「試験のコツをヴァロット先生に聞いてみるか？」（ヒビキ

「簡単には教えてくれないだろうけどね？」（クロスリード

もうすぐ7月、各種試験に模擬戦大会とイベントごとが目白押しだった。

栗先生の結婚事情（後書き）

次回：ヴァロットの所へ試験のコツを聞きに来る生徒達

## 試験のロツ(前書き)

「あ、あのう、キャリア幹部試験についてアドバイスを頂きたいんですが」(クロスリード)

「俺たちは指揮官適性試験のアドバイスが欲しくて……」(ジョン)

「なんだそんなことか?」(ヴァロツト)

## 試験のコツ

翌日、面白い取り合わせがスペシャルフォースの部隊長室に揃っていた。

クロスリードとヒビキ、そしてジョンにバランティンそしてブラントン、

一番の天才と一番の馬鹿共が揃ってヴァロットの所へやってきた。

「あのう、キャリア幹部試験についてアドバイスを頂きたいんですが」(クロスリード)

「俺たちは指揮官適性試験のアドバイスが欲しくて……」(ジョン)

「なんだそんなことか？」(ヴァロット)

「そんな事って……」(ヒビキ)

「俺勉強しなかったし、あれくらいの試験余裕だろ？普通」(ヴァロット)

「よ、余裕って……」(クロスリード)

「お前らは常識に縛られ過ぎなんだよ、あの試験はそんなに難しいことを問題にはしていないんだ。

ただ、設問が思いつきり捻ってあるし、参考書もそうなる。

だから、そのまま覚えようとするれば常識という糸に絡め取られて分からなくなる。

初めから考え方を変えればいいのさ、まあ発想の転換って言う奴だ」(ヴァロット)

「発想の転換ですか？」（クロスリード）

「そうだ、発想の転換、要はどこをどう捻ってあるか見抜ければ良い、

そうすれば聞いていること自体は簡単なことだけだ」（ヴァロット）

ヴァロットの言葉に啞然とするクロスとヒビキ、まだとても信じられないようだ。

「発想の転換が出来ればそれで良いんだ、勉強なんてするだけ無駄だから」（ヴァロット）

（この人やはり頭の出来が違いすぎる、俺たちでは付いていけない世界にいる）（ヒビキ）

（同感、でもアドバイスは決して無駄にはならなかったと思う、帰ってもう一度やり直そう）（クロスリード）

「さて、指揮官適性試験だが、あれは合格不合格を見ている訳じゃあない、

指揮官として能力があるかどうかを見て居るんだ、指揮官として使えるかどうか？

人の上に立つ資質があるかどうか？そう言う所を見る試験なんだ」

（ヴァロット）

「人の上に立つ資質？」（ジョン）

「そうだ、仲間を如何に守れるか、どうやって作戦を安全に遂行出来るかを考えられるか？」

そう言う能力を持っているかどうかを問う試験なんだ。

これこそ勉強の必要のない試験、いくら勉強した所で簡単に身に付く物じゃあない、

ある意味才能の領域の試験なんだ。教科書通りの問題なんて殆ど出てこないし、

勉強するだけ無駄になる。もし、試験に通りたいのなら過去の模擬戦大会の映像をしてみる、

自分たちのチームより強いチームに勝つにはどうしたらいいか？

どうやって相手の弱点を見つけられるか？そこからどうやって相手を崩すのか？

その全てがああの映像には詰まっている」(ヴァロット

「過去の模擬戦大会って？数が多すぎてどれを重点的に見て良いかわかりませんよ」(ブランドン

「俺のだけで充分だぞ？あれには勝つ為だけじゃあない、相手を傷つけず、

味方を傷つけさせず、どんなセコイ手を使っても確実に勝つというお手本が示してある。

あと、個人戦大会のバローロの試合も良い参考になるだろう？

まだそれでも言っている事が分からなければ見た試合を分析してレポートに纏めてみる、

そうすればそれが最高の教科書になる、努力しただけ自分の力になるんだ。

努力は決して自分を裏切らない、忘れるなよ？」(ヴァロット

「傷つけず、傷つけさせず、確実に勝つですか？」(バランタイン

「そうだ、味方を簡単に死なせるような指揮官には誰も付いてこないし、

真つ先に自分が死ぬような指揮官では部隊が全滅してしまう。  
傷つけず、傷つけさせず、ただ責任だけ取るのが指揮官たる者の役  
目だ。

そして指揮官にはミスは許されない、ミスをすれば大切な仲間を失  
う事になるんだ。

俺はただ一度だけ重大なミスを犯してしまった、その結果は知って  
の通りだ。

自分で地獄に堕ちていく、だからこの試験に通るといふ事はその先  
のミスは許されないといふ事だ。

このスクールにいる間に学べ、出来る限りのミスをして自分の至ら  
なさを克服しろ、

それがこのスクールで学ぶといふ事の意味だ」(ヴァロット

「ヴァロット先生、今日はありがとうございました」(一同

そう言っつて部隊長室を後にする一同だった。

「なんかスゲーな、あの人と話してると不思議と強くなれる気がする」(ジョン

「気が付いたか？あの人は人間としての器が違うんだ。あんな器の  
でかい人はいない、

そして今もその満たしきれない器を持て余して居るんだ」(クロス  
リード

「傷つけず、傷つけさせず……か？まるでエマルジョンコレクトみ  
たいだな？

いや、御式内みたいと言っべきか？」(ブランドン

「でもやっぱり住んでいる世界が違いすぎる、

俺たちは何時になったらあの人に追い付けるのだろうか?」(ヒビキ

そこには最強という名の途轍もなく高い頂がそびえ立っていた。その懐は途轍もなく広く、どこまでも優しく、それで居て雄々しく厳しい。

それを感じる事が出来た彼は強さの階段を上る。

彼らにとって、この一時はかけがえの無い時間となった。

「さあ、急いで帰ったら言われた事が出来るようにしないとな」(クロスリード)

彼らは頂いたアドバイスを素に勉強を始める。

それぞれの試験に向けて……それがやがて彼らの能力になっていく、彼らにとってヴァロットという存在は学園の教師以上に大きかった。そして、人生の目標としてその横に肩を並べる事、それが出来る人間を目指す事が彼らの進路となっていく。

「なんか部隊長嬉しそうです」(アプリリア)

「ああ、こんな嬉しい事はない、以前校長先生に言われた事だ。教える事は教えられる事、学ぶ事は楽しいって事さ、

ああいう楽しい奴らが来てくれると、俺も楽しくて嬉しい、

これからの未来を背負って立てる奴らを育てる事は実に楽しい事だ」

(ヴァロット)

「私は勉強は嫌いです」(アプリリア)

「まあ、アプリーにもその内分かるさ」(ヴァロット)



「こうやって改めて見るとよく分かる。

蛇や蛙をぶつけているのは全て女の子が相手の時だけだ」(ジヨン)

「脱がせているのもそう、相手が女の子の時だけだね」(ブランドン)

「そうか？相手がやられたら一番嫌な事をして相手の隙を突いて居るんだ？」(バルンタイン)

「あのすっぱんぼん光線はただ脱がせる為にあるんじゃない、

デバイスや暗器を全て取り上げてしまっ為にあるんだ？」(ジヨン)

「傷つけず、傷つけさせず、それで居て確実に勝つ……か？」(ブランドン)

「その為にこれだけの事を考えているとすると相当頭が切れているな？」

「やっぱり天才だよ、凄すぎてあの足下に追いつくだけでも大変な事だ」(バルンタイン)

「あの人が言っただけだろ？会長達に、発想の転換をしろって、

もっと自由に、もっと自分のやり方で答えに近づければそれで良いんじゃないかな？」(ジヨン)

「発想の転換……か？」(ヒビキ)

「もしかしてこういう事か？この問題見てみるよ、こんな風に聞いてるけど、

「こう言う考え方で、こう聞いてみたらと仮定するとだな……答えはこうなる訳で……」

「この問題自体は大して難しくないぞ?」(クロスリード)

「本当だ、じゃあこの問題は……」(ヒビキ)

「なーんだ、結構簡単じゃないか?」

「……って言うかそれを一瞬で見抜けるあの人はどう言うひねくれ者なんだ?」(クロスリード)

## 試験のコツ（後書き）

次回：事件発生、スクールやスペシャルフォースを巻き込んで大捕物が展開される。

## 怪盗ジャヌヴィア登場（前書き）

怪盗ジャヌヴィア、最近売り出し中のこそ泥だ、

しかも盗んだロストロギアをすぐに犯罪組織に売り渡す事でも有名な奴だ。

下手にテロ組織にでも売り渡されたらどこでどのようなテロに使われるか分からん、

一刻も早く奴を取り押さえてロストロギアを回収して欲しい、

## 怪盗ジャヌヴィア登場

その日、本局刑事課長の前に例の三人が集められていた。スクール2期生にして刑事課の三羽ガラスと呼ばれる3人、最強の捜査チームだ。

「諸君、実は昨日途轍もなく厄介な事件が起きた。43番管理外世界のエーバーバツ八博物館からロストロギアが盗まれた」(課長)

「課長、それでしたら機動4課の範疇でしょう？」(レヴ)

「それがな、盗んだ奴とそのロストロギアが問題なんだ。

ロストロギアは第1級危険指定のある物で、暴走したらどうなるか見当も付かんよ、

下手をしたら世界を一つ滅ぼすかも知れん」(課長)

「一体何でそんな危険な物が一介の博物館にあつたんですか？普通なら機動1課の保管庫に厳重封印でしょ？」(グレイス)

「どうも調査が進んでいなくてな、この120年ぐらいずっと手つかずだったらしい」(課長)

「まったく、何を暢気な？それで盗んだ奴は？」(山田)

「怪盗ジャヌヴィア、最近売り出し中のこそ泥だ、しかも盗んだロストロギアをすぐに犯罪組織に売り渡す事でも有名な奴だ。

下手にテロ組織にでも売り渡されたらどこでどのようなテロに使わ

れるか分からん、

一刻も早く奴を取り押さえてロストログアを回収して欲しい、既に機動4課に捜査協力を仰いである、必要なら他にも増援部隊を要請する。

それから捜査の指揮はレヴ、君にお願いする」(課長

「「「任務拝命いたしました」」」(3人

「さて、捜査本部を立ち上げましょ？」(レヴ

「機動4課は誰を助っ人によこすのかしら？」(グレイス

「またあいつじゃあないの？」(山田

「ああ、彼ね？　たく使いにくい人材ばかりよこすのね？」(レヴ

そう、助っ人は3期生のヴァロワ・フルールだった。

「まあ、そう言いなさんな、あれでも封印術じゃあ校長先生よりも上なんだから？」(山田

また変な取り合わせが捜査本部に揃った物だ。

でも、このチームで数々の難事件を解決してきている。決して使えない人材などではない。

ただ癖が強すぎて使いにくい事この上ないが……

「所で怪盗ジャヌヴィアってどんな奴なの？」(レヴ

「まだ誰も素顔を見た事はないの、変身制御が上手くて誰にでも何

にでも化けられるから

警備の隙を突いて進入されるし、簡単に取り逃がしてしまうわ、もう3度も煮え湯を飲まされてるし、

それにティア先生クラスの幻術の使い手でもあるわ、攻撃魔法を使つたと言つ話はないけど、

もし攻撃魔法を持つていたら厄介よね？非常に頭の切れる奴だから簡単には捕まえられないわ」（グレイス

「頭が切れるつて言うのが厄介よね？ヴァロットみたいな奴だったらお手上げよ？」（レヴ

そう言っている所へヴァロワがやってくる。

「さつき次元航行隊から連絡があつたよ、テロ組織『黒い旅団』が動き始めたと」（ヴァロワ

「黒い旅団つて……あの殺戮集団の？」（レヴ

「まさかもうロストロギアは黒い旅団に？」（山田

「まだ渡つては居ないと思う、どおやら大きな取引をするみたいだ。かなりの金を集めている。それとボスと側近らしき男が既にミッドに入ったそうだ。

取引をするのはミッドチルダ、テロの対象はクラナガン及び地上本部つて所だろうか？」（ヴァロワ

「捜査本部を移動しましょう、場所は地上本部、戦力の増強はスペシャルフォース、

108部隊、そしてスクールよ、八神本部長にも増援を仰ぎましょう」（レヴ

こうして事件はミッドチルダに降りてきた。

「何い？危険なロストロギアを取引だあ？」（ヴァロット）

スペシャルフォースにもスクールにも108部隊にも事件の概要と協力要請が来た。

そして捜査本部に集まる精鋭達、そこには八神はやて地上本部長、シグナム作戦指令室長、高町なのはスクール校長、ティアナ先生、クロスリード、ヒビキ、レヴ、山田、グレイス、ヴァロット、レット、ヴァロワ、ギンガ、スクラティという顔ぶれが揃った。

「……と言う訳で、この数日以内取引がされる可能性が高いです、なんとしてもそれを阻止し、ロストロギアを回収せねば成りません」  
（レヴ）

「で？そのロストロギアは一体どんな物なんや？」（はやて）

「盗難直前の調査報告によりますと、封印されている状態ではただの魔導書です。

しかし、その正体は巨大なモンスターらしいです。能力と言うか特徴は侵蝕系です。

魔導書を核コアに周りにある物全てを侵蝕し、喰らい尽くします。そして最後は星その物を喰らい尽くして他の世界に転移する。

恐ろしく厄介で攻撃しても吸収されてしまう事が多く、簡単には破壊出来ません。



封印が解かれてもまだそんなに大きくなっていない内なら再度封印も可能ですが、

ある程度成長されたらもう僕では手が付けられません」(ヴァロワ

「侵蝕系って……」(なのは

「そうや、第2次闇の書事件の時みたいになるって事や、

しかもあれより厄介そうな奴や、下手に封印を解かせるような事だけは出来へんで？」(はやて

「すぐに一般市民の避難をさせては？」(クロスリード

「そんな事したら気づかれてまうやろ？」(はやて

そう、そんな事したら情報が漏れていた事も、彼らを逮捕しようとして捜査している事もばれてしまう。

「とにかく、取引の現場を押さえて全員逮捕が鉄則や、少しでも情報の収集に当たって欲しい」(はやて

そう言った時だった。

一同の前にモニターが開く、

「よう、久しぶりだな、今クロノ総局長から厳命が下った。

SEALSと機動兵器部隊ラベルダは黒い旅団を殲滅する。

もし、ボス達の逮捕が出来たらこちらに引き渡して欲しい」(バロ

ー

ととうとう本局は厄介なテロ集団の殲滅に乗り出した。

「しかしなんやなあ？この10年管理局はもの凄いパワーアップしたなあ？」（はやて）

「ええ、これもスクールとあのヴァロットが居てくれたからここまですぐ良くなったのだと思います」（シグナム）

そう、伝説に名を刻む男に引つ張られ、管理局は頼もしいと思えるほどに良くなってきた。

そしてどんな厄介な犯罪も彼らがいればもう怖い物無しだった。

怪盗ジャヌヴィア登場（後書き）

次回：本格的な捜査が始まる。

## 準備（前書き）

「チームフォレストの交代はチームウィンドだ、今すぐ休息に入れ、体力の温存に努めろ、残りのチームは3交代でいつでも出撃出来るように準備しておけ、

最悪戦闘になればどれだけの被害が出るか分からん、今回はかりは俺も戦闘に参加する」（ヴァロット）

## 準備

「よし、今から24時間勤務態勢に移行する」(ヴァロット)

ブリーフィングの後スペシャルフォーは当直体制から、24時間の交代勤務態勢に移行した。

「ユウコ、チームフォレストは市内で取引の出来そうな所を重点的にパトロールしてくれ、

もし敵を捕捉したらそのまま張り込みを頼む、定時連絡を忘れるなよ?」(ヴァロット)

「了解しました」(ユウコ)

「チームフォレストの交代はチームウィンドだ、今すぐ休息に入れ、体力の温存に努める、残りのチームは3交代でいつでも出撃出来るように準備しておけ、

最悪戦闘になればどれだけの被害が出るか分からん、今回はかりは俺も戦闘に参加する」(ヴァロット)

矢継ぎ早の指示が出されていく、  
久しぶりに大きな事件、無事解決出来ればそれなりにボーナスUPだ。

こちらはスクール、

「1年生に実戦は無理でしょう?」(クロス)

「難しいわね、まだ実戦に出られるレベルじゃあないわ、だから……」

スクールの生徒は取引現場の一番外回りを警備します。  
108部隊の囲みを突破してくる犯人が居たらこれを各個撃破、逮捕します。

これならそれほどの危険はないでしょう？

もし、大規模な戦闘になる場合は一般市民の避難誘導をする事で話が付いています」(なのは)

「じゃあ、大規模な戦闘は？」(ヒビキ)

「スペシャルフォースが出る事で話が付いています。

大丈夫よ、彼なら、きつとこのクラナガンを守り抜いてくれる。

伊達にイージスと呼ばれていないわ、あなた達もその戦いを目に焼き付けなさい、

あの凄さは、彼がなぜ神をも超えると言われるのか？その真実を見届けると良いわ」(なのは)

「そんなに凄いですか？」(クロス)

「凄いという言葉さえ当てはまらないほどにね？」(なのは)

こちらは108部隊、既に部隊の精鋭達が市内のあちらこちらに散ってパトロールを開始していた。

「一刻も早く犯人達を逮捕しないと……」(ギンガ)

「焦るな姉上、敵も動けば必ず網に掛かる」(チンク)

チンクは安楽椅子に腰掛けたまま静かにギンガを諭す。

そう、部隊長が焦る態度を見せては成らない、あくまでも大きく構

えて報告を待つ、  
そして的確な指示を出してこそ部隊長なのだ。  
ギンガは今更ながらゲンヤの苦勞が身に滲みて分かった。  
部隊長とはこれほどまでに辛く苦しい物なのだ……

こちらは再びスクール、生徒達にもある程度の作戦内容が伝えられる。

「もしかしたら実戦になるかも知れない？」

その言葉にはやる気持ちを抑えきれない2年生、逆に途轍もなく緊張する1年生、  
そのギャップはいかんともし難い。

「良いか、戦闘になればスペシャルフォースが出てくる、巻き込まれないように市民を逃がすのが俺たちの仕事だ。何が有っても戦闘に参加しようと思うな、俺たちでは邪魔になるだけだ」(クロスリード)

その言葉は途轍もなく重かった。  
私たちは、実戦という言葉に戦慄した。  
もしかしたら本当に人を殺すかも知れない、目の前で人が死ぬかも知れない。  
考えただけで恐ろしい、でもそれがこの先私たちの将来なのだ。  
武装局員になれば必ず実戦は付いて回る。  
そこから逃げ出す事は許されない。

「ねえ、実戦になるって本当かな？」(リン)

「お姉ちゃん達はびりびりしてて声も掛けられなかった」(サクラ)

「スペシャルフォースが出るって事はあの人も出るのか？  
あの人の戦いが見られるのか？」（ジョン）

「何言ってるのよこの馬鹿は？あの人は部隊長だよ、簡単に前線まで出られる訳無いじゃない？」

あの人が出てくるって事は人造魔王事件クラスの大事件になるって事だよ？

そんなのあり得ないって、それにそんな大きな戦闘になったらクラナガンが無くなっちゃうよ」（リン）

「そこ、私語は慎め、取り敢えず自分の受け持ち地区にどれだけの人がいるか？」

どこへどう逃がすか？それをしっかり頭に入れておけ、犠牲者を出す訳にはいかないんだ」（ヒビキ）

こちらは捜査本部、

「人員の配置完了しました。緊急時の避難態勢もOKです」（グレイス）

「まあ、これで網に掛かるのを待つだけだね？」（ヴァロワ）

「取引の現場を押さえられる事が理想だけど、  
ジャヌヴィアか旅団のボスカどちらかでも先に押さえられれば事件は阻止出来る。」

何としても最悪の事態だけは避けないと行けないわ」（レヴ）

「大丈夫だって、最悪の事態になってもヴァロットが居るじゃん、  
あいつなら何とかしてくれるって？」（山田）



「そう言う他力本願は止めた方が良いわよ、もしもって事がないと  
は限らないから？」（レヴ

「みんながんばりつとる様やなあ？まあこれでも食べても少し頑張  
ってや？」（はやて

はやては手作りの料理で捜査本部を労う、もう自分の出る幕はな  
い、

既に実力ある若手達が活躍している。

もう、自分が口出ししなくても、して欲しい事は全てこなしている。  
今までの自分の経験も捜査のやり方も、彼らには敵わない、

一抹の寂しさを感じながらも、はやてはなのはの生徒達を温かく見  
守るのだった。

「アマネさん、暫くここを頼んだぞ」（ヴァロット

「部隊長、どちらへ？」（アマローネ

「多分今夜は空振り終わるだろうから、ちょっと一杯引っかけてく  
るよ」（ヴァロット

「この非常時に飲みに行かないで下さい」（アマローネ

「堅い事言うなって、そう簡単に尻尾を捕まえられる様じゃあ俺た  
ちの出る幕なんて無いんだから、

それにチームフォレストが動いている、心配しなくても大丈夫さ、  
連絡があつたら俺の所にも通信してくれればいい」（ヴァロット

頭痛い、アマローネはそう思いながら情報の収集に当たる。

と言っても部下から送られてくる通信を待っているだけなのだが、さすがにただ待つというのは退屈で忍耐のいる物だ。

暫くして、バー・モンサンミシエル

「マスター、ウィスキーロックで！」

カウンターの端っこ、出入り口に一番近い所で飲み始めたヴァロット、もういつもの光景だ。

## 準備（後書き）

次回：飲みに行ってしまったヴァロット、しかし事態はこの後急展開する。

## 包囲（前書き）

「他のチームは？」（ヴァロット

「チームファイヤは現場を囲むようにビルの屋上からの狙撃体制を取っています。

チームマウントは現場を囲むように配置、  
いざと成ればエマルジョンシールドを最大展開する体制です。

チームフリーダムは現場を囲むように配置、  
出てくる敵を全て殺害するように命令を出しておきました。

チームウィンドは、いつでも突入出来る体制です、中でチームフォレストと合流の手筈です」（アマローネ

## 包囲

「旦那あ、大きな事件ですかい？」（マルジナル

「何で？」（ヴァロット

「旦那が一人でここに来る時は必ず大きな事件が起きてる」（マルジナル

「なるほど来る客をよく見てる訳だ」（ヴァロット

「ヴァロットさん、一杯奢ってよ？」（ミレリ

「ああ、一杯だけだぞ？」（ヴァロット

「けち！」（ミレリ

カラン、と音を立てて氷が動く、

ここはヴァロットが隠れ家的に飲みに来るバーだ。

カウンターの端でウイスキーを傾けながら時々つまみを食べながら何かを考えている。

彼は纏まらない考えがある時、ここにやって来て酒を飲みながら思案を巡らせる。

スペシャルフォースは戦闘専門の精鋭部隊、決して犯罪捜査に向いている訳じゃあない。

本来は大規模テロや大規模災害の際に出動するスペシャルチームなのだ。

でも、今回は勝手が違う、不慣れな捜査、どこで行われるか分から

ない取引、

もし、取引が成立してしまえば、大規模な都市型テロを起こされるのは確実、

起こされてからではもう手の打ちようがないと来ている。

敵をどうやって炙り出すのか？

どうやってテロを未然に防ぐのか？

思案を巡らせるヴァロット、でも簡単には答えは出ない。

「旦那、そう言えば地球産の良い酒を仕入れてきたんですが1本どうです？」（マルジナル

「E・W・ハーパーにフォア・ローゼスか？を両方ともボトルキープで頼む」（ヴァロット

「まいど」（マルジナル

この取引には裏がある。

ヴァロットは伊達にこのバーに来ている訳じゃあない。

たかだかウイスキー2本の割に随分高い金額を要求される。

しかし、それは別の料金を含んでいるからだ。

渡された領収書の裏には、とあるマフィアの組事務所の名前と住所が書かれている。

「近日中にその事務所で大物テロリストが大きな取引をするそうです」

マスターはそつとそんな耳打ちをする。

そう、この店のマスターは裏の世界の情報ならどんな情報だろうと

仕入れられる人物なのだ。

「済まんな、マスター、恩に着るよ」(ヴァロット)

ヴァロットは支払いを済ませるとオフィスに移す。

「あつ部隊長、お帰りなさい」(アプリリア)

「すぐにチームフォレストを呼び戻せ、各チームを集めるブリーフィングに入る」(ヴァロット)

スペシャルフォースが全員集合する、これはかなりの緊急事態を意味する。

「……と言う訳だ、俺はこれから捜査本部に出向いた後、現場に向かう、

チームフォレストは中に潜入、情報の収集に当たれ、ジャヌヴィアが現れ次第包囲し殲滅する。

チームウィンドは突入要員、他は外へ逃げ出す奴らを殲滅せよ」(ヴァロット)

逮捕ではなく殲滅、それはその場で下手に封印を解かせない為にヴァロットが下した判断だった。

「じゃあ、打ち合わせ通りに」(ヴァロット)

そして彼は捜査本部に移す。

「……と言う訳だ、俺は今から現場で指揮を執る。

ヴァロワは俺と来い、万が一の時の封印を頼む、レヴ達は108部

隊とスクールに連絡、  
合図があり次第転移して現場を包囲するよう指示を頼む」(ヴァロ  
ット

「また美味しい所を持ってかれたわね？」(レヴ

「仕方ないよ、現場最強指揮官の前じゃあ私たちは手も足も出せな  
いし」(山田

「でも相変わらず酒臭いわね？」(グレイス

「じゃあ、頼んだぞ？」(ヴァロット

ヴァロットはそう言って転移していった。

その頃私たちは緊急の呼び出しを受けてスクールに集合だった。

「もしかして本当に実戦になるの？」(リン

「多分大丈夫じゃあないかな？

スペシャルフォースが既に動いているってお姉ちゃんが言った」  
(ツバキ

「避難誘導もしなくても良いかも？」(ナギ

「私たちスクールは取り敢えずプラン1で動きますが、  
現場がどのように動くか分かりません、  
すぐにプラン2に移れるように現場での通信には細心の注意を払う  
ように」(なのは



いよいよ大捕物が始まる。

いや、虐殺と言うべきか？

そして、この捕り物は更に大きな戦いを呼び寄せる事になる。

その時まだ誰もこの先の事態など予測出来ていなかった。

「スペシャルフォースの戦闘ってどんなだろうな？」（ジョン

「相当凄いらしいよ、ただ周りの被害も半端無いらしい」（ブラン  
トン

「巻き込まれたら恐らく死ぬな？まあ安全な所から見ている方が良  
いんだろうけど？」（バランタイン

俺たちはそれがどれ位凄惨な作戦なのか？まだ知る由はなかった。  
それを目にした時、あの人の怖さを心の底から味わう事になる。

このスクールに入って実戦を経験するかも知れないという事は覚悟  
していたけれど、

まさかこれほど早く実戦に成るとは思わなかった。

そして、目の前で人が死ぬという現実を嫌と言うほど味わう事にな  
る。

こちらは現場、

「どうだ？」（ヴァロット

「既にチームフォレストが潜入しています、先ほど連絡がありました。  
た。

組長以下幹部と旅団の関係者らしき人物は全て確認したそうです。  
ですが、まだジャヌヴィアが現れていません、

取引の準備から想像するに、今夜取引を行うようです」(アマローネ

「問題はジャヌヴィアだな？どんな姿形をしているのか？誰にも想像が付かない、

もしかしたら来ているのかも知れないし、来ないのかも知れない、奇想天外な方法で現れる事も考えられるから注意は怠るなよ？」(ヴァロット

「了解しました」(アマローネ

「他のチームは？」(ヴァロット

「チームファイヤは現場を囲むようにビルの上からの狙撃体制を取っています。

チームマウントは現場を囲むように配置、いざと成ればエマルジョンシールドを最大展開する体制です。

チームフリーダムは現場を囲むように配置、

出てくる敵を全て殺害するように命令を出しておきました。

チームウィンドは、いつでも突入出来る体制です、中でチームフォレストと合流の手筈です」(アマローネ

「まあ、妥当だろう？」(ヴァロット

包囲（後書き）

次回：突入作戦が開始される。

## 突入！（前書き）

突入の合図の瞬間、スペシャルフォースを囲むように108部隊の精鋭が、

更に外側を囲むようにスクールの生徒達が転送されてくる。作戦はここまでは完璧だった。

突入！

それからどれ位の時間が経ったのだろうか？

組長達はイライラとジャヌヴィアが来るのを待っていた。

もう予定時刻を過ぎていているようだ。

まだ誰もやってくる気配がない。

組事務所の前では二人の門番が誰か来ないかと見張りを続けている。

このマフィア達、取引を仲介してその手数料をしのぎにしているのだ。

でも、仲介をすると言う事はそれだけ情報が漏れやすくなる。

だから、その情報が裏社会を通じてヴァロットの所に渡ったのだ。

「まだか？ ジャヌヴィアは？」

組長も焦る。

だが、その時だった。

「僕ならもうとっくに来ていますよ、昨日から」

どこかで声がした。

辺りを見回すが特段変わった様子はない、全員が部屋の中を見渡す。

「もう、嫌だなあ目の前に居るのに……」

声がしたのは椅子だった。

そう、この日に合わせて準備した応接セット、

彼？はその椅子に化けていたのだ。

そして昨日から既にこの屋敷にいたのだ。

(なんて変身能力、私たちでも気が付かなかった)

ユウコ達はそう思った。

そして、取引を見守る。

どんな事をしても無事にロストログアを回収しないと行けない。  
物が取り出される瞬間を見守る。

ジャヌヴィアが姿を現す。

黒のタキシードに黒の山高帽、裏が赤い黒のマント、  
思ったより体の線は細い。でもその姿とてジャヌヴィアの素顔とは  
言い切れない。

顔は縦に半分黒く半分白い仮面で隠している。

男なのか女なのかさえ分からない。

ただその雰囲気からただ者では無いかかなり狡猾な奴だとはつきり分  
かった。

そして彼は懐から通信デバイスを取り出すと机の上に置く、

組長も、組織のボスも通信デバイスを取り出す。

そう、殆ど電子マネーのミッドチルダでは、こうやって現金の受け  
渡しをする事が多い。

特に多額の現金となると持ち運ぶだけで嵩張るし、重い、万が一の  
時の逃走には邪魔になる。

だから、こうやって決済するのだ。

まずは決済を確認、今度は懐から透明なケースに入った魔導書を  
取り出した。

「この場で封印を解かないで下さいよ、

調べた限りでは100m以内ぐらいはあっという間に食われちゃうみたいですから？」（ジャヌヴィア

（よし、ブツを確認した。作戦開始！）（ユウコ

「突入！」（ヴァロット

その瞬間、一迅の風が組事務所の玄関を通り抜けた。

二人の門番はお互い顔を見合わせた瞬間、お互いの首に大きな傷が出来ている事に気が付いた。

でも手遅れだった。そこからは激しく血を吹き出し、玄関を真っ赤に染めて倒れた。

突入の合図の瞬間、スペシャルフォースを囲むように108部隊の精鋭が、

更に外側を囲むようにスクールの生徒達が転送されてくる。

作戦はここまでは完璧だった。

作戦開始の瞬間、背中を一太刀され倒れる組長、それだけでなく

組織のボスも側近らしき男も、

組員も、ジャヌヴィアも斬られた。

既にチームフォレストに囲まれていたのだ。

霞技を使っていた為誰も後ろにいる事に気が付かなかった。

ユウコが魔導書に手を掛ける。

その瞬間だった。

ポンッ

小さな爆発音と共にケースが破裂する。

ジャヌヴィアはケースの中に小型の爆薬を仕掛けていた。

そう、万が一の為にケースに細工がしてあったのだ。ケースが割れ、その上に封印が解けかけた。もの凄い魔力がわき起こる。

「いけない、全員待避！ここから先は封印術者に任せる」

待避しようとした瞬間気が付いた、既にその場にジャヌヴィアの姿がなかった。

ジャヌヴィアは死んではいなかった。

いや、よく見れば血糊は本物じゃあない、偽物だ。

最初から斬られたふりをして倒れた演技をしていたのだ。

そして一瞬の間を突いて脱出、逃げられてしまった。

だがゴウコ達もぐずぐずしていられない、巻き込まれたら自分たちも終わってしまう。

チームウィンドと合流すると一目散に逃げ出す。

この場合は既に危険すぎるのだ。

「不味いな、行くぞ！」（ヴァロット

ヴァロットとヴァロワが現場に突入する。

その頃スクール、突入直後、ふらふらと事務所から出てくる組員達、

どうやら逃げようとしていたようだが、108部隊もそんな組員に取り合わない、

そしてそれはジョン達の前までやって来た。



その瞬間、体に赤い線が走る。

一人は真つ二つに、一人はバラバラの肉塊に変わり果てた。既に死んでいたのだ。

「何だよこれは！逮捕するんじゃないのかよ！？  
こんな酷いやり方があるのかよ！？」

声を荒げるジョン、その横では何人かの女子が卒倒していた。あまりに凄まじい状態、とても人のやる事ではなかった。いくら作戦とはいえ、人として許されない事をしている。ジョンはそう思った。

あの人の近くで働きたいと言う憧れは音を立てて崩れた。ただヴァロットへの怒りだけが湧き起こる。

「校長より通達、現場の状態が悪化しました。  
これよりプラン2に移行します。

全生徒及び108部隊は避難誘導を開始して下さい」（なのは

現場はもうそれどころではない。  
今まさに最大の危機が訪れようとしていた。

突入！（後書き）

次回：魔導書の化け物とヴァロットの死闘、一方、黒い旅団は報復の為全軍を上げて総攻撃してくる。

さあ、このピンチどう乗り切る？

## 死闘（前書き）

その時だった、月軌道に巨大な要塞が現れる。

他にも中型の攻撃戦艦15隻、そして夥しい数のガシエットドローン2型、数十万機はいる。

それは絶望的な光景だった。

味方の船じゃあない、見た事もない軍団だった。

とても穏やかに済みそうにない、相手は攻撃態勢を取っているのだ。



チユドオオオオオオオオオオオオ

「えっ、効いてない？」（なのは

「効いていないんじゃない、吸収されましたね？」（ヴァロット

化け物は更に巨大化を始めていた。

「恐らく、物理攻撃や直射型の魔法は全く効かないでしょう？」

ただ見て下さい、海水や空気は侵蝕されていない、

まだ侵蝕するだけの力が出せていないようです、仕留めるなら今の内です」「（ヴァロット

「仕留めるならってどうやって？」（なのは

「ヒントは水と空気です、簡単には侵蝕出来ない物なら攻撃に使えます」「（ヴァロット

「私の出る幕はなさそうだね？」（なのは

なのははそう言って帰っていった。

「まったく余計な事をしてくれたなあ？アプリリア、召喚！」

召喚されたアプリリア、そうヴァロットにとってそれは最後の切り札だった。

元来、水系、風系の術者は非常に少ない、召喚士よりも貴重だったりする。

作戦に必要な術者で、そこまでの魔力を持った者は皆無に等しかった。

「アプリー、あれをやるぞ?」(ヴァロット)

「了解!」(アプリリア)

「ユニゾン・イン」(二人)

これが最後の切り札、ユニゾン・イン、アプリリアの能力は、ロードに風と水の攻撃魔法を与える事だ。この状態でヴァロットはリミッターを解除する。ミッド全体を振るわせるほどの巨大な魔力が巻き起こる。バリアジャケットが消え背中に風の翼が形成される。

「ウォータースラッシュ!」(ヴァロット)

何かが通り抜けた瞬間、化け物の足が鮮やかに切り落とされる。そう、圧縮した水で斬ったのだ。

極限まで圧縮された水はダイヤモンドすら滑らかに切り裂く、今まさにヴァロットは無敵の剣と最強の盾を手に行っているのだ。

でも、化け物は切り落とされた足すら侵蝕し融合する。あつという間に再生した。

「くそ、これじゃあ埒が開かない」(ヴァロット)

結局、増援の魔導士達は役に立たず、遠巻きに見守る事しかできなかった。

その時だった、月軌道に巨大な要塞が現れる。

他にも中型の攻撃戦艦15〜16隻、そして夥しい数のガシエット

ドローン2型、数十万機はいる。

それは絶望的な光景だった。

味方の船じゃあない、見た事もない軍団だった。

とても穏やかに済みそうにない、相手は攻撃態勢を取っているのだ。

「クラナガン周辺の全魔導士に次ぐ、飛べる者は全員成層圏まで上昇しろ、

敵を迎撃する。召喚士は何としてもクラナガンを守り抜け、

一発たりとも地上に砲撃を落とさせるな！」（シグナム

シグナム作戦指令室長自らが指揮に乗り出した。

「ブラシカ発進！これより迎撃に向かう！」（アマローネ

ブラシカが衛星軌道にまで飛び上がってきた。

たった1隻の戦艦と数千人の魔導士、数の上でも絶望的に不利だった。

敵のガシエットがブラシカに向けてミサイルを放つ、

そう、ガシエットドローン2型は背中に8発のミサイルを搭載している。

ブラシカのバスター砲が火を噴く、その威力に飲まれたミサイルが爆発する。

ただ普通の爆発じゃあなかった、あまりに巨大な爆発、巻き込まれたミサイルやガシエットも消えて無くなる。

「ただのミサイルじゃありません、反応消滅弾です！

あんなのが近くで爆発したら一般の魔導士達では全滅してしまう！」

（グリフィス

「全砲門開け！撃って撃って撃ちまくれ！弾幕を切らすな！

ミサイルを船に近付けさせるな！発射される前にガシエットごと消してしまえ！」（アマローネ

「うおっ、あぶねえ！」

化け物は腹の下からのばした触手を海中からヴァロットに向けて伸ばしてくる。

まるで直射砲か鞭のような攻撃、下手に喰らえば侵蝕されて自分が終わる。

攻め倦ねるヴァロット、絶望的な迎撃を強いられるブラシカ、まともな迎撃さえ出来ない魔導士部隊、状況はどんどん悪化していく、

せめて魔導書だけでも片付けられればヴァロットが何とかしてくれるだろう？

でも状況がそうさせてくれない、状況は刻一刻と悪くなっていた。

（くそっ、こいつを早いこと片付けない事にはミッドが終わってしまっ！）（ヴァロット

今までにない焦りを感じるヴァロット、ミッドはかつて無い危機を迎えていた。



## 死闘（後書き）

次回：絶望的な戦いの中でそれでも何とか持ちこたえるブラシカ、

そんな中で一発の反応消滅弾がリン達の前に落ちてくる。

その危機を救ったのは？……起死回生の反撃が始まる。

## 形勢逆転（前書き）

それはあまりに圧倒的だった。

ブラシカのバスター砲と同等の威力を持ったバスターキャノンをつ放すザク達、

その軸線付近にいたガシエット達は一瞬で消滅する。

1発で数百から数千のガシエットが消えて無くなる。

そこへストライクガンダムと、ストライクルージュが加わって圧倒的な攻撃力で

ガシエット達の群れを消していく、既に形勢が逆転していた。

## 形勢逆転

「くそつ、簡単には攻められない！」（ヴァロット

元々召喚士でフルバックのポジションにいる彼にとって、直接敵を攻撃する魔法なんて持ち合わせていない。

アプリリアによって与えられる魔法もあまり上手く使えていないのが実情だ。

いくら攻撃魔法を与えられても違うポジションで使うという事には慣れていない。

でもやるしかない、彼以外にこんな化け物と戦える者などいないのだから。

ブラシカも絶望的だった。

エマルジョンシールドは邪魔になるので極限まで小さくして、補助魔法陣のみで船体を防御している。

その上で砲撃戦を行っている。

じり貧状態だった。

航空魔導士達はいくら砲撃をぶつ放しても衛星軌道まで届く者は殆どいない、

やはり超長距離の砲撃なんて出来るのはごく限られた魔導士だけだ。

でも、そんな中にいた、とんでもない長距離を砲撃出来る魔導士が……

「こちらエリカ、前方の魔導士！巻き込まれなくなかったら砲撃のコースを空けなさい！

衛星軌道上の敵を狙い撃つ！」（エリカ

そう、こう言う時の為に開発された新魔法があるのだ。

「ハイパアアアアアアアレールキャノン・エクステンション、フ  
アイアアアアアアアアアアッ」

エマルジョンコレクトのシールドと補助魔法陣を一直線に並べ、  
それを電磁力で包んで巨大なレールガンを形成、

それを自分のレールガンで撃ち抜く事で超長距離砲撃を可能にした  
砲撃魔法だ。

地上から放たれたその一撃は大気圏を突き抜け敵の攻撃戦艦に命中、  
一瞬で大破轟沈した。

（魔力が足りない、撃てるのは後5発か？全て打ち落とす事は不可  
能ね？）（エリカ

「凄い、なんて戦い」

スクールの生徒はそのもの凄い戦いを見ている事しかできなかった。

地上に落ちてくる砲撃やミサイルは召喚士が何とか宇宙へ転送して  
持ちこたえている。

でも、何時までも魔力が持つはずもなく少しずつ魔力を削られてい  
る。

敵の方も少しだけその数が減ったとは言えまだまだもの凄い数だ。

「せめてブラシカがあいつらの中に飛び込めれば形勢が逆転するか  
も知れないのに！」（アマローネ

だがここでミッドの盾になる以外に方法がない、もしここでその

役目を放棄してしまえばミッドが、  
クラナガンが終わってしまう、自分の愛する人たちがみんな死んで  
しまう、  
ブラシカは絶望的な状況の中で耐えるしかなかった。

それでも激しさを増すミサイル攻撃、討ち漏らしたミサイルを召  
喚士達が宇宙へ転送している物の、  
その数をだんだん捌ききれなくなってきていた。

「しまった」

その一発を捌き損ねて、補助魔法陣の間を抜かれた。  
ミサイルが地上に向かって落ちていく、クラナガンのど真ん中に向  
かって……

「えっ、ミサイル？」（リン）

反応消滅弾がこんな所で爆発したら、その一発でクラナガンが消  
えて無くなる。

もうミサイルは目の前に迫っていた。

「も、もうだめだ！」（ジョン）

その瞬間だった。

誰かの飛ばした補助魔法陣がミサイルを飲み込んだ。  
そして目の前に現れたのは巨大な転送魔法陣、中から現れたのはス  
トライクガンダムI W S P

「危ない所だったわね？」

女性の声だった。

凛々しく力強い女性の声、私は救いの女神だと思った。  
そしてストライクガンダムはまた転送魔法陣をくぐる、宇宙での戦いをする為に。

「遅れて済まん、我々SEALSとラベルダは黒い旅団を殲滅する！」（ネロ）

「魔導士部隊はミッドの防衛に当たれ、成層圏ギリギリから破壊出来るミサイルを全て打ち落とせ、  
突破されたら奴らのど真ん中に転送してやれ！総員出撃！」（バロ）

「機動兵器部隊発進せよ！」（ネロ）

「何だあの巨大ロボットは？管理局法違反だろ！何で質量兵器なんか持って居るんだ！」（旅団指揮官）

「全機掃射開始！」（フィノ）

それはあまりに圧倒的だった。

ブラシカのバスター砲と同等の威力を持ったバスターキャノンをお放すザク達、

その軸線付近にいたガシエット達は一瞬で消滅する。

1発で数百から数千のガシエットが消えて無くなる。

そこへストライクガンダムと、ストライクルージュが加わって圧倒的な攻撃力で

ガシエット達の群れを消していく、既に形勢が逆転していた。

「この場は任せました、私は残りの戦艦を落とします」（フィノ）

フィノは残り10隻の中型戦艦に狙いを絞った。  
既に6隻、エリカの砲撃で落とされ、旅団の戦力はかなり低下して  
きた。

次々と戦艦が落とされていく、対艦刀に切り裂かれ、  
巨大な砲撃に撃ち抜かれてあつという間に10隻とも撃沈した。

今までの管理局だったらここまでの攻撃には耐えきれなかっただ  
ろう？

でも、今は違う、平和を守る為に鍛え上げられたスクールの卒業生  
達が居る。

そしてこれだけの攻撃に曝されたにも関わらず、今のところ何の被  
害も出ていない。

「唸れ！風の障壁！」（ヴァロット）

ヴァロットは強力な竜巻を放つ、竜巻は化け物を飲み込んで空中  
に巻き上げた。

流星の化け物も風を浸食する事は出来ない、手も足も出せなかった。

「消滅結界陣！」（ヴァロット）

竜巻ごと消滅結界陣に閉じこめる。

そして結界陣から下に向かって放たれる光線、すぐ下に次元断層が  
開く。

「墜ちろ！奈落の底に！」（ヴァロット）

化け物は次元断層に飲まれて消えた。





「あんなデカイのどうやって吹き飛ばすのよ？」

そう、このまま破壊してもその巨大な残骸は落ちてくる。今度こそどうしようもないかと思った。

その時、地上本部ビルの屋上から放たれる巨大な魔法、白銀の光は火の玉を飲み込むと跡形もなく吹き飛ばした。

「なんて馬鹿魔力！」（クロスリード）

そう、八神はやて地上本部長だった。

その圧倒的な砲撃は巨大要塞をも物ともせず吹き飛ばす。

「なんて化け物！」（ジョン）

八神本部長はロード・オブ・ザ・魔王なのだ。

この程度の要塞など彼女にとって単なる張りぼてでしかない。

一瞬で木っ端微塵、まさに殲滅兵器だった。

誰もがその凄さに息をのむ、（この人を怒らせてはいけない）地上本部の職員達は、改めてその恐怖を思い知る。

## 形勢逆転（後書き）

次回：久しぶりに集合する卒業生達、ヴァロットに食って掛かるジョン、

その場で厳しい指導が成される。一方リンは……

## 指揮官たる者（前書き）

だが、そんな考え方をしているようでは指揮官研修には合格させてやれんな、

恐らく、そいつが指揮官ならあつという間に部下の命を奪われ、後悔という地獄に堕ちるだろう？もっと大人になれ、もっと広い視野で物を見る、

それが出来なければお前は指揮官には成れん、武装隊の平隊員ぐらいで丁度良いんだ

## 指揮官たる者

こうして事件は終わった。

ミッドに、クラナガンに何の被害も出さずことなく終わりを迎えた。今衛星軌道では、残骸の回収やら不発弾の処理やらが続いている。それももうすぐ終わりそうだ。

次元航行隊のキャノーラ、ラベルダは上空に停泊、ラベルダの一部の小隊が後片付けをしている所だ。

私たちはスクールの海上訓練施設に移動する。

108部隊やスペシャルフォース、SEALSの魔導士も集合だ。

ブラシカと、あのストライクガンダムも降下してくる。

2機のザクも護衛に付いている。

ブラシカは訓練施設の隣に停泊、

3機の巨大ロボットはそのまま訓練施設に着陸した。

そしてパイロットが姿を現す。

護衛の二人はグリーンのパイロットスーツ、

指揮官の人は白のパイロットスーツだ。

ヘルメットを取った瞬間驚いた。

全員女性だった。

そして指揮官の女性はとても凛々しくて美しかった。

思わず私の胸は早鐘が鳴る、雷に打たれたような衝撃が通り抜けた。

そしてその場で校長先生から訓辞がある。

「皆さん、今夜はご苦労様でした、お陰で被害を出すことなく事件を解決する事が出来ました。」

明日は1日休養日とします。なお、皆さんは囑託魔導士扱いで後日  
日当が出るそうです」（なのは）

「みんな済まなかった。俺の作戦ミスだ。  
もつとスマートにロストロギアを回収していればここまでの戦闘に  
は成らなかつたと思う。

チーム編成に配慮が足らなかつた」（ヴァロット）

最強の指揮官はそう言つて頭を下げた。

でも、あれは仕方の無かつた事、敵の方が1枚上手だつただけの事  
なのだが、

それでも自分に非があると責任を謝罪という形で取るヴァロット1  
佐、

指揮官の鏡と言える姿勢だつた。

だがそのヴァロットに食いついた奴が一人、ジョンだつた。

「何がスマートにだ！あれじゃあただの虐殺だ、ただの人殺しじゃ  
ないか！

ザコまで殺す事はないだろう！やる事が滅茶苦茶じゃないか！

犯罪者にだつて人権があるだろうが！」（ジョン）

「黙れ！」（クロスリード）

いきなりジョンを殴り倒したのはクロスリードだつた。

「一番苦渋の選択をしているのはヴァロットさんだ、

指揮官の何たるかも知らないヒヨッコが吠えるんじゃねえ！」（ク

ロスリード）

「おい、そこ喧嘩するな、確かにそいつの言う事も分かんでは無い、  
だが、そんな考え方をしているようでは指揮官研修には合格させて  
やれんな、

恐らく、そいつが指揮官ならあつという間に部下の命を奪われ、  
後悔という地獄に堕ちるだろう？もつと大人になれ、もつと広い視  
野で物を見る、

それが出来なければお前は指揮官には成れん、武装隊の平隊員ぐら  
いで丁度良いんだ」(ヴァロット)

それはあまりに厳しい一言だった。

恐らく自分はもう指揮官研修にさえ受からないだろう？

後3週間で言われた事が出来なければもう落ちこぼれは確定だ。

そして一生平隊員のままの人生が確定してしまう。

「お前に一つ聞く、あの場で最も優先されるべき事は何か答える！」

(ヴァロット)

「優先されるべき事？」(ジョン)

「そつだ、全てに於いて最優先されるべき事だ」(ヴァロット)

「仲間の命？それとも犯人の逮捕？」(ジョン)

「不正解だ。もつと広い視野を持ってと言っているのが分からないか

？」(ヴァロット)

まだ分かっていないジョン、それは指揮官として最も大事な事、  
自分の命に代えても絶対に守らなければ行けない事だった。

「最も優先されるべき事は一般市民の安全だ。それが確保出来ない現状では、非情な手段もやむを得ない。市民の安全を最優先しつつ、部下の被害を防ぎ、なおかつ安全に作戦を遂行する。」

それを考えられない限りは指揮官としてやっていけないんだ」(ヴァロット

そう、あの状況で市民には全く被害が出ていない、それどこか作戦に参加した隊員全て無傷だった。

ヴァロット達は一般市民どころか味方全てに被害が出ないように作戦を遂行していたのだ。

しかも途中から激しい戦闘になったにもかかわらず、それで居て被害を最小限に抑え、

なおかつ全ての作戦を無事に終了していた。

それはヴァロットの力だけじゃあない、このスクールを卒業した先輩達全ての力だった。

例えばどんな敵が来ようとも、このスクールの卒業生が居る限り絶対に平和を守り抜いてみせる。

彼らは卒業の時そう誓い合った。

その誓いを何時までも守り続けているのだ。

「お前、覗きが大好きだろう？」(ヴァロット

「なっ」(ジョン

「お前の心は覗き穴と同じなんだよ、視野が狭くて小さい、そんな事じゃあいつまで経っても大人には成れんぞ、

覗くんじゃなく堂々と女湯に入っていくぐらいの度胸がなければだめだ。」

もつと広い視野で物を見なければいつまで経っても真実は見えてこない、  
もつと広く遠い所まで物を見なければ自分の殻は破れない」(ヴァ  
ロット

ジョンにとってそれは最も効果のある指導だったかも知れない、  
ジョンは自分の有り様を看破され、返す言葉すらなかった。  
ヴァロットの相手を見抜く力に自分の至らなさを嫌と言うほど味合  
わされていた。

その頃、フィノに近づく人物が一人、リンだった。

「あ、あのー、先ほどは助けて頂きありがとうございます！」

元気よく礼を言うリン、そこまでは良かった。  
でもなぜか赤い顔をしている。

「あ、あのー、それですすね……これからあなたの事を……お姉様  
と呼ばせて下さい！」

リン、百合に走った。



**指揮官たる者（後書き）**

次回：事件の総括と打ち上げが行われる。その席で……

## 打上（前書き）

同日夕刻、地上本部大ホール

前の晩の戦闘を労う為の打ち上げだった。

でもなぜか人数が多い、飲み会があると言っただけで紛れ込んでいる困った職員も多い。

## 打上

「明日の夕方今回の事件の打ち上げをやります。参加出来る人は参加して下さい」（なのは）

「やった、お姉様とお近づきになれる」（リン）

その夜はそうして解散した。

翌朝、捜査本部

「じゃあ、結局ジャヌヴィアに逃げられたのね？」（グレイス）

「済まない、あそこは確実に首を刎ねるか突き刺すよう指導しておくべきだった。

まだ確実性が足りなかったな？」（ヴァロット）

「でも、取引相手は死亡、やくざの組は一つ潰せた訳だし、それなりの成果はあった訳だ？」（レヴ）

「しかしなあ、あんな厄介な物を持ち込んでくれるなよ？俺でも手こずったぞ？」（ヴァロット）

「私だってあそこまで厄介な物だとは思わなかったわよ？殆ど調査のされていないロストログアだったし」（レヴ）

「僕の調査によるとですねえ、

あれは食べて食べて食べて食べ尽くしたいという欲望を極限まで増幅して具現化した物で、

名付けるなら欲望の書とでも呼びましようか？最終的には世界その物を食べ尽くしてしまう。

実に厄介な物です。もう少し成長していたら海を吸い尽くしもっと巨大化していたでしょう？」

ヴァロワの報告に全員呆れ顔だった。

後にこの事件は「欲望の書事件」と呼ばれるようになる。

「所でバローロ達はどうするんだ？」（ヴァロット

「俺たちは明日から旅団の残党狩りにはいる。

元々かなりの戦力を保有していた事はつかんでいたが、情報よりも戦力が大きすぎる。

どこであるガシエットを製造していたのか？

反応兵器の入手先や、その金の出元などを探る必要がある」（バローロ

「でもなぜ旅団の連中はあそこまでタイミング良く攻めてこられたんだ？」（ヴァロット

「ああ、司法解剖の結果ボス達に生体反応センサーが埋め込まれていた事が分かってる。

つまり、心臓が止まればすぐに報復に来られる手筈だったんだ」（バローロ

「しかし、ネロ達には美味しい所を持って行かれたなあ？」（ヴァロット

「当然だ、あそこで目立たなくてどうする。

機動兵器部隊の存在意義を示すには最高の舞台だった。

これでもう少し予算を増やしてもらえそうだ」(ネロ

「ちゃっかりしてるわねえ？」(山田

こうして事件の総括がなされ、欲望の書事件は終結した。

同日夕刻、地上本部大ホール

前の晩の戦闘を労う為の打ち上げだった。

でもなぜか人数が多い、飲み会があると言っただけで紛れ込んでいる困った職員も多い。

それだけじゃあなかった、引退したとはいえあの酒乱大魔王も紛れ込んでいた。

打ち上げが始まる。

「みんな、昨日はご苦労さんやった、今日は思いっきり飲んでな？」  
(はやて

そして出された料理に舌鼓を打ち酒を口にする。

スクールの生徒達はお酒厳禁なのでジュースではある物の打ち上げに参加していた。

「校長先生凄い飲みっぷり！」(サクラ

「お姉様はどこ？」(リン

その一角では提督服を着た何人かと、フィノが歓談していた。

そう、そこには八神はやて本部長を中心に、ネロ、フィノ、ヴァロ  
ット、

バローロという出世著しいスクールの卒業生達が揃っていた。

「カトリーヌは随分パワーアップしたなあ？見た目も随分変わったし」(ヴァロット)

「そうね？でもストライクガンダムが一番効率が良いのよね？

オプションパーツが充実してるし、TPOに合わせてオプションを交換すればどんな作戦にでも対応出来るし、

なんと言ってもワンタッチでパーツ交換が可能だから楽なのよね？」  
(フィノ)

「なあ、あの機動兵器一機幾らするんや？、お安くなるんか？」  
はやて

「何を考えて居るんですか？本部長？」(ネロ)

「いやあ、航空防衛隊に5機ほど導入出来たら良いかなって思ったんやけど……」(はやて)

「結構高いですよ、ガンダムシリーズだと大体これ位」(フィノ)

「計算機を取り出してはやてに見せるフィノ、それを見てはやてが目丸くする。」

「そ、それはあかんで予算オーバーや、もっとお安くならんのかいな？」(はやて)

「ザクならガンダムシリーズの3分の2ぐらいですが」(フィノ)

「そ、それでも予算が全然足りへん、きつついわあ、

クロノ君本局で調達してこっちに5機ほど回してくれんかなあ？」「  
（はやて

「あ、あのう……」（リン

私は声を掛けようとした物の、話しについて行けず声も掛けられ  
なかった。

どおやらあのロボット兵器を導入する話らしい。

「あら？あなたは昨日の？」（フィン

「はい、リン・ヤマザキです！」（リン

お姉様は覚えていてくれた。

嬉しかった、もの凄く、これはもしかしたら付き合って貰えるかも  
……

ぐにっ、モミモミ

「へっ？……？」

「うーん、84のCって所かな？」（はやて

「きゃああああああああああっ！」（リン

「あゝるゝじゝ、またセクハラをおおおおおおお！」（シグナム

そして追いかけっこが始まる。

「な、何なの？あの人？」（リン

「許してやってくれ、あれでも一応本部長だし」(ヴァロット)

「何なんですか？あの人とは？」(リン)

「まあ、あれはあの人なりのスキンシップだ、気にするな」(バロ  
ーロ)

よく見ればみんな提督服を着た人たちばかり、この一角は凄い人ばかりが揃っていると改めて気が付いた。

「所でおまえ、将来は機動兵器部隊に入りたいのか？」(ネロ)

「この子には無理だろう？召喚士じゃあないし、ユニゾン適性も無  
さそうだしな？」(ヴァロット)

「ユニゾン適性？」(リン)

「あれはな、機械じゃあないんだ、モビルスーツ自体は着ぐるみで  
な、中に召喚獣が入って居るんだ」(ネロ)

「ええっ？」(リン)

だから管理局法に違反しないんだ？

私は機動兵器部隊が何故存在出来るのか？何故堂々と違反している  
のか疑問だったけど、

その疑問の全てが無くなった。

召喚獣なら管理局法には違反しないし、それに簡易デバイスを持た  
せているだけなら傀儡兵と何も変わらない。

見た目に迫力があるし、強いし格好いい、それにコクピットに入れ



るといのがアイディア賞物だと思う。  
あれなら激しい戦闘だって耐えられる。

「所でさあ、おまえら家に帰らなくて大丈夫か？子供達に寂しい思  
いをさせるのは良くないぞ？」（ヴァロット）

「大丈夫だ、交代で帰っているし、うちは数多くの使用人が居るか  
らな、子供達に寂しい思いはさせてないよ」（ネロ）

「子供って？」（リン）

「なんだ知らなかったのか？この二人は夫婦だ、子供も3人いる」  
（ヴァロット）

「そ、そんな……」（リン）

その一言は私を奈落の底へ突き落とした。

大好きだったのに……まさか旦那が居たなんて、まさか子供まで居  
たなんて……  
目の前が真っ暗になった……

リンの恋は1日で散った。

## 打上（後書き）

次回：新章突入、各試験に向けて努力する生徒達、そして模擬戦大会も迫ってくる。

## 挫折（前書き）

ジヨンはすっかり分からなくなった。

最初は強くなってインターカップで優勝してバラ色の人生を……と  
考えていた。

でもそれは甘かった、甘い妄想でしかなかった。

自分がどれだけ小さい人間なのか思い知らされた。

自分の馬鹿さ加減に呆れて言葉もなかった。

打上の時も仲間の中に入っていけず、ずっと一人隅っこの方で落ち  
込んでいた。

## 挫折

俺、何でこんな場違いな所に居るんだろう？

ただ強くなる為だけにこのスクールに入ったのに、いつの間にか指揮官目指して、それも叶わなそうで、この先何をやったら良いんだろう？

ジョンはすっかり分からなくなった。

最初は強くなつてインターカップで優勝してバラ色の人生を……と考えていた。

でもそれは甘かった、甘い妄想でしかなかった。

自分がどれだけ小さい人間なのか思い知らされた。

自分の馬鹿さ加減に呆れて言葉もなかった。

打上の時も仲間の中に入っていけず、ずっと一人隅っこの方で落ち込んでいた。

「俺、あの人の足下にすら追い付けない気がする」

初めて口にした弱音、初めて味わう挫折、その味はあまりに苦く苦しい物だった。

「おまえの心は視野が狭くて小さい、覗き穴と同じだ」

ヴァロットの言葉が胸を抉る。

そう、入学した時から周りの女の子が気になって覗きまで始めてしまった。

そうやっている内に周りにどんどん置いて行かれ、気が付けば一番の落ちこぼれになっていた。

「こんな筈じゃあ無かったのに」

そう口にして更に落ち込む、あの事件の夜、犯人達を簡単に殺してしまつたヴァロット1佐、それを酷いやり方だと罵つた物の、それは本当に周りが見えていなかった。

もし犯人達が武器を取って反撃したら？もし外へ逃げ出した犯人達が人質を取ったら？

例えばバインドで縛り上げたとしても、魔導書が暴走すればその縛り上げた犯人達を救助しなければ成らない。

結局部下を危険に曝す事になる。全て指揮官適性試験の参考書に書いてあつた。

そしてヴァロット1佐は、教科書通りの事をこなしているに過ぎない、

あくまでも冷静に、かつ冷徹にそれをこなしているに過ぎなかつた。

「俺どうやったら強くなれるのだろうか？どうやったらもっと大きな人間になれるんだろう？」

激しく落ち込み悩む少年を目に留めたのはレティだつた。

彼女はこの打上に紛れ込んで暴れる魂胆だつたのだが、一人落ち込む彼を見過ごせなかつた。

彼にそつと声を掛けてみる。

「何故そんなに落ち込んでいる、少年？」

ジョンはぽつりぽつりと話し始めた。

「なるほど、そんな事が……でもね、それはまだ許される事よ、同じ失敗を二度繰り返さなければいいの、」

あなたはただ怒られて落ち込んでいるだけよ、あなた達の校長先生はね自分の失敗から命を落としかかったの、

本当に酷い怪我だった……生死の境を一月も彷徨ってどうにか生還したのよ、

あの時もし亡くなっていたら今のスクール所か、管理局さえ存在しなかったかも知れない。

あなたのミスはまだ取るに足らない物よ、ただ怒られただけ、もうミスをしなればいいの、

同じミスはもう二度と繰り返さない、言われた事は必ず出来る様にする、ただそれだけよ、

校長先生も、ロシエット1佐もあなたに比べればもつと酷い失敗を乗り越えているの、

あなたはいつまでも落ち込んでちゃダメだわ？それに言われなかった？

失敗は出来る時におけて、失敗出来る時に失敗してそこから学ぶの、指揮官になれば失敗は許されないわよ？」

そう、ヴァロットにも言われた、スクールにいる内に、失敗出来る内に失敗しておけ、その失敗から学んで大きくなれと、社会に出ればもう失敗は許されないと言われた。

やっと彼の心に光が差し込んでくる、表情に力が戻ってくる。

そうだ、同じ失敗は二度しなければいい。今は失敗した事を怒られたに過ぎないだけだ。

「所であなたは？」（ジョン）

「レティ・ロウラン、前の地上本部長よ」（レティ）

そう言っただけで彼女はジョンの前を離れた。

(あの子もしかしたら大化けするかも知れないわね?)

レティはそう心の中で思った。

と、ここまででは良かった物の、レティはなのはとはやてに捕まった。

しこたま飲まされて潰されるレティ、また同じ失敗を繰り返してしまった。

「全然ダメじゃん」(ジョン)

ちよつと不安なジョンだった。

少し離れた所では表情がハニワになっている少女が一人、リンだった。

勝手に好きになって勝手に終わった恋、不毛だった。あまりに虚しかった。

最早周りの大人達の会話なんて耳にも入らない、ただ呆然としていた。

こうして打上の夜は更けていった。

翌日からやる気の違う生徒達、特にジョンはやる気が違う。

もうこれ以上後れを取る訳にはいかなかった。

試験まで後少し、試験が終わってもすぐにやってくる模擬戦大会、今度こそ負ける訳には行かない。

何としても1勝を挙げる事、それを目標に厳しい練習が続けられていた。

でもそんな1年生を奈落の底に突き落とす発表があった。

そう、学期末の模擬戦大会は一般参加有りの完全トーナメント戦、しかも一般参加は殆どのチームがスクールの卒業生なのだ。

まあ、一応全員卒業生だと在校生が勝てなくなってしまうんで、1チーム当たり卒業生は二人までと言う事にしてある。

それでも驚異だった。これではマジ勝てない、また1勝も出来ずに終わるかも知れない、1年生達は絶望の淵に立たされた。

おまけに、先生達もチームを作って参加するという、これはかなりやばい大会になりそうだ。

「ねえ、知ってる？士官学校チームが参加するらしいよ？そこ当たれば勝てるかも知れない」（エヴァン）

と僅かな希望を口にする生徒が居た物の……

「あ、それ絶対無理、私の妹と校長先生の娘だから、まず勝てないわね？」（サクラ）

「それってどう言う事？」（バランティン）

「あの4人はね、うちのお姉ちゃんと校長先生から直接指導を受けてる超エリートなの、

御神の剣も使いこなすし、神速だって使えるから2年生でも戦えるのは生徒会ぐらいの物よ、

卒業生でも危ないかも？」（サクラ）

そう、とんでもなくやばいのが参加しようとしていた。

それだけじゃあない、このチーム来年にはスクールに入学してくるのだ。



今年の1年は相当頑張らないと来年は立つ瀬がない、舐められたら相当悲惨な思いをしなければならぬ。  
それは彼らにとって途轍もなく大きな試練だった。

「何？校長先生の娘が参加する？」（ジョン）

「なんか今の2年生より強いらしいよ、かなりやばい相手らしい」  
（バラントイン）

「おいおい、そんな事言ったら俺達全く勝てないじゃん、  
こうなったら同じ1年同士で当たる事を祈った方が良いかも？」  
（ジョン）

もつと深刻なチームが居た。

「リン、どうしたの？こんな簡単な連携もミスるなんて……らしくないよ？」（エヴァン）

失恋からこつち全く調子の上がらないリン、そして目前には試験も迫っている。  
こんなんで受かるのか？

## 挫折（後書き）

次回：そんなリンを見るに見かねたのはティア先生だった。

## カウンセリング（前書き）

「ねえ、何をそんなに落ち込んでいるの？もしかして誰かに振られた？」（ティアナ）

あまりにストレートだった。

その一言はストライクゾーンど真ん中に突き刺さる。

つい泣いてしまったリン、その様子に焦りを感じるティアナ、

## カウンセリング

「おまえ達、ミッドチルダの格闘技には無くて、ここで教えている格闘技に共通してある技があるがそれが何か分かるか？」

その日スー先生はそう切り出した。

「共通する技？」

そう、ミッドチルダのストライクアーツには存在しない技、そして地球の武術に共通する技、それが地球の武術の強さと言える物だった。

「それは扣歩だ」

そう、相手の死角へ一瞬で回り込む技、これがあるから強いのだ。他にも発頸や、化頸、奥義無双取りなど相手技を無効化したり、爆発的破壊力を魔力無しでやる所などミッドチルダには存在しない技だったりする。

それからもう一つ、気当たりと気当たりの捌きも存在しない。入学してすぐ教えられるのは、それぞれの武術の基本的な型と受け身、

気当たり、気当たりの捌き、そして扣歩だ。

「おまえ達が次の大会で勝つには、完璧な扣歩が出来ない限り無理だ。

だから後1週間は扣歩の強化に時間を割く、自分の技は自主連の時間にも練習しておけ」

スー先生はそう言って生徒達に扣歩の練習をさせる。そう、この技があるから相手の攻撃は殆ど当たらない、ジョンも良いように翻弄されたのはこの技だった。

卒業生の中には扣歩の途中で何発もの打撃を繰り出してくるものもいる。

目の前で消えられて脇腹から背中への強烈な打撃が何発も、思い出すだけで痛くなる苦い思い出、

あのインターカップミッドチルダシリーズは未だにジョンの心に苦い思い出として残っていた。

こうしてジョン達は扣歩の強化を重点的に授業が進む、いや、どの1年生も扣歩の強化を中心に授業を行っていた。

「そうだ、もっと鋭く、もっと密着した所から扣歩を決める！」

そうすれば相手には消えたように見える。スピードよりも鋭さで翻弄するんだ！

相手の顔を見てるんじゃない！もっと広い視野で相手全体を見るんだ！」

それはとても効果的な指導だった。

授業の終わりにはみんなフラフラになりながら、それでも扣歩を身に着けようと必死だ。

そんな中練習でボロボロの生徒が居た。

リンだった。かなり調子が悪いらしく、ミスを連発し足を払われては地面に転がる。

いつもなら綺麗に扣歩を決め、相手に1撃叩き込んでいる所なのだが、

動きに全く生彩がない、あまりに酷い状態だった。

「困った物だな、もう少し精神的に強くなって貰わないとこれじゃあ指導のしようもないな?」

佐藤先生も呆れ顔だ。

「リン、どうした?おまえらしくないぞ?」(ヒビキ

「ほつといてよ、お兄ちゃん」(リン

早く立ち直らないともう執務官補佐採用試験がそこまで迫っている。

模擬戦大会も間近だ。焦りと苛立ちが募っていく……

そんなリンを見るに見かねたのはティアナだった。

執務官補佐講座の時でも上の空のリンを可笑しいと思って注意深く見ていたのだ。

「ねえ、何をそんなに落ち込んでいるの?もしかして誰かに振られた?」(ティアナ

あまりにストレートだった。

その一言はストライクゾーンど真ん中に突き刺さる。

つい泣いてしまったリン、その様子に焦りを感じるティアナ、

(やっば、モロ直撃しちゃったかな?)

作: 空気ぐらい読めよ

「ね、ねえ？一体何があったのか話して欲しいな？もしかしたら何かの力になれるかも知れないし」（ティアナ）

「先生……」（リン）

「……そうなんだ？勝手に好きになっただけで、その人にはもう家庭があったのね？

でも諦めきれなくて、告白も出来て無くてそのまま終わっちゃった？」（ティアナ）

（この子かなりアブノーマルだわ、人の家庭を壊しかねない危険性を持つてる。

不倫は不味いわよね？下手に焚き付けたりしたらもつと不味い事になりそうだし……）

「ねえ？相手の人ってどんな人なの？」（ティアナ）

「……お姉様は……」（リン）

（お姉様ってもしかしてこの子、百合？）

「そうなんだ？でもあなたと私は似てるわねえ？」（ティアナ）

「似てるって？」（リン）

「私も最初の相手はスバルだったから？」（ティアナ）

「スバルさんてあのスバルシテムの発案者の？」（リン）

「そう、士官学校の同期で同じ寮の同じ部屋で生活してたな？  
やっちゃつまではそれほど時間は掛からなかったけど……」(ティアナ)

「でもティアナ先生、何で今の旦那さんと結婚したんですか？」(リン)

「捨てられたのよ、スバルに」(ティアナ)

「捨てられた？」(リン)

「あいつね、さっさと男作って子供作って結婚しちゃって、  
私なんかもうどうでも良かったみたい、一人取り残された時は寂しかったな？」

「でもね、いずれそうなる事は分かっていたの、自分が夢を観すぎて居ただけ、  
もっと現実を観ていかないと、いつの間にか自分だけ取り残されちゃうわよ？」(ティアナ)

「へつくしゅん・誰か私の噂してるのかなあ？」(スバル)

本局でスバルがくしゃみをしていた。

「もっと現実をか……？」(リン)

「いずれあなたにも現れるわ、心から愛する事が出来る人、心から愛してくれる人が……」(ティアナ)



「愛する人ですか？」（リン）

「そう、あなたは一時の気の迷いに囚われているだけ、  
いつか必ずそれを理解出来る日が来るわ、

だからそれまで女を磨きなさい、それがあなたのやるべき事よ？」

（ティアナ）

「ありがとうございました、ティア先生！」（リン）

どうやらティアナのカウンセリングは上手く行ったようだ。

すっかり元気を取り戻したリン、それと同時にリンはティアナのこ  
とが眩しく見えた。

人生の先輩として、それとも尊敬すべきお姉様として？

まあ、これでリンは大丈夫だろう？一回り大きくなったリンだった。

「私の名は宇宙人ジョーンズ、

今ミッドチルダと言う星の特別戦技教導学校で学食の皿洗いのバイ  
トをしながらこの星を調査している。

この学校、体育会系で実に厳しい授業をしている。

生徒達は食べ盛りで実によく食べる」

「ナカジマ家ライス！ギガ盛りで！」（アヤメ）

「おいおい、そんなに食べて大丈夫なのか？女の子ならダイエット  
を気にする所だろう？」

でもこの学校の ” ナカジマ ” と付く生徒は実によく食べる」

この口クでもない素晴らしき世界に……

## カウンセリング（後書き）

次回：明らかになる宮ノ内示現流の強さ、ヒビキは佐藤先生から  
キャリア幹部試験を諦めて欲しいと言われる。

## 進路（前書き）

その夜、お兄ちゃんは進路についてお父さんと随分遅くまで話し込んでいた。

結局、お兄ちゃんは先生になる道を選んだ。

## 進路

「佐藤先生、今何と？」（ヒビキ

「だからお前には申し訳ないと思うがキャリア幹部試験は諦めて欲しい。

お前にはこの学校に残って欲しいんだ、俺の後継者として……」（佐藤

そう佐藤先生は次の3月で定年退職する。

この先宮ノ内示現流を教えられる後継者を捜していたのだ。

元々宮ノ内示現流は後継者が少ない上に最終奥義まで体得している人間は殆ど居ない。

佐藤先生はそんな希有な人間の一人だった。

「もう校長先生も了承済みだ。

後はお前が首を縦に振ってくれば最終奥義までお前に叩き込む、剣技の才能に関してはお前は俺より上だ、きつと最終奥義まで辿り着けるだろう？」（佐藤

ヒビキは難しい決断を迫られていた。

将来の出世を取るか、それとも指導者の道を取るか？

ヒビキは悩む事になる。

「今日1日考えさせて下さい、返事は明日の朝します」（ヒビキ

その日1日彼は悩んだ。

「どうしたヒビキ、何を悩んでいる？」（クロスリード

「妹に男が出来たとか？」（ラフロ）

「そんなんじゃないよ、俺の進路に関する事だ」（ヒビキ）

「進路って？」（カティ）

「佐藤先生にこの学校に残るように言われた。キャリア幹部は諦めて欲しいそうだ」（ヒビキ）

「スゲーじゃん、この学校の先生って事はSSS級の強さを認められたって事だぜ？」（アード）

「まだそこまで強くなってるよ、まだ奥義は何一つ習っていないし、

これから半年掛けて叩き込まれるみたいだ」（ヒビキ）

「俺はその奥義の方が魅力的だな？将来の出世も良いけど、御神の剣と並び称される最強剣の一つ、

宮ノ内示現流の最終奥義、是非観てみたい」（クロスリード）

そう、示現流その物は御神の剣と並ぶ最強剣として知られている。元々は薩摩示現流から分派した流派で、6つの流派に分かれている。そして、佐藤は元々守り屋をやっていた為、家族も作らずにこの年まで過ごしてしまった。

だから、自分の後継者が居ないのである。

それに、この学校の教師になって5年、未だ最終奥義に到達出来た生徒は居ない。

奥義まで納める事が出来た生徒は何人か居た物の、最終奥義となるとそれなりにセンスと心が伴わない限り不可能だっ

だからだ。

「難しい選択だよな？将来の金か？それとも名誉を取るか？つてことだもんな？」（ラフロ）

「金と名誉か……？」（ヒビキ）

非常に悩ましい問題だった。

まあ、それなりにそこそこ生活出来るだけの稼ぎで満足するのか？それともそれなりに出世してセレブな生活を送るのか？とても難しい所である。

「えっ、お兄ちゃん先生になるんだ？」（リン）

「まだそうと決めた訳じゃあない、なれって言われたただけだ、でも明日の朝までに返事しなければならぬ」（ヒビキ）

「まあ、大いに悩めばいい、それに示現流は俺が教える北辰一刀流よりも遙かに強い流派だ、

奥義まで納めれば殆ど無敵だろう？」（白州）

「そんなに強いのか？」（ヒビキ）

「日本にはこんな話が残っている。

幕末の剣客集団”新撰組”と言うのが居た。

彼らは日本最強とまで謳われた集団だったが、その総長の近藤勇や副長の土方歳三ををして、

示現流とだけは戦うな、戦うとすれば初撃だけは絶対に外せと言わしめたほどだ。

宮ノ内流に関しては2撃目までは絶対に外さなければならぬと言

わしめるほどに強かった。

なぜだか分かるか？」（白州

「強いからだろ？」（ヒビキ

「それじゃあ答えになっていないな？」（白州

「だからどう強いのか想像も付かないんだって」（ヒビキ

「なぜ初撃を外せと言わしめたと思う？」（白州

「よく分からない」（ヒビキ

「いきなり奥義を撃つて来るからさ、

その奥義は間合いに入ってしまったえば回避する事も防御する事も不可能だという。

つまりは間合いの中では無敵なんだ。それ故に御神の剣と並ぶ最強剣術と呼ばれる」（白州

「ふうん、私達の習っている剣術ってそんなに強いんだ？」（リン

その夜、お兄ちゃんは進路についてお父さんと随分遅くまで話し込んでいた。

結局、お兄ちゃんは先生になる道を選んだ。

でも、宮ノ内示現流ってそんなに強いのかな？

技の種類なんかは滅茶苦茶少ないし、一種独特な剣術だし、習っていて不思議だと思う事が多い。

作：ここで示現流の技を見ておこう、

構え：蜻蛉トンボ：右肩の前に刀を立てた状態で構える

捨蜻蛉すてとんぼ：腰の左前に刀を寝かせた状態で水平切りする構え

置蜻蛉おきてんぼ：腰の右前に刀を寝かせた状態で水平突きする構え

（構えはいずれも右利きの場合、左利きはこれが左右逆になる）

防御：再起さいき：刀の柄に近い部分で相手の攻撃を受け流す。複数の相手にも対応出来る。

攻撃：燕飛えんぴ：蜻蛉の構えから振り下ろした刀が の軌道を描く、他流派では燕返しと呼ぶ

猿叫えんきょう：奇声と共に気当たりを入れる

三ツ太刀みつたち：一振りに見えて2回斬る2段斬りの技

（リン達は、今この辺りまで習っている）

雙そつ：蜻蛉の構えから間合いの外で踏み込んで相手を誘う技、相手が間合いに入ってきた所を斬る

追籠おいかめ：気当たりを入れて相手が動きを止めた所を斬る

寸すん：狭い所で長い刀を使用する技術、刀と一体化して相手を

斬る

重切じゅうせつ：刀を肩に担いで腰を落とす、

そこから全体重を切っ先に掛けて相手を叩き斬る（叩き潰す）

立りゅう：居合い技、示現流の居合いはちよつと変わっていて、

他の流派の居合いでは横薙ぎか打ち下ろしが多いが、

刀の刃を下向きに、下方向へ抜いて下段から切り上げる。

このため殆ど回避も防御も不可能である。相手は股下から真っ二つにされる。

（今2年生はこの辺りを習っている）

居合いは、抜即斬のため、振り抜かれた時には全てが終わっている。



奥義：行：御神流で言う”神速”に当たる。

ただし神速より発動時間と距離が短い。発動距離はおよそ1

0 m

安：御式内で言う”水鏡二式”に当たる。相手の動きを先読みし動く先に斬り込む

意地：内気功を練って技の破壊力を上げる気功術

道：刀を大上段まで振り上げると見せていきなり斬り掛かる  
フェイント技

最終奥義：雲耀：蜻蛉の構えからただ一撃振り下ろす斬撃、

ただし、初動から振り抜きまでが1800分の1秒という速さを誇る。

このスピードは軍用レールガンの実に2倍、

余りの速さの為どんな防具も武器も一刀両断にされてしまふ。

真雲耀：雲耀の2倍の速さ3600分の1秒で振り抜く、

余りのスピードと破壊力の為、斬撃の後に巻き起こる衝撃波だけで戦車をも吹き飛ばす

最早無敵すぎて斬れぬ物無し。

以上19の技しか存在しない。

非常に攻撃に特化していて防御を殆ど考えていない剣術だったりする。

技を出した後の隙が大きいのが欠点。

攻撃力だけなら御神の剣よりも圧倒的に強い。

御神の剣は多彩な技と防御に長けている。

## 進路（後書き）

次回：いよいよやってくる試験、彼らは受かるのだろうか？

**試験！（前書き）**

「あんたら諦めた訳ね？」（デュワーズ

「諦めてなんか居ないよ、自分に才能があるって信じてるから、何もしないのさ」（ジョン

「だめだ、ここまでのバカとは思わなかった。声を掛けるだけ無駄だわ」（マリー

試験！

「ちえすとおおおおおおおおおー！」（ヒビキ

準備された丸太が真つ二つになる。

「ふむ、立<sup>た</sup>まで完璧だな？この分なら夏休みまでには奥義の二つぐらいは教えられそつだ」（佐藤

他の2年生はまだ重<sup>じゅう</sup>切<sup>けつ</sup>や立<sup>た</sup>で伸<sup>の</sup>び<sup>び</sup>悩<sup>な</sup>んでいる者が多い、今の所ヒビキが頭一つ抜け出している感じだ。

「ヒビキ、明日から奥義の内の最も簡単な物から二つ教える。夏休みまで出来るようになってみる」（佐藤

その頃私達は体力テストだった。

これに合格しないと夏休み中ずつと補習になる。ピリー先生のあのしごきは出来れば受けたくない。

「……あの馬鹿達どう言う体力してるのよ？」（リン

そう、スケベ3人衆の馬鹿達が揃ってトップでゴールする。

持久走、短距離走、ジャンプ力、三つの種目を制していた。

流石に握力はもっと凄いのが居たけれど、いずれも総合成績はトップだった。

「いつの間にあんな体力を付けたのよ？」（デュワーズ

これがあのきつい補習の効果だった。

彼らは既に2年生に匹敵する体力を身に付けていた。

「いくら何でも執務官補佐の試験直前に体力テストはやらないで欲しいわよね?」

そう、もう7月、明後日は執務官補佐の採用試験がある。

これに落ちる訳にはいかない、リン達執務官を目指す者にとって現役合格こそ最大の目標なのだ。

下手に滑って無駄に何年も時間を費やす訳にはいかない。

このスクールの先輩達の多くは現役合格をして活躍している人が多いのだ。

「もう緊張している余裕すらないよ?」

1年生と去年滑った2年生はもうすぐ執務官補佐採用試験を受ける。

それから執務官補佐を受けない連中は、模擬戦大会に向けて猛特訓だったりする。

「流石に覚えが早いな?」(スー)

ジョンは既に瓶を斬れるようになっていた。

それと同時にマツハ突きも身に付けていた。

今度の模擬戦大会、1回戦負けだけは絶対に出来ない、もう負ける訳にはいかないのだ。

「この分なら夏休み明けにはある程度の技を教えられるか?」(スー)

そう、この学園に入ってくる人間は殆ど格闘センスの塊みたいな人間、

魔導士でなくても格闘家として充分に食っていける才能の持ち主ばかり、どの生徒も非常に覚えが早かった。そして来週は指揮官適性試験、これに落ちる訳にはいかないジョン達、何とか受かって出世街道に乗りたい所だ。ジョンはこの前ヴァロットに言われた事、なぜ怒られたのかを自問自答する。

「視野が狭い、周りが見えていない」

この言葉に集約されていた。

（あの人はあの時こう言った、まずは一般市民の安全を確保する事、そして部下達に被害が出ないようにする事、その上で確実に作戦を遂行する事、

俺の頭じゃあ全て考える事なんて出来ない、でも出来るとするなら相手の出方を確実に見てそれに対処する事、空手で言ったら前羽の構えと同じだ。徹底した絶対防御、相手をよく見て、

自分の置かれた状況を見て対処する事、それしか俺に出来る事は無い、

その考えで何処までやれるか分からないけれど、それだけで勝負するしかないんだ。

どうせ今更勉強した所で頭になんか入らない、絶対防御の思想だけで勝負する！）

彼は腹をくくった。

もう逃げも隠れも出来ない、いや、そんな事はもうしない、当たって碎けるではなく、当たったら叩き潰せの精神で試験に臨むジョンだった。

「ちょっと、あんたら勉強しなくて良い訳？」（リン）

「あ？指揮官適性試験の事？」（ジヨン）

「そうに決まってるじゃない？」（リン）

「あれねえ、ヴァロットさんが言ってたよ、勉強するだけ無駄だつて、

あれは才能の問題だから才能有る人間なら勉強しなくても受かるし、才能が無ければ勉強しても無駄だつてさ」（バラントイン）

「あんたら諦めた訳ね？」（デュワーズ）

「諦めてなんか居ないよ、自分に才能があるって信じてるから、何もしないのさ」（ジヨン）

「だめだ、ここまでのバカとは思わなかった。声を掛けるだけ無駄だわ」（マリー）

でも彼女たちは知らない、腹をくくったジヨン達が恐ろしくできる事を、

人間開き直りが大切だという事を、開き直ったジヨン達が信じられないほどの力を発揮する事を……

試験まで後5日、それぞれに勉強を進める。

何としても試験に受かる為に。

試験当日、緊張した空気が支配する。

みんな試験に集中する物の、あまりに突拍子もない問題が多い、それは教科書や参考書など全く当てにならないなかつた。

指揮のやり方とかそういう事は一切出てこないのだ。確かに勉強するだけ無駄だった。より激しく勉強していた物ほどドツボに嵌る。

「何かユニークな問題多いよね？ケンカの仲裁のやり方とか、もし小学校の先生だったらとか？聞いてる事がもの凄く変」

それはある意味才能の問題だった。

そう言う訳の分からない問題を自分なりのやり方で回答していく、実は採点官もこのテストは大変だったりする。

明確な答えなんて存在しない。

中には訳の分からない回答をする生徒もいるので、それをどう評価するのか悩む事もしばしばなのだ。

「ほう、あいつら化けたな？」

この試験の採点をしているのはヴァロットだった。

解答用紙を見ながら、明らかな間違いを減点し、

模範解答に近い物を正解、それ以外を何人かで評価するようにしていた。

そのヴァロットをして、彼らは化けたと言わしめた。

しかもそれは模範解答ではなく、評価回答だったりする。

同じ頃、指揮官研修を終えている2年生から選抜で上級キャリア幹部採用試験を受けている者が居た。

ヒビキを除く生徒会の連中だったりする。

彼らは未来を囑望された幹部となる為にこの試験に向けて努力してきたのだ。

何としても受かりたい所だが、この試験は一筋縄では行かない難しい物、



果たして彼らは受かるのだろうか？

**試験！（後書き）**

次回：いよいよ目前に迫った模擬戦大会、1年生はそれぞれに練習に励みます。



## 勝つ為に

「校長先生、指揮官適性検査の採点出来ましたよ」「ヴァロット

」どれどれ？」「(なのは

そこには信じられない結果があった。

「嘘？何である子達がこんなに上位にいるの？」「(なのは

「俺の予想通りでしたけどね？」「ヴァロット

「予想通りってどう言う事？」「(なのは

「試験の前に言ってやったんですよ、勉強するだけ無駄だって、寧ろ俺の模擬戦大会の映像を見て手本にしろってね」「ヴァロット

「だからドツボに嵌らずに済んだ訳ね？それに比べると他の子は酷い成績ね？

ドツボに嵌っている子が随分多いじゃない？」「(なのは

「まあ、そんな物ですよ俺の時もそうだったですから？

ちよつと捻くれてる位の方が成績が上位に来る、そう言う傾向の試験ですからね？」「ヴァロット

「そう言う物かなあ？」「(なのは

「そう言う物ですよ、特にジョンなんか見て下さい、模範解答は一つもないけれど、

評価点は最高です。しかも徹底した防御型だ。

普通F Aのポジションにいる奴は攻撃型の回答が多いけれど、ここまで徹底した防御型は珍しい、こう言つのは鍛えると面白い指揮官に育つ、

もしかしたら俺やバロー口を超える名指揮官に育つ可能性もありますよ」「ヴァロット

「よく見るとそうよね？やっぱ変わってるわあの子」「なのは

「じゃあ俺はそろそろ行きますよ、あいつらが勝つ為の一手を聞きに来ますから？」（ヴァロット

（もう、どんな事をしたってあなたを超えるような子はそうそう出ないわよ、

器の大きさが違いすぎるんだから、それにあなたが居てくれるから  
凄いい子が育つよ）（なのは

なのはは心の中で感謝する、ヴァロットの背中に向かって。

あの背中にどれだけの生徒が引つ張られ、どれだけ強くなったのだらう？

どれだけ優秀な人間に育つたのだらう？見捨てられそうだった不良がどれだけ更正したのだらう？

この学園の校長で良かった、この学園にヴァロットが教えに来てくれる事がどれだけ有り難い物か？

それをつくづく噛み締めるのはだった。

「校長先生、執務官補佐採用試験の結果とキャリア幹部採用試験の結果が出ましたよ？」（ティアナ

「今年も成績良いわね？まあ今年の1年生は受験する子がちょっと

少ないのが寂しい所だけど？」（なのは

「でも合格率80%キープは続いてますよ、これでまた優秀な執務官を送り出せそうです」（ティアナ

なのはは、感謝することしきりだった。

ティアナのお陰でどれだけ優秀な執務官が育っているか？

どれだけ管理局に貢献しているか計り知れない。

それに比べると自分の何と情けない事か？

ここの教師達を纏めるだけで手一杯で、それ以上の事は何も出来ては居ない、

一応出世人事で准将、提督という地位は頂いた。

でも、それはあまりに自分に似つかわしく無いとつくづくそう思っている。

自分はまだ責任を果たせては居ない、あの悲劇の責任すら取っては居ないとそう考えているのはが居た。

でも、このスクールを辞める訳にはいかない、今校長として頑張れるのは自分しか居ないのだから……

「ヴァロット先生、どうしても負ける訳にはいかないんです！勝つ為の方法を教えてください！」

ジョン達は勝つ為の方法を聞きに来た、ヴァロットの予想通りに

……

「まあ、出来る限り魔法は使わない事だ、相手の魔法は出来る限り体に引付けて避ける事、

避けきれなかったら、手に魔力を込めて捌く事だ。特に空手の回し受けは捌く事に特化した技だ。

そうやって相手の懐に飛び込んでしまえばいい、相手を捕まえてし

まえばやり放題だ。

「エマルジョンコレクトだって捕まってしまうとその意味を成さない、その程度の魔法なんだ」(ヴァロット)

「要は捕まえてボコレ？と言う事ですか？」(ジョン)

「まあ、そう言う事だ、それから後は特殊アイテムの使いこなしかな？

大した魔力もなければ高等な戦術も出来ないお前らにとって出来る事はそれ位なものだ。

でもアイディア次第ではかなり上位まで勝ち進めるのも事実だ、どれだけそう言うアイディアが出せるのか？そう言うのも強さの一つだ。後は自分達で考えろ」(ヴァロット)

模擬戦大会まで後5日、みんな絶対に負ける訳には行かなくてそれぞれに特訓を重ねる。

「リン、随分立ち直ったね？もうミスらないし」(エヴァン)

「負ける訳にはいかないからね？特にあの馬鹿達に負けたらどれだけ恥を搔く事か？

考えただけでも恐ろしいわ」(リン)

「でも勝てるのかな？先輩達強そうだし、SSS級の先輩達も何人か居るし、

士官学校最強チームは全員SSSだし、そんな所とは絶対に当たりたくないよ」(デューワーズ)

「まあ、勝ち抜けば絶対当たるけどね？」(リン)

「まずは目先の1勝だね？」（マリー）

そう1勝すれば補習はない、まずは1勝する事だった。

「このアイテムは面白そうだね？」（ブランドン）

「ああ、これも使えそうだ」（ジョン）

「ったく、またしょーもない事を考えてるなあ？」（ジョニー）

「こつこつ言つのが良いんだよ、ヴァロットさんは言ってたぞ、  
こつこつ特殊アイテムの使いこなしが肝要だって」（ジョン）

俺達は今そう言う特殊アイテムのカatalogを見ながら何を仕入れ  
ようか？相談していた。

使えそうな物は結構ある、後はどう言う状況でそれをどう使うかを  
考える事、

そうやって頭を使う事も強くなる為の方法だと教わった。

「蛇や蛙、ゴキブリにナメクジなんかも大量に捕まえておこつ？」

そう、こつこつ特殊アイテムを見ているとどんな悪戯に使おうか？  
良からぬ考えがどんどん浮かんでくる。

楽しい悪戯をどんどん考え付く、そう、これがヴァロット達が最初  
に取った戦法、

殆どのチームはこの悪戯に引っかかってやられた。

どのチームよりもヴァロット達の試合を分析していたジョン達はそ  
の悪戯のセンスをも学んでいた。

「やっぱりバナナはデフォだよな？」（ジャック）



「このアイテムとこのアイテムも面白いぞ？失敗すると自分が酷い目に遭いそうだけど？」（ジョン）

「それ使ったら有る意味やばいだろう？下手したらショック死するぞ？」（ジョニー）

「この程度の事で死ぬようなヤワな奴は居ないって、まあ一生トラウマになるかも知れないけど？」（ジョン）

「お前ヒデー奴だな？」（ブランドン）

「悪戯って言うのはこのくらい強烈な方が面白いのさ？」（ジョン）

何か良からぬ事を考えているジョン達だった。

「全部で15万か？後でバイトしないとね？」（ブランドン）

作：ここで彼らが仕入れたアイテムを見てみよう

### 特殊アイテム紹介

そんなバナナ：

目の前に投げられるとつい踏みたくなってしまふバナナの皮、リアクション芸人御用達アイテムで、値段も格安。

1回こっきりの使い捨て、食べた後のバナナの皮を再利用している環境に優しい製品。

屁玉：

カラーボールのように薄いガラスの玉の中にスカンクの屁を液化濃縮して詰めてある。

割れると気化して途轍もなく臭い匂いが充満する。

風上から風下に向かって使わないと自爆する。

周囲への被害の大きな迷惑アイテム、

ハラーナ社製の強力消臭スプレーとセットでの使用をお奨めする。

取りもちボール：

水風船の水の代わりに取りもちが入っている。

弾けたその場で簡易的な取りもち罠に変わる。

引っかかると非常に嫌なアイテム

接着ボール：

水風船の水の代わりに強力な瞬間接着剤が入っている。

弾けた瞬間何でもくっつけてしまう、その上簡単には剥がれない。

ハラーナ社製強力接着解除スプレーとセットでの使用をお奨めする。

オイル玉：

中にオイルが入っている。

地面が固い床の場合に有効、床に広がると何時までもつるつるで立ち上がる事さえ出来ない。

中性洗剤で洗い流す事で対処出来ます。

特殊消化液玉：

中に特殊な消化液が入っている。

人体には何の影響もないが着ている物、バリアジャケットですらも溶かしてしまう。

主に女子に向けて使いたいアイテムである。

勝つ為に(後書き)

次回：いよいよ始まる模擬戦大会、果たして彼らは1勝出来るのか？

**開幕！模擬戦大会一般参加シリーズ（前書き）**

「行くぞおおおおおおおおお！」（ジヨン）

（バカの一つ覚えね？突っ込む事しか脳がない、サクッとボコリましよう）（ツバキ）

## 開幕！模擬戦大会一般参加シリーズ

その日朝早くからスクールの前に長い行列が出来る。

そう、今日は模擬戦大会だ。

前日の夕方メディア発表されて、当日券のみの販売と言う方法がとられるこの模擬戦大会、

前日の夕方から並ぶ市民も多い。

ダフ屋さん対策だったりする。

「ラッキー、俺達の相手ナカジマシスターズ7じゃん、素っ裸にしてやるうぜ？」（ジョン）

「でもどう言う作戦で行く？いきなり消化液は使えなさそうだし？」（ブランドン）

「そうだな？まず屁玉を使ってみるか？怯んで動けなくなったら消化液玉をぶつける」（ジョン）

「問題は風だね？」（ジャック）

「あんまり無駄遣いするなよ？屁玉は安いけど、消化液玉は結構高いし10個しかないからな？」（ジョニー）

「分かってるって」（ジョン）

良からぬ作戦を立てているジョン達。

「ラッキー、私達の相手最弱のチームじゃん、これで1勝はいただきね？」（ツバキ）

もう勝ち星を計算するナカジマシスターズが居た。  
でも彼女たちは知らない、この後とても悲惨な目に遭う事を？

「私達の相手チーム473ってエルセアのチームだねえ？」（リン

「結構鍛えてるチームだよ、キャプテンは二期生の人だって、勝てないかも？」（マリー

「良いな、ナカジマさん所は、あの馬鹿達のチームだし、確実に1勝出来るし」（デュワーズ

「私達は補習だろうなあ」（エヴァン

「嫌な事言わないでよ」（リン

絶望的なリン達、補習という言葉が頭を過ぎる。

「ジョン達がいろいろ仕入れてたからね？僕らも仕入れる事にしたんだ」（バラントイン

「で？金は？」（フェイマス

「勿論全員の名前でローンを組んでおいた、後でバイトだね？」（バラントイン

そう彼らも汚い仕込みをいろいろとしていたりする。

「さあ、始めましたガチンコ模擬戦大会一般参加シリーズ、司会及び審判長は私高町なのはと」

「コメンテーターはスペシャルフォース部隊長のヴァンサン・ロシエットでお送りしております」

「私もおるで？」（はやて

「はやてちゃん、偉い人なんだからこんな所まで来ないですよ」（なのは

「大丈夫や、仕事はロツサに任せてあるし、この所スクール卒業生のお陰で基本的に平和や、仕事も随分少なくなった、結構楽が出来とるんやで？」（はやて

「私は護衛だ」（シグナム

二人とも実は試合が生で見たいだけでここまでやって来たりしている。

さて今年はどれだけの収穫があるのか？

「じゃあ、そろそろ1回戦第1試合、行ってみようか？」（なのは

いきなりジョン達の試合、1年生対決だった。

この前はどちらのチームも2年生のチームにフルボッコにされて終わっている。

特にジョン達は4人合わせて30秒持たなかったという惨憺たる物だった。

「これはナカジマシスターズ7の勝ちやろ？」（はやて





生徒会もそれに続く、試合場ではナカジマシスターズ7が全員倒れていた。

それだけでなく審判をしていたティアナ先生も巻き込まれていた。

「す、凄い効果」(ジョン)

風下にいる生徒達や観客がどんどん倒れていく、最早試合所ではなかった。

風上から巨大な砲撃が打ち込まれその爆風で匂いの大半を吹き飛ばす。

「も、もしかして毒ガスか？」(はやて)

「まあ、ある種の毒ガスです、俺が以前開発した暴動鎮圧用兵器、屁玉です」(ヴァロット)

「屁玉？」(なのは)

「ええ、あのガラス玉の中にはスカンクのおならが100倍濃縮されて入っています、

下手に吸い込んだら確実に倒れますよ」(ヴァロット)

「スカンクのおならって……とつてもいやだ」(なのは)

「でもあれが毒ガスやったらみんな死んでるで？」(はやて)

「あいつら無茶しすぎだな？」(ヴァロット)

結局勝ったのはジョン達だった。

屁玉一つでナカジマシスターズ7は全員ノックアウトだった。

その後、暫くはおならの除染作業が続いたという。

「厄介なチームが出てきたわね？」

「でもあの作戦は利用出来るよ？」

「なるほど？そう言う手もあるわね？」

「私達と当たるまで生き残っていて欲しいわね？」

とひそひそ話をしているチームがあった。

暫くして、スクールに苦情の電話が殺到する、「臭いぞ！何とかしろ！」という物だった。

爆風で拡散しても臭い物は臭い、匂いが流れてきた住民からの苦情だった。

それでも容赦なく進む試合、次はリン達のチームなのだが……

**開幕！模擬戦大会一般参加シリーズ（後書き）**

次回：初日2回戦までやるはずだったが、1回戦しか出来ずに終わる。

そして2回戦へ、ジョン達の相手は？

PS：ヴァロットが開発したという屁玉、製造の為に大量のスカンクが必要なのだが、

お陰でスカンクを家畜化する農家が増えたという。

新しい産業にも貢献しているのだ。

臭い試合（前書き）

「良かった、僕たちの試合が最後で、これなら除染に時間を取られた所で大会には影響しない」（バラントイン）

「仕込んでいるのはあいつらだけじゃあないって所を見せてやるうぜ？」（フェイマス）

「風も味方してくれているし、これは勝てるだろ？」（ヘンリー）

## 臭い試合

(よ、良かった最初にあいつらと当たらなくて……)

私達は心の底からそう思った。

スカンクのおならは嫌すぎる。

おまけに人間以上に鼻の利く戦闘機人には効果絶大だった。

そう、戦闘機人は五感の内、視覚、聴覚、嗅覚が人間より優れている。

そこを突かれたら一溜まりもなかった。

味覚もかなりグルメな人並みに良かったりするけど？

まさかそこを狙ってくるとは思わなかったんだらう？

彼女たちは立ち直れるのだろうか？

「あれはきついわよね？私達でもやばかったかも？」(イスズ

「俺でも対処が遅れたらやばいな？」(クロスリード

「校長先生何をしてるんですか？」(ヴァロット

「保護バリアの強化です、これ以上被害を出す訳にはいかないから？」(なのは

そう、なのははコンソールを操作して観客席に保護バリアを設定した。

これで簡単には匂いを通さない体勢が出来た。

さっき倒れた生徒や観客は消臭スプレーと回復魔法で何とかになった物の、

もの凄く臭かったという苦情が殺到している。

「さっきのあれはやばかったな？確実に勝てるけど周りへの被害が半端じゃあない」（ジヨン）

「まあ、仕方ないよ、勝つ為には？それにもうスタンドには被害が出ない体勢みただし」（ブランドン）

「く、臭っさ、何て物を使うのよ!」（ティアナ）

お冠のティアナ先生だったりする。

屁玉の効果はかなり大きかった。

スタンドがその効果に恐怖するほどに……

「じゃ、じゃあ第2試合行ってみよう!」（なのは）

「業務連絡、業務連絡、チーム473はすぐに本部まで来て下さい」

「ええ？それは本当ですか?」（ヴィラ）

「申し訳ないがすぐに戻ってくれ」（473部隊長）

「校長先生、申し訳ありませんが緊急事態が起きました。

不本意ながら試合を辞退して帰投します」（ヴィラ）

「何？それは本当か？分かった、チームウィンドとチームフォレストを助っ人に出す、

アプリリアは上空からブラシカで支援、アマネさんもブラシカから指揮を任せた、俺は大会に残る」（ヴァロット）

「どうしたの?」（なのは）

「たった今エルセアの美術館にジャヌヴィアからの予告状が届いた  
そうです」(ヴァロット)

「それは仕方ないわね？」(なのは)

「1年生Bチーム、相手チームの試合放棄により不戦勝とします」  
(なのは)

「えっ？私達の勝ち？」(リン)

それは思いも依らないラッキーだった。

戦わずしてして勝利、それも本来なら負けていたはずの相手、一体  
何があっただらろう？

「えっ、ジャヌヴィアから予告状が来た？」(マリイ)

「ありがとうジャヌヴィア様、私達に勝ちをプレゼントしてくれて  
！」(リン)

作：不謹慎すぎるぞ、リン

「でも勝ちも勝ちだよな？これで補習は免除だよな？」(デュワーズ)

「多分ね？」(エヴァン)

リン達は偶然のラッキーに救われた。

試合はどんどん進む、そう一般参加を含めて128チームが64チ  
ームへ、

今日は2回戦の途中までやるはずだった物の、さっきの除染の影響



で2回戦は明日に見送られた。

この分だと、明日は相当きつい日程になりそうだ。

「良かった、僕たちの試合が最後で、これなら除染に時間を取られた所で大会には影響しない」(バルンタイン)

「仕込んでいるのはあいつらだけじゃあないって所を見せてやろうぜ？」(フェイマス)

「風も味方してくれているし、これは勝てるだろ？」(ヘンリー)

相手チームは2年生の中堅チーム、トラップバインドが上手いチームだったりする。

「始め！」

その瞬間、ヘンリーがカートリッジを2発消費、数十発のスフィアを作り出す。

2年生が突っ込んでこなかったからだ。

スフィアをお互いの間に叩き込むと、いくつものトラップがうねうねと立ち上がっては消えていく、

「野郎、相当仕込んでやがった」(ヘンリー)

「今度はこっちから行くぞ！」(バルンタイン)

バルンタインとフェイマスが突っ込む、相手は棍と仗をそれぞれ構えて迎撃する体勢に出た。

それが彼らの戦術だとも知らずに……

右の回し蹴りを出すと見せかけて左手で股下から相手の足下に何か

を投げたバラントイン、  
蹴りの勢いを利用して相手に背を向けると一目散に逃げ出す。

そう、屁玉だった。

おまけにフェイマスも相手の上空へ屁玉を投げていた。  
ヘンリーの銃撃が屁玉を撃ち抜く、そしてそれは阿鼻叫喚の地獄を  
呼び起こす。

むああああああああああああああああん

凄まじい臭さに倒れる2年生、そして巻き込まれるティア先生、  
本日2回目のダウンだった。

「6面防御陣！」

すぐさま防御陣を張ってガードする大会本部、そして生徒達。

「業務連絡、観客の皆さんは除染が終わるまでそこを動かないで下  
さい」

そしてまた砲撃が打ち込まれて匂いが拡散し、苦情が殺到する。

「まさか他にも仕込んでいる子がいたなんて？」（なのは

「あいつも俺の所に来ていたからな」）（ヴァロット

またしても大会は大変な事になった。

「何か近年に無いセコイ大会になったなあ？」はやて

「いくら私でもあれは防ぎ様がない、よく考えれば恐ろしい攻撃だ」  
（シゲナム）

「次の大会から屁玉は禁止にしないと行けないわね？」（なのは）

こうして1日目を終了し、大会は二日目に突入する。

## 臭い試合（後書き）

次回：勝つ為の策略を巡らせる生徒達、ヴァロットは事件の阻止に動く

それぞれの夜（前書き）

「お兄ちゃんはまだ良いよ、私は2回戦突破出来る気がしない、それに臭いのはごめんだな？あんな物を使われたらたまった物じゃあないよ

どこかで防毒マスクぐらい借りられないのかな？」（リン）

「一つだけ借りられる所があるぞ？」（ヒビキ）

「えっ、そんな所有なの？」（リン）

## それぞれの夜

「やった、明日の2回戦はリン達のチームだ、今度こそ脱がしてやるう？」（ジョン）

「でも、屁玉は使わない方が良いと思うよ？」（ブランドン）

「明日はあれをやるうぜ？」（ジョン）

「なるほど！あれね？」（ブランドン）

また良からぬ企みをするジョン達、何を考えているのだろうか？

「不味いなあ、明日はジョン達だよ、仮に勝ってもその次は教導隊だし、

その次に勝っても士官学校チームだし」（リン）

「リン、なんだその言いぐさは？俺達が士官学校に負けるって言うのか？」（ヒビキ）

「でもお兄ちゃんじゃあまだ無理でしょ？神速に対応するなんて」（リン）

そう、3回戦でヒビキ達は士官学校チームTN2Tと当たる。

しかも相手は1回戦を前衛の力押しだけで勝ち抜いてきた、まだ本気のほの字も出していないチームだった。

「うっ……そう言われるとやばいな……」（ヒビキ）

「仕入れた情報じゃあ、向こうは4人中3人が神速を使うみたいだし、  
もの凄く多彩な魔法を使ってくるらしいよ、おまけに仕込みの達人らしいし」(リン)

「何かそう言われると負ける気がしてきた……」(ヒビキ)

「お兄ちゃんはまだ良いよ、私は2回戦突破出来る気がしない、それに臭いのはごめんだな？あんな物を使われたらたまった物じゃあないよ

どこかで防毒マスクぐらい借りられないのかな？」(リン)

「一つだけ借りられる所があるぞ？」(ヒビキ)

「えっ、そんな所有の？」(リン)

「防災署だよ、あそこならどんな有毒ガスにも対応出来る防毒マスクが置いてある。

今から電話して予約しておけば明日の朝借りられると思うぞ？」(ヒビキ)

「なるほど、これなら勝てるね？」(リン)

リンはニヤリと笑う、4人分借りておけば必ず勝てるかと踏んではいた。でも、そんな物は役に立たないと知るのは試合になってからだっただりする。

「定時連絡します」(アマローネ)

ヴァロットの前にモニターが開いた。

「……と言う訳です、部隊長、何か指示はありますか？」（アマロ  
ーネ

「その話だったら俺も知っている、漁師の間じゃあ有名な話さ、  
実際に人魚を見たって言う噂もある位だ。まあ、それだけ警備が厳  
重ならそう簡単に盗む事は出来ないだろう？  
もし出来たとしてもそう簡単には逃げ出す事は出来ない、盗まれた  
ら館内から誰も出さない事だ」（ヴァロット

こうして指示を出し終えた物の、ヴァロットは何故かこの警備が  
失敗に終わる事を予感していた。

「俺達の相手、先生達なの？」（バランタイン

「終わった、完全に終わった」（フェイマス

「こうなったら屁玉攻撃有るのみ！」（バランタイン

「ロングアーチとチームフリーダムはここを頼んだぞ？俺はちょっ  
と飲みに行ってくるから？」（ヴァロット

「了解しました」（グリフィス

すんなりと飲みに行けるヴァロット、もうみんな理解している。  
ヴァロットが飲みに行くと必ず酒場で何らかの情報を仕入れてくる。  
それは今まで外した事がないほど正確な情報を……

「旦那、まだ事件ですかい？」（マルジナル



「まあ、そんな物だ」(ヴァロット)

「ヴァロットさん、おごつて?」(ミレリ)

「ったくしょうがねえな?」(ヴァロット)

グラスを傾けながら、付けっぱなしのTVに目をやる。

エルセアでは大変な事になっていた。

美術館の周りを報道陣が取り囲んでいる。

警備の外からしきりに報道していた。

何とジャヌヴィアは報道機関にも予告状を送りつけてきた。

しかも郵送で、消印の分析から出したのは一昨日の事らしい。

「これじゃあ情報の隠しようがねえな?」(ヴァロット)

「旦那、事件ってこれですかい?」(マルジナル)

「まあな、でかいサファイヤを欲しがってるバカが居るようだ、

あれは呪われた宝石って呼ばれてるのに?」(ヴァロット)

「呪われた宝石?」(ミレリ)

「ああ、あれを持つと呪われるって言う話もある位だ。

何でも最初の持ち主の呪いが掛かっているらしくてな、自分の愛する人を失うんだとか?」(ヴァロット)

「何か怖いわね?でもちょっとミステリアスで手にしたい気もする」

(ミレリ)

「俺はごめんだぜ」(ヴァロット)

「旦那、そういやあ地球産の良い酒を仕入れてきたんでさあどうです？」(マルジナル)

「ほう、ロイヤルサート21年物か？入れて貰おう？

それとこの前のE・W・ハーパーは引き上げていく、勘定を頼む」(ヴァロット)

レシートの裏にはある人物の名前が……

「多分そいつが今回の黒幕だ、ジャヌヴィアに依頼して盗ませようとしている。

既に闇オークションに出品広告を出してるよ」(マルジナル)

「ありがとうマスター、ここの酒は相変わらず質が良いから大好きだ」(ヴァロット)

「まいど」(マルジナル)

「……と言う訳だ、俺達は盗まれた物と仮定して動く、明日ウィンドとフォレストが戻り次第、

こいつの屋敷に乗り込む、屋敷の場所と奴が居るかどうかの調べを頼む」(ヴァロット)

「了解しました」(グリフィス)

「俺は帰って寝るわ、明日はまだ大会に付き合わんといかんしな？」

(ヴァロット)

「流石に部隊長だねえ？」（グリフィス

机の上にはウイスキーが一本残されていた。  
飲んでも良いぞと紙が添えられて……

## それぞれの夜（後書き）

次回：プレオ様大活躍、その強さを見せ付ける。

一方、またジャヌヴィアの盗みを阻止出来なかった管理局、マスコミからは酷く叩かれる。

## 2回戦を突破せよ(前書き)

リン達に何かを投げつける。

それは特殊消化液玉、玉が弾けて液がかかるとバリアジャケットですら溶け出す。

## 2回戦を突破せよ

朝起きるとTVは怪盗ジャヌヴィアで持ちきりだった。

いつもならスポーツ枠を拡大してスクールの模擬戦大会を放送するの、

今日は怪盗ジャヌヴィアの事ばかり、どうやったらあの不思議な盗みが出るのか？

そして、かなりの精鋭を集めたにもかかわらず管理局の何と不甲斐ない事かときき下ろす。

あれじゃあ473部隊の人たちが可哀想だよ？

まあ、私はお陰で勝ちを拾えたけどね？

そして今日はいつもより1時間早く試合が始まる。

昨日2回戦が出来なかったから、今日は2回戦から決勝まで一気にやってしまうつもりだ。

長い1日になりそう？

そして迎えた第1試合、私達はあの馬鹿達と当たる。

あいつらの目つきがいやらしい、何かとんでも無い事を考えてるみたいだ。

(今日は脱がしてやるぜ！) (ジョン)

(でもあの表情は何か仕込んでいるよね？自信満々だ) (ブラントン)

(大体想像着くけどな？) (ジョン)

(想像って？) (ブラントン)

(恐らく屁玉対策はバッチリって事だろう?) (ジヨン)

(なるほど) (ブランドン)

「さあ、今日は出来るだけ早く試合を終わらせるよ」「(なのは

もう、屁玉対策はバッチリなんですか?」「(ヴァロット

「ハラーナ社の特別チームを呼んであるわ、

どんな匂いも必ず消してくれるって言う話よ?」「(なのは

「もうスカンクのおならはこりこりやあ」「(はやて

「じゃあ、第1試合始めて下さい」

「行くぞおおおおおおおおお!」

勢いよくジヨンが突っ込んでくる。

「バカめ!」

私達はその瞬間特殊防毒マスクを取り出した。

「掛かったな?」(ジヨン)

その瞬間だった。

上空から落ちてきたのは大量の蛇、蛙、芋虫、毛虫、ナメクジ、ミ  
ミズ

そう作戦名「インセクト」その昔ヴァロットが編み出したとっても嫌な作戦だ。

「イヤあああああああああああああああああああ！」

「これでも食らえ！」（ジョン）

リン達に何かを投げつける。

それは特殊消化液玉、玉が弾けて液がかかるとバリアジャケットですら溶け出す。

キヤロ先生からタオルが入って試合終了だった。

それでも最初の内はタオルが溶けるんで随分何枚かのタオルを必要とした。

「な、なんちゆうセコイ試合や？」（はやて）

「何かこんな試合を昔見たような？」（なのは）

「あいつらなかなかやるな？ここまで俺達の試合を再現しようとは？」（ヴァロット）

「やばいわね？次はあの子達よ？まだ相当仕込んでいそうだから慎重に行かないと危険だわ？」（エリカ）

「この作戦最高！」（ジョン）

そう、ジョンは自分を囮にブラントンの飛ばした補助魔法陣を力ムフラージュしていた。

リン達はジョンに目が行ってしまい補助魔法陣に気が付かなかった



為見事に作戦に嵌ってしまったのだ。

「いや、最高の眺めだったね？」（ブランドン）

「何か俺達の出番無さそう？」（ジョニー）

こうしてどんどん試合が進む、教導隊チームは前衛の二人の力押しで勝利、

生徒会チームは両方とも勝ち抜け、士官学校チームも力押し、

勝ち抜いているチームは殆ど魔力を使っていない、使わない分のこり試合に使える魔力が多くなる。

後は何処でその魔力を使うのか？それが切り札だと踏んでいるようだ。

そして、2回戦最終試合、ティーチャーズ対1年生Cチーム

「不味いなあ、仕入れたの屁玉と取りもち玉と封魔弾だけなのに、使しようがないよ？」（ブランドン）

「こうなったら屁玉攻撃有るのみ、午前中の今の内なら風が俺達に味方してくれる」（ジム）

「それでやるしかないよね？」（フェイマス）

「始め！」

その瞬間、神速で突っ込んできたのはロサード先生だった。

ブランドンは屁玉を取り出して投げようとした物の……



レンジイ FBラフロ・イグ

チームTN2T

FAモミジ・ナカジマ GW高町・プレオ CGティント・ペスケ  
ラ FBカエデ・ナカジマ

どちらのチームもツイン指揮官型、前衛と後衛の指揮をそれぞれ  
分担して行うタイプのチームだ。

こういうチームは前衛、後衛の意気がぴったり合っていないと上手  
く行かない、  
意気を乱されたらそれだけでチームが崩壊してしまう危険性がある。  
反面、それぞれに掛かる負担が小さい為、攻撃の幅が広く多彩な攻  
撃が出来る。

攻めも守りも非常に強いチームである。

両チームが睨み合う。

(前の二人、動くなよ、既に仕掛けた) (グレン)

(なるほど、そう来たか?) (プレオ)

(じゃあ作戦2-6だね) (ティント)

そう、既に作戦は読まれていた。

「始め!」

「クラスターショット!」 (ティント)

上空へ向かって放たれた砲撃が細かく分散して落ちてくる。

そう、なのは直伝のクラスターショット、  
ホーミングバレットより圧倒的に広い範囲を爆撃出来る広域拡散砲  
撃だ。

激しい爆発が両チームの間で起こる。

そして、うねうねと立ち上がっては消えるトラップバインド、全て  
トラップを潰された。

「こうなったら肉弾戦だ！」（ヒビキ

「「そ、そんなバナナあああああああああああああ！」「  
（アヤメ・ヒビキ

そう突っ込んでくる瞬間を狙われた。

絶妙のタイミングでそんなバナナを足下に転送されていた。

倒れた二人に襲いかかるモミジとプレオ、あっという間にフルボツ  
コだった。

クロスリードは見ている物が信じられなかった。

あの強いヒビキが、生徒会Bチームがあっという間に崩壊していく、  
指揮官研修でもライバル同士、実力を認め合った仲なのにそれがこ  
うも簡単にやられるとは？

そして残る二人も肉弾戦の末に打ち倒された。

「残りの二人に手間取っちゃったね？」（プレオ

「仕方ないよ、魔力も奥義も無しじゃあやっぱりきついし」（モミジ

圧倒的強さを見せ付けてチームTN2Tの勝利だった。

## 2回戦を突破せよ(後書き)

次回・3回戦はどんどん進む、ジョン達は勝てるのか？

## 偶然の勝利（前書き）

その瞬間、ジョン達は六面防御陣に閉じ籠もった。

「おい、狭いぞ、もっと広くならないのか？」（ジョン）

「無理！そこまでの魔力ないし」（ブランドン）

周りを教導隊チームに囲まれていた。

## 偶然の勝利

「まさか生徒会チームが3回戦で消えるとは思わなんだわ?」(は  
やて

「プレオ様達よく鍛えられてますね?」(ヴァロット

「当たり前よ、私とお父さんとスクラティと時々ヴィーニヤも  
寄って集って鍛えてますから、そう簡単には負けないわよ」(なのは

「でもあのバナナ転送は別の誰かさんを見てみたいやなあ?」(  
はやて

「あれはあの子達が一番最初に覚えた事だからね」  
ヴァロット君の試合を見ている内に真似するようになって、  
それから暫くは悪戯の嵐だったな、それだけ悪戯でやり込んでるか  
ら年季が違うのよね?」(なのは

「何か俺より質悪そう?」(ヴァロット

などと言っている内にどんどん3回戦が進む、そしてジョン達は  
強敵と相まみえる。

「不味いなあ、向かい風だよ?」(ブランドン

「どつする?向こうのチーム割りとおばさんが多いよ?特に後ろの  
3人」(ジャック

その言葉は相手チームにも聞こえていた。

教導隊チーム、

F Aリオ・ウエズリー（25） G Wラヴィーユ・ヤマザキ（41）

C Gキユヴェ・エリカ（27） F Bローヌ・ヴィラージュ（3

4）

ボーダーラインはリオとエリカの間が存在した（笑）。

「お、おばさんって言ったなああああああああ！」（エリカ

そう本人が一番気にしている事、言っては成らぬ事を口にしていたジャック、

でもそれが偶然にも彼女たちの判断を誤らせる事になる。

因みにエリカは目だけでなく耳も地獄耳なのだ。

「何かもの凄くやばい雰囲気なんですが？」（ジョニー

もの凄い魔力が湧き起こっている。

エリカはSSSの魔力の持ち主、絶対に怒らせては行けない。

にもかかわらず神経を逆撫でしてしまったジョン達、一体これで勝てるのだろうか？

「始め！」

その瞬間、ジョン達は六面防御陣に閉じ籠もった。

「おい、狭いぞ、もっと広くならないのか？」（ジョン

「無理！そこまでの魔力ないし」（ブランドン



周りを教導隊チームに囲まれていた。  
何時フルボッコにされても可笑しくない体勢、もう逃げ出す事は出来なかった。

カシヤン

風上のちよつと離れた所で音がした。  
そうブラントンが屁玉を転送していたのだ。

むあああああああああああああああああああああ

「く、くつさあああああああああああつ！」

次々と倒れる教導隊チーム、次の瞬間、試合場は結界の中に閉じ込められた。

白い科学防護服を身に纏った特殊チームがやってきて消臭剤を散布する。

どうやらこれで匂い対策はバッチリのようなだ。

そう、苦し紛れに撃ったブラントンの作戦が教導隊チームをも倒してしまった。

屁玉はある意味最強のアイテムだった。

そして運び出されていくエリカ達、ブラントンもようやく防御陣を解除する。

「ど、どうして勝てたんだ？」（ジョン）

「何か恐ろしい偶然みたいだね？」（ジャック）

「つ、疲れたあ〜」(ブランドン)

「あの子達なかなかやるなあ」(はやて)

「自分達を囷に防御陣を使う所なんかなかなか良い作戦だ。

あれなら死角から防ぎようのない攻撃が出来る」(ヴァロット)

「あの臭さのど真ん中にいようって言う度胸が凄いわよね？」(なのは)

「まあ、防御陣や結界陣は音と光以外殆どシャットアウト出来ますから」(ヴァロット)

これは大波乱だった。

まさか優勝候補の教導隊チームがこんなに弱いチームに倒されるとは思っても見なかったからだ。

実は、スクールの模擬戦大会は裏の世界では賭け事に使われている。放送を利用して賭を行っているのだが、これは相当な大穴だったようだ。

「予想通り勝ち上がってきたね？」(プレオ)

「じゃあ次はあの作戦で行く？」(モミジ)

「そうだね、でもあれ以外にも相当仕込んでいると思うよ？」(テイント)

「まずは持っている仕込みを少しでも取り上げる事だね？」(カエデ)

そうあのひそひそ話をしていたのはこのチームだったりする。

そして、またよからぬ事を相談していた。  
彼女たちは黒い笑いを浮かべる。

そして3回戦は終わりベスト16が出そろった。  
ここまで生き残っているチームは1年生はジョン達だけだった。

そしてお昼、まあ今日は試合がさくさく進んでいるので少し日程  
に余裕が出たりしている。

昨日みたいに除染に余り時間を取られないのもその要因だったりし  
ている。

「……なるほど分かった、俺の言ったとおりだったな？」（ヴァロ  
ット

「申し訳ありません、あんな簡単なトリックに引つかかるとは思い  
も依りませんでした」（アマローネ

「もう現場検証は終わったんだろう？引き上げて良いぞ、  
後は盗まれた宝石を取り返すだけだから？」（ヴァロット

昼休みを利用して指示を出すヴァロット、部隊長は大変である。

「何かさあ、ここまで残ってる事が場違いだよな？」（ブランドン

「いや、まさかこんなに勝てるとは思わなかった。

ただあの人はスゲーな、頭だけでここまで勝てる事を最初から読  
んだ」（ジョン

「でも次は相当な強敵だよ、校長先生の娘だって、  
しかもかなり鍛えてるし、性格悪そうで何を考えてるか分からない

し」(ジャック

そう、実際性格悪かったりする。

そしてまた汚い作戦を立てる事も事実だ。

ジョン達は4回戦も勝てるのか？

## 偶然の勝利（後書き）

次回：そして始まる4回戦、悪知恵対決を制するのは？

真の実力（前書き）

「オラァ！」

まさか苦し紛れのマツハ拳が当たるとは思わなかった。

どおおおおおおおん

まともに食らったモミジがスタンドまで飛ばされる。

## 真の実力

お昼休みが終わると、ベスト16の試合が始まる。

ここまで残っている優勝候補は、ティーチャーズ、TN2T、生徒会A、チームハラウン、  
まあそんな所だ。

残りは、2年生チームが4チーム、一般参加のチームが7チーム、  
そして1年Aチーム、  
まあ順当にここまで勝ち進んできた事が不思議なチームがこのAチームだ。

そして情け容赦なく始まる4回戦、まずティーチャーズが、それに続いてハラウンが勝ち抜け、  
生徒会Aチームも続く、因みに、SEALSやラベルダ、  
スペシャルフォースは精鋭過ぎて大会への参加が禁止されている。  
それだけ精鋭部隊は強いのだ。

そしてとうとうジョン達の番がやってきた。

相手はチームTN2T、士官学校のチームながら2年生に匹敵する強さを持っている。

その上生徒会Bチームをあっさりと破って勝ち上がってきた。

「今度のチームはただ者じゃあないよ？」（ジョニー

「脱がしてやりたい所だが上手く行くかな？」（ジョン

「インセクトいつとく？」（ブランドン

「あれなら何とかかなりそうだね？」（ジャック

そして開始線で睨み合う。

チームTN2Tは全員エマルジョンシールドを装備、補助魔法陣も全て出している。

これは何か仕掛けてきそうな予感だった。

「始め！」

「行くぞおおおおおおおおおおおおお！」（ジョン

そう叫んで突っ込んでくる。でも読まれていた。

2枚の補助魔法陣がコースを塞いで牽制する。

直後に落ちてくる蛇やらカエルやらの気持ち悪い物を残りの補助魔法陣が全て飲み込んだ。

「へっへっへ、頂きい〜」（プレオ

「これでも食らえ！」（ジョン

消化液玉を叩き付ける物の、それさえ補助魔法陣に飲まれた。

「これだったらどうだ！」（ブランドン

ありったけの仕込みをあらゆる場所に転送したり投げつけたりしたが、

全て補助魔法陣に拾われて終わった。

「く、くそう、もう奥の手がねえ」（ジョン



「諦めなさい、もうあなた達に勝ち目はないから」(プレオ  
後輩のくせに上から目線でそう言われる。  
完全に見下されていた。

「こうなったら肉弾戦有るのみだ！」(ジョン  
プレオとモミジが突っ込んで来る。

「オラア！」

まさか苦し紛れのマツハ拳が当たるとは思わなかった。

どおおおおおおおおん

まともに食らったモミジがスタンドまで飛ばされる。

「嘘？あいつらまだとんでも無い実力を隠してる」(プレオ

そう、マツハの拳は当たればバズーカ砲にも匹敵する破壊力を持つている。

(嘘？俺ってこんなに強かったんだ？)(ジョン

一人減って圧倒的不利になったプレオ達、しかも相手の前衛二人は強力な空手家、  
下手に喰らえば自分達が終わる。

そう、ジョン達はここまでかなり鍛えられてきた。  
でも、失敗続きで何処まで強くなっているのか？さっぱり分からな

かった。

でも、今の一撃でそれは証明された、自分達は強い、それも滅茶苦茶に。

強いと分かればそれが自信になる。

今度は思いつきり強気に出るジョン、プレオ達を挑発する。

「ふっ、もう少し実力を隠しておくつもりだったんだがなあ、仕方ない、遊んでやるぜ？」（ジョン）

「まさかあの子達あそこまで強かったなんて……」（なのは）

「スゲーじゃねえか？まだあそこまでの強さを隠していたとは？」

（ヴァロット）

「なんやその割には余裕のない戦い方をしてたけどなあ？」（はやて）

自信を持てば、強気になればそれだけ相手が小さく見える、

でもそれは慢心を生みやすい、そう、まだジョン達はプレオの頭を舐めていた。

そしてフィールドの状況を見失っていた。

プレオがニヤリと笑う。

「これでも喰らいなさい！」（プレオ）

プレオは屁玉をジョンの足下に叩き付けた。

カシャーン

むああああああああああああああああああ

あん

「く、臭つさあああああああああああああ！」（ジョン）

「た、助けて……」（ジョニー）

「目が痛い……」（ブランドン）

そう自分達の仕込みにやられた。

いつの間にか風向きが変わり向かい風になっていた事に気が付かなかった。

そして、この屁玉の恐ろしさを自ら味わう結果になった。

ジョン達、全員ノックアウト負け、ここで1年生チームは全滅した。

すぐに結界が出来、除染チームが出てきたのでプレオ達は防御陣の中で匂いが消えるのを待つ、

程なくして除染が完了し、どおやら匂いにやられずに済んだようだ。

「そうだモミジちゃんは？」（プレオ）

すぐに保健室に走っていく。

「大丈夫よ、次の試合までに何とかするわ、でもギリギリ間に合うかどうかって所よ、

バリアの上から叩かれてるけど、ガードした腕と肋骨が曲がってるの、痛みは暫く残るかも？」（スー）

そう戦闘機人の骨格は簡単には折れたりしない、金属で出来ている為折れるより曲がる。

その分、内蔵に対するダメージは軽減されるのだが、治療魔法は使いにくくて高度なテクニクを要求される。

まあ、シャマルの弟子であるスー先生にとってこのくらい朝飯前な

のだが……

「あいつらを舐めすぎてたよ、とんでも無い化け物だった」(モミジ)

勝つまでは絶対に油断しては成らない、士郎の教えを今頃思い出した4人だった。

私はその試合を驚きを持って見ていた。

まさかあのバカがあんなに強かったなんて、

負けたとは言えそこまで圧倒的な強さを見せ付けられるとは思わなかった。

破壊力だけなら相当な物だ。

まあ、頭はバカだけど、性格はスケベだし、品位の欠片もないし、それを補って余りある強さ、一体あいつら何者なの？

「あいつら2学期には頭角を現すだろうな？」(ヒビキ)

「お兄ちゃん、あいつらただのバカじゃあないんだね？」(リン)

「ああ、あいつらはただのバカじゃあない、もの凄いバカだいろんな意味で……」(ヒビキ)

こうしている間にベストエイトの試合が始まっていた。

でも、モミジの回復が間に合わずプレオ達TN2Tはここで不戦敗の宣告を受けた。

試合がことのほか早く進んだ為、回復が追い付かなかったのだ。

その後試合が進み、決勝は生徒会Aチームとティーチャーズだった。

流石に実戦経験の差が物を言う世界、先生達の勝利で大会は終わっ

た。

## 真の実力（後書き）

次回：互助会で金を借りたジョンやリン達、バイトを始める。

## 嗚呼、青春のアルバイト生活（前書き）

閉会式の後私達はあのマスクが溶けてしまい返せなくなった事を謝りに行った。

そこで教えて貰った金額はとんでも無い事になっていた。4人で160万、お小遣いじゃあ払えないよ。

「どうしよう、すぐにマスクを返さなければいけないし、買うお金なんてないし、バイトするしかないよね？」（デュワーズ

## 嗚呼、青春のアルバイト生活

「えっ、一つ40万もするんですか？あのマスク」（リン）

閉会式の後私達はあのマスクが溶けてしまい返せなくなった事を謝りに行った。

そこで教えて貰った金額はとんでも無い事になっていた。4人で160万、お小遣いじゃあ払えないよ。

「どうしよう、すぐにマスクを返さなければいけないし、買うお金なんてないし、バイトするしかないよね？」（デュワーズ）

「こつこつ時の為に互助会があるんじゃない？」（マリー）

そう、ここの互助会は結構な額まで貸してくれる。

ただその後は返済計画に従ってアルバイトする訳だけ……

はあ、お父さんに何て説明しよ？

翌日、終業式の後には生徒会室に行く、

「何であんたらが来てるのよう」（リン）

「仕方ないだろ、あの仕込みには結構金がかかってるんだ。

アルバイト覚悟で仕入れなきゃあんな仕込みは出来ないぜ」（ジョン）

「まあそれは僕らも同じかな？」（バラントイン）

結局みんな揃ってアルバイトする事になった。



「これが校長先生へのアルバイト許可申請書、こつちが借用証書、それから誓約書だ、絶対に互助会の指示するバイトを辞めない事、必ず金を返すと誓約すると誓って貰うぞ？」（アード）

「仕方ない、まあ一月の辛抱だ」（ジョン）

「そうだね、そんなに大した額じゃあないし多分一ヶ月、長くても3ヶ月だね？」（バラントイン）

「嘘？私達半年以上だよ、割の良いバイトでないときついよ」（リン）

そう、まずは書類にサインし、借りる金額を申請する。

ジョン達は4人で15万、バラントイン達は4人で10万、そこへ行くと私達は4人で160万、えらい事だ。

ここの互助会の紹介するバイトはそれぞれにバイト料の高い物が  
多い、

何でもこの互助会を作ったのはあのヴァロットさんだそうだ。  
互助会がなかったら私達はサラ金に手を出すしかなかった。  
そんな事したらどうなっていたか？考えるだけでも恐ろしい。

「じゃあ、この求人票から好きなのを選んでね？」

それと4組の生徒は強制的にローエン商会ね？」（イスズ）

「何で僕らだけ強制的に？」（ブランドン）

「あ、この方法はあのヴァロットさんが編み出した修行法でもある  
の、

エマルジョンコレクトの練習をしつつ、魔力アップを図る最適の方  
法でもあるからって、

今の会長もそうやってSSまで魔力を上げたのよ、頑張れば相当強くなれるわ」(イスズ)

「何かちょっと羨ましいぞ？」(ジヨン)

「同じく」(リン)

もう決まってしまった連中はほつといて、求人票を見る9人、

「居酒屋の店員か？夕方6時から夜10時なら昼間は遊べるし、別のバイトだつて掛け持ち出来る、時給1500なら結構割が良いな？」(ジヨン)

「美少女限定・海の家？ただしユニフォームはビキニ？

何かイヤらしいよね？このバイト？でも時給3000か？ちょっと魅力かも？」(リン)

「スタンドの店員時給850？安すぎだろこれ？」(ジャック)

「ファミレスのウェイトレス時給1400かあ？昼間のバイトだし時間が長いからお金は稼げるね？」(マリー)

「仕方ねえ俺は居酒屋にしよう、ここの寮からも近いしまかないも付いてる、まあ何とかなるだろう？」(ジヨン)

「この海の家って期間限定で働けるんですか？」(デュワーズ)

「そう言う働き方もありね？」(イスズ)

こうしてそれぞれのバイトが決まってい

まずは運送屋のローエン商会、ここはブラントン、エヴァン、ジムの3人が、  
ファミレスのウェイトレスはマリー・ボーンが、  
居酒屋の店員にはジョン、バルンタイン、ジョニー、ジャック、デユワーズ、リンの6人が、  
デユワーズとリンは期間限定で海の家も掛け持ちする。  
フェイマスとヘンリーは工事現場の作業員を選んだ。  
因みに一番きついが工事現場の作業員が一番時給が高い。  
何せ高所作業とか、かなりの危険を伴う為それなりに鍛えられてないと出来なかつたりする。

こうして私達のバイト生活は始まった。

私達は林間学校の前日まで海の家と居酒屋を掛け持ちするつもりだ。

取り敢えず、借りたお金である防毒マスクを買いに行く、  
40万は卸値だった、売値はもっと高い。

これじゃあお金が足りないと思ったら、イスズさんが卸屋を教えてください。

そう、ナカジマ家の紹介があれば直接卸値で買う事が出来る。

何せ108部隊に睨まれたらこのクラナガンで商売なんて出来ないのだから。

「あーあ、借金を返す為にアルバイト生活か？何か虚しいな？」  
（リン）

「何か青春を無駄に過ごしている気がする」（デユワーズ）

私達はバイトを決めたその日から働き始めた。  
居酒屋の店員からだった。

こここの居酒屋他にも先輩達が随分働いている。

調味料やお酒の多くを地球から輸入し、非常に美味しい事でも知られている。

それに先生達もよく飲みに来る。

「そう言えばリンって地球出身なんだよな？」（ジョン）

「違うよ、地球出身はお父さんだよ、私はこっちの生まれだし、向こうには小さい頃に何度か行った事があるだけ、最近は行ってないなあ」（リン）

「ふ〜ん、じゃあ向こうの味とかあんまり知らないんだ？」（ジョン）

「そうだね、でも向こうの方が美味しいかな？この料理ぐらいのものは食べられるし」（リン）

「何か地球って美味しい物が多いんだな？」（ジョン）

「このビルは12階建てかなり大きな居酒屋、私達は主にウェイトレスとして働く、ジョン達は裏方と用心棒、裏方は重い物を各階の厨房まで担ぎ上げるのが仕事、

用心棒は酔って暴れる客を取り押さえたり、毎回暴れる客を玄関で追い払うのが仕事、後、重いジョッキ持ちも男の子の仕事、一度に10個ぐらい運ぶ子が多い。

これはこれで結構なトレーニングになりそうだ。それにここの制服、着物風で可愛いから好き。

「何よ、このビキニは？」

翌日とんでも無い制服に私達はお冠だった。

それは最早ビキニと呼べるのだろうか？

所謂マイクロビキニという奴だ。

殆どヒモ、肝心な部分が隠れてるだけ、ちょっとズレたらいろいろ見えちゃうよ？

Tバックだし前の方もギリギリだし食い込むし、時給3000の訳が分かった気がする。

ここのお店入るだけでお金を取る、その上売っている物自体は大したこと無いのに単価は滅茶苦茶高い。

女の子にお触りは禁止だけだけど、何か見せ物にされてる気分、でも辞めたくても辞められない。

あの誓約書にサインしてしまったし、お金を返すにはそれなりに時給の良い所でないといつまで経っても返せない。

何か随分貧乏くじを引いた気がする。

嗚呼、青春のアルバイト生活（後書き）

次回：カレルの結婚式、一方ジョン達は鍛える事の大切さを学ぶ

## 夏休み！（前書き）

そう、今日は次元航行隊のカレル・ハラウン提督と、月村家の次女静音との結婚式だった。

場所は地上本部大ホール、10,000人収容の大ホールなら問題なく行える規模だ。

流星に名門家、おまけに総局長の息子と有っては招待客が半端じゃない、

そこでこの巨大ホールが必要となる訳で、警備の数も半端じゃあなかつた。

夏休み！

夏休みに入っすすぐの事だった。

「あ、ヴァロット1佐だ」(りん)

付けっ放なしになっているお店のTVに目をやると、あのジャヌヴィアの使ったトリックを解説していた。

「そつだ、この台座に潜んだ後、小さな蜘蛛に化けて上の展示ケースに侵入したんだ。」

そして極細の釣り糸、恐らくはメタルラインの0.02号辺りを使っただらう？

それを結んで準備は完了だ」(ヴァロット)

「なーんだ、あんな簡単な方法にみんな引っかけたんだ？」  
(リン)

トリックなんて物はネタバレしてしまえば結構簡単な物だったりする。

でも単純なトリックほど引っかけた時の効果は大きい。  
まあ世の中そんな物だ。

「でもヴァロット1佐は凄いな、あのトリックを簡単に見破るんだから？」(リン)

一時話題になったジャヌヴィアのトリックは説明されてみると意外に簡単で、



結局世間は「なーんだ？」で終わってしまった。  
まあ、一部の推理ファンは奇想天外な方法で次の仕事をして欲しいと願う不謹慎な輩も多い。

こちらはスペシャルフォース、

「よし、チームウィンドとチームフォレストは中の警備、  
チームマウントが外の警備だ、フリーダムとファイヤは交代でクラ  
ナガン全体の警備を頼む。

ここの指揮はグリフィス、外の警備はアマネ、中は俺が指揮する」  
(ヴァロット)

そう、今日は次元航行隊のカレル・ハラウン提督と、月村家の  
次女静音との結婚式だった。

場所は地上本部大ホール、10,000人収容の大ホールなら問題  
なく行える規模だ。

流石に名門家、おまけに総局長の息子と有っては招待客が半端じゃ  
あない、

そこでこの巨大ホールが必要となる訳で、警備の数も半端じゃあな  
かった。

スペシャルフォースの部隊長、ヴァロット夫妻は招待客として中  
に入る。

それでも警戒は怠らない。流石だ。

俺達スクールの生徒にとってこれは美味しいバイトだった。

夜の居酒屋のバイトしかしていないんで昼間は思いつきり暇だし、  
日当3万は美味しかった。

武装隊の支給品のデバイスを借りてセットアップ、  
外の警備に加わる。

話によると、ここの卒業生はスクールにいる内に付き合い始めて、卒業して暫くすると結婚するパターンが多いそうだ。ヴァロット1佐もその口だったらしい。結婚より先に子供が出来たとか言う話もある。

中ではバロー口提督のバンドが大盛況だった。

伝説のバンドに祝福されるとその後幸せな結婚生活が送れるという伝説もあるほどだ。

この結婚式には政界、財界人も多い、次元世界にその勢力を広げつつある月村財閥、

そして超名門家のハラオウン家、その力が相当大きい事を窺わせていた。

だから警備には相当な気を使わざるを得なかったのだ。

そしてこの巨大ホールを使わないと結婚式が挙げられないほど招待客が集まる。

カレル提督はこのスクールの卒業生だけあって、スクール出身の先輩方も多く招待されていたりする。

それに司祭が凄かった。聖王って一国の王様だろ？そんな人が司祭ってどれだけ凄いんだか？

(何かスゲーな、あの人達、俺もあの人達みたいになれるのかな？)  
(ジョン)

俺は何となく羨ましくも、世界の違いを感じていた。

所詮一般庶民とセレブは違う、地を這いずり回るだけの存在と雲の上の人とでは存在が違いすぎる。

俺はそんな事を思いながら、警備をしていた。

「ええい、リンディ、その幸せを噛み締めろやあああああ！」(レ

テイ

ズポツ ドクンツ ドクンツ ドクンツ

一升瓶を口に突っ込まれてしこたま流し込まれた。

最後は毎回恒例となったあの酒乱大魔王の一暴れによって式は終わる。

作：まだやってたんですか？この人は……

そしてすぐに日当支給、これは美味しい、既に自分の受け持ち分は返せるだけのお金が貯まった。

でもバイトを辞めるつもりはない、もっと貯めて良い暮らしがしたいから、

これ以上親に負担を掛ける訳にはいかないし、早く独立したい所だ。

翌朝だった。たまたま早く目が覚めた俺は朝の散歩に出た。

午前4時、外が明るくなり始めて、そんなに時間が経っていない。

「あれは……ヴァロット1佐……何をやって居るんだろう？」（ジョン）

慰霊碑に向かって祈りを捧げていたのはヴァロット1佐だった。

「よし、始めるか？」（ヴァロット）

海上訓練施設には当直明けの小隊が揃っていた。

「おーし、朝の訓練を始めるぞ？」（ヴァロット）

そう、一般の利用者に迷惑が掛からぬように、スペシャルフォー  
スは訓練をしているのだ。  
暫く訓練の様子を眺める事にしたジョン、でもそれはもの凄くきつ  
い物だった。

まずはストレッチで体をよく解す、それからアスレチックコースを  
出してそこを全力で走る。

ただのアスレチックコースじゃあない、あちこちにトラップがあっ  
て非常に過激なコースだ。

そして、コースを10周ほど走ると組み手の練習、しかも信じられ  
ないほどレベルが高い。

今日はチームフリーダムが相手のようだ。

「すげえ！何て化け物！」（ジョン）

チームの4人を相手に一人で戦いながら悪い所を指導している。  
あの人の強さはどうなっているのだろうか？鍛える必要なんて無いの  
にそれでもまだ鍛えている。

あの人はどれだけ強くなれば気が済むのだろうか？ふとそんな疑問が  
浮かんだ。

そして組み手が終わるとまた訓練施設の外周を流すようにマラソン、  
そうしている内に校長先生一家やフェイト提督達、一般市民も姿を  
見せる。

このコースは常に解放されているから訓練にやってくる人も多い、

「俺も走るか？」（ジョン）

そこへ転送でやって来たのはナカジマ家、一気に人数が増えて賑  
やかになる。

大人も子供もなく、まずは外周をマラソンから、そんな風にこの人  
達の朝は始まるようだ。

更に生徒会長達もやってきた。  
この時間やって来てそのまま生徒会活動をするらしい。

(なるほど、みんなこんなに早くから鍛えていたんだな？俺も後れを取る訳にはいかない)(ジョン)

挨拶しながら走っていると、スペシャルフォーは丁度解散する所だった。

「ご苦労様でした！」

小隊の人たちが頭を下げる。

「ん、ご苦労、俺は一度帰ってから出直す、引き継ぎを頼んだぞ？」  
(ヴァロット)

転送で帰っていった。

そして出勤してくる時はバイクだ。クラシカルなデザインの大型バイク、俺もちよっと憧れている。  
でも輸入バイクは高いから手が出せそうにない、もっとバイトを頑張ったら買えるかも知れないけど？  
当分は夢の一つかな？

当分は夏休み、昼間はやる事もないし、どこかへ遊びに行こうにもお金がない。

普段の授業とは別に俺は鍛え直す事にした。

「おい抜け駆けは狡いぞ？」(バランタイン)

「だったらお前らもつき合えー！」(ジョン)

そしてジョニー、ジャックも加わって次の模擬戦大会に向けたトレーニングが始まった。

この4人一人が御式内で残りは空手を習っている。

この前の大会で空手の強さは証明された。もの凄い破壊力、まだそんなに多くの技を知っている訳じゃあないけど、

当たれば充分に相手を倒せる武術だという事はよく分かった。

「お、お前ら真面目だな？休み無く練習か？」（ヴァロット

「ま、まあそんな所です、ある程度技の強力は分かって来たんですけど組み手がまだ上手くなって……」（ジョン

「そうだな？空手は一度与那覇道場まで行ってこい、クラナガン大学の近くだ。

あそこならとんでも無く強い先輩方が居るから毎日フルボッコにして貰える。

痛みと共に体に刻んだ事は絶対に体が忘れない、記憶を失ったとしても体は必ず覚えている。

俺もそうやって強くなった、お前達にも出来る。

稽古は自分を裏切らない、稽古しただけ強くなるんだ」（ヴァロット

「あの、質問があるんですが、毎朝あんなきつい練習を？」（ジョン

「ああ、お前が見てたのは知っている。あれは俺の日課みたいなものだ。

毎日鍛えてないと気持ち悪くてな、強くなると衰える事が恐ろしいのさ、

それに昨日の自分に負けたくないからな？だから鍛えている。

稽古しただけ強くなるし、その分昨日の自分には負けたりしない。

稽古は自分を裏切ったりしない、自分を裏切るのは自分の心の弱さがそうさせるんだ。

弱い心無くせば自分になんか負けたりしない、自分に負けなければその内強くなれるさ必ず」(ヴァロット

「あの、残された俺はどうしたら？」(バルンタイン

「そうだな、お前はスペシャルフォースの訓練につき合え、その時技を教えてやるっ？」(ヴァロット

こうして俺達はそれぞれに稽古を始めた。

夏休み！（後書き）

次回：与那覇道場の門をくぐるジョン達、きつい稽古が始まる。



## スー先生の秘密（前書き）

「お前達、ここに来るといふ事はそれなりに覚悟は出来ているな？」  
（スー）

ちょっと目が怖い、でもちょっと嬉しそうだ。

## スー先生の秘密

次元世界における武術の殿堂の一つ、空手の与那覇道場はクラナガン北東駅のすぐ近く、クラナガン大学正門から歩いて15分の所にある。

クラナガン中央駅で乗り換えて、在来線なら東北方面線で5つ目の駅、

高速レールウェイなら、一駅（クラナガン大学前）だ。

今から26年前地球からやって来た一人の武道家で医者との与那覇輝馬氏によって建てられた。

彼は今クラナガン大学医学部麻酔科教授としてその辣腕を振るっている他、空手部の顧問を務めている。

彼の伝えたこの武術はミッドチルダの人々の心を捕らえるにはそんなに時間は掛からなかった。

そのあまりに強力な破壊力、とことん鍛え上げられる肉体、そして揺るがない精神性、

どれをとってもストライクアーツより優れていた。

道場を建てた頃は、しょっちゅう道場破りが来たという。

まあ、それも道場の貴重な収入源だったりしたのだが……

因みに道場破りは1回1万払って貰うシステムで、成功すれば100万くれるそうだが、

未だに成功した人間は居ない。とてもストライクアーツでは勝てないのだ。

そして、その与那覇輝馬先生の娘がスー先生、血の繋がりはなく、養女なのだとか？

最初、この道場は数人の大学生を門下に始まった。

クラナガン大学空手部がその発祥だという。

最近では、地域の子供達も集め、年齢に応じた空手教室を開くまでに  
なった。

その月謝も収入源で、そのお金で最近では道場を拡張したり、合宿を  
行っていたりする。

ただ、最近では入門生が減る傾向で、ちょっと苦労している。

御神一族の開いている御式内の道場に人気を奪われて居るみたいだ。  
そうミッドチルダの格闘界は今熾烈なシェア争いにある。

一番苦労しているのは旧来のストライクアーツの道場、門下生が激  
しく減少し、

経営が成り立たない所も多い。

まあ、ストライクアーツでも魔法戦専門なんて所はまだ経営出来  
ていたりするが、

その魔法の天敵とも言える地球の武術に人気を取られつつある。

それもその筈、魔法は魔力持ちでないと身に付けられないが、

格闘技はやる気さえあれば誰にでも身に付けられる。後は本人の努  
力次第だ。

そして鍛えて鍛えて鍛え抜いた末にSSSの魔導士でさえ倒す格闘  
家が出始めている。

今まであり得なかった事だ。

今までSSSと言えば雲の上の存在、神に等しいとさえ言われた  
存在だったのに、

その価値観は根底から覆された。

この与那覇道場が出来てから、何人かのSSSが与那覇氏に倒され、  
その上スクールが出来てからは武術を使うSSS級魔導士が次々と  
誕生し、

次元世界のパワーバランスは大きく変わった。

と、ここまでがこの与那覇道場の成り立ちな訳だが、今俺達はその

与那覇道場の前に立っていた。  
スー先生にアポ無しで来てしまった。

目の前に重厚な門構えの道場、いかにも日本建築という感じだ。

「どうしよう？入ろうか？でもちょっと怖いな？」（ジョニー）

「此処まで来たなら入るしかないだろう？」（ジョン）

ちよつとビビリが入りながらも、中へ入っていく3人、そこには

……

「何でお前が居るんだよ？」（ジョン）

「あんたらこそ何でここに来るのよ？」（ツグミ）

ここにも一人、強くなる為にここに来た人物が居た。

俺達に負けた事が相当悔しかったらしい。

そしてスー先生が出てきた。今日は休暇らしい。

スー先生は校医として、スペシャルフォースの医務官として、  
高度医療センターの外科医としてその辣腕を振るうスーパードクタ  
ーだ。

尤も、保健室の主であり、俺達の空手の先生でもある。

「お前達、ここに来るといふ事はそれなりに覚悟は出来ているな？」

（スー）

ちよつと目が怖い、でもちよつと嬉しそうだ。

「これ以上負ける訳にはいかないんです」（ツグミ）

「俺も周りに舐められる訳にはいかない、ミッドチルダを制するまで強くなりたいんです」(ジョン)

「ほう、この星を制すると？」(スー)

「インターカップ優勝が俺の夢ですから？」(ジョン)

「なるほど？多分今年は無理だが、来年まで努力すれば或いは出来るかも知れんな」(スー)

こうして俺達4人、与那覇道場の門下生になった。

「朝は5時から練習だ、柔軟をやってマラソン、その後みんなで朝食を取る。」

「ここではみんなで行動する事だ」(スー)

この道場以外と仲間意識が強い、以前俺の居たストライクアーツの道場とは大違いだ。

あの殺伐とした雰囲気とは違う。ここではみんなで助け合ってみんなで強くなる事を目指していた。

「朝5時じゃあ電車が無いんですが……」(ジョニー)

「だったらマラソンしてこい、朝6時半までで良い、その頃みんなマラソンから帰ってくる時間だ。」

それからみんなで食事を作ってみんなで食べる、それがこの道場のしきたりだ。

それと月末までに月謝を納めるよ」(スー)

意外とそう言う所はしつかりしている。

そう、この門下生の内シニアクラス（高校生以上）は、こういう生活を送っている。

それと月謝は1万って相当安い、殆ど食費ぐらいだ。

この道場、門下生は500人近くいる。

その内のシニアクラスが200人ぐらい、ジュニアクラスが300人ぐらいだ。

ジュニアクラスは月謝3000って言う安さ、それもその筈で、

ジュニアクラスは午後3時から午後6時までの道場稽古と、年2回の合宿があるだけだ。

シニアクラスは早朝と午後6時からの2回稽古、俺達はバイトがあるんで、朝のみの稽古になっている。

それと驚いた事が二つ、謎に包まれていたスー先生のプライベートだが、

既に結婚していた。ご主人は3才年下の男で、やはり医者になっているという。

何でも医者になりたての頃、年下の学生（空手部の後輩）を押し倒したらしい。

「いやあ〜参った参った、あの時はいきなり出来るとは思わなくてさあ、

出来たって言ったたら親父にこつてり絞られて、その後旦那に責任取らせて婿養子に入って貰った訳、

子育てしながら医者をするのは大変だったよ」（スー

泡盛を井で飲みながらスー先生はそんな事を話していた。

因みにスー先生の息子、与那覇海人<sup>よなはかいと</sup>15才、現在クラナガン第1高校2年生、

クラナガン大学医学部を目指す医者のお卵だ。

浅黒い肌に黒い瞳、黒い髪の毛、どう見ても与那覇輝馬先生を含めて親子孫って感じた。

誰も輝馬先生と血が繋がっていないなんて疑わない、って言うかどうか見ても繋がってるだろう？

ついそう思ってしまう位よく似ている。空手も滅茶苦茶強い。

既にSSS級の強さを認められているので、インターカップには出てこない。

スー先生は普段寡黙だけれど結構豪快な人だと思った。

こうして俺達の修行が始まる、俺達は組み手を中心に技を叩き込まれる事になった。

## スー先生の秘密（後書き）

次回：そして始まる与那覇道場での修行、その他の生徒はどうして  
いるのか？



## それぞれの修行（前書き）

ドゴオオオオオオオツ

捌き損ねて1撃貰えば壁まで飛ばされる。

痛いとか痛くないとかそう言うレベルの話じゃあない、滅茶苦茶に利く。

すぐに回復魔法を掛けて貰えるが、恐ろしいほどの破壊力を味わう。

## それぞれの修行

朝4時起床、俺達は入念なストレッチをすると胴衣を詰め込んだリュックを肩に走り出す与那覇道場に向かって。

まだ始発さえ動いていない。

俺達にとってそれが日課になっていく、俺達にとって強くなる為の第一歩、

スクールの授業だけでは足りない物を補う為の試練、それがこの道場での稽古だった。

昨日スー先生に渡された物がある、茶帯だった。

「本来世間一般に出せばお前達は充分に黒帯だ。だがこの道場の中ではお前達の強さはこの程度でしかない」（スー

その言葉は重かった。

翌日からその言葉の重さを嫌と言うほど味わう事になる。

「おはようございます!」

6時25分、何とか間に合った。

これからこのペースでやって行けそうだ。

そしてそこへみんな戻ってくる、そして朝食の支度、ここの食事はかなり質素だ。

1割ほど麦を混ぜた飯を炊く、豆腐と若布のみそ汁、そして焼き魚と漬け物、

たったこれだけの質素な食事、ツグミはとても飯が足りないので巨大おにぎりを持参している。

7時から朝食、食事が終わるとみんなの後片付け、そして道場の

掃除、

道場の中だけでなく、外や周辺の道路、トイレなど全て掃除する。それが終わると仕事や学校のある者は通勤していく、夏休みな者はここから午前中一杯稽古が始まる。

「良いか、お前達に言っておく事がある、この道場とスクール以外の場所で空手を使う事を禁ずる。

今のお前達では使えばきつと人を殺してしまうだろうか？ケンカなどには絶対に使うなよ？

充分な手加減が出来るようになるまでは使っては成らない。

まあ、例外として自分の命を守る時、誰かの命を守る時以外は使わない事だ」(スー

あまりに危険すぎる武術は、その使用さえ憚られる物だ。でも俺達はまだそのことを分かっていなかった。

稽古はまず基本的な型打ちから始まる。

型とは最小限の動きで最大の破壊力を得る為の決まった動き、より完璧であるほど巨大な破壊力が生まれる。

「そうだ、前羽の構えは徹底した防御の型、そのまま回し受けに繋げて相手の攻撃を捌く為にある。

相手が突いてくる所を内側に捌けば捌いた逆側の手がそのまま攻撃態勢になっている。

外に捌けば捌きと同時に攻撃出来るんだ」

厳しい指導が行われる。

先輩の突きを捌いて1撃返す、まずはその練習。

「ぐあっ」

ドゴオオオオオオッ

捌き損ねて1撃貰えば壁まで飛ばされる。

痛いとか痛くないとかそう言うレベルの話じゃあない、滅茶苦茶に利く。

すぐに回復魔法を掛けて貰えるが、恐ろしいほどの破壊力を味わう。

「これは三戦立さんちんだちの型、捌けない攻撃が来た時使う物だ。

全身の筋肉を絞め、完璧なこの型が出来た時、どんな衝撃にも耐えられるようになる」

そう言ったスー先生はニヤリと笑う。

この黒帯の人たちは校長先生のフルパワーのデイベインバスターでさえ耐えきる事が可能だという。

つまり校長先生では既に勝ち目が無いのだ。

いくらSSSと言ってもこういう天敵が居る以上そう簡単に勝てないのが世の中だという。

「どうだあいつらは？」

「流石にエリート学校の生徒だ、飲み込みが違う、教えた事を三日あれば出来るようになってる。

この分なら1年後にはインターカップだって取れるかもな？でもその前にSSSを超えてしまつかも？」

こんな修行が一週間続いた。

こちらはバランタイン、

「どわああああああ！」

かなり高く放り上げられて地面に叩き付けられる。

「何度言ったら分かる、力で対抗しようと思うな！相手の力を利用するんだ。

まずは相手の攻撃を捌いてそのまま相手の力を利用する感覚を身に付ける！

そうすれば少ない技でもかなり戦えるようになる。

余分な所に力が入っているから痛い目に遭うんだ。

それに御式内は自ら攻撃を仕掛ける武術じゃあない、

相手の攻撃を起点にして相手を倒す武術だ。使えるようになれば相手は勝手に自滅してくれる」（ヴァロツト

こちらもかなり厳しい指導が続いていた。

既に受け身は完璧になったのだが、組み手がイマイチ、まあヴァロツトが相手では仕方のない事だが、

それでもかなりの強さを身に付けていくバラントインだった。

「いい加減早くこのバイト終わって欲しいよ」（リン

「これ風俗だよな？思いつき」（デュワーズ

そう、ちょっとズレたらはみ出しそうなマイクロピキニ、それだけでやばいのに、

ここの床は滑りやすく出来ている。滑って転ぶ子も多い、

まあ注文された物を落としてしまってもお客さん持ちなんだけど、その瞬間ぼろりもよくある。私達はすり足が出来るから簡単には転ばないけど、

この時点で風俗だと思う、確かにやっている事はウエイトレスだけ

ど……

簡単には転ばない私達に対してそんなバナナを使う客もいる。勿論バナナは滅茶苦茶高くしてあるし、落としてしまった食べ物にはバナナを使った人持ちになる。

でも使ってくる。で、転べばぼろりするし思いつきり食い込む。

私はまだマシだけど、私より胸の大きなデュワーズはよく狙われる。それにデュワーズは私より具が大きい、思いつきり食い込むとちよびっとはみ出す。

それを後ろから覗き込む客の何と多い事か？絶対風俗だ。

「ここの客、どう見てもあのスケベよりもっと程度が低い、何で男ってここまでバカでスケベなんだろう？」

それでもって何でそう言う奴に限ってこんなに金を持ってるのよ？

世の間違ってるない？

最悪のバイトも後一週間、林間学校までの我慢だ。

私達は泣きたい気持ちを我慢してアルバイトに精を出す。

「おい！その荷物俺が目を付けていたのに！」（ブランドン）

「へっへっへ、早い者勝ちい〜」（エヴァン）

そう、重くて大型で距離の長い荷物ほど運送単価が高い。

ローエン商会でアルバイトする4組の生徒達はそう言う荷物を取り合う。

近距離の小型荷物は大した金にならないのだ、その分数をこなさないといけないし、

時間のロスが大きい、だから成るべく単価の高い荷物を優先して運ぼうとする。

「おい、引越しの依頼だ、誰か行く奴いるか？」（社長）

「俺行きます！」（ジム）

運送よりも引っ越しは更に単価が良い、こういう依頼はみんなすくなく飛び付く、

ローエン商会は既に業界ナンバーワンの輸送量を誇る会社に成長していた。

フェイマスとヘンリーはビルの解体工事現場で働いていた。

「おらあ」　ボゴッ

「フオア」　ドカッ

教えられた技でビルをぶっ壊す、道具さえ使わない、

「兄ちゃん達やるなあ？」

一緒に働くおっさん達が感心している。

普通なら削岩機とか、大型ハンマーとか、ツルハシとかを使う所だが、

この二人素手でやっている。こつする事で技の威力を底上げし、道具代をケチってその分稼ぎを多くする。

そうやって自分を鍛えながら金を稼ぐ二人だった。

「一体どう言う力してるのよ？」（リン）

「まあこれ位普通だろ？」（ジョン）

中身の詰まったビール瓶20本入りのケース三つ、

その上にサーバー用のビールの樽4つを乗せて持ち上げ運ぶジョン、  
とんでも無い力だった。

既にパワー型戦闘機人に匹敵している。

そう彼はこのバイトで体を鍛えていた。でも本人はそれがどれ位の  
効果をもたらしているのか？

まださっぱり気が付いていなかったりする。



## それぞれの修行（後書き）

次回：事件発生、ジョンがやらかしてしまいます。

## 殺人拳（前書き）

「はははは、今のは外したがもう外さねえ、死ねやあああああ！」

相手の指がトリガーにかかる。

もう迷っている暇はなかった。

ドパアアアアアアアアアア

もの凄いい音がした。

## 殺人拳

ジョン達は早朝の街を駆け抜ける。道場に向かって……  
そして今日もきつい稽古が始まる。

「流石にスゲーな、エリート学校の生徒だけあるぜ？」（先輩A

「そうそう、マツハに達するまで俺1年かかったもんな」（先輩B

そう言われるとちょっと照れくさいジョン達、最初にマツハに達したのはジョン、

そして今やっとマツハに達したのはツグミだったりする。

空手の攻撃はただ殴るだけではない、抜き手や手刀、掌底や裏拳、鶴頭など

手首から先の変化により、多彩な攻撃を仕掛ける。

そして体の硬い部分なら何処でも武器に変え相手を攻撃する武術、鉈のような肘、砲弾のような膝蹴り、足刀は電信柱をも真っ二つに切り裂く。

そして体を作る方も凄いい、とにかく鍛えられる筋肉は全て鍛え上げる。

筋肉を絞める事で鎧と化す体、大抵の攻撃は受け止められるようになってくる。

ストライクアーツではボディーパー対策などはよく練習した物の、ここまで全身鋼の肉体を目指すのも珍しい。

「そうだ、呼吸を使って横隔膜をコントロールするんだ。

そして内臓を最もガードの堅いあばらの中に収納してしまうんだ」

そう、内臓上げ、これが出ると内蔵へのダメージを殆ど受けなくなる。

この何日か攻撃よりも防御に重点を置いた稽古してきた。

もう攻撃力は充分にある、それよりも高度な組み手、防御を中心に体を作り、

技を覚え、信じられない防御力を身に付ける。

だんだんと強くなってきた事を実感するジョン達、でもまだまだ黒帯の人たちにはまるで歯が立たない。

この道場の黒帯はみんなSSSを認められているのだ。

因みにこの道場に入門すると白帯、その上が赤帯、そして茶帯、その上が黒帯となる。

「一体何時になったら黒帯になれるんだよ？」（ジョン）

「焦るな、お前達はまだ使える技も少ないし、空手の神髄も分かっていない、

そんな段階で黒帯がやれる訳が無からう？」（スー）

まだそんな段階でないと諭される。

まあ仕方がない、まだ黒帯の人には指一本触れられないほど差があるのだ。

少しでも早く強くなりたい所だが、ビリー先生の言葉が頭を過ぎる。

「強くなる為の努力ほど時間が掛かる」

「まだ道のりは遠いのかあ？」（ジョン）

「焦っても仕方ないよ、黒帯貰えるまでガンバろ？」（ツグミ）

そして今日も修行に明け暮れ寮まで帰っていく。

「あれ、ジヨンじゃねえ？」

「本当だ、新しい仲間がいるようだなあ？ちょっと遊んでやろうぜ？」

「やめとけよ、あいつはスクールに入ってかなり強くなって、もう俺達じゃあ手も足も出せねえよ」

「この前の大会は随分セコイ手で勝ってたようだがな？」

「お前最後の1撃見なかった？あれは喰らったらやばいだろ？」

「でもなあ、俺達裏切って一人だけ良い子ぶってるのが許せねえよ、近い内に襲撃してやろうぜ？」

かなりやばそうな連中が、ジヨンを見つけてしまった。

そして良からぬ企みを始めた。

そうとは知らないジヨン達は今日も道場に出かけていく、新しい技を教わる為に、

「今日から抜き手の強化法をやる、逆立ちしてみる」

逆立ちするジヨン達、

「掌ではなく指先だけで体を支えるんだ。

その状態で腕立て伏せ、最終的には指一本で出来るまでになって貰う。」

それが出来るようになれば今まで以上のバランス感覚と抜き手の強

さが100倍近く向上する」「スー

スー先生は実演して見せてくれる。

「おい、本当にやるのか？」

「嗚呼、それに万が一の場合にはこれがある」

「お前そんなに危ない物どこから仕入れてくるんだよ？」

「まあ、蛇の道は蛇って奴さ」

その日の帰りだった。

ジョン達の前を塞ぐ3人、更に後ろに4人、とても穏やかに済みそ  
うにない。

「よう、ジョン、久しぶりじゃあねえか？」

「なんだお前らか？何の用だ？」（ジョン）

「おい、ジョンこいつら誰だよ？」（ジョニー）

「昔ストライクアーツをやった頃の知り合いだ、尤も弱すぎてい  
つも俺が泣かしてたけど？」（ジョン）

「てめえ、舐めてんじゃあねえぞおおおお」

その瞬間チェーンを振り回して殴りかかってくる相手、ジョンが  
手刀を振り抜く、

チェーンは真つ二つに切断されていた。

「無駄だ、やめとけ俺に係われれば死ぬぞ？」（ジョン

今のでかなりビビる7人、これが人間業でないと分かっているよ  
うだ。

「全員でかかれ！」

リーダー格の男が指示を出す。

背中合わせで構えを取るジョン達、付け入る隙がなかった。

「だったらこれはどうだ？」

その男が取り出したのは拳銃だった。

「おい、そんな物を出したら手加減が出来ないだろう？お願いだから俺に人を殺させないでくれ」（ジョン

それは脅しではなくジョンの本心だった。

でもその言葉は彼には届かなかった。ただの脅しと取られたようだ。

「ハア？余裕くれてんじゃあねえぞゴルア」

トリガーに指がかかる。

パアーン

その瞬間、咄嗟に避けたジョン達の間を通過した弾丸は後ろにいた4人の内の一人を撃ち抜いた。

不味い事に左胸を貫通している。その一人が崩れ落ちる。

「はははは、今のは外したがもう外さねえ、死ねやあああああ！」  
相手の指がトリガーにかかる。  
もう迷っている暇はなかった。

ドパアアアアアアアアン

もの凄い音がした。  
ジョンはそれが信じられなかった。  
人間が一瞬でひしゃげた。自分のパンチ一発で……  
マツハの拳が真の力を発揮する時、それがどんな事態を引き起こすのか？  
今までまるで理解していなかった。

目の前の壁には人型をした血の跡が、足下には胸のひしゃげた人間が転がっていた。

「空手の使用を禁ずる」、スー先生の言葉が頭を過ぎる。  
ジョンは呆然とその光景を眺めているしかなかった。

ジョンニーがすぐに警防署に通報、防災署も駆け付けるがもう手遅れだった。

二人死亡、幸いにしてこの一角、強盗事件が多発する為防犯カメラが設置されていた。  
すぐに映像が回収され、ジョンはその日の夕方には釈放された。

でもジョンの精神は崩壊しかかっていた。



殺人拳（後書き）

次回：ヴァロットがジョンの救済に乗り出す。

事件の後に（前書き）

「彼を今一人にする事は危険です。もしかしたら自殺の危険さえあります」（シャマル）

駆け付けたシャマルはそう言う意見だった。

「出来る限り早くカウンセリングするべきです」（シャマル）

「やっぱりシャマル先生もそう言う意見ですか？」（なのは）

## 事件の後で

現場は騒然としていた。

108部隊の護送車も来ている。

防災署は要救助者が死亡している事を確認すると引き上げていった。

クロスリードと、ヒビキ、ティア先生が駆け付ける。

校長先生もやってきた。

「なるほど、こいつらは元ジョンの居た道場の奴らか？

逮捕された5人を取り調べる。

調べるにつれてだんだんと明るみになる悪事、こいつら中学を出てから進学せずに遊んでいた。

ある程度ストライクアーツをやっていた物の、ジョンが道場を辞めると同時に道場が閉鎖になり、

その後は街の破落戸ゴロツキになった。

そして最近は路上強盗を繰り返し、防犯カメラにも何度か写っていた事が確認された。

でもまさか拳銃まで持っていたようとは警察も思っていなかったようだ。

「どうやら彼は悪くないようです。

昔の彼の知り合いが彼を襲撃しようとして事件を起こし、

結果正当防衛で死亡した物と認定されました」（ティアナ

「しかし凄い物だ、空手の技があそこまで破壊力のある物だとは知らなかった」（クロスリード

「俺達の学んでいる武術は本来殺す為にあるんだぜ？その力の一端が出てしまったに過ぎない」(ヒビキ)

「まだ殺す覚悟も無い内にこれだけの力を身に付けてしまったと言う事実が不味いわね？」(なのは)

「でも、彼の心は闇に落ちていくでしょう、ヴァロット君のように……」(ティアナ)

「彼の心を救えるのはヴァロット君しか居ないわね？」(なのは)

「どうですか？彼の様子は？」(スー)

遅れてやって来たのはスー先生だった。

「かなり精神的にやられていますね？暫くは立ち直れないかも知れません」(ティアナ)

ジョンはまだ呆然としていた。

自分がどれほど強いのか？どれほど強くなったのか？そしてそれがどれほど危険な事なのか？

今はつきりと分かった。

それは確かに正当防衛だった。刑事さんにも「君は悪くない」そう言われた。

でも、とても納得出来なかった。自分は人を殺してしまった。しかも、相手は知り合いだった。

ただ、キレやすくして何をするか分からない奴だったけど、まさか拳銃を撃ってくるなんて思わなかった。

セットアップしている暇もなかったし、防御の厚い胸板なら死ぬ事はないだろうと思った。

あの瞬間、飛び込みながら左手で外回し受けて拳銃を払った。当然右手は正拳を打ち出す構えになっていた。

そこから打ち出されたマツハの拳、それは途轍もない威力を持っていた。

自分の拳を見ると震えてくる、まさか自分が人を殺すなんて思わなかった。

ちよつと当たっただけなのに、卵の殻を砕くような感触しかなかった。

でも、相手は胸が陥没し、衝撃でビルの壁に叩き付けられて即死だった。

「俺、何の為に空手をやって来たんだろう？これから先どうしたらいいのだろうか？」

こんな筈じゃあなかったのに、殺す筈じゃあなかったのに、この先どうしたらいいのだろうか？」

また挫折した、今度は答えなんて出る物じゃあない、殺してしまつた事、

殺す事は人生の意味を問われているに等しい、命という重さに押しつぶされそうになる。

考えるだけで気が滅入る。

「彼を今一人にする事は危険です。もしかしたら自殺の危険さえあります」(シャマル)

駆け付けたシャマルはそう言う意見だった。

「出来る限り早くカウンセリングするべきです」(シャマル)

「やっぱりシャマル先生もそう言う意見ですか？」(なのは)

そう、事件から暫くの間は自殺する可能性が高い、特に鬱病を発症するとその後何時までもその危険性が付いて回る。

「彼をヴァロット君の所に預けようと思います」(なのは

なのははそう決断を下した。

私はそのニュースが信じられなかった。

夕方、居酒屋のバイトに出てきたけどいつもの3人が居ない、そして点けっぱなしになっていたTVから強盗死亡のニュースが流れていた。

その当事者の名前を耳にして驚いた。

あの馬鹿達、しかも相手を殺したって言う、とんでも無い事になっていた。

暫くして遅刻してきたジョニーが真相を教えてくれた。

ジョンは当分バイトを休むらしい。

「……でもそれって辛いよね？知り合いだったんでしょ？」(リン

「ああ、本人も相当ショックを受けてる、暫くは立ち直れそうにないな？」(ジョニー

「なるほど、分かった、暫くうちで預かるっ？」(ヴァロット

なのはの頼みに対してヴァロットはそれを引き受けた。

「おい、ジョン、今すぐ着替えを取ってこい、今からお前はうちで

預かる。

それから当分は空手をさせないからな？」（ヴァロット

こうして転送でヴァロットの家まで来たジョン、そして彼は知る、  
覚悟の大切さを……

「入れよ、俺の家族を紹介するぜ？」（ヴァロット

「はあ」（ジョン

「こつちが俺の奥さんだ、アステイって言う、それから長男のグル  
ナッシュュ……」（ヴァロット

「随分お子さんが居るんですね？」（ジョン

「まあな、アステイと二人して頑張りすぎたかな？」（ヴァロット

「この羽の生えたのは？妖精？」（ジョン

「違います、アプリリアは妖精じゃあないです！融合騎です！デバ  
イスなんです！」（アプリリア

「まあうちのマスコットで居候で俺の融合騎だ。スペシャルフォー  
スの隊員でもある」（ヴァロット

「にゃん

やって来たのはパヴィ

「な、何なんですかこの常識外れの巨大猫は？」（ジョン

「アステイの召喚獣だ。まあ何も出来ないけど」(ヴァロット)

ジョンは思った、ここはちょっと常識からズレた家庭だと……  
そして夕食、魚料理が並ぶ、メインは白身魚のフライだ。

「ジョン、お前は今日やらかした事を悔やんでいるな？ 気にするな  
と言っても恐らく無駄だろう？」

でもな、悩めば悩むほど、悔やめば悔やむほど地獄に堕ちていくぞ？  
俺がそうだったように、お前も自分自身で地獄に堕ちていく、なぜ  
だか分かるか？」(ヴァロット)

「そんな事を言われても分からないですよ、俺自身まさかあんな事  
になるなんて思わなかった。

強くなった実感もまだそんなに無いのに、いきなりの実戦でいきな  
り殺す事になるなんて思わなかった。

殺すつもりなんて無かったのに、相手がいくら悪くても殺すなんて  
事は思いもしなかった。

俺はどうしたら良いんだろう？ どうやったら殺した相手に、その家  
族に許して貰えるんだろう？」(ジョン)

「やはりな、お前は優しすぎるんだ、俺も同じだったよ、そうやっ  
て苦しんで自分で地獄に堕ちていった。

そこから立ち直るには自分一人の力じゃ無理だ、俺にアステイが  
居たように、お前も早く愛する人を見つけろ、

きつとその人がお前の心を救ってくれる。それから、立ち直る為  
のヒントをやるう、

明日の朝からスペシャルフォースの朝練につき合え、その時話をし  
ようじゃないか？」(ヴァロット)



## 事件のあとで（後書き）

次回：ヴァロットはジョンに殺す覚悟、殺される覚悟の話をする。

## 殺す覚悟・殺される覚悟（前書き）

それは殺してしまうかも知れない技を無自覚に使わない事、  
殺してしまうかも知れないのではなく、「殺す」という覚悟を持っ  
て使って欲しい。

覚悟があれば後悔する事も地獄に堕ちる事もない。

## 殺す覚悟・殺される覚悟

「ハア、やっぱり場違いだ」(ジヨン)

風呂につかりながらついそんな言葉が出てしまう。

成り行きとは言えヴァロット1佐の屋敷に滞在する事になってしまった。

一般庶民とは隔絶した豪華な屋敷、広い風呂、食事は一般的だったけど？

3人のメイドと8人の子供達、結構美人な奥さん、やっぱりセレブは違うと思った。

因みにジヨンの家はごく庶民的なサラリーマン家庭、

しかも両親はこの春の転勤で星の裏側へ行ってしまったている。と言う訳でジヨンは寮に暮らしていたりする。

まあ、月々生活出来るだけの仕送りはあるが、贅沢は出来ない。

「俺、この先どうしたら良いのだろうか？」

不安だけがこみ上げてくる。

でもあの人は言った、俺も同じだったと、悩めば悩むほど、悔やめば悔やむほど地獄に堕ちると、

そうしない為の方法を教えてくださいという。

あの人は凄い人だ、子供達が居て、奥さんが居て、守るべき家庭があつて、

それでなお、冷徹に人が殺せる。隊員達に指示出来る。

どうしてそんな事が出来るのか？どうしてそんな事をして平気なのか？

ジョンにはまださっぱり分からなかった。

(きつとその答えは明日からの訓練の中にある、もう考えるのはよそう?)

そしてジョンは床に就いた。

「おい、起きろ、行くぞ?」

もう明け方だった。精神的に疲れていたからか?随分すっかり眠っていたらしい。

急いで着替えると一緒に転移する。

「この慰霊碑はハウメの為に建てた物だ。

俺の指揮が悪かったばかりに死なせてしまった。

ハウメが愛した者を、ハウメを愛した者を俺は不幸にしてしまった。

あの後俺はそれを悔やんで自ら地獄に堕ちた。そして修羅になった。

そんな俺に光をくれたのはカリムさんだった。

悔やむのではなく、許しを請え、そして祈り続けると教えてくれた。

本当に許されたなら、心から愛してくれる人が現れると、

その人を愛する事で地獄から救われると教えてくれた。

そして、俺の前にアステイが現れた。だから俺は今ここにいる。

ジョン、お前も同じなんだ、お前も愛する人を見つけて愛して貰え、

それ以外に地獄から抜け出せる方法はない」(ヴァロット

「じゃあ、今でもここで祈っているのは?」(ジョン

「ああ、俺は多く殺しすぎて、殺してしまった全てに謝っている訳じゃあないけれど、

中には救ってやれた命もあった、でも立場上それは出来なかった。

だからせめてもの魂の安らぎを願って祈りを捧げている。お前にも  
いずれ分かる」「ヴァロット

そして始まる厳しい訓練、ジョンも混じって練習が始まった。

「流石だな？いつの間にかこのコースが走れるようになってるじゃないか？」「ヴァロット

そうこの前は走ろうとしたらいきなりトラップにかかって、  
飛んできた丸太に一撃されて終わった苦い記憶、それがいつの間  
に走れていた。

「流石に鍛えてきたね？」「バルンティン

「そう言うバルンティンもいつの間にか走れているし、動きのキレ  
が違っている」「ジョン

そうお互いに認められるほど成長していた。  
でも問題はその後の組み手だった。  
ジョンの手が出ない、頭では分かっているつもりなのに、体が技を  
出す事を拒否する。

「かなり重傷だなあ？」「ヴァロット

訓練が終わって解散すると、ヴァロットはジョン達に話を始めた。

「お前達は、格闘技が何故存在するか考えた事はあるか？格闘技の  
本質とは何か分かるか？」「ヴァロット

「格闘技の本質？」「ジョン

聞かれた事の意味すら分からない、難しい事を効かれていると思  
った。

「自分の命や誰かを守る為にあるのだと思います」（バランタイン  
「違うな、格闘技の本質は戦いに於いて相手を殺傷せしめる為にあ  
る。

つまり殺す為にある。だが、その殺戮の先に何がある？何も有りは  
しない。

あるのは虚しさと地獄だけだ。自分で地獄に堕ちていく」（ヴァロ  
ット

「じゃあ何の為に俺達は格闘技を教えられているのですか？」（ジ  
ヨン

「殺す為じゃない、守る為には殺す事も必要だと言う事だ。

強くならなければ守る事も叶わない。相手に勝つ事も出来はしない  
だが、それには必要な事がある。それは殺す覚悟だ」（ヴァロット

「殺す覚悟？」（ジヨン

「格闘技って言うのはこれと同じなんだ」

そう言って小太刀を取り出したヴァロット。

「刀の本質は人を斬る事、殺傷せしめる事だ。格闘技もまた然り、  
もうジヨンは経験してしまった事だが、戦えば傷付き、場合によっ  
ては人が死ぬ、

相手を殺してしまう事もあるんだ。だから、

それは殺してしまうかも知れない技を無自覚に使わない事、殺してしまうかも知れないのではなく、「殺す」という覚悟を持って使って欲しい。

覚悟があれば後悔する事も地獄に堕ちる事もない。

お前達に足りないのは殺すという覚悟だ」(ヴァロット

「殺す覚悟？」(バランタイン

「そうだ、殺す覚悟だ。

殺す覚悟無くして戦っては行けない。殺す覚悟がなければ自分で地獄に堕ちていく。

俺達魔導士には非殺傷設定という物がある。

それが返って殺す覚悟を失わせ、力に溺れ、やがて人を傷付け殺す結果になっている。

非殺傷設定なんて物はスイッチのオンとオフでしかない、その感覚で魔法を使って人を殺してしまう。

だがそれはやがて感覚を麻痺させ、狂気に囚われ自分をどんどん殺人鬼に変えていくんだ。

拳銃などの質量兵器だつてそうだ、当たり所が悪ければ確実に殺してしまう。

でもその覚悟無くトリガーを引けばどうなる？下手をすれば一発で殺人鬼になれるだろう？

狂気に囚われてどんどん殺し続ける事になる。

後から殺すつもりは無かったなんて言い訳は通用しないんだ。

それは殺せる力を持っていると分かっている、それを自分の欲望に負けて使ってしまつて、

後から言い訳をしているに過ぎない。その時点で地獄に堕ちて居るんだ。

後は何処まで行っても狂気と殺戮以外になくなってしまつ、殺す事しかできなくなつてしまつんだ」(ヴァロット

「そんな、それじゃあ俺はどうしたら？」（ジョン）

「だから覚悟を決めろ、殺してしまうかも知れないのではなく、殺す、命を奪うという明確な意志を覚悟を持って殺す事、

そうすれば地獄に堕ちなくて済む、殺した後は相手を弔ってやればよい、

それだけの事だ、だが、その殺す覚悟というのは考えているより遙かに難しい。

余程肝が据わっていないと出来ないぞ、このスクールで学んでいる事はそう言う厳しさなんだ。

格闘技以上に、自分の心を追い込む厳しさ、

その厳しさの向こう側にある物を学んで欲しいから教えて居るんだ。お前達にも出来る。いつか必ず出来るようになる。それを信じて修行に励め」（ヴァロット）

「厳しさの向こう側？」（ジョン）

「お前達にもいずれ分かる日が来る。それからな、もう一つ、死ぬ覚悟、殺される覚悟を忘れるな」（ヴァロット）

「そうだ、戦いに於いて常に死と背中合わせである事を忘れるな。

戦えば自分もまた傷付き、場合によっては命を落とす、

だから、戦いに臨めば何時殺されても可笑しくないのだと覚悟を決めろ。

殺される覚悟無くば、自ずと体が硬くなり、自分本来の動きが出来ず、

その結果、自分が傷付き、やがて命を落とす。

殺される覚悟を持って死と向き合い、

死を受け入れる事で恐怖と狂気を制する事、



自分の中でそれが出来ていれば、間違った戦い方はしないだろう?」「  
(ヴァロット

「殺す覚悟と殺される覚悟?」(ジヨン

「そつだ、殺す覚悟を持って相手を制し、殺される覚悟を持って自分を制する。

それが出来るようになれば、無益な戦い、無様な戦いはしないで済むだろう?」「(ヴァロット

「相手を制し、自分を制する?」(ジヨン

「今すぐ出来るようになればと言わない、だが近い内には必ず出来るようになって貰う」「(ヴァロット

「近い内にか?……」(ジヨン

「話しすぎて大分遅くなったな?帰って飯にしよう?」「(ヴァロット

**殺す覚悟・殺される覚悟（後書き）**

次回：ヴァロットはジョンとバラントインに奥義を伝授する。

## 否殺の奥義（前書き）

「今からお前達には御式内の奥義を二つ教えてやる。

これが出るようになればもう殺す事はしなくて済むだろう？」

完璧に使いこなせば相手を傷付けることなく倒す事が出来る「  
ヴァロット

## 否殺の奥義

「やっぱり場違いだ」

彼はそう呟いた。

朝食は厚切りのトースト、野菜サラダ、ここまでは良い、でもスープはフカヒレのスープ、フルーツは見た事もない高級フルーツだ。

シメのコーヒーは匂いを嗅いだけで分かる高級品、庶民には手の届かない物、子供達はカフェオレにしている。

一般庶民とは隔絶した暮らし、そこかしこに高級な物が溢れている。

やっぱりセレブは違うなと思う。

「お前には当分空手はやらせん、代わりにうちの子供達の面倒を見て貰おう？」（ヴァロット

「丁度夏休みで困ってたの、託児所休みだし、上の子達は宿題があるし、

見てあげられる暇が無くて、結構大変なのよ？」（アステイ

「ハア？」（ジョン

そう、夫婦共働きのロシエット家にとって、育児問題は大きい。しかも子供達はやんちゃ盛りだ。その大変さを味わう事になった。

「よし、お前ら今日から昼間はこのお兄ちゃんが遊んでくれるそうだ。」

しっかりと遊んで貰えよ？宿題の分からない所とか見て貰えばいい」  
(ヴァロット

「じゃあ、頼んだわよ？」 (アステイ

彼はまだロシエツト家の恐ろしさを分かっていない、  
両親が出勤すると子供達はニヤリと黒い笑いを浮かべる。

そう両親の前では猫を被っているのだ。  
心の読める両親にとって、子供達の悪巧みなどお見通しだったりする。

だから子供達も考える。読まれているなら考えなければいい、居なくなつてから考えれば充分だと……

両親が居なくなるとジライオウを連れてきて遊び始めるフレデリックとクロード、  
ルアンヌとコリーヌはオモチャのじよろで水遊びを始める。

微笑ましい光景だった。ジョンは庭の石に腰を掛けながら流れる雲を眺めていた。  
ルアンヌとコリーヌが少しずつ水を撒きながら近付いている事に気が付かなかった。

「あ、冷てえ、かけるなよ？」 (ジョン

「「「ごめんなさーい」」」

可愛くそう言つと逃げていくルアンヌとコリーヌ、でも黒い笑いを浮かべていた。

その瞬間、地面を強力な電撃が走る。

「ぎゃあああああああああああああああ！」（ジョン）

プスプス

そう始めからこれが狙いだった。

4人で協力して電撃を通しやすくしていたのだ。

まずは水を撒いて電気の通り道を造る。後は二人がジライオウに命令して電撃を出させたのだ。

そう、子供達はヴァロットの血を多く受け継いでいる。こついう事を考え付く頭脳を受け継いでいたりする。

「大・成・功・！」

大喜びで逃げていく子供達、とんでも無いお子様だった。

「気を付けてね？その子達普通の子供より相当頭が切れるわよ？」

（ヴェレナー）

メイドのヴェレナーさんが洗濯物を干しながら声を掛けてくれた。

「そう言う事は先に教えて下さい！」（ジョン）

「おい、兄ちゃん、宿題見てくれよ？」（グルナツシュ）

居間では4人の子供達が宿題を始めていた。

「どれどれ？」（ジョン）

問題集を手を取った瞬間固まる。

(しょ、小学校ってこんな難しい問題教えてたっけ?) (ジョン)

冷や汗だらだら ジョン、困った全く分からない。

「あらいやだ、こんな簡単な問題も分からないんですの?」 (スア  
ーニャ)

「おいおい、それでも本当に士官学校出てるのか?」 (グルナツシュ)

そうそこで始まったのは上の子供達4人による精神攻撃の輪唱ア  
タツクだった。

追い詰められるジョン、ここで逃げたらこいつらにさえ見下されて  
しまう。

「そう言うお前らは分かっているのか!」 (ジョン)

「この問題はだなぁ……こつやって、こついう計算をすれば答えは  
こつなる」 (グルナツシュ)

「わ、分かっているなら俺に聞くな!」 (ジョン)

「お前バカだろ?」 (デトウール)

「どう見てもバカだね?」 (ジョセフ)

彼は始めから見下されていた。そしてまた精神攻撃の輪唱アタツ  
クが始まる。

そしてどんどん精神的に追い詰められる。子供達による精神攻撃は  
大きかった。

—— 夕方ボロボロになった頃、ヴァロット達が帰ってきた。

「はっはっは、結構ハードだっただろう？」

何せアルバイトのベビーシッターもよく逃げ出したからな？」（ヴァロット

（恐ろしい、何て恐ろしい家庭なんだ？）（ジョン

翌朝の事だった。

「今からお前達には御式内の奥義を二つ教えてやる。

これが出るようになればもう殺す事はしなくて済むだろう？」

完璧に使いこなせれば相手を傷付けることなく倒す事が出来る」（ヴァロット

「殺さない奥義ってどう言う事ですか？」（ジョン

「御式内の奥義には人を殺す技が一つもないんだよ？

倒して確実に勝てるが、命を奪うような事はしない。

殺さずに相手に負けを悟らせる事、それが御式内の理念だ」（ヴァロット

そうそれは必殺技ではなく、殺す事を否定した否殺の奥義だった。

「奥義徹し！」

喰らった瞬間世界が歪む、平衡感覚を失って立っている事さえ出来なかった。



完全に足にきている。脳震盪を起こしているという自覚はある、でもどうしようもない。

喰らってしまえば逆らいようのないダメージだった。それがいつまで経っても納まらない。

その後で二人ともダメージを抜いて貰った。

「この技は腕力を必要としない打撃だ。

腹筋と横隔膜を使って衝撃波を発生させ、それを手から相手の脳に直接叩き込む。

しかも、この衝撃波で揺らされた脳は数日間揺れ続ける。

戦いの中でこれを受けてしまったら確実に負ける、倒れた所でトドメを刺されるだろう」（ヴァロット）

それは危険な奥義だった、

同時にこれほど効率よく相手をKOできる技もなかった。

修行法は、この奥義を破る事だった。

奥義を受けて倒れたら、

自分自身の手で自分にもう一度この奥義をかけるのだ。

衝撃波を衝撃波で打ち消す事で、この奥義を破る。

失敗するとパンチドランカーになる危険な修行法だった。

もう一つの奥義は、「居竦み」だった。

既に喰らった事のある奥義、でもあの時はまだ相当な手加減をされていた。

喰らってみて知る真の恐ろしさ、恐怖という物がこれほど凄いとは思わなかった。

「この奥義はな、気当たりと殺す覚悟が完璧でないと出来ない奥義

だ。

気当たりと同時に自分の目から相手の目に殺気を叩き込む、

恐らくジョンは数日の内には出来るようになるだろう?」(ヴァロ  
ット

こうして二人は奥義を目指して修行を始める事になった。

## 否殺の奥義（後書き）

次回：ジョンが居竦みを、バラントインは徹しを会得する。  
そしていよいよ林間学校を迎える。

## 居竦み開眼（前書き）

（いい加減あのジライオウが鬱陶しいな？ちょっと試してみるか？）

一匹ずつの電撃では利かない攻撃、それならダブルだったらどうだろう？

真正面にジライオウを並べ、電撃を同時発射しようとした瞬間だった。

強烈な気当たりと共に部屋を包む殺気、ジライオウは動けなかった。子供達はその恐怖に声を失う。

## 居竦み開眼

「ジョン、お前はまだまだ精神力が弱い、もつと精神力を鍛えない限り自分の弱さに負けて地獄に墮ちていく、幸い我が家は精神力を鍛えるには最適の環境だ。

何事にも何者にも動じないタフな精神力を身に付ける」(ヴァロット

「子供達の面倒、お願いね？」(アステイ

(この二人鬼だ！鬼が仮面を被っている！)(ジョン

ニヤリとする子供達、ジョンはいびり甲斐のあるオモチャだった。それはトイレを出た瞬間だった。

「そんなバナナあああああああああああああああ！」

足下にそんなバナナを転送される。

「ぎゃあああああああああああああ！」

玄関のノブに手を掛けた瞬間、強烈な電撃を受ける。

ドアの向こうにジライオウがスタンバイしていた。

留まる事を知らない子供達の悪戯、無邪気に残酷にかつハードにジョンを襲ってくる。

その上精神攻撃まで……身も心もボロボロにされるジョン、未だかつて無い試練だった。

もう悔やんでいる暇なんて無い、逃げようにも多分ヴァロットさんが許してくれないだろう？

彼が安心して気を緩められるのは両親が帰ってきた時だけだ。

夕食以降しか気を緩められない。

ここの子供達、信じられない位たちが悪い。

これが上流家庭の子供達なのだろうか？と疑いたくなる。

普通上流家庭の子供ならバイオリンやピアノ、

乗馬などのセレブな習い事をしているのが相場だが

ここの子供達はそんな事は一切無い、寧ろその辺の育ちの悪いガキ大将だ。

その上異常に頭が良い、その頭の良さを悪戯に利用する。

実は小学校の勉強なんてもうとつくに分かっている。

頭が良すぎて高校生並みの問題ですら易々解いてしまう。

だが、その性格の悪さと来たら信じられない物がある。

親の前では猫を被り、獲物と見るや容赦なく襲いかかる。

特に、精神攻撃に関しては途轍もなく恐ろしいのだ。

でも、時々おいたが過ぎると両親の後ろには般若が浮かぶ、

流石の子供達もこの時ばかりは震え上がる。

(こ、ここは確かにハードだ、精神力を鍛えるには丁度良いのかも知れないけど、これはきつい)(ジヨン)

それでもジヨンは修行を始めた、まだ心が体が殴る事を拒否する為空手はやらない。

道場で習った精神統一、座禅を組む事にした。

こうなったら座禅のままヴァロット達が帰ってくるまで耐えてやる、耐えながら居竦みを練習しよう。それが彼の選択だった。

早速子供達が妨害にかかる。

でも無視、何を言われようが、何をされようが無視する。

でも耐え難いのはジライオウの電撃だった。

そして二日が過ぎた。

(居竦みは気当たりと共に殺気をぶつける技、殺すという明確な意志をぶつける技、

俺の心が殺す事から逃げているから出来ないだけ、居竦みが出来れば再び空手も出来るようになる。

もう後悔に囚われたりしなくなる。居竦みを極めるしかない)(ジヨン

精神統一している所へまた電撃が飛んでくる。

その瞬間、電撃に気当たりを入れてみた。電撃が弾かれて飛び散る。子供達が「おおっ」と声を上げる。

これはこれでよい練習になりそうだ。

目を閉じ精神を集中する。その内にジライオウの魔力や子供達の魔力を感じられるようになる。

魔力だけじゃあなかった、子供達の動く気配さえ読めるようになっていた。

そうこの練習はいつの間にか気配を読む練習にもなっていた。

今度は後ろから電撃、気当たりで弾き散らす。

また今度は左右からの同時攻撃、それを弾いてみせる。

気当たりだけでも結構な防御力、子供達にとってはそれが信じられなかった。

まだ気当たりを教えて貰ってはいるがそこまで使えていない子供達、それから見るとジヨンは凄かった。

まあ、両親と比べたら大分落ちるけど、

それでも高いレベルの気当たりを見せるジヨンを徹底的に観察する。

(いい加減あのジライオウが鬱陶しいな？ちょっと試してみるか?)

一匹ずつの電撃では利かない攻撃、それならダブルだったらどうだろう？

真正面にジライオウを並べ、電撃を同時発射しようとした瞬間だった。

強烈な気当たりと共に部屋を包む殺気、ジライオウは動けなかった。子供達はその恐怖に声を失う。

怖かった、それは父親が怒った時と同じあの恐怖、そう居竦みを開眼していた。

一度出来ると感覚を掴むのは簡単だった。

(何だ、こんな簡単な事だったのか？こんな事で本当に再び空手が出来るようになっていくのだろうか？)

まだ自覚のないジョン、でも今度はパヴィがやってきて服従のポーズを取る。

そう野生動物だからこそ、その怖さを認めたらこうして服従するのだ。

「今だったら出来そうな気がする」(ジョン)

メイドさんに聞いてみた。

この家に何か壊しても良い物はありませんか？と暫く考えたメイドさんは大きな氷を持ってきた。この家には何でもある。

庭に氷柱を立てる、そして構えた。

「おい、お前ら見ているよ、凄い物を見せてやる!」(ジョン)



氷柱に向かって放たれたのは得意のマツ八拳、凄まじい破壊力で氷を粉碎した。

もう既に吹っ切れたようだ。清々しい顔をするジョン、その様子を子供達はぼかんと眺めていた。

そう、殺せる技は自覚無く使っては成らない、使う時は殺すという覚悟を持って使うべし、

それを頭ではなく、体で理解したジョンだった。

「どおやら吹っ切れたみたいだな？」（ヴァロット

「もう少し家に居て貰えると有り難かったんだけどね？」（アステイ

いつの間にか帰ってきた二人だった。

こうしてロシェット家での最後の夜を迎えた。

「えっ、バランティンも徹しが出来るようになったんですか？」（ジョン

「ああ、今日ついに物にしたぞ、お前も追い越されるなよ？」（ヴァロット

「今度は徹しを覚えないとね？」（アステイ

気が付けば明日から林間学校だった。

この10年、林間学校は信じられないほどのパワーアップを遂げていた。

特に恐怖の肝試しはかつて無い怖さを発揮する。

なのはがやっていたりする事だが、あれはやばすぎると誰もが言う位やばい物だった。

居竦み開眼（後書き）

次回：林間学校に出発します。

## 恐怖の林間学校（前書き）

その時だった、ジャングルから飛び出してきたのは毎回の如く恐竜だった。

全員その姿に引きつる物の……

「ポチ！伏せ！」（ピノ）

あの恐竜はポチと名付けられて既にピノの支配下に置かれていた。

## 恐怖の林間学校

8月5日 スクール名物林間学校、今年もこの季節がやってきた。でも何時の頃からだろう？恐怖の林間学校と呼ばれるようになったのは？

1年生はまだ知らない、何故その恐怖の林間学校と呼ばれているか？2年生はその恐怖を骨の髄まで叩き込まれているから気分が沈む。

朝8時30分、スクールの前に生徒が集合する。

「じゃあキャロお願いね？」（なのは

キャロ先生が全員をエマルジョンコレクトに収納する。

そして転送機へ、やって来ましたスプールス、すぐに夏の大陸へ転移、

僅か10分で現地に到着した。

全員、件の広場に出された。

ここにスクールに関係のない人間が何人が混じっている。

そうピノの旦那、ケンと息子のジョージ、エリオとキャロの子供達、マティスとパーティ、フリードはデフォで来てます。

まあそれがどうしたって言う感じなのだが？他にもピノはリヴェンヌとジライオウまで連れてきていた。

このメンバーでスクールの問題児達、事件が起きないはずがない。

「皆さん、ここは以前僕たちが環境保護隊にいた時勤務していた星です。

環境保護隊の前線基地は春の大陸にありましたが、ここは何もない

大陸です。

また、危険な生物も非常に多いです。

皆さんには、この大陸で4泊5日生き延びて貰います。

これはサバイバル訓練でもあるのです」(エリオ

「皆さん、では食料と水をお配りしまーす、今日のお昼と今夜と明日の朝の分しか有りませんよ、

その後は自分で安全な水と食料を見つけて下さいね。

それと、一緒にお配りするポケット図鑑に目を通して置いて下さいね、

危険な生物や、食料になりそうな動物、植物、そして絶対に傷つけないといけない希少動物が載っています。

それから、林間学校で男女の甘い出会いを……なんて考えてた人は死にますよ、

ここはそんなに甘い所ではありません、生き延びる事に必死でないと生きていけない世界ですから」(キャラ

「じゃあ、皆さん解散して下さい」(なのは

「ちょっと待った！一つ連絡事項がある。明日の夕方、全員この場に集合だ。肝試しをやるぞ！」(クロスリード

その言葉に真っ青になる生徒達、特に2年生はそのやばさを知っているから余計にビビる。

「生徒会は集合！他は解散して良いぞ？」(ビビキ

その時だった、ジャングルから飛び出してきたのは毎回の如く恐竜だった。

全員その姿に引きつる物の……

「ポチ！伏せ！」（ピノ）

あの恐竜はポチと名付けられて既にピノの支配下に置かれていた。

「みんなはあの恐竜に気を付けてね？ピノ先生以外に懐いていないから、

下手すると食べられちゃうわよ？」（なのは）

既に恐ろしいパワーアップを果たしていた林間学校、この先どう言うイベントが待っているのだろうか？

相変わらずむちゃくちゃな学園の教師達、ピノ先生に啞然としながらも2年生は歩き出す。

「あれ？先輩達は何処へ？」（リン）

「こんな所にいたらあの恐竜に食われるわよ？他にも猛獣がうじゃうじゃ居るし、こんな所で野営したら命が幾つあっても足りないわよ？」

そう言っただけでさっさと2年生は移動を始めた。

「ピノ先生かけ〜！俺もあんなペット欲しい！」（ジョン）

「激烈バカ」（リン）

「私達も移動しましょ？早くしないと食料や水の確保が出来なくなるわよ？」（サクラ）

「どう言う事？」（デュワーズ

「食料を見れば分かるでしょ？」

今夜のカレーも明日の朝のスープもお湯がないと作る事は出来ないの、

まずは安全な水を確保する事、そして明日のお昼までに何か食料を調達出来ないと餓死するわよ？」（ツグミ

そう言われて初めて自分達の置かれた状況に気が付いた1年生、  
やばい、2年生に置いて行かれた。これは既に命の危機だ。

「大丈夫、お姉ちゃんからこの辺りの情報は仕入れてきたから、何とかなるでしょ？」（ナギ

流石はナカジマシスターズ、そう言う事には抜け目なかった。  
モニターを出してこの辺りの地図を表示する。

いつの間にかこの辺りの地図まで仕入れて必要な情報も入っていた。

「私達の場合、食糧の不足は死活問題なの、  
何としても食糧を確保しない事にはここでは生きていけないわ」（  
ツバキ

その食にこだわる所は流石だ。

あんたらなら何処でも生きていけるよ、最強のアマゾンネスだ。

そんな事をしている内に生徒会と先生方が何処かへ消えた。

「じゃあ、私達も行きましよう？早く野営地を決めて何とかしないと狩りも出来なくなるわ？」（サクラ

こうして1年生も歩き始めた。

「確かこの崖にぶち当たって左に曲がって少し行った所に洞窟があるはずよ?」(ナギ)

「あれ?洞窟なんて無いけど?」(リン)

「よく見ろよ、足下」(ジョーン)

足跡が崖の前で消えている。

「これは何かあるね?」(ブランドン)

崖に触れようとした所でぽっかりと入り口が姿を現す。

「何だ?幻術じゃないか?」(ジョニー)

2年生はまさかこの幻術を見破られるとは思っていなかった。

「流石にこの人数だと狭いわね?」(ツバキ)

「いい?半分から右側が女子、左側が男子よ!この線を越えて入ってこないでね?」(リン)

「スケベ3人衆は特に来るなよ」(エヴァン)

こうして全員この広い洞窟で野営する事にした。

「さて私達はこの丸太小屋な訳だけど……」(なのは)



「僕たちは大丈夫ですよ、ヴァロットさんにいろいろ聞いてますから？」（クロスリード）

そう言っただらフロとクロスリードはいろいろな資材を取り出す。

そうあのダンボールハウスや、生徒会に受け継がれている大型コンロ、鉄板焼きテーブルなど

準備万端だった。

「寝る場所が出来たら食糧を確保しないとね？」（ラフロ）

「うちはよく食べるのが居るからなあ？」（ビビキ）

## 恐怖の林間学校（後書き）

次回：それぞれ分担しての食料探しが始まる。

出るんだ……（前書き）

「まだサバイバルとか狩りとかはマシさ、本当の恐怖は明日の夕方なんだ……」

あれはやばすぎる、下手したらあいつらの仲間入りするかも知れないんだ……」

2年生がぽつりとそんな事を漏らす。

「あいつらの仲間入りって？」（リン）

「出るんだ……」

出るんだ……

「さあ、食料探しに出かけるわよ」(サクラ)

俺達は早々にテントを設営し、水の確保も済ませた。

流石にナカジマシスターズ、食い物の事になると準備万端だったりする。

俺達に配られているのは、コンビニ風の弁当、レトルトのカレー定食、パン1斤、水4リットルである。

俺達にとっては十分な食事でも彼女たちにとってはとても足りる物じゃあない、だから早い事食料が欲しかった。

それにまだ現地時間朝の6時前、(スプールスはミッドチルダと4時間ちよつとの時差があります)

お昼まではとても持ちそうにない。

「食料は召喚士に預けなさい、エマルジョンコレクトの中なら傷む事はないわ」(ナギ)

このエマルジョンコレクトという魔法、本当に便利だ。

かなり大きい物も入るし、容量はたっぷりあるし、中に入れた物が腐らない、

超大型の冷蔵庫並みに便利だ。

「で?どうするんだ?」(ジョン)

「これから選抜メンバーで狩りに行くの、何とか肉を確保しないと飢死ぬわ」(ツバキ)

「残ったメンバーは私に付いてきてね、山菜と果物を確保するわ」



「お前達、半分分けてやるっ？まあ上等な部分は俺達が頂くが半分あれば2〜3日は食えるぞ？」（クロスリード）

まあ、おこぼれでも仕方がない、狩りをするよりマシだから。そして俺達は肉の解体方法と処理を教えて貰って帰ってきた。

「お腹空いたからお弁当食べちゃおう？どうせお昼のメインはステーキだし」（ツバキ）

まずは腹ごしらえ、そして肉の解体にかかる。そうしている内にエリオ先生が俺達をチェックに来た。

「今年は全員ここだったか？」（エリオ）

「他にも野営出来る場所があるんですか？」（ブランドン）

「まだいっぱいあるけど、成るべく離れないで欲しい、少人数になるとそれだけ命の危険が高くなるからね？」（エリオ）

「命の危険ですか？」（ジョン）

「このジャングルには結構危険な生物も多い、あの川に架かる丸太橋より上流にはピラニアやワニがうじゃうじゃ生息しているし、

橋より下流はデンキウナギやシビレイと言った生物が多い、河口付近はアンボイナガイが生息しているから踏むなよ？あれは猛毒だぞ？」（エリオ）

「何故そんな危険な所に俺達を連れてきたんですか？」（バランタ）

イン

「サバイバル訓練だ、死んだらアウトの命がけ訓練、それがスクール名物林間学校だ」（エリオ

生徒達はブルーが入る。

楽しみにしていた林間学校、それはイメージと大きくかけ離れた厳しい物だった。

まあ、それでも気を取り直して肉の解体にはいる。

切り分けた肉は収納、すじ肉は薄く剥いで上の岩場に干してくる。これでスープのダシも心配ない。

「まだサバイバルとか狩りとかはマシさ、本当の恐怖は明日の夕方なんだ……」

あれはやばすぎる、下手したらあいつらの仲間入りするかも知れないんだ……」

2年生がぼつりとそんな事を漏らす。

「あいつらの仲間入りって?」（リン

「出るんだ……」

「出るって何が?」（リン

「川の向こう側は幽霊がうじゃうじゃ出るんだ…… 11年前に死んだフォルスの軍隊の連中なんだ……」

やったのはあのヴァロットさんだ……おまけに12年前に死んだ次元海賊の幽霊も居るんだ……」

「何て傍迷惑な……」(デュワーズ)

「そんな中で肝試しをやるうって言うんだ……それに一番怖いのは校長先生だ……」

あの人どう言う訳か幽霊と友達になれる能力を持っている、幽霊を操って俺達を襲わせるから尚更たちが悪いんだ……」

聞いてしまった全員さーっと縦線が入る。

それはただ幽霊が出るだけでもやばすぎるスポット、

その幽霊が校長先生の指示で襲ってくる。

とんでも無い肝試しだった。

もう既にビビリが入ってしまった1年生、そう明日の夜は恐怖の肝試しが待っていた。

こちらは聖王教会

「……それでね、その幽霊に命令してたのママだったの……」(ブレオ)

もうとんでも無い話になっていた。

聞いていたセインやオットーも顔に縦線が入る。

セシルにユウキ、アルフはブルブルガクガクだった。

(なのはさん、それはやばすぎでしょう！)(アインハルト)

アーサーの中のアインハルトが叫んでいた。

実は彼女も幽霊が全くダメである。

これはとんでも無い事になった。



出来れば明日という日が来て欲しくはないのだが……  
それは容赦なくやってくる。

出るんだ……（後書き）

次回：本当の恐怖が始まる。

前振りは勿体付ける為にある（前書き）

「先輩達が言ってたよ、温泉があるって」（デュワーズ）

「でも覗かれるのがちょっとね?」（リン）

「おい、お前ら何で肝試しに話を振らないんだ?」（先輩）

「嫌な事言わないで下さい！絶対に考えたくないんです!」（エヴ  
アン）

そう、考えたくないから別な方向に話を振る。

それを強引に引き戻されてしまった。全員ブルーだ。

前振りは勿体付ける為にある

「やっぱり鉄板焼きテーブルがあると最高よね？」（なのは

今生徒会が狩ってきたサンドワームの肉を焼いている。

でも焼いても焼いてもすぐに消えていく、何せよく食べるのが二人いる。

イスズとアヤメ、別名生徒会の胃袋、とんでも無い食欲だった。

「午後からは明日の準備をしないとね？」（ラフロ

だんだんと黒い企みが進行する。

「この肉つめえ！」（ジョーン

私達は初めて口にするサンドワームの串焼きステーキに舌鼓を打っていた。

付け合わせにバナナやスターフルーツ、椰子の実ジュースも最高だった。

でも、明日の夕方は……やっぱり怖い。

「午後からどうする？」（ブランドン

「先輩達はビーチで遊ぶって」（ジョニー

「夕食に魚介があると最高だよね？」（デュワーズ

「俺達も遊びに行こうぜ？」（ジョーン

こうしてお昼からは遊びに行く事で話が付いた。

「どうしたの？デュワーズ」(リン)

「間違えて制服の方持って来ちゃった」(デュワーズ)

「それって不味くない？あの馬鹿達が喜ぶだけだよ？」(リン)

「そう言うリンはその水着何？」(デュワーズ)

「買いに行く暇もお金もなかったから……去年のスク水……」(リン)

ピチピチでかなりきつい状況になってるスク水だったりする。

ある意味それもやばいわよね？食い込むからしっかりスジが出ちゃ  
うし……」(デュワーズ)

ビーチには色とりどりの水着が……

そしてキャロ先生やピノ先生一家の姿も見える。

全体の監視はスー先生だ。

「何かさあ、スー先生って凄いよね？」

年の割にももの凄く引き締まってる？重力に負けてないよね？」(ツ  
バキ)

「私達もあれを目指さないと……」(マリー)

「その割にあなたは重力に負けそうな部分がないんだけど？」(エ  
ヴァン)

「何ですとおおおおおお！」(泣)「マリー

「あ、あの馬鹿達だ！」(ナギ

「嘘？何か凄い体……」(ツバキ

そう、ジョン達はマツハの拳が身に付いた事で筋肉も相当な物になつてた。

「ほう、ジョンどおやら立ち直れたようだな？」(スー

「ええ、ヴァロットさんに一つ奥義を教えて貰いました。

どうにか身に付けられたんでそれが心の支えになってます」(ジョン

「ほう、御式内の奥義とな？」(スー

私達は耳を疑った。

奥義とはかなり強い技、奥義のない私達では戦つたらまず勝ち目がない。

どんな修行をしたか分からないけれど、この数日の間に身に付けたらしい。

これは大きく水を空けられた感がある、

秋の大会までに追い付かないと落ちこぼれにされるのは私達だったりする。

これはやばいと思った。

「バランタインの奴も徹しを会得したし、俺も徹しを覚えようかと思えます。

あの二つの奥義があればもう殺さなくて済むのですから……」(ジョン



衝撃で浮いてきた小魚をスー先生が拾い集める。  
そう、爆破漁だ、爆発の衝撃で浮いてくる魚を捕まえる漁、  
そんなに苦勞しなくても結構な魚が捕まえられる。

「スー先生、その魚どうするんですか？」（リン）

「酒の肴だ、唐揚げにして一杯やろうかと思ってな？」（スー）

そう、スー先生はこの肴で泡盛を飲もうと思いついたらしい。  
でもそれは生徒達にとって新しい食料の調達方法だった。  
これで飢える事はないと確信するには充分だった。  
こうして楽しい一日目は暮れていった。

そして恐怖の二日目が始まる。

朝起きた時から2年生はブルブルガクガクだ。  
相当やばい雰囲気伝わってくる。

取り敢えず、朝食を取るとみんなで肉がどれ位あるか確認する。

「まだパンを半分近く残しているし、昨日の魚もある、明日の夕食  
までは何とかなりそうだね？」（バランタイン）

「でも、明後日の朝から何にもないよ？」（マリー）

「明日はそれぞれのグループに分かれて食料探しだな？」（ジョン）

「汗と塩で体がベトベトするからお風呂はいりたいよね？」（リン）

「先輩達が言ってたよ、温泉があるって」（デュワーズ）

「でも覗かれるのがちょっとね？」（リン）



「おい、お前ら何で肝試しに話を振らないんだ？」（先輩

「嫌な事言わないで下さい！絶対に考えたくないんです！」（エヴ  
アン

そう、考えたくないから別な方向に話を振る。

それを強引に引き戻されてしまった。全員ブルーだ。  
そこへ生徒会から通達が入る。

「夕方6時までに夕食を済ませて、6時半までにあの広場に集合せ  
よ」

ついに来てしまった。恐怖の通達が……

「へっへっへ、見てなさいよみんな恐怖のどん底に叩き込んであげ  
るわー！」（なのは

校長先生だけが楽しそうに黒い笑いを浮かべている。

前振りは勿体付ける為にある（後書き）

次回：そして始まった肝試し、それは未だかつて無い恐怖だった。



## 肝試し（前編）

夕方6時半、辺りが薄暗くなる頃、私達は例の広場に集合した。

「よし、今からルールを説明する」（クロスリード）

それはごく普通何処にでもある肝試しのルール、男女二人でペアになって指定された場所まで行ってくる。

途中でどちらかが逃げ出したり、気を失ったり、へたり込んだらアウトとなる。

「一応、ピノ先生とビリー先生と隼先生が警戒に出ているが、気を付けろよ、

時々猛獣が襲ってくる事もあるぞ、それとポチに気を付けろよ、腹が減ってくると生徒を襲う事もあるんだ」（クロスリード）

クロスさん、それ冗談になってないです。マジ危険だから……

「それから、生徒会が各チェックポイントでチェックしている。不埒な事はさせないぞ？」（クロスリード）

そして2年生から順番にスタートさせられる。

暫くするとジャングルに響き渡る悲鳴、その後暫くすると連絡が来る。

キヤロ先生が強制召喚した時には顔に大きく×印、気絶していたりする。

一体何が起きているのやら、ただその恐怖がだんだんと大きくなっていく。



追いかけてくる。

「ちえすとおおおおおおおおおおお！」

「うああああああああああああああああ！来るなあああああああああああああ  
あああああつ！」（ジム

ナギを抱きかかえて全速力で逃げる。

ナギは恐怖よりも結構分厚いジムの胸板にドキドキしてしまう。  
どうにか振り切ったようだ。因みにゾンビに化けていたのはヒビキ  
だったりする。

「どおやらここを通過されたようだな？」（ヒビキ

「結構やるわね？あの二人」（イスズ

この辺りをチェックしていたりするのはイスズとアヤメだったり  
する。

「あ、橋だ、と言う事は前半は終わりだね？」（ジム

丸太橋を渡った直後だった。

上からポタポタと何か落ちてきた。

「血だあああああああああ！」

直後に目の前に落ちてくる死体、二人の前で宙ぶらりんになった。  
もう悲鳴もなかった、二人とも抱き合っただまま気絶している。

「はい、一丁上がり！」（ラフロ

顔に×印を入れると連絡する。  
血を落としていたのは、グレン、死体役はアード、監視員はラフロ  
だった。

「何か暇だよな？今年はこちらまで辿り着ける子居るのかな？」（な  
のは

「多分無理だね？最終エリアまでも怪しい物だ」（スー

なのはモニターを開く、

「ねえ、エリオ君そっちに少し増援を送ろっか？この子達が暇で困  
ってるし……」（なのは

「あ、あおう、こっちにも充分戦力は来てるんですが……」（エリオ

最終エリアは相当やばい事になっているらしい。

私達は驚いた。まさかジムとナギがあんな形で送り返されてくる  
なんて……

この肝試し、やばすぎる、何とかして逃げたい、でも逃げる事を許  
して貰える訳無い。

何て言ってる間にまた2年生が送り返されてくる。

これ冗談抜きにやばすぎだよ……

「よし、次、デュワーズとバラнтаイン、行ってこい！」（クロス  
リード

またスタートしていく。

「ひええええええええええ！ポチ！こつちに来るなああああああああああああ！」

「ちえすとおおおおおおおおおおおおおおお！」

「うああああああああああああああああああ！来るなああああああああああああああつ！」

相変わらずの肝試しが続く。

でも何とか前半をクリア、丸太橋を渡る。

「いかん、もう血糊のストックが残り少ない」(グレン)

「ここは通過させてやるのか？この次のエリアからは激やばだし」  
(アード)

「そうだな、少し血糊も節約させたいしな？」(ラフロ)

そんな事とはつゆ知らない二人、とうとう激やばゾーンに足を踏み入れてしまった。

バランタインの腕に抱きついて進むデュワーズ、さつき橋を渡ってから何も起きない事が返って怖い。

ジャングルの中の1本道、綺麗に刈り払われて整備されている。

この日の為に整備したようだ。

二人がその道を歩いていく、不意に木々の間を何かが飛んでいく、緑色の怪しい火の玉、人魂だ。

引きつった顔でそれを見送る二人、そうここは既に幽霊達のテリトリーだ。



何か冷たい空気が流れる。その時だった……

肝試し（前編）（後書き）

次回：肝試し（後編）に続く（キートン山田風に）

肝試し（後編）（前書き）

「あのクロスさん、何で私は呼ばれないの？」（リン）

「それはな、ヒビキと話し合って決めた。お前達は特に念入りにいじめてやる。

心の底から恐怖を味わってこい！お前達がラストだ」（クロスリード）

## 肝試し（後編）

ジャングルの中の1本道、綺麗に刈り払われて整備されている。この日の為に整備したようだ。

二人がその道を歩いていく、不意に木々の間を何か飛んでいく、緑色の怪しい火の玉、人魂だ。

引きつった顔でそれを見送る二人、そうここは既に幽霊達のテリトリーだ。

何か冷たい空気が流れる。その時だった……

二人の足に妙な感覚がする。

何か足を掴んでいるような冷たい感覚、それは人の手が掴んでいるような……

それで居て温度と重さの無い感覚、一体これは……？  
見たくなくても確認しない訳にはいかない、足下に目をやると……

そこには下半身のない幽霊がそれぞれの足首を掴んでいた。

背中に冷たく……い物が走る、逃げようとした瞬間、周りを囲まれていた。

一体どれ位の幽霊が居るのだろうか？二人はそこで抱き合ったまま意識を手放した。

「はいご苦労さん、後でお線香供えてあげるからね？」（エリオ

幽霊達はすつつと消える。

また送り返されてきた。

二人とも気を失っている。

だんだんやばさが大きくなってくる。  
残り僅か、夜はだんだん深くなる。

「次、ジヨニーとツグミ、行ってこい！」（クロスリード

「来たあああああああ！」

「いやあああああああ！」

悲鳴を上げる二人、そう、この二人結構ビビりだったりする。

10分後……もう送り返されてきた。

ヒビキの所でリタイアしたらしい。

「情け無い奴らだなあ？次、ヘンリーとサクラ行ってこい！」（ク  
ロスリード

「うおおおおおおお！何だ？今のは？」（ヘンリー

「こんにやくである。」

「うあああああああ！ポチ、こっちに来るなああああああ  
あああああああ！」

「ちえすとおおおおおお！」

「いやあああああああ！」

そして、エリオ先生の前で撃沈する。

どんどんと順番が進む。

「まだミッションをクリアする奴は居ないのか？」（クロスリード）  
仕方がない、大体なのはの前まで辿り着く事なんてほぼ不可能なのだ。

「あのクロスさん、何で私は呼ばれないの？」（リン）

「それはな、ヒビキと話し合って決めた。お前達は特に念入りにいじめてやる。

心の底から恐怖を味わってこい！お前達がラストだ」（クロスリード）

（じよ、「冗談じゃないです、そんな事してくれなくて結構です！早い事終わらせて早く帰りたいです！怖いのはいやです！

そんなサービスしなくて良いですから早く終わらせて下さい！）（リン）

それから1時間、みんな撃沈した。

よく進んでもエリオ先生の所で撃沈する。

まだ誰も最終エリアまで到達出来ずにいた。

「よし、ジョンとリン、お前らがラストだ、健闘を祈る」（クロスリード）

私達はスタートした。でもその後起こる本当の恐怖を私はまだ知らなかった。

（リンと一緒にだああ）（ジョン）

腕を組まれると当たる胸の感触が実に良かったりする。

ジョンにとって夢のような一時、でもそんな余裕はすぐになくなっ

たりする。

すぐに飛んでくるこんにやく、

「おっと、危ない」（ジョン）

こんにやくを手刀で切り落とした。

今度はポチが追いかけてくる。

「コラ、ポチ、遊ぶんじゃない！」（ジョン）

そうポチはただ遊んでいるだけだった。

元々大型爬虫類は逃げる物を追う性質がある為追いかけていただけなのだ。

実は初日の夕方につぶりの餌（サンドワームのすじ肉）を貰っている。

実は満腹だったりする。爬虫類は消化能力が弱いので一旦満腹になると、

2週間から1ヶ月ほどは何も食べない。ピノ先生に飼い慣らされているという事はこういう事だった。

ピノ先生ここで撃沈。

「ちえすとおおおおおおおおおおおおお！」（ヒビキ）

「あれ？もしかしてお兄ちゃん？」（リン）

「なんだヒビキさんじゃあないですか？」（ジョン）

ヒビキ撃沈。

「最後の二組は強敵だぞ？こちらのエリアは完璧にクリアされた、そちらの健闘に期待する！」（ヒビキ）

「やっと強敵が来たね？」（ラフロ）

二人が橋を渡ってくる。

「ん？上になんか居る？」（ジョン）

完全に気付かれていた。生徒会ここで撃沈。

そして二人は歩き出す、M級戦艦の残骸に向かって……不意に飛んでいく人魂、リンは既に言葉もなかった。何か冷たい空気が流れる。その時だった……

二人の足に妙な感覚がする。

何か足を掴んでいるような冷たい感覚、それは人の手が掴んでいるような……

それで居て温度と重さの無い感覚、一体これは……？見たくなくても確認しない訳にはいかない、足下に目をやると……

そこには下半身のない幽霊がそれぞれの足首を掴んでいた。

その上、周りを幽霊に囲まれる。

その瞬間だった、気当たりと共に放たれる強烈な殺気、そう居竦みだった。

でもまさかその居竦みが幽霊に効果を発揮するなんて思わなかった。居竦みを喰らった幽霊達は逃げるようにして消えていった。

私はそれ以上にジョンが怖かった。でもこれはあの人が使った技と同じ、これが奥義、

いつの間にかどうやってこんな技を身に付けたんだろう？



「なのはさん、第3エリア突破されました。幽霊達まで消えちゃいました」(エリオ)

「消えたってどうして？」(なのは)

「居竦みを使われました、まさかあの技があればほど幽霊達に効果があるだなんて知りませんでした」(エリオ)

そして最終エリアへ……

M級戦艦の残骸にたむろしていた幽霊達、居竦みを受けたらあっという間に消えていった。

どうやら一度死んでも死の恐怖はイヤだと見える。

ジョン達、ミツシヨンコンプリート。

「ねえ、ジョン、教えて欲しい事があるの、あなたは幽霊が怖く無いの？」(リン)

「怖いさ、でも、それよりももっと怖い事を知ってしまったから、その怖さに比べたらこの程度の事など比べ物にならない」(ジョン)

「もっと怖い事？」(リン)

「ああ、もっと怖い事、それはこの手で人を殺してしまう事だ。

覚悟無く人を殺せば自分が地獄へ堕ちていく、それは幽霊に会うよりもずっと怖い事だ。

後悔と自責が何処までも自分を追い詰める。それは怖くてやるせない。そして途轍もなく恐ろしい。

殺す覚悟を持って殺さなければやがて自分はそう言う恐怖を味わう事になるんだ」(ジョン)

その時私は思った。ジョンは私達とは違う世界に生きていると……  
本当に怖いのは幽霊に会うよりも誰かの命を奪ってしまふ事なのだ  
と……

肝試し(後編)(後書き)

次回：戻ってくる平和な時間、やっぱりやりますか？温泉どっきり？

前振りしといてそれだけ？（前書き）

お昼ご飯の後、ビーチに行くと思せかけて私達は温泉に繰り出す。行ってみたらもう結構な人数が来ていた。

ちょっと熱いけど結構良いお湯、私達だけじゃあなかった。

「く、くそう、見張りがいやがる。」

おまけに周りに自立攻撃型のオートスフィアまで展開してある。

これはガードが堅い。どうする？」（ジョン）

前振りしといてそれだけ？

「……で、幽霊に囲まれて……」

第3エリアまで進んだ連中の話が、それ以前でリタイアした連中の恐怖を煽る。

「良かったそこまで行かなくて……」

「あの幽霊を操ってたのが校長先生らしい……」

「校長先生怖ええ」

「ジョン達はよくクリア出来たなあ？」

「ジョンが居竦みを使ったの、幽霊達は居竦みに弱いらしくてみんな消えちゃったから」(リン)

「何？もうあの奥義を身に付けているのか？一体どうやってたら身に付くんだ？」

「しかし、ジョン幽霊平気なんだな？」

「俺は、例え幽霊でも会いたい奴が居る、会って一言謝りたいんだ。殺して済まなかったと……どうか許して欲しいと……」(ジョン)

ジョンはそれを最も気にしていた。

その言葉に誰もそれ以上声が掛けられなかった。

翌朝、いつも通りの食事をしてさて今日は何をしようかと話し合  
う。

「食料が今日の夕方底を突くわ、今日中に食料を集めておかないと  
不味い事になりそうよ?」

そう、1年生はおぼれの肉で生活していた。  
そろそろ食料も足りなくなってくる。

「狩りがしたいよね?」

「魚も食べたいわ?」

「肉と魚だけじゃあバランス悪いぞ?野菜とか果物も集めないと…  
…」

そしてまずは果物班と狩猟班に分かれる。

「でええええええええ!何で俺達が困なんだあああああああああ  
あああああ!」(ジヨン)

ジヨン、バランタイン、ツグミ、ブラントンの4人が困、  
上空からヘンリー、ジャック、デュワーズが援護する。

何とか逃げ切る4人、岩場ではサクラがボウモアキャノンを構えて  
待ち伏せていた。

ドゴウウウウウウウウウウウウウウウ

とんでも無い破壊力の一撃、彼女は魔力だけなら2年の上位の生  
徒にも匹敵する。

巨大な1撃にやられたサンドワームが崩れ落ちる。

「リン、切断してトドメを刺すのよ！」（ツバキ

「えっ、これまだ生きてるの？」（リン

リンは刀を抜いた物の、斬りかかれなかった。

リンにとってそれは初めて殺すという事を体験する事、  
ハエや蚊、魚なんかは出来ても、こんな大きな生き物を殺した事は  
ない。

本当に命を奪ってしまったても良いのだろうか？

殺すという事がどれだけ重い事か？その立場になってよく分かった。

「リン、何をしてるの？早くしないと可哀想だよ？何時までも苦し  
ませるだけ余計むごいんだから」（ナギ

「でも……」（リン

「リン、殺す覚悟を決める、殺して食わなきゃ俺達が飢死ぬ、覚悟  
を決めるんだ。

お前の持っている武器は何だ？その武器の本質は何だ？

よく考えろ、武器を手にすると言う事はそう言う事だ」（ジョン

「殺す覚悟？刀の本質？」（リン

「そうだ、武器ってのは元々殺す為にあるんだ、それを手にするつ  
て事は目の前の相手を殺すって事だ。

そんな覚悟も無しに武器を手にするな！手にした以上は覚悟を決め  
ろ！殺すという覚悟を！」（ジョン

そう、この林間学校には一つの大きな意味がある。それは狩りを通じて殺す覚悟を養う事、最後にトドメを刺す生徒は特にそれを実感させられる。

「貸せ、俺がやる」(ジョン)

「ダメ、この子は私のデバイスだから誰にも貸せない、私が責任持つ、

私が責任持つて殺すから……」(リン)

暫く集中、私は飛梅を鞘に収めると呼吸を整える。

居合いの極意は抜即斬、抜いた瞬間全てが終わる、一瞬で相手を殺す技、

そう、今まで自覚無くやってきた事、でもこれからは殺す自覚の元に抜かなければ行けない事、

束に手がかかる、親指が鐙を押し上げる。殺す覚悟は多分出来た。多分大丈夫だ。

その瞬間、一気に抜き放った。

それは余りに呆気なかった。

簡単に出来てしまった。抜いた瞬間全てが終わっていた。

切断されるサンドワーム、でも可哀想とか興奮するとかそう言う実感はなかった。

ただ呆気なく出来てしまった事が自分でも驚いた。

そしてサンドワームを幾つにも切り分ける。

それを召喚士が収納していく、これで帰るまで十分な食料は手に入った。

「リン、体液で汚れちゃったね？後で温泉に行こう？」(デュワーズ)



「うん！」（リン）

その言葉を聞き逃さないのが3人、耳をピクピクさせていた。

「久しぶりにやるか？」

「良いね？」

「入った頃を見計らって行かないとね？」

スケベ3人衆が動き出す。

「リン、さっきのサンドワームに申し訳ないと思うならしっかり食ってやれ、

残さず食べて手を合わせろ、頂きます、ごちそうさまでしたはそう言う意味なんだ。

ヴァロットさんの所の子供達はそうやっていたぞ？

死んでいった命に感謝するってそう言う事なんだ」（ジョン）

何かちよつといい話だった。

手を合わせて感謝するってそう言う事だったんだ？

私はこの獲物に手を合わせた。

お昼ご飯の後、ビーチに行くと思せかけて私達は温泉に繰り出す。行ってみたらもう結構な人数が来ていた。

ちよつと熱いけど結構良いお湯、私達だけじゃあなかった。

「く、くそう、見張りがいやがる。

おまけに周りに自立攻撃型のオートスフィアまで展開してある。

これはガードが堅い。どうする？」（ジョン）

「やっぱりやめた方が良く、覗きは犯罪だし」(ジョニー)

そうここに揃っているのはいつもの3人じゃあない、ジョニーやジャック、

ジムにヘンリーも連れてきた。今から覗き大作戦が始まる。しかしこれは難しい、結構ガードが堅い。

「あいつら覗きに来るのかな？」(リン)

「何？覗いて欲しい訳？」(デュワーズ)

「冗談、来られるのが嫌だから心配してるの？」(リン)

「別に来たって良いじゃん、来たら裸に剥いて思いっきり辱めてあげるわ？ねえエヴァア？」

「準備は出来るよ」蠟燭に鞭にハイヒールまで全てそろえてあるから」(エヴァン)

私は思った、この二人危なすぎると……

前振りしといてそれだけ？（後書き）

次回：温泉は阿鼻叫喚の地獄と化す

ナカジマ姉妹の暴走（前書き）

「男よ!」「男だ!」「獲物だ!」「美味しそう!」

信じられない言葉が飛び出す。

「頂きます!」

ナカジマ姉妹9人が俺達に襲いかかる。

## ナカジマ姉妹の暴走

「こんにちわ、レイジングハートです。

今回は非常に不適切な表現がございますので、不適切箇所はP音で修正させて頂きます。

非常に読み難い点もございますが、平にご容赦下さい」

「く、くそう、見張りがいやがる。

おまけに周りに自立攻撃型のオートスフィアまで展開してある。

これはガードが堅い。どうする？」（ジョン）

「やっぱりやめた方がよいよ、覗きは犯罪だし」（ジョニー）

そうここに揃っているのはいつもの3人じゃあない、ジョニーやジャック、

ジムにヘンリーも連れてきた。今から覗き大作戦が始まる。

しかしこれは難しい、結構ガードが堅い。

「く、くそう遠くからじゃあ湯気が邪魔でまともに見えん」（ジョン）

「だからやめようって？」（ジョニー）

「こ、ここでやめたら男が廃る。来た以上は絶対やるんだ！」（ジョン）

おまいらその情熱をもつと別の事に使ったらどうだ？と作者は小一時間ほど突っ込みたい。

「こうなったら堂々と正面突破だ！温泉に突入する！」（ジョン）

「正面突破って、真正面から行ったら攻撃されるでしょ普通？」  
（ジャック）

「大丈夫だ、正々堂々行けば良いんだ。オートスフィアは丸裸の相手には撃っては来ない、

相手を怪我させないようにプログラムされているからな？

バリアのない相手には撃てないんだよ。こういう場所のオートスフィアはな」（ジョン）

「オートスフィアには撃たれない事は分かったけど、見張りはどうする訳？」（ブランドン）

「ってもしかして俺達素っ裸で行くのか？」（ジョニー）

「当たり前だ、それ以外に何がある、お互い裸なら条件は同じだ！」  
（ジョン）

「むちゃくちゃな作戦だなあ？」（ヘンリー）

「作戦を決行する！」（ジョン）

温泉周辺は滝壺の上にはオートスフィアが、滝壺の入り口には二人の見張りが立っている。

その見張りをしていたのはサヴィニー・レポーヌとヴォルネー・カレルドウスは見ている物が信じられなかった。

向こうから裸の男達が歩いてくる。隠す事もしないで……

つい目がそこに行ってしまう。まさかここまで堂々と来られると言葉すらなかった。

そのまま彼らは堂々と滝壺の方へ歩いていってしまう。

あまりの事にただ呆然と通してしまった。

「きゃあああああああああああああああああああ！」

中で悲鳴が上がる。

その悲鳴で二人はやっと自分達のミスに気が付いた。

「うおおおおおおおおおおお！パラダイスやあああああああああああああ！」

「い、このど変態がああああああああああああ！」

ジャキン！

眼福なのはほんの一瞬だった。

俺達は一瞬でバインドを掛けられ岩場に縫い付けられた。

「あんたらホントバカ？」（デュワーズ

「てかここまで変態だったとは？」（エヴァン

私はそれが信じられなかった。

まさか堂々と裸で入ってくるとは思わなかった。

そしてバインドを掛けられて私達の足下に転がっている。

「あんたら私達の裸を見に来たのよねえ？」

いくらでも見せてあげるわよ？お互い裸なら条件は同じだしね？」  
（エヴァン

でも、信じられない事はその直後起こった。

私達の後ろにやってきたのはナカジマシスターズ、全てのナカジマ姉妹が揃っている。

この学校にいるナカジマ家の9人が集まってきた。

「あ、あのうイスズさん、何か目の色が変わっているのですが……」

イスズさんだけじゃあなかった、みんな目の色が変わっている。金色の目に……何かちよつと怖いよ……

一体どうしたんだ？ナカジマ家は？俺達はそのただならぬ雰囲気  
に途轍もない危険を感じた。

そしてまさかそこからとんでも無い天国と地獄が同時にやってこようとは思わなかった。

「男よ！」「男だ！」「獲物だ！」「美味しそう！」

信じられない言葉が飛び出す。

「頂きますー！」

ナカジマ姉妹9人が俺達に襲いかかる。

「アヤメさん一体何を？」（ジョン）

パクン

「ヒアウ」「（ジョン）

「私のも舐めて」「（イスズ）



「な、ナギ！やめてくれ、俺お前の事好きだけど、こんな所でこんな事をされるなんて……」(ジム)

不味い事を口走ってしまった。

その「好き」という言葉に反応して更に過激になるナギ、もう止まらない。

「ダメなの、もうこうなってしまうと私達は止められないの？」

私達が満足するまでそう簡単には止められないの、だから私のも愛して、舐めて！」(ナギ)

「こ、これがナギのあそこ……綺麗だ……」(ジム)

9人のナカジマ姉妹が7人に襲いかかる。

まずはむしゃぶり付いてP〜をP〜してP〜する。  
お互いあそこを舐め合ってるのもいる。

「お願い私のP〜にあなたのP〜を頂戴！」アヤメ

ずぶう プチッ

「ちよつと痛かったけど気持ちいい！」(アヤメ)

「うおおおおおおおおお！で、出るう〜！」(ジヨン)

「私も欲しい！」(ナギ)

「ちよ、ちよつと待て！こんな所でそんな恥ずかしい事！」(ジム)

ずぶう プチッ

「い、痛あゝ、でも気持ちいい！」（ナギ

「あ、あのゝ皆さん血が出てるんですが、もしかしてロストヴァー  
ジンなんですが……」（リン

ナカジマ姉妹はもう止まらない、その過激さがどんどん加速して  
いく。

そこにはめくるめく官能の光景が展開されていた。

「あのゝそんなに中出しされたら子供が出来ちゃうと思うんですが  
……」（りん

突っ込んでる間に変な気分になってきた。  
そうしている間にジョン達がひからび始める。

「お、お願い助けて……」（ジョニー

「し、死ぬゝ」（ジョン

そして1時間、彼らは白くかさかさになっていた。  
私達はその行為から目を離す事が出来ずただ見ている事しかできな  
かった。

「君たち、そこで何をしているのかな？」

天から声が降ってくる。

ナカジマ姉妹の暴走（後書き）

次回：はいお約束通りの展開です。

先っぽが痛い……（前書き）

「まったく、こんな馬鹿な治療するのは私も初めてだ！（怒）」（スー  
「し、滲みるううううう！消毒が滅茶苦茶滲みるううううううう  
う！」

最後の最後まで地獄を見た7人だった。

先っぽが痛い……

「君たち、そこで何をしているのかな？」

天から声が降ってくる。

「スタアアアアアライトオオオオオ・ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

チユドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

バスターじゃなくSLBが空から降ってきた。

そう、この巨大な魔力、校長先生だった。

関係の無い生徒が巻き込まれるのもお構いなしにSLBをぶつ放す。天から降臨する白い魔王、オートスフィアも自動停止する。

「さて関係の無い生徒は帰っても良いです」（なのは

と言われてもみんなSLBにやられてボロボロだったりする。

そして、救助活動とお説教が始まる。

「あなた達、そう言う行為は禁止だと言っておいたはずですよ。

帰ったら地獄の補習を受けて貰います」（なのは

そして裸のまま正座させられて一時間の説教。やっと解放された。

その後……

「チ、チPの先っぽが擦り剥けて痛い」（ジヨン

「こ、このままだと化膿しちゃうよ〜」(バラントイン)

「痛くて歩けない」(ジヨニー)

「救助呼ぼう」(ジム)

そして……

「つたく、こんな馬鹿な治療するのは私も初めてだ！(怒)」(スー

「し、滲みるううううう！消毒が滅茶苦茶滲みるうううううううう！」

最後の最後まで地獄を見た7人だった。

あの時……

「可笑しいわね？あの子達が居ないじゃない？

いつもなら女の子のお尻を追いかけているはずなのに？」(なのは)

「そう言えば見ないですよ？昨日はビーチにいたのに」(キャロ)

「まさか覗き？」(なのは)

「まだオートスフィアには引っかけかけていませんが……

あれをかいくぐる様な事は不可能だと思います」(キャロ)

ビーチの監視をしながら二人が話していた。

「でもそう言う事には悪知恵が回る子達だから何かやらかしてない

と良いけど、

ちよつと見てくるわ……」(なのは

そして展開される温泉事件、こんな事は何年ぶりだろう？

(あ、頭痛い……)(なのは

今年の生徒は特に手を焼かせてくれる。

「ね、ねえ、アヤメさん達大丈夫？」(リン

「ちよつとお股が痛い……やりすぎたかも？」(アヤメ

「子供出来たりしない？」(マリー

「私達は特殊な体質だから大丈夫、普通の人間みたいに簡単には妊娠しないの、

私達の体を調整するか、男の子を改造しない限りは妊娠しないから  
そう言う事には平気なの」(イスズ

「でもツヤツヤだね？」(デュワーズ

「こちらは男子、

「まさかこんな所で男になれるとは思わなかった」(ジョン

「覗くよりする方がずっと気持ちいい！」(バルンタイン

「でもやり過ぎは先っぽが痛い……」(ブランドン

「死ぬかと思った」(ヘンリー)

「ナギ……どうしちゃったんだよ……」(泣)「ジム

「お前は良いじゃん、きちんと告白してやらせて貰えたんだから……」(ジヨニー)

「俺達関係ない人とやっちゃったし、この先どうしよう？  
てか、子供が出来たらどうしよう？」(ジャック)

その一言に全員真っ青になる。

「俺達みんな兄弟って事か？」(ジヨン)

「この若さで揃って婿養子ってそれ辛すぎるだろう？」(ブランドン)

「全員ナカジマ家入りってそれ嫌すぎる……」(バラントイン)

「出来ない事を神様に祈るしかないな……」

まあジムは良いとしてこの中の何人かはナカジマ家に入りそう？」

(ヘンリー)

7人は本気で祈った。どうか出来ませんようにと……

こうして三日目は暮れていく、余りにしょうもない事をやらし  
ながら……

一方こちらは子供達、フリードの背中に乗って飛ぶ……空の散歩  
は気持ちが良い。

3人で空の散歩だった。その中でもマティスとパルティは最近魔力



に目覚めた、

マティスはこの半年ほどでエマルジョンコレクトSDを母から教え込まれている。

彼にとつて唯一の魔法、まだこれ以上の事は出来ないけれど、龍使いの片鱗を見せ始めていた。

因みにパーティは龍魂召喚を一番最初に覚えたりしている。

上空から眺める夏の大陸は砂漠とジャングルがせめぎ合いその間の所々には火山が存在した。

かなり高い所へ上昇していた。

キャンプ地から少し離れたジャングル側の左奥、沖合に小さな島を見つけた。

丁度ジョン達が行われていた頃、子供達はこの島の探検を始めた。

先っぽが痛い……（後書き）

次回：子供達の小さな大冒険

小さな大冒険（前書き）

「あの島を探検してみよう！」（マティス

「面白そう！」（パーティ

「レッツゴー」（ジョージ

## 小さな大冒険

フリードに乗って空を飛ぶ子供達、  
いくら蒸し暑い夏の大陸とは言えこの高さまで上昇すると気持ちいい。

上空から眺める夏の大陸は砂漠とジャングルがせめぎ合いその間の所々には火山が存在した。  
かなり高い所へ上昇していた。

キャンプ地から少し離れたジャングル側の左奥、沖合に小さな島を見つけた。

あの幽霊の居るジャングルを飛び越えた向こう側、もっと行ったその先の沖合に浮かぶ小さな島、  
近付いてみるとそこそこの大きさがある。

直径3キロちよつと、一周すれば10キロぐらいか？大陸は2〜3キロ離れている。

「あの島を探検してみよう！」（マティス

「面白そう！」（パルティ

「レッツゴー」（ジョージ

そこは断崖絶壁に囲まれた絶海の孤島だった。

まだそんなに調査の進んでいない未開の星、まだこんな所に島がある事さえ知られていない。

上空を旋回しても船の着けられそうな場所はない、降りられそうな場所は小さな岬の先端だけだった。

後はジャングル、いくらフリードでもジャングルの真っ只中へ降りる事は難しい。

それで適当な場所を探している内に見つけたのがこの岬の先端だった。  
丁度木が無くて草地になっている。降りるには最適の場所だった。降りるとフリードは小さくなってパーティの肩にとまる。

「リヴェン又出ておいで」(マティス)

そうリヴェン又まで連れてきていた。

今度はリヴェン又に乗り換える、こうすれば下手に蹴躓いたり穴に嵌ったり、  
疲れて歩けなくなるなんて事はない、リヴェン又は騎獣としても優秀だったりする。

それに危険な物を察知する能力は人間よりも圧倒的に上だ。  
余程鍛えた魔導士でもリヴェン又の察知能力には敵わない、それが野生という物だ。

「あ、でっかいブドウがなってる！」(パーティ)

「よし食べてみよう！」(マティス)

「「「あま~~~~~い!」「」」

「これ採っていこう！」(マティス)

たっぷり収穫してしまい込む、またリヴェン又に乗って歩き出す。少し行くとパッションフルーツが、しかもでかい、さっきのブドウでも一粒が野球のボールぐらいある。

このパッションフルーツもダチョウの卵ぐらいあるし、何かこの島の果物はどれも大きそうだ。  
見つけるたびに収納する。

「良し、ここをフルーツ島と命名する！」（マティス

こうして道草をしながらフルーツ島の探検が始まった。ちよつと行く度にでっかいフルーツが成っている。

その度に道草、思ったほど進んでいなかったりする。でも、不意にリヴェンヌが警戒する、フリードも気が付いたみたいだ。

ジャングルの奥から、島の中心付近から何らかの魔力を感じる。

「何か変だ、行ってみよう！」（マティス

少し進んだ先には、見た事もない遺跡があつた。

小学校の教科書に出てくるような遺跡じゃあない、もっと近未来的な建物が朽ち果てた感じ、

一体ここに何があるのだろうか？そしてこの遺跡の正体は？

「もしかしてダンジョン？」（マティス

「それっぽいよね？」（パルティ

「入るの？怖いよ？」（ジョージ

「宝箱があるかも？」（マティス

「えつつ宝箱？」（ジョージ

ちよつと怖いけど、俄然やる気が出てきたジョージ、マティスが懐中電灯を取り出した。

それでもリヴェンヌに乗って突入する。

中にはいろんな物が倒れ、壊れ散乱しているし、木の根がそこら中を這っている。

リヴェンヌに乗っていて正解だった。普通なら歩けた物じゃあない。

「あっちへ行くと魔力がだんだん強くなるよ？」（パルティ

「可笑しいなあ、そろそろモンスターとか出てきても可笑しくないのに」（マティス

「モンスター？」（ジョージ

「こついう時のお約束でしょう？」（パルティ

と言いつつだんだん奥へ入っていく。

「何か遺跡っぽくないね？遺跡と言うより研究所みたい」（パルティ

だんだん奥の部屋を覗いていく、部屋によっては生体ポッドの様なカプセルがあったり、大型コンピューターみたいな機械があったり、書類棚があったりする。

それは、どう見ても研究所、それにこの施設そんなに大きくない。

そして最深部の部屋はドアがロックされていて入れない。

魔力はこの奥からしていた。

「何だろう？この部屋？入れないね？この奥に何かあるみたいだけど？」（マティス

そして他の入口を捜してみるが、全くない。

他の部屋も捜してみるけどめぼしい物も、お宝もない、

またあの部屋の前に戻ってしまった。

「僕らの魔法じゃこの扉は開けられない、お母さん達に頼もう？」

諦めたマティス達、仕方がないので帰る事にした。

帰ってくるとそこではクロスリードに説教されるアヤメとイスズ、何かやらかしたみたいだ。

「まったく、恥を知れ！それでも生徒会か？」

一年生を押し倒した拳げ句説教を恐れて洞窟に逃げ込んでいるとは何事か？」（クロスリード

今夜一晩サクラ達の所に避難しようとしていた様だが、見つかって連れ戻された。

そして今会長から直々にお説教を受けている。

「まったくいい歳こいて……」（マティス

「あら？あなた達何処に行ってたの？」（キャロ

「フルーツ島！」（パルティ

「フルーツ島？」（キャロ

「うん、でっかい果物が一杯なってる島！」（マティス

ブドウを取り出してみせる。

それは最早ぶと言えるのだろうか？1mぐらいある巨大な房のブドウ、

一粒の大きさが野球のボールほどもある。



それに巨大なパッションフルーツやら巨大パイナップルやら巨大マ  
ンゴーもある。

「この辺りにそんな島があったっけ？」（エリオ

「それでね、変な遺跡があったの、でも一番奥の部屋には入れなく  
て、

そこから魔力が漏れてたの」（パルティ

「明日みんなで調査にいくっ！」（なのは

## 小さな大冒険（後書き）

次回：フルーツ島の調査が始まる。

## フルーツ島の秘密（前書き）

「……と言つ訳でこの子達が発見したフルーツ島を今から全員で調査します」（なのは）

「何あれ？あの巨大パッションフルーツ、素敵すぎる！」（サクラ）

既に食欲が暴走気味のナカジマ姉妹、それはもう彼女たちは食べる事以外頭がない。

まずは子供達を島に行かせて位置を確認、キャロ先生の転送で全員島に渡る。

上空から島を見ると絶海の孤島だという事が明らかになる。

## フルーツ島の秘密

「まったくこいつらどう言う神経してるんだか？」（クロスリード

「だけどこれ美味しいね、一つで満腹になるし」（なのは

子供達の採ってきたフルーツで夕食を摂るなのは達、  
子供達はブドウの二粒もあれば満腹なのだが、流石にアヤメとイス  
ズは一人で一房平らげる。

「戦闘機人は食欲と性欲が暴走しやすいらしいの？」（なのは

「ってかこいつらが食欲を暴走させたらミッドチルダが食いつぶさ  
れるんじゃないね？」（アード

ナカジマ家全員が暴走したらどれだけ食料が無くなる事か？考え  
ただけでも恐ろしい。

「ステーキとマンゴーはよく合うよね？」（エリオ

因みに、今食べているフルーツ以外にステーキも焼いてあったり  
する。

「でも可笑しいなあ、この辺りにそんな島だとか遺跡がある事自体  
可笑しいのに？」（キャロ

「何らかの秘密研究施設みたいね？」（なのは

「明日、全生徒で調査に入りましょう、それにこれだけの果物を収

獲しないというのも勿体ない」(ヒビキ

「そうね割と腕力のある子と召喚士は果物の収穫、それ以外は遺跡の調査で良いんじゃないかしら？」(なのは

所で、ここに来てからちっとも影の薄い雫とビリーとケンとは言う  
うと、

することもなく飲んだくれていたりする。つたくだらしない大人で  
ある。

まあ、ここは食い物もあるし、安心して寝られるし、お酒さえあれ  
ばしっかりリゾート出来るし、  
至れり尽くせりである。強いて言えばあの幽霊達が鬱陶しいのがた  
まに傷だけど……

その夜私達は、あの場面を見てしまった子はなかなか眠れなかつ  
た。

そりゃあれだけ凄いのを見た事ないし、出来ればやってみたいよ、  
ついそれを思い出すと手が勝手に……

翌朝の事だった。食事をしていると通信が入る。

「全生徒は午前8時までには食事を済ませて広場に集合せよ！」(ク  
ロスリード

今日1日やる事ないし、暇だし明日は帰るだけだし何だろう？イ  
ベントかな？

それは、想像を超えたイベントだった。

「……と言つ訳でこの子達が発見したフルーツ島を今から全員で調  
査します」(なのは

「何あれ？あの巨大パッションフルーツ、素敵すぎる！」（サクラ  
既に食欲が暴走気味のナカジマ姉妹、それはもう彼女たちは食べる事以外頭がない。

まずは子供達を島に行かせて位置を確認、キャロ先生の転送で全員島に渡る。

上空から島を見ると絶海の孤島だという事が明らかになる。

「凄い、これは幸せすぎる！」（ツグミ

まずはブドウを堪能する。

「あま~~~~~い」（ツグミ

もう各生徒達は収穫に入った。

そしてこちらは遺跡調査組……

「どおやら何かの違法研究施設だね？」（なのは

「部屋によっては生体ポッドもありますけど？」（エリオ

まずは資料集めね？

めぼしい書類棚に残された資料からこの施設がなんなのかを探る。

「あの部屋はまだ開けない方が良いかも？

もしかしたらあの部屋の魔力でここの果物が大きくなっているとしたら、

その環境を維持する方がこれから先私達にとって有り難いです」（  
キャロ

「確かにキャラの言うとおりだね？その方が僕たちにとって有り難い、毎年美味しいフルーツが食べられるのだから……」(エリオ)

「校長から通達、問題の部屋には手を出さない様に、もし何らかの事故が起きるとも限りません」(なのは)

「今の所読み取れる日付で一番新しい物はおよそ40年前の様だ」(スー)

「この研究施設何かに似てない？」(なのは)

「似てるというか、同じような作りの施設を見た事があります」(エリオ)

「だとすると書類の何処かにはあるはずよ、彼のサインが……」(なのは)

「彼？」(クロスリード)

「そう、私達が昔捕まえた犯罪者、JS事件の首謀者、ジエイル・スカリエッティ」(なのは)

「そうするとここはプロジェクトFの？」(エリオ)

「その基礎研究をした施設でしょうね？」(なのは)

「ありましたよ、スカリエッティのサイン」(キャラ)

「でも、これだけ慌てて放棄したって事は……バイオハザード？」  
（エリオ）

「校長より全生徒に通達、ここにいるのは危険と判断しました、  
これよりキャンプに引き返します。全員撤収！」

なお、収穫した物は細菌検査をします。すぐに食べない様に！」  
（  
なのは

「やばいよお、食べちゃったよう、私達も細菌検査？」（リン）

「所でスカリエッティって一体何歳なの？相当歳だよな？」（エリオ）

「そろそろ還暦じゃない？」（なのは）

そしてキャンプへ帰ってくる。

「どおやら細菌やウイルスに汚染はされていない様だ」（スー）

時間が経っているせいか、それとも別の何かだったのか？

細菌やウイルスの類ではない様だ。検査キットも反応を示しては居  
ない。

「遺伝子検査キットの結果は面白かったよ、

植物の実が巨大化する様に遺伝子が組み変わっている。

恐らく当時はウイルス性のバイオハザードが起きたんだろうね？

それで果物の遺伝子が偶然組変わってしまった。

それであそこだけ巨大な果物が出来るみたいだ。

別にあそこから苗を持ち出したとしても、

もうウイルスは無いからバイオハザードは起きないだろうけど、

巨大な実を付ける植物が育つよ。



ただ、あの部屋に入らなかったのは正解だね？

もしかしたらあの部屋は汚染源が残っている可能性がある。もし感染していたらえらい事になる所だったかも？」（スー

「良かった、あの施設は嚴重に封印する方が良いわね、次元航行隊に頼んでおこう」（なのは

「良かった、感染して無くて」（リン

「俺達の方がもっと焦ったぞ、昨日たらふく食べたからな？」（ヒビキ

「所でスー先生、もしその遺伝子が人間に感染していた場合どうなっていたんですか？」（なのは

「まだ完全に解析出来ていないから分からないけど……」

シミュレーションの結果ではもの凄い絶倫になると思われる。

あくまで帰って解析してみない事には何とも言えないんだが……」

（スー

その夜のデザートは最高だった。

お肉以外に大量のフルーツ、私達はもの凄い贅沢だと思う。

## フルーツ島の秘密（後書き）

次回：最終日、突如飛来するフォルスの戦艦、そして……

## 慰霊の日（前書き）

「こちら生徒会長だ、未確認の戦艦を捕捉した、総員第1級戦闘配備！」

私達はすぐに広場に集合した。

そして、その戦艦はスプールスに降下するといつものビーチ近くの海に着水した。

戦艦から降りてきたのはフォルスの人たちだった。

## 慰霊の日

「アフロくん、私達の分は？」（なのは

「あの、アフロじゃなくてラフロです」（ラフロ

「どっちだって良いじゃん、別にどうせ頭はアフロなんだから」（  
なのは

などとお約束のやり取りをしながらラフロは収穫した果物を取り出す。

こっちが校長先生の方でこっちがキャロ先生の方です。

そう、遺跡の調査で収穫が出来なかったのでラフロに収穫を任せていたりする。

そして、そのフルーツをキャロが収納する、どおやら持って帰るらしい。

今回のお土産は随分良い物があるようだ。

「まさかバイオハザードって言われた時はびっくりだったよ、食べちゃった後だし、ホント焦ったよ？」（リン

「ナカジマさん所は随分収穫してきたね？」（マリー

「あそこは家族多いからね、持って帰ってもすぐ無くなっちゃうよ」（デュワーズ

「所でリン、夏休み後半はどうするの？」（エヴァン

「うーん、取り敢えず修行、もう負ける訳にはいかないんだよね、あの馬鹿達奥義を身に付けてるし、勝てる技の一つも身に付けないと、」

この先あの馬鹿より下って言うのは嫌すぎるし、もっと強くなりた  
いし

まあ、夜は居酒屋のバイトだけどね？」（リン）

「1日か2日空かない？」（エヴァン）

「どうしたの？」（リン）

「実は、地球に遊びに行こうって言う話になってるの、  
本局の山田さんが案内してくれるからって……」（エヴァン）

「あ、それいい！久しぶりの地球か？もう10年ぐらい行ってない  
のかな？」（リン）

「ついでに山田さんに必殺技を教えて貰えば？」

あの人もシグナムさんを負かしている強者だし」（エヴァン）

それがただのお誘いでない事などまだ知る由も無いリンだった。

「いいな私もつれってっ？」（デュワーズ）

エヴァンの口元がニヤリと歪む。

翌朝、最終日、今日のお昼で林間学校も終わる。

朝食を摂っている時だった。

上空に戦艦が見える、見た事のない船、まだ建造されたばかりで凄  
く新しい、

それがスプールズに降下してくる。  
しかも、3隻も……

「こちら生徒会長だ、未確認の戦艦を捕捉した、総員第1級戦闘配備！」

私達はすぐに広場に集合した。

そして、その戦艦はスプールズに降下するといつものビーチ近くの海に着水した。

戦艦から降りてきたのはフォルスの人たちだった。

「校長先生、お久しぶりです」（ユニ・メドック

「少佐、お久しぶりです」（なのは

「何だ？校長先生の知り合いか？」（クロスリード

すぐに警戒態勢は解かれた。

「あ、今は少佐じゃあなくて大佐ですから？」（ユニ・メドック大佐

「フォルスはまた宇宙軍を？」（なのは

「まあフォルスの領空ぐらい守れる様にならないとダメですからね、でも、もう二度とあんな内戦も、海賊行為も起こしませんよ、もううちは昔のフォルスじゃあないんです、

地球の人たちのお陰で随分復興してきましたし、豊かさも享受出来始めました。

それに、人材教育を出来るスクールもその成果を上げていますしね？」（大佐

「所で今日は何故こんな所まで？」（なのは

「今日はいいつらの命日ですからね、軍を上げてあの時同じ部隊にいた連中と慰霊に来たんですよ、

今まで宇宙に出る事すら叶わなかったけれど、やっとクロノ局長のお許しも出ましたし」（大佐

そう、今日はスプールスで命を落とした人たちの命日、

その慰霊碑の建設と、慰霊式典の為にこの人達はやって来たのだ。

そして、残骸の前に……あの朽ち果てたM級戦艦の後ろ、

今にも波にさらわれそうになっている残骸をみんなで片付け始めた。

「おい、手伝ってやろうぜ」（ジョン

「その必要はない！」

「ヴァロット君！何故ここに？」（なのは

「ああ、今日はいいつらの命日だからな、

でももう俺が花を供えてやる必要は無さそうだ」（ヴァロット

「もうって毎年来てたんですか？」（クロスリード

「ああ、誰か吊ってやらんと可哀想だろ？

あいつらは自分の意志で海賊をしていた訳じゃあない、ただ命令でやらされていただけだ」（ヴァロット

その一言は俺達のいやフォルスの人たちにも響いた。

残骸のあちこちには朽ちた花束が引っかかって残っていた。

そう、毎年ヴァロットさんはここに弔いに来ていたんだ。この人はやはり凄い、時に冷徹で犯罪者には情け容赦ない一面を見せる。

でも本当は情に厚くて情けに深い、とても凄い人だった。

作業が一段落した頃、フォルスの人たちがヴァロットさんの前に跪いた。

「勇者イージスよ、どうか我々の愚かしい行為を許して欲しい、そして礼を言わせて欲しい、国を救ってくれた事、仲間を弔ってくれた礼を」(大佐)

「許すも許さないも無いんだ、もう俺がここに来る必要は無くなったのさ」(ヴァロット)

それ以上言葉は必要なかった。それが漢の世界と言う物だ。

残骸は海岸から入った椰子の木の林の中に移された。

そして残骸の横に慰霊碑が建てられた。

全てフォルスの人々の力で、ヴァロットさんは決して手伝おうとせず、

俺達に手を出させる事もしなかった。

ただ「全て彼らの手でやらせる事に意味があるんだ」と一言言っていた。

慰霊碑が完成すると、そこに花束を供え懐から酒瓶を取り出した。

「飲みかけで悪いな？もう来ないから」

そう言って慰霊碑に酒をかけた。

その酒はフォア・ローゼス、甘い香りのウィスキーだった。



## 慰霊の日（後書き）

次回：1年生にヴァロットさんからとんでも無い指令が……そして  
林間学校は終わった。

## 平和の味（前書き）

「どうだい？大佐、思い出すだろうか？」（ヴァロット

そう、サンドワームの肉はあの時以来の味になる。

あの時出された食事はサンドワームの肉だった。

それを噛み締めて大佐は言う、これが平和の味なのだ……

## 平和の味

まだ慰霊式典が続いている時だった。

「1年生集合しろ」（ヴァロット）

俺達は呼び集められた。

「今日で林間学校も終わりの筈だが、多分食料はギリギリだろう？でもあいつらにバーベキューをご馳走してやって欲しい、そこでだ、今から2時間でサンドフォームを2匹狩ってこい！ついでに集められるだけの果物も集めてこい！」（ヴァロット）

とんでも無い指令だった。

でもやるしかない、俺達は砂漠へ転移する。

そしてサンドフォームをおびき出す、今度は2匹同時の為狩りがしにくい。

何とか岩場におびき出した時だった。

「転送！転送！」（ヴァロット）

一瞬で2匹とも仕留められていた。

恐るべき早業、そして恐るべきその正確性、一撃で仕留めている。

「アルケミックからの転送は物理攻撃だ。

非殺傷設定が利かない代わりに敵を確実に倒せる魔法だ。

覚えておくと便利だぞ？」（ヴァロット）

2匹のサンドフォームはそのまま海岸に転送された。

海岸では2年生がバーベキューの準備をしていた。果物も随分集められていた。ただしキャンプ周辺にある普通サイズの物ばかり、でかいのはみんなお土産にするみたいだ。

すぐに、サンドワームは解体されステーキに姿を変える。もういらぬすじ肉だけど、ヴァロットさんとピノ先生が分けて持って行った。

何でも召喚獣の餌らしい。

「どうだい？大佐、思い出すだろうか？」（ヴァロット

そう、サンドワームの肉はあの時以来の味になる。

あの時出された食事はサンドワームの肉だった。

それを噛み締めて大佐は言う、これが平和の味なのだ……

そしてヴァロットと酒を酌み交わした。

本当は、たくさん話したい事はあるだろう？

でも言葉は必要ない、酒を酌み交わせばそれが言葉、お互い伝えたい事は伝わった。

二人の漢ががちりと握手を交わす時フォルスの新たな歴史が始まる。

これ以降、8月10日はフォルスの慰霊船がスプールスを訪れる事になった。

そしてそれは帰りがけの事だった。

「実は大佐に会いたいって子達が居るの」（なのは

「私に？別に構わんが」(大佐)

「みんなー、でておいでー」(なのは)

その瞬間、みんなの前に現れたのは幽霊達だった。

「うわあああああああああああああああああ！でたああああああああああああああつ！」

現場はあつという間にパニックになる。

その中で一人大佐だけが彼らに向き合っていた。

「本当に済まない、お前達には本当に済まない事をしたと思っています。る。

だが、戦争は終わった、もう戦う必要のない世界になった。もう平和になったんだ。安心して成仏してくれ」(大佐)

幽霊の一人がなのはに何か耳打ちする。

「あの、自分達は暫く幽霊を続けるんですけど、年に一度だけどスクールの肝試しを楽しみにして居るみたい、驚かせるのに嵌ったんですって」(なのは)

その言葉に啞然とする大佐、どうやらこの幽霊達、そのまま職業幽霊を続けるらしい。

その後、この場所は次元世界における最も有名な心霊スポットになった。

時々肝試しに来る奇特な連中が増え、その度に怖い思いをして帰る事になる。

ここはやばすぎる心霊スポットとして確実に出る場所としてその名

を知られる様になる。

それと、時々ポチに食われる連中もいるのだとか？  
やめとけよ、そんな危険な場所で肝試しをするのは？

こうして今年も楽しい？林間学校は終わった。

この伝統はずっとスクールの生徒会に受け継がれていく。

「ただいまー」（なのは

「あ、ママお帰りなさい！」（プレオ

「ママお帰り〜」（ユウキ

「お帰り、なのは」（ユーノ

久しぶりに高町家にみんな帰ってきた。

ユウキとプレオは今日まで聖王教会に、ユーノは夏休みを利用して  
発掘の旅に行っていた。

「あ、キャロさんお久しぶり」（プレオ

「キャロお願いね？」（なのは

「何これ？すごい」（ユウキ

そう、あの巨大ブドウにパッションフルーツ、巨大パイナップル  
に、巨大マンゴー、  
スプールの土産だった。

「じゃあ、私はこれで」（キャロ

キャロが帰っていく。

「ユウキ、セシルちゃん達呼んできて、今からみんなで食べよう?」

「……と言う訳なの、次元航行隊で頼めるかな?」(なのは)

「分かったわ、まずは現地調査して施設の封印処理をした方が良いわね?」(フェイト)

「そうだな、それに細菌防護服もいるだろうから、そう言う特殊チームも連れて行かないとな?」(カルロ)

「ん、これ美味しいよ」(フェイト)「(アルフ)

今巨大ブドウをみんなで食べているのだが……この人数でも食べきれなかったりする。

取り敢えず一番口持ちしそうなパイナップルは最後まで取っておいて、

まずはブドウから手を着けたりしている。

みんなで楽しく美味しく美味しく食べられる、これこそ平和の味だとなのは思った。

「そうね、細菌が漏れ出さない様に入り口一カ所以外は建物をコンクリートで固めてしましましょう。」

外から見ても岩山にしか見えない様にコンクリートで固めた上で、内部で作業する様にすれば意外と安心だわ、

まずはめばしい書類を全て運び出した上で、最後に問題の部屋を開ければ問題無いと思うの」(フェイト)

こうして捜査方針が決まり、次元航行隊の特別チームが編成される事になった。



平和の味（後書き）

次回：新章突入、夏休み後半戦

達人という世界（前書き）

「ええ、もう殺す事のない強さを、相手を確実に倒して殺さないだけの強さが欲しいです」（ジョン）

「空手でそう言うのは難しいかもしれんな？」（輝馬）

## 達人という世界

8月10日夕方

「はいはい、いらぬ肉があつたら買い取るよ、重さイコール金額で！」（イスズ）

そう、三日目に狩つたサンドワームの肉が大量に余っている。

ナカジマシスターズがその肉を大量に買い取っていた。

何せあそこは常に食糧不足だったりする。

私達は果物とお肉を持って帰られるだけ分けると残りは全て換金した。

「ああ、こういう時自分が召喚士だったらどれだけ楽な事か？」（ヒビキ）

「これ持って帰るのは辛い……」（リン）

私は荷物以外に巨大パイナップルを背負い、両手の買い物袋にはパッションフルーツが一つずつ、

お兄ちゃんは巨大ブドウを背負い、巨大マンゴーと巨大パイヤを持ってゐる。

そして口に銜えた買い物袋にはどっさりのお肉が……

「仕方ないなあ、転送してあげるわ」（ナギ）

と言つて感じで帰宅した。

「何？地球へ行ってくる？」（白州）

「うん、エヴァとデュワーズも一緒、泊まりは本局の山田捜査官の実家になるんですって」(リン)

「山田捜査官って言ったら、刑事課最強を誇る剣の使い手じゃあないか？」(白州)

「お父さん知ってるんだ？」(リン)

「俺じゃあとても相手に成らんよ、SSSオーバーの化け物と言われている。」

「実家も剣術道場を営んでいるはずだ」(白州)

「確かあのシグナム作戦指令室長を真正面から打ち倒せる数少ない使い手だったな？」(ヒビキ)

「そんなに凄いんだ？」(リン)

「で？何しに行くんだ？」(白州)

「お買い物と東京見物、それと山田さんに技を習う事になってる」(リン)

「良いなあ、俺も付いていこうかなあ？」(ヒビキ)

「行ってこい！」(白州)

「来るな！」(リン)

こうして更にもう一人山田ウィルスの犠牲者が出る事になった。

「と言う訳でこのパッションフルーツの内の1個は向こうへのお土産にするね?」(リン)

「出発は12日の夕方らしいよ?」(リン)

「しかしこのでかいブドウ美味しいな?」(白州)

「お肉もたっぷりあるから当分食費が浮きそうよ?」(ラヴィーユ)

「しかし、リン、随分成長したな?この一週間で随分いい顔になった。」

これなら、この冬までには相当強くなれるだろう?」(白州)

その晩、そんな話を話ながら私達は夕食を摂った。

翌朝4時起床、俺達は与那覇道場へ向かってマラソンする。

午前中は空手の練習、午後から補習がある。

「だいぶ吹っ切れているじゃないか?」(スー)

「ええ、もう殺す事のない強さを、相手を確実に倒して殺さないだけの強さが欲しいです」(ジョン)

「空手でそう言うのは難しいかもしれない?」(輝馬)

そこへやって来たのは与那覇輝馬先生だった。

「難しいってどう言う事ですか?」(ジョン)

「まあ、それは空手の歴史にある」（輝馬）

そして、道場のみんな集められ輝馬先生の話が始まった。

「そもそも空手は、テコンドーという武術を素に発祥したと言われているが、

それは少し違う、空手もテコンドーも同じ武術を発祥に流派が分かれた武術だと思う。

ただ、空手はその伝わった風土が悪かった。

今からおよそ400年前、地球の日本という国は多くの小国に分かれていたんだ。

そして今でこそ日本の一部になっている沖縄だが、当時は琉球王国という一つの王国だった。

ところがこの琉球王国は余りに国力が無さ過ぎた。

結局の所、外交だけで国の舵取りをしていた琉球王国は、日本の中の小国、薩摩藩に乗っ取られてしまったんだ。

琉球の人々は、武器を持つ事を禁じられ、薩摩からやって来る人々にどの様な辱めを受けようと、

殺されようと文句を言う事さえ許されなかった」（輝馬）

「そんな、それじゃあただの奴隷じゃないですか？」（ツグミ）

「そうだ、奴隷だ、国その物が奴隷だったんだ。

武器も持たず、抵抗すれば斬り殺される。そんな世の中だった。

そこへ伝わった武術を素に、空手が発祥した。

空手は対武器用の武術として発展したんだ。相手がどんな武器を持っていいようが、

どんな戦い方をしようが関係なく相手を確実に殺す事、それに主眼がおかれて発展してきた。

相手に下手な抵抗をさせない為、下手に仲間を呼ばせない為に空手

は一撃で敵を殺す事、  
一撃必殺を基本にする戦い方だ。琉球の人々は密かに空手を習い、  
広め、

一斉に蜂起する事で薩摩を琉球から追い出す事を目標に武術の発展  
に努めた。

でも、そんな必要はなくなってしまったんだ。

時代が変わり、日本という一つの統一された国家となり、そして四  
民平等になった。

もう身分や階級の差もなくなり、戦う必要さえなくなった。

それで困った空手家は戦う事を世界に求めたんだ。

そして要人警護や、軍隊武術、はたまたは自分を鍛える為のトレー  
ニングとして広まった。

それが空手の歴史だ。だから空手の奥義は全て殺人技、殺す為の技  
なんだ」(輝馬)

「そんな、俺達は人殺しをする為に空手を習って居るんですか？」  
(ジョーン)

「違うな、ただ殺す為に教えている訳じゃあない、自分の守りたい  
物を守る為、

誰かの笑顔を守る為に教えている。矛盾しているかも知れないが、  
これも一つの在り方だと思う」(輝馬)

「一つの在り方？」(ジョニー)

「そう、自分の愛する者、守りたい物を守る為、時に悪を滅ぼす事  
もやむを得ない、

ただどうしても殺したくないというのなら、手加減をすればいい、  
確実に相手を打ち倒して負けを認めさせ、改心させる事、

生殺与奪は自分の中にある。殺せる技を使って殺さない事、

それが出来るようになった時、達人という世界が待っている。

そうなる為には相手の実力がどれ位あるのか？

どれ位強力な技を掛けても相手が死なないのか？

相手に対して余裕を持って手加減出来るか？

それを一瞬で理解出来るだけの強さを身に付けなければならない。

達人への道は遠く厳しいんだ。そう簡単に到達出来る物じゃあない」

（輝馬）

「達人という世界？」（ジョン）

「そうだ、そう言う世界に身を置く様にならないと生殺与奪は自在に出来ない。」

もっと強くなれ、もっと自分を鍛え、魂をすり減らせ、その先には達人という世界が待っている」（輝馬）



達人という世界（後書き）

次回：リン達は東京へ、そこに広がるをたくの世界

東京へ（前書き）

「じゃあ、本局で山田さんと合流したら地球へ行くわよ！」（エヴ  
アン）

そして本局、

「何ですか？その大量の荷物？」（リン）

山田さんは大量のダンボール箱と一緒に待っていた。

## 東京へ

「えっ、リン、バイト休むの？」（ジョン）

「明日と明後日ね？」（リン）

「私達明日から地球へ遊びに行ってくるんだ」（デュワーズ）

「いいのかよ？結構金かかるぜ？」（ジャック）

「取り敢えず泊まりは何とかなりそうなんだ、山田捜査官の実家だし」（リン）

「あの山田捜査官の？」（バランタイン）

「結構有名な人なんだね？」（リン）

「有名も糞もあるか、あの人は局の戦技披露会でも常にベスト4に残る強者だ。

それにもう一つの顔もある、

地球の漫画やアニメのこっちに広めてる文化活動をしている事でも有名なんだ」（バランタイン）

「へーそんな活動までしてるんだ？」（リン）

まだその活動内容さえ知らないリンだった。

「しかし、みんなボロボロだねえ？」（リン）

「あの補習は嫌すぎる、校長先生無茶すぎだし」(ジョニー)

「バリアもシールドもエマルジョンコレクトも無しであのアクセルシューターの雨をかくくるとか、  
デイベインバスターを素手で捌けとか、無茶の極みだし、至近距離からぶつ放すし」(ジョン)

「聞くだけ怖い……」(リン)

翌日夕方私達は地上本部前に集合した。

「ここから先はデバイス禁止だからね？私が預かるわ？」(エヴァン)

「何でエヴァは良くて私達はダメなの？」(リン)

「あんだ地球出身でしょ？法律ぐらい覚えときなさいよ、特に日本は、政府の許可無く武器を持ち歩けないの、あんたらのデバイスマンま刀だし」

そうだった、私の飛梅もお兄ちゃんの呑龍もまんま刀、セツトアップするとバリアジャケットが立ち上がるだけ、普段持ち歩く時は周りに威圧感を与えない様に布袋に入れて持ち歩いている。

因みに飛梅は刃渡り2尺7寸(打ち刀はおよそ2尺4寸なので10センチ長い)

の打ち刀作りの太刀、呑龍は刃渡り3尺3寸の居合い刀だ。  
でもこう言う時召喚士が居るのは有り難い、エマルジョンコレクトに収納して貰えるから安心だし、

どんな荷物も持ち歩く必要さえない、全て召喚士任せだったりする。

「じゃあ、本局で山田さんと合流したら地球へ行くわよ!」(エヴアン)

そして本局、

「何ですか?その大量の荷物?」(リン)

山田さんは大量のダンボール箱と一緒に待っていた。

「ま、まあこれ向こうで換金する物だから」(山田)

「換金ねえ?」(デュワーズ)

そして荷物を収納、転送機にはいる。

そして出た先は、バニングス東京支社だった。

まさかあの巨大企業バニングスのビルに入れるだなんて思いも依らなかった。

その上山田さん顔パスだし……何かこの人は凄いのかも知れない。

「東京つて言っても家は北の外れだからな〜川を渡ればもう東京じやあないし」(山田)

バニングスのビルは東京の繁華街のど真ん中にあつた。

「凄い大きな街だね?64番街辺りによく似てるよ?」(リン)

でも私は知らなかつた。

東京が如何にカオスで変な街なのか?まだ知る由もなかつた。そして山田さんがあんな人だったなんて……

「じゃあ、ちょっと買い物してお茶して我が家に行こうか？」（山田

と言う訳でちょっと東京見物、いろんな場所がある。

因みに、クラナガンと東京では6時間半ほど時差がある。

今現地時間お昼下がり。

「この辺りが原宿だよ、日本のファッションの中心地、おしゃれなお店が多いよ」（山田

「うあああああ、この服とか可愛い」

アクセサリーも可愛いのが多いな〜歩いてる人もおしゃれだし」（リン

お店を覗いては喜ぶリン

「ちょっと、あの子大丈夫？何か余りに私達の事知らなすぎない？」

（山田

「実は究極の世間知らず」（エヴァン

「これは染め甲斐があるわ？」（山田

ニヤリとする山田、こうして山田ウィルスの汚染被害は広がっていく。

「何か昔来た時より随分変わったな？」（ヒビキ

「昔って？」（デュワーズ

「10年か11年前ぐらいだったかな？一度来た事がある」（ヒビキ

「東京は3ヶ月でその姿が変わるからね？それだけ来てないともの凄く変わっちゃうよ？」(山田)

「うっ、結構物価が高い……」(リン)

そう、ママから貰ったお小遣いは速攻で底を突きそうだった。

「そりゃオシャレな服の一揃えも買えばすぐお金が無くなるわよ」  
(山田)

「それにお腹減った……」(りん)

クラナガンならそろそろ夕食の時間だ。

「まずはリーズナブルな所で食事にするか？」(山田)

「地球ってまだ電子マネーがあんまり普及してないんだね？」(リン)

「東京はまだマシ、地方に行くと全く普及してない場所も多いし、日本を出ると全くと言っていい位普及してないよ、現金オンリーって国も多いしね？」(山田)

などと言いつつラーメン屋さんにはいる。

「ここならカードも使えるし、定食がリーズナブルだから頼むと良いよ」(山田)

「何この安い金額、クラナガンの半分以下だよ？こんな金額で食べて良いの？」

味とか大丈夫？本当にこの金額で写真通りの物が出てくるの？」「  
リン

（あーこいつまるっきり田舎者丸出し、この先が思いやられるわ）  
（山田

「この味でこの金額はお得だわ」（リン

「リン、お願いだからこれ以上田舎者丸出しはやめてくれ」（ヒビキ

「私達も恥ずかしい」（デュワーズ

こうして東京初日を満喫したリン、そして山田邸へ向かう。



東京へ（後書き）

次回：翌日、山田からとんでも無い指令を受けるリン達、そしていよいよ山田ウィルス注入か？

## 山田道場にて（前書き）

そう、日下一刀流山田道場は経営難に陥っていた。

これだけの門下生の月謝だけで食べていく事は出来ない。

山田さんのお兄さんは、警視庁で御式内杖術の講師もしていたりする。

それでやっと食べていく事が出来ていたりする。

## 山田道場にて

「じゃあそろそろ行くところか？」

本当はまだ寄りたい所がいっぱいあるけど今日は早く寝て明日に備えないとね？

明日は4時起きで始発だから……」(山田)

「明日は何処かに出かけるんですか？」(リン)

「まあね」(山田)

ニヤリと黒い笑いを浮かべる山田、そう明日は年に2回の大イベントがあるのだ。

そして電車で移動、東京の凄い所は3分に一本は電車が来る事、クラナガンでもここまで過密ダイヤじゃあない。

「ここが山田さんの実家？」

ごぢんまりとした道場、そんなに大きい訳じゃない。

それにまあ普通の大きさの民家が併設されている。庭はやや広めかも知れない。

「あのこれつまらない物ですが……」(リン)

「これはどうもご丁寧に……所で、これなんですか？」(山田 兄)

「パッションフルーツです」(リン)

「何〜い？」(山田 兄)

それは驚くと思うよ？普通こんな大きなパッションフルーツ存在しないもん、

ダチヨウの卵というかバレーボールより大きいもんね？

「む、向こうの世界ではこんな巨大なフルーツが採れるんだ？」

山田 兄

「私も見た事無いよ」(山田)

「最近発見されたんですよ、こういう巨大フルーツが成る島があるのを」(リン)

「しかしなあ、錦、友人をここに連れてくるのは良いでしょう？でもそろそろ結婚相手を探れてきたらどうだ？

もう行き遅れてるのはお前ぐらいだぞ？そろそろ考えろ」(山田 兄)

そう、山田の兄や姉たちは既に結婚している。

そして今この道場は兄が守っているのだ。

そして襖の隙間からこちらを覗く二つの視線、子供達だった。

「ねえ、あの人達誰だろう？」

「おばさんの知り合い？」

「一人はこの前の冬にも来てたよね？」

「さっきのパッションフルーツ後で食べられるのかな？」

いろいろな事を考えながら、リン達を観察する子供達だった。

「みんな暑かったでしょう？もうすぐ夕食になりますからちょっと待っててね」(山田 義姉)

「義姉さん、お構いなく」(山田)

そして私達は客間に通された。

「じゃあヒビキ君はこっちの部屋ね？」

取り敢えず、まずはそれぞれの荷物を部屋へ、そして夕食の準備を手伝う。

夕食もまた麺類になってしまった。

「冷や麦も良いね？お昼のラーメンと違ってあっさり食べられるよ？」(リン)

「私はこの味初めてだな？クラナガンではこの手の味はないよね？」(デュワーズ)

「うん、まだこの手の味を出すレストランはないね？」(エヴァン)

「有るよ、私達がバイトしてるあの居酒屋、あそこは出してる」(リン)

「やっぱり和食は和むな？」(ヒビキ)

食事が終わると道場で稽古だった。

午後6時半、門下生が集まってくる。

「ってたったこれだけ？」（リン）

そう山田道場の門下生大人が5人と子供が10人、たったこれだけだった。

「そう言わないでくれ、家はマイナーすぎて何時滅んでも可笑しくない道場なんだ（泣）」（山田 兄）

「結構強い剣術なのに、何で？」（リン）

「もう今の日本じゃあ古流剣術をやるうなんて人間は少ないんだよ、門下生もどんどん減っている」（山田 兄）

「何か勿体ないなあ〜ミッドチルダに来ればいいのに？あそこならきっと門下生が増えると思うよ？」（リン）

そう、日下一刀流山田道場は経営難に陥っていた。

これだけの門下生の月謝だけで食べていく事は出来ない。

山田さんのお兄さんは、警視庁で御式内杖術の講師もしていたりする。

それでやっと食べていく事が出来ていたりする。

「所で君たちはどんな武術を？」（山田 兄）

「私とお兄ちゃんは示現流と北辰一刀流を、向こうの二人は御式内を習ってます」（リン）

「示現流だと？」（山田 兄）

驚いた顔をする。

そう、示現流と言えば古流剣術で唯一（一部地域限定だけど）メジャーに成れた剣術、

そして、御神の剣と並び称される最強剣術、でも技の習得は難しい。

「まあ、この二人は示現流を習い始めて日も浅いから基本は北辰一刀流だけだね？」（山田）

「でもお兄ちゃんは凄いよ、1年ちょっとでもう奥義の内の2つまで覚えたもん」（リン）

「だが、どんな剣術にも一長一短はある、必ず弱点や足りない技がある。

示現流のは空手と同じ一撃必殺ではあるが2の剣3の剣が無い、技を返された時その後の技が出てこない。

それに示現流には乱撃術と逆薙の技が無い、北辰一刀流には乱撃があるが面と小手を狙った打ち下ろし系で、

突き技の乱撃が無い、それに北辰一刀流は実戦剣術と道場剣術が違う物だ。

実戦剣術の北辰一刀流は、フェイントの多用と体から成るべく離れた手の指や足の指を攻撃して、

相手を削り、相手から攻撃力を奪った上でトドメを刺す剣術、強力な技が無い。

実際の面打ちは最後のトドメ用の技だしな？」（山田 兄）

「随分酷い言われ様だなあ？」（ヒビキ）

「でも間違いじゃない、日下一刀流にも大きな欠点がある。

武器が重くて大きいから技を空かされるとそこへ飛び込まれて終わってしまう。

返し技の難しい剣術なんだ。

でも、そう言う欠点を他の剣術で補う事が出来ればまだまだ強くなる剣術でもある」(山田 兄)

「私は克服したけどね？倭刀術を組み合わせる事で」(山田)

「そう言う事か？」(ヒビキ)

「そう言う事って？」(リン)

「足りない技は覚えて補えばいい、教えられたその流派だけの技に拘るのではなく、

新しい技を取り入れて自分だけの剣術を作っていけば良いんだ？」

(ヒビキ)

「まあ、そう言う事だ」(山田 兄)

「そっか？まずは指摘された突き系の乱撃と逆薙だね？」(リン)

「一つだけ技を教えてやろう？日下一刀流担ぎ居合い」(山田 兄)

それは逆薙の技だった。

右利きの場合、左肩に剣を担いで肩の上で鎧を滑らせる事で加速、そのまま居合いで斬る技、

この時振り抜く右手の上に左の拳を重ね、左手で右手を押し出す様に振り抜く事で更に技を強化していた。

丁度空手の十字受けみたいな構えから技を繰り出す事になる独特の技で、

通常の居合いよりも早い斬撃を繰り出せる強力な技だった。

それから1時間練習、何とか感じだけは掴む事が出来た。



「はい今日の練習はここまで、明日は早いわよ、始発で幕張メッセだから……」(山田)

山田道場にて（後書き）

次回：コミケにやってきたリン達、そこで山田の人間性を知る事になる。

## コミケなう（前書き）

今から向かうのは幕張メッセとか言う巨大な施設らしい。

そこで行われる「コミケ」というイベントに参加するのだから？

駅に着いたら私達ぐらいの子がかなり大勢集まっていた。

どうやら同じイベントに参加する様だ。でも、荷物とか大変そう？

## コミケなう

翌日午前4時、私達は山田さんにたたき起こされた。

「今からすぐ出るよ、朝ご飯と昼ご飯は駅前のコンビニで買っからね」(山田)

そう、今日は大きなイベントがあるとかでそれに参加する為に始発に乗る。

「どんなイベントなのかな？」(ドキドキ) (リン)

(こいつ何も分かってね) どう染まるのか？みてて楽しい (山田)

今から向かうのは幕張メッセとか言う巨大な施設らしい。

そこで行われる「コミケ」というイベントに参加するのだとか？

駅に着いたら私達ぐらいの子がかなり大勢集まっていた。

どうやら同じイベントに参加する様だ。でも、荷物とか大変そう？

そして幕張なう、既にもの凄い人……

でも、その場には信じられない人が待っていた。

「八神本部長が何故ここに？」(デュワーズ)

「しいゝ、ここでは本部長は無しゃ、はやてちゃんって呼んでくれへんかなあ？」(はやて)

「実は私とはやてさんが出会ったのはこの場所なのよね？」(山田)

「あれ以来13年の付き合いになるかなあ〜？」（はやて

「さあぐずぐずしてられないわよ？準備しないとね？」（山田

「さあ、皆様イリユージョンです！」（はやて

取り出した大きな黒い布を広げる。

その裏側ではエヴァンとリインがコレクトアウトを発動、大量のダンボール箱を取り出す。

「おお〜毎年ながらこのサークルは違うなあ？

このイリユージョンだけでも大変だろうに？」

周囲から拍手喝采が起きる。

そう、地球では魔法を直に見せられない。

本当の事をばらす訳にはいかないし……

簡単な机とお金を入れる箱も準備、

ダンボール箱の中身は漫画本だった。

「この大量の本ってどうしたんですか？」（リン

「私らで作ったに決まってるやろ？原稿書いてな、印刷所に持ち込んで製本してもらっねん、

つまり殆ど自作や、もし管理局に入ってなかったら多分売れない漫画家をやったと思うんよ？」（はやて

そう、コミケとは、コミックマーケットの事だった。

ここでは今からこういふ漫画本を持ち込んでの販売をやるつと言っ事だった。

そう、ここでは自分達で作った本を自由に売り買い出来るつというイ

ベントだった。

「じゃあ、あんたらは売り子さんな？私らは交替で希少本を手に入れてくる。

午後からは普通に手に入る本の買い出しをお願いするわあ？」（はやて

私達はアルバイトだった。

ただで泊めて貰う代わりに今日半日本の販売をお手伝い。そう言う条件だった。

開始時間になると凄い人、もの凄い数のお札が手元に集まってくる。

「何か凄いよね？これだけ売れるんなら何でプロにならないんだろ？」（リン

私は売っている本を手を取った……ブツ鼻血を噴く

「……えっ、何これ!？」

まともに売って良い物じゃなかった。

思わずこの前の温泉事件を思い出す。

って言うかこの人達分かって買っててるのよね？

余りにやばすぎる内容に私はちょっと罪悪感を覚えながらも、その売り上げの凄さについて調子に乗ってしまう。

「おつりは絶対に間違えないでね？」（山田

「おーし、手に入れてきたでえ？次は錦ちゃんの番や」（はやて

「じゃあ、私はこの5冊だね？でもちょっと時間掛かりそう？」  
山田

そんな風に半日は過ぎていった。

半日で3分の2以上売ってしまつて残っている本も少ない。

これなら終了時間までに完売になりそうな気配。

買ってきたパンでお昼を済ませると、今度は私達が買い出しに出る。

「この番号が売ってる場所で、これが欲しい本の題名、それとお金  
ね？」

全部買い終わつてお金が残つたら使つても良いよ、それ位は入つて  
るからね？」（山田）

私とデュワーズ、お兄ちゃんは手分けして会場に散つた。

「さてあの子達どんな風に染まるのかしらね？」

大体3冊ぐらいは余分に買えるだけのお金が入れてあるし」（山田）

山田はニヤリと黒い笑いを浮かべる。

そう、ここで嵌ってしまえばヲタクへの道が確定する。

そして後は自分達の仲間に取り込もうという作戦だった。

そして……

「ふう、後一冊だよ、でもまだ結構お金が余ってる」（リン）

そして私は最後の1冊を買う為に次の行列に並ぶ。

その頃ヒビキは……？

「どうにか買い物は済ませたな？でも結構余つたし、何に使おうか

「?」(ヒビキ)

適当に並んだ売り場で一冊の本を取る。  
そこにはめくるめくロリコンの世界が……

(おい、こんな内容の本売って良いのか……?) (ヒビキ)

ドキドキしながら買ってしまった。

(不味い、この1冊だけと言うかこの辺りこう言う内容の本ばかりだ、

こんなのリンに見つかったら何て言われるか分からない、何とか誤魔化す方法はない物か?) (ヒビキ)

その頃リンは……?

ガールズラブ系の同人誌にドキドキしていた。  
ドキドキしながら買ってしまった。

(不味い、この1冊だけと言うかこの辺りこう言う内容の本ばかりだ、

こんなのお兄ちゃんに見つかったら何て言われるか分からない、何とか誤魔化す方法は……?) (リン)

「なぐんだ二人ともプラモやフィギアに走ったんだ?」(山田)

そんな事はない、その箱の中にはさっき買った本と一緒に入っているのだ。

似た者兄妹である、でも、どうにか誤魔化し通した様だ。

「デュワーズ何その本は?」(リン)



内容の過激な本が数冊有る。

「値切り倒してその分量を増やしてきた」(デュワーズ

彼女は欲望にストレートらしい。

## コミケなう（後書き）

次回・東京編最終日、リン達はアキバにやってくる。  
その頃、ジョン達は？

## カオスな街（前書き）

と話している内にやってきたのは秋葉原、何か変な人たちが一杯居る。

昨日も結構居た。アニメの格好をしている人とか、それに群がって写真を撮ってる人とか、

かなりきわどい格好をしている人とか、太ってて長髪で紙袋持つてるちよつとキモイ人とか、

誰とも絶対目を合わせないで話してる人とか、ここにも集まっていた。

それにメイドさんがやっているカフェとか、何か変な店がいっぱいある。

この人達は一体何なんだろう？もの凄く気になるけど、話しかけてはいけない気がする。

## カオスな街

コミケは大盛況だった様だ。

山田さん達はそれなりに結構な札束を持って居た。

「いや、初日で完売とは思わへんかったなあ？」（はやて

「まあこの子達が頑張ってくれたから、売れたんですよ、

今までみたいに二人とか3人だとやっぱりきついし客が捌ききれないですからね？」（山田

「でも、辺境世界とは言え商売しても良いんですか？お給料貰ってるのに？」

アルバイト禁止ですよ？」（リン

「これはアルバイトや無い、趣味や、趣味やったら管理局法も何も関係あらへん」（はやて

「それに普段のお仕事はどうしたんですか？まさかサボってこんな作ってたとか？」（リン

「お仕事は普通にしとるよ、

ただ空いた時間を利用して1日1ページとかこつこつと仕上げるねん」（はやて

それこそ趣味の世界だった。

「それに自分のもつとる持ち物売り払ってもそれは商売とは言わんやろ？」（はやて

確かにそうだ。そう言われてみると違反していないのかな？

作：リン、上手く丸め込まれてるぞ！

と言う訳で夕方までに完売して私達は撤収してきた。

でもこういうお金になる趣味はちょっと良いなと思う、

結構纏まったお金が入るし、肉体的にそんなにきつく無さそうだし、私も仲間に入れて貰おうかな？

「じゃあ、私はまだ向こうでの予定があるからかえるわ」（はやて

はやてさんは速攻で帰っていった。

今、夏休みの筈だけど、結構忙しいらしい、本部長って結構大変だな？

私たちも山田さんの自宅まで帰って来た。

すぐに夕食を済ませて夜の稽古に付き合う。

何とか、担ぎ居合いを物にしたい、今度の模擬戦大会では負ける訳には行かないのだから。

「明日はもう少し東京見物して帰る？」（デュワーズ

「そうだね？」（リン

翌朝、私達はお礼を言って山田道場を後にする。

「コラ！待てえええええ！両津待たんかああああああああああ

ああ！」

「へへ〜んだ！待ってたまるか！」

「何？あのお巡りさん達？」（リン）

「この辺じゃあちよつとした有名人だよ、

昔から何かやらかしては追いかけてこつて言うのが日常だし」（山田）

何かこの辺の名物らしい。

ちよつと歩いた所に石像まである。かなり地域に貢献している人を見た。

「ここが葛飾柴又の帝釈天だよ、この辺じゃあ一番の観光名所」（山田）

「ここのお団子美味しい！お土産にしよう！車屋か？また来られたら来ようかな？」（リン）

と言う訳で収納はエヴァンの仕事、こう言う時召喚士は有り難い。焼きたて熱々の団子をそのままの状態で保存出来る。

「じゃあ、今度は東京のディープゾーンへ行ってみようか？」（山田）

私達は電車で移動する。

「東京って結構広いね？クラナガンに負けてないよ？」（リン）

「そうだよ、クラナガンはクラナガン湾を囲む様に街が出来ているけど、

ここ東京は東京湾を囲む様に街が出来てる。地形的にも街の成り立ち的にも似ているのよね？」（山田）

と話している内にやってきたのは秋葉原、何か変な人たちが一杯居る。

昨日も結構居た。アニメの格好をしている人とか、それに群がって写真を撮ってる人とか、

かなりきわどい格好をしている人とか、太ってて長髪で紙袋持つてるちよつとキモイ人とか、

誰とも絶対目を合わせないで話してる人とか、ここにも集まっていた。

それにメイドさんがやっているカフェとか、何か変な店がいっぱいある。

この人達は一体何なんだろう？もの凄く気になるけど、話しかけてはいけない気がする。

「ここは東京……いえ、この世界で最もカオスな街、この世界の全てが揃うディーブな場所、

ここで楽しめる様になったら東京上級者よ！」（山田

作：それはただのヲタクなのではないかと思う。

「そ、そうなんだ……」（デュワーズ

「何か来ては行けない場所に来てしまった気がする」（リン

「まだここは安全だよ、夜の新宿に比べたらよっぽどね？」（山田

「もっと凄い所があるんですか？」（リン

「そう、有るよ、新宿歌舞伎町は日本最大の風俗街だからね？結構危険な空気が流れてるよ？」（山田

「何か山田さんて東京の達人だなあ？」（リン）

「地元だからね？13年前までここに住んでた訳だし……」（山田）

それから山田さんの案内でアニメ関係のショップでお買い物して、その後オシャレなレストランで食事して帰ってきた。

まあ、それなりに楽しい二泊三日だった。

「何と車屋の団子とは……父さんこれ大好物なんだよ！」（白州）

お土産が意外な所で効果を発揮していた。

何かまたお小遣いが貰えるなんて思わなかったし……ラッキー

その頃俺達は徹しの習得に明け暮れていた。

97番世界にはお盆という風習があるらしく、道場は三日間休みだった。

スー先生達は地球へ行ってくるといふ。

暇になった俺はこの三日で何とか徹しを会得するべく特訓を開始した。

「世界が回る」

一発で脳震盪を起こす技だけに、喰らうとそれを打ち消すなんて事はそう簡単には出来ない。

バランタインに徹しを掛けられ、それを打ち消す為に足掻くジョン、しかし、1日目はそれで終わってしまった。

「この技は自分で衝撃波を打ち消す事で破れるのと同時に、同じやり方で相手に打ち込めるんだ。

一度技を破る感覚をマスターしてしまえば同じ事が相手にも出来る



様になるんだ」(バルンタイン)

理屈は分かるものの、どうやったら衝撃波が出せるんだよ？それに頭に手を持って行こうにも、そう簡単には出来ない。歪む視界が、回る世界が体中の感覚を麻痺させる。

「呼吸だよ、横隔膜を使って手を当てる瞬間衝撃波を発生させるんだ。

空手だったら息吹から内臓上げに繋げる感じでもっと早くそれをやるんだ」(バルンタイン)

「こ、こうか？」(ジヨン)

ぺたんと頭の横に手を当てる。

その瞬間、回っていた世界が動きを止める。歪んでいた視界が一瞬で元に戻る。

麻痺していた感覚がもの凄い速さで戻ってくる。

「なんだ？こんな事だったのか？」(ジヨン)

今度は自分でやってみる。

自分自身に掛けておいて解除、簡単に出来てしまった。

「一度感覚を掴んでしまえば結構簡単なんだよ、後は実戦で使える様に練習する事だね？」(バルンタイン)

そして俺はバルンタインと二人組み手に明け暮れた。

カオスな街（後書き）

次回：それぞれの夏休み事情

それぞれの夏休み（前書き）

夏休み後半戦、みんな大変な様です。

## それぞれの夏休み

ジョン達が林間学校に入った頃、いくつかの部隊でも夏休みだったりする。

尤も一般職員はおよそ2週間、幹部職員は1ヶ月の休暇が貰えるのだが、実際の所まだ人手が足りずに全ての休暇を消費出来ている部隊は少ない。

クラナガン周辺で最も人員の多い108部隊の様に交代要員の豊富な部隊は意外と休めるのだが、スペシャルフォースの様な小規模部隊ではローテーションにかなり無理がある。

そして毎年度の小隊がいつから休みになるかくじ引きだったりする。小隊長は責任重大だ、何せ変な時期を引き当ててしまうと夏を通り越して秋に食い込んでしまう。もうリゾートなんて気分ではなかったりする。

「やったあ！今年が一番だ！」（アンナ

8月のトップバッターはチームウィンド、そしてアマローネ副部隊長とグリフィス一尉

7月の終わりから9月の頭を含めて丁度5週間、最大2小隊居なくなる物の、

（一週間ずつずらしながらそれぞれの小隊が2週間ずつの休みを取っていくって事ね）

それ以上は業務に響かない様になっている。

「また私九月だよ〜いっつも夏休みじゃあないよ〜」

とぼやくのはシノン隊員、ロングアーチは完全な縦社会だ。どうしてもしわ寄せが最も若い隊員の所にやってくる。

「仕方ないな、俺はグリフィスが戻ってきたら休みを取る」(ヴァロット)

まあ、8月は世間一般も滅多に大きな事件は起きたりしない、ミッドチルダは「夏休み」が地球よりも浸透していたりする社会で、マフィアや海賊達も思いつきり夏休みだったりする。夏休みを満喫していればこそ、大した事件も起きなかつたりする。寧ろ一番忙しいのは観光客相手の商売だったり、水難事故救助の防災署が忙しい程度である。

まあ、防災署は大きな事故が起きなければ基本的には暇で、結構持て余していたりする。そしてヴァロットは遅い夏休みを取る事になった。でもそれはかえって好都合、家に丁度ジョンが居てくれる。子供達の相手はバッチリだった。

同じ頃、教導隊、

「先輩、今年はどうします？」(リオ)

「私達は慰安旅行のA班だから、休みの後半はみんなで何処に行くか決めないとね？」(エリカ)

「リゾート行っても誰もナンパしてくれないんだよね？」

私達の顔を見るとみんな逃げていくし、大体リゾート行っても局員ばかりなのよね？」(リオ)

「いつその事局員の居ない辺境世界のリゾートとか行って見ない？  
もしかしたらナンパされるかも？」（エリカ）

普段から生徒達をボコつて居る彼女たちにとって、ナンパされる  
なんて事は殆ど無い。

彼女たちの顔を知っているから、その恐ろしさを知っているから誰  
もナンパなんてしないのだ。  
今年も虚しい夏休みになると彼女たちはまだ知らない。

「あなた今年の夏休みは？」（アステイ）

「今年は後半になるな？まあその頃は何処のリゾートも空くんだが、  
その頃になるとちょっと肌寒いし、海も荒れがちで余り良くないな？  
またワイハ諸島辺りにするか、スプールスカカルナージ辺りへ遊び  
に行くか？

そんな程度だろうな？」（ヴァロット）

その言葉に戦々恐々なのは子供達だ。

そう、スプールスだったら間違いないくキャンプだ。

あの幽霊の出るジャングルが待っている。

お願いだからそこだけはやめて欲しいと思う子供達だったりする。

こちらはフェイトさん、

「ねえ、プレオ、ユウキ、夏休み後半どうする？

良かったら一緒に旅行に行かない？」

高町家の子供達を誘ってみる。

なのはは補習の為夏休み返上だったりする。

そしてユーノを誘うと編集者がおまけで付いてくるから誘わない。

「行きたい所だけど……ま、いや、この前教会に行ってきた所だし、  
まだ宿題やってないし、ママにばれたらまた怖い目に遭うし」（ユウキ）

そう、子供達にとって夏休み後半はいろいろ大変である。

山の様な宿題と格闘する期間、大概の子供は最後の三日が勝負だったりする。

もうすぐ後半戦、いよいよ宿題の山との格闘が始まる。

こちらははやて、東京を後にした彼女は海鳴りの街へと来ていた。正確には緑が丘公園、そう、ここには初代リインの墓がある。

あの雪の空に消えた彼女、お墓が無いというのはあまりにも可哀想だった。

それから数年してはやては密かに小さな墓を建てた。

誰の邪魔にも成らない様に、植え込みの端っこに小さな墓石を建て、誰かに悪戯されない様に小さな祠にしてある。

そう、彼女にとって唯一の墓参りをする墓はここだけだった。

こうやって年に2度彼女はやって来る。

あの日自分の命を救ってくれた彼女に会う為に……

「こんにちは、リイン、随分ご無沙汰やったなあ？

今リインはどうしてるん？私はどうとうとう40まで生きてもうた。

リインに救って貰った命でここまでやって来られた。

結婚もして、子供達も大きくなったよ、もうホンマ怖い位幸せや、

なのはちゃんなんかもう孫まで居るおばあちゃんやで？

私も後10年したらおばあちゃんに成れましたゆって報告出来たら

ええなあ？

でも、まだや、私はまだ終わる訳にはいかへん、ラインの救ってくれたこの命、

最後の最後まで燃やし尽くして終わりたい。

だから、見とつてや、いつか必ず全ての世界に平和を、

誰もが笑って暮らせる世の中を實現してみせる。

それまでずっと見守つててや、約束やで？」

そして彼女は線香と水を供えるとそこを立ち去ろうと振り返った。

「みんな……何で？」

「水くさいですよ、主、我々は家族です。

彼女とは血を分けた姉妹の様な物です。我々だけおいてけぼりは酷いですよ」(シグナム

「そうだけ、はやて、あたし達は家族だ、何処まで行つたつてその絆は切れないんだぜ？」(ヴィータ

「はやてちゃん、一人で来るのは酷いの、私達も来たかったのに……」(シャマル

「そうだ、我が主よ、我々は何処までも一心同体、故にこつ言つ事には外される方が悲しい」(ザフィーラ

「みんな……」

もう言葉はいらない、はやては4人を抱き締める。

暖かい涙が頬を伝う、彼らに言葉はいらない、言葉以上に強い絆が彼らを結びつけている。



どんな言葉もどんな力もその絆を断つ事は出来ない。

「はやてちゃん、私もいるですよ」(リイン)

「私だっているんだぜ？」(アギト)

「おーい、おかあさーん」(タケル)

「えっ？タケル？それにウズメも？」(はやて)

「はやて、迎えに来たよ？」(ヴェロツサ)

「ロツサ、お仕事はどうしたん？またサボりか？」(はやて)

「ついさっき終わった所だよ、時差があるからね」(ヴェロツサ)

結局、一家揃っての墓参りになってしまった。

まあ、こんなお盆も良いだろう？

それぞれの夏休み（後書き）

次回：リンは新しい必殺技を開眼する。

## 新しい必殺技（前書き）

私はどうにかこの技を物にしていたけど、まだまだ威力が足りない、

山田さんは今の一撃でVX戦艦を真つ二つにするという。

やっぱりSSSとAAAじゃあまるでその威力が違いすぎる。

私は何処まで技の威力を上げられるのだろうか？

## 新しい必殺技

地球から帰って来た翌日、私達は剣の修行を始めた。

余りスクールのみんなには見られたくないので、108部隊の練習場を借りていたりする。

私はお兄ちゃんから追籠、重切、立を習う。

ここで生きてくるのが北辰一刀流の技と、山田さんから習った担ぎ居合이었다。

重切は、左半身で右肩に剣を置き技に入る。

担ぎ居合いは左半身で左肩に剣を置いて技に入る。

同じ体勢から2種類の強力な斬撃、しかも組み合わせ方によってはかなり強力な攻撃が出来る。

山田さんの必殺技、疾風一迅、あれはバスターを圧縮して斬撃に乗せて打ち出す物、

普通の居合いでも担ぎ居合いでも撃てる技、バスターの練習と共にそれぞれの居合いも練習する。

私達の知っている居合いは4種類、北辰一刀流は左半身から上に抜いて切り下ろす居合い。

宮ノ内示現流の居合いは下に抜いて上に切り上げる居合い。

日下一刀流は横一文字の居合い、加えて担ぎ居合いがある。

お兄ちゃんは紫電一閃を練習していた。

重切に紫電一閃を組み合わせて技の破壊力を上げようと言う、新しい必殺技だったりする。

山田さんは言っていた、とにかく技が確実に当てられるようになること、

まずはどんな体勢からでも技を出せる事が肝心だと……

「あゝ今日も疲れた」(リン)

「この分なら2学期には技の方も使える様になりそうだな？  
これで個人戦でも相当上位まで行くだろう？」(ヒビキ)

「えっ、個人戦？」(リン)

そうだった2学期はスクール最強を決める個人戦がある、  
クロスさんはその個人戦で学年1位に輝いて生徒会長に選ばれてい  
る。

私も何としても学年1位だけは取りたいと思っている。  
でもライバルは結構多い、何処までやれるか分からないけれど、  
必ず掴み取ってみせる。学年1位を……

「だいぶ様になってきたね？」(バランタイン)

「まだ徹しまで持つて行くのが難しいな？いきなりは決められない」  
(ジョン)

「そうだね、成るべく密着しないと難しいし、そうなると空手の技  
は大きい物が撃てない。」

それに大きいのを撃とうとすれば御式内や中国拳法の餌食になる。  
徹底した防御で相手の懐に潜り込むしかないね？」(バランタイン)

「まあ、その方がいいや、マツハの拳は溜がでかいし、  
捨て身で撃たないといけないから攻撃を受けやすい、  
下手にクロスカウンターを食ったら俺の方が終わる。  
通常の打撃で如何に切り崩すか？ってとこだな」(ジョン)

「後は魔法戦だね？」（バラントイン

「どちらにしても俺は近接型だからな？魔法を拳に乗せて直接ぶん殴る事しかできねえし」（ジョン）

そう、ジョンの持っている魔法は全てぶん殴るぞ系、一応砲撃は持っているのだが、

中距離以上の砲撃は一つも持ち合わせては居ない。  
バーニグナックサックルキャノン  
爆裂拳、拳的砲撃、

散弾拳の三種類にバインドとバリアがあるだけという極めてお粗末な内容、

しかも魔力はどうにかこうにかAクラスと言った所、まだそんなに強くない。

せめて山崎兄妹の様にAAAとかS有ればもつと強いのだが、まだそこまで伸びていなかったりする。

何か他の魔法が仕入れたい所だ。

まあ、どのみち接近戦しか出来ないのならそうすればいい、

このスクールの卒業生でもそう言う先輩は数多くいる。

最も危険なポジションにいるだけに、その危険との付き合い方をよく心得ている。

ジョンもやがてはそうなるだろうと予想していた。

「せめて中距離の砲撃が欲しいなあ？」（ジョン）

そう、ジョンの持っている砲撃はナックルキャノンと散弾拳の2種類、

射程は5mほどしかない。至近距離でしか使えないのだが、  
だがその分当たれば結構な威力はある。

「僕らには砲撃は必要ないけどね、寧ろ砲撃手と当たる事で有利に

なるし」(バラントイン)

そう、召喚士は砲撃なんて必要ない、攻撃転送が出来ればほぼ負けない。

相手が砲撃手ならまず召喚士が勝ってしまう。それが相性だった。召喚士相手には近接戦闘以外にあり得ない。

しかもその近接戦闘ですら御式内を相手にしなければならず、非常にやりにくかったりする。

おまけに結界陣砲なんて持っているし……攻撃転送自体が砲撃だし……

お盆が終わりまた道場が再開されると、俺達は自分達の成長を確かめ合う。

みんなそれなりの修行を積んできた様だ。技のキレ、破壊力いずれも格段に上がっている。

「流石によく伸びてきたなあ？そろそろ上級の技を教えようか？」  
(スー)

俺達は夏休みが明けるまでにいくつかの技を叩き込まれる事になる。

「こちらは108部隊練習場に持ち込まれたのは廃車になった装甲車、ちよつとやそつとじゃあ壊せない物だ。

「行きます！疾風一迅！」(リン)

担ぎ居合いから放たれた一撃は装甲車を真っ二つにした。

「今の技はね、ブレイカーで撃つ烈風一迅もあるんだよ？」（スクラティ

私はどうにかこの技を物にしていたけど、まだまだ威力が足りない、

山田さんは今の一撃でVX戦艦を真つ二つにするという。

やっぱりSSSとAAAじゃあまるでその威力が違いすぎる。

私は何処まで技の威力を上げられるのだろうか？

「うおおおおおおお重破剛練斬！」（ヒビキ

さっきのスクラップは跡形もなく吹き飛んだ。

だけでなく、地面のかなり深い所までずっぱり切れている。

そう、重切と紫電一閃の新しい融合技、重破剛練斬、とんでも無い破壊力だった。

「もの凄い破壊力、はつきり言って相手をしたくないよ」（リン

「まだまだだね？山田の烈風一迅はこんな物じゃあないよ、

あれは私でも喰らいたくないもん」（スクラティ

「まだ技の完成度が低いな？休み明けまでもっと威力を上げないと……」（ヒビキ

私達は、休み明けまで技を磨く事にした。

おまけ……子供達の勉強に付き合っているのはフェイトさんだったりする。

「ダメ、私勉強分らない」



そう言って勉強を拒否するのはアルフだったりする。

速攻で子犬モードになって戦線を離脱した。

今フェイトさんが子供達の勉強を見ているのだが、地球の小学校より相当難しい事を教えている。

実はセシルも宿題をやっていなかったりした。

意外と難しい勉強に冷や汗を流しながら、フェイトさんは子供達を指導するのだった。

## 新しい必殺技（後書き）

次回：夏が終わり、いよいよ魔力測定、そして二学期の予定が発表になる。

## 二学期の始まり（前書き）

9月1日、始業式、その場で執務官補佐採用試験やら、指揮官研修の合格者が発表になる。

そう、憧れの青い制服それを渡された物の、同時にバイトの禁止も言い渡された。

これからはお給料が出る物の、囑託扱いで学生の為給料は半額、その上借金は給料から少しずつ天引きされるといふ。

## 二学期の始まり

もうすぐ夏休みが終わるって言う頃、7月分のバイト代が入る。あの恥ずかしいバイトは結構良い儲けになっていた。

10日で24万、居酒屋が6万、合わせて30万あった。取り敢えず20万を返済に充てる。

因みに、8月分は16万8000有る予定、このうち10万を返済に充てる予定だったりする。

でも私は計算ミスをしていた。9月に入ってバイト出来なくなる事を……

9月1日、始業式、その場で執務官補佐採用試験やら、指揮官研修の合格者が発表になる。

そう、憧れの青い制服それを渡された物の、同時にバイトの禁止も言い渡された。

これからはお給料が出る物の、囑託扱いで学生の為給料は半額、その上借金は給料から少しずつ天引きされるといふ。

この先もの凄くキツイ生活が待っている。早く借金を返して執務官になりたい。

「嘘？何この順位？」

それは、指揮官研修の試験だった。

あの馬鹿が、あの馬鹿達が信じられない順位にいる。ジョンが3位って何よ！そこからあの3人が並んでいる。

しかも私12位だし、まあ20人の中には残れたけど、何かもの凄く納得がいかない。

それだけじゃあなかった、クロスさんとアフロさんが幹部試験に

合格していた。

他の生徒会メンバー轟沈、まあ難しい試験だし仕方がない。

何か9月に入っていきなり凹んだ。

まさかあの馬鹿達に試験で負けるなんてあり得ない、有っては行けない事なのに……

そして魔力測定、私は103万M、<sup>マナ</sup>S級になっていた。

ジョン91万M、ブランドン101万M、エヴァン105万M、ジム99万M、ナギ111万M

みんな結構魔力を上げてきた。

そんな中チームで取り残されてしまったのがマリーだった。

魔力値78万M、AAクラスとは言え周りの伸び方について行けず、一人悔しい涙を流す事になった。

まあ、それでも1年生の中では標準的な数字だったりする。

「今年は随分優秀な子が多いわね？S級が結構居るじゃない？」  
なのは

「冬休みまでにS級まで伸びそうな子を入れると30〜40人いますよ、

今年の1年生は当たり年です。もっと授業をきつくしてもっと追い込んでみましようか？」（キャロ

先生方大喜びである。

端的にこの魔力値は実力の一部と評価され、それぞれの成績に大きく係わる。

「おい、会長見てみるよ、987万Mってどんだけ化け物なんだよ？もうすぐSSSじゃないか？いつの間にそこまで魔力上げていたん

だよ？」（バランタイン

「あそこまでエリートで、もの凄い魔力持ちだと結構出世出来るよな？

俺達は何処まで行けるやら？せめて小隊長以上の職に就きたいよな？」（ジョン

因みに、バランタイン95万M、ジョニー90万M、ジャック98万M、デューワーズ92万M  
フェイマス89万M、ヘンリー91万M、ツバキ96万M、ツグミ102万M、サクラ100万M  
と言った具合で、1年上位チームはS〱AAAの混成チームだった  
りする。

そしてその日、2学期の日程が発表になった。

10月3〱6日、模擬戦個人戦大会。

10月13、14日、模擬戦大会団体戦（校内戦）

11月21、22日学園祭

11月29日、執務官採用試験

12月1日、インターミドル・ミッドチルダシリーズ開幕

12月14、15、16日模擬戦大会団体戦

12月24日終業式

更に生徒会からとんでも無い発表があった。

「今年の個人戦大会、1年生の上位2名（男女各1名）を、インターミドルミッドチルダシリーズの代表に加える。

ただし大会までにSSを超えてしまうと出場停止になるので、  
その場合は、その下の順位の者に権利を譲渡する事になる」（ヒビキ

「よっしゃ、絶対に世界戦に行つてやる！」（ジョン）

その発表に燃え上がりまくっているのはジョンだった。

ミッドチルダシリーズはこの10年全てスクールの生徒によって制覇されてきた。

そして、世界戦シリーズはほぼミッドチルダが開催権を押さえている物の、

地球代表、そしてフォルス代表という強豪がひしめく戦いに成りつつあった。

「魔力値だけ見るとまだまだドングリの背比べだな？」（ヒビキ）

「でもこの2学期には頭角を現してくる奴が必ず居る。」

次の生徒会長を選ぶ参考には成るはずだ」（クロスリード）

こうやって連綿と生徒会長が選ばれていく、強さと、責任感と、指揮の上手い事、

その条件にあった生徒を次の生徒会長に選ぶ様にしている。それがスクールの伝統となっていた。

スクール生徒会長とは、スクール一出来る人間でないと行けないのだ。

そしてこの1年の中からどれだけ優秀な人間が育ってくる事か？ヒビキ達もそれを楽しみにしている。

さあ、何の行事もない9月、個人戦大会までに鍛えるには丁度良い期間だ。

この一ヶ月でどれ位強くなれるのか？何処まで鍛えられるのか？

生徒達にとってそれは周りが全てライバルの最も過酷な期間、

誰にも負けられない、絶対に譲れない期間だったりする。

この学園最強を賭けて、せめて学年最強を賭けてライバルに勝つ事だけを考えて鍛える1ヶ月になった。

当然、校内の空気は殺伐とした物になる。

殺気が漂い何時乱闘を起こしても可笑しくないほどだ。

でも、乱闘は起きない、いや手の内を見せたくないから絶対に起こさない。

ただ激しい闘志だけをぶつけ合いお互いの強さを確認し有っている様だ。

「実に良い空気じゃないか？」（クロスリード）

お茶を啜りながら生徒会長はにこやかに業務を進める。

「てか、お前余裕こきすぎだろう?」（ヒビキ）

そうだ、生徒会長はもうすぐSSS最早相手になる生徒は殆ど居ない。

それに、御神の剣、御式内も大半の奥義を使いこなす。

とてもじゃないが強すぎるのだ。

そして2学期からは授業の内容も大きく変わる。

1年生は体力強化授業が無くなり、午後に行っていた授業を午前にスライド、

午後は実習時間となる。

ヴァロット1佐は休暇の一部を返上し、指揮官研修にやってくる様になった。

研修は週三日、残りは実習である。

私達、執務官補佐組で指揮官研修だったりすると結構大変だった



りする。

私達の中で執務官補佐に受かっているのは、ジョニー、ジャック、デュワーズ、エヴァン、

フェイマス、ヘンリー、サクラ、ナギ、私を入れて9人、

このうち、私とジャック、デュワーズ、ヘンリー、サクラ、ナギの6人は指揮官研修も受ける事になった。

私とサクラ、ナギの3人は108部隊のアオイ・ナカジマ執務官（スクール6期生）の下に付けられた。

これはこれで意外とラッキーだった。仕事が終わればすぐに歩いて帰る事が出来る。

仕事場が家のすぐ近くだ。それに108部隊は何人かの執務官が居る。

傘下の警防署や防災署を含めると1万人近い部隊員が居る巨大部隊だけに執務官もそれなりに多い。

ジョニーとジャックはスペシャルフォースのアマネさんの下に、デュワーズ、エヴァンは地上本部刑事課捜査一課のシルヴァ・ネール執務官（スクール7期生）の下に、

フェイマスとヘンリーは、473部隊のヴィラ・エミール執務官の下にそれぞれ付けられた。

それから、同じ日の午後、本局刑事課がとんでも無い発表をしていた。

怪盗ジャヌヴィアの正体が分かったとして顔写真入りで公開した。

「怪盗ジャヌヴィア本名カール・ス・バーグ21才

身長159センチ50キロ、痩せ型、変身制御と幻術は達人レベル。また相当な格闘技を身に付けている。懸賞金10億、生死を問わず」

「嘘？15才ぐらいに見えるよ？凄く可愛い男の子って感じ」（リン

「めっちゃめっちゃハンサムだよな？押し倒したい」（サクラ

「思わずファンに成っちゃいそう」（ナギ

などと不謹慎な発現もさることながら、

次元世界のあちこちではジャヌヴィアファンクラブまで結成される  
始末だったりする。

## 一学期の始まり（後書き）

次回：キツイ指揮官研修が始まる。

## 2学期の授業始まる（前書き）

今日は午後から指揮官研修、ヴァロット先生の授業だった。

「あゝ今日から指揮官研修を担当するヴァロットだ、まあよろしくな！」

## 2学期の授業始まる

9月2日、本格的に授業が始まる。  
それぞれに激しい授業が行われる。

「リン、いつの間に重切や立を覚えた？」（佐藤）

「佐藤先生、夏休みの間にお兄ちゃんが教えてくれました！」（リン）

「そう言う事か？だが一つだけ間違っている技があるぞ？」（佐藤）

「間違っている技？」（リン）

「そうだヒビキもまだ勘違いしている技がある」（佐藤）

「俺もですか？」（ヒビキ）

「そうだ、追籠のやり方が違うんだ、ただ気当たりをぶつけるんじゃない、

殺気を叩き込んで確実に相手を動けなくするんだ」（佐藤）

そう、追籠とは御式内の居竦みだった。

居竦みを叩き込んで動けなくなった所にトドメを刺す技だった。

そう、これは御式内なら奥義なのだ。

リンは思ったこれならジョンに対抗出来る、絶対に負ける事はないと……

「でも、リンに出来るかな？まだ殺気すらまともに出せてない気がするんだが」（ヒビキ）

「そんな事はないぞ、既に何か大きな生き物を殺した事があるんだろ？」

その時の殺す覚悟、その殺すという意志を、明確なイメージを相手の目に向かつてたたき込め、それが出来る様になれば殺気は放てる様になる」(佐藤)

「……多分出来ると思う、サンドフォームにトドメを刺したあの感じが出来れば多分……」(リン)

それから私はお兄ちゃんとマンツーマンで練習する。

「じゃあ俺からやってみよう」(ヒビキ)

その瞬間、もの凄い殺気が辺りを包む、私は動けなかった。怖かった、まるで自分の体を斬られたかのような冷たい刃の感触、その感覚に恐ろしくて声も出せなかった。

「まだ甘いが良い感じだ、もっと強い殺気をぶつけられればそれだけで相手は倒れる。」

場合によつてはそのまま廃人になる事すら有る。それが追箆だ」(佐藤)

今度は私の番だった。蜻蛉の構えから一撃で叩き斬るイメージ、刀を抜く事は相手を殺すという事、構えた時点で殺すという覚悟が出来ていないと行けない事、

改めて覚悟を決める。そして構えた瞬間気当たりと共にイメージを解き放つ、

辺りに放たれる強烈な殺気、まだこの前の感覚が手に残っていた。そのイメージをそのまま叩き付けてみた。

ヒビキは驚いた、自分以上のセンス、才能まさにその凄さを見せ付けられた。

今確かに斬られたと思った。本当に喰らっていたら確実に絶命していたと確信出来る技、  
リンはいきなりそれをやってのけた。

「どうやら妹の方がもっと才能がある様だな？それに今ので一皮剥けた様だ。」

これはこの兄妹鍛えれば信じられない強さを発揮するだろう」（佐藤）  
（勝てる！これであのジョンをフルボッコに出来る！2年生の大半でももう充分に倒せる！  
今度の個人戦大会、準決勝までは勝ち残ってみせる！恐らく敵は会長とお兄ちゃんぐらい、  
来年は私の天下よ！）（リン）

もう、勝ったつもりで居るリン、でも現実にはもっと厳しい。  
更にそのリンを見ていた生徒達はもっと厳しい現実を叩き付けられた。  
とてもじゃあ無いが勝負にならない、一回戦でこの兄妹とだけは当たりたくないとい心から願うのだった。

「ヒビキ、他の技はまだ教えていないんだろう？」（佐藤）

「雙と寸は教えていませんが、既に雙と奥義の道は使えますよ。  
あの技は北辰一刀流と共通の技ですから、  
それにどうしてあんなフェイント技が奥義なのかよく分かりませんか？」（ヒビキ）

「まあ、そう言う事もあるさ、流派によって奥義が通常技だったり、通常技が奥義だったり何て事はよくある話だ、気にするな」（佐藤）  
（つてことは寸を覚えればお兄ちゃんに追い付くんだよね？）  
もしかしたら私の方が強くなれるんだよね？）（リン）

「まあ、リンが追籠が出来る様になったんだ、そろそろあの授業をやらないとな？」（佐藤）

「そうですね、他の1年生達もそろそろ覚悟を決めても良い時期だ。生徒会からも校長先生に進言しておきます」（ヒビキ）

数日後、私達は特別授業を受ける事になる。

「さっきのあれはリンか？」（ジョン）

「もの凄い殺気だったね？」（ジョニー）

「もしかしてリンも居竦みを身に付けたのか？」（ジョン）

それはそれで非常にやりにくい、ジョンはこの先どうやって戦おうかと悩む事になった。

今日は午後から指揮官研修、ヴァロット先生の授業だった。

「あゝ今日から指揮官研修を担当するヴァロットだ、まあよろしくな！」

そう、この研修を取れば卒業後は最低でも小隊長、キャリア幹部試験に通れば副部隊長から始まる出世コース。



「まあ、お互い顔と名前は知っている訳だから、自己紹介なんて面倒くさい物はやらないぞ、

まずお前達に教える事は指揮官たる者の考え方だ。

それが出来ない内に指揮のやり方を教えた所で物に成りはしない。

指揮官として何をどう考えたらいいか？そこから叩き込んでいく、

口答えも反論も許されん、

指揮官とはそれだけ重い立場だという事を理解して貰おう」(ヴァ  
ロット

のつけから非常に厳しい言葉が飛び出す。

生徒達は言葉の重さに緊張する。そうだ、いきなり指揮を執れと言われて出来る人間なんて殆ど居ない。

目の前にいるこの人を除いては……

でも、ここでしっかりと学べばきっとそれなりの指揮官になれるはず、

みんなヴァロットの言葉に真剣に耳を傾ける。

「まあ、指揮官と言ったつて所詮は中間管理職だ。

へマをやらかせば左遷されて最悪首になる。自分だけじゃあなく、

部下のへマでもそうなるから常に部下の行動に目を光らせ、常に適正な指導をする事、

まあ一番最初にそれが出来なきゃ指揮官には成れんぞ、指揮官とは責任を取る立場にあるんだ」(ヴァロット

何かもの凄く嫌な事を言われた気がする。

つまり部下の失態は自分の失態でもあるんだ。

自分が何かやらかさなくても、部下がやらかせばそれで自分も責任を取らされる。

それは、普段から自分が部下を指導し鍛えなければならぬ事、考

えてみるととても大変な事だった。

「そうか、だからヴァロットさんは毎朝あんな早くから部隊を鍛えていたのか？」（ジョン）

非常に訓練と指導の行き届いたスペシャルフォースの小隊、それはヴァロットの指導の賜物だったりする。

それを見ていたジョン達は思う、それが自分達の背負う責任の重さなのだと……

「まずは自分が責任を取る立場だという事を常に自覚しろ、指揮のミス、作戦のミス、スキャンダル、そう言った事全て許されないぞ？」

特にジョン、お前は覗きから足を洗えよ？捕まれば一発で首だぞ？」

（ヴァロット）

釘を刺されるジョン、でも確かにそんな事で捕まったら一発で首になる。

もうこれ以上そんな事を許される様な状態じゃあなかった。

## 2学期の授業始まる(後書き)

次回：強くなる為に、ジヨンはヴァロットに技を教わるつもりとする。

## 殺す覚悟ACT2（前書き）

「良い？あなた達に教えている武術はね、本来とても危険な物なの、これ以上無自覚に教える事は出来ないわ、だから今から話す事は絶対に忘れないで欲しい、

この話を聞いた以上は無自覚にその力を使わないで欲しい、あなた達はそれだけ危険なのだから」（なのは

## 殺す覚悟ACT2

翌日私達は体育館に集められた。

そしてそこで「殺す覚悟・殺される覚悟の話を書かれた」

「良い？あなた達に教えている武術はね、本来とても危険な物なの、これ以上無自覚に教える事は出来ないわ、だから今から話す事は絶対に忘れないで欲しい、

この話を聞いた以上は無自覚にその力を使わないで欲しい、あなた達はそれだけ危険なのだから」（なのは

「じゃあ、僕の方から話しますね。

君達は、格闘技が何故存在するか考えた事はあるか？格闘技の本質とは何か分かるか？」（ロサード

「格闘技の本質？」（マリー

聞かれた事の意味すら分からない、難しい事を効かれていると思っただ。

「自分の命や誰かを守る為にあるのだと思います」（ツバキ

「違うよ、格闘技の本質は戦いに於いて相手を殺傷せしめる為にある。

つまり殺す為にある。でも、その殺戮の先に何かがあると思う？何も有りはしないよ。

あるのは虚しさで地獄だけだ。自分で地獄に堕ちていく」（ロサード

「じゃあ何の為に俺達は格闘技を教えられているのですか？」（フ

エイマス

「殺す為じゃないんだ、守る為には殺す事も必要だと言う事だ。強くならなければ守る事も叶わない。相手に勝つ事も出来はしない。でも、それには必要な事があるんだ。それは殺す覚悟だ」(ロサード

「殺す覚悟？」(デュワーズ

「格闘技って言うのはこれと同じなんだ」

そう言って小太刀を取り出したロサード

「刀の本質は人を斬る事、殺傷せしめる事だ。格闘技もまた然り、もうジョンは経験してしまつた事だけど、戦えば傷付き、場合によつては人が死ぬ、相手を殺してしまう事もあるんだ。だから、それは殺してしまうかも知れない技を無自覚に使わない事、殺してしまうかも知れないのではなく、「殺す」という覚悟を持つて使つて欲しい。

覚悟があれば後悔する事も地獄に堕ちる事もない。君達に足りないのは殺すという覚悟だ」(ロサード

「殺す覚悟？」(ジム

「そう、殺す覚悟だ。

殺す覚悟無くして戦つては行けない。殺す覚悟がなければ自分で地獄に堕ちていく。

僕達魔導士には非殺傷設定という物がある。

それが返つて殺す覚悟を失わせ、力に溺れ、やがて人を傷付け殺す結果になっている。

非殺傷設定なんて物はスイッチのオンとオフでしかない、その感覚で魔法を使って人を殺してしまう。

でもそれはやがて感覚を麻痺させ、狂気に囚われ自分をどんどん殺人鬼に変えていくんだ。

拳銃などの質量兵器だつてそうだ、当たり所が悪ければ確実に殺してしまう。

でもその覚悟無くトリガーを引けばどうなる？下手をすれば一発で殺人鬼になってしまう。

狂気に囚われてどんどん殺し続ける事になる。

後から殺すつもりは無かったなんて言い訳は通用しないんだ。

それは殺せる力を持っていると分かっているとしても、それを自分の欲望に負けて使ってしまったって、

後から言い訳をしているに過ぎない。その時点で地獄に堕ちて居るんだ。

後は何処まで行っても狂気と殺戮以外になくなってしまふ、殺す事しかできなくなってしまうんだ」(ロサード

「そんな、それじゃあ私達はどうしたら？」(ナギ

「だから覚悟を決めるんだ、殺してしまうかも知れないのではなく、殺す、命を奪うという明確な意志を覚悟を持って殺す事、

そうすれば地獄に堕ちなくて済む、殺した後は相手を叩いてやればいい、

それだけの事なんだ、でも、その殺す覚悟というのは考えているより遙かに難しい。

余程肝が据わっていないと出来ないんだ、このスクールで学んでいる事はそう言う厳しさなんだ。

格闘技以上に、自分の心を追い込む厳しさ、

その厳しさの向こう側にある物を学んで欲しいから教えて居るんだ。君達にも出来る。いつか必ず出来るようになる。それを信じて修行

に励んでほしい」「ロサード

「厳しさの向こう側?」「サクラ

「君達にもいずれ分かる日が来る。それからもう一つ、死ぬ覚悟、殺される覚悟を忘れるな」「ロサード

「殺される覚悟?」「ヘンリー

「そう、戦いに於いて常に死と背中合わせである事を忘れてはいけない。

戦えば自分もまた傷付き、場合によっては命を落とす、だから、戦いに臨めば何時殺されても可笑しくないのだと覚悟を決めるんだ。

殺される覚悟無くば、自ずと体が硬くなり、自分本来の動きが出来ず、

その結果、自分が傷付き、やがて命を落とす。

殺される覚悟を持って死と向き合い、死を受け入れる事で恐怖と狂気を制する事、

自分の中でそれが出来ていれば、間違った戦い方はしないだろう?」

（ロサード

「殺す覚悟と殺される覚悟?」「ツグミ

「そう、殺す覚悟を持って相手を制し、殺される覚悟を持って自分を制する。

それが出来るようになれば、無益な戦い、無様な戦いはしないで済むだろう?」「（ロサード

「相手を制し、自分を制する?」「ジャック



「今すぐ出来るようになれとは言わない、だが近い内には必ず出来るようになって貰う」(ロサード)

そう、私達は殺す覚悟、殺される覚悟の大切さを教えられていた。覚悟のない行いは途轍もない悲劇を生む、

ジョンの様にそれを身をもって体験するまでは分からない事だと思っただけ、

自分が後悔という名の地獄に堕ちていく事は途轍もなく恐ろしいとジョンは語った。

みんなその覚悟を決める事の大切さをここで学ぶ事になった。

そして翌日から毎日1時間特別授業が行われる事になった。

それは気配を読む練習、もう2年生はみんな出来る様になっているとかで、

その話を聞いて1年生はまだとても2年生に勝てないとさえ思った。

その授業は過酷だった。

魔力を持たない先生達が、座禅を組んだ生徒達を竹刀でブツ叩いていく、

それを膝の上に置いた木刀の小太刀で受け止めろと言う物だった。

勿論目隠しをしている、だから見る事は出来ないし、雫先生や佐藤先生達は魔力がない。

魔力を感じる事すら出来ない。

私達はさすがにする頭と戦いながらコツを掴もうとする。

「出来る様になった者から抜けて良いぞ、出来る様になれば通常授業だ」(雫)

「こんなの本当に出来る様になるのかよ？」(バランタイン)

「いたたたたたた」(マリー)

そんな中信じられない事が起きる。

始めて30分もしない内にジョンがほぼ完璧に出来る様になって抜けていった。

「どうやったらあんな事出来る様になるんだろう?」(リン)

「コツを聞いてみたいね」(ブランドン)

そしてそれは、他の1年生にとって大きなプレッシャーでもあった。

俺はその足でヴァロット先生の所に来た。

至近距離の攻撃しかない俺にとって中距離を制する事、それが課題だった。

同じように至近距離の攻撃しかないはずのヴァロット先生がどうやって中距離を制したのか?

それを教えて貰う為に俺はヴァロット先生の教えを仰いだ。

## 殺す覚悟ACT2（後書き）

次回：そんなジョンにヴァロットは二つの魔法を授ける。

## ナックルブレイカー（前書き）

「プログラムの調整と、新しい魔法を二つ入れておいた。

明日の朝から数日間教えてやろう、後は自分で練習して使いこなせる様になれ、

多分、お前なら使いこなせる様になるだろう？」（ヴァロット

## ナックルブレイカー

「ヴァロット先生、教えて欲しい事があります」

俺はヴァロット先生に中距離の制し方を聞きに来た。

「……なるほど、お前は召喚士じゃあないからエマルジョンコレクトは使えないだろう？」

そうなるバインドだな？後どんな魔法を持って居るんだ？」（ヴァロット

「至近距離の砲撃が2種類とバインド、バリアぐらいな物です。後殴った所を爆発させる魔法です」（ジョン

「ちょっとデバイスを見せてみる？」（ヴァロット

「？」（ジョン

ヴァロット先生は俺のデバイスを受け取るとモニターを開いてプログラムを展開する。

「うーん、まずはパラメーターの設定が可笑しいな？バリアと非殺傷設定はもう少し強化する形で行くか？持っている砲撃の距離は伸ばせそうにないな？新しい砲撃を入れてみるか？

トラップバインドはデフォルトで入って居るみたいだな？まだ使えていない様だが？」（ヴァロット

「あゝ、一体何を？」（ジョン

「プログラムの調整と、新しい魔法を二つ入れておいた。明日の朝から数日間教えてやるう、後は自分で練習して使いこなせる様になれ、

多分、お前なら使いこなせる様になるだろう？」（ヴァロット

魔法を二つ頂いた。

取り敢えず読み込んでみる。

「バインドウィップ？もう一つはブレイカー？でもなんか変なプログラムだ」

俺はまだこの時は知らなかった。

入れて貰った魔法がとんでも無い代物だという事を……

ヴァロット先生がプログラムマスターだという事すら知らなかった。

（でもフロントアタッカーに溜の大きいブレイカーってどうよ？

どう考えても、不自然な気がする。

もしかしたら痛み付けておいてトドメを刺せという事だろうか？）

（ジョン

翌朝、チームウィンドを指導しながらヴァロット先生が新しい魔法を教えてくれた。

「まずバインドウィップだが、こういう使い方をする」（ヴァロット

目の前に準備されたテトラポットがすっぱりと切断される。

それは驚きの光景だった。殺傷能力のない筈のバインドがもの凄い殺傷能力を発揮する。

有っては成らない攻撃、それがバインドウィップ、目から鱗だった。

「これを会得するにはまずバインドを極めなければならぬ、それから、このバインドウィップは無限に伸びる、距離は関係ないが大体正確に相手をねらえる距離はジヨン、お前の場合でおおよそ50m程度だ、達人でもおおよそ300mと言った所だろう?」(ヴァロット)

俺にとって50m有れば十分な距離だった。でもまだ使えない魔法、まずはバインドの練習からだった。

「さてもう一つの魔法だが……これはこいつを相手にぶっ放して貰おう」(ヴァロット)

出されたのはガシエットドローン1型、5mの距離を置いて睨み合う。

「ナツクルキャノンの要領でぶっ放せ」(ヴァロット)

「ナツクルブレイカアアアアアアアアッ!」(ジヨン)

その瞬間でかい拳の形をした魔力弾が打ち出される。

キャノンなら射程5mほどで消えてしまう、命中すると大爆発するけど……

ガシエットは危険を感じたのだろう、レーザーを撃ってくる物の、それを全て吸収する。

ガシエットが慌てて逃げ出す、それをしつこく追いかけるでかい拳、追い付くと後ろからデコピンを入れてガシエットを転ばす、

更に転んだ所へでかい平手でビタンと叩く、

完全に壊れたガシエットを摘み上げると親指で空中高く弾き上げた。落ちてきたガシエットをそのまま掴むと握り潰す、そしてそこへ収

束する魔力、  
最後は大爆発した。

「な、何なんですか？この魔法は？」（ジョン）

「これは後期収束型砲撃だ。

収束の負担が体に来ない様に命中した後で収束するタイプの砲撃だ。  
ヴィーニヤの龍吼のプログラムがあったんでな、

それにナツクルキャノンの要素とお遊びを入れてみたんだ。

面白いだろう？一旦放てば命中するまでしつこく追いかけるし、  
相手の攻撃を吸収して自分のエネルギーに変えてしまう。

こいつを相手にするのは相当骨だぞ？」（ヴァロット）

「てか、自分の攻撃ながらこれを喰らうのは滅茶苦茶イヤだ」（ジョン）

「私達でも喰らうのはいやよ、それを相手に出来るのは部隊長ぐらいだし」（アンナ）

ジョン、ナツクルブレイカーを会得する。

「さてと、後はバインドの精度上げからだな？」（ヴァロット）

そして俺はヘリのハンガーに呼ばれた。

こここのハンガー、今はヘリがない。

召喚士がいればヘリさえ必要ない為、ハンガーはただの倉庫と化していた。

「この装置だ」（ヴァロット）



「何ですかこれ？」（ジョン）

「これは俺が開発したバインド練習機だ。

本来召喚士はこんな装置が無くてでも自分で練習出来るんだが、  
そうでない隊員が自分で練習する様に作った物だ。まあ見ている」

（ヴァロット）

スイッチを入れつまみを捻る。

そうすると上下に配置された板の表面に転送魔法陣が浮かび上がる。  
そしてその魔法陣の間を丸太が上の魔法陣から落ちてきて下の魔法  
陣に飲み込まれる事を繰り返し始めた。

よく見ると丸太に印が刻んである。全部で5カ所だ。

ジャキンツ

一瞬で5本のバインドが正確に掛かっていた。

1mm たりとも印からずれていない。もの凄い精度だった。

「この装置はこのつまみで速さを調節出来る。

最も遅い1から最も早い10まで、10段階で調節が可能だ。

まずは1から1週間以内に10まで正確にバインドが掛けられる様  
になれ、

俺もこうやって練習したんだ。お前でも出来る。

空いた時間ここへ来て練習すればいい、ただし早くしないと大会に  
間に合わなくなるぞ？」

俺は昼休みと放課後、とにかくバインドの練習に明け暮れる様にな  
った。

しかし、この話を聞き付けた他の生徒までやって来る。

何時しかバインド練習機の前は順番待ちの列まで出来る様になって

いた。

「しゃーねーな？待ってるのも暇だろう？待ってる奴前から3人はトラップの練習、

残りはおうちの隊員に組み手をさせる、少し痛い目を見るがそれなりに強くなれるだろう？」（ヴァロット

こうして俺がバインドウィップを会得するまでには2週間を要する事になる。

## ナックルブレイカー（後書き）

次回：個人戦に向けてそれぞれ強くなる努力をする生徒達、そして  
午後の実習も充実してくる。

執務官のお仕事（取り調べ編）（前書き）

人の命に値段なんて付けられない、でもそれを査定するのも執務官の仕事だ。

非常に辛い役割だと思う。でも誰かがやらないと行けない事、それが執務官というお仕事。

今回みたいなケースの場合、交通死亡事故とほぼ同じ査定が成される。

## 執務官のお仕事〜取り調べ編〜

「ねえヴァロット君、あのバインド練習機を売って」（なのは

「ああ、あれでしたらシャーリーさんにプログラムと設計図を渡してあります。

それとはやてさんとクロノ局長に予算を要求しておきました。

予算が通れば量産して全ての部隊と、スクールに導入されますよ。

ミッドはまずスクールと地上本部から、小さい部隊でも最低3機、

スクールは20機導入の予定で予算を組んで貰える様にしてますから、

一ヶ月後ぐらいには導入されるんじゃないでしょうか?」（ヴァロット

「まだ一月も掛かるんだ?」（なのは

「仕方ないですよ、昔の管理局だったら2〜3年は掛かっていた事が今は1ヶ月で出来るんです。

随分進歩した物ですよ。これも八神本部長の手腕ですかね?

まあ、それまではうちの部隊の召喚士達に協力させますけどね?

同じ事はエマルジョンコレクトでも出来ますから?」（ヴァロット

でも予想よりも早く導入された。

スクールは予定20機の内10機が先行導入され、残り10機を士官学校へ導入とした。

八神本部長の説明によると予備費の予算を取り崩して試験導入を決めたらしい。

これで、生徒達の能力が何処まで上がるのか?ほんの数週間とは言えデータを取る様だ。

でもこれで順番待ちをする生徒も殆ど無くなり、それぞれのバインドの腕がメキメキと上がっていった。

それと同時にバインドウィップを身に付ける生徒が増えていく、そう、中距離の砲撃をバインドで叩き落とす。バインドウィップは攻防一体の魔法なのだ。

このデータはすぐに本局に送られ、翌年からバインド練習機が殆どの部隊に導入される事になる。

「流石にバロツトだな？良い物を発明してくれる」（バローロ

次元航行隊にもすぐに導入された。

こうしてバインドの苦手な隊員もその苦手を克服できるようになった。

私もバインドを練習する。

速い動きをする相手でも一瞬でバインドを掛ければそこで試合は終わる。

やっぱりバインドは絶対に覚えなといけない基本魔法だよな？でも、問題はこのズキズキする頭だよな？

毎日たんこぶだらけだよ、スー先生がすぐに直してくれるけど、なかなか気配を掴む事が出来なくて困ってる。

ジョンの次に気配を掴める様になったのはマリーだった。

気配を掴めるという事はそれだけでもの凄く防御が上がる。

いち早く敵を察知するという事はそれだけ早い対処が出来るからだ。

マリーもまた苦労していた。

どうしてもデバイスを使用しての魔法戦となると魔力の低い自分では勝てる要素がないと思っていた。

でも、陳先生はこう言う、「魔法など必要ない、格闘技を極めれば

どんな相手にだって勝てる。

お前は体も小さいし、パワーもない様に見える、しかし発頭の才能だけは誰にも負けては居ない。

発頭を極めればSSSの魔導士だって一ひねり出来る。

自分の信じる自分を信じる、きつと強くなれるから」と……彼女はそれ信じて自分を磨いた。

発頭の基本は力の練り上げと気の練り上げ、その二つが出来ない事には威力のある発頭は撃てないのだが、

その課程における気のコントロールこそ、気配を掴むのに最適な修行となっていた。

デバイスでの一撃なんて最後のトドメに取っておけばいい。基本的には素手でボコる！

それが彼女の決意だった。気配を掴む事を覚え、発頭のコントロールを身に付け始めた彼女は、

それ以来メキメキと腕を上げていく、魔導士と言うよりは武道家タイプの様だ。

午後の実習、私達は民事裁判の準備をしていた。

そう、ジョン達を襲撃した奴らの裁判、まあ刑事裁判の方はアオイさんが全員矯正教育を決めたので、

何の問題もなかった。

民事の方は大変だったりする、射殺された子の両親が射殺した子の両親に対して損害賠償を請求、

大陪審での裁判となる。私達はラッキーにも原告側弁護団に加わる事が出来る。

アオイさんが執務官として加わる。私達はそのお手伝い、今その資料作りが進んでいる。

「うん、大分良い仕事をするじゃない？」

この分なら勝てそうだけど、問題は相手が財産放棄をしまして、

るくに取れる金がなかった時だね？強制労働を命じる事が出来るかどうか？

そんな所だね、だからもつと詳しく相手の事を調べないとダメだよ？隠し財産がないかどうか？生命保険を余分に掛けていないかどうか？そう言う事から、相手がどう逃げるか？

こちらがどう追い詰めるのかを想定したシナリオの準備とかね？」

(アオイ)

結局裁判なんて物はより有利な証拠をより多く出せた方が勝ちとなる。

だからその証拠を集める為に捜査を進めるのだ。

「まったく何度も何度も呼び出すなよ？何度同じ事を検証したら済むんだよ？」(ジョン)

ジョンもかなり怒ってる。やっぱり巻き込まれた被害者だし、犯人を殴り殺してしまっている。何度も同じ事を聞かれるのは辛いと思う。

そして執務官で言うのは随分因果な仕事だと思う。執務官になればこれが日常、こう言う気の滅入る事が毎日続く様になる。

「次回は原告側の人と話し合うわよ？いくら請求するのか具体的に決めないと行けないから」(アオイ)

人の命に値段なんて付けられない、でもそれを査定するのも執務官の仕事だ。

非常に辛い役割だと思う。でも誰かがやらないと行けない事、それが執務官というお仕事。

今回みたいなケースの場合、交通死亡事故とほぼ同じ査定が成され



る。

最安値で3000万、最も多く取れても1億5000万、  
勿論原告側のご両親には最高額で結審したい所だけど、

相手の弁護士団がどう動いてくるか？私達はどの攻めるのか？そこが  
鍵だったりする。

「8000万がボーダーラインね？それを割ったら私達の負け、  
1億以上行ったら勝利よ、その間だったら痛み分けね？」（アオイ

「やっぱもう少し何とかしたいけど、証拠が弱すぎるよね？

拳銃の入手先どうにかならないかなあ？

せめてガサ入れ出来ると何らかの証拠が拳がってくるんだけど？」

（リン

「あの子達を取調べて何とか吐かせましょう。

もし知らなくても何処か付き合いのあるヤクザの組ぐらい知っている  
るでしょう？

名前の拳がったヤクザの組は片っ端からガサ入れするわ」（アオイ

こうして、私達は重要参考人を取り調べる事になった。

まさか執務官補佐の資格が有ればいきなり取り調べをさせてくれる  
なんて思わなかった。

取り調べの対象者は5人、少年A・B・C・D・E（一応少年な  
んで名前は出せません）

「ねえ、A君、お姉さんに教えて欲しい事があるんだけどな？」（  
ナギ

無視を決め込む少年A、ナギはちよつと頭に来た。

「てめえ、しめられたいのかああん？」（ナギ）

「ナギ、ダメだよ、切れてボコったってなんにも成らないよ？」  
アオイ

こいつら口が堅い。

「ねえ、これ以上非協力的な態度を取ると、殺人幫助から殺人罪の共犯に切り替えるわよ？」

もう一生堀の外には出られなくなるし、下手したら死刑になるわよ？」（アオイ）

私は悪戯を思い付いた。

「アオイさん、大丈夫です、今すぐ死刑にしましょう？」

丁度刀持ってきてますし、死刑って言うて貰えば今すぐ首を刎ねますよ？」（リン）

私は、飛梅を抜きながらにこやかに答える。

この一言は彼にとって相当堪えた様だ。

「……俺は何にも知らないんだ……あいつはいつも一人でああ言う  
危ない物を仕入れてくるから、  
あの時も、まさかそんな本物だなんて思わなかったし、まさか本当に人に向けて撃つなんて思わなかった。

本当は命乞いしたらボコって終わらす予定だったんだ」（A）

「あなたは何も知らないのね？あのスクールは武装隊員に成って戦場を駆ける子達を養成しているの、

銃を向けられた程度じゃあ怯む様な子は誰もいない、寧ろ正当防衛の名の下に殺されるだけだわ？」（アオイ）

「そんな、じゃあ俺達殺され損って事？それにジョンがあんなに強かったなんて知らなかった……」（A）

「手を出したあなた達が悪いの、スクールの生徒達はね、命を捨てる覚悟の上に戦う事を教えられている。」

例え死んでも敵に背を向けるなんて事はないわ、それから死んだあの子が出入りしていた様なヤクザとかの組を知らない？

もし知っていたら教えて欲しいな？」（アオイ）

「俺は知らない……もしかしたら一番仲の良かったのなら知っているかも知れない」（A）

他の子も大体同じような答えだった。

そして最後に取り調べたC君は、一つのヤクザの組を教えてください。ガリーグ一家、クラナガンの裏社会でも有名な武闘派マフィアだった。

ただ、簡単には尻尾を掴ませない為に、今まで解散させる事が出来ずにいた大きな組だ。

その若頭と問題の容疑者との接点が浮かんできた。

**執務官のお仕事～取り調べ編～（後書き）**

次回：ガサ入れが始まる。

執務官のお仕事〜ガサ入れ編〜（前書き）

そう、ヴァロットは明日行われるガサ入れに指揮官研修の練習を  
ねじ込んだ。

リン達はそのままガサ入れ、残りはガサ入れの手伝いをしながら見  
学という事になった。

## 執務官のお仕事／ガサ入れ編

「済まないな、いつも無理を言ってる」(ヴァロット)

「良いんですよ他でもないロシエット一佐の頼みですから」

「だからそう言うのはやめてくれって言ってるのに、  
昔通りヴァロットで良いんですよ、ナカジマ三佐」(ヴァロット)

そう、ヴァロットは明日行われるガサ入れに指揮官研修の実習を  
ねじ込んだ。

リン達はそのままガサ入れ、残りはガサ入れの手伝いをしながら見  
学という事になった。

「何か相当やばい所らしいね？ヤクザらしいよ？」(デュワーズ)

「今までかなりの事件を起こしているけど、証拠が無くなって捜査出  
来なかったみたいだね？」(ヘンリー)

「ガサ入れするにも証拠が居るんでしょ？」(ジャック)

「出てきたみたいよ、死んだ子と若頭の接点が……名詞とかツーシ  
ヨットの写真とか」(デュワーズ)

そう、それは鑑識の勝利だった。

容疑者Aは、ストライクアーツをやめた後、家出をし、この2年ま  
るで家に帰っていない、

そしてとある雑居ビルの一室に自分のアジトを持って悪さを繰り返  
していた。

路上強盗や恐喝、傷害、麻薬の密売などを繰り返していたという話がちらほらと出始めていた。

実際麻薬を買っていたという人間が何人か逮捕されたのだ。

その証言を元にアジトを家宅搜索、ゴミの一つも残さない様に全てを押収して分析に掛かった。

その中でゴミの中から違法ドラッグの錠剤や、若頭の名詞、杯を交わす写真などが出てきたのだ。

これだけの証拠があれば充分だった。

「よし、お前ら明日はガサ入れに同行する、まあガサ入れの手伝いになるが、

どうやってガサ入れするのか？どう言う捜査の指揮をするのか見逃すなよ、

それから、相手は武闘派のヤクザだ、万が一の戦闘になるかも知れん、

殺す覚悟と殺される覚悟、市民を巻き込まない様に戦うにはどうしたらいいか？

よく考えながら見学する様に」(ヴァロット

その日の実習時間、俺達はガサ入れに同行した。

ガサ入れの先は3カ所、若頭宅、組長宅、組事務所だ。

それぞれ108部隊の精鋭達が周りを包囲し、万が一にも市民に被害の無いように配慮している。

彼らも驚いただろう？いきなりやってきて捜査令状と証拠を突き付けられガサ入れが始まってしまった。

証拠を隠している暇さえなかった。

私達はアオイさん指揮の下若頭宅のガサ、ここが一番怪しいと思う。

他にもヴァロット先生や指揮官研修のみんなも見学に来ている。

組事務所はスクラティさん率いる精鋭部隊が、  
組長宅はティア先生が応援に駆け付けて指揮を執っていた。

「可笑しいわね？これだけ捜せばそれらしい証拠の一つや二つ出てきても良いのに！」（アオイ）

一応帳簿類や、いろんな書類などダンボールに詰めて次々と運び出している物の、

ドラッグとか注射器とか、拳銃とかダンビラとか出てこない。

普通ならそう言う類の物が出てくるはずだけど、まるで出てこない、それどころか余裕こいてこっちを見ている。

（やられたわね、彼が死んだ時点で事件に気が付いたんでしょ、  
既に証拠は隠されたか隠滅されているわ、あの顔はそう言う余裕の  
顔よ）（アオイ）

（そんな、それじゃあこの捜査は空振りって事ですか？）（リン）

（骨折り損のくたびれもうけってか？）（ナギ）

「お前らよく見ておけ、ここからが捜査の本番だ」（ヴァロット）

「リン、あなたなら見つけて欲しくなくても手元に残しておきた  
い物がある時、

何処にどうやって隠す？それが答えよ」（アオイ）

「思い切って捨ててないとしたら、誰にも開けられない箱に入れて  
鍵を掛けるとか、

誰か信用のおける人に預けるとか、思いも依らない場所に隠すとか、  
そうやって見られないようにすると思います」（リン）



そうそれが答えだった。

誰にも開けられない箱とは金庫、若頭はそう簡単に人を信用する夕子の人間じゃあない、

それでも信用するとすれば貸金庫、そうでないとすれば何処かに隠し部屋の入り口があるはず。

それが答えだとアオイさんは言った。

でもこの家の何処に隠し部屋があるのだろうか？それに気が付いたけど金庫すら見つかっていない。

そう、ガサに入った時から金庫も見つかっていなかった。

普通なら家の一番奥に金庫があるはずだ。でも無かった。

これは不自然すぎる、金庫を置いた跡さえ見つかっていない。

有るはずの物が無い、それが答えだった。

そうすると何処かに隠し金庫があるか、隠し部屋に置いてあるか、貸金庫に預けて鍵だけ持っているか？

「サクラ、あなたの出番よ」(アオイ)

「何故サクラさんなんですか？」(リン)

「この子はただの大食らいじゃあないの、鼻の良さでは犬をも上回るのよ、

警察犬に匹敵する鼻を持っているの、本気になれば見つけれられない物なんて無いわ」(アオイ)

「よくあの時ショック死しませんでしたね？」(リン)

「死にかかったわよ、魂抜け掛かったから」(サクラ)

思い出したくもない屁玉攻撃、あれは相当にやばかったようだ。私達は金属探知器を取り出して若頭達を身体検査、鍵の一つも出てくればそれを押収する。

その間にサクラが屋敷中を嗅ぎ回る。

そう、彼女は一度に3〜5種類程度の匂いを覚えられる。

そして匂いを頼りに搜索を開始した。

覚えたのは、ドラッグの錠剤、拳銃の火薬、そして金庫に使われる 그리스、

この匂いを隠し通す事なんてほぼ出来ない。

「あ、グリスの匂い発見！」

事務室と思しき部屋の壁からだった。

さっき見た時はただの壁にしか見えなかった。壁の真ん中から匂っている。

「リン、ここを斬ってみて！」（サクラ

私は飛梅を振り抜く、壁を薄く切り落とすと小さな金庫があった。隠し金庫だ。これだとそんなに大きな物は入らない、多分貸金庫の鍵とかそう言った類の物だ。

「若頭さん、この金庫の鍵は何処でしょうか？」（アオイ

もう既に彼の顔から余裕の笑みが消えていた。

でも答えない、黙りを決めてこのまま籠城戦に入る構えだ。

「リン、その金庫えぐり出しちゃって、

あと中の物を斬らないように上手く金庫を壊せるかしら？」（アオイ

私は金庫を壁から切り出した。

机の上に置くと横一文字に振り抜いて上の方を切断した。お菓子なんかの缶を開ける要領で金庫の上の方を取り去ると、中にコントローラーがある。

スイッチを押すと、別の壁に入り口が出来た。そう、隠し部屋だった。

隠し部屋はやっぱり地下室になっていた。

そこには違法ドラッグやら拳銃やらが一杯置いてあった。

「これで決まりね、若頭、あなたを銃刀法違反及び麻薬取締法違反の現行犯で逮捕します」(アオイ)

次々と運び出される押収物件、これで裁判は相当有利に進められる。

それに、新しい事件としてこれがまた私達の捜査の対象になっていく。

執務官のお仕事（ガサ入れ編）（後書き）

次回：裁判に参加するリン達、これもやっぱり執務官のお仕事

執務官のお仕事〜裁判編〜（前書き）

そう、有る程度強い証拠があれば裁判では相当強気に出られる。  
そして、その証拠を素にどれだけお金を取れるか？それが民事裁判  
だったりする。

執務官のお仕事／裁判編？／

私達が若頭を逮捕した事で、組の殆どの人間が逮捕された。

その場にいなかった幹部や下っ端は、顔写真入りで指名手配された。

「リン、サクラ、お手柄だったわ、この分ならボーナスの査定が随分良くなるわよ」(アオイ)

「えっ？ボーナス出るんですか？」(リン)

「当たり前よ、もうお給料貰って居るんでしょ？」

今回の分は11月までの査定期間になるから、

支払いは3月だけどころかなり上乘せが付きそうよ」(アオイ)

大分先の話だけどちよつと嬉しい。

「じゃあ、裁判の打ち合わせに入るわね」(アオイ)

そう、有る程度強い証拠があれば裁判では相当強気に出られる。

そして、その証拠を素にどれだけお金を取れるか？それが民事裁判だったりする。

「まずは罪状認否ね？被告側の出方で随分変わるわよ？」

陪審員や裁判官の心証で判決に大きく影響するから相手の言葉に気を付けてね？

出来る限り相手に自滅させるような言葉を喋らせる事、それが裁判のコツよ」(アオイ)

まず、相手だけど、被告人死亡の為、弁護士か父親が被告代理人

を務める。

そして罪状認否、ここで罪を認めず「殺意はなかった」と無罪を主張するか、

始めから罪を認めて、支払額の減額にはいるかで裁判は大きく変わる。

本当に賢い相手なら、罪を認めて減額に入るだろうという。

でもそれをやられてしまうと私達の負けだったりする。

かなりの減額をされてしまうから、思ったほどは取れない。

逆に、「殺意はなかった」と無罪を主張すればその方が有利に裁判を進めやすい。

こっちには数多くの証拠と、何人かの証人もいる。

既に証人リストにはあの5人とジョン達3名をリストアップしている。

先に証人を押さえてしまえば相手に証人としてジョン達を取られない、

もう裁判所にはリストを提出済みだったりする。

「相手のご両親は会社の役員なんですね？」（リン）

「死んだ子には兄が居るみたいだね」（サクラ）

「良い所のお坊ちゃん、我が儘放題に育ってその拳げ句が転落人生か？」（ナギ）

「家とは大違いよ、みんな培養ポッド生まれだから異常に姉妹が多いし、

食べ物とか殆ど競争だったし、着る物とかお下がりばかりだったし、我が儘の一つも聞いて貰えなかったな、でも賑やかで楽しい家だけ

ど」（アオイ）

「あ、見てて分かる気がする」（リン）

「この手の親の場合読みにくいわね？会社役員をしているって事だけど、

百戦錬磨の商売人なら間違いなくすぐに減額に入られるわ、とてもじゃあ無いけどいきなりそれをやられたら私達の負けね、証拠も証人も使えなくなる。

逆にただの成金で子供に甘いただのバカ親なら無罪に持つて行こうとするでしょうから、

その場合は証拠と証人が生きてくる。そうすれば請求額を相当上乘せ出来るわ」（アオイ）

アオイさんはこう語る。

裁判になったら人の情なんて捨てると、とにかくどれだけ高額損害賠償を取れるか？

相手に情けなんか掛けるなど……それが執務官というお仕事だと言いつつ切った。

「ごめんなさい、明日の裁判スクール全員で見学させて欲しいの」（なのは）

校長先生はアオイさんにそう申し入れてきた。

すぐに調整が図られ、裁判は大法廷で行われる事になった。

その日午後2時、裁判が開廷する。

裁判長：「これより裁判を開始する、まずは罪状認否を行います。

被告人は罪を認めますか？」



被告：「認めません、あれは流れ弾にあった物であり、運が悪かっただけだ。」

彼を殺す意志はなかった、よって無罪として頂きたい」

アオイ：「異議あり！」

裁判官：「意義を認めます、続けて下さい」

アオイ：「まずは証拠映像として防犯カメラの映像を提出します。」

彼は被害者 A、B、C を襲撃する為に拳銃を準備し、

仲間がいるにもかかわらず拳銃を人に向けて発砲しています。

拳銃は人殺しの道具であり、管理局法にも違反した質量兵器でもあります。

それを人に向けて発砲した時点で殺意はあったと見なされるべきです」

そして、公開されるビデオ映像、そう、この映像の全ては公開されていません。

公開されたのは編集された一部であり、その全ては裁判に影響する為公開されていなかったりする。

「よう、ジョン、久しぶりじゃあねえか？」

「なんだお前らか？何の用だ？」（ジョン）

「おい、ジョンこいつら誰だよ？」（ジョニー）

「昔ストライクアーツをやった頃の知り合いだ、尤も弱すぎていつも俺が泣かしてたけど？」（ジョン）

「てめえ、舐めてんじゃあねえぞおおおお」

その瞬間チェーンを振り回して殴りかかってくる相手、ジョンが  
手刀を振り抜く、  
チェーンは真つ二つに切断されていた。

「無駄だ、やめとけ俺に係われば死ぬぞ？」（ジョン）

今のでかなりビビる7人、これが人間業でないと分かっているよ  
うだ。

「全員でかかれ！」

リーダー格の男が指示を出す。

背中合わせで構えを取るジョン達、付け入る隙がなかった。

「だったらこれはどうだ？」

その男が取り出したのは拳銃だった。

「おい、そんな物を出したら手加減が出来ないだろう？お願いだから俺に人を殺させないでくれ」（ジョン）

それは脅しではなくジョンの本心だった。

でもその言葉は彼には届かなかつた。ただの脅しと取られたようだ。

「ハア？余裕くれてんじゃあねえぞゴルア」

トリガーに指がかかる。

パァーン

その瞬間、咄嗟に避けたジョン達の間を通過した弾丸は後ろにいた4人の内の一人を撃ち抜いた。不味い事に左胸を貫通している。その一人が崩れ落ちる。

「はははは、今のは外したがもう外さねえ、死ねやあああああ！」

相手の指がトリガーにかかる。もう迷っている暇はなかった。

ドパアアアアアアアン

もの凄い音がした。

拳銃を持った男は一撃で壁に叩き付けられ地面に崩れ落ちた。ものの5分もしないうちに108部隊の装甲車が到着し、防災署の検視が始まった。

これが事件の全てだった。

アオイ：「彼は2度にわたる警告を無視し、しかも相手に向かって「死ね」と発言した上で、

トリガーを引いた。例え命中した人間が違っていたとしても、

十分に殺す意志はあったと認定出来ます。

死亡した被害者Dに関して殺意を向けた物でなかったとしても、

未失の故意は確実に成立します」

被告：「あくまで彼を狙った物じゃあない、だから彼に関しては無罪なんだ」

被告弁護人：「それに彼はもしかしたら生きていたかも知れない、たまたま当たり所が悪かつただけだ」

アオイ：「証拠物件を提出します」

私は証拠物件を運んでいった。それは拳銃、持ってみると信じられない位ずつしり重い。

アオイ：「これは97番世界性の拳銃、デザートイーグル50AE、50口径の自動式拳銃です。しかも入っていた弾はマグナム弾、

被弾すれば腕や足なら確実に千切れ、体や頭に当たれば確実に死亡する危険な物です。

つまり殺す為の道具で殺す為の仕様の弾丸を使用し、それを人に向けた。

これで殺意がなかったとは認められない。

例え的外して仲間当たったとしても、

仲間のいる方に拳銃を向けた時点で殺意は成立する物と認められる」

被告：「私にはその拳銃の仕様がよく分からないのだが、説明願えるだろうか？」

アオイ：「マグナム弾とは材質に鉛を使い、弾丸にも切れ目が入れている物で、

命中すると弾丸が砕けるように出来ている。

弾丸が砕け、変形しながら周りの肉や内臓をこっそりと巻

き込みながら体を貫通する。

その為、弾の当たった場所は小さな穴でも抜けた場所は大きな穴が空いている、これがそうだ」

それは検死の写真だった。

ごっそりとした穴が背中に出来て内蔵が見えている。

とてもグロテスクで恐ろしい画像だった。

その映像は圧倒的迫力で法廷を沈黙させた。

執務官のお仕事～裁判編～（後書き）

次回：裁判の続きです。どのような判決が下るのか？

執務官のお仕事／裁判編？／（前書き）

「随分楽な裁判で助かったわ、

向こうがもつと切れる頭の持ち主だったらやばかったけど、この分なら楽勝ね？」（アオイ）

「アオイさん、この後どうするんですか？」（リン）

「そうね、請求予定額の3倍ふっかけましょう、

例えどんなに減額されても充分に請求予定額は取れると思うから」

（アオイ）

執務官のお仕事／裁判編？／

アオイ：「この様な結果になる事は分かっていたはず、もし彼に弾丸が当たらなくても、

誰かに流れ弾が当たっていたとしても殺人罪は成立します。よって殺意は認定されるべき物だと思えます」

裁判長：「殺意を認定します」

被告：「……」

「あーた、何故あの子が悪者にされるのよ！何としても無罪を勝ち取りなさい！」

被告の母親だった。

このバカ親が居るからあんな子が育つんだね？

「奥さん落ち着いて、そんな事を叫べば余計心証が悪くなります。もつと酷い方向に裁判が流れていきます」(被告弁護団)

被告：「だから始めから罪を認めようって言ってたのに……」

「ご主人可哀想、奥さんに頭が上がらないんだね？」

裁判長：「静粛に！」

裁判官：「これより一次休憩に入ります。休憩のあとは損害賠償の請求に入ります」



そして30分の休憩に……

「随分楽な裁判で助かったわ、向こうがもつと切れる頭の持ち主だったらやばかったけど、この分なら楽勝ね？」（アオイ）

「アオイさん、この後どうするんですか？」（リン）

「そうね、請求予定額の3倍ふっかけましょう、

例えばどんなに減額されても充分に請求予定額は取れると思うから」

（アオイ）

「アオイさん鬼です、相手の人が可哀想です」（リン）

「ダメよ、そう言う感情を持つては、私達は依頼者に満足して頂くのがお仕事なの、

始めから出来ない依頼なら断るし、出来てもこれだけですよと説明するのもお仕事なの、

今回はかなり綱渡りだけど、恐らく勝てる裁判、だから相手に甘い表情を見せちゃダメよ、

それが逆転の一手になる事すら有るの、余計な情けは相手を有利にさせるだけだわ」（アオイ）

そして裁判が再び開廷する。

裁判長：「ではここまでの裁判を纏めると、

明らかかな殺意があった物と認定し、殺人罪が成立する物とする。

なお、殺人罪については今後のいかなる裁判に置いても覆らない物とする。

では、損害賠償の請求を行って下さい」

アオイ：「では殺された彼について、生命を奪われた損害を2億、両親に与えた心理的苦痛を2億、社会に与えた衝撃を懲罰的意味を含めて5000万と査定し、

合計4億5000万請求します」

傍聴席から「おお」と声が漏れる。

アオイさん、本当に鬼だ。冗談無しに請求額の3倍ふっかけた。

被告弁護士：「異議あり！」

裁判官：「意義を認めます、続けて下さい」

被告弁護士：「幾ら何でもそんなむちゃくちゃな額があるか？

死亡ひき逃げ事故の査定の3倍じゃあないか、

それに彼だつて一緒に別の被害者を襲撃した犯罪者じ

やあないか、

そんな馬鹿げた金額を請求する事自体、

いや、損害賠償を請求する事態間違っている」

裁判長：「被告弁護士、言葉が過ぎますよ、あなたは被害者を冒瀆している」

アオイ：「今の発言に際し、更なる損害賠償の上乗せを要求します」

裁判長：「それは認められません」

裁判官：「それでは双方これ以上の意見はありませんか？無ければ

審理に入ります。

原告、被告ともその場で待つように「

そして、陪審員や裁判官達が別室に入っていく、ここで話し合いが行われ、そして結審する。

30分ほど待つと、また開廷した。

陪審員A：「今回の事件に際し、社会への与えた影響はかなり大きいと推察される」

陪審員B：「証拠のビデオ映像を見る限り明らかな殺意が認定され、殺人事件だと断定出来る」

陪審員C：「襲撃に際し、拳銃を準備するなどその計画性は明らかな殺意認定の根拠と出来る」

陪審員D：「その拳銃も明らかに殺す為の仕様であり、これで殺意がなかったとするのは誤りである」

陪審員E：「請求は少々高いと思われる、また被害者も襲撃に加わった罪の分を減額されるべきである」

陪審員F：「なお、被告が被害者を冒涇した事について被害者の罪からその分を差し引く物とする」

裁判長：「主文、被告は原告に対し2億5000万の支払いを命じる」

予想もしない高額判決だった。

予想では予定通りの1億5000万だろうとアオイさんは言ってい

だが、相手側が心証を悪くした事が更に高額賠償になってしまったようだ。これで、控訴期間の2週間以内に控訴しなければ結審という形になる。

「ねえ、アオイさん、相手は控訴するんですかね？」（リン

「多分難しいわよ、あくまで無罪、支払いは出来ないと控訴するでしょうけど、

裁判所が却下するでしょうね？もう殺意の認定は覆らないでしょうから、

それに判決が出た後で減額裁判って言うのは普通出来ないのよ、最初の一回が勝負なの、

後から損害賠償が高すぎるとか言って控訴しても認めて貰えない事が多いわ、

例え控訴審になってももっと高い損害賠償を払うハメになるわ」（アオイ

それから数日後の事だった。

あの馬鹿な母親は、事も有るうにジョン達を訴えようとした。

殺された息子の損害賠償を請求する為に、しかし、裁判所に却下される。

当たり前よ、あれはどう見ても正当防衛、被害者を訴える事は許されない事、

そんな事をして絶対社会が受け入れてくれない。

それから更に数日、あの母親は錯乱の末に精神病院に強制入院させられたという。

そして来月には損害賠償が払われる事になった。

支払額の1割が弁護士にはいる。

まあその内の半分は弁護士が持って行ってしまっただけけれど、残りの半分の更に6割をアオイさんが、4割を私達が山分けする。

「えっ166万もあるの？」（リン）

端数はアオイさんの物だけど、裁判のお手伝いをしただけで凄い金額、

これで借金生活ともおさらば、どうにか運が向いてきたみたい。

私は執務官の仕事がこれほど儲かる物だとは思わなかった。

後から聞いた話だけど、弁護士や裁判官も昔は執務官をやっていた人が殆どなのだから、

でも、儲かる代わりに自分の心が薄汚れていく気がする。

心をお金で売り渡しているような……

執務官のお仕事〜裁判編?〜(後書き)

次回：新たななる捜査へ、今度はあのヤクザ達の持っていた武器の  
出所を探る為の捜査が始まる。

## 高町士郎の教え（前書き）

高町士郎、時々耳にする名前だ。

地球出身で校長先生の父親、そしてこの次元世界に最も強く影響を与えた人、

時に武神と讃えられる事もある凄い人、このスクールの卒業生の中には直接教えて貰った人も数多くいる。

「士郎先生が居たから」、「士郎先生の教えがあるから」そう口にする先輩達も一杯居る。

## 高町士郎の教え

「良いなあリンは？俺なんか民事裁判に参加した事無いや」（ヒビキ

そうティア先生の下にしていると刑事裁判ばかりで民事裁判なんて殆ど無い。

だから、いつも安い給料で我慢する事になる。

「リン、もう給料を貰って居るんだ。

これからは小遣い無し、それと少しくらい食費を入れなさい」（白州

その言葉は聞かないふり……させてくれる訳無いよね？頭をぐりぐりされる。

結局お小遣いカット、9月はまだ借金があるんで食費は入れなくて済んだ。

また民事裁判無いか？やっぱりお金が欲しい。

まあ、来月は少し贅沢が出来そう？

翌日、ジョンに聞いてみた。

「ねえ、なんで慰謝料の請求をしないの？

ジョン達にも慰謝料を請求する権利があるのに……」（リン

「俺はあいつを殺してしまった。

殺しておいて慰謝料まで取ろう何て思わない。

それが俺のケジメなんだ、だからもう、この話はしないで欲しい」

（ジョン

ジョンは寂しそうに笑った。



私もこれ以上ジョンに事件の事は話せなかった。

数日後の実習時間、108部隊隊舎、ブリーフィングルームにてそこに集まっていたのはアオイさん他108部隊の精鋭、ヴァロツト先生と私達指揮官研修の20人、

校長先生、ティア先生、お兄ちゃんとクロスさん、そしてフェイト提督に、八神地上本部長、

「さて、今回の違法銃火器と麻薬の密輸事件やけど、まさかまた地球とは思わなんだなあ？」（はやて

「まあ、仕方ないね、地球は未だに200以上の国と地域に分かれてしまっているから、

警察の連携も殆ど出来ていないし、ICPOの権限の及ばない国も多いし」（なのは

「今、次元航行隊の精鋭と、不破一族、バニングス警備、鳳凰武俠会も加わった特別チームが動いているわ、

何処のマフィアか知らないけれど、必ず見つけ出して始末を付けるわ」（フェイト

「こつちの方は分析待ちね？

押収した帳簿類からめぼしい情報が見つかるまでは何とも答えられないわ」（アオイ

そう、あの押収した膨大な書類の山からめぼしい情報を見つけないといけない。

「それと組長他幹部連中や、組員に至るまで口の堅いのが多いわね、全然取り調べに応じてはくれないわ」（アオイ

「だから有る程度心の読みやすい奴は読んでおいたけどね？」（スクラティ

「どうだった？」（なのは

「殆どスカ、でも出てきたのは地球のヤクザは八つぐらいの組が係わっている。

まあ裏が取れない事には動けないけどね？」（スクラティ

「今までにない規模だね、昔は中国系のマフィアが多かったのに」（なのは

「あの俺達にはまだ何の事がさっぱり分からないんですが……」（ジョン

「そっか、そうだよ、みんなまだ殆ど地球の事知らないもんね？」（なのは

それから1時間、それでも手短かに地球の事を習う俺達、管理外世界としてまだ未成熟な為、公式には管理局との付き合いのない世界だった。

ただ、バニングスのように積極的に次元世界に進出している企業もある。

でも、どうしてもこちらの世界との取引や人の移動が有れば、招かれざる者もやってくる。

そして、出会ってはいけない者同士が出会った時、武器や麻薬の密輸なんて事も起きたりするようだ。

「大体地球の事情は飲み込みましたけど、何で不破一族とかバニン

グス警備なんですか？」（ジョン）

「それはな、なのはちゃんのお父さんのお陰や、士郎はんはな、昔バニングス警備の主任をしてた事があるんよ。

今でも御神一族、不破一族はほぼ全員バニングスに入社してるし、スクールの卒業生も少しはバニングスに入つとる。

あそこはそれ位セキュリティに力を入れ取るさかい、大きなテロ組織やヤクザでも手も足も出せんのか」（はやて

「そうだね、昔裏社会科見学とか言つて大きなマフィアを殲滅した事もあるし」（なのは

「士郎はんはその後スクールの先生もやってた事があるんよ、ヴァロット君はその時の教え子や」（はやて

「ああ、確かに士郎先生が居なかったら今の俺は多分居なかっただろっ、

あの人の教えがあるから俺は今でもやっていられる、あの人の教えを次の世代に伝える事が俺達の役目だ」（ヴァロット

高町士郎、時々耳にする名前だ。

地球出身で校長先生の父親、そしてこの次元世界に最も強く影響を与えた人、

時に武神と讃えられる事もある凄い人、このスクールの卒業生の中には直接教えて貰った人も数多くいる。

「士郎先生が居たから」、「士郎先生の教えがあるから」そう口にする先輩達も一杯居る。

「ジョン、お前達に話したあの殺す覚悟、殺される覚悟の話も全ては士郎先生の教えなんだ。

今度はお前達が後輩達に伝えて行く番だ。その教えを心に刻んで生きる、そして伝えるんだ」(ヴァロット)

その教えはこうして俺の心にも刻まれた。

「大分ぐだぐだに成っちゃったね？どう？裏が取れるまで1ヶ月ぐらいで出来そう？」(なのは)

「ちょっと厳しいですね？まあ一ヶ月半有れば何とかなるでしょうが……」(アオイ)

「じゃあ模擬戦大会と学園祭の間ぐらいなら問題無さそうだね」(なのは)

「また校長先生も随分無茶な事を考えるな？」(ヴァロット)

私達はまだ頭の中が「？」だった。

でもそれはとんでも無い作戦だと後になって知る事になる。

「これで暫く時間が空いたな、個人戦大会まで少し時間があるし、希望者は俺が少し鍛えてやろう」(ヴァロット)

こうして、個人戦大会までの2週間を俺達はヴァロット先生の下で鍛えられる事になった。

## 高町士郎の教え（後書き）

次回：個人戦大会まで残り2週間、それぞれに特訓が続く。

## 気配（前書き）

「そうね、気配を消したり、相手の気配を読むには魔力が邪魔よ、自分の気配や魔力を極限まで抑えないと出来ないの、初めの内はそうやって気配を読みなさい、読む感覚が身に付けば魔力全開でも読めるようになるから」

コ  
（ユウ

## 気配

「何だ、まだこんなに気配の読めないのが居るのか？」（ヴァロット  
まだ1年生の4分の3が気配を読めないで居た。

「仕方ねえな、うちの隊員に鍛えさせるか？」（ヴァロット  
そう、こう言う事はチームフォレストが一番向いている。

「……と言う訳だ、頼んだぞ！」（ヴァロット  
「っとく部隊長は……」（ユウコ

そう、普段平和な時はパトロールか演習以外にやる事がないスペ  
シャルフォース、  
8月からこつちもの凄く暇だったりする。  
そして私達の特訓をチームフォレストの皆さんが見てくれる事にな  
った。

この人達、気配を操るのが異常に上手い。  
って言うか気配ごと姿を消し去る事が出来るんで非常に怖い。

「そうね、気配を消したり、相手の気配を読むには魔力が邪魔よ、  
自分の気配や魔力を極限まで抑えないと出来ないの、  
初めの内はそうやって気配を読みなさい、  
読む感覚が身に付けば魔力全開でも読めるようになるから」（ユウコ

練習方法は全く変わらないのに、少しだけコツを教えて貰った。  
全部で4人のチームフォレスト、小隊長のユウコさんは、魔力無し

にも係わらず小隊長をしている。  
それにこの小隊、みんな魔力が低い、私達の方が遙かに強い。  
でも戦ってみると異常なほどに強い、武術を極めるとこれぐらい強  
くなれるのだと教えられた。

小隊の人を紹介しよう、

ペリエ・ジユエ陸曹（FA）スクール出身、御神の剣、御式内を  
使いこなす。

魔力A、戦闘レベルSSS、幻術、バインド、バインドウィップ、  
を使う。

まだ独身、恋人募集中。デバイスは二刀小太刀

キュベ・ユウコ2尉（GW）不破一族出身、御神の剣を使いこな  
す。

魔力無し、戦闘レベルSSS+、去年キュベ・サン・セルジュ1尉  
と結婚、

子供はまだ無い。デバイスは二刀小太刀

ベル・エポック陸曹（CG）スクール出身、李氏八極拳・崑吾剣  
を使いこなす。

魔力A、戦闘レベルSS、幻術、バインド、紫電一闪、ストレイト  
バスターを使う。

まだ独身、恋人それはヒ・ミ・ツ、デバイスは五福剣

クリュッグ・グラン3尉（FB）スクール出身、御式内、御神の剣  
を使いこなす。

魔力AA、戦闘レベルSS+、エマルジョンコレクトSD、バイン  
ド、バインドウィップ、

幻術、転送、転移、召喚、強制召喚、アルケミック全般を使う。



デバイスは二刀小太刀と市販のストレージの2種類、  
まだ独身、恋人募集中だけどペリエは俺の天敵

この人達、消えていて突然後ろに現れるからもの凄く怖い、  
実際の戦闘だったらいきなり後ろから刺されそう。

二人階級が低いのは指揮官研修とか一切取らなかつたからで、  
それでもいきなりこの階級から始まっているのは凄い事だと思う。

それから、気配を読む事を卒業したマリーがまた授業に来た。

そして三日目には消える事を覚えて通常授業に復帰した。

これは強敵過ぎる。模擬戦だったら間違いなくやられる。

私達は、新たな強敵出現に焦りを隠せないで居た。

「そう、座禅を組んだら余計な事は考えない、何も考えない事に集中するの。」

そうすれば周りのいろんな事が分かるようになる。見るのと同じ感覚で感じるの。

それが出来るようになれば、周りにある物全てをイメージ出来るようになる。

後はそのイメージに動く物の気配を重ねていけば良いの。

それが出来るようになれば、見る必要さえない、

暗闇だろうと目隠しをしていようと戦えるようになる」(ユウコ

だんだんとコツを教えて貰え、コツを掴んだ生徒から抜けていく、  
私も残り一週間で出来るようになった。

その頃には気配の読めない子は大分少なくなっていた。

残り15〜20人ぐらい、後は大会に間に合うかどうか？

通常授業ではカウンター技の練習が続く、

気配を読むようになった事で、

相手の動く気配に合わせてカウンター技を仕掛けるという練習が続

いている。

御式内では奥義無拍子、何の溜もなく予備動作もなく相手に力ウンター攻撃を仕掛ける技、どの武術にもこう言うカウンター技がある。

宮ノ内示現流の場合、寸でカウンター対策を取る。刀と一体化して体ごと相手に斬り掛かる。

有る意味攻防一体だけど、これだとリーチが無いからいやらしい距離を取られた時が勝負を掛けにくい。

私は佐藤先生から寸を教わる。

「そつだもつと体に刀を密着させる、刀を振るんじゃなく、自分が刀になったイメージで攻撃するんだ。それが出来れば防御も出来るようになる」(佐藤)

「なんか他の技と違ってやりにくいよ、構えも違うし足の運びとか全然違うもん」(リン)

「ちえすとおおおおおおおおおお！」(ヒビキ)

「なんかお兄ちゃん技の威力が上がってない？」

「って言うかあり得ないぐらいパワーアップしてるんだけど？」(リン)

「どうやら、奥義意地も使いこなせるようになってきたな？」

「11月までには「安」と「行」も使いこなせるように鍛えてやろう。卒業までに最終奥義の雲耀まで行く事が出来ればそれで良い」(佐藤)

私はやっとお兄ちゃんに追い付いたと思ったらもう先に行かれてしまっていた。

やっと肩を並べたと思ったのに……まだ辿り着く先は遙かに遠くて

険しい物だとはつきり分かった。

私は何時になつたらお兄ちゃんや佐藤先生の隣に肩を並べられるの  
だろう？

今回の大会、個人戦はいつもの大会とレギュレーションが違う。

特殊アイテムの禁止、戦闘機人はISの使用禁止、アルケミックは  
チェーンとワイヤーのみ許可、

強制召喚、アルケミック転送の禁止、マルチポートデバイスは実弾  
の使用禁止、など、

非常に細かい制限が付く、また非殺傷設定に出来ないデバイスはそ  
れ自体使用禁止となる。

つまり、ガチンコという以外はインターミドルにルールを合わせ  
た形になっている。

でもこれに勝てなければ、インターミドルに出場する事も叶わない。  
とにかく勝つしかない、でも最近のインターミドルはそんなに甘く  
ない。

男子はともかく、女子はナカジマ家のエリートが参加する。

あの子達はやばすぎる。下手をするとスクールの生徒を倒して代表  
に食い込む事さえ有るのだから。

でも私達はまだ考えが甘かった。

インターミドルミッドチルダシリーズはとんでも無い激戦になる事  
を知らなすぎた。

この時はまだ目の前の個人戦大会にしか気が行っていなかった。

## 気配（後書き）

次回：いよいよ始まる個人戦大会。でもその前にジョン達には大きな不安があった。

不安（前書き）

「おい、ナカジマさん達何にも言っ  
て来ないけど大丈夫なのか？」  
（ジョン）

「出来てたらやばいよね？」（ブランドン）

「まさか俺達兄弟って事はないと思いたい」（ヘンリー）

## 不安

もうすぐ個人戦大会、でも実習時間は容赦なくお仕事だったりする。

今はこの前の裁判の書類を取り纏めたり、ガサ入れて押収した書類などを調べる作業をしている。

そう、執務官で現場よりデスクワークの方が圧倒的に多い、デスクワークで体が鈍ったまま現場に出るのは恐ろしい、やっぱり自主トレが必要だと感じる今日この頃だったりする。

「後21件よ、それだけの民事裁判を、大法院をこなせば弁護士資格が手に入る」(アオイ)

そう、執務官は一定回数以上の大法院裁判を経験すると、弁護士の資格が手にはいる。

もう裁判で弁護士を頼まなくても、自分一人で弁護が出来るようになる。

その分儲けが大きかったりするのよ弁護士資格の強みだったりする。この前の弁護士だって、アオイさんに何かちよっと耳打ちしたくらいで半分弁護士料を持って行った。随分良い身分だと思っただくらいだ。

アオイさんは弁護士の出来る執務官を目指しているらしい。でもまだ21件ある、大法院裁判なんてそんなに無いから、まだ2〜3年は掛かりそうだ。

もうすぐ模擬戦大会、俺は俺達はそれ以上に不安な事があった。

「おい、ナカジマさん達何にも言って来ないけど大丈夫なのか？」

(ジヨン)

「出来てたらやばいよね？」(ブランドン)

「まさか俺達兄弟って事はないと思いたい」(ヘンリー)

「ジム、お前聞いて来いよ、この中でまともに聞けるのお前だけだろっ？」(バラントイン)

「お、俺に行かせる気いっ？」(ジム)

「お前しか居ないだろう？ちゃんと告白出来た奴、俺達は別に好きな子がいたのに襲われた方だし、もし出来てたら責任取らないといけない立場だし……」(ジヨニー)

「と言う訳で頼んだぞ？」(ジャック)

結局ジムはいかされる事になった。

「あ、あのう……ナギ……その……この前の事なんだけど……」(ジム)

「この前の事って？」(ナギ)

全く何の事だか分かっていないナギ、まるでジムの事も気にかけていない様子だった。

「あ、あの林間学校の時の返事……」(ジム)

「あ、あの……その……」(ナギ)

あの時はいきなり襲ってしまった。

確かに好きって言われたけどすっかり忘れていた。

いや、考えたくなかった。もしかしたら嫌われたかも知れない。

ふしだらな子だって思われたかも知れない、でも彼はもう一度聞きに来てくれた。

ナギは嬉しかった。でも答えるのが恥ずかしい。

下を向いて真っ赤になるナギちょっと可愛い。

「わ、私は……良いよ……付き合っても……」(ナギ)

「それと……非常に聞き難いんだけど……この前の事なんだけど……大丈夫だったのか？……その……なんだ……妊娠とかしてないのか？」(ジム)

もの凄く不安そうに聞いたジムが余りに可愛かった。

ナギはちよつとした悪戯を思い付く。

「まだ分からないけど……もしかしたら……出来たかも知れない……私と、アヤメお姉ちゃんとイスズお姉ちゃんは……」(ナギ)

その言葉に真っ青になるジム、見ていてちよつと痛々しかった。

「……なんて……うっそぴよおおおん！」(ナギ)

「へ？う、うそぴよん？」(ジム)

「大丈夫だよ、私達は普通の人間と違うの、滅多な事では妊娠したりしないの、

普通の人とは遺伝子が違うから……簡単に出来たりしないよ。



でも結婚する時はどちらかの体を調整する必要があるんだ。  
そうしないと子供は出来ないから」(ナギ)

その言葉にへなへなと崩れ落ちるジム、腰が抜けていた。

「どうしたの？」(ナギ)

やっと本当の事を話すジム、ナギは大笑いだった。

「じゃああなた達子供が出来たんじゃないかって、

その事が不安で練習にも集中出来なかった訳？」(ナギ)

「悪いかよ、俺達はみんな責任を取る覚悟だったんだ。

それにこの年で婿養子マスオさんつて嫌すぎるだろ？」(ジム)

「男の子つて意外と繊細なんだね？」(ナギ)

「笑い事じゃない！俺達滅茶苦茶不安だったんだから！」(ジム)

「それに気にしなくて良いよ、私達は性欲と食欲が暴走しやすい体質なんだから、

この前のはね、犬に噛まれと思って忘れてくれればそれで良いんだよ？」(ナギ)

俺達は後からその話を聞いて安堵した。

これで安心して大会に臨める。これでリンに告白出来る……かも？  
これでひとまず人生の危機は去った、後は学年一位を死守してインターミドルで優勝するだけ！

その夜ナカジマ家

「ちよつとナギ、何で本当の事話すのよ、

あそこは出来た事にして責任取らせる方が良かったのに！」（アヤメ

「アヤメちゃん、それやったら結婚詐欺だよ、ダメだからね？」（アオイ

「お姉ちゃん達にはついて行けない」（ナギ

そして翌日、模擬戦大会個人戦シリーズが開幕する。

「さあ、始まりましたガチンコ模擬戦大会個人戦大会、司会及び審判長は私高町なのはと」

「コメンテーターはスペシャルフォーエス部隊長のヴァンサン・ロシエットでお送りしております」

「私もおるで？」（はやて

「はやてちゃん、また来たああああああ」（なのは

「大丈夫や、仕事はロツサに任せてあるし、この所スクール卒業生のお陰で基本的に平和や、

大丈夫やて、それに今年の1年生は当たり年やと、

S級が3分の1ぐらい居るて聞いたで？だから視察や」（はやて

「私は護衛だ」（シグナム

そう、八神本部長の言うとおり、これは視察を兼ねている。

何処の部隊も今年の1年生の伸び具合が気になっている。

どれだけ強くなっているのか？どれだけ伸び代があるのか？  
2年後のドラフトが気になる所だったりする。  
今からつばを付けておこうという部隊もたくさんある。

## 不安（後書き）

次回：本格的に1回戦が始まる。

1年生は恐るべきパワーアップを果たしていた。

## 開幕！個人戦大会（前書き）

俺達1年生がインターミドルに行くには、最低限4回戦を突破する事、

その突破した中から、最も上位に残った二名が2年生と共に大会に出場する事になる。

最低限5回戦まで残らないとインターミドルに出る事は叶わないだろう？

俺は組み合わせを確認する。

## 開幕！個人戦大会

10月2日夕方、TVやネットなどいろんなメディアを通じて明日の模擬戦大会の組み合わせが発表になる。

俺達はその組み合わせに一喜一憂する。

このギリギリでの発表はダフ屋さん対策であり、また生徒達に勝ち星を計算させない為でもある。

そしてトーナメントはこんな感じで行われる。

1回戦320人から160人へ

2回戦160人から80人へ

3回戦80人から40人へ

4回戦40人から20人へ

5回戦20人から10人へ、この時点で敗者復活の上位6人を加える

6回戦16人から8人へ

準々決勝ベスト8

準決勝ベスト4

決勝

俺達1年生がインターミドルに行くには、最低限4回戦を突破する事、

その突破した中から、最も上位に残った二名が2年生と共に大会に出場する事になる。

最低限5回戦まで残らないとインターミドルに出る事は叶わないだろう？

俺は組み合わせを確認する。

「何だ？2年の下位選手じゃないか？」

生徒会の連中とは4回戦ぐらいまで当たりそうにないな？

問題はリン達が何処まで勝ち上がってくるかだな？」（ジョン

そして運命の10月3日を迎える。

「さあ、始まりましたガチンコ模擬戦大会個人戦大会、司会及び審判長は私高町なのはと」

「コメンテーターはスペシャルフォース部隊長のヴァンサン・ロシエットでお送りしております」

「私もおるで？」（はやて

「はやてちゃん、また来たああああああ」（なのは

「大丈夫や、仕事はロツサに任せてあるし、この所スクール卒業生のお陰で基本的に平和や、

大丈夫やて、それに今年の1年生は当たり年やと、

S級が3分の1ぐらい居るて聞いたで？だから視察や」（はやて

「私は護衛だ」（シグナム

本部長は視察にかこつけてやって来た。

今年の1年生もの凄い当たり年だとキャロ先生がふれて回った為、何処の部隊も期待が大きい、再来年のドラフトに大きな期待が掛かっている。

そして、いよいよ1回戦が始まる。

一回戦、二回戦は試合数が多い為、海上訓練施設を4面に区切って行われる。

4 試合同時進行、まあ、初っぱなだから仕方がない。

俺の相手は2年生の下位、クアル・タルーナ3組の砲撃型。

槍型のインテリジェントデバイスを持っている。

近接戦闘用に御式内杖術を習っている。ちよつとやりにくい相手だ。相手の間合いの内側に入りたい訳だが、そう簡単に入れさせて貰えないだろう？

武装隊風のバリアジャケットにちよつと長めの槍、どおやらカートリッジシステムのようなようだ。

始まる前に柄の後ろの石突きを外してカートリッジを入れていた。

20発前後入る仕様か？

下手にでかいのは撃たせられない、こつちが終わる可能性もある。

因みに、俺のバリアジャケットはまんま空手着、袖がない。そして両腕に小手というスタイル。

カートリッジ所がエナジーパックすら無いアームデバイス、開始線で睨み合う。

「始め！」

その瞬間、相手はストレイトバスターを撃ってくる。

大した威力じゃあないし、この距離なら当たらない。

攻撃をすれすれでかわしながら距離を詰める。

「ホーミングバレット！」

「散弾拳！」

散弾銃のような砲撃をぶつ放すのに合わせて、俺も散弾拳を繰り出す。

散弾拳はホーミングバレットより魔力弾が大きい、丁度アクセルシユーターぐらい有る。



全て拳の形をしていて、ペガサス流星拳のように無数の弾幕になって相手に襲いかかる。  
勿論当たると爆発する。

二人の間で激しい爆発が起きる。

この魔法ははつきり言って牽制用だ、余り威力は望めないが相手の攻撃を相殺したり、  
目眩ましには効果を發揮する。それに溜無しに2発目が撃てる。

「散弾拳！」

まだ晴れない爆煙に飛び込みながら俺は2発目をぶっ放す。  
距離ギリギリ5m、当たればかなりのダメージを与えられる。

「地獄花！」

奥義を繰り出して散弾拳を相殺された。

どうする？ここで奥の手を出す訳にはいかない。

もう少し踏み込めば今度は槍の餌食になる。

自然といやらしい距離になってしまった。

お互い砲撃も出来ず、かといって技を繰り出す訳にも行かない。

この距離で睨み合いが続く、不意に相手が視線を合わせてくる。

俺はやるしかなかった。

目と目があった瞬間、気当たりと共に強烈な殺気を叩き付ける。

そう奥義居竦み、これしかなかった。

相手は動けなかった。余りの恐怖に足が竦み、歯の根が合っていない。

その動けない相手をデコピン一発で転ばせてバインドを掛ける。

俺は鮮やかに1回戦を突破した。

「おおおお、凄いで、今のは水鏡潰しの居竦みや、きれいにカウンターが決まったなあ」（はやて

「彼は凄いわね？この短期間の内にここまで高度なテクニックを身に付けているなんて」（なのは

「まだまだですよ、彼は俺とスー先生の間を往復しては強さの底上げを図っていましたからね、

真の実力はこんな物じゃありません、まだまだ序の口です」（ヴアロツト

私はジョンの実力に驚いた。

近接戦闘でも充分に強いのに中距離を得意とする相手を簡単に制して見せた実力はただ者じゃあない。

しかもいつの間にか信じられないぐらい駆け引きが上手くなって。私も負ける訳にはいかない。この次は私の番だ。それにこのままいけば私は5回戦でジョンと当たる。

それまで何とか手の内は見せたくない。出来れば通常の技だけで勝ちたい所だ。

ジョンが戦っていた頃、別のコートでは絶望的な組み合わせの試合が展開されていた。

アヤメ・ナカジマVSマリー・ボーン生徒会の強豪相手にこれはキツイ、

太極拳VS八極拳、どちらも近接型な上、中国拳法同士、経験値の高いアヤメが勝つと誰もが予想した。

まずは組み手から、やはり手数が多いアヤメに部がある、マリーの顔が腫れる。

でも諦めないマリー後ろへ飛び退くと距離を取った。

「まさかいきなり奥の手を使う事になるとは思いませんでした」  
マリ―

そう言うつ姿がだんだん薄くなり消えてしまった。

「霞技かいな？」（はやて

「まさかこれって？あの子達以来じゃない？」（なのは

「ああ、うちのペリエとクリュッグ以来3年ぶりだな？」（バロット

霞技はその使い手が非常に少ない希少技能だったりする。

アヤメは困った。

霞技はそう簡単に相手を捕捉出来ない。

気が付いた時には一撃貰っている事の方が多し技、

気配を読んでカウンターで一撃返す以外に対処のしようがない。

（多分消えておいて後ろから襲ってくる。後ろには要注意だ）（アヤメ

だが、それは予想外だった。

「通背拳！」（マリ―

真正面から来た。

しかも気配を感じた瞬間、通背拳を鳩尾に叩き込まれた。

その一撃にアヤメは意識を手放し、ここで勝負は決した。

まさかの逆転勝利、まさかの生徒会役員が1回戦敗退、

マリーはいきなり優勝候補の一角に躍り出た。

## 開幕！個人戦大会（後書き）

次回：リンの1回戦が始まる。

模擬戦大会に当たり、以下のキャラクターを追加します。

追加

アカネ・ナカジマ（2 - 1）生徒会には入れなかった物の、下手をすればイスズやアヤメより強い

御式内、御神の剣を使いこなし、ISは特殊な低周波を操る。ISは戦闘向きではない

だが、その使えないISを戦闘に使用する拳法を開発した（本人曰くエロ拳、若しくは振動手淫拳）

アサギ・ナカジマ（2 - 1）空手クラスの先輩、既に与那覇道場の黒帯、

ISは重力操作、グラビティカノンは驚異的な破壊力をもたらす。液化魔法により、体を液化する事が出来る。

モエギ・ナカジマ（2 - 2）御式内の使い手、デバイスは杖、ISは可変振動破砕、周波数を自在に変化させられる。

ただし、変化には上限があってスクラティレベルのGHZまでは上げられない。

低い方は1HZまで行ける様だ。

アルストール（2 - 3）槍型インテリジェントデバイスを持つ、タイプのには校長先生

御式内、御式内杖術を使う多彩な砲撃が持ち味

ダヴェル(1-3) デバイスは、H & amp; K XM8 (<http://hollywood-guns.net/asrifle/xm8.shtml>)  
携帯性と連射性に優れた突撃銃、装弾数は30発、多彩な砲撃とバインドが得意、特に連射性の魔法に定評がある。

フロン・ハイマー(2-2) 宮ノ内示現流の使い手まだそんなにレベルが高くない。

ブラッド・ハウンド(2-4) 御式内、御神の剣を使う  
エマルジョンコレクトの使いこなしも相当な物、

デバイスは二刀小太刀・市販のストレージ、2年生トップ5の実力者

ブレイブ・ブル(2-1) ムエタイの使い手、グローブ型アームド  
デバイスを所持、

非常に汚い作戦を得意としている。小賢しい頭の持ち主

ハーベイ・ウォールバンガー(2-3) 2種類のデバイスを持つている。

一つは自立行動型インテリジェントデバイス、何故か模型飛行機型でB-29、  
名前はエラ・イ、上空から多彩な爆撃を仕掛けてくる。

もう一つが、S & amp; W M76 (<http://hollywood-guns.net/sm76.shtml>)  
サブマシンガン型のアームドデバイス

重度のガンマニアで、常に危なそうな物を持ち歩いてるちょっとやばい人

ミユスカデ・セーブル(2-2) 御式内と御神の剣を習っている。

デバイスは二刀小太刀

メーヌ・シユール(2・4) 御式内とエマルジョンコレクトを使いこなす。

デバイスは杖と市販のストレージ、

ブラウネ・ベルガー(2・3) 槍型インテリジェントデバイスを所持、

多彩な砲撃とバインドを得意とする、御式内杖術を習っている。

ルイ・ド・グルネル(2・4) 御式内とエマルジョンコレクトを使いこなす。

デバイスは杖と市販のストレージ、

クアル・タルーナ(2・3)

槍型のインテリジェントデバイスを持っている。

近接戦闘用に御式内杖術を習っている。

チーム、WW4

アカネ(FA)、ミユスカデ(GW)、ハーベイ(CG)、メーヌ(FB)

チームハウンド

ブレイブ(FA)、フロン(GW)、ブラウネ(CG)、ブラッド(FB)

チームN2

アサギ(FA)、モエギ(GW)、アルストール(CG)、ルイ(FB)

## リンの1回戦（前書き）

私は居合いの体勢で開始線に付く、とにかく撃たれる前に飛び込んで居合いで仕留めたい所だけど、もう既に撃つ体制に入っている。こうなると下手に飛び込む事も出来ない。

パワーを技で制する他はなかった。



## リンの1回戦

「おおおおお！今のは凄いでー！」（はやて

「何？今の一撃？」（なのは

「どおやら通背拳を叩き込んだようですね？あれは発頭の集大成とも言うべき拳、

まともに食らえば数日間起きあがる事も難しいですからね、

スー先生がどれだけ回復させられるのか？間に合わなければ彼女はここまでですね？」（ヴァロット

それはあつては成らない光景だった。

まさか生徒会の役員が一回戦負けなど有っては成らない。

しかも下級生相手にKO負けなんてとても受け入れられる事じゃあなかった。

「あの子は凄いな、魔力もそこそこしか無いし、体も大きくない、でも恐ろしいまでの格闘センスだわ」（なのは

「魔導士と言うよりは格闘家として集大成しそうですね？」（ヴァ

ロット

「マリーあんなに強かったんだ？」（リン

私は戦慄した。

よく考えたら4回戦でマリーと当たる事になる。勝てるんだろうか？

「まさかアヤメがやられるとはな？これは相当締めて掛からんと俺

達も危ないぞ？」（クロスリード）

「ああ、今年の1年生底知れない化け物が多いな、大会の中で恐ろしいほどの成長をするぞ？」（ヒビキ）

生徒会のトップ二人も冷や汗を流しながら試合を見守る。

一方マリーは今の勝利でかなりの自信を付けていた。

陳先生に言われた事、発頭を極めればそれだけでSSSに匹敵する。それは嘘ではなかったと実感した。

そして私の番が来た。

こんな所で無様に負ける訳にはいかない、何としても勝ち残ってインターミドルに行く、

1年生最強の座を誰にも渡さない、それが私の目標だった。

相手は、サクラ・ナカジマとんでも無い巨大砲撃を仕掛けてくる。撃たせたら多分終わる。撃たせる前に倒したい相手だ。

開始線で睨み合う。

サクラは初っぱなの一撃に賭けるしかなかった。

ボウモアキャノンは単発な上にチャージが恐ろしく遅い、

ISが使えれば相手の魔力を吸い取って使う所だが、ルール上それも出来ない。

だから、開始の瞬間の一撃で全てを終わらす。それ以外に戦い方がなかった。

試合場に入ってきた時からキャノンにチャージを開始していた。

そして、開始線に付いた時にはチャージ完了、いつでも撃てる体制は整っていた。

私は居合いの体勢で開始線に付く、とにかく撃たれる前に飛び込んで居合いで仕留めたい所だけど、

もう既に撃つ体制に入っている。こうなると下手に飛び込む事も出来ない。  
パワーを技で制する他はなかった。

「始め！」

「デイメンションバスターアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「疾風一迅！」

そう立たからの縦の疾風一迅が相手のバスターを切り裂く、  
こっちの技も押されて前進しないけれど、相手のバスターも当たらない。  
切り裂かれて二つに割れていく。

結局痛み分けにお互いの技を相殺した。

「ちえすとおおおおおおおおおおお！」

次の瞬間、私は突っ込む、相手がチャージしている間に決着を付ける為ために。

すれ違いざまに一振り二発の技「三ツ太刀みつたち」を叩き込む。  
小手と面に綺麗に入った。

後ろでサクラが崩れ落ち、私が勝利した。

「今のは山田の疾風一迅か？まだ威力は無いようやけど、なかなか良い攻撃やったわあ」（はやて

「多分咄嗟に選択したんでしょうね、でも今のは良い試合運びだった」（なのは

「多分もつと魔力が付けば最初の一撃で相手を倒していたらどう？  
将来が楽しみだ」(ヴァロット)

こうしてどんどん試合が進む、今年の大会はかなりレベルが高いらしい。

観客も殆ど声も出さずに固唾を飲んで観戦している。

「おつ優勝候補の一角が出てきたでえ？」(はやて)

「ヒビキ君もかなり強いわよ、流石に宮ノ内示現流だけの事はあるわ」(なのは)

「だが防御に難点がある」(ヴァロット)

そう、宮ノ内示現流は殆ど防御を考えない、でもそれは先手必勝の剣技であり、

それだけ早い段階で相手を倒す事に自信があるから、だから防御を考えない、そう言う武術だ。

ヒビキVSジム、御式内VS宮ノ内示現流の対決これはなかなか面白い。

ジムはエマルジョンシールドと補助魔法陣を全て展開、徹底防御の態勢を取る。

「始め！」

その瞬間、辺りを包む強烈な殺気、ジムは動けなかった。

そこへ一撃されて終わった、試合時間3秒、圧倒的強さを見せ付けてヒビキの勝利。

「何であの子が御式内の技を使えるんや？」（はやて

「宮ノ内示現流にも居竦みと同じ技があるの、追籠って言うらしいよ、

居竦みで動けなくしてそこを斬る技なんだって」（なのは

「なかなか厄介な技だな、相当な精神力がないと破れないだろう？」  
（ヴァロット

「流石にヒビキだ、無駄のない技で簡単に仕留める」（クロスリード

そしていよいよ真打ち登場、生徒会長クロスリード・カマンサック、

V Sアカネ・ナカジマ（2・1）

そう、生徒会には入れなかった物の、下手をすればイスズやアヤメより強いと言われるアカネ、

御式内、御神の剣を使いこなし、ISは特殊な低周波を操る。

今回はISを使えない物の、その実力は2年でもベスト10に入ると言われる。

「始め！」

その瞬間二人の姿が歪んで消える。コート内所狭しと火花が飛び散る。

スピード勝負の神速域での攻防、最早観客では目が付いていかない。見えているのは一握りの生徒と先生ぐらいな物だ。

先に姿を現したのはクロスリードだった。

でも不思議な事にアカネの姿がない、一体どうしたのか？

そして空中の補助魔法陣から六面結界陣に閉じ込められた彼女が吐き出される。

そう、あの速さの中でクロスリードは彼女を魔法陣の中に吸い込んでいた。

早いが故に一旦そのコースに魔法陣を置かれてしまうと避けようがなかったのである。

閉じ込めてクロスリードの勝ち、やはり実力が違いすぎる。

「やっぱり生徒会長は違うなあ？抜群の安定感や」（はやて

「やっぱりエマルジョンコレクトは破りにくいわね？御式内との組み合わせが最強だわ」（なのは

## リンの1回戦（後書き）

次回：それ以外の1回戦はどうだったのか？

## それぞれの1回戦（前書き）

またしても生徒会が一人消えた。

意外な強さを発揮する1年生、2年生はすぐにマークに掛かる。



## それぞれの1回戦

試合がどんどん進む、でも1回戦は試合数が多い、流石に実力差のある2年生と1年生では勝負に成らず極めて短い試合時間で終わる物も多い。

そんな中で2年生を倒し、2回戦進出を果たす1年生が結構居たりする。

そんな中で生徒会や主要メンバーはどうだったのだろうか？

カティール・サークVSデュワーズ・ホワイト× 決まり手：デ  
イバインバスター

ラフロ・イグ VSナギ・ナカジマ × 決まり手：ア

ルケミックワイヤー

アード・ベック VSツバキ・ナカジマ × 決まり手：極

纏直刺

イスズ・ナカジマVSフェイマス・グラウス× 決まり手：ア  
パンチ

×グレン・モーレンジイVSヘンリー・マッケンナ 決まり手：  
5 o n o n e

またしても生徒会が一人消えた。

意外な強さを発揮する1年生、2年生はすぐにマークに掛かる。

他には、ブラントンとバラントインとジャックが2回戦進出を決めていた。

「流石に今年の1年生は出来がええなあ？1学期の時より遙かに伸びてる」(はやて)

「そうね、やっぱり努力する子は良く伸びてる。」

この分なら卒業するまではSSSもかなり出るんじゃないかしら？」

（なのは

「校長先生、今からそんな発言をしたらドラフトがえらい事になりますよ、

俺も欲しい子がいますからね、余り競合して欲しくないんです」「  
ヴァロット

「やっぱり目え付けとる子が居るか？」（はやて

「うちは台所事情が苦しいですからね？、そう言う所へ補充したいです」「  
ヴァロット

そう、隊員の一人も欠けると小隊が成立しなくなる。

5小隊有る内の2小隊は他の隊員では代用の利かない小隊だったりする。

それだけに、そう言う所へ補充人員を確保しておきたいと思うヴァロットだった。

「さてそろそろお昼やで？」（はやて

「残り12組は、午後からの試合になります」「  
（なのは

そして昼食へ、今日はこのまま敗者復活1回戦をやる、

そして夕方4時までに出来る限りやって明日に持ち越す事になっている。

1回戦勝ち抜いた奴は良いけど、負けるともう1試合、これが結構きつかったりする。

「みんなー負けてもまだ敗者復活戦があるからね?」(なのは

校長先生がみんなに檄を飛ばす。

そう、こんな所で負けられない。

特に2年生で1年に倒された奴は当然の如く、敗者復活戦を勝ち上がりたい所だ。

もう誰もが必死だったりする。

「しかし、今年の1年は随分伸びとるなあ?」(はやて

「2年後が楽しみだ」(シグナム

「やっぱり質が違うのよ、先生方の指導が行き届いてるから」(なのは

「やっぱり少人数クラスで教える方が伸びるなあ?」(はやて

そんな話をしながら昼食をとる4人だった。

そして午後1時、試合が始まる。

ジョニーVSアサギ・ナカジマ(2-1)

これも嫌な組み合わせになってしまった。

相手は空手クラスの先輩、空手対決、ジョニーはトンファのデバイスがある。

でもアサギさんも相当な化け物、既に与那覇道場の黒帯で、ISは重力操作、グラビティカノンは驚異的な破壊力をもたらす。それに、この人はちよっと変わっていて水系の魔法を操る。

「始め！」

「先手必勝！」（ジョニー）

ジョニーの右の一撃がアサギの脇腹を捕らえたかに見えた。

ビシャッ

液化してダメージをゼロにするアサギ、攻撃が通用しない。そう、これが彼女の魔法、まともな攻撃は通用しない。液体からまた元の姿に戻る。

「私の体は変幻自在、水よりも柔らかく、鉄よりも固い」

「くそう、どうしたら倒せる？」（ジョニー）

「無駄よ、あなたの攻撃じゃあ倒せない」（アサギ）

アサギは再び構える。

ズンッ

彼女の水のように柔らかい体から繰り出される正拳は、異常に重い。

「ぐはっ、ガードの上からでも利くっ」（ジョニー）

ガードの上からでも一撃貫えば足に来る。

既に足を封じられそこへ何発もの正拳を打ち込まれる。

ベチャッ

最後のトドメは半液化させた手で脳天を一撃された。そう、この一撃は頭蓋骨を素通りして脳へと直接打撃を叩き込む。直接脳を揺らされたジヨニーは立っていられなかった。

「なんか地味に凄いで？」（はやて

「ああやって液化されると厄介だな？殆どの攻撃が通用しない」  
（ヴァロット

「バスターで吹っ飛ばせば何とかなると思っけど？簡単にはいかないでしょうね？」（なのは

ツグミVSモエギ・ナカジマ（2-2）

まさかの姉妹対決、空手と御式内だった。

ナカジマ家最後の一人モエギは、御式内の使い手、デバイスは杖、ISは可変振動破碎、周波数を自在に変化させられる。

ただし、変化には上限があってスクラティレベルのGHZまでは上げられない。

低い方は1HZまで行ける様だ。

「始め！」

「先手必勝！当たれば倒れる！」（ツグミ

ズンツ

「だから言ってるでしょ、空手にとって御式内は天敵だって」（モエギ

まさかマツハの拳を掴まれるとは思わなかった。  
もの凄い威力で地面に叩き付けられる。  
それでも立ち上がるうとした瞬間、頭をぺたんこやられた。  
徹しが決まってモエギの勝ち。

エヴァンVSアルストール（2・3）

1回戦最後は召喚士対砲撃手、どう見ても相性が悪い。  
エヴァンは補助魔法陣を展開して防御を固める体制に出た。  
相手は槍型インテリジェントデバイス、典型的には校長先生だ。

「始め！」

「アクセルシューター！」

アルストールは無数のスフィアを打ち出してくる。

「そんな物！」

補助魔法陣が飲み込もうとするとスフィアが逃げる。  
不規則な動きをして補助魔法陣を攪乱する。  
そう全て自動誘導弾だった。補助魔法陣が上手くスフィアを捕らえ  
きれない。

ドオオオオオン

まず一発目が命中、それで補助魔法陣のコントロールが乱れる。  
そこへ次々と命中するスフィア、そう、全ての誘導弾を上手くコン  
トロールして  
補助魔法陣の追尾を攪乱して見せた。

まだ補助魔法陣のコントロールが上手く出来ていないエヴァンはその弱点を突かれた。  
結局数十発のスフィアに削られてエヴァンは敗退した。

「まさかエマルジョンコレクトを砲撃で破る子が現れるとは思わなんだわ？」（はやて

「あれ、私が教えたの、手数が多さで圧倒すればどうにかなるって（なのは

「あそこは防御陣を張るべきだった。まだ判断が甘いな」（ヴァロ  
ット

## それぞれの1回戦（後書き）

次回：2回戦に突入、1年生はどれだけ生き残れるのか？



## 2回戦始まる。(前書き)

「さて、今からは2回戦だね？」(なのは

「勝ち抜けは今日までは1試合だが、明日からは試合数が増える、明日からは如何に魔力を温存するかが勝負の分かれ目だ」(ヴァロ  
ット

## 2回戦始まる。

「じゃあそろそろ敗者復活一回戦、行ってみよう?」(なのは

こうして次々と試合が進む。

結局アヤメは復活戦に間に合わず不戦敗に終わった。

次々と敗者復活戦が進む、流石に生徒会グレンは復活戦を勝ち上がる。  
流石にナカジマ家、アヤメ以外全員敗者復活戦を勝ち上がる。

ここで1日目が終了した。

そして二日目、今日は昨日の敗者復活戦の続きから、  
ジョニーとジムが復活戦を勝ち上がった。

「さて、今からは2回戦だね?」(なのは

「勝ち抜けば今日までは1試合だが、明日からは試合数が増える、  
明日からは如何に魔力を温存するかが勝負の分かれ目だ」(ヴァロ  
ット

「でも、勝ちのこつとる1年生でもそんなに魔力を消費してる子は  
少ないなあ?」(はやて

「俺が教えた子達ばかりですよ、出来る限り魔力の消費を押さえる  
って指導しましたからね?」(ヴァロット

「でもそれ以上の事は言っていないんでしょ?」(なのは

「ああ、後はあいつらが自分で考えてやっている事だ、自分で考えた事ならそれだけ自由度が高い、それだの事をやればより強さは伸びていく」(ヴァロット)

「だよ、それが出来る頭があるから強くなれる、それがこのスクールの指導方針でもあるし」(なのは)

「自分自身で強くなる方法を見つけるか……先生方はそのヒントを与えてやるに過ぎない

結構厳しいけど愛に溢れた指導やねえ？」(はやて)

「じゃあそろそろ第1試合言ってみようか？」

いきなり俺かよ？と思いつつも試合場へ向かう。

「何だ？ダヴェルじゃあねえか？」(ジョン)

士官学校の時の同期で大して強く無かった奴、よく1回戦を突破出来た物だ。

「てつきり2年の先輩が出てくる物だと思ったんだがな？」(ジョン)

「甘く見て貰っては困る、伊達に校長先生に鍛えて貰った訳じゃない」(ダヴェル)

そう3組のダヴェルは夏休み明けからこつちずつと校長先生に鍛えて貰った内の一人なのだ。

既に数多くの砲撃魔法とバインドの類を身に付けている。

それだけでなくここへ来てS級まで魔力を上げてきた。下手に大き

いのは撃たせられない。

それにデバイスは、H & amp; K XM8 (<http://holywood-guns.net/asrifle/xm8.shtml>)だ。

携帯性と連射生に優れた突撃銃、装弾数は30発、かなりの魔力が補充出来る。

相手は既に撃つ構えで開始線に立っている。

まだ溜に入っていない物の、確実に撃ってくる。

そのまま開始線で睨み合う。

「始め！」

タタタタタタタタタタタタ

いきなり連射してきた。

当たりそうなのは手で捌いて避ける。でもそれが今度は後ろから襲ってくる。全て誘導弾だった。

「糞っ、奥の手その2を出すしか無いじゃないか？」

ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ

まずは5つ、すぐ近くで爆発させる。

何が起きたか分からなかっただろう？一瞬の早業だったからかな？

「今のは被弾してへんよね？」(はやて

「今一瞬で切り払ったんですよ、バインドウィップで」(ヴァロレット

「なかなか良い腕してるじゃない？」（なのは

やっぱりあの人達には見えているか？

「じゃあ、仕方ない、バインドウィップW！」（ジョン

俺は2本のバインドウィップで全ての魔力弾を斬り伏せる。

その瞬間、相手はカートリッジを4発ロード、

「デイベイイイイイイイイイイン……」

「おせえよ！」

その瞬間バインドウィップがデバイスに巻き付いて拘束、

デバイスを停止させる。そのままバインドに変わって切り離される。そして今度は、ダヴェルをバインドウィップで打ち据え拘束して俺の勝ちだった。

「あの子はバインドの使い方が上手いなあ？」（はやて

「俺がかなり鍛えましたからね？でもまだこんな物じゃあないですよ？」

バインド魔法は実はかなりバリエーションが豊富で、

使いようによつては攻撃力が恐ろしいほど高いんです。

まるで種類の豊富なアームデバイスを持っている様な物です」（  
ヴァロット

「やっぱり技の練習量が違うわね？相当に練習しないとあそこまでは使いこなせないわよ？」（なのは

私は見ていてジョンの評価を見直さざるを得なかった。ただのバカだと思っていたけど、格闘センスの塊だった。近接戦闘の専門でありながら、中長距離を封じる技を持っている。こつ言う相手は滅茶苦茶やりにくい。それにまだ何か隠している予感、まだ全然本気を見せても居ない。5回戦でジョンに勝てるのだろうか？それ以前に4回戦でマリイにも勝てる自信がない。

そして次は、マリイ・VSジャック  
中国拳法VS空手+銃術、どつ言う試合になるのか？

マリイは入場してくる瞬間から霞み始めていた。

「始め！」

その瞬間、完全に消える。

マリイを見失ったジャックはデバイスをモードリリースして空手の構えをする。

そう、仕掛けてくるなら多分前か後ろ、その両方に意識を集中する。それから1分、簡単には仕掛けてこない。

不意に前で何か動く気配、それに合わせてジャックが正拳を打ち込む物の、当たらない。

でも完全に右の脇腹がから空きになった瞬間だった。

「通背拳！」（マリイ）

右の脇腹に突き刺さる通背拳、ジャックの大会はここで終わった。

2回戦始まる。(後書き)

次回：リンが2回戦に臨む

## スピード勝負（前書き）

「さあ、これは見物やよ？魔力弾でまさかの5 on oneを見せたヘンリー君有利と見えるけど、

リンちゃんも相当な手練れや、詰められたら一溜まりもないで？」

（はやて

「これはスピード勝負かな？防御している暇なんて無さそうだし」

（なのは

「これは一瞬で勝負が決まるな？0・1秒の勝負になりそうだし」

ヴァロット



## スピード勝負

2回戦、私はジョンとマリーの圧倒的強さに冷や汗を流す。

不味い、このままでは負ける、でもここで奥の手を出してしまうとその先がやりにくい。

そう思いながら開始線に付く、相手はヘンリーだ。

そう、よく考えたらこいつも難敵だった。

魔力弾でまさかの5 on one一瞬で相手を倒してきた実力者だ。

しかも倒した相手は生徒会だし……

それにもの凄くやりにくい相手、レンジが広い。

離れれば砲撃、近付けば銃衝術とムエタイという近接戦闘が待っている。

どうする？冷や汗が顔の横を流れ落ち、頬を伝って顎へ、そして地面に落ちる。

こうなったら相手に抜かれるより早くこっちが抜くしかない。スピード勝負！

「さあ、これは見物やよ？魔力弾でまさかの5 on oneを見せたヘンリー君有利と見えるけど、

リンちゃんも相当な手練れや、詰められたら一溜まりもないで？」

（はやて

「これはスピード勝負かな？防御している暇なんて無さそうだし」  
（なのは

「これは一瞬で勝負が決まるな？0・1秒の勝負になりそうだし」  
（ヴァロット

ヘンリーは読まれたとおり、ホルスターの中で1発ロード、いつでも抜ける体勢になっている。リンもそれを読んでいた。開始線に付く前からデバイスに魔力を込める。

「始め！」

パア〜ン

ドゴオオウン

その瞬間爆発に飛ばされたのはヘンリーだった。もの凄い速さで何が起きたかも分からないうちに試合が決していた。今のリプレイがスタンドの正面に開いた大型モニターに映し出される。

超ハイスピードカメラのスーパースローが流れる。

それは疾風一迅と5 on one の撃ち合いだった。

リンは北辰一刀流の居合いを選択、それに疾風一迅を乗せていた。お互いほぼ同時だった。

ヘンリーは5発を一瞬で打ち出す。リンは上から下へ振り抜いていた。

魔力弾と斬撃が交錯した瞬間、3発が消えて無くなる。

そのまま疾風の斬撃はヘンリーを捕らえて爆発する。

一方リンに飛んできた魔力弾は鞘で打ち落とされていた。

そう、ただの居合いじゃあなかった。

刀を振り抜いたその後、鞘打ちが来る2段構えの居合いだった。

リンは咄嗟に考え付いた作戦を実行するセンスに溢れている様だ。まさにコンマ一秒の勝負だった。

「良い判断だ、しかもこの才能、もしかしたらもつと伸ばしてやる事が出来るかも知れん」

佐藤先生はリンを鍛える事に燃え始めた。

「今のは凄いなあ？歴代最速の試合時間や」(はやて

「流石にこれ以上短い試合時間はないでしょう？」(なのは

「歴代最速タイですね？校長先生達もやられたんでしょ？

ピリー先生に？しかもあの時は6発だからそっちの方が早い事になる」(ヴァロット

「うっ……嫌な事思い出させんといてんか」(はやて

「あれはもうどうしようもないよ、神速の使えない私達じゃあどうしようもなかったし、

反応する事すら出来なかったもん、見えない速さを制するにはそれだけの能力が必要になるよ」(なのは

「まあ、そう言う事にしておきましょう」(ヴァロット

ニヤリと笑うヴァロットだった。

その頃、試合場ではクロスリードとヒビキが3回戦進出を決めていた。

「えっ？見てない間に試合が終わってもうたなあ？」(はやて

「あの二人相手じゃあしょうがないよ、1年生や下位の選手じゃあ太刀打ち出来ないもん」(なのは

「ハア、何とか勝てたけどヒヤヒヤ物の試合だった……」(リン)

「また次は砲撃型か……」(ジョン)

そう、俺は3回戦でアルストールと当たる。

こいつは多彩は砲撃を持っているから要注意だ。

モエギVSブラントン御式内対決だった。

「始め！」

「ぐっ、息が……」

倒れたのはブラントンだった。

いきなりの奥義吐納、まだ吐納の使えないブラントンでは一溜まりもなく崩れ落ちた。

「流石は上級生やなあ？仕掛け所を弁えとる」(はやて)

「これは吐納返しか息を止める対策が出来てないと辛いですね？」

(なのは)

「まあ、アル意味駆け引きの上手い試合ではあるが視聴率取れるのか？」(ヴァロット)

アサギVSバラнтаイン

アサギさんの魔法は一種独特すぎてバラнтаインには破れないだろう？

「バランティン君もここまでだね？ちょっとアサギさんは倒せそうにないかも？」（なのは

「いや、御式内にはあれを破る技がある、しかも俺が伝授しておいた。

後はそれを思い付いて出せるかどうかだ？」（ヴァロット

二人が開始線で睨み合う。

「始め！」

その瞬間、強烈な居竦みを放つバランティン、そう、液化される前に動けなくしてしまえばいい。

恐怖に固められて動けなくなった所へ、徹しが入る。

バランティンは気付いていた。液化魔法は発動までに僅かな時間が掛かる事を、

そして見事にその隙を突いて見せた。

「凄いなあ、一年生でもう奥義を使えとる、これはまだまだ伸びるなあ？」（はやて

「ロサードとも話し合ったんだが、そろそろ御神の剣を教えようかと思う、

彼はなかなか非凡な才能の持ち主だ。デバイスもツインブレードだし、

御神の剣士でも相当上位の使い手まで強くなる事は確実だろうか？」

（ヴァロット

この発言は、各部隊の注目を集めさせる事になる。

やはりそれなりに強い剣士となると何処の部隊も欲しかったりする。

彼もまたいろいろな部隊からマークされる存在となった。

他のコートでは生徒会のメンバーがそれぞれ3回戦進出を決める。かなり白熱した2回戦だった。

そして1年生は生き残っているメンバーが図分減ってきた。

ジョン、バランタイン、マリー、リン、他10名ほど、残りは2年生だ。

やはり経験値の差が試合に影響してくる。

例え魔力は弱くてもアホみたいに強い先輩はいくらでもいる。

自分の魔力が低いと分かっているからこそ、

より格闘技に磨きを掛けてSSSにも匹敵する強さを身に付けている先輩は多い。

現場で戦って生き残る、その為にはどうしたら良いかを体で判っているからこそ、

彼らは強いのだ。

## スピード勝負（後書き）

次回：いよいよ3回戦、ジヨンは思わぬ苦戦を強いられる。

### 三回戦！（前書き）

「さて今日から3回戦だよ、今日は3回戦と4回戦、最終的には敗者復活4回戦まで行くからね？」（なのは



### 三回戦！

「流石に2回戦になるとレベルが上がるなあ？」

「ええ、この先は強豪がひしめくサバイバルゾーン、今まで鍛えてきた事が試される時だわ」（なのは）

「まあ、本当に面白いのはベスト16辺りからだな？」

1年生でここまで生き残る事が出来たらインターミドルは確實だろう？」（ヴァロット）

そして敗者復活2回戦が行われる。

やっぱり生徒会は違う、グレンさんちゃんと生き残っている。

明日は3回戦、私の相手はフロン・ハイマー（2・2）さん同じ宮ノ内流の使い手、

でも私は勝つ自信がある。問題は4回戦、どうやってマリーを攻撃するのか？

あの消えてから突然間合いに現れるあの攻撃をどうやって防ぐのか？そっちの方が優先課題だったりする。

その夜、お兄ちゃんに聞いてみた。

「ねえ、お兄ちゃん？あの消える技をお兄ちゃんならどう対処する？」（リン）

「リン、他力本願はやめろ、それ位自分で考えろ、

まあ、あの子が俺の所まで勝ち上がってきたら見せてやるっ」（ヒビキ）

お兄ちゃんは何か対策が出来て居るみたいだ。  
そして翌日、3回戦を迎える。

「さて今日から3回戦だよ、今日は3回戦と4回戦、  
最終的には敗者復活4回戦まで行くからね？」（なのは

さて、今日の俺の相手だが……2・3のアルストール、校長先生  
張りに多彩な砲撃が持ち味、  
御式内杖術も使いこなす。俺は1回戦からずっと砲撃手ばかりと当  
たっている気がする。

試合が進む、すぐに俺の番が来た。

ジョンVSアルストール、空手VS砲撃術+御式内杖術、読みに  
くい試合だ。

「始め！」

「アクセルシューター・ハンドレッドショット！」

いきなり100発ものスフィアを打ち出してくる。

「バインドウィップ！」

切り落とそうとバインドを振るうものの、スフィアが逃げる。  
そう全弾誘導弾、しかもコントロールしているのはデバイスだ。  
その状態から更に詠唱に入られた。

「デイバイイイイイイイイイイイイイン・バスタアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

チユドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「これは終わったやろ？」（はやて

「多分終わったわね？シューターで逃げ道を塞がれてそこへバスターを喰らえばダメでしょ？」（なのは

「いや、まだジョンの気配を感じる、終わっては居ないぞ」（ヴァ  
ロツト

そう、その一撃はスフィアごとジョンを飲み込み、大爆発を引き起こした。

特大のデイベインバスター、普通ならこれでトドメの筈だ。

だんだん爆煙が晴れていく、その中にジョンはまだ立っていた。

体からまだ煙が上がっている、でもその佇まい、それは三戦立ち空手の受けの奥義だった。

この型が完璧に取れる時、あらゆる衝撃に耐える事が出来るという耐える奥義だった。

「痛つて〜、ちょっと血が出たぞ！この野郎！」

アルストールは見ているものが信じられなかった。

自信を持ってぶっ放したデイベインバスター、そう簡単には防げるものでは無かったはず。

それを防がれてしまった。

「こうなったら見せてやるよ、俺のとおっておきを！喰らえ！

ナツクルブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」（ジ

ヨン

俺は上段打ち下ろしの構えからナツクルブレイカーを放つ、  
相手は必殺技を防がれた事で俺がブレイカーを撃つ事を阻止出来な  
かった。

打ち出されたのは拳の形をしたでかい魔力弾、手首から先がロケッ  
トパンチの様に飛んでいく。

アルストールは寸前の所でそれを回避する。  
しかし、それは向きを変えて襲ってくる。

「ちっ、誘導弾かよ？」（アルストール

「ホーミングバレット！」

これで爆破処理出来ると思ったのだろうか？

しかし、掌を広げた魔力弾はそれを全て受け止め吸収してしまう。  
チツチツチツとゼスチャーする。

「げっ、吸収した？しかも更に成長してやがる！」

しつこく追い回す魔力弾、俺はこいつをハンド君と命名した。

追い回しながら相手をこづくハンド君、完全に遊んでいる。

やがて思い切りパンチを入れると、飛ばされた相手は地面に叩き付  
けられた。

そしてそれを摘み上げて天高く放り投げる。

落ちてきた所をひっ掴んだ所で魔力が収束する。

ドオオオオオオオオオオオオオオオ

大爆発した。

「あれはまさか後期収束砲？」（なのは

「だけど随分ふざけた攻撃やなあ？あれは喰らいとう無いわ」（は  
やて

「とうとう使ったか？あれを防ぐ事は普通の魔導士では難しい、  
この先あの技を破る奴が何人出てくるか？それが楽しみでもある」  
（ヴァロット

私は見ている物が信じられなかった。まだあんな必殺技を隠し持  
っていた。

しかも対処のしようがないとんでも無い技だった。あれなら中距離  
も制する事が出来る。

それで居て自分は何にもしなくて良いんだから卑怯だ。

ジョン4回戦進出を決める。

そして次はマリーだった。

相手は2年生、ムエタイをやっている。

でも、マリーの相手じゃあなかった。真正面からの通背拳、この一  
撃で全てが終わった。

消えておいて現れた瞬間いきなり一撃打ち込まれるのは流石にかわ  
しようがない。

私は4回戦マリーと、例え勝てたとしてもその次はジョンと当たる。  
どうやったら勝てるのだろうか？

三回戦！（後書き）

次回：リンの3回戦、そして大会は4回戦に

## ブレイカー対決（前書き）

俺は考える、ここでもう一発ブレイカーを撃っても試合は明日まで無い（負けなければの話だが）、だからブレイカーで決着を付ける。問題はそのブレイカーを撃たせてくれるかどうか？

## ブレイカー対決

次は私の試合だった。

相手はフロン（2・2）さん、同じ宮ノ内示現流のクラスの人、強さ的にはお兄ちゃんより大分落ちる。

でも油断はしない、ここは成るべく魔力の消費を押さえて倒したい所だったりする。

開始線で睨み合う、確かに構えると強そうだ。

でも、分かっている。この人は大して強くない、強いて言えば片手でストレイトバスターを撃ってくるぐらいの物だ。剣戟の合間にバスター、それがこの人のスタイル、鬱陶しいバスターを何とかすれば勝てる。

「始め！」

その瞬間フロンが放ったのは追籠だった。

「フロンさん、それ追籠になってないよ、ただの気当たりだし、追籠はこう放つ！」（リン）

その瞬間、試合場を包む強烈な殺気、フロンさんは動けなかった。そこへ居合いの一撃、勝負は一瞬で決していた。

「あの子も流石やなあ、もう2年生上位の子達と互角に戦える実力をもつとる」（はやて）

「佐藤先生の教えている中じゃあ2番目の実力だからね？ 剣術のセンスは一番じゃあないかって言った」（なのは）



「今この時点でここまで強いと来年はSSSを超えるかもな？」  
ヴァロット

ここまででは合格点、問題は4回戦、私はマリーと当たる。  
あの霞み技は驚異だ。

試合がどんどん進む、お兄ちゃんは疾風一迅で勝った。  
クロスさんはアルケミックワイヤーで相手を縛り上げた。  
こんな感じで生き残っている生徒会の人たちは4回戦に進む。  
1年生で生き残っているのは残す所バランティンだけとなるも、  
彼もまた徹しを決めて勝ち上がる。

そして、その後は敗者復活3回戦、マリーにやられた子以外は大体勝ち上がっている。

敗者復活3回戦が終わるとお昼だった。でも4回戦の対策を立てられなかった。

あの霞技対策と言えば授業で習った寸だけだけど、それで倒せるとは到底思えない。

まあ、そう簡単には倒されない自信はあるけど、問題はどれだけ、マリーを削れるか、

私がいつまで通背拳を喰らわずにいられるかで勝負が決まる気がする。

「さて午後からは4回戦やあ」(はやて

「ここまで来るとレベルの違う世界になってくるわね」(なのは

「流石に生き残っている1年は4人だけか？まあこいつらは既に別格だからな、

2年も相当気を付けないと負けるぞ?」(ヴァロット)

そして、容赦なく始まった4回戦、ジョンVSカティ、空手VS銃術術+ムエタイ、カティは多彩な砲撃を持っているし、魔力も高い、まともに撃たせたらあつという間に試合が終わる。

「やりにくいわね、あのデイバインバスターを耐えきるほど頑丈だと言う事はまともな砲撃は通用しない。

特大の一発で仕留めるしかないけど、溜を作る時間を与えてくれるかしら?」(カティ)

「また砲撃型かよ?もういい加減飽きたぜ?」(ジョン)

そう、この大会、ジョンが一番苦手としていた中距離型を徹底的にぶつけられていた。

でもお陰でその苦手を克服する事に成功していたのだ。

「さあ、砲撃系最強のカティが相手だ、何処までやれるかな?」(クロスリード)

「お前も相当腹黒だな?」(ヒビキ)

「ああこの組み合わせを考えたのはアードだよ、ジョンは砲撃系が苦手だって言ってたから、成るべく砲撃系と当たる様にしてやったんだ。でも今の所見事に突破してきているじゃあないか?」(クロスリード)

「何だ?アードの奴も一枚噛んでるのか?」(ヒビキ)

俺は考える、ここでもう一発ブレイカーを撃っても試合は明日ま

で無い（負けなければの話だが）、だからブレイカーで決着を付ける。問題はそのブレイカーを撃たせてくれるかどうか？

ナツクルブレイカーはSLBと違って殆ど溜める時間がない、トリガースペルも極めて短い。

問題は、捨て身で放つナツクルブレイカーを撃たせてくれるかどうか？

イチかバチかの作戦だな？

呼び出しが掛かる。

試合場へはいる、そして開始線で睨み合った。

「始め！」

「スタアアアアアライトオオオオオ・ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

「ナツクルブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

同時だった。

いきなり必殺技の撃ち合い。でも俺の方がトリガースペルが短い分早かった。

ハンド君がスターライトのコースを塞ぐ様に飛んでいく、途中でぶっ放したかティだったが、その一撃はハンド君に吸収されて消える。

「ゲツ巨大化した？」（カティ

もうこうなってしまうと手の付けられないハンド君、

彼女に強力なデコピンを入れる。その一撃だけでも相当な威力だ。

そして彼女を摘み上げると親指で空中高く弾き上げる。  
そう、コイントスの要領で……落ちてきた彼女を掴んだ所で魔力が  
収束する。

チユドオオオオオオオオオオオオオオオオオ

大爆発した。

ジヨンの勝利、5回戦進出を果たす。

「まさかだね、生徒会のカティがこんなに簡単にやられるなんて思  
わなかった」(なのは)

「あの子もなのはちゃんの愛弟子なんやろ？にしてもあの後期収束  
砲は驚異やで？」(はやて)

「まあ、このブレイカー対決じゃあジヨンの方が上だったな？  
あの魔法を組んでやったの俺だし、うちの隊員に鍛えさせたからな？  
この程度じゃあ負けたりしないさ」(ヴァロット)

私は驚異だった。次の5回戦ジヨンと当たる。  
例えマリーに勝てたとしても次のジヨンで確実に終わる。

あのブレイカー対策なんて出来ないよ？どうやったらジヨンを倒せ  
るのだろう？

「次の選手入場して下さい」

とつとつ私の番が来た。

## ブレイカー対決（後書き）

次回：リンは4回戦に臨む、そして5回戦の組み合わせは？

## リン、破れる（前書き）

開始の瞬間、疾風一迅を繰り出すリン、しかし当たらない。  
マリーはかわした瞬間姿を消した。

リン、破れる

「次の選手入場して下さい」

とうとう私の番が来た。

もう腹をくくるしかない、出来る事は寸を使って攻防一体の攻撃を咬ます事だけ、

それで何処までマリーに対抗出来るか？

開始線で睨み合う。

私達より頭一つ低いマリーはどう見ても強そうには見えない。

でもその小ささを利用すれば相手の懐に潜り込むのは容易い。

それに間合いの内側で通背拳は反則過ぎる。

逃げようのない距離から重い打撃、

しかも発頸は筋肉のガードを素通りして内蔵にダメージを与える。

まともに食えば次の敗者復活戦にも出られなくなる。

マリーは思う、リンは一筋縄では行かない相手、なるべく早い勝負を決めないと、

恐らく霞み技に対処されてしまう。

成長力の大きい厄介な相手だと……

開始線でお互い睨み合う。既にマリーは霞み始めていた。

「始め！」

「疾風一迅！」

開始の瞬間、疾風一迅を繰り出すリン、しかし当たらない。

マリーはかわした瞬間姿を消した。

リンは構えを変える。その刀を正中に構えてそこから体を密着させ一体化する寸の構え、静かに目を閉じ集中する。

いくらマリーでも完璧に気配を消している訳ではない。通背拳を撃つ前に必ず気配が出る。

静まり返る会場、どこからどうやって現れるのか？固唾を飲んで見守る。

マリーは考えていた。真正面からはガードが堅すぎて難しい。両横だと恐らく反応される。

一番安全なのは後方やや左だと……

そしてリンの後方へ姿を現したマリー、通背拳が当たると思った瞬間、

もの凄い斬撃が襲ってきた。

「やっぱり後ろだったよね？」（リン）

読まれていた。いや既に行動を操られていた。

前を固めて両横にも対処する構え、と来れば当然後ろからしか襲えない。

後はその気配を待つだけだった。

寸前の所で斬撃をかわすマリー、でもまたすぐに姿を消す。また寸の構えで迎え撃つリン、これは長い攻防になりそうだ。

現れる、斬り付ける、扣歩の撃ち合いをして後ろを取り合う、そしてまた消える。

そんな攻防が暫く続く、完全に両者実力が拮抗して簡単には勝負が



付かない。

(ダメ、こんな攻防を続けていたら精神的に削られる)(リン)

(そろそろ精神的に疲れてきた、勝負を掛けるならそろそろか？)

でも溜の大きい通背拳は使いにくい、大きい発頸で勝負を掛ける)

(マリー)

不意に後ろで気配、私はそこに斬り付ける。

でもそこには誰もいなかった。

ドゴオオオオオツ

リンは後ろから強烈な打撃を受けて意識を手放した。

勝ったのはマリーだった。

「今のはどうしたんや？」(はやて)

「私もよく分からなかった」(なのは)

「別の気配に反応してしまったようですね？」(ヴァロット)

そう、あの瞬間、マリーは小石を投げていた。

その小石がリンの後ろにポトリと落ちる。

その気配に反応してしまったリン、後ろがから空きだった。

これで5回戦、ジョンVSマリーの対決が実現する。

「痛たたたたたあ」(リン)

通背拳より大分威力が落ちる物の、発頸は滅茶苦茶に利いた。結局私はマリーの前に負けた。

多分これで私はインターミドルに行けないだろう？

5回戦を戦うジョンとマリーがインターミドルに出る事はほぼ確定だと思つう。

チャンスがあるとすれば、敗者復活戦を勝ち上がってベスト16入りする事、

それ以外にチャンスはないのだから……

試合は情け容赦なく続く、残つた生徒会メンバーは確実に勝ち上がる。

やっぱりクロスさんは強い、まだ本気を全く見せていないし、強さの桁が違う。それにお兄ちゃんもまだ必殺技を出さずに勝ち上がっている。

「ふう、どうにか間に合った様だね？」（スー

「スー先生ありがとうございます」（リン

私は敗者復活4回戦に出る事になった。

でも運の良い事に相手はアサギさんだった。

もう攻略法なら分かっている。

そう言つう相手に負けたりはしない。

「始め！」

その瞬間、私は追籠を掛ける。

動けなくなつた所へ居合いの一撃、取り敢えずこれで敗者復活5回戦に進む事は出来た。

明日の相手は誰だろう？

## リン、破れる(後書き)

次回：5回戦は1年生頂上対決、ジョンVSマリー 試合の結果は？

**勝ち上がれ！5回戦（前書き）**

今度は近接戦闘のスペシャリスト同士、どう言う結果に成るやら？  
二人が開始線で睨み合う。

## 勝ち上げれ！5回戦

「さあ、今日は最終日だよ、5回戦から決勝まで一気に行くからね？」「(なのは

「そおやな、注目の1年生対決もあるし、見応えが違つで？」(は  
やて

「あの、本部長？お仕事は本当に大丈夫でしょうか？」(ヴァロット

「大丈夫や……多分」(はやて

「なんか今の所だけ随分弱気になつたんですが……」(ヴァロット

「さて、それじゃあ五回戦行ってみよう」(なのは

始まつた5回戦第二試合、俺はマリーと当たる。

向こうは消える事が出来るから厄介だ。  
入場してきた時から霞み始めている。

コオオオオオオオオオオオオ

「なんやあれは？」(はやて

「空手の息吹ですよ、ああやって全身のエネルギー循環を高めるんです。

魔力のない人は気を練り上げるんですが、

魔力がある場合は魔力も同時に練り上げられるんですよ」「(ヴァロ

ット

「そんな事をしてどうするん？」（はやて

「反応速度の大幅向上や、肉体を強化する作用がある。

恐らくは一瞬のカウンター狙いでしょう？」（ヴァロット

今度は近接戦闘のスペシャリスト同士、どう言う結果に成るやら？  
二人が開始線で睨み合う。

「始め！」

その瞬間マリーは消えた。

俺は静かに目を閉じて中段構えでその瞬間を待つ。

後ろに気配、その瞬間電柱斬りの後ろ回しが空を切る。

（危なかった。今のを貰っていたら一発で終わった）（マリー

俺はまた静かに目を閉じて気配を探る。

不意に後ろで気配がする。

「旋風脚！」

そう、両脚を180度広げてその場で一回転する回し蹴り、  
全方位を攻撃出来る蹴り技だ。

（これじゃあ小石作戦は通用しない、どうする？）（マリー

さつきから気配がしていたのはマリーが投げた小石だった。

小石の気配で自分をカムフラージュして後ろを取る作戦、  
でも、それを許さない技が彼女の攻撃を避ける。

そして膠着状態に入った。

姿が見えないマリー、それをどう止めるのか？

ここでジョンが構えを変える、徹底防御の前羽の構え、意外かも知れないが、

前羽の構えはかなり後ろからの攻撃でも対処出来る構えだ。

次の瞬間だった。

マリーが現れたのはジョンの懐だった。

「通背拳！」（マリー）

その次の瞬間、崩れ落ちたのはマリーだった。

徹しが彼女の頭に入っていた。彼女は崩れ落ちる瞬間こう呟いた。

「な……内蔵が……ないぞう……」

「なんや？今のはどうなったんや？」（はやて）

「確かに通背拳が決まったはずなのにどうして？」（なのは）

「多分内蔵上げでしょう？」（ヴァロット）

「内蔵上げ？」（はやて）

「そうです、空手の高度な防御テクニクの一つですよ、

特殊な呼吸法を利用して内蔵を全て肋骨の中に隠してしまふんです。腹にはまっすぐ伸びた腸が一本だけになりますから、内臓への攻撃は殆ど当たりません。

それに彼はこの所月花先生の所へ行かせましたからね、化頸も身に

付けています。

化頸と内蔵上げの併用をされたら腹への攻撃は意味を失います。だから前羽の構えで呼び込んだんですよ、ここにおあつらえ向きにノーガードな腹があると、

いつでも撃つてこいと……それに引つかかってしまった。後は徹しの餌食です」(ヴァロット

「なんや始めの息吹からずっと詰め将棋やった訳や？」(はやて

「ふっ、やってくれるこれは対戦が楽しみだ」(クロスリード

「おいおい、俺は眼中に無しか？俺が負けるってか？」(ヒビキ

ジョン、6回戦ベスト16を決定する。

強い……私は改めてジョンの強さに驚いた。

入学してきた時は、バカでスケベで何の取り柄もない奴だと思っていたけど、

とんでも無く強い。このスクールに入学するにはそれなりのセンスと、

強くなる資質がなければ入学出来ない。

恐らくジョンは私より凄い資質を持っている。

先生達はそれを見抜いているからこそジョンを入学させたんだ？

そして私は気が付いた、1学期1年最強だった私はいつの間にかその最強の座から転落している事に……

試合がどんどん進んでいく、やっぱり生徒会は強い、生き残っている人みんな6回戦ベスト16へ駒を進める。

こうしてまず6回戦進出の10人が出そろった。残りは敗者復活戦を勝ち上がった6人という事になる。



これが6回戦進出の10人

クロスリード・カマンサック(2-4生徒会長)

ヒビキ・ヤマザキ(2-2生徒会副会長)

アード・ベック(2-2生徒会会計)

ラフロ・イグ(2-4生徒会書記)

イスズ・ナカジマ(2-1生徒会会計)

ジョン・ハミルトン(1-1)

モエギ・ナカジマ(2-2)

ブラッド・ハウンド(2-4)

ブレイブ・ブル(2-1)

ハーベイ・ウォールバンガー(2-3)

この10人の中に1年生はジョンだけ、

つまりこの時点でジョンは念願のミッドチルダシリーズへの切符を手にした事になる。

そして私の敗者復活戦が始まるうとしていた。

勝ち上がれ！5回戦（後書き）

次回：リンが敗者復活戦に望む。

決定ベスト16（前書き）

「なんか1年生に可哀想な組合せだね？」（なのは

「仕方ないですよ、作者が適当にくじ作って決めたんですから」  
ヴァロット

「ヴァロット君ネタばらししていいんか？」（はやて

## 決定ベスト16

「やっぱり2組と4組の生徒が多いね？」（なのは

「どうしても3組の砲撃型は天敵が多いから勝ち残れるのは一握りや」（はやて

「そうだな、でも1年生が大分頑張っているじゃないか？敗者復活にまだ7人も居る。」

まあ全てが残れる訳じゃあないけれど、半分ぐらいは残って欲しい物だ」（ヴァロット

そう、この場に生き残っている1年はジョン一人だが、敗者復活の5回戦には、

リン、マリー、バランタイン、ブランドン、ツバキ、ツグミ、ナギの7人、

更に生徒会のカティ、グレンの姿もある。

今敗者復活5回戦が始まる。

敗者復活の5回戦は全部で25人いる筈なんだけど、

一人回復が遅れて不戦敗となり24人で行われる事になった。

つまり2回勝つと文句なくベスト16入り出来る。

取り敢えず私達は当たらずに済んだ。

当たるとすればベスト16の組み合わせ抽選の運次第。

誰が生き残るか分からないけどみんなでベスト16に行けたらと思う。

私の相手はミュスカデ・セーブル（2-2）御式内と御神の剣を習っている。

かなりの手練れだ。でもクロスさんに縛り上げられて負けたけど。マリーの相手はメーヌ・シユール（2・4）御式内とエマルジョンコレクトを使いこなす。

そして敗者復活戦が始まる。

まずバランタインが勝ち抜ける、流石に試合運びが早い。

ナギの相手はグレンさん、生徒会の手練れだ。

H & M P 5のデバイスを持っている。連射生に優れた突撃銃型のデバイスだ。

でもグレンさんは撃ってこない。

そう、ここで魔力を使う事はかなり不味い。

この先何試合もあるのに無駄な消費は押さえない所だ。

銃術とムエタイで勝負を掛けるグレンさん、

でもエマルジョンコレクトで守りを固めたナギの前に吸い込まれて終わった。

そして私の番、相手は御式内と御神の剣を使う、2刀小太刀のデバイス。

非常にやりにくい。

変幻自在な御神の剣相手に戦うのはかなり苦戦を強いられそうだ。

それ以前に御式内の奥義が来た時が怖い。取り敢えず吐納には最新の注意を払う。

「始め！」

その瞬間、口元を見て息を止める。

やっぱり吐納が来た。今度は私の番だ、追籠を放つ。

動けなくした所で居合いの一撃、何とか勝てた。

「通背拳！」

隣のコートではマリーが通背拳を炸裂させて勝利を収める。  
こんな感じで試合が進む。

そして、敗者復活の6人が出そろった。

カティ・サーク(2-3)

リン・ヤマザキ(1-2)

マリー・ボーン(1-1)

ブラントン・ゴールド(1-4)

バラントイン・ファイネスト(1-1)

アカネ・ナカジマ(2-1)

「ほう、1年生が4人も残ったか？これは面白い戦いになりそうだ」  
(ヴァロット)

「でも抽選次第じゃあもの凄く偏った大会になるよ？」(なのは)

「大丈夫やる？その辺は作者の胸先三寸やから？」(はやて)

「本部長それを言ったらおしまいでしょう？」(ヴァロット)

そして厳正なる抽選が行われる。組合せは以下の通り。

第1試合 ジョン・ハミルトン(1-1) VS ハーベイ・ウォー  
ルバンカー(2-3)

第2試合 リン・ヤマザキ(1-2) VS ブラッド・ハウンド(2-4)

第3試合 モエギ・ナカジマ(2-2) VS ブレイブ・ブル(2

- 1 )
- 第4試合 ラフロ・イグ(2 - 4) VS アカネ・ナカジマ(2 - 1)
- 第5試合 ヒビキ・ヤマザキ(2 - 2) VS カティ・サーク(2 - 3)
- 第6試合 マリー・ボーン(1 - 1) VS イスズ・ナカジマ(2 - 1)
- 第7試合 アードベック(2 - 2) VS バランタイン・ファイネスト(1 - 1)
- 第8試合 ブラントン・ゴールド(1 - 4) VS クロスリード・カマンサック(2 - 4)

「なんか1年生に可哀想な組合せだね？」(なのは)

「仕方ないですよ、作者が適当にくじ作って決めたんですから」(ヴァロット)

「ヴァロット君ネタばらししていいんか？」(はやて)

俺の相手また砲撃型だし、勝っても恐らく次はリンだし、もの凄くやりにくい。

私の相手召喚士だし、勝ったとしてもジョンだし、やりにくい。

そう、お互いやりにくい同士に分かれた。

「じゃあ六回戦第1試合行ってみようか？」(なのは)

俺はもう手の内の殆どを晒してしまっている。

後は空手の技ぐらいな物だが、空手をやる先輩も多い、

とてもじゃあないが、やるとすれば魔法戦の方が相性が良いだろう？

ハーベイ先輩は2種類のデバイスを持っている。

一つは自立行動型インテリジェントデバイス、何故か模型飛行機型でB-29だ。

名前はエラ・イ、上空から多彩な爆撃を仕掛けてくる。

もう一つが、S & amp; W M76 (<http://hollywood-guns.net/smg/sw|m76.shm>) サブマシンガン型のアームドデバイスだ。この人ビリー先生のお気に入りだったりするし、

重度のガンマニアだ。常に危なそうな物を持ち歩いてるちょっとやばい人だ。

こういう人はサクツと終わらせたいたい。開始線で睨み合う。

「始め！」

「ナツクルブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

いきなりぶつ放す。

「この手の誘導弾は術者を仕留めれば消えるんじゃない！行け、エラ！」

俺の上空に向かって飛び立つB29、しかし……

ペチッ

上昇する前にハンド君に叩き落とされた。

しかもペチッって簡単に……この時点でB29は撃墜、アホみたい

に落ちた。  
今度は先輩に特大のデコピン、倒れたら親指で弾き上げる。  
そして最後は捕まえたら収束して爆発、これ楽で良いわ、



取り敢えずフィールドに魔力があれば撃てるし、体に掛かる負担も小さい。

完全に魔力切れを起こさない限り、まだ後数発は行けそうだ。

「なんかナツクルブレイカー最強過ぎるで？」（はやて

「鬱陶しい相手とか、戦いたくない相手には最適だね？」（なのは

「あの激しい爆撃を見たかったのにこれだけかよ？」（ヴァロット

「じゃあ気を取り直して第2試合行ってみようか？」（なのは

決定ベスト16（後書き）

次回：第2試合、リンは御神の剣の前に苦戦を強いられる。

勝ち抜け！6回戦（前書き）

「どうした！1年！出し惜しみしてんじゃねえぞ！」（ブラッド

この人……怖い。

「これはリンちゃんも大変やねえ？  
相手が2年生ベスト5に入るブラッド君じゃあ可哀想やわあ」「（は  
やて

## 勝ち抜け！6回戦

「くっ、強い！」

私は今6回戦ベスト16を戦っていた。

相手は御式内、御神の剣を使うブラッド・ハウンド（2・4）さん、その上召喚士でエマルジョンコレクトもある。

こっちの攻撃が何一つ通らない。

そう、この人も生徒会候補になっただけの事はある実力者、

まともに戦って勝てる相手じゃあない。

しかもまだ本気じゃあない、まだ神速もコレクトアウトもアルケミツクも使ってこない。

「どうした！1年！出し惜しみしてんじゃねえぞ！」（ブラッド

この人……怖い。

「これはリンちゃんも大変やねえ？

相手が2年生ベスト5に入るブラッド君じゃあ可哀想やわあ」（はやて

「仕方ないよ、くじ運だもん、でもブラッド君もクロス君と生徒会長  
長の座を争った実力者、

まあ、ちよつと荒っぽい性格と詰め甘さが響いて今の地位にいる  
けど、

本来なら生徒会長を充分にやれるだけの実力は持つてる、半端無い  
強さだよ」（なのは

私は追い詰められていた。

もう次を戦う余裕なんて残っていない、ここで勝っても次で恐らく負けるだろう？

でもせめて、この人だけには勝ちたい。せめてベストエイトに進みたい。

私は後ろに飛び退くと距離をとる。そして重切の構え、ありつただけの魔力を込めた。

「見よう見まねのおおおお、重破剛練斬！」（りん

ドゴオウウウウウウウウウウウウウウウウ

大爆発と共に地面が割れる。ずっぱりと地面深くまで割れて遙か向こうまで斬撃の跡が出来ている。

「今の一撃、申し分ない！」（ブラッド

ブラッドは六面防御陣を張って防御していた。

そして防御陣を解くと、リンを一撃して試合を終わらせた。

リンはもう反撃する力すら残していなかった。

「なんや今のは？負けたけど凄いでえ？」（はやて

「もの凄い破壊力ね？VX級戦艦でも一撃って感じ？」（なのは

「あれは紫電一閃だ、でも質がまるで違う」（シグナム

「あ、シグナムさんいたんだ？」（なのは

「私の存在を忘れてくれるな」（シグナム

すっかり忘れられて、つれないお言葉にかなりムツとしたシグナムだった。

「だが凄いな？あそこまでの破壊力を出せるとは」(シグナム)

「あれは紫電一閃に破壊力と重さを付加したんだらうな？

もし防御陣ではなく、受けに回っていたら間違いなくやられていた  
だらう？」(ヴァロット)

これでベストエイト第一試合はジョンVSブラッドという組合せ  
が決まった。

「じゃあ第3試合行ってみよう？」(なのは)

モエギ・ナカジマ(2・2)VSブレイブ・ブル(2・1)

御式内VSムエタイ、これも勝負が読みづらい。

どちらも素手同士だが、打合えばムエタイに、掴めば御式内に部が  
ある。

「始め！」

「ぐっ、息が……」(ブレイブ)

崩れ落ちるブレイブ吐納だった。

「トドメ！」(モエギ)

「ヤン・エラワン(白神象の領域)！」(ブレイブ)

飛ばされたのはモエギの方だった。

トドメとばかりに近付いた所をもろに食ってしまっ。

「バカめ！吐納を喰らったふりに引つかかるとはまだ甘いぜ！」  
ブレイブ

そういきなりの吐納と読んでいたブレイブはタイミングを合わせてやられたふりをしていた。

そのしてこのムエタイの蹴りは心臓を狙う危険な物、崩れ落ちながら体を捻りその回転力を加えて、

膝で心臓を狙う。まともに喰えば心臓麻痺さえ起こす事がある。アサギ、ここでKO負け。

観客は大喜びだ。少々汚い作戦ではあったがド派手なOK劇だった。

「やる事がちよつと汚いんとちゃうか？」（はやて

「今のは不用意に近付きすぎたね？

自分の掛けた技が決まったかどうかの手応えを確かめずに突っ込んだ事が命取りだった。

戦場でも一番危険なのは勝ったと思った瞬間なの、

これで終わったと思ったら反撃されるなんて事はしょっちゅうだから、

やるんなら覚悟を持って本気でブツ倒さないとダメね？」（なのは

「ああ、今のは油断しすぎだろう？吐納ってのはそこまで完璧な技じゃあない、

しかし、あの演技は上手かったな？水鏡を使って読んでなければ俺でも引つかかったかも知れん」（ヴァロット

「じゃあ第4試合行ってみようか？」（なのは

ラフロ・イグ（2・4）VSアカネ・ナカジマ（2・1）二人とも御神の剣と御式内を使いこなす。

「始め！」

その瞬間、二人の姿が歪んで消える。

コート内のいたる所で火花が飛ぶ、これはスピード勝負になりそうな攻防。

見えているのは一部の鍛えられた生徒と先生方、そしてハイスピードカメラが捕らえているだけ、

時々普通の観客にも見えているのは残像だったりする。

そして徐々にスピードが落ちてくる。

スピードの攻防は互角だった。

「くっ、これでは決着が付かない」（アカネ）

「こうなったら魔法戦で勝負！」（ラフロ）

そう言いつつも、簡単にトリガースペルを唱えさせてはくれない。

「雷徹！」（ラフロ）

「おっと！」（アカネ）

雷徹をかわすアカネ、後ろへ飛び退いた瞬間だった。

着地したその場所にトラップ、しかもアルケミックワイヤーを仕込まれていた。

ラフロが一撃入れて試合が終わる。

「いつの間に仕掛けたんや？」（はやて）



「私も気が付かなかった」(なのは

「さっき打ち合っている時ですよ、スピードが落ちて姿が誰でも見える様になってきた瞬間です。

普通のバインドなら簡単に千切られていたでしょうが、アルケミックワイヤーですからね？

簡単には千切られないし、あれに捕まったら召喚士でない限り逃げるのは不可能です」(ヴァロット

やはり策士、たった一つだけ仕掛けたトラップに上手く陥れた。

勝ち抜け！6回戦（後書き）

次回：ヒビキ登場、格の違いを見せ付ける。

## ベスト8決定（前書き）

「あーあ、簡単に終わってもうた」（はやて

「仕方ないよ、実力差が違いすぎるもん」（なのは

「流石は生徒会長だ」（ヴァロツト

## ベスト8決定

「流石にここまで来るとみんな強いだけじゃあなくて試合運びが上手いなあ?」(はやて)

「そうだね、ベスト16に残るって結構大変な事だもん、それに組み合わせの妙つてのもあるから相性最悪な相手に当たるとそこで終わるし」(なのは)

次のベストエイト、ブレイブVSラフロの対戦が決定する。

「じゃあ第五試合行ってみようか?」(なのは)

ヒビキ・ヤマザキ(2・2)VSカティ・サーク(2・3)  
宮ノ内示現流VS砲撃術+ムエタイ、ヒビキにとってはやりにくい相手だ。

「始め!」

「プロトンスマツシヤアアアアアッ」(カティ)

「ちえすとおっおおおおおお」(ひびき)

溜め無しでいきなりでかい砲撃が撃てるプロトンスマツシヤア、それをヒビキは居合いの一撃で切り裂いてみせる。

「アクセルスマツシヤア」(カティ)

弾速の早いスフィアを何発も打ち出してくる。

「ちえすとおおおおおおおおお！」

燕飛で全て切り落とす。

そうヒビキは真正面から全ての砲撃を剣術だけで破りながら進んでくる。

まあデバイスに多少の魔力は込めている様だが、全く意に介さずと言った所、

そう、示現流は間合いの中では最強の剣術、間合いに飛び込んでくる物全て切り払えば問題ない。

そんなヒビキの気迫に押されてカティが後退を始める。

プレッシャーに押され、気が付いた時にはコートの隅に追い詰められていた。

そして逃げようのない状態か？を確認すると疾風一迅を叩き込む。完璧な勝利だった。

「なんかヒビキ君無敵過ぎや……」（はやて

「あれは凄いわね、まるで一回戦と同じ戦い方でここまで進んでいる。

これじゃあ分析して弱点を捜す事も出来ない、余程戦い慣れしていないと勝てないよ」（なのは

「本物の強さって奴だな？それにまだまだ強くなる、

全ての奥義を納めたらそれだけで無敵だろう？」（ヴァロット

ヒビキ、ベストエイト進出。

「じゃあ次の試合行ってみよう？」（なのは

マリー・ボーン（1 - 1）VS イスズ・ナカジマ（2 - 1）

太極拳VSムエタイ・ムエボラン

これも通常の戦いならイスズの方が強いのだが、霞み技のあるマリーの方が有利と言える戦いだっただ。

入場してくる時から霞み始めるマリーもうお約束の戦法だ。

「始め！」

その瞬間霞んで消えるマリー、もうこれでそう簡単には捕らえられない。

イスズは目を閉じ気配を感じる事に集中する。

そう、何時どのタイミングで襲ってくるのか分からない、ひたすらにその一瞬を狙う。

1分、そのくらいの時間が流れただろうか？

不意に後ろで気配がする。でもイスズが蹴ったのは前だった。

ムエタイ独特の膝蹴り、ティー・カウである。

その鋭い膝蹴りがマリーの頬を掠めた。

「おしい！」（イスズ）

読まれていた。

後ろに現れる気配は小石だと、間合いの内側に入って発頸という作戦を逆手に取ったやり方。

ただ当てずっぽうの為、マリーは直撃を免れた。

でも、カウンターで脚に発頸を入れてまた消える。

（くっ、脚をやられた。蹴られても後1〜2発か？）（イスズ）

顔には出さない物の、そのダメージは大きい。  
マリーはまだ消えている。今度はどこから襲ってくるのか？  
また構える。

（多分小石作戦は使えてもあと一回、それ以上は通用しない）（マ  
リー

またポトリと小石が落ちる。

その瞬間マリーはスタンドまで飛ばされていた。  
今度は小石と共に後ろにいたはず、何がどうなったのか？

その瞬間、小石を投げたマリーはワンテンポずらして襲いかかっ  
た。

しかしそこに飛んできたのは鞭の様な回し蹴り「テツ」だった。  
それをモロに喰らってスタンドへ飛ばされそこで意識を手放した。

「よく考えたら私の間合いの中にいるのよね？全方位蹴り抜けば確  
実に当たるわ」（イスズ

そう、イスズは回し蹴りのまま一回転したのだ。

そうすればその間合いの中にいる限り確実に一撃貫う事になる。  
しかも最も威力の乗る180度辺りで喰らってしまった。

マリーここで終わる。

「おおおおお！なんか凄いでえ？」（はやて

「マリーは不用意に間合いに入りすぎたわね？

あそこは相手の出方を見てから間合いに入るべきだった。  
ちよっと考えが甘かったわね？」（なのは

「だが偶然とは言え、霞み技を破るとは思わなかったぞ？」（ヴァロット）

イスズ、2年生の貫禄を見せ付けベストエイトへ進出。  
こうして次のベストエイト、ヒビキVSイスズの対決となった。

「じゃあ第7試合行ってみよう？」（なのは）

アード・ベック（2・2）VS バランタイン・ファイネスト（1  
-1）

「始め！」

その瞬間アードの姿が歪んで消える。

「極纏直刺！」

まさに一瞬の勝負だった。

飛毛脚からの極纏直刺、バランタインは反応出来ずに崩れ落ちた。

「やっぱり生徒会は強いなあ？」（はやて）

「一年生じゃああの速さに反応出来る子はまずいないわね？」（なのは）

「ちょっと可哀想な試合だったな？」（ヴァロット）

そしてもっと可哀想な試合が始まるうとしていた。

「じゃあ次の試合行ってみよう？」（なのは）



ブラントン・ゴールド（1 - 4）VSクロスリード・カマンサック（2 - 4）

「始め！」

「六面防御……」（ブラントン）

「遅い！」（クロスリード）

六面防御陣を張ろうとしたブラントンに対し、クロスリードは神速で駆け抜けながら一撃を入れていた。ブラントンが崩れ落ちて試合が終わる。

「あーあ、簡単に終わってもうた」（はやて）

「仕方ないよ、実力差が違いすぎるもん」（なのは）

「流石は生徒会長だ」（ヴァロット）

## ベスト8決定（後書き）

次回：準々決勝ベスト8の激突、ジョンは勝てるのか？

## ベスト8の戦い（前書き）

足を止めた相手に魔法を3連発叩き込む、俺の魔法は殆ど溜がない。

代わりに射程範囲も極めて狭いけど、でも当たればそれなりに効果  
が大きい。

ガードの上からでも充分に利く、この3連撃でどれだけ削れたか？

## ベスト8の戦い

準々決勝は次の通りの組合せになった。

- 第一試合、ジョンVSブラッド
- 第二試合、ラフロVSブレイブ
- 第三試合、ヒビキVSイスズ
- 第四試合、アードVSクロスリード

「じゃあ、お昼を取ってしつかり休憩ね？後ダメージのある子はしつかり回復ね？」（なのは

「いやあ〜結局半分は生徒会が残ったなあ？」（はやて

「まあ仕方ないわね？でも全員生徒会じゃあなかったただけ面白い大会になったわ？」（なのは

そんなこんなでみんな昼休み、俺は食事の前にマナギンを飲んでみる。

見事に魔力回復、これは使えるアイテムだった。

そして午後の試合に備える。

でも、今度の相手は勝てる気がしない、さっきの試合を見ている余りに強すぎる。

どうやったら勝てるのか？俺はずっとそんな事を考えていた。

（このままブレイカーを使ったら次のラフロさんで破られる、今回出来る限りブレイカーを撃つのはやめよう）（ジョン

そして、午後、準々決勝第一試合が行われる。

「選手入場して下さい」

俺は取り敢えず吐納を警戒する。

どう出てくるか？相手は二刀小太刀、御神の剣を選択していた。

「始め！」

その瞬間ブラッドの姿が歪んで消える。

「そこだっ！」（ジョン）

小太刀で十字受けされた物のマツハの拳が命中していた。

「ぐはっ、何て破壊力してやがる、ガードの上からでも滅茶苦茶利くぞぞ！」（ブラッド）

（不味い、今のダメージで脚に来ている、神速は使えないか？）  
（ブラッド）

「凄いなあ、神速に付いていきよった」（はやて）

「まだ動き自体は神速について行けた訳じゃないですが、相手の動きが見えていましたね、

だからタイミングを合わせて殴る事が出来た。しかもマツハの拳はアホみたいな破壊力があるから厄介だ。

今のダメージはボディブローですよ、じわじわ効いてくる。

早く倒しないとブラッドが負けるかも？」（ヴァロット）

「散弾拳！ナックルキャノン！爆裂拳！」（ジョン）

足を止めた相手に魔法を3連発叩き込む、俺の魔法は殆ど溜がない。

代わりに射程範囲も極めて狭いけど、でも当たればそれなりに効果が大い。

ガードの上からでも充分に利く、この3連撃でどれだけ削れたか？

爆煙が晴れるとやっぱりガードを固めていた。

「この野郎！エマルジョンコレクトを出す暇さえ与えてくれねえとはやるじゃねえか？」（ブラッド）

ガードした物の、かなりのダメージを受けたみたいだ。所々バリアジャケットが破れ、ちよつと血が出ている。

「そりやどうも、でもトリガースペルは唱えさせない！」（ジョン）

俺はそのまま殴りかかる。

「山突き！・夫婦手！・弧突き！・拳槌打ち！」（ジョン）

4連撃を繰り出す。

（こいつどう言う体力してやがる？）（ブラッド）

流石にブラッドも焦った。

最初の一発を受け止めても体にはその衝撃がダメージとして蓄積したままだ。

その上魔法の3連撃でダメージを上乗せされ、更に空手技の4連撃、このままでは後数発も喰らったら体が動かなくなる。

既に脚に来ている。それを悟られたらラッシュを掛けられる。

ここは、一旦距離を取るしかなかった。

ブラッドは後ろに飛び退くと体勢を整えようとする。しかし、その場にはトラップバインドがあった。

「いつの間？」（ブラッド）

「これで落ちろ！マツハ拳ラッシュー！」（ジョン）

それはマツハの正拳突き6発を一瞬で叩き込む技だった。バインドを断ち切る前に6発叩き込まれてブラッドは倒れた。ここで勝負有り、ジョンベスト4へ進出する。

運び出されるブラッドにクロスリードが声を掛ける。

「どうしたブラッド、お前らしくないじゃないか？」（クロスリード）

「俺は防御するのが性に合わないんだよ、真正面から叩き潰したかったもんでね？」

だが、あのマツハの拳は舐めすぎていた。最初の一発目で終わっていたんだ」（ブラッド）

その一言に戦慄を覚えるクロスリード、もしかしたら決勝で当たるかも知れないと思った。

「あの子は凄いなあ、ブラッド君を倒してもうた」（はやて）

「でも何でエマルジョンコレクトでガードしなかったんだらう？」（なのは）

「神速発動中じゃあトリガースペルは唱えられませんか、先に唱えておかなかったのが失敗でしたね？」

それに神速はあんな風に止められたら体への反動が半端じゃあない。多分最初の一撃で相当脚に来ていたはずだ」(ヴァロット)

「でもジョンはトラップが随分上手くなったね？」(なのは)

「ええ、俺が徹底的に鍛え上げましたからね、ちよつと離れた場所に設置なんて芸当もこなしますよ」(ヴァロット)

私は見ていて驚いた。

私でも攻撃を防ぐだけで手一杯だった神速を一撃で止めたジョン、もの凄い攻撃だった。

私では既にジョンの足元にも及んでいない、その実力差を嫌と言うほど思い知らされた。

「じゃあ次の試合行ってみようか？」(なのは)

ラフロVSブレイブ、この戦いも凄い物だった。



## ベスト8の戦い（後書き）

次回：ラフロのアフロ魔法が炸裂する。

## アフロ魔法！（前書き）

その瞬間巨大化するアフロ、そしてラフロを飲み込んだ。

試合場にもっさりとした巨大アフロ、それはどう見てもシュールな光景、これをどうしろと？

## アフロ魔法！

「じゃあ次の試合行ってみようか？」（なのは

準々決勝第2試合、ラフロVSブレイブ、

御式内・御神の剣VSムエタイ・ムエボーラン

相性的にはほぼ最悪、御式内で勝負しても多分ラフロさんの勝ちだ。それに加えて、ラフロさんには変な魔法があるという、

滅多に使わないらしいけど、使われるととっても嫌な魔法だって話だ。

二人が入場してくる。

そして開始線に付いた。

「始め！」

「どうしたブレイブ、突っ込んでこないのか？」（ラフロ

「アクセルスマッシュャー」(ブレイブ

数多くのスフィアを作り出して打ち出すブレイブ、二人の間で爆発が起きる。

うねうねと立ち上がるトラップバインド、アルケミックワイヤーまで仕込んである。

「こつ言う姑息な手段を使ってくるのは織り込み済みだ、今度は俺から行かせて貰う」(ブレイブ

ラフロに向かって突っ込むブレイブ、二刀小太刀で応戦するラフ

口、

でも、小太刀の攻撃が通らない、綺麗に流される。

そう、ムエタイもまた戦場で生き延びる為に、刀や槍、弓矢を素手で相手する為に作られた武術、

例えば自分が丸腰でも相手を倒せる様に考えられている。

特に刀や槍との相性が高い。

そして二人とも膠着状態に入った。

(糞っ、これじゃあ勝負が付かない、決勝まで取っておきたかったんだがあれを使うか?) (ラフロ)

割と近い距離で睨み合ったまま動かない二人、しかし、ラフロのある部分は少しずつ変化を始めていた。

「おい、なんかお前の頭でかくなってないか？」 (ブレイブ)

「気付かれちゃあ仕方ねえ、アフロ魔法発動！」 (ラフロ)

その瞬間巨大化するアフロ、そしてラフロを飲み込んだ。

試合場にもっさりとした巨大アフロ、それはどう見てもシュールな光景、これをどうしろと？

「なんだよこれは？」 (ブレイブ)

「もうお前は俺には勝てない」 (アフロ)

「こなくそ！」 (ブレイブ)

その瞬間巨大アフロに殴りかかるブレイブだが、モフモフの髪の毛

毛が邪魔で本体に命中しない。

「アクセルスマッシュャー！」（ブレイブ

しかし、その髪の毛はスフィアを柔らかく受け止めると投げ返してきた。

ドン、ドン、ドン、ドン、ドンッ

自分の攻撃を5発喰らって倒れるブレイブ、このアフロもの凄く防御力が高い。

そして今度はアフロの中から長い髪の毛が伸びてくる。それはブレイブに巻き付いて拘束した。

「糞、千切れない！」（ブレイブ

「無駄だよ、僕の髪の毛はピアノ線並の強度なんだ。千切れる訳無いよ」（アフロ

ここで勝負有り、アフロが縛り上げてベスト4進出を果たす。

「な、何なんやあのキモイアフロは？」（はやて

「あれがラフロ君の必殺技、アフロ魔法、やられるともの凄く嫌な魔法。

気持ち悪いし、アフロにしてるから洗ってないのよね？臭いんだって？」（なのは

「うわっ、それ巻き付いたらめっちゃめっちゃイヤヤ」（はやて

「俺もあれはどうかと思うぞ？ああ言うのはいきなり消滅させたいな？」（ヴァロット）

アフロ魔法、それは精神的にもダメージの大きな魔法だった。そしてベスト4第1試合でジョンとアフロの対戦が決定した。

「うああああああああ、何あれ？キモっっ」（リン）

私は思った、ここまで残らなかったのは正解だったと、こいつとは戦いたくないと思った。

「じゃあ第3試合、行ってみようか？」

ヒビキVSイスズ、宮ノ内示現流VSムエタイ・ムエポーランの対決。

条件的にはムエタイやや有利だが、間合いの中では無敵の示現流、どちらが勝つのだろうか？

「始め！」

ヒビキは静かに刀に手を掛けると、ゆっくりと歩き出す。

イスズも構える、不意にヒビキが足を止めた。

その瞬間足下から立ち上がるトラップバインド、

しかしその全てが細切れになった。

そうイスズはトラップを仕掛けていたが、ヒビキは意に介さない。

全て居合いで切り払った。

そして刀を鞘に収めるとまた歩き出す。

ただ一点、イスズの目を見つめながら……

イスズはプレッシャーに押されて下がり始めた。

そう、ヒビキは一撃で終わらせる為に、プレッシャーを与えながら前に進んでいるのだ。

そうやってコーナーに追い詰め、トドメを刺す。それがこれまでの戦法だった。

「これならどうだ！ガンラバー・ラームマースン・クワン・カン（爆ぜる斧を撃ち振る雷神）！」（イスズ

高く飛び上がり空中に浮いた状態で肘を振り下ろす肘打ちの技だった。

「何処を狙っている？」（ヒビキ

その瞬間、ヒビキは彼女の後ろに立っていた。イスズが崩れ落ちる。試合が決していた。

その交錯する瞬間、居合いが決まっていた。余りに早く正確なその技は見えなかった人間が殆どだろう？から空きの胴へ綺麗に一撃決めてヒビキの勝利だった。

「なんや今のは？まるで時代劇や！」（はやて

「凄いね、まさに最強剣に相応しい居合いだった」（なのは

「ヒビキの奴、まだ強さを押さえて戦ってやがる、多分この次は本気で来るぞ？」（ヴァロット

そう、まだヒビキは本気じゃあなかった。

彼はクロスリードと戦う為にここまで本気を隠してきたのだ。

そして、ベストエイト最終戦が行われる。



## アフロ魔法！（後書き）

次回：クロスリードがその強さを見せ付ける。

最後の切り札（前書き）

髪の毛がどんどん全身に巻き付いてくる。

「お前、俺が何で爆裂系の魔法しか持っていないか分かるか？」  
（  
ジョン

「？」（アフロ

## 最後の切り札

「じゃあ次の試合行ってみようか？」（なのは

アードVSクロスリード、事実上の準決勝だ。

アードは太極拳、棍術の名手、クロスリードは現時点で学園最強と言われる使い手、

これは面白い戦いになりそうだ。

二人が入場してくる。

ヒュオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

アードは舞花棍を始めていた。

そう、棍術で勝負を掛ける気だ。

舞花棍は攻防一体の技、御神の剣でもそう簡単には斬りかかれない。

一方クロスリードは両手に小太刀の上、エマルジョンコレクトを発動している。

「やっぱり君を相手にするならこれ位やらないとね？」（クロスリード）

「始め！」

「風拳斬雲！」

いきなり奥義を放つアード、しかし向けられたのはクロスリードでなく地面だった。

いくつものトラップバインドが立ち上っては消える。アルケミックワイヤーのおまけ付きだ。

「お前はニコニコしながらやる事がえげつねーんだよ！」（アード

「何だ？分かってるなら良いじゃないか？」（クロスリード

アードは読んでいた、入ってきた瞬間クロスリードが大量のトラップを仕掛けていた事を……

「じゃあ、今度はこつちから行こうかな？」（クロスリード

8枚中6枚の補助魔法陣が飛んでくる。

ファンネル攻撃だった。中に収納してある砲撃をぶつ放しながら襲ってくる。

殆どがカティのプロトンスマッシャー、そしてキャロ先生のアクセルシューター、

そう、クロスリードはこう言う砲撃をこつこつと貯め込んでいた。その数、数万発、非常に強力な攻撃を舞花棍で叩き落とす物の、前には出られない。

じりじり後退させられ始めた。

クロスリードがゆっくり近付いてくる。

そしてニヤリと笑った。

「アブねえー！」（アード、

そこへ打ち込まれたのは結界陣砲、もうちよつとで閉じ込められるところだった。

しかし、飛び退いた場所が行けなかった。

「そこ危ないよ？」（クロスリード）

チユドオオオオオオオ

踏んだのはトラップボム、地雷魔法だ。

戦いながらクロスリードはトラップボムを仕掛けていた。

トラップボムはトラップバインドよりも設置範囲が狭い、

トラップバインドが１メートル四方必要なのに対し、

直径２０センチほどの範囲で仕掛けられるコンパクトな魔法だ。

でも踏んだ時の効果は大きい。

チユドオオオオオオオン、ドンッ、ボン、ドガアアアアア

一体何発仕掛けてあるのだろうか？落ちるところ踏むところ全て爆発する。

「まあ、こんな物かな？」（クロスリード）

トドメに結界陣砲を打ち込んで閉じ込めクロスリードの勝ちだった。

「やっぱり生徒会長は強いなあ？」（はやて）

「一番の策士よね？完璧な詰め将棋、術中に嵌ったら私でも勝てないわ、

彼のあだ名は古狐、誰かさんと化かし合うには良いキャラかもね？」

（なのは）

「何ですとおおおおおおー！」（はやて）

これで次の準決勝ベスト4が出揃った。

第1試合、ジョンVSラフロ

第2試合、ヒビキVSクロスリード、

「じゃあ、30分の休憩の後準決勝だよ？」

あの試合の後俺はもう一本マナギンを飲んだ。

味はもの凄く不味い、でも何とか魔力は回復出来た。

まだそこまで酷く消耗はしていない様だ。

でも5本で1万って高すぎだよこれ。

残り2本、ギリギリで必要本数はある。

後は何処まで魔力を残して決勝に行けるかだ。

そして休憩が終わる。

「じゃあ、第1試合行ってみようか？」

俺は入場しながらいくつかのトラップを仕掛ける。

しかし、その瞬間、何かにぶつかったトラップが発動する。

そうラフロもまたトラップを仕掛けていた。

トラップ同士がぶつかって発動した様だ。

「考えてる事は同じか？魔力を無駄使いたぜ？」（ラフロ

開始線で睨み合う、俺は両手にバインドウィップ、

向こうは両手に小太刀、そしてエマルジョンコレクトを発動、シールド2枚だ。

「始め！」

その瞬間、俺はここはと思う地面を打ち据える。いくつものトラップが発動し、うねうね立ち上がる。その上にアルケミックワイヤーまで仕込んである。

今度はラフロがシールドからコレクトアウト、アクセルスマツシャーが大量に打ち込まれ、俺の仕掛けたトラップも消えた。

改めて睨み合う、目を合わせてくる瞬間を狙う。

「喝っ！」（ラフロ）

居竦みを破られた。

「ぐっ、息が……」（ジョン）

「おい、吐納に掛かったふりはやめろ！今のは吐納を掛けるふりをしてただけ」（ラフロ）

セコい駆け引きは向こうの方が上だった。

セコさは向こうの方が遙かに上、こうなると力で勝負したいところだが、

こつちから仕掛けたら負ける、あくまでも後の先を狙う戦術、それ以外に俺が勝つ方法がない。

それに下手に砲撃を仕掛けられない、エマルジョンシールドがある以上吸い込まれるだけだ。

俺は正拳突きを咬ます構えのまま相手の出方を窺う。

「怖いねえ、下手に突っ込んだらその正拳の餌食だ。前にすら出ら

れない」

完全に膠着状態だった。

下手に神速で突っ込んでも、エマルジョンシールドの間を抜かれたら間違いなく自分が終わる。

かと言って砲撃は避けられるか捌かれる。

ここは徹底防御したいところだが、ジョンがそれを読んでいて突っ込んでこない。

膠着状態が続く、不意にラフロは何かを思い付いた。

「アフロ魔法発動！」

ジョンの目の前にもっさりした巨大アフロ、これは簡単には攻められない。

「こうなったら切り落としてやる！」（ジョン）

そうあのビール瓶を斬る手刀なら切れると思った。

でも意外な事にふんわり柔らかい毛の塊は全く切れない。

ただ手に巻き付いてくるだけだった。

しかも巻き付いたら離れない。

そうあの髪の毛攻撃だった。

いつの間にか右手右足に巻き付かれていた。

「これで終わりだな？お前じゃあここから逆転は出来ないだろう？」

（アフロ）

髪の毛がどんどん全身に巻き付いてくる。

「お前、俺が何で爆裂系の魔法しか持っていないか分かるか？」（



ジョン

「?」(アフロ)

「俺は炎熱能力者なんだよ!」(ジョン)

そう、ジョンの最後の切り札、それが炎熱変換、熱い炎が全身を包む!

そう、熱血野郎はただ熱いだけじゃあなかった。

炎熱変換という奥の手をまだ隠し持っていた。

しかも、髪の毛は熱に弱い、炎に曝された部分はちりちりに燃え落ちた。

何とか拘束から逃れたジョン、もうこれは奥の手しかなかった。

「ナツクルブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

発射されたハンド君はその巨大な手を広げて巨大アフロを上から押し潰す。

そしてぐりぐり捏ねるときゅつと握った。そこへ収束する魔力、

チユドオオオオオオオオン!

大爆発して終わった。

でも、俺もスツカラカンだった。

魔力が殆ど残っていない。次の試合までにどれだけ回復出来るのか? まともによってもまず勝てない相手、それをどうやって攻略するか?

「あの子強いなあ、これでまだ伸びるとするとホンマ今年の1年生は当たりやで?」(はやて)

「強いと言っかこの大会の中で確実に成長しているわね？」（なのは

「ああ、ベスト16に残った1年生全員伸び代が大きい、これを更に鍛えたらどれだけ伸びる事か？」（ヴァロット

こうして俺は決勝進出を決めた。

## 最後の切り札（後書き）

次回：本気のヒビキとクロスリードの激突、もの凄い試合が展開される。

## 決着！決勝戦！（前書き）

その頃俺は魔力の回復を図っていた。

さっきので魔力切れ寸前、マナギンは予備を含めて2本残してある。

試合を見ながらまず一本、大体40%回復、もう一本飲むも完全には回復出来なかった。

注意書きには多用すると効き目が落ちると書いてあったが、どうもそう言う事らしい。

大体75%ぐらいか？ブレイカーなら2発、

ブレイカーを一発に抑えるとそれ以外の魔法がそれぞれ一発ずつ、ギリギリの内容だな？でも俺はこの時会長を舐めすぎていた。

**決着！決勝戦！**

「じゃあ、準決勝第2試合行ってみようか？」（なのは

二人が入場してくる。

「ついにこれを外す時が来たか……」（ヒビキ

ヒビキはそれまでしていたリストバンドを外す。

それだけでなく両足にも同じ物をしていた。

そう、これは魔力式ウェイト、実際に重い訳ではなく、魔力的に重くするアイテムだ。

それだけじゃあなかった。

首に手をやるとチョーカーの様な物が現れる。

「あれは出力制限リミッター」(なのは

そう、はやてやヴァロットが付けているのと同じリミッターだった。

つまり、出せる魔力を押さえた上で更に魔力負荷を掛けてここまで戦っていたヒビキ、

どれだけ自分を追い込んでいたのか？

「おいおい、ヒビキ、随分無茶をするじゃないか？」（クロスリード

「お前に勝つにはこれ位やってもまだ足りねえ、悪いがお前はここで倒させて貰う」(ヒビキ

ヒビキは魔力を全開にする。

湧き起こる魔力、恐らくSS級有るだろう？

この戦いが事実上の決勝戦とも言える物だった。

「じゃあ僕もそろそろちょっとだけ本気を見せないかね？」（クロスリード、

クロスリードもまたリミッターを付けていた。  
やはり、魔力が大きい。

二人が開始線で睨み合う。

「始め！」

ヒビキは刀に手を掛けたままゆっくりと歩き始める。

トラップなど意味がない、飛び出した瞬間細切れになるだけだ。

だからクロスリードも敢えてトラップを仕掛けない。

いや、一応仕掛けてある。ヒビキの後ろ側にトラップポムを……

クロスリードはエマルジョンコレクトを発動した上で二刀小太刀を  
抜く、

御神の剣と宮内示現流の対決、まさに最強剣同士の対決、

誰もその一瞬を見逃すまいと息を殺し、固唾を飲んで見守る。

有る程度距離のつまった瞬間だった。

クロスリードがコレクトアウト、ホーミングバレット、ソニックシューターの嵐が起きる。

だがヒビキには当たらない。ギリギリの距離でホーミングバレットをかわし、

ソニックシューターを燕飛で切り落とす。

これがクロスリードの距離、これ以上離れたら多分攻撃が全て吸い込まれるか転送される。

こちらとしては補助魔法陣でガードされる前に一撃入れたいところだ。

また歩き始める。

さっきの距離ギリギリまで来るとコレクトアウトの気配、どうする？あと一步踏み出せば確実に撃ってくる。

ヒビキは敢えて踏み込んだ、そこへプロトンスマッシャーが打ち込まれる。

それを切り裂いて爆発させた瞬間、ヒビキは右の肩に刀を担ぐ、

「疾風一迅！」（ヒビキ

当たるかどうか？いや吸い込まれるかも知れない距離、クロスの反応が気になる。

放たれた一撃は山田のそれにも匹敵する威力、これで当たってくればそれなりにダメージがでかはず、

でも、左腕のエマルジョンシールドに吸い込まれた。

「良い物貰った、これは来週の団体戦で使わせて貰うよ？

今度はこっちの番だ」（クロスリード

またもホーミングバレットをコレクトアウト、しかも半端な数じゃない、

こう言う細かな散弾魔法に対処する方法はヒビキにとってバリア以外にない。

後は逃げ回って避ける以外に方法がないのだ。だんだん後ろへ追い詰められる。

「そろそろ危ないよ？」（クロスリード

チユドオオオオオオオン、

地雷原を踏んでしまったヒビキ、飛ばされて落ちた先にまたトラップボム、

爆発して飛ばされればまた爆発、すっかりトラップボムの餌食だった。

ボロボロになって立ち上がったところに結界陣砲、閉じ込めてクロスリードの勝ちだった。

今年もまた勝てなかった。

これでクロスリードとジョンの決勝戦が実現した。

「やっぱクロス君最強やわ、ちょっと戦術が上手すぎるもん」(はやて

「流石に生徒会長ね？でも本気になったら何処まで強いんだか？」(なのは

「そうだな、もうすぐ俺の足下に追い付いてくるだろう？  
そうなれば達人の世界へ身を置く様になる」(ヴァロット

その頃俺は魔力の回復を図っていた。

さっきので魔力切れ寸前、マナギンは予備を含めて2本残してある。

試合を見ながらまず一本、大体40%回復、もう一本飲むも完全には回復出来なかった。

注意書きには多用すると効き目が落ちると書いてあったが、どうもそう言う事らしい。

大体75%ぐらいか？ブレイカーなら2発、



ブレイカーを一発に抑えるとそれ以外の魔法がそれぞれ一発ずつ、ギリギリの内容だな？でも俺はこの時会長を舐めすぎていた。

「さあ、決勝戦だよ！」（なのは

「泣いても笑ってもこれで今年の学園ナンバーワンが決まるんや、どちらが強いんかな？」（はやて

「これは面白いな？近年1年が決勝に残る事はなかったが、今年は大番狂わせだ」（ヴァロット

二人が入場してくる。

ジヨンは両手にバインドウィップ、クロスリードはエマルジョンコレクト+二刀小太刀、

もうお互い分かっている。

ジヨンは無駄な魔力を消費しない為にトラップは仕掛けない。お互い開始線で睨み合った。

「始め！」

ジヨンはバインドウィップを振るう、地面から立ち上るトラップバインド、もうお約束だ。

これでもうコースは空いたと判断した。

後はここへクロスリードが突っ込んできた時が勝負、そう考えた。構えを中段構えにいつでもマツハ拳を打ち込める体勢を取る。

そのまま腰を落として一撃を狙う体勢になろうと一歩下がった瞬間だった。

チユドオオオオオオオオン

自分の周りにもいつの間にかトラップボムを敷き詰められていた。飛ばされて落ちるとそこで爆発する。暫く爆発の餌食になったところで、

更にホーミングバレット、アクセルスマッシュをコレクトアウトされて完全にKOされたジョン、  
やっぱり生徒会長は強かった。

「大体この僕が1年相手に本気になる訳無いでしょ？」

こうして今年の大会は生徒会長の優勝で幕を閉じた。

**決着！決勝戦！（後書き）**

次回：団体戦に向けて練習が始まる。

## チーム戦大会に向けて（前書き）

個人戦大会の映像を見ながらお互いを分析し、それぞれ学ぶべき先生の所へ走る。

俺は与那覇道場へ、ジョニーとジャックは校長先生の所へ、ブラントンはヴァロットさんの所へ走った。

## チーム戦大会に向けて

「良い事、今日と明日は完全休養する事、決して無理をしちゃダメよ！」（なのは）

最終日を戦った俺達は完全休養を言い渡された。

「じゃあ、僕の方から発表します。

インターミドル・ミッドチルダシリーズ派遣選手及び補欠選手、  
まず、男子の部5名、ヒビキ・ヤマザキ、ラフロ・イグ、アード・  
ベック、

ブラッド・ハウンド、ジョン・ハミルトン

女子の部、5名、モエギ・ナカジマ、アカネ・ナカジマ、イスズ・  
ナカジマ、

カティ・サーク、マリー・ポーン

補欠選手、リン・ヤマザキ、ナギ・ナカジマ、ブランドン・ゴール  
ド、

バルンタイン・ファインスト以上だ。

団体戦大会の後合宿を行う」（クロスリード）

「おい、何で俺が外されるんだよ！」（ハーベイ）

「お前のデバイス、自立行動型はレギュレーション違反なんだ、残念だが出せない」（クロスリード）

こうして俺達はインターミドルを目指して合宿をする事になる。  
現時点で、レギュレーションオーバーの為出られない生徒会長、  
ヒビキさんもしかしたらレギュレーションオーバーで出られなくなる  
可能性があるという。

他にも、代表選手が怪我をしたり、レギュレーションを超えれば出場停止になるので、

その場合は補欠選手が繰り上げて出場する事になると言う。

そして俺達は個人戦大会を終えた。

「……と言う訳なんで、ご指導の方を宜しくお願い出来ますかね？」  
(クロスリード)

「なるほど分かった。こちらでも出来る限りの事はしよう、うちの隊員に指導させるのも良いだろう？」(ヴァロット)

もう、合宿の準備は充分の様だ。

そして日曜日、俺達は久しぶりにチーム練習をする。  
FA ジョン・ハミルトン    GW ジョニー・ウォーカー  
CG ジャック・ダニエル    FB ブラントン・ゴールド

まずはお互いの弱点、欠点の洗い出しから。

「ジョンはFAなんだからもつと空手の技を多くしても良いよね？  
もつと前に戦場を切り開いてくれる方が後ろとしては楽で良い」  
(ブラントン)

「俺は指揮系統を二つに分けた方がこのチームは伸びると思う。  
前の指揮を俺が、後ろの指揮をジャックがやる、

基本俺がどれだけ前を切り開けるかに掛かっているけど、  
ツイン指揮官型の方が多彩な攻撃が出来て良い様な気がする」(ジョン)

「ブラントンはもう少しエマルジョンコレクトの使いこなしを上手くして欲しいな？」

「やっぱり防御の要だし、エマルジョンコレクトの無い戦いはきつすぎる。」

「個人戦を戦ってみてよく分かったよ。」（ジョニー）

「俺達後ろ3人が弱すぎるな？もっと多くの技を使えないと行けない。」

「魔力はそれなりにあるのに、魔法戦がちつとも出来ていないんだ。」（ジャック）

「つまり、取り纏めると俺は空手の強化、お前らはまず魔法の強化が優先か？」（ジョン）

「そうだね、余り時間がないからジョニーは中距離砲撃とバインド、トラップの強化を中心に見よう。」（ジャック）

「ジャックは砲撃の強化、とにかく命中精度の向上と威力のアップ、より少ない魔力で如何に多くの砲撃を出せるか？が課題だね。」（ブラントン）

「そう言うブラントンは御式内の強化とエマルジョンコレクトの強化、

後は策敵能力の強化だね？」（ジョニー）

「個人戦大会の映像を見ながらお互いを分析し、それぞれ学ぶべき先生の所へ走る。」

「俺は与那覇道場へ、ジョニーとジャックは校長先生の所へ、ブラントンはヴァロットさんの所へ走った。」

「それぞれに訓練メニューを頂くと団体戦目指して特訓を開始する。」

俺達だけでなく、何処のチームもチーム戦に向けて特訓を開始していた。

私達が個人戦を戦っていた頃、スプールスでは次元航行隊の特別チームが作戦を行っていた。

そう、あのフルーツ島で例の施設の現場検証をしていた。

白い細菌防護服の特別チームは運び出せる機材を運び出し、回収出来る書類を全て回収した。

今現在、回収した物にウイルスの類が残っていないかどうかの検査が続いている。

そして現地では、あの施設に鉄筋の骨組みを被せ、コンクリートで固める作業が始まっていた。

そう、正面玄関以外を全て塗り固めて岩山に見せる様に工事が進められている。

ここでもアルケミックを使える召喚士が大活躍していた。

まあ、工事の方は出来る限り島の環境に配慮して、果物の木を傷めない様に進められている。

今後も美味しい巨大果物を実らせて欲しいから、細心の注意を払ってやっている。

工事が完了次第例の部屋の封印を解くそうだ。

現場を指揮していたカル口はまだ知らなかった。

そこに恐るべき陰謀の成れの果てが眠っている事に……

私達は練習に明け暮れる。

後三日、とにかく練習して練習して練習しまくる。

今度の大会であいつらに借りを返す。

裸にされた、上に借金まで負わされた借りを……



でも、今回の校内大会、またレギュレーションの変更があるとは知らなかった。

「あ、生徒会からメール来てるよ」（リン）

「何々？模擬戦大会におけるレギュレーションの変更について？」  
（デュワーズ、

禁止事項のうち、戦闘機人の一部ISの使用を認める。  
なお、それ以外の禁止事項は個人戦大会と同様とする。

解禁されるISは以下の通り、

エネルギードレイン サクラ・ナカジマ

振動拳 ツグミ・ナカジマ

ジャイアントインパクト アヤメ・ナカジマ

削岩拳 イスズナカジマ

グラビティカノン アサギ・ナカジマ

可変振動拳 モエギ・ナカジマ

「えっ、仕入れた仕込み使えないの？」（エヴァン）

「って言うかこの変更、ナカジマ家に圧倒的に有利だよ。  
下手したら一撃されて終わりだよ？ちよっと相手が悪すぎるよ」

驚異的に強い生徒会チームに対抗させる為、ナカジマ家のある程度  
のISを解禁させたのだ。

「おいおい、校長先生も随分無茶を考えるな？」（ジョン）

「まあ、一撃貰わなければ大丈夫だけど、よく見ると砲撃はグラビ  
ティカノンだけだし、  
エネルギードレインはエマルジョンシールドだと思えばいい、  
振動拳系の物はマツハパンチと何も変わらない、要は喰らわなけれ  
ば良いんだ」(ブランドン)

チーム戦大会に向けて（後書き）

次回：いよいよ始まるチーム戦大会

**開幕！チーム戦大会（前書き）**

「しかし、なんやなあ？1回戦は1年と2年の上位チームの強さが目立ったなあ？」（はやて）

「うん、そうだね、本当に凄いのは3回戦からだよ、上位チーム同士の激突が始まるから」（なのは）

## 開幕！チーム戦大会

「さあ、始めましたガチンコ模擬戦大会秋のチーム戦シリーズ、司会及び審判長は私高町なのはと」

「コメンテーターはスペシャルフォーエス部隊長のヴァンサン・ロシエットでお送りしております」

「私もおるで？」（はやて

「はやてちゃん、また来たああああああ、もう、いい加減にしなよ」（なのは

「大丈夫やて、この日の為に仕事を進めて、大会の間は余計な仕事は入らんようにしたいし、  
そうでない所はロツサにお任せやあ、全然大丈夫や」（はやて

「私は護衛だ」（シグナム

「しかし、あれやねえ？ISの解禁なんて随分大胆なことするねえ？」（はやて

「まあ、あれくらいの攻撃が来ても平気な位でないと困りますからね？」（ヴァロツト

「もうシグナムさんでも勝てない子が何人もいるよ、今年の2年生も相当優秀だから」（なのは

なのはの言うとおり、非常に優秀で強い生徒達が今年も多く育つ

ている。

毎年の事ながら、そう言う卒業生達との手合わせを楽しみにしているシグナムだった。

来年の卒業生は何処まで強いのが居るのか？それを物色するのがシグナムの楽しみだったりする。

「おい、あれでも2年なんだよな？」（ジョン）

「って言うか弱すぎでしょ？」（ジョニー）

俺達は2年のチームと当たったんだが弱すぎる。

まるで手応えもなく勝ててしまった。一回戦を楽勝で突破する。

「凄いね、マリーとリンがいれば余裕だよ、私達全然やる事無いし」  
（デュワーズ）

「そんな事無いよ、トラップ潰しの砲撃はないと困るから」（リン）

こちらのチームも一回戦を楽勝で突破してみたみたいだ。

チユドオオオオオオオオン

試合場の方でもの凄い大爆発、ナカジマシスターズ7も勝ち抜ける、

どうやら巨大砲撃で相手チームを吹っ飛ばしたらしい。

生徒会チームも勝ち抜け、バランティン達も勝ち抜けた。

「やっぱりあれやね？この時期になると突出して強いチームが目立ってくるね？」（はやて）

「ああ、やる気と努力、それからセンスのある子達はどんどん伸びている、

この分なら来年早々のドラフトも期待出来るだろう？」

これもひとえに校長先生の指導力の賜物だろう？」（ヴァロット

「そ、そう言われると照れるな？」（なのは

そう、この時期突出して強いチームが目立ってくる。

そして、それに追いつく様に他のチームは3月までに実力を上げていく、

実力が付いてきた所で卒業を迎えるといったパターンを繰り返すのが、

この所のスクールの空気だったりする。

「まだスクールの卒業生は2000人弱しか居らんけど、それでも次元世界は変わってきた。

大きな事件や、戦争も殆ど起きん様になってきた。後はまだ辺境世界で起きとる事件や、

散発的な戦闘も解決できるようになればもう平和その物や、まだ卒業生の数も足らへんけど、

いつかきつとこの平和を永久に維持できる時が来る。必ずそれを実現してみせる」（はやて

「うん、そうだね、まだ管理局の中でもほんの一握りしか居ないけど、

その一握りのみんなが頑張っていてくれる。それがここまで世界の平和を維持してくれている。

後10年経ったら、もしかしたらこの平和を永久に維持出来るようになるかも知れない」（なのは

なのはの言うとおり、スクールの卒業生が増えるたびに少しずつ平和になる次元世界、

後はこの伝統を何処まで保っていけるのか？それが課題だったりする。

そして、なのはの後継者も育てないといけない。

自分の跡を継いでこのスクールを束ねていける人物を、

そろそろ育てていかないとこの先大変な事になりそうだ。

まさか自分だけの代でこのスクールを終わらせる訳にはいかない、出来る事ならこのまま名門校として伝統を維持して欲しいと願うのはだった。

「しかし、なんやなあ？1回戦は1年と2年の上位チームの強さが目立ったなあ？」（はやて

「うん、そうだね、本当に凄いのは3回戦からだよ、上位チーム同士の激突が始まるから」（なのは

そう、春の大会と秋の大会は校内戦、そしてなるべく決勝を面白くする為、

1回戦2回戦は割と上位チームに有利な組合せになっている。

1回戦、80チームから40チームへ

2回戦、40チームから20チームへ

3回戦、20チームから10チームへ

4回戦、10チームから5チームへ（この時点で敗者復活の上位3チームを加える）

5回戦、8チームから4チームへ、

準決勝、4チームから2チームへ

決勝戦



と言う具合で試合が進む、初日は試合数が多く、1回戦2回戦、敗者復活2回戦まで行われる。

当然、俺達は2回戦を突破、3回戦に駒を進める。

「いいよねみんな、ISが解禁されてさ、私だけだよ解禁されていないの」(ツバキ)

IS無しでは非常にキツイツバキだった。

「無茶を言わないの、あんたのISまんま南斗白鷺拳だし、

まともに食らったらみんな輪切りに成っちゃうわよ、

まさか人間の輪切りを作る訳にも行かないでしょ？」(アカネ)

「お姉ちゃんはしょうがないよね、振動拳なのに戦闘に使えないもんね？」(ツバキ)

そう、ナカジマ家9人の中で一人だけ使えないISを持っているのはツバキだったりする。

彼女のISは戦いに向いていないのだ、周波数は180〜250Hz、

丁度振動式マッサージ器と同じぐらいだ。

破壊力は期待出来ない。その代わり、戦いの後など仲間のマッサージに威力を発揮する。

まあ、癒しと治療効果の高いISだったりする。

因みに彼女は人畜無害なのでISの使用は常に解禁されている。

暫く文句を垂れていたツバキだったが、流石にナカジマシスターズ、

あっという間に勝利を収めて3回戦進出を果たす。

「ふつ、今に見てなさいよ、使えないISをどう使えば勝てるのか？  
私の開発した必殺技をお披露する時が来るから、思い知らせてあ  
げるわ」（アカネ）

彼女は何やら新しい必殺技を開発したらしい、

それがお披露目される時いろんな意味で注目を集める事になる。

**開幕！チーム戦大会（後書き）**

次回：ジョン達の3回戦！その成長ぶりを見よ！

## 成長（前書き）

刀を納めた居合い構え、射抜を撃つ様だ。  
そう神速に乗せての射抜ならスピードでジョンを上回る。

## 成長

「さあ、今日は最終日、3回戦から決勝まで一気に行くよ！」（なのは）

3回戦、20チームから10チームへ、いよいよ戦いが激化してくる。

俺達の相手はチームハウンド、ブラッドが一番後ろで指揮を執るワ  
ンマン型のチームだ。

チームハウンド

ブレイブ（FA）、フロン（GW）、ブラウネ（CG）、ブラッド  
（FB）

お互い入場して開始位置に着く、

（おい、動くなよ？動かないだけで十分効果があるから？）（ジョン

）（了解！）（3人

「始め！」

でもお互い動かない、そう相手もまたトラップを仕掛けていた。

「クラスタアアアア・シヨオオオオオオオオオオットオオオ  
ッ！」（ブラウネ

打ち上げた砲撃が細かく分かれて降ってくる。

そうトラップ潰しのお約束だ。

「な、何だ……と？」（ブラッド）

そうクラスターが落ちてもトラップが立ち上がらない。

「掛かったな？ 始めから仕掛けてなんかねーんだよ！

仕掛けるふりをしたただけだ！ 無駄弾を撃った感想はいかがかな？」  
（ジョン）

そう、始めから無駄弾を撃たせる作戦だった。

「ホーミングバレット！」（ジャック）

クラスターの落ちた跡と相手チームの間にジャックの砲撃が撃ち込まれる。

今度はトラップが立ち上がる。

「お約束だねえ？ 来いよ、遊んでやるぜ！」（ジョン）

俺は思いきり挑発してやる。

相手は前二人がムエタイに示現流、砲撃なんて持っていない。来るなら肉弾戦になる。

「俺達を舐めるなあああああ！」（ブレイブ）

突っ込んでくる二人、しかし……

俺の目の前でトラップに引っかかる。

「何故だああああああ！」（フロン）

「はい残念、またどうぞ！」（ジョン）

二人をマツハの拳でKOする。

「なんや今のは？」（はやて）

「ホーミングバレットが炸裂した瞬間トラップを仕掛けてたんですよ、

それに気が付かなかった方が悪い、あれも戦術ですから」（ヴァロット）

そう、今のは後からトラップを仕掛けたのだ。

そして見事にそれに引つかかった。

こうすれば無駄な魔力の消費が無くて済む。

如何に無駄なく確実に勝つか？と言う事をヴァロットさんから教わり応用を利かせてみた。

無駄が無くなり効率よく勝てれば試合運びが楽し、次の試合に使える魔力も多くなる。

長丁場の日程をこなすには、どれだけ節約して勝てるか？それが一番の課題となる。

残りは二人、でも後ろの一人が恐ろしく強い。

「ジョニー、ジャック、向こうのセンターを頼む、俺はフルバックを倒す！」（ジョン）

二手に分かれて襲いかかる。

二人ともエマルジョンシールドと補助魔法陣全開で防御に入った。

こうなると砲撃はもう通用しない、肉弾戦で倒すしかない。

それでも迂闊に近付けば吸い込まれるし、非常にやりにくかったり

する。

「サポートは任せて！」（ブラントン

ブラントンが全員にエマルジョンコレクトを装備させる。  
全員の補助魔法陣が相手の補助魔法陣を牽制する。

「双輪演舞斬！」（ジヨニー

「地獄花！」（ブラウネ

「プロトンスマツシャー」（ジャック

チユドオオオオオオオン

まずはブラウネ・ベルガー撃墜、これで残りは一人になった。

「やってくれるじゃねえか？だがこの場でお前だけでも倒す！」（  
ブラッド

彼は小太刀を抜いた。

そうエマルジョンコレクトを封じられた今、彼が戦う方法は御神の  
剣なのだが、それが結構強かったりする。

「雷徹！」（ブラッド

「白刃流し！」（ジヨン

そう、空手には刃物は通用しない。

空手は対刃物用の格闘術だ、有る程度空手を納めれば刃物を制する



事は出来る様になる。

「くっ、強いな？予想以上に成長してやがる」（ブラッド）

「そりやどうも、でも勝つのは俺ですから、とっととくたばって下さい、渦廻斬輪蹴！」（ジョン）

「虎乱！」（ブラッド）

突きの乱撃と蹴りの乱撃が激突する。

「ぐあっ」

弾き飛ばされたのはブラッドだった。

根本的に技の破壊力が違いすぎた。ジョンの蹴りは途轍もなく重かった。

それでも立ち上がるブラッド、こうなると神速で勝負を掛けるしか方法がなかった。

でもジョンは捨て身の正拳を放つ構え、下手に飛び込めばマツ八拳の餌食だ。

睨み合ったまま二人とも動かない、お互い次の一撃で勝負が決まる。緊張がその場を支配する。不意にブラッドが構えを変えた。

刀を納めた居合い構え、射抜を撃つ様だ。

そう神速に乗せての射抜ならスピードでジョンを上回る。これなら倒せると思った。

二人が睨み合う、スタンドも、ブラントン達も固唾を飲んで見守る。お互い緊張して冷や汗が垂れる。

その汗がジョンの頬を伝い顎から落ちた瞬間だった。

ブラッドが神速を発動す……出来なかった。

神速と言えど最初の一步はそんなに早い訳じゃない、踏み込んだその場所にトラップ、まさかの展開だった。

そう始めからジョンに挑発されていたのだ。

そしてまんまとトラップに誘導されてしまった。

トラップに絡め取られて動けなくなった所へ正拳突き、チームハウンド3回戦敗退。

「あの子も随分成長しとるなあ？いつの間にか指揮も上手うなってるし、

恐ろしく強くなってる、この分だと生徒会長候補やね？」（はやて

「でも性格に問題があり過ぎなんだよね？もう少し真面目になっしてくれないと」（なのは

「まだ4ヶ月もあるんだ、いくらでも教育してやれるさ、あの覗き癖もその内に納まる」（ヴァロット

「じゃあ次の試合行ってみようか？」

## 成長（後書き）

次回、リン達の3回戦、相手は何処だ？

## 作戦（前書き）

マリーが現れたのは、フェイマスの後ろではなく、ヘンリーの懐だった。

まさかのデコイ作戦、フェイマスに襲いかかると見せかけてヘンリーを撃墜、

ヘンリーもまさか自分に来るとは思わなかった。

フェイマスの後ろに小石が落ちた時点で、フェイマスとの戦いになると思ったからだ。

## 作戦

「ジョン達いつの間に……」(リン)

私は驚いた。

いつの間にか指揮が上手くなっている。

それに滅茶苦茶強い。

1回戦、2回戦とも力押しだけで勝ってしまったけど、強すぎて話にならない。

既に生徒会チームにも匹敵している。

もし次の試合に勝てば4回戦はジョン達と当たる。

今も2年の上位チームを簡単に倒してしまった。

仮にも1学期の初っぱなにベストエイトに残ったチームなのに。

「ふっ、どおやら期待出来そうなチームが出てきたな？」(ヒビキ)

「とか言つといてやられるなよ、あれはまだ全然本気じゃあないぞ？」(クロスリード)

「あっちゃ〜こんな所で当たるかな？」(リン)

私達の3回戦、バランタイムン達だった。

ここも1年じゃあ相当強いチーム、ベスト4に入ってくる。

まさか2年のチームを倒してくるとは思わなかったけど、かなりやばい相手だ。

「ねえ、どうする？」(リン)

「向こうは穴がないわね？前と後ろが御式内で間が拳法とムエタイ、

おまけにあの早撃ちは驚異だわ、かなり厄介な相手ね?」(デュウズ)

「取り敢えず、リンは先頭のバランタインを落として、マリーは霞み技からまずフェイマス、次にヘンリーね?」

その間にリンはジムを落とす。私達二人は援護射撃と補助魔法陣潰しするわ?」(エヴァン)

「了解」(リン・マリー)

「厄介だね?特に先頭のマリーが厄介だ。

すぐに消えるし、簡単には捕捉出来ないし、

とにかく全力であの二人を叩いてしまえば後は何とかなるけど、

問題は前の二人を倒せるかどうか?」(バランタイン)

「マリーは俺に任せて貰おう?」(フェイマス)

「じゃあ俺達は援護射撃と防御に徹するよ?」(ヘンリー)

作戦は上手く纏まった様だ。

「始め!」

その瞬間マリーの姿が消える。

「サウザンドアロー!」(デュウズ)

両チームの間に光の矢が降り注ぐ。

そう、トラップ潰しのお約束、こう言うやり取りは本当に時間と魔力の無駄だと思うのだが、

仕掛けてあるのと無いのではもの凄く効果が違う。  
バルンタインに比較的近い所でいくつかのトラップが立ち上がった。  
リン達は始めからトラップを仕掛けていなかった。

「ちえすとおおおおおおおおおおお！」（リン）

リンが突っ込んでいく、バルンタインが待ち受ける。

「燕飛！」（リン）

もの凄い連続攻撃がバルンタインを襲う。

バルンタインはそれをツインブレードで受け流す。

ポトリ、

その瞬間フェイマスは回し蹴りを周りに繰り出す。

「通背拳！」

マリーが現れたのは、フェイマスの後ろではなく、ヘンリーの懐  
だった。

まさかのデコイ作戦、フェイマスに襲いかかると見せかけてヘンリ  
ーを撃墜、

ヘンリーもまさか自分に来るとは思わなかった。

フェイマスの後ろに小石が落ちた時点で、フェイマスとの戦いにな  
ると思ったからだ。

すぐに消えるマリー、またポトリと小石が落ちる。

今度はフェイマスの前に、でも何も起きない、そう、今度はフェイ  
ント作戦、

相手の出方を窺う様だ。

そのすぐ横ではリンとバランティンが切り結ぶ。こつ言う近接戦闘では魔法が撃てない、溜を作る暇すら与えて貰えない。

当然それぞれの格闘技に頼る事になるのだが、リンはバランティンの格闘センスに驚かされる。

まだ御神の剣なんて学んでいないはずなのに、凄まじく強い。

御式内の体術に自分の剣技を乗せて、それで充分にリンと渡り合っている。

(これは長引くかも知れない・こつなったら)

「重切！」

「通背拳！」

バランティンは信じられなかった。

フェイマスと戦っていたはずのマーリーが後ろから攻撃してくるとは想定していなかった。

リンですらその光景が信じられない、そう、マーリーは独自の判断で攻撃対象を切り替えた。

リンの攻撃に合わせてバランティンを挟み撃ち、まさに一瞬の判断にバランティンは耐えられなかった。

そう、リンの強力な一撃に守りを固めた所に後ろから通背拳はきつすぎた。

バランティン撃墜、形成は一気にリン達の物になる。  
またマーリーが消える。

フェイマスにリンとデュワーズが襲いかかる。



今度は2対1もうどうしようもなかった。

それでもフェイマスが粘っている間に、ジムが通背拳を喰らって倒される。

最後の一人フェイマスは追籠に仕留められた。

「やるなあ？ 実に上手い作戦や、前の二人だけで大方片付けてもうた」(はやて)

「今のは作戦がいいな、マリーを実に上手く使っている。

あの霞み技はフェイントを組み合わせる事で何倍もの威力を発揮する。

相手を心理的に削るには最高のやり方だ」(ヴァロット)

「うん、実に上手いやり方だと思うよ、相手チームの司令塔を潰しておいて心理戦を仕掛けながら、

確実に潰していくやり方、派手さは無いけど実に玄人好みで渋い作戦だと思う。

それにこう言うやり方をされると返すのは難しい、作戦に嵌れば全滅は必至ね？」(なのは)

これで次の4回戦、リン達とジョン達のチームが激突する事になった。

## 作戦（後書き）

次回：アカネの必殺技が炸裂する。それはある意味最強でとてもけしからん技だった。

けしからん必殺技（前書き）

前蹴りを出した物の当たらない、その瞬間アカネが消える。  
扣歩だった。信じられない切れ味の扣歩、一瞬でサクラの背後を取ると羽交い締めにする。

「さてお楽しみよ」（アカネ）

## けしからん必殺技

「さあ私達の出番だね？」（ツバキ

「お、ナカジマシスターズの登場や」（はやて

「姉妹対決があるわね？」（なのは

そう、ナカジマシスターズ7の相手はチームWW4、アカネが居るチームだ。

アカネ（FA）、ミュスカデ（GW）、ハーベイ（CG）、メーヌ（FB）

ハーベイが銃術とムエタイ、残り3人は御式内を使い、アカネとミュスカデは御神の剣も使う。

アカネとミュスカデに関しては二刀小太刀のデバイス、メーヌは杖のデバイスだ。

もう既にB-29が上空でスタンバイしている。

「二人いれば充分よ、ミュスカデ、ナギを任せるわ、私は前3人頂くから？」（アカネ

「分かった」（ミュスカデ

「やっば〜、お姉ちゃんマジモードだよ、勝てるのかな？」（サクラ

「あの神速にはまだついて行けないし、向こうは神速使いが二人いるし、

吐納は3人も使い手があるし、勝てる要素がないよ、どうしよう?」

（ツグミ

そう、どんなに作戦を立てても、どんなに分析しても勝てる要素がない。  
そればかりか勝てる要素が見つからないという事はそれだけで絶望するしかない。

「もうこうなったら破れかぶれの全力攻撃有るのみだよな？」（ツバキ）

結局作戦も減ったくれもなかった。

ありったけの魔力を叩き付けるしか彼女たちには残されていないなかった。

「始め！」

「ぐっ、息が……」（ツバキ）

吐納を読めなかったツバキが崩れ落ちる。

その瞬間、アカネとミュスカデが神速で突っ込んできていた。

まだもがいていたツバキとツグミが一瞬で峰打ちを入れられていた。

そしてアカネはサクラと対峙する。

その後ろで、ミュスカデがナギを打ち倒していた。

「さてサクラ、あなたは特に念入りに遊んであげるわ」（アカネ）

サクラを見下ろすアカネ、圧倒的な力の差がそこにはあった。

「舐めるな！」（サクラ）

前蹴りを出した物の当たらない、その瞬間アカネが消える。扣歩だった。信じられない切れ味の扣歩、一瞬でサクラの背後を取ると羽交い締めにする。

「さてお楽しみよ」（アカネ

アカネの手がサクラの胸に伸びる。

「ああっ！」（サクラ

「あら、もの凄く感じちゃうのね？」（あかね

そう、アカネはその瞬間ISを発動した。

その独特の低周波はまるで振動式のマッサー器だ。胸を揉みながらびびびびん、びびびびんとやる、しかもかなり振動が強い。

強い振動を出しながらアカネがサクラの胸を揉む、その度に悶えるサクラ、

途轍もなく卑猥なセクハラだった。

「じゃあ、こっちはどうかしら？」（アカネ

アカネの右手がサクラの大事な所へ伸びてくる。

「あら？もうびびしょびしょじゃない？」（アカネ

大事な所をまさぐられ振動する指で弄ばれる。その度に悶えるサクラ、もう脚に力が入らない。

それでも更に攻めるアカネ、乳首を摘み一番感じる部分を責め立てる。

だんだんと息が荒くなっていく、調子に乗って更に振動を強めるアカネ、

それは抗いようのない攻めだった。

「ああ〜良いの〜良いの〜なんか来るのおおおおおお！」（サクラ

「あら？もういつちゃうの？いつちゃいなさい！もつと激しく感じながらいつちゃいなさい！」（あかね

サクラは大きく弓なりに体を反らせて痙攣するとその場に崩れ落ちた。

「……………な、なんちゅうセクハラやねん」（はやて

「……………す、凄いな、有る意味その辺のAVよりもエロかった」（ヴアロツト

「あ、頭痛い…………」（なのは

それは八神本部長も真つ青のセクハラ拳法、激しく振動する指が絶妙の攻めをする快樂の攻め、

女の子ならそれを受けてしまえばもう抗う事は出来なかった。

もうスタンドは声すら出ていない、余りのエロさに啞然とその光景を見ているしかなかった。

すぐに抗議の電話が殺到する。

「真つ昼間からあんなエロいのを放送しても良いのか？」とか「も

つと続けてくれ！」とか

「今のは放送事故なんだろう？」とか、「けしからん、実にけしからん技だ」、

「あれは不味いだろう？」などいろいろあったという。

かくしてチームWW4、4回戦進出決定。

流石にここまで残っているチームは何処も強豪ばかりだ。

生徒会A、Bの両チーム、1年生A、Bの両チーム、チームN2など結構強いチームが生き残っている。

そして容赦なく4回戦が始まる。

この秋のチーム戦、翌年のドラフトに大きな影響を与える。

特に2年生はどれ位指揮官に向いているか？小隊長として即戦力になるかどうかの判断材料になるのだ。

ここで資質が高いと認められた生徒には指名が競合する。

やっぱり何処の武装隊もそれだけ高い統率力の小隊長が欲しかったりする。

その為の指名の提出期限が大体11月の中旬頃だったりする。

その為のこの大会は、生徒にとっても各部隊にとっても大きな意味を持っているのだ。

そしてここにTVをチェックしながら頭を抱えているのはギンガ・ナカジマ三佐、

あまりの事に声すら出せなかった。

「あ、頭痛い……」

あれで108部隊の精鋭として迎え入れても良いのだろうか？  
ちよつと悩んだギンガだった。



## けしからん必殺技(後書き)

次回：ジョン達とリン達のチームが激突する。そしてベストエイト  
決定へ

## 四回戦の攻防（前書き）

「「回転旋風脚！」」

そう、某格ゲーで一世を風靡したあの技、それでジョンとジョー  
ーが飛んでくる。

## 四回戦の攻防

「なっ、何て卑猥な技……でもちよつとやられてみたいかも」(リン)

「リン、あんたMでしょ？」(デュワーズ)

と言うか、あの温泉事件やら同人誌やらが頭を過ぎる。  
不味い、変な気分になってきた。

「良いなあ、俺もあれやってみたい」(ジョン)

「同じく」(ブランドン)

などと話をしているのはスケベ三人衆のうちの二人だ。  
流石に、真似の出来る事じゃあないけれど、あれはちよつと真似し  
てみたい。

そうしている内にもどんどん試合が進む、  
ついに四回戦を迎えた。

「どうしよう？ジョン達のチームだよ、かなり強いよ？」(リン)

「まず先頭を仕留めないと勢いに乗られるわ？」(デュワーズ)

「はったりを気をつけないとやられるです」(マリー)

「マリー、二人がかりでジョンを仕留めるわよ？」(リン)

「私達二人は後ろから援護するわ」(エヴァン)

「どうする？リン達のチームだぜ？」（ジョン）

「まずは全員エマルジョンシールド装備だね？待機モードにしておこう」（ブランドン）

「トラップはどうする？」（ジョニー）

「俺に考えがある、本当は準決勝辺りまで取っておきたかったが、仕方ないだろう？」

それでもって、今回は奇襲戦法で行こうと思う、

この前練習したあの技を使って先に後ろ二人を落とす！」（ジョン）

「なるほど援護が無くなれば二人を落とす事は難しくないか？」（ジョニー）

「援護射撃はリンに集中ね？」（ブランドン）

「了解！」（ジャック）

作戦タイムは終わった。

どちらの作戦が相手チームを倒すのか？

「始め！」

その瞬間、マリーが消える。

「「回転旋風脚！」」

そう、某格ゲーで一世を風靡したあの技、それでジョンとジョニー

ーが飛んでくる。

「ホーミングバレット！」

「プロトンスマツシャー！」

二人を打ち落とそうとしたホーミングバレットを、プロトンスマツシャーが相殺する。

二人はリン達四人を飛び越えて後ろ側に着地した。これならトラップなんて関係ない。

「アクセルスマツシャー」

ジャックがリンを砲撃する。リンはその攻撃を切り伏せる。

「爆裂拳！」

「双輪演舞斬！」

その隙にエヴァンとデュワーズが撃墜される。完全に囲まれるリン、最後の希望はマリーだが、そのマリーはリンの影に潜っていた。

二人で一人を仕留める作戦が裏目に出ってしまった。

(マリー、聞こえる？私はジョンを相手する、マリーはジョニーを  
お願い！)(リン)

でもマリーは返事出来ない、魔力を使えば技が解けてしまう。  
リンはマリーを信じてジョンに戦いを挑むしかなかった。

「ちえすとおおおおおおおおおおお！」

リンがジョンに斬り掛かる。

「白刃流し！」

でも意味がない。

「無駄だ、示現流にとって空手は天敵なんだ」（ジョン

その時だった。

ジョニーのすぐ近くで爆発が起きる。

マリーがぶっ飛んでいた。何が起きたのだろうか？

それは地雷魔法トラップボムだった。

ジョンはジョニーの周りに三重にトラップボムを仕掛けていた。

それに気が付かなかったマリーは踏んでしまったのだ。

いくら消えていても踏めば爆発する。

吹っ飛ばされて倒れた所へトラップを飛び越えてきたジョニーがト

ドメを刺す。

結局困まれたリンは降伏するしかなかった。

「あの子達、随分成長しとるね？まるでお手本の様な殲滅戦や」（  
はやて

「最初の援護射撃が上手いよね、あれが上手く行かないと逆にジョ  
ン達が落とされて終わってたね？」（なのは

「最後のトラップボムもいつの間覚えたんだか？ジョンの奴なか  
なか器用だ」（ヴァロット

負けた……最初から作戦がダメだった。

まさか上から飛んでくるとは思わなかった。

しかも囲まれたらここまで弱いとは思っても見なかった。

いくら個人技が高くても、総合的な作戦がダメだどこまで弱いとは思わなかった。

私は思う、真正面からだけじゃ絶対に勝てない。

フィールドを立体的に見る目がないと、そのフィールドを立体的に考えて作戦が立てられないと、

こう言う負け方をしてしまう物だとよく分かった。

「流石に上手いな、この前の負けを見事に分析してやがる。」

このまま勝ち上がれば準決勝か決勝で生徒会チームと当たるぞ？」

(ヒビキ)

「まあ、その前に負けない事だね？僕らは余裕だけどヒビキ達は一杯一杯じゃない？」(クロスリード)

こうしてジョン達の四回戦は終わり、まずはベストエイトの内5チームが出揃う。

一年Aチーム、生徒会Aチーム、生徒会Bチーム、チームWW4、チームN2

流石に強豪が残った。

そして敗者復活戦、ベストエイト決定戦が行われる。

でも、このベストエイト決定戦に残っても、敗者復活のチームはまず五回戦を勝ち上がれない。

それはすんなり勝ち上がっても三試合、最後のチームは四試合余分にやっている。

途中にお昼休みが入るけど、それだけでとても回復出来る物じゃない。

かと言って負ける訳にはいかない。

結局、敗者復活を勝ち上がったのは、チームハウンド、一年Bチーム、一年Cチームだった。

そしてベストエイトの組合せ抽選が行われる。

#### 五回戦組合せ

一年AチームVSチームN2

一年BチームVSチームWW4

生徒会AチームVS1年Cチーム

生徒会BチームVSチームハウンド

何と準決勝で生徒会チームが激突する組合せだ。

「あらら、こりゃ一年生に滅茶苦茶可哀想な組合せやなあ?」  
「はやて」

「これで生徒会チームの優勝が決定しちゃったかもね?」  
「なのは」

「そう言うなよ?視聴率が下がるぞ?」  
「ヴァロット」

「じゃあここでお昼の休憩にしよう?」  
「なのは」



## 四回戦の攻防（後書き）

次回：準々決勝が始まる。

## 5 回戦へ（前書き）

「やべーよ、まだ俺一度もアサギさんに勝った事無いよ」（ジョン）

そう、まだ道場で一度もアサギに勝った事のないジョン、まとも  
にやっけて勝てる相手じゃあない。

「まともになんかコしない事を考えないと……」（ブランドン）

## 5 回戦へ

「うえ〜不味い！」（ジャック）

「これ更に味が酷いな？」（ジョン）

昼休みの間に魔力を回復、今飲んでいるのはマナギンX、マナギンの一個上級のドリンクだ。

確かに凄い効果がある。

さつきかなり魔力を使った俺達は魔力を回復させる為、マナギンXを飲んでいる。

これはS級、SS級専用の回復アイテム、この上はSSS級以上専用のマナギンZがある。

「でも2本で1万は高いだろ？」（ジョン）

「僕らにもっと魔力が有ればね、ここまで苦労しなくて済むんだけど」（ジャック）

「でもこれ飲んで飽和しないって事は俺もS級まで魔力が上がったって事か？」（ジョン）

そう、ジョンはこの1ヶ月で魔力が随分上がった。やはりブレイカーを覚えた事が大きかった。

しかも溜のないブレイカー、これは相手にとって驚異以外の何者でもない。

でも、ブレイカーである以上、消費魔力は相当な物だ。

それでなくても魔法を使えば魔力はそれなりに消費する。

「どんな魔力の持ち主だって魔力は無尽蔵じゃあないんだ、消費す

れば必ず減っていく、  
だから、戦いに於いて魔力の消費を減らす事は非常に大事なんだ。  
より少ない魔力で同じ魔法を使えるようになること、  
より少ない魔力で同じ威力が出せるようになることが大切なんだ」  
とヴァロットに教えられた。  
それに、砲撃専門でもない魔導士が手数が多い魔法を使えばそれだけで魔力の消費は激しい。  
さっきのトラップボムだって、結構な数を仕掛けた。  
それだけの事でかなり魔力を消費していた。  
試合が終わってからトラップは解除して魔力も回収したけれど、  
完全には回収しきれなかった。

「優勝まで後3試合か？」（ジョニー）

「難しいね、決勝戦は生徒会Aチームだよ、会長に勝てる訳無いって」（ブランドン）

「取り敢えず、次の試合は魔法を使いたくないな？」（ジョン）

「余り魔力を削られたくはないよね？」（ジャック）

こうして昼休みが過ぎていく。

「さあ、5回戦ベストエイトだよ！」（なのは）

「流石に敗者復活チームは可哀想やなあ、まだ回復しきれてへんで？」（はやて）

「これは1年生に厳しい組合せだな？でも決勝に残ればそれなりに希望があるかも知れん」（ヴァロット）

「じゃあそろそろ準々決勝第1試合いつてみようか?」(なのは)

V S チーム N 2

アサギ ( F A ) 、 モエギ ( G W ) 、 アルストール ( C G ) 、 ルイ ( F B )

「やべーよ、まだ俺一度もアサギさんに勝った事無いよ」(ジョン)

そう、まだ道場で一度もアサギに勝った事のないジョン、まとも  
にやって勝てる相手じゃあない。

「まともにガチンコしない事を考えないと……」(ブランドン)

「向こうのチーム生徒会に匹敵する位バランスと攻撃力が高いよ、  
どうしようか?」(ジョニー)

「勝てる技なら有る、ジョンはそれが出来るはずだ」(ジャック)

「なるほどな、その手があったか?だがどうする?今回は迎え撃つ  
か?」(ジョン)

「そうだね?今度は迎え撃った方が良さそうだ。

前の二人を落とされたらそんなに何か出来るチームじゃあないし」  
(ブランドン)

「あいつらかなりもめてるな?」(アサギ)

「そりゃ、道場で一度も勝った事がないからね?

今頃どんな卑怯な手を使おうか考えてるんじゃない?

まあ、変な仕込みはルール違反で使えないから困ってると思うよ？」  
（モエギ）

「あいつらを舐めるな、ヴァロットさんに相当指導されたんだ。それなりに汚い作戦を考え付く頭を身に付けている、何をしてくるか分からんぞ？」（アルストール）

「始め！」

まだ作戦が纏まらないうちに始まってしまった。

（可笑的い、あいつら突っ込んでこない）（アサギ）

（恐らくトラップだろう？このまま砲撃でダメージを入れる）（アルストール）

「クラスターバレット！x3」（アルストール）

その瞬間俺達の前あたりから絨毯爆撃の様なクラスターの雨が降る。

「なるほどトラップバインドは前だけでなく両横にも仕掛けていたか？」

「アブねえ、エマルジョンシールドが無かったらやられてたぞ？」  
（ジョン）

「コレクトアウト！」（ブランドン）

時間差で彼らの上空に補助魔法陣が現れ絨毯爆撃する。

それをどうにかかわしたモエギ達、砲撃は召喚士がいる以上自滅する可能性が高い。

「こうなったら肉弾戦で勝負！」（アサギ

アサギとモエギの二人が突っ込んでくる。

でもその瞬間だった。二人に叩き付けられる強力な殺気、そう、居竦みだった。

「マツハ拳！」（ジョン・ジョニー

二人とも動けなくなった所をマツハの拳に仕留められる。これで残りは二人、最早勝負は付いている。

「俺とジャックでアルストールを仕留める、ジョニーはブラントンとルイを落としてくれ」（ジョン

（こいつらいつの間になんかに強くなりやがった？）（アルストール

ジョン達は両手にエマルジョンシールドを待機させて二人と対峙する。

もう、砲撃は通用しない、こうなると肉弾戦の訳だが、御式内杖術はどのみち武器武術、空手の相手じゃあない。

「地獄花！」（アルストール

「渦廻斬輪蹴！」（ジョン

お互いの技が相殺し合う。

ビシッ

アルストールの槍にヒビが入る。

そう、渦廻斬輪蹴うずまわしぎんりんげりは始めから相手のデバイスを狙って放たれていた。

「これで落ちろ！マツハ拳ラッシュー！」（ジョン）

そう、そこへ撃ち込まれたのは左右3発ずつの合計6発のマツハ拳、

とても避ける余裕なんて無かった。

デバイスで防御する物の受け止めきれずに3発目でデバイスがへし折れ残り3発を喰らう事になった。

アルストール、スタンドまで飛ばされてKO、その際にジョニーがルイを殴り倒していた。

ジョン達、ベスト4に進出、次は何処が相手だ？

「流石に成長しとるなあ、戦い方がもの凄く上手い」（はやて）

「あのトラップも良いね、一人2個ずつだから4人で8個、

この程度なら殆ど魔力を消費しなくて済むし」（なのは）

「空手技の使い方でも随分伸びてきた。この分ならインターミドル制覇も夢じゃあない」（ヴァロット）



## 5 回戦へ（後書き）

次回、どうにかベストエイトに残ったリン達だったがもうボロボロだった。

必要不可欠な事（前書き）

「流石やなあ、もう魔力も殆ど残ってえへんのに、見事にやりよった」（はやて）

「やっぱりマリーを非常に上手く使っているな？」

あの霞技を生かす為に敢えて的のど真ん中に飛び込む勇氣は流石だ。余程仲間を信頼していないところは行かない」（ヴァロット）

## 必要不可欠な事

「やばいよ、私達の番だよ、みんな魔力大丈夫？」（リン）

「取り敢えず私は使っていないから平気」（マリー）

「私達は厳しいいわね？そんなに大きな砲撃も出来ないし、エヴァンも一杯一杯だし、ここで勝ってもまたジョン達と当たるし」（デュワーズ）

「取り敢えず私はコレクトしてある砲撃を取り崩せば、いくらかは魔力を補充出来るけど？」（エヴァン）

「やっぱり前二人の肉弾戦で行くしかないよね？もう無駄に魔力を消費出来ないし、トラップなんかも一切無しで、相手に撃たせるだけ撃たせて魔力を出させてその上で打ち倒さないととても勝てないよ、

あの人、魔力値はそこそこだけど保有魔力量は滅茶苦茶でかいし」（リン）

「私は単独行動を取らせて頂きます」（マリー）

「分かったわ、出来る事なら召喚士と司令塔をお願いね？」（デュワーズ）

「了解」（マリー）

「ふっ、あいつらポロポロだな？もう魔力も底を突き掛けるし、砲撃で削っておいて肉弾戦で倒すか？」（ハーベイ）

「厄介なのはあの子ね？消えるからどこから襲ってくるか分からないし、やりにくい相手だわ？」（アカネ）

「あいつら砲撃も残り数発、エマルジョンシールドや防御陣も時間にして30分持たないだろう？」

まずは絨毯爆撃であの消える奴を叩く、後はお前らの好きにしろ」  
（ハーベイ）

そして開始線で睨み合う。

既にB - 29が上空高く飛んでいる。

「始め！」

その瞬間マリーの姿が霞んで消える。

「ホーミングクラスター！」

その瞬間上空のB - 29から強烈な絨毯爆撃が始まった。

「不味い！六面防御陣！」（エヴァン）

でもその中にマリーは居なかった。でも絨毯爆撃に当たった気配もない。

私達は防戦一方だった。もう5分も爆撃に曝されている。

「通背拳！」（マリー）

その瞬間、後ろから通背拳によって倒されたのはメーヌ・シユールだった。

そう、相手の召喚士さえ居なくなれば防御力は80%低下する。通背拳を放ったマリーはすぐに姿を消す。

そう、敵陣に飛び込んでしまえば相手は砲撃出来ない。その敵陣を引つかき回して反撃のチャンスを作ろうという作戦だった。

不意にリン達の防御陣に穴が空く。

「バスターアロー」(デュワーズ)

爆撃の雨をかくぐって魔力の矢がアカネとミユスカデを襲う、そう、二人にマリーをやらせない作戦だ。

「エヴァ、この状態から私を転送出来る？」(リン)

「出来るけど防御陣の発動時間が5分位しかなくなるよ？」(エヴァン)

「5分以内になんとかする」(リン)

その瞬間、リンは敵のど真ん中に転送された。

一見リンが唯一人囲まれた様に見えるが。これが味噌だった。

「通背拳！」(マリー)

ハイベイを撃墜、残り二人となった。

あの鬱陶しいB-29も主が倒れば沈黙した。

残り二人を3人で囲む、マリーは相変わらず消えているが、二人のどちらかが攻撃に出ると後ろから追い打ちを掛ける。

もう一人がそれに対応しようとすると、リンが斬り掛かるといふ状

態で降着している。

流石に2年生、簡単には倒れてくれない。

それでもじりじりとコーナーに追い詰める。

「ホーミングバレット！」（デュワーズ

追い詰めた所へ逃げられない様にホーミングバレット、二人はバリアで耐える物の、その次の瞬間を狙われた。

「通背拳！」（マリー

アカネ撃墜、これで残りはミユスカデ一人になった。

「燕飛！重切！担ぎ居合い！」（リン

強烈な三連撃にミユスカデは耐えられなかった。重切を受け止めた瞬間、刀を弾き飛ばされ丸腰になった所に居合いの一撃、

最後は何処かの時代劇の様に倒れて終わった。

「流石やなあ、もう魔力も殆ど残ってえへんのに、見事にやりよった」（はやて

「やっぱりマリーを非常に上手く使っているな？」

あの霞技を生かす為に敢えて敵のど真ん中に飛び込む勇氣は流石だ。余程仲間を信頼していないところは行かない」（ヴァロット

「そうだね、それに全く無駄な攻撃も無駄な魔力の消費もなかった。

必要な所に必要なだけの魔力消費、厳しい戦場を生き残る為には必要不可欠な事だよ」(なのは)

「マリーよくあの爆撃に当たらなかったね？」(リン)

「あの時、最初に後ろに下がったんです。

それでコートに隅っこをそっと回り込んでいったから爆撃には曝されなかったの、

流石にあの爆撃もコートの隅っこまでは出来ないから」(マリー)

「所でデュワーズのこりの魔力大丈夫？」(リン)

「後1発で終わりだった」(デュワーズ)

「それやばくない？」(リン)

「仕入れてきたよ、回復アイテム！」(エヴァン)

エヴァンが仕入れてきたのはマナギンXだった。

「何これ？不味くて飲めた物じゃないよ」(リン)

「文句言わない、これではほぼ魔力は回復出来るんだから、今度こそあいつらに勝つんだから？」(エヴァン)

必要不可欠な事（後書き）

次回：準決勝はやっぱり生徒会Aチームの独壇場だった。



## まさかの展開（前書き）

そして準決勝第2試合両チームが出てくる。  
そう事実上の決勝戦、生徒会対決になった。

## まさかの展開

第3試合、それは最早ただのいじめとしか言いようのない試合だった。

余分に4試合もやって生き残ったバランティン達は既にボロボロでそこに立っているのが一杯一杯、魔力も殆ど残っていないかった。それを全力全開で叩きのめす生徒会チーム、あっという間に勝負が付いた。

そして第4試合も同じような展開に、やはり敗者復活戦を勝ち上がったチームは圧倒的に不利だ。

これで次の準決勝、1年Aチーム対1年Bチーム、そして生徒会Aチーム対生徒会Bチームという組合せが決定した。

「この生徒会対決が事実上の決勝戦やね？」（はやて

「でも1年生だって負けてないわよ、あの子達相当に良い連携をしているから、

チーム戦なら相当面白い対決を見せてくれそうだし」（なのは

「だがそろそろ体力の差が出てくる。

ここまで戦うともうそんなに体力が残っていない、

魔力を残していてもそろそろ体が付いてこなくなるだろう？」（ヴアロット

「後二つ勝てば優勝だ、それにリン達のチームはかなり疲弊している。

でもそう言う相手だからこそ舐めてかかると痛い目に遭う、

ここは確実に勝ちたい、ブランドン、俺達をこう言う位置に転送し

てくれ、

その後は後ろ二人は援護だ、絶対にその場を動くなよ?」(ジョン)

「了解!」(ブランドン)

「ねえ、あいつらまた飛んでくるのかな?」(リン)

「恐らくは3方向から囲む気でしょうね?」(デュワーズ、

「その前になんとか打ち落とせないかな?あの援護さえなければ簡単に打ち落とせそうだし?」(エヴァン)

「私が始めにセンターとフルバックを叩きます、後は夜露死苦!」  
(マリー)

「じゃあそろそろ準決勝第一試合行ってみようか?」(なのは)

「始め!」

でも動かないジョン達、

「サウザンドアロー」(デュワーズ)

コートの中よりジョン達寄りからジョン達の周辺まで矢の雨が降る。

やっぱり立ち上がるトラップバインド、最早お約束だった。そしていつの間にかマリーの姿がない。でも、爆煙が晴れた瞬間、ジョン達の姿もなかった。

「胴回し十字蹴り!」(ジョン)

「滅掌雷轟貫手！」（ジョニー）

突然後ろに現れたジョン達、その瞬間にデュワーズとエヴァンが撃墜される。

ドガアアアアアン

マリーはまた地雷魔法を踏んでしまった。

まさかあの一瞬でトラップボムを仕掛けて居たなんて想定外だった。そう、ジョンは、あの爆煙の中トラップボムを仕掛けて更に転送されるという早業をやつてのけたのだ。

そして倒れたマリーに容赦なくプロトンスマッシャーが撃ち込まれる。

ここでマリー撃墜。ジョンとジョニーに挟まれたリンは降伏するしかなかった。

「うわあ、凄いなあ、何時の間にあそこまでトラップの腕を上げたんや？」（はやて）

「俺が徹底的に叩き込みましたからね、トラップもバインドも、

空手も与那覇道場が総力を挙げて叩き込んでますから、もうすぐ黒帯ですよ？」（ヴァロット）

「でも一番伸びた事は、彼の指揮官適性ね？先頭に立ってみんなを引っ張るタイプ、

後ろから全てを包む様に守るタイプじゃあなく、先頭に立って道を切り開くタイプ、

後はそれなりに周りの信頼が集められれば自ずと生徒会長をやれる様になる。

後はあの覗き癖さえ矯正出来れば理想の人格者にも成れるんだけどな？」（なのは

結局勝てなかった。

まさか私達の攻撃さえ利用されるとは思わなかった。

せつかくここまで勝ち残ったけど、やっぱり勝てなかった。

ジョン達はいつの間にか滅茶苦茶強くなっていた。

そして決勝戦は恐らくクロスさん達と当たる。

多分お兄ちゃん達ではクロスさん達には勝てない、

決勝戦は相当に荒れた試合になるだろう？

そして準決勝第2試合両チームが出てくる。

そう事実上の決勝戦、生徒会対決になった。

生徒会Aチーム

F A イ ス ズ ・ ナ カ ジ マ    G W アー ド ・ ベ ッ ク    C G カ テ イ ・ サ ー ク

F B ク ロ ス リ ード ・ カ マ ン サ ッ ク

生徒会Bチーム

F A ア ヤ メ ・ ナ カ ジ マ    G W ヒ ビ キ ・ ヤ マ ザ キ    C G グ レ ン ・ モ ー

レ ン ジ イ    F B ラ フ ロ ・ イ グ

開始線で睨み合う両チーム、もうお互いの攻撃パターンは分かっている。

「始め！」

「デ イ バ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ ン ・ バ ス タ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ツ ー！」（カティ

地面に伏せたカティがデイバインバスターを発射、イスズとア

ドは両脇に逃げる。

地面すれすれを直進したバスターはその周辺のトラップを破壊して補助魔法陣に飲み込まれた。でもこれで花道が出来た。

その花道を通り込んでいくイスズ、アヤメとの激突は必至だ。

「削岩拳！」（イスズ）

「ジャイアントインパクト！」（アヤメ）

手数勝負の削岩拳に大して一撃必殺のジャイアントインパクト、当たればそれだけで大変な事になる。

「きゃあああ」（アヤメ）

その拳はイスズの腹に飲み込まれた。

そう、クロスリードがイスズの腹に補助魔法陣を貼り付けていた。

「はい、一人捕獲」（クロスリード）

「ちえすとおおおおおおおおお！」

ヒビキが斬り掛かるうとする。

ドガアアアアアン

イスズの前にトラップボム、かなりのダメージを受けて後ろに飛ばされたヒビキ、

それでもどうにか受け身を取って着地する。

「こうなったら全魔力解放！重破剛練斬！」（ヒビキ

巨大な一撃がイスズごと花道を切り裂こうとする。

「六面防御陣！」（クロスリード

防御陣の中にイスズも召喚されていた。

でも地面はズツパリ切り裂かれ、巨大な亀裂が出来ていた。  
流石にこの人は格が違う。

「この先は何人たりとも通さねえ！」（ヒビキ

流石に言う事がガードウイングGWだ。

クロスリードが防御陣を解除する。

「行くぜええええええ！」

その瞬間ヒビキの姿が歪んで消える。

奥義「行」だった。御神の剣で言うなら「神速」、中国拳法で言うなら「飛毛脚」である。

しかもまだ練習中でぶっつけ本番の技だが、上手く行った様だ。

ボゴオオオオオツ

イスズが行からの一撃に倒される。

ガキイイン

ヒビキの一撃をアードが受け止める。

「極纏直刺！」（アード

「燕飛！」

お互いの技が相殺する。

次の瞬間だった。

もの凄い殺気が放たれる、そう、追籠だった。

動けなくなったアードとカティをヒビキが一撃加える。

「さあ、これでお前だけだ！」

まさかの展開だった。



## まさかの展開（後書き）

次回：困まれたクロスリード、そこから起死回生の反撃が始まる。

会長は強かった(前書き)

「くっ、どう考えても勝つ方法が見つからねえ」(ジヨン)

「でも始まってソッコロ負けるのはイヤだね、せめて一矢報いるくらいのことはいしたい」(ブランドン)

## 会長は強かった

「さあ、これでお前だけだ！」（ヒビキ

まさかの展開だった。

クロスリード一人対、ヒビキ、グレン、ラフロという展開、誰が予想しただろうか？

「やってくれる、まさかあの状況をひっくり返されるとは？」（クロスリード

3人がクロスリードを囲む、これで流石のクロスリードも終わるかと思われた。

「じゃあちょっと本気になるのかな？」（クロスリード

そしてリミッター解除する。

周りに展開される夥しい数の転送魔法陣、既に3人の周りを囲んでいた。

そう、クロスリードは最初から誘い込んでいた。

3人が目の前に来てくれるのを、そして一気に殲滅するつもりなのだ。

「コレクトアウト！」（クロスリード

「六面防御陣！」（ラフロ

でも間に合わずにグレンが砲撃を受けて撃墜される。

「ヒビキ、このまま時間切れを狙うぞ？」（ラフロ

そうこのまま時間切れをされればクロスリードは負ける。  
実に汚いやり方かも知れないが、確実に勝てるやり方だ。

「無駄だよ、もう僕の勝ちが決定しちゃったじゃないか？」（クロ  
スリード

そう言った瞬間六面結界陣を発動するクロスリード、ラフロ達を  
防御陣ごと結界陣に閉じ込めた。

そのまま魔力を込めながら結界陣を縮めていく、当然魔力衝突が起  
きて結界陣と防御陣が火花を散らす。

ビシツ……ポンツ

ガラスが弾ける様な音がして防御陣が砕け散った。  
閉じ込めてクロスリードの勝ちだった。

「凄いなあ、流石生徒会長や、強さの桁がまるで違うなあ？」（は  
やて

「私が勝てるのは魔力だけかな？普通に戦っても絶対に勝てないよ、  
魔力がどのとかさそう言うレベルじゃあなくて、戦場その物を完全  
に支配している。

一つ策が破られてもその次その次とどんどん準備されている。  
あれじゃあまともによって勝てる人間なんて一握りだけだよ」（な  
のは

「まあ、あれも俺が教えた事ですから」（ヴァロット

「まあ、昔のヴァロット君に比べたらまだ大分下やけど、それでもこの3年ぐらいでは最強の魔導士に成長したんで？」（はやて

「一体あの人はどれ位化け物なんだよ？」（クロスリード

「さあ、1時間の休憩の後は決勝戦だよ！」（なのは

生徒会Aチームとジョン達のチームによる決勝戦が決まった。

「くっ、どう考えても勝つ方法が見つからね〜」（ジョン

「でも始まってソッコイ負けるのはイヤだね、せめて一矢報いるくらいのはしたい」（ブランドン

「まずは雑魚を片付けて会長を一人にする、そこからどうやって攻略するかだね？」（ジョニー

そう、あの無敵さを誇る会長にまともなやつで勝てる訳がない。それに生徒会の面々はみんな化け物ばかりだ。こんな相手にどうやって勝とう？

「気を付けないと行けないのは会長だけじゃない、

アードさんも心が読めるから気を付けていないと作戦がばれる」（ブランドン

「そうだな、ジャックは向こうの先頭を砲撃で足止めしてくれ、アードさんは俺が潰す。

残り二人になったら肉弾戦を仕掛ける。その時はジャックとブランドンは援護を頼む」（ジョン



直後俺が飛び込んで一撃を入れる。

これで予定通り二人撃墜、残りは二人だ。

「キツイねえ？ブレイカーなら後3発かな？」（ジョン）

魔力も残りが少ない。

ここからは肉弾戦だ、下手な砲撃は通用しない。

それに不用意に突っ込めば吸い込まれるか閉じ込められる。

慎重に行かないとすぐに終わってしまう。

彼らもまた驚いただろう？

始まっていきなり二人落とされた。しかも1年生相手にである。

それに目の前に飛び込まれてしまった。もう砲撃を出している暇さえない。

「トリガースペルを唱えさせるな！ジョニーはカティを頼む！」（ジョン）

「ほう、ここまで舐められるとは思わなかったぞ？」（クロスリード）

クロスリードは素手で相手をする。

そう、御式内だ。

刀より掴む、捌くに特化した御式内の方が空手に対応出来たりする。

「マツハ拳！」（ジョニー）

カティがスタンドまで飛ばされる、カティKO。

「滅掌雷轟貫手！」（ジョン）

「合掌取り！」（クロスリード）

「う、嘘だ！この乱撃を止められるはずがないのに！」（ジョン）

「出来るんだよ、所詮腕は二本だ、止められない道理はない」（クロスリード）

ジョンの抜き手のラッシュを両側から挟み込む様に両手の中に納めて止めるクロスリード、  
そこには圧倒的実力差が存在した。

「猿落とし！」（クロスリード）

一瞬蹴りかと思った。

でも蹴りではなかった。蹴りを受けて瞬間体が半回転して地面に叩き付けられた。

そう、いつの間にか靴を脱いでいた。猿落としとは足の指で掴んで投げる技だった。  
それでも立ち上がるジョン、流石にタフだ。

「じゃあこんなのはどうだい？正中五連潰し！」（クロスリード）

中高一本拳による正中線上にある5力所の急所を突く技、  
まともに食らうと死亡する事もある危険な技、死ななくても数時間は体が麻痺する。

「やっと一人だね？」（クロスリード）

「双輪演舞斬！」（ジョニー）



「無双取り！」（クロスリード

ジヨニーの必殺技もあっさり止められた。

「いかじちぐるま雷車！」（クロスリード

両肘を決められた状態で二本背負いから地面に叩き付けられるジヨニー、  
起きあがるうとした瞬間徹しが入ってジヨニーK.O。

「さて、ちょっと疲れたし、簡単に終わらせようかな？」（クロスリード

その瞬間、クロスリードは小太刀を取り出す。

「御神二刀小太刀最終奥義・閃！」（クロスリード

ジャックとブラントンは一瞬で打ち倒されていた。  
やっぱり生徒会長は強かった。

「す、凄いわあ〜魔法戦だけじゃなくて格闘技も滅茶苦茶強いわあ  
〜」（はやて

「うん、クロス君は元々魔法より格闘技型だから、懐に入られたら  
もっとやばいの」（なのは

「とうとう物にしたな？閃を」（ヴァロット

こうして秋の模擬戦大会は終わりを告げた。



## 会長は強かった（後書き）

次回：新章突入、ヴィヴィオとカリムの不吉な予言が管理局を震撼させる。

## 不吉な予言（前書き）

同じ頃、聖王教会、カリムとヴィヴィオの希少技能『プロフェーティン・シュリフテン』が発動していた。

そう、普通なら年に一度、春分の日辺りでないと発動出来ない希少技能だが、

この日ばかりは年に2回の発動が可能になる。

## 不吉な予言

「明日と明後日は完全休養しなさいそれと今度の水曜日は臨時休校にします」(なのは)

模擬戦大会を戦った俺達は完全休養を言い渡された。

そして今度の水曜日、10年ぶりとなるW皆既日食がクラナガンで見られる。

この日はかりはみんなレベルアップに必死になる。

そうW皆既日食が起きる時、尋常成らざる魔力がミッドチルダの大地に満ちる。

そしてその魔力を出来る限り多く集められた者はクラスチェンジする事も多い。

みんな思い思いの場所で魔力を集める事になった。

ただ校長先生クラスになると吸い込む魔力量が極端に大きいので、他の魔導士に迷惑にならない様に人のいない所で魔力を集めるのだそうだ。

「お互いに迷惑にならないよう、この恩恵をしっかりと受けなさい」  
(なのは)

そう、この恩恵は俺達だけじゃあなく、  
いろんな世界から魔力を集めに数多くの魔導士がミッドチルダにやってくる。

そう言う魔導士達の迷惑にならない様にするのも大事な事だったりする。

「本部長はどうされますか？」(ヴァロット)

「うん、私は取り敢えず北極に行こうと思うんや」（はやて

「じゃあ俺は南極で」（ヴァロット

この二人、化け物過ぎて最早ここまで人里離れないと他の魔導士にかなり迷惑らしい。

こうして水曜日それぞれ他の魔導士に迷惑を掛けない様に魔力を集める事になった。

そして水曜日、俺は町外れの公園にいた。

周りに人影無し、魔導士の気配なし、ここなら大丈夫そうだ。

午前11時23分、両側から太陽が欠け始める。

これから約25分が勝負だ。

だんだん欠けて来るにつれて大地からわき上がる魔力、欠け始めてから10分ほどで魔力は極大期を迎え、

それから3分ほどすると徐々に弱まっていく、その間にどれだけ魔力を吸い込めるのか？

それによって少しでもパーアップ出来たらそれで良い。

ミッドチルダに集結した魔導士はたったこれだけの瞬間のためにここまでやって来たりする。

でも、これが普段なら戦闘などで消耗した魔力を回復させるには相当掛かってしまう所だが、

今日ばかりは違う、この僅かの時間で100%以上の回復が見込める。

だからこの日は世界中から多くの魔導士が集まってきているのだ。

同じ頃、聖王教会、カリムとヴィヴィオの希少技能『プロフェーティン・シュリフテン』が発動していた。

そう、普通なら年に一度、春分の日辺りでないと発動出来ない希少技能だが、

この日ばかりは年に2回の発動が可能になる。

ヴィヴィオは聖王に即位して依頼、カリムを師匠に希少技能の習得に励んできた。

最近はカリム以上に使いこなす様になってきた。

ヴィヴィオの場合、カリムより特殊で、年に一度という制限がない。大地にある程度魔力が満ちていれば発動が可能だったりする。

しかも、古代ヴェルカ語ではなく、現代語訳で発動してくれているのが有り難い、

今まで難解だった詩文を何人もの有識者を集めて翻訳しなくても、ヴィヴィオの書き出した物とカリムの書き出した物を比較して、矛盾を埋めれば大体正確な予言になったりする。

しかし、今回の予言は特殊すぎた。

いつもの様な他愛もない予言ではなく、11年前のあの悪夢を彷彿とさせるとんでも無い物だった。

日食が終わるとすぐに八神本部長の所に連絡が入る。

そして、なのはもスクール生徒会も指揮官研修の20人も呼び出される事になった。

そして俺達は会長のエマルジョンコレクトに収納されて教会までやって来た。

「うう、さっぶ凍死するかと思った」「はやく・ヴァロット

何の装備も無しに極寒の世界に30分近くいたらしい。そりゃ寒いでしょ？」

ここは教会の大会議室、隣にはカリムさんの執務室や聖王執務室な

ど、教会の中樞が揃っている。

そこには数多くのスクール卒業生、本局の重鎮、クロノ局長、八神本部長、校長先生、フェイト提督、  
凄い人たちが揃っていた。

「今回の予言なんやけど……その……非常に言い難いんやけど……  
もしかしたらミッドチルダ滅亡に繋がるかも知れへん内容なんや」  
（はやて

管理局の幹部にも緊張が走る。

「まずは予言を読み上げて貰えませんか、まず詩文の方から、  
ついでヴィヴィオ様の予言もお願ひします。

その上で矛盾を埋めて内容を把握し、対策を立てるべきだと思いま  
す」バローロ

「その方が良いな、俺達スペシャルフォースは何があってもミッド  
を守り通してみせる」（ヴァロット

「スクールは全力を挙げて協力します」（なのは

「じゃあ読み上げるわよ?」（カリム

『盗み出された無限なる欲望は、盗賊の力を借りてやがて巨悪の姿  
をあぶり出す、

闇の底より無限なる欲望の力を欲した巨悪は、始まりの世界に復讐  
せんと欲す、

その為に古の都を呼びて世界を我が物に法の守護者を滅ぼさんと願  
い無限なる欲望を欲す。

しかし、無限なる欲望と巨悪の主は相容れず、袂を分かち交渉は決



裂するだろう。

闇の底より出し巨悪は、最後の手段に出るだろう。

央なる都を焼き尽くし、法の塔を倒さんとその生を持たぬ軍団を差し向ける。

都に及ぶ戦火はいくつもの悲劇を生み、涙に暮れる人々を生み出すだろう。

守護する者を縛るため、時に子供をさらい人質を取り、その命を要求する。

守るための鍵は盗賊が握っている』

「なんか随分長い詩文やなあ？」（はやて

「グイグイオ様の予言はどうなっていますか？」（バローロ

読み上げるわね？

『盗賊の手引きで無限の欲望（＝ジエイル・スカリエッティ）が脱走する。

ミッドチルダに復讐するため、地下に潜っていた巨悪はJ・Sの力を欲する。

アルハザードをこの世に呼び出し、管理局を滅ぼそうと企む。

しかし、交渉は決裂し、盗賊の力を借りたJ・Sはその巨悪を白日の下に晒すだろう？

それでも巨悪の主は、復讐を果たすためクラナガンを焼き尽くし、地上本部を落とすために、

機械兵器の軍団を差し向ける。そこで起きる戦火はいくつもの悲劇を生みだす。

それでも勝利を確実にするため、盾の守護者に手を出させないために、時に子供を誘拐し、

それを盾に彼の命を要求してくる。守るための鍵は盗賊が持ってい

る。

彼と協力出来るかが全てを逆転する事になる』

「流石にヴィヴィオ様、分かり易い」(ヴァロット)

「でもこの予言からしてスカリエッティの脱走さえ食い止めれば何とかなるんじゃないのか？」(クロノ)

「でも地下に潜っていた巨悪がクラナガンに攻めてくる事はもう決定済みやろうね？」(はやて)

「あゝこの予言って本当にそうなるんですか？」(ジョン)

「聖王様とカリムさんの予言は絶対なんだよ、今まで外した事がないんだ」(ヴァロット)

「だが、予言を阻止できたことは何度もある。

11年前は不覚にも犠牲者を防げなかったが、その後は全て阻止してきた。

ちゃんと防ぎ方からして書いてあるし、それ以外にも対策はいくらでも立てられる。

それに少なくとも予言の事が起きるのは半年後だ、

多分クラナガン決戦が半年後に迫っていると考えるのが妥当だろうな？」(バローロ)

「何故決戦が半年後だと思うの？スカリエッティの脱走が半年後かも知れないのに」(なのは)

「カリムさんの予言ですよ、スカリエッティの脱走は過去形になっている。

つまりもつと早い段階に脱走してしまっている事を表している。

対してそれ以外は未来形の文章だ。つまりこれから起こる事を差す。つまり、予言は大体半年後の事を差すから、

スカリエツティの脱走はこれから半年以内に起こるといふ事です」  
(バローロ)

「それだけや無いで、巨悪の正体についても言及されとる。

恐らく19年前のあの事件の残党や、あの事件の生き残りが首謀者や」(はやて)

「19年前の事件？」(クロスリード)

「そうや、あれは19年前管理局は三つに割れたんや、旧最高評議会派と穏健派、そして改革派に……」

それで評議会派がその権力欲しさに反乱を起こしてな、私が殲滅してもうたんや、

一人残らずぶつ殺したはずなんやけど、まだ生き残りがおつたんか？」(はやて)

「デスバレーって知ってるでしょ、あれやったの八神本部長なの、あの時、敵の殲滅の余波で山が一つ吹っ飛んじやって、

出来たクレーターに水が溜まってデスバレーって呼ばれる様になつたんだよ」(なのは)

「一撃であの地形を作り出したんですか？」(クロスリード)

「はっはっは、まだ本気やなかったんやで、

フルドライブもブラスターもせんでもあの威力やったから、  
って言うかあんな簡単に吹っ飛ぶとは思わなんだし」(はやて)

「まさかバーン・トスパ―提督じゃあ無いよね？  
あの人は死んだはずだけど……」(なのは)

「でも27年前の事もあるしなあ、  
キール准将みたく生き残つとる可能性は捨て切れんで？」(はやて)

「あのう僕は話しについていけないんですが、  
過去の事件についてももう少し説明して頂けると有り難いんですが…  
…」(クロスリード)

## 不吉な予言（後書き）

次回：語られる校長先生の過去、昔の事件、そして事件阻止に向けて動き出す。

## 忙しい秋（前書き）

こうして、非常に忙しい秋が過ぎていく。

そう、もうすぐ10月が終わろうとしている。

12月の頭にはミッドチルダシリーズ、年末からは世界選手権シリーズがある。

もう負けられない戦いが目の前に迫っていた。

## 忙しい秋

「……なるほど、過去にそんな事が……」（クロスリード）

私は驚いた。

校長先生は一度命を落としかけるほどの事をしていたなんて……  
そして管理局の中は未だに反乱を起こすかも知れない人が存在して  
いる可能性があるなんて……

校長先生は言う、だからスクールの卒業生が必要なのだと、真の正義を守り通すための力が、  
もう二度と悲劇を繰り返させないための力を管理局内に作り上げ、  
維持する事が大切なのだと語った。

そして私達はその為に必要な戦士なのだと教えられた。  
そう、スクールを卒業すればただ良い所へ就職出来るだけじゃあな  
かった。

スクールの卒業生はそう言う不正を食い止め、  
時にその悲劇を未然に防ぐためにその圧倒的な力を与えられた存在  
だった。

校長先生を目標に、それ以上の強さを目指すため何処までも強く、  
何処までも気高く、  
そして絶対に落ちないそんな人間を作り上げるためにスクールはあ  
るのだと教えられた。

「ああ、なのはの言うとおりだ。我々はもう二度とあのような悲劇  
を繰り返しては成らない」（クロノ）

「それに、俺は犯人達を許さないだろう？」

俺の子供に手を出すようなことをしたら皆殺しにしてやる。

考え得る限り最も残酷な方法で」(ヴァロット)

その瞬間強烈な殺気をまき散らすヴァロット一佐、会議室が凍り付く。

この人怖すぎ、それでなくても次元世界最強なのに、6月の事件でも化け物をたった一人で片付けてるし、

この人を怒らせてしまつて犯人達は大丈夫なのだろうか？

つて言うか死刑決定だよな？その場でいきなり死刑執行だろうか？

「とにかくだ、今後の警戒態勢を整えなければならない」(クロノ

「そうだな、我々SEALS は物資の流れから犯人を探る事にする。

ヴァロット、またウイルスを頼めるか？」(バローロ

「了解した。

それから俺達スペシャルフォースは要人の警護とクラナガン周辺のパトロールを強化する。

もし決戦が防げない様なら首都防衛隊及び航空防衛隊をスペシャルフォースの指揮下に置く、

指揮は俺が執る」(ヴァロット

「ラベルダは上空から戦闘支援を行う。クラナガンには手を出させん」(ネロ

「じゃあ、スクールは何をしましょう？」(クロスリード

「そうだな、まずは子供達の誘拐防止のためにパトロールの強化、万が一の時は市民の避難誘導、それと市街戦になれば兵士として戦つて貰う」(ヴァロット



「それに、小中学生の登下校時の見守りなどもやってくれと有り難い。

そう言う小さな積み重ねが大きな犯罪を芽の内につみ取れるんだ」  
(バローロ)

「クロス、お前は決戦に参加出来んかも知れん、就職して関係ない部隊になればそう言う事もある。早めに生徒会候補を決めて訓練に入れ、

充分にお前の代わりが出来るまでにしておけよ？」(ヴァロット)

「私も騎士団を率いてヴェルカ領内を守ります」(ヴィヴィオ)

「まあいずれにせよ、事件が起きるのは大分先の事だ。来週にも軌道拘置所の警備を強化しよう？」(クロノ)

こうしてその日の会議は終わった。

でもまさかいきなり聖王様に会えるなんて思わなかったし、まさかそれが校長先生の娘だなんて知らなかった。

今日あの会議に参加していたのは相当に凄い人たちばかりだった。でもクロスさんもジョンも凄いな、あれだけの人たちの前で物怖じせずに発言出来るなんて……

そして、スクールでは今回の会議内容は暫くの間他言無用とされ、職員会議の決定を待つ事になった。

その一方で、生徒会からとんでも無い発表があった。

「来週からインターミドルまでの期間、代表選手及び、補欠選手は合宿を行う。

泊まりは寮の空いている部屋、これから毎朝晩スペシャルフォー

の訓練に参加して、  
それぞれ強さの底上げを行う」

それだけじゃあなかった。

インターミドル開催本部からもとんでも無い発表があった。

「SSS級の強さを認められている者の内、魔力値SS未満の者については参加を認める。

なお、参加を認められるのは予選等に参加していなかったため、  
全員招待選手としてミッドチルダシリーズに招聘する」

これには裏があった。

大会スポンサーの一つ、バニングスグループからの圧力だった。

バニングスは、管理外世界にも開催権をよこす様に圧力を掛けてきた。  
た。

そう、地球かフォルスに開催権をよこせと言うのである。

とにかく優勝した世界に平等に開催権を渡す事、と言う条件を突き付けてきた。

スクールの生徒がいれば余裕などと思っていた事務局だったが、  
地球やフォルスの戦力内容を知って慌てた。

フォルスはこの7、8年メキメキと力を付けてきた世界、  
使うのは中国拳法、地球から何人も指導者が来て鍛え上げているらしい。

個人戦での優勝もたまにある。

そして地球、次元世界最強を誇る武術の世界、参加者がとんでも無く凄いらしい。

何でも、地球にいる御神一族、鳳凰武侠会（月花先生、陳先生が所

属している)の精鋭、  
ロムタイフンジム(アパチャイ・ポパチャイやアーガード・ジヤム・サイ、チャチャイ先生もこの出身)  
の精鋭、嘉手納道場(与那覇先生の出身)の精鋭、など考えられない強さの人たちが参加する。  
そう、始めから開催権を何処に持って行かれても良い様に、  
全ての世界にスポンサーとしてバニングスが入り込んでいた。  
そして、最も影響力の強い世界に開催権を持つてくる事で、売り上げを伸ばそうという企みだった。

開催権を取られたくないミッドチルダ事務局はレギュレーションの変更をしてきた。

少しでも強い選手を確保し、開催権を何処にも渡さないために……  
「ハア?そんな事しないでよ、今年こそ世界選手権に出られると思っただのに!」

お冠なのはプレオだったりする。  
そう、ついこの間都市選手権に優勝し、大陸選手権シリーズに駒を進めたばかりだった。  
因みにプレオのチーム4人とも大陸選手権シリーズに生き残っている。

今年のミッドチルダシリーズとんでも無い激戦になりそうだ。

更に生徒会から通達があった。

「各クラスかグループで学園祭の出し物を決めて今月中に生徒会まで報告せよ、  
使いたい場所、設備等は早い者勝ちとなる」

こうして、非常に忙しい秋が過ぎていく。  
そう、もうすぐ10月が終わろうとしている。

12月の頭にはミッドチルダシリーズ、年末からは世界選手権シリーズがある。

もう負けられない戦いが目の前に迫っていた。

「ねえ、学園祭の出し物どうしよう?」(リン)

クラスで話し合う。

「生徒会は伝統的に屋上レストランらしいよ?」(デュワーズ)

何かやらないと大変な事になる。

学園祭は強制的に全員参加なのだ。

「俺達1組は何をやるうか?」(ジョン)

「生徒会のレストランに対抗して屋台でも出そうか?」(バランタイン)

「お化け屋敷も良いかも知れんぞ? 校長先生に頼んで幽霊を調達して貰うとか?」

「それ怖すぎだろ?」

いろんな意見が飛び交っていた。

私達は体育館を借りてコントをやる事にした。

ネタはギャグ系の同人誌から頂く事になった。

それに山田さんがそう言う同人誌を大量供給してくれた。

お昼休みなどに練習をしつつ、学園祭を迎える事になる。

忙しい秋（後書き）

次回：いよいよ合宿が始まる。一方、スカリエツティが脱走、スクールも任務に出る事になる。

**神速！（前書き）**

「今ここで習っている者には神速を教える。どんな武術だろうと必要不可欠な技術だ。

神速が出来ればそれだけで相当強い敵にも対抗出来る。まずは覚える事だ」（ヴァロット）

神速！

「よく考えるとうちのクラス何の特技もない連中ばかり何だよな？」（ジョン）

「マリーは消える事が出来るけど？」（ツバキ）

「消えるだけじゃあ戦闘の時以外役に立たないし、もっと使える特技がないとダメだぜ」（ジョン）

そう、こう言う時一番使えるのは4組の連中だったりする。

アルケミックはただ鎖やワイヤーを作り出すだけの魔法じゃあない、いろんな素材を自分の好きな様に加工が出来る魔法だ。

例えば、コンクリート破片から真珠（真珠もコンクリも材質は炭酸カルシウム、分子構造が違うだけ）とか、

フッ素入り歯磨き粉＋アルミ缶＋水素「ルビー」（ルビーはフッ素とアルミニウムと水素の化合物）とか、

炭の塊を圧縮してダイヤモンドとか、金属ゴミの多くはいろんなアクセサリーに加工出来る。

「4組の連中はやっぱりアクセサリー屋をやるみたいよ？」（マリー）

「3組はティア先生直伝の幻術でお化け屋敷をやるらしい」（バランタイン）

「結局何の取り柄もない俺達は必然的に屋台だな？」（ジョン）

「って言うか何の取り柄もないって認めるのはイヤだ」（マリー）



と言う訳で学園祭の出し物は屋台村に決定した。

そして翌日からインターミドルに向けた合宿も始まった。しかし、その中に新たに出場出来ない選手が含まれていた。

「ヒビキ、残念だが君も出られない」(クロスリード

魔力値517万M、SS級にまで成長していたため、レギュレーションオーバーで出場禁止となってしまった。そしてバラントインが繰り上げで出場する事になった。

「くそう、俺とした事が調子に乗って魔力値を上げすぎた。まさかそんな事になっていようとは……」(ヒビキ

そう、俺達の魔力値が可笑しい事に気が付いた会長が測定をしてみた結果だった。

会長は、1243万、とうとうSSSになっていた。

まあそれでもあの部隊長と比べたら大したこと無いけど……、どおやらあの日食の時にかなりレベルアップしたみたいだ。もうこの学校じゃあ誰も敵わねーよ？

俺は251万、随分上がっていた。リンは278万、バラントイン241万、ブラントン282万

軒並みS級だった。

対して伸びていないのはマリーだったりする。

「私はこれで良いです。魔力が大きすぎると消えられなくなりますから？」(マリー

こうして朝4時起床、4時半から6時までスペシャルフォースと同等の訓練、

その後食事を摂って休憩という日程で合宿がスタートする。

そんなある日の事だった。先生達が青い顔をしている。管理局からの連絡だった。スカリエッツィが脱走した。

正確には気が付いた時にはスカリエッツィ一味が既に脱走していたという。

すぐに指揮官研修の20人は集められた。

生徒会、先生方も集まって話し合いが始まる。

「これ以上予言の通りにさせる事は出来ません、子供達の誘拐防止に全力を尽くします」(なのは)

「そうですね、まずは全生徒に事件の内容を伝え、実習時間を演習に当てましょう。」

それから子供達の通学・下校時にはそのガードに付くというのはどうでしょうか？」(クロスリード)

「そうですね、なるべく安全に配慮してそうするのは一番かもね？」(なのは)

そう、敵は子供を人質にヴァロット一佐の命を差し出す様に要求してくるはず、そんな事はさせる訳にはいかない。それに子供達を危険に晒す事は出来ない。

朝の訓練には参加出来る生徒は全て参加させる事となり、午後の実習時間は出来る限り演習、

そして子供達の下校時間はその見守り、夕方もまた訓練という超ハードスケジュールが始まった。

校長先生は生徒達を集めてこう言った。

「もし事件が起きれば11年前の悲劇が繰り返されます。しかも今度は何人も犠牲者が出るでしょう。」

そうならないために、より強く、確実に相手を倒せる様に成りなさい。

そして万が一の事もあります、今の内に事件が起きる前に、自分の伝えたい事を伝えたい人に必ず伝える様に」

そう、もしかしたら自分が死ぬかも知れない、もし生き残っても他の誰かが死ぬかも知れない。

だから死ぬ覚悟を決めて、自分の伝えたい事を伝えたい人に伝える事、

告白して付き合うのも、変わらぬ友情を誓い合うのも今の内にしておきなさいと言う事だった。

そしてヴァロット一佐は私達を強くするためにある決断を下した。

「今ここで習っている者には神速を教える。どんな武術だろうと必要不可欠な技術だ。」

神速が出来ればそれだけで相当強い敵にも対抗出来る。まずは覚える事だ」(ヴァロット)

ヴァロットさんはそう決定した。

御式内や御神流なら神速、中国拳法なら飛毛脚、示現流なら行、空手なら瞬歩という同じ技、

これが出来ればそれだけでほぼ無敵と言えるほどの強さを発揮する。大概の相手はこの速さには着いてこられずにやられてしまう。

ただ、地球の選手は大方この技を使いこなすので要注意だという。

「神速は簡単に身に付く物じゃあない、だからここを走って貰おう」  
なんとプールだった。

最初はコースロープの上を、最終的には水の上を走れという物だった。

「そんな、水の上なんて無理ですよ」

「やって出来ない事はないぞ？見ている」

ヴァロット先生は神速を発動する。

一瞬でプールの向こう側に立っていた。

後から水が爆発するみたいに巨大な水柱をあげる。

「まず、踏み出した右足が沈む前に左足を出す。

その左足が沈む前に右足を出す。その繰り返しをしているだけだ」

無茶だ、とんでもなく無茶だ。

この人は常識と言う物が通用するのだろうか？

それでも俺達は技の習得に向けて厳しい練習をする事になった。

神速の出来る2年生はこの練習から外れて、それぞれ奥義の伝授を受けている。

俺達とはかく神速を身に付けるしかなかった。

神速と言えば普通御神の剣の代名詞みたいに思うが、  
実際の所いろんな武術に同じ技があるらしかった。

俺達はサバイバルだった、とにかくまずはコースロープの上を、  
そして水面を走れる様に練習する。

誰が最初に物にするのか？そうやって競争しながら上を目指してい

く。

それから一週間、一番最初に神速を覚えたのはマリーだった。体が小さくて動きの素早いマリーにとってコツさえ掴んでしまえば容易い事だった。

その二日後にリンが、そしてその次の日は俺達が神速を身に付けた。そしてだんだんときつくなる練習、スペシャルフォー스では空手、示現流、ムエタイの使い手が居ないんで、指導は先生方をお願いする事となった。

こうして、インターミドルに向けてだんだんとレベルが上がっていく。

練習内容はとにかく基礎の繰り返し、そして時々新しい技を習うという感じだ。

先生方もヴァロットさんも口をそろえて同じ事を言う。

「とにかく基礎が大事なんだ」と……

そう膨大な量の基礎練習に培われた体はちょっとやそつとのことでは壊れない。

とにかく基礎とその応用の繰り返しで体に刻み込んで覚える。

それが校長先生の方針でもあり、武術の達人の練習方法でもあった。

神速！（後書き）

次回：誰が誰に告白するのか？複雑に入り乱れる恋模様？

次期生徒会長（前書き）

「本来ならこう言う事は2月に行く事なんだが……」（クロスリード）

生徒会長のクロスリードはそう切り出した。

「お前達5人の中から次の生徒会長、副会長を決める。これは最早決定事項だ」（クロスリード）

私達は耳を疑った。

まさか私達が生徒会になるなんて思いもしなかった。

## 次期生徒会長

「俺、リンに告白しようかな？」（ジョン）

「何いいいい、てめえ、リンの事狙ってやがったな？」（ジョン）

「お前もなのか？」（ジョン）

寮の一室は一気に険悪な空気に変わる。

「まあまあ、二人とも落ち着いて、ここでのケンカは不味いよ」「（バルンタイン）

もうお互いに一撃放つ体勢に入っている。

「告白する前に振られた時の事も考えておいた方が良くと思うよ？」（バルンタイン）

その一言に一気に自信を失う二人、そう、リンは誰が好きなのか？  
どんなタイプが好きなのかさえ分かっていない。

「お前さあ、何でそう萎える様な事言うかな？」（ジョン）

「確かに告白する事も大事だと思うよ、でも、その後生き残れなかったらリンはどうなる？」

もしリンが死んだらジョンだったらどうする？」（バルンタイン）

そう、あの予言は重すぎた。

大概の生徒はまだ命の重さ、人の想いの重さなんて分かっていない。



それが分かっているジョンだからこそ、今の内に付き合いっておきたいと思うのだ。

でもまだ相手の事を分かっていたいなかった。

もしかしたら自分が相手を不幸にしてしまうかも知れない、もしかしたら自分が不幸になるかも知れない。

人を思う事がこれほど過酷なのだと気が付いた時、それでも愛の告白をして付き合いたい、

出来れば自分の熱い思いを青春を燃やし尽くしたいと願うジョンだった。

「なんか夜になると居なくなる子多いね？」（リン）

「結構デートしてる子多いよ、あんな予言があったから、

この中の誰かが居なくなるかも知れないから」（マリ）

そう、合宿中でも夜はそここの時間に切り上げられる。

バイトしている生徒も多いから、そう言う事に気を使った日程になっている。

ただ、空いた夜の時間にデートしている生徒も多かったりしている。

「避妊だけはきちんとしておきなさいよ」

ソリス先生、キャロ先生、スー先生はそう生徒達を指導する。

妊娠して中退されても困る訳で、この辺が結構大変な事だったりする。

「リンは誰かと付き合い合わないの？」（マリ）

「私はどうもそう言うの苦手だな……」（リン）



生徒会室に集められたのは、  
ジョン、バラントイン、ブラントン、リン、マリーの5人だった。

目の前には生徒会の面々が揃っている。

「本来ならこう言う事は2月に行う事なんだが……」(クロスリード  
生徒会長のクロスリードはそう切り出した。

「お前達5人の中から次の生徒会長、副会長を決める。これは最早  
決定事項だ」(クロスリード

私達は耳を疑った。

まさか私達が生徒会になるなんて思いもしなかった。

「本来、毎年二月に次期生徒会長・副会長を指名して全てを引き継  
ぐ習わしなんだが、  
今回は特殊なんだ、あの予言は僕らが卒業してしまった後に起こる  
事だ。

卒業した後では手が出せない。新生生徒会ではいきなり起きる事件  
に対処する事は出来ないだろう？  
だから早めに次の生徒会を決めて、  
僕らが卒業するまでに事件に対応出来るまでに鍛え上げておく必要  
がある」(クロスリード

「生徒会を余り舐めない方が良い、本来スクールの指揮は校長先生  
が執る事になっているが、  
校長先生不在の場合、また作戦で戦力を割く場合、校長先生が指揮  
を執れない場合、

生徒会がスクールの指揮を執る事になる。全生徒の命を預かって作

戦を遂行する使命がある。

作戦に失敗すれば仲間が友人がその命を散らす事になる。責任が非常に重いんだ」(ヒビキ)

「あの写真、誰だか分かる？あの人があそこから見てるわよ、恥ずかしい真似は出来ないわ」(カティ)

「あの慰霊碑に何て刻んであるか知っているか？あの願いを守り通すためにお前達を鍛える事にしたんだ」(ラフロ)

俺達は責任の重さにいきなり押し潰されそうになった。そう、11年前の悲劇を二度と繰り返させないためにあの慰霊碑は建てられた。

そこにはヴァロットさんの願いと決意の言葉が彫られている。

『この慰霊碑に二度と英雄の名が刻まれ無い事を切に願う』

歴代の生徒会長は頑なにそれを守り通してきた。そして今俺達に引き継がれようとしている。俺達は指揮官研修に加えて、生徒会からも研修を受ける事になった。でもそのプレッシャーは半端な物じゃない。

「うっ、胃が痛い」(リン)

「泣き言言つなよ、会長達だってやって来た事なんだから……」(シヨン)

「しかし困ったよね、会長に選ばれたら責任重大だよ」(バランタイン)

「私は出来る事なら選ばれたくないです」（マリー）

そう、こうやって受け継がれるスクールの生徒会長、ヴァロットの決めた生徒会長継承のルール、そして与えられる途轍もなく重い権限、

それは一つの部隊の部隊長にも匹敵する。

そう、スクールという部隊を率いて戦場を駆け回るための絶対的権限、そして途轍もなく重い責任、320名もの命を預かるという重さ、生徒会長経験者は大概の場合、卒業後5年以内に部隊長や提督にまで出世している。

その重さを分かっているから、それだけの部隊を指揮させても大丈夫だから、  
そう言う人事を受ける事になる。

こうして11月中に次期生徒会長・副会長が決められる事になった。

私達5人に色恋沙汰などと言っている暇も余裕も有りはしなかった。

次期生徒会長（後書き）

次回：リン達の追っていた事件が更に別の事件と結び付いてくる。

## 新しいミッション（前書き）

それから数日経ったある日、私達は連絡を受けた。私達の追っていた違法銃火器及び麻薬密輸事件の裏が取れたとの事だった。

ここは108部隊ブリーフィングルーム、校長先生、ギンガ・ナカジマ部隊長、八神地上本部長、ヴァロット一佐、スクラティを始めとする108部隊の精鋭達、生徒会、指揮官研修の20人などが集められていた。

「事件の裏が取れました。地球における大きなテロリストグループや、マフィアが連合を組んでこちらと取引しているようです」（アオイ

## 新しいミッション

あれから数日、指揮官研修も、生徒会研修もきつさを増してきた。

「そつだ、指揮官が先頭に出る場合は、まず落とされぬ事が要求される。

もっと防御力を上げて敵の指揮官を落とす事を考える、自分が落とされれば自分の小隊その物が道連れになるんだぞ！」（ヴァロット

ヴァーチャルの味方と敵を相手に訓練場での戦闘訓練が続く、非常に厳しく、かつ効果的な指導がそれぞれの技量を上げていく。

「そつだ、センターやフルバックはもっと広い視野で戦場を見渡す事が要求されるんだ。

戦場全体を見渡していち早く危険を察知する事、それを的確に前衛に伝えること、

完璧なまでの援護射撃やガードで部隊その物を守る事、それが後衛の仕事だ。

敵に後ろを取られるな！防衛ラインを下げさせるな！

先頭に的確に作戦を伝えるのも司令塔の仕事だ！」（ヴァロット

全員ボロボロになりながらも教えられた事が出来る様に何度も何度も練習を重ねる。

出来なければ大切な命が失われる。

もし、一人死なせればその家族や恋人など多くの人を不幸にしてしまふ。

その責任の重さは半端なものではなかった。



「流石はヴァロット君ね、みんなもの凄く伸びてるわ、指揮も非常に上手くなってるし、それぞれ自分の特性にあった指揮をし始めている。これなら充分に小隊長として使える様になるわね？」（なのは

様子を見に来ている校長先生も非常に嬉しそうだ。

今回の予言、この子達の伸びいかんでは全てひっくり返せるかも知れない。

なのはは、この生徒達の成長に頼もしい手応えを感じていた。

「ええ、もう充分に小隊長クラスなら通用するでしょう、でも彼らは、彼らの実力はこんな物じゃあない、鍛えれば鍛えるだけ伸びていきます。」

将来はクロノ局長クラスの出来る人になりますよ、

だから今の内に鍛えられるだけ鍛えておかないと……」（ヴァロット

「流石はヴァロットだな、シグナムは教えるのが思ったより下手だったからな？」（ヴィータ

「まあ、人には得手不得手がありますからね、でもこの指揮官研修に選ばれた子達は違いますよ、指揮官としての素質はずば抜けています。きっと将来良い指揮官に育ってくれますよ？」（ヴァロット

「ああ、期待の教え子達だ。キャラロが言った様にもっときつく鍛えても平気だろうな？」

今年の1年生は本当によく伸びる。何処の部隊も期待が大きいだろうな？」（ヴィータ

教頭先生も期待の眼差しで練習を眺めていた。

「伸び代で言えば、ジョン、リン、バラントイン、ブランドン、マリーの5人は特に大きい、

流石クロスが奴が選んだだけの事はある。次期生徒会候補だと言っていた意味がよく分かるよ」(ヴァロット)

「へえ、あのスケベがねえ？」(ヴィータ)

「今の内にあの覗き癖さえも全て矯正してしまおうと思います。

そうすればきつと理想の生徒会長になるでしょう」(ヴァロット)

もうヴァロットの中では次期生徒会のメンバーは決まっている様だった。

この指揮官研修を受けているメンバーの中から必ず生徒会役員が決まる。

そして会長候補は既にジョンだと決められていた。

「ジョンを会長に指名する、

本人に言い渡すのは今月末になるけれどこの決定で行こうと思う」

(クロスリード)

「やっぱりそうなるか？」(ヒビキ)

「書記、会計、庶務が一人ずつ空席だけど、それは彼らに決めさせるって事ね？」(カティ)

「そう言う事、少しは彼らに自主性を持たせてあげないとね？」(クロスリード)

「まあ、彼らに全てを託すんだから、彼らもそれなりの事を考える

んだらうけど、

本当にあいつで大丈夫なのかよ？俺はちょっと不安だな、あいつ頭悪そうだし」(アード

「そう思うか？それは表面的な事だ。

このデータを見てみる、これは指揮官研修の時の彼らの回答だが、飛び抜けて凄いのはジョンだ。僕でもこんな事は考え付かないよ？」(クロスリード

「なんかこれを見るとガチガチに堅いのはリンだな？一番頭が固いかも知れん」(ヒビキ

「君がそれを言うか？この生徒会の中でも一番の堅物が……

兄妹血は争えないって事だと思つてたんだが？」(クロスリード

もう次期生徒会はその大部分が決定されていた。

それから数日経ったある日、私達は連絡を受けた。

私達の追っていた違法銃火器及び麻薬密輸事件の裏が取れたとの事だった。

ここは108部隊ブリーフィングルーム、校長先生、ギンガ・ナカジマ部隊長、八神地上本部長、ヴァロット一佐、スクラティを始めとする108部隊の精鋭達、生徒会、指揮官研修の20人などが集められていた。

「事件の裏が取れました。地球における大きなテロリストグループや、

マフィアが連合を組んでこちらと取引しているようです」(アオイ

「で？そのマフィアやテロリストグループとは？」（はやて

「南米はチリのセンデ・ロ・ミノツソ、ここは主に麻薬の生産を行っている、

コカインの製造が大きいです。それに組織が大きくて隣国のブラジル、

アルゼンチンまで支配下に置いています。この3国の軍隊を持ってしても壊滅は不能でしょう。

次に、アメリカはサンディエゴのファントム、組織としてはアメリカ国内だけですが、

CIAと結び付いてとても壊滅は不能でしょう？

それから中東のアルカイダ、テロリストグループです。

主にマネーロンダリングをやっているようです」（アオイ

「なるほどなあ、マネーロンダリングして活動資金を得とる訳やな？」（はやて

「はい、昔から有名なテロリストグループらしいですね？」（アオイ

「私らが地球で暮らしとる頃から大きな事件を起こしとるやばい連中や、

しかもアメリカ軍を投入しても勝つ事が出来んかった程強い軍事力をもつとる。

ちよつと手出しはできんで？」（はやて

「今名前の拳がった三つは上手く殲滅出来ないの、

主要メンバーを暗殺して内部抗争に見せかけ、

組織の弱体化を図る方向で話が付いています。

実行は月村警備保障、バニングス警備、次元航行隊の現地駐在員になる予定です。

それから、次に上げる五つの組はそんなに規模も大きくないし逮捕も殲滅も可能な事から現地の警察やバニングスグループの協力を得て組織の壊滅に乗り出します」(アオイ)

「残り五つとは？」(はやて)

「香港の裏黒社会<sup>ハイセイウ</sup>、中国は福建省の蛇頭の二つ蛇蝎、日本は東京の梧桐組、

イタリアのアルフェーノ一家、ロシアのイズマイロフです。

このうち、中国、ロシア、イタリアは現地の政府や軍隊の協力も得られません、

やはり、マフィアとの結びつきが強いようです」(アオイ)

「昔は簡単に組とか潰せたんだけどね、最近は組織の大型化と巧妙化が進んでいるし、

政府との癒着が強いよね？簡単には殲滅出来ないし」(なのは)

「校長先生殲滅何てした事有るんですか？」(ジョン)

「建物ごとバスターでドカン」(なのは)

「とにかく、イタリアとロシアに関しては、

バニングス警備と月村警備保障の特別チームが近々殲滅作戦を行うそうです」(アオイ)

「じゃあ私達は何をすれば良いんですか？」(リン)

「我々は、比較的現地の警察の協力を得やすい日本と香港のマフィアを壊滅します。」

余裕があれば、中国のマフィアも殲滅対象にします。

それから、このマフィア達を取り纏めているのは日本の梧桐組、そしてこちらの代表者が誰か分かりませんが、

密輸物資の輸送を行って利益を上げている組織があるみたいです」

（アオイ

「そうすると、作戦までにごっちの組織の流通ルートの壊滅と、組織の殲滅もせなあかな？」（はやて

「そうですね、まずはガリーグ一家の若頭から全てを聞き出さない事には話にならないんですが、

そう簡単には心さえ読ませて貰えません、

かなり警戒されてしまって、そう言う事を考えない様になっていますね」（アオイ

「だったら、ちょっと非合法な手段を使うまでや、そいつの脳みそに直接聞いてみるだけや」（はやて

「本部長また随分物騒な……」（クロスリード

「大丈夫や、殺さずにそう言う事の出来る人が居るから……任せと  
きい」（はやて

「じゃあ、全ての段取りが付いたら次の会議だな？」

その後の作戦は指揮官研修の連中を参加させる」（ヴァロット

## 新しいミッション(後書き)

次回：リンを巡って、ジョンとジョニーの第2ラウンドが始まる。  
そしてシゲナムに天敵出現

## シグナムの天敵（前書き）

「そおやな、 ロツサ、 今夜はちょっと飲みに行ってくるわ」

はやてはシグナムを伴ってバーへやって来た。

ここはクラナガン東線地上本部前駅の駅裏にあるオカマバージェリーフィッシュだ。



## シグナムの天敵

「学園祭の後にリンに告白する!」(ジヨン)

「てめえ、ちよっと指揮官研修で同じだからって調子こいてんじゃねえぞ!」(ジヨニー)

またケンカを始める二人、それを止めるのはブラントンとバラнтаインの役目だったりする。

「まあ二人ともケンカは良くないよ、いっそのこと二人で告白してみたら?」

どちらか一人は振られる訳だし、若しくは仲良く撃沈かもね?」(バラнтаイン)

その言葉で萎えてしまう二人、意外とシャイだったりする。

「どうしたらリンの心の中を知る事が出来るんだ?」

「水鏡覚えたら?」(バラнтаイン)

「水鏡?」(ジヨン)

「そう、水鏡、御式内の奥義の一つで相手の心を読む技だから」(バラнтаイン)

「バラнтаインは出来るのか?」(ジヨニー)

「まだ出来ないよ?あれは相当な練習が必要だし、

覚えられずに卒業する先輩も居るぐらいだ。  
難易度は相当高いよ？それに示現流にも同じ奥義があるらしい」「  
（バルンタイン）

「なに？そんな事されたら俺達嫌われるだろうが！」「（ジョン）  
心を読めるというのは相当厄介だ。

「まだリンは出来ないと思うけど、  
素質の塊みたいな子だからその内に出来るようになると思うよ？」  
（バルンタイン）

「告白するなら今の内って事か？」（ジョニー）

「でもリンはどんなタイプが好きなんだろう？」（ジョン）

「デュワーズに聞いてみたら？彼女はリンと仲が良いし、よく一緒に喋っているから」（ブランドン）

と言う訳で、デュワーズに聞きに来た。

「あ、あんたらじゃあ無理、あの子は先天的に百合だから、  
男に何て興味を示さないよ、それにしてもリンはモテるね？  
あんたらで18人目だよ」（デュワーズ）

その言葉に撃沈したジョンとジョニー、その上更に難敵が現れる。

「ほう、俺の妹に手を出そうとは良い度胸だ。

俺が直々に首を刎ねてやる！ちえすとおおおおおおおおおお

おー！」「（ヒビキ）

そうこの人としても無いシスコンだった。

リンに言い寄ろうとすればまずこの人が妨害にはいる。  
その上いきなり斬り付けてくるし、危ないだろうあの人は？

リンは可愛いんだけど、あの兄がねえ、とんでも無い人だよ。

それ以降俺達はヒビキさんに目を付けられるようになった。  
おまけにライバルは18人以上いる。

「やっぱり誰かに乗り換えよっかな？」（ジョン）

などと弱気な言葉が出てしまう。

それでも容赦なく過ぎていく時間、学園祭はもうすぐそこまで迫っていた。

クラスの中でも、屋台の骨組みが生まれ、鉄板やらコンロやらが散乱している状態。

結構大変な事になっている。

その頃地上本部、八神本部長は非常に悩んでいた。

あの予言の一つ一つが徐々に当たり始めている。

最悪クラナガンが火の海となり、数多くの悲劇が生まれる。

それだけは何としても阻止しなければならぬ、

その為に何処かの泥棒と手を組まなければならない。

その泥棒とは誰か？接触出来るのか？それ以前に誰なのか？

考えれば考えるほど段々と深みに嵌っていく。

「せめてもう少し情報があったら……」

そう言う言葉が出てしまう。

流石の狸も余りの情報不足と、手の打ちよつの無さから困り果てていた。

「はやて、こう言う時は息抜きも必要だよ、まだ予言までは十分な時間もある。」

焦ったって仕方ないよ、こう言う時は情報が入ってくるのを気長に待つしかない」(ヴェロツサ

「そおやな、ロツサ、今夜はちょっと飲みに行ってくるわ」

はやてはシグナムを伴ってバーへやって来た。

ここはクラナガン東線地上本部前駅の駅裏にあるオカマバージェリーフィツシュだ。

シグナムはどうにかしてここから逃げ出したかった。

シグナムの美的感覚はこの手のキャラを受け付けられない。

目の前にはどう見ても2m近くある金髪ショートボブヘアのオカマ、筋肉隆々で髭の剃り跡が青い！やたらと濃い顔立ちのオカマがしなりしなりと近付いてくる。

「よ、寄るな！触るな！近付くな！」

いきなりレバンティンを抜いた彼女は怯えながら叫ぶ、

どうにもこの手のキャラはダメらしい。

「シグナムだめやよ、ママに失礼やんか？」(はやて

「あら〜このひと私の事が分からないのかしら〜わすれちゃったの

〜?」(ママ

しゃべりはあのパプワくんのキモいでんでん虫だ。  
どうにも受け付けられない、でもなんだか聞いた事のある声、随分昔に聞いた事があるような……

「本当に忘れてもうたみたいやな？まあ仕方あらへんか？30年近く昔のことやしなあ？」（はやて

「へ？30年近く前？」（シグナム

まだ思い出せないようだ。

「いい加減思い出したらどうだ？」（ママ

いきなりドスの利いた低い声に変わった。

でもこのやたらと濃い顔、隆々の筋肉、何処かで見た事が……

「あ~~~~~つつ、もしかして！首都防衛隊の4番隊隊長だった……誰だっけ？」（シグナム

ママがズドつとこける。

「シグナム、ナイスボケや」（はやて

「思い出した、豪雷のライオネル！」（シグナム

そう、ママの正体はライオネルだった。

彼は恭也に負けて以降、武装隊を辞め職を転々とし、そして何時しかこの場末のバーでママをやっていたりする。

まさか、あの時SSSの第3席と言われたライオネルがここまで

落ちていようとは思わなかった。  
でもどうしてもその見た目は受け入れられない。  
キモイ物はキモイのだ。

「あら〜もつとんだけ〜」

と言いつつ近付いてくるオカマがもう一人、刈り上げショートヘアのやや細身のオカマだ。

シャルルマーニュさんと言うらしい。この人も武装隊を辞めた口だった。

でもしゃべりはパプワくんのあのキモイ鯛だ、脚の生えたあのキモイ鯛、  
網タイツを穿いたあのキモイ鯛だ。

結局、はやての隣にキャサリンママが、シグナムの隣にシャルルマーニュさんが付いて飲み始めた。

「シグナム、ここやったら局のどんな秘密を喋ったって平気や、情報交換をするには最適の場所やで？」（はやて

そう、ここはライオネルのやっているバーだ、少々不味い事を喋ったとしても秘密にして貰えるし、  
犯罪者の情報も集まりやすい、そんな場所だったりする。

それにライオネルは元々改革派に近い人間で、評議会派を目の敵にしていた事もよく知られている。  
割と信用のおける口の堅い人だった。

「……………でママはどつ思つん？」

「JS事件の頃にはクラナガンを離れてたし〜」

それでもあれと同じ都市型テロを計画するんなら〜  
管理局のお〜目の届き難い所で準備をするんじゃないかしら〜」  
ママ

「このミッドチルダで管理局の目の届きにくい所か……  
ありがとうな、参考になったわあ」(はやて

と話している時だった。シャルルマーニュは悪戯を思い付いた。  
シグナムの耳にそつと息を吹きかけてみる。

「いやあああああああ！やめろおおおおお！この生物お  
おおおおお！」(シグナム

そう叫びながらレバンティンを振り回すシグナム、  
そのレバンティンを器用に避けながら逃げ回るシャルルマーニュ、  
かなりの実力を持っている。

「しかし今日は収穫やったわあ、シグナムがここまで取り乱す姿な  
んて始めて見たわあ」(はやて

どうもこの二人はシグナムの天敵らしい。

シグナムの天敵（後書き）

次回：いよいよ始まる学園祭



学園祭（前書き）

「えっ、ジヨンが生徒会長？」（マリー）

「ああ、多分リンとマリーのどちらかが副会長に選ばれるだろう？」  
（ジヨン）

私達も驚いた。

まさか私達のどちらかが副会長なんて……

「でもさ、まだ先の事なんだよね？まだ3月までは時間があるんだし、  
今を楽しもう？みんな生きてる今を！」（リン）

## 学園祭

11月20日夕方。

「おい、野菜揃ってるか？」

「OKだよ！」

「焼きそばの麺は？」

「買ってある〜」

それぞれに学園祭の準備が始まる。

この学園祭のあとは3月の終わりか4月の頭には、この中の何人かが死ぬかも知れない事件が起ころうとしている。だから、この学園祭を出来る限り盛り上げよう、

今の内に楽しんでおこうという考えは誰にも浸透した。

今を生きている事を楽しんでおこうという考えは誰もが同じだった。

学園祭が終われば死ぬ覚悟を決めてのキツイ演習が始まる。

生き残る為に、誰も死なせない為に、もつと強くなる。

生徒達誰もがそんな思いを胸に学園祭の準備をする。

「2期生の人たちもこんな思いをしてたんだね？」（リン

その言葉に思わず泣いてしまったデュワーズ、でもそれが突き付けられた現実だった。

「うん、分かってる。でもきつと生き残ってみせる。

クラナガンの誰一人死なせたりしない」（デュワーズ

そうやって祭りの前夜は過ぎていった。

それが俺達の祭りにエネルギーを与えてくれる原動力になった。

そして11月21日、学園祭が始まった。

1-1は教室で屋台村をやっている。

焼きそばに、イカ焼き、おでん、クレープ、焼き鳥、綿菓子、そして飲み物の販売、

まあ、それなりに儲けの有りそうな屋台だったりする。

屋台は全部で7つ、交替で屋台を担当し、それ以外は他の教室の出し物を見て回る。

一番のライバルは生徒会の屋上レストランだ。

ヴァロットさんが始めたという、その屋上レストランは生徒会に受け継がれ、

そして今年も盛況のようだ。

それにここは仕入れに余り金が掛かっていない。

何せ林間学校の時に食材を充分に保管しているのだ。

メインはサンドワームのステーキ、付け合わせに僅かの野菜とフルーツである。

大人にはワインとビールも販売している。

流石に収益率が違う、費用対効果の大きい出し物だった。

リン達は体育館でコント、そしてその後に初日のみだが伝説のバンドがゲストで登場する。

そう、あのフォールスを救った伝説のバンドが1日限りの復活公演を行う。

それを楽しみに来ている人も多いほどだ。

「私も昔はけっこう曲を出してたんだけどな？あの子達には敵わな

いよ」「なのは

校長先生、昔は仕事の片手間に芸能活動をしていたらしい。  
11時、バンドの演奏が始まると脚は一気に体育館へ、俺達も行ってみる。

「うおおおおおおおおお、凄げえ！」

それは超大迫力で感動ものの演奏だった。

みんなの気持が一つに成るってこう言う事を言っただろうな？

それにこの人たち第2期生の人たちばかり、一番出世しているバロ  
ー口さんは、

次元航行隊の提督だし、人としての器が違う。

俺達の先輩はみんな凄い人たちばかりだ。

(俺は何時になったら先輩達に追い付けるのだろうか？)(ジョーン

ふとそんな事を思った。

その瞬間だった、後ろに大きな気配、会長だった。

転移で様子を見に来たらしい。

「凄いな、流石にバロー口さんのバンドは？奇跡を起こしたただけの  
事はある」(クロスリード

そう、戦争中だったフォルス戦争を終わらせ、

世界の有り様を変えてしまった奇跡のバンドは今もまだ健在だった。

「ジョーン、お前に言っておく事がある。

本当はもう少し先にしようと思ったんだが、次の生徒会長はお前だ。  
お前なら出来るだろう？お前が先頭に立ってみんなを引っ張るんだ。

そして誰も死なせるなよ？それが生徒会長の仕事だ。みんなの笑顔を守り抜いてくれ。

お前なら出来るさ、お前はこの先ももっと強くなれる、強くなつてこの学園に恥じない生徒会長になれば良いんだ、頼んだぞ？」（クロスリード）

クロスリードはジョンの肩をぽんと叩くと転移していった。ジョンはその場に立ちつくす、有る程度は覚悟していた事、でも実際にそれを言い渡された時、その責任の重さに押し潰されそうになる。

怖かった、途轍もなく怖かった。

もし予言が本当になれば、この中の何人かは犠牲になる。

それを防ぐには自分が戦闘で全てを打ち倒す以外にないと思った。

「もっと強く成れ」は「もっと強くなる」に変わっていた。

そしてジョンはこの日を境に最強を目指して歩き始めた。

バンドの演奏が終わるとお昼だった。

屋上レストランは地獄のような忙しさだ。

「ヴァロットさんはこの人数をよく捌けたな？」（クロスリード）

「やっぱあの人は超人だよ？」（ヒビキ）

こうして、学園祭は何事もなく終わっていった。

最後のダンスパーティー、体育館はディスコ状態だった。

そんな中で一人難しい顔をしているのはジョンだった。

「どつしたのジョン？」（マリー）

「いや、何でもないんだ」(ジョン)

「何でもないはず無いよ、何でそんなに深刻そうな顔をしてるの？」  
(マリー)

「どうしたのよ？」(リン)

「実は……会長から次期会長を言い渡された」(ジョン)

ジョンはこの二日間、悩みに悩んだ。

どうやったらみんなを守れるのか？どうやったら誰も死なせずに自分も生き残れるのか？

絶対に負けない為の強さとは？ずっとそれを考えてきた。でも答えの出る物じゃあなかった。

「えっ、ジョンが生徒会長？」(マリー)

「ああ、多分リンとマリーのどちらかが副会長に選ばれるだろう？」  
(ジョン)

私達も驚いた。

まさか私達のどちらかが副会長なんて……

「でもさ、まだ先の事なんだよね？まだ3月までは時間があるんだし、  
今を楽しも？みんな生きてる今を！」(リン)

俺はリンの言葉に少しだけ救われた気がした。

今は色恋沙汰何てやっている時じゃあない、でも、今生きている事を楽しまないでどうする？

もう二度と帰ってこないこの時間、楽しまなかったら一生後悔する  
だろう？

「よし、踊ろうぜ！もう二度と帰ってこない青春なんだ、楽しまな  
いと罰が当たる！」

そして誰よりも弾けまくった3人だった。

## 学園祭（後書き）

次回：その頃翠屋に招かれざる客がやってきた。



## 招かれざる客（前書き）

そう、この人達、次元世界の秘密を嗅ぎ付けてここまでやって来たのだ。

「一体どう言う風の吹き回しだ。」

中にはもう八門派の付き合いから断絶したのも居るんだが」（土郎

## 招かれざる客

「何でお前らがここに揃ってるんだよ？」（士郎

ジョン達が学園祭で弾けていた頃、翠屋に7人の招かれざる客が来た。

永全不動八門派の人たちである。

「夏織さんに聞いたし」

「御神の里に行ってみたら誰もいなくなってるし」

「まさかこんな世界があるとは思わなかったし」

そう、この人達、次元世界の秘密を嗅ぎ付けてここまでやって来たのだ。

「一体どう言う風の吹き回しだ。

中にはもう八門派の付き合いから断絶したのも居るんだが」（士郎

璃浄葬禍流りじやうさうかりゅうと峰牙碎皇流ほうがさいおうりゅうは、

嘗て高町家といざござを起こし、流血の事態を引き起こし、八門派の付き合いから破門されたりしている。

「あ、あれは兄が勝手にやった事で流派には関係有りません、それに峰牙碎皇流ほうがさいおうりゅうはもう御神真刀流に対して絶対に牙を剥いたりしません」

謝っているのは、峰牙碎皇流ほうがさいおうりゅうの当主、峰牙鷲邇ほうがしゆいで有る。

嘗て、兄の峰牙師鷹は恭也との戦いの末に破れている。  
そしてこの時のいざごさから、峰牙碎皇流は八門派から破門されて  
いた。

それと璃浄葬禍流は、

「その存在の善悪に関係なく、常ならざるもの、世の理に服まわぬも  
のを許さず」

と言う教義に基づいて活動している為、色々と問題を起こす事が多  
く、他の流派からも嫌われていた。

それに「常ならざるもの」である月村家やなのはの命を狙った事す  
ら有る。

まあ、その度に士郎や恭也に撃退されていたのだが……  
そう言う経緯でやはり破門されていた流派だったりする。

「いや、その、だから、一族の教義は取り下げるから許して欲しい  
んだ」

璃浄葬禍流の当主、葬禍一正はは頭を下げた。

「所でお前ら何の目的があつてここに来たんだ？」（士郎？

「後継者が居ない！」

全員口をそろえてそう言った。

そう、少子高齢化の影響はこんな所まで広がっていた。

もう日本では古武術をやるうなんて奇特な人間は殆ど居ない。

それにも増してこれらの流派は非常に修行が厳しい、

その修行が嫌で逃げ出してしまふ者ばかりだ。

とてもじゃあ無いが跡を継がせられる人間が育っていなかった。

彼らは御神の一族を捜し始め、夏織と接触する事に成功した。そこで聞き出した事はとても信じられる事ではなかった。それでも事実を確かめるべく、ここまでやって来た。

「御神は良いよな？いつの間にかここまで一族は増えてるし、地球はおるか次元世界の殆どまで手に入れたような物だから？」

そう、情報収集のプロである将麒麟軍流しょうききはぐんりゅうと宇界幻翔流うかいげんしょうりゅうが組めば、士郎の企みなどお見通しだった。

そう、士郎は一族中から婿や嫁を有力な財閥や政治家、権力者に嫁がせたり、

そう言う所から婿や嫁を取って一族に加える事で、御神一族による全ての世界の実行支配を企んでいたりする。

そう、月村家には恭也が、ハラオウン家に静音を嫁がせ、ハラオウン家からリエラを嫁に貰う事になっている。

因みに、アリサの所に婿養子をやったのも鈴香の婿養子も全て御神一族だったりする。

もう既に御神一族の全世界実行支配はほぼ成っていた。後はその絆を何処まで強くできるか？が課題だったりする。

「お前ら、ちったあ自分で努力しろ！」（士郎）

士郎の雷が落ちる。

「努力はしたけどさ、もう日本の若者でそこまで根性のある奴に出会えなかったし、

海外じゃあ見向きもして貰えないし、だからいつそこの事こっちの世界に期待して此処まで来たんだ！」

そう、彼らはミッドチルダに進出して一族を獲得しようという魂

胆だった。

そして、出来る事ならもう一度永全不動八門の付き合いを取り戻したいと願うのだった。

「分かった、一度一族会議に掛ける。お前らも出席しろ、場所は御神道場だ。」

説明しなくてもお前らなら分かるだろう?」(土郎

「お父さん、これはどう言う事?」

翌日の事だった。

土日学園祭だった為なのは休みだったのだが、土郎に呼び出された。

そこには、恭也、美由希、はやて、ヴァロット、アステイ、ピノ、ロサード、スクラティ、など

嘗ての土郎の教え子達も集められていた。

「おじさんこれはどう言う事なんや?」

「実はな、以前の御神のようにこいつらみんな滅亡寸前の一族なんだよ」

「俺なんか一族の最後の一人なんだ、俺が死んだら峰牙碎皇流は滅亡しまう!」

なんかもの凄く深刻な話になっている。

「その前に永全不動八門て何や?御神以外に御式内を使う一族があるんか?」(はやて

「まずは永全不動八門について詳しい歴史を教えてやらんといかな？」（土郎）

土郎は話し始めた。

「今からおよそ500年ちょっと前、地球の日本という国は激しい戦乱の世の中だった。

その中でも特に強い勢力を誇った武田家と上杉家、

この二つの家には最強と讃えられる武術が伝えられていた。

武田家には御式内が、上杉家には九禅百式があった。

どちらも最強と謳われた武術、それを使いこなす者は一騎当千の強さだったという。

だが武田信玄は病死し、その後武田家は戦に敗れ滅亡した。

でも、武田信玄の7男 武田国継は上杉家に保護される事となった。その上杉家に御式内を伝えたのが武田国継だ。

そして、九禅百式と御式内は出会い溶け合い一つになった。

九禅百式と御式内の全てを身に付けた者が居たんだ。

彼はその武術を永全不動流と名付けたんだ。

でも、元々の九禅百式も御式内もその教えの全ては膨大な物だった。

剣術、槍術、杖術、馬術、暗器術、弓術、鉄砲術、組討術、合気柔術、忍術、

礼儀作法や退魔術まで内包していたんだ。

その全てを受け継げる人間はその後誰もいなかった。

だから彼はその教えを8人の弟子に分散して教えた。

それ故、その教えを受け継いだ8人の流派を永全不動八門と呼ぶ。

御神真刀流、不破裏天流、九角閃槍流、峰牙碎皇流、総摩貫鳴流、  
璃浄葬禍流、宇界幻翔流、将麒破軍流の8つの流派のことだ」（土郎）

「不破裏天流って、お父さん前は不破性だったよね？」（なのは）

「ああ、元々御神不破家は、不破裏天流から来て居るんだ。永全不動八門はその絆を絶やさぬため、それぞれに嫁を取ったり婿を出したりしてずっと親戚関係にあったんだ。

その内の不破裏天流から御神家に婿養子を取ったものの、何人か子供が出来てからこの婿殿が離婚してしまうという事が起きたんだ。

そして御神不破一族が誕生した。

御神の剣の中に暗器術があるのは不破裏天流から伝えられた為なんだ」（土郎）

「じゃあこの人達はみんな遠い親戚なんだ？」（なのは）

「そう言う事になる」（土郎）

「おいおい、俺は結構近い親戚だぞ？」（不破馨蔭ふわよしかけ）

不破裏天流当主、不破馨蔭（49）は御神不破家から不破裏天流に養子に出された人だったりする。

実は土郎とも結構近い親戚だったりする。

現在、妻（48）と息子（24）が居る。親子揃って政府の裏仕事を引き受けていたりするが、

政権が代わって以降仕事が始ど無く、生活に困窮している。

ミッドへは息子の嫁を探しに来ていたりする。

招かれざる客（後書き）

次回：それぞれの流派の説明



## スクール拡充計画（前書き）

「九角流は結構弟子が居たんじゃないのか？」（土郎）

「あの震災でみんな何処かにいつちまったよ、おまけに酷い不景気でまともに仕事もありゃしない、せめて娘に婿を迎えて跡を継がせたいんだが、その婿のあてさえありゃしない」

地球の経済事情は悪化の一途を辿っているようだ。

## スクール拡充計画

「ふうくん？じゃあ元々の不破家は不破裏天流なんだね？」（なのは

「そうだ、そしてその不破裏天流は暗殺術を主体とする武術だ。

素手による暗殺と暗器に特化している」（土郎

そして土郎からそれぞれの流派の特徴を説明される。

うかいげんしょうりゅう  
宇界幻翔流

永全不動八門の内一派（忍術）

上杉家の子飼いの忍者集団「軒猿」の末裔、

御式内をベースとした忍術を使う。

素手での格闘戦に特化している。

霞み技を得意とする。

みかみりゅう  
御神流

永全不動八門の内一派。

正しくは「永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術」。

現在は小太刀二刀を主に扱うが、元は太刀を主体とする流派だった。

御式内一刀剣、御式内二刀剣、御式内杖術、合気柔術を主体とする。

不破裏天流、と合わさったものが、現在の御神流となっている。

他に小野派一刀流と直心影流、鏡新明智流の技法を取り入れ二刀小太刀として

現在のスタイルを確立している。

くすみせんそうりゅう  
九角閃槍流

永全不動八門の内一派。  
槍を主体とする戦い方をし、得物は主に長さ3m前後の直槍すやじを扱  
う。

槍術、杖術、合気柔術を伝えている。

今では一般にも門戸を開き、その技を教えている。

が、やはりその秘伝とも言つべき技だけは、九角宗家が脈々と受け継いでおり、

未だその牙は決して失われてはいない。

### 不破裏天流ふわりてんりゅう

永全不動八門の内一派。（無手による暗殺術）

ただひたすらに“人を殺す”ことを目的としてその技術を磨いてきた流派。

それ故、彼らが使う技術は戦闘術ではなく殺人術、より正確に言うならば暗殺術に近い。

“如何に効率よく人間を殺すか”を突き詰めただけあって対人戦闘においては類を見ないほどに凶悪。

御式内の殺法を主体とするほか、暗器も得意とする。

### 峰牙碎皇流ほうがさいおうりゅう

永全不動八門の内一派。（素手による格闘術・気功を使う）

武器に頼らず、ただひたすらに極限まで鍛え上げた肉体のみを以って戦う。

合気柔術、九禅百式の組み討ち術を主体にしている。

ただ、彼らの技は戦闘を主眼としておらず、

自身の一撃の威力を高めることを目的としている。

その一撃の目指す究極が、“天を貫き、海を裂き、地を割る”ことだというのだから、

何とも無茶苦茶な話である。とにかくでたらめに強い。

総摩貫鳴流そうまかんめいりゅう

永全不動八門の内の一派。(弓術・鉄砲)

弓での戦い方を極めた流派であったが、鉄砲の伝来によりその力を發揮できる場を次第に奪われ、いつしか時代の中に埋もれていったと言われている。

その後、火縄銃による狙撃術を取り入れ、現在はあらゆる飛び道具を得意としている。

璃浄葬禍流りじようそうかりゅう

永全不動八門の内の一派。(大太刀(野太刀)を使う)

御式内一刀剣、杖術、九禅百式剣術、退魔術を伝えている。

神咲一門とは違い、その存在の善悪に関係なく、常ならざるもの、世の理に服わぬものを許さず、

絶対的なまでに抹消しようとする。なぜなら、この世は生者にとつての世界であり、

異形、人外たちは存在するに能わないという考えが彼らにはあるからである。

そのため、神咲一灯流が霊剣と言う形で霊を使役(彼らにはそう見える)することも快く思っておらず、

神咲家とは長く相容れない間柄。というより、実はその他の退魔組織からも余り良く思われていない。

日下一刀流はここから分派した流派

将麒麟軍流しょうきりんぐんりゅう

永全不動八門の内の一派。(集団戦術・指揮)

個人による戦いではなく、主に集団戦における戦いを指揮する術に秀でている。

単に戦闘の指揮だけでなく情報収集にも長けており、

情報がモノを言う現代においては、よりその手腕を揮うに相応しい時代になったと言えるだろう。

御式内（合気柔術）を得意とする。特に霞み技と水鏡を得意とする流派

説明を聞いていたなのは目が輝く、もう嬉しくてしょうがない。

「丁度人を捜してたの？ ビリー先生が後1〜2年で退職でしょ？

その後を受けてくれる人がいなくて困っていた所だし、丁度良いわ？」（なのは

「何？ ビリーって、あのビリーか？ アメリカ陸軍軍曹のビリー・ブラックか？」

そう聞いたのは、総摩貫鳴流の当主、総摩義輝だった。

「何で知ってるんですか？」（なのは

「俺とは兄弟弟子で親父の弟子だった男だよ、あの正確無比な射撃は親父に叩き込まれたんだ。

もつとも射撃以外は覚えなかったが……」（総摩義輝

まさかビリー先生が総摩貫鳴流の出身だったとは？

（ビリー先生は横浜時代に総摩貫鳴流の厄介になっていたようです。士郎に知り合ったのも日本語を覚えたのもこの頃らしい）

なのは啞然、ヴァロットは思った、次元世界は途轍もなく広いのに、何故か世間は途轍もなく狭いと……

「とにかく俺達は弟子が欲しいんだ。

少々キツイ修行を課しても逃げ出さない位の根性のある弟子が……

そして出来ればその弟子の中から養子や嫁が欲しいんだよ、

もう跡継ぎが居ないんだ。まだ子供の居る奴らは良い、

俺なんか子供も居ないし俺が最後の一人だから、もう滅亡寸前なんだよ。

だから俺は嫁が欲しい、出来れば俺の子に受け渡したいからな？」

（峰牙鷲邇

峰牙碎皇流、滅亡のピクンチ！

「九角流は結構弟子が居たんじゃないのか？」（土郎

「あの震災でみんな何処かにいつちまつたよ、

おまけに酷い不景気でまともに仕事もありゃしない、

せめて娘に婿を迎えて跡を継がせたいんだが、その婿のあてさえありゃしない」

地球の経済事情は悪化の一途を辿っているようだ。

「それでなあ、みんなこっちに来たいと、こっちで弟子を持ったりしたいという訳なんだ」（土郎

「なるほどねえ、でもスクールの教師も少々余っているし、ピリー先生の後は決定だとしても、

他の人をどうするかだよな？こっちで道場を出させるか？第2スクールみたいなを作るか？

スクールをもう少し大きくして各ポジション当たり2クラスずつにするか？まあ、そんな所だろう？」（ヴァロット

「そうなるとスクールの校舎も建て直しやな？あと寮とマンションも建て増しせんとあかんあ」（はやて

そう、スクール拡充計画がもうはやての出来ていた。

かくして、永全不動八門はそれぞれミッドに引っ越ししてくる事になった。

予定は来年の3月である。

「なのはちゃん、スクール拡充計画の企画書頼めるかなあ？」（はやて

「分かった、何とかしてみるよ？」（なのは

「それにもしかしたらあの人達、今度の事件の切り札に使えるかも知れへん」（はやて

そう、これはかなり大きな戦力になりそうだ。

スクール拡充計画（後書き）

次回：特別コラボレート企画、酔仙VS s i b u g a k i 「練  
習試合」



特別コラボ小説酔仙×sibugaki 「練習試合」(前書き)

はい、特別コラボ企画がやって参りました。

今回もsibugakiさんと組んでのコラボ小説です。

まあ、上手く繋がらない所がありますがそれは大目に見て下さい。  
では特別コラボ小説始まります。

「マツハ拳！」（ジヨン）

ドオオオオオオオオオオ

「ぐっ、何て破壊力だ。

ガードしても衝撃が体を突き抜けて体力を根こそぎ奪っていきやがる」（クロスリード）

昨日学園祭も終わり、また厳しい特訓に入った。

今スペシャルフォース隊は朝のトレーニング以外はスクールには付き合ってくれない。

あの予言の阻止に向けてパトロールや演習が忙しい。とてもじゃあ無いが生徒達の指導なんて出来る物じゃあなかった。

仕方がないのでそれぞれの教師達が早朝から生徒達を訓練しているし、

生徒会もまた指導に加わっている。

「そうだ、リンはもう奥義「行」が出来るんだ。

あとは「安」と「意地」を覚えれば、残す所は最終奥義だけだ。

まずは簡単な「意地」から覚えろ」（佐藤先生）

佐藤先生は付きつきりでリンを指導する。

リンの驚くべき才能に佐藤先生ですら戸惑うほどだ。

ヒビキも「安」の練習に入っている。

呼吸、気配、気持ちを合わせる事で相手の心を読み、

その先回りをして相手に技を繰り出す奥義、簡単には身に付く物じ

やあない。

御式内で言うなら水鏡二式、とんでも無い奥義には違いないが身に付けるには相当に難しい。

空手クラスも随分伸びてきた。

スー先生は保健室に泊まり込みで教えている。

「大分指先も鍛えられてきたな？逆立ちもそろそろ卒業か？  
今日からは抜き手でこれを出して貰おう？」（スー）

準備されたのは青竹だった。

それも相当な太さのある肉厚な青竹、これを抜き手で突き抜く、これが練習だった。

「空手にとって指先は剣であり槍であるのだ」（スー）

俺達は抜き手の強化に指先で逆立ちして耐えるという練習を積んできた。

どの指でも出来るように逆立ち指立て伏せ100本/日なんてメニューもあったほどだ。

「いって、指の周りがぼろくそ切れてるよ」（ジョン）

「私爪剥がした」（ツグミ）

そう、青竹って簡単に突き抜けない。

それを抜き手で突き抜けるようになる事、

そうすれば人体ですら簡単に貫通出来るという。

これが奥義王流手（人越拳）ねじり抜き手とも言つゝとんでも無く危険な技だ。

（人越拳ねじり抜き手は4本抜き手だが、王流手は2本抜き手という違いはある）  
途轍もなく貫通力が高く、頭蓋骨ですら穴を開ける。

「抜き手を鍛えるところ言う事も出来るようになる」（スー

それは虎口拳と言う奥義だった。

親指と人差し指の間で相手の眉間を突き、一時的に視力・判断力を奪う技で、

目潰しに似るが実質全く別の技である。

喰らった瞬間目が見えなくなる、それだけでなく全思考が停止してしまふ。

魔力でマルチタスクをやるうにもそれすら出来ない、

まさか技で魔力運用を妨げる物が有ろうとは思わなかった。

衝撃で脳の機能を一次遮断しているのだという。

「ふむ、大分出来るようになってきたな？」

あと二つ三つ奥義を教えてインターミドルを迎えるか？」（スー

こうして少しずつ新しい技を覚える俺達、

でも、スクールの生徒同士や生徒会相手での練習試合では強さに伸び悩み始めた。

もつと強い相手との練習試合を経験しない限り、地球の連中に勝つ事は不可能だと思う。

そんな様子をクロスリードも敏感に感じていた。

「ヴァロット先生、お願いがあります。

地球にはこの様な大会に参加せず、

ただひたすらにその強さを追い求めている流派も多いと聞きます。

そう言う流派と練習試合を組んで頂けないでしょうか？

多分ヴァロット先生なら可能かとは思いますが……」（クロスリード

「まあ、いくらか心当たりがない訳じゃあないが……」（ヴァロット

ヴァロットはそう言つと古ぼけた名詞を取り出す。

そして何処かに電話をかけ始めた。

ブルルルルルルルルッ

ガチャ

「もしもし、兜ですが？」

「あ、さやかさん？お久しぶりです。

ヴァロットですが……実は……と言つ訳で急遽練習試合が組みたくて……

はい、こちらはすぐにでも行けますので……」（ヴァロット

どおやら了解が取れたようだ。

「聞いての通りだ、お前達は明日地球に行つてこい！

場所はこの地図の所だ。ただしぼろくそにやられても自信を無くすなよ？

相手はバカみたいに強いぞ？この俺以外は勝つ事が不可能かも知れん相手だ」（ヴァロット

クロスリードは思った。

やはりこの人は違う、この人が声を掛ければすぐにそう言う事を聞いてくれる相手がいる。

この人の人徳は何処まであるのだろうか？この人は何処まで大きいの

だろう?と。

「俺は忙しくて行く事が出ない、紹介状を書いてやるから持って行ってくれ」(ヴァロット)

こうして生徒会を始めとしてインターミドル出場選手と補欠選手までが地球を訪れる事になった。

因みに、泊まりはくろがねやだと言う。引率は校長先生だ。

そして翌日、お昼前、一行は転送機に入った。

そう、地球とは約6時間ちよつとの時差があるのだ。

「へえ〜ここが地球か?」(クロスリード)

出てきたのは海鳴り駅前のオフィスビルだ。

嘗て翠屋のあった場所、今はダミーの会社が入り、管理局員の待機所になっている。

「じゃあ、行くよ!」

それから在来線で1時間ちよつと、熱海までやって来た。

「あそこに見える純和風な旅館が今夜の泊まりになるから?」

(change sibugaki)

「と、言う事みたいよ」

「へえ、あの時のあいつかあ」

場所は変わり此処は日本の兜家。

先ほど異世界の友人からの連絡を受けたさやかが目の前に座ってデスクワークを行っている青年に話した。  
彼こそこの世界を幾度となく危機から救い出した伝説の英雄的存在の男。

名を『兜甲児』と言う。

「しっかしあいつも偉くなったもんだなあ。管理局のお偉いさんかあ。今度奢ってもらうかなあ」

「何言ってるのよ。そう言うあなただって二つの星を股に駆ける超有名な科学者さんでしょ？」

「ありやりや。手厳しいねえこりや」

甲児は笑う。

その通りなのだ。

今や甲児はミッド、そして地球では名の知れ渡った科学者なのだ。彼が今まで生み出してきた発明品は数々ある。

自身が生み出したTFOをコストダウンして新時代の乗り物として発表したり。

難病の特効薬を開発したり。

それこそ上げればキリが無い程である。

なので甲児は今かなり忙しい日々を送っている。

「母さん！さっきの電話って誰からのの？」

部屋に入るなりいきなりそんなことを聞く少年が居た。

顔立ちは正に甲児に瓜二つである。

彼は甲児とさやかの間に生まれた少年。

名を『兜誠児』と言う。

「ああ、明日こっちに俺の友人の教え子達が来るって連絡があった

んだ。集合先は熱海のくろがね屋だな」

「ふふ、ちよつとした旅行ね」

「ああ、女将さん達に会うのもずいぶん久しぶりだな」

懐かしむように思い出す甲児。

彼の脳裏には多くの仲間達との激闘があつた。

それも命を賭した戦いである。

一歩間違えれば自分は死んでいるであろうそんな戦いなのだ。しかし、その戦いの果てに訪れたのがこの平和である。

もつとも、その代償もあつたのだが。

「.....」

甲児はふと右腕に触れる。

ザラリと異様な手触りを感じられた。

少し袖口をめくってみる。

其処には奇妙な絵柄の刺青が彫られていた。

もちろん甲児自身が彫つた訳ではない。

これはあの忌まわしき『ECウイルス』の名残なのだ。

「さて、そうと決まったら鉄心やこのはちゃん達に連絡しておくか」

「それじゃ僕はこのはちゃんに連絡入れて来るよ」

「あいよ、んじゃ俺は一丁科学要塞研究所に一報入れるか」

甲児はそうつぶやきデスクに置かれた電話の受話器をとる。



「あらそうなの！それは楽しみね」  
『でしょう！是非鉄心やアインハルトちゃん達もどうかな？』  
『って思  
つてさ』

モニター一杯に映る甲児に会話する女性が居た。  
黒い長髪の美しい女性だが肌の色は黒人の様に黒かった。  
その女性がマイクを片手に甲児と会話しているのだ。

「集合は明日なのね？」

『ええ、何でも向こうで大会があるらしくその予習とかでこっちに  
来るみたいなんだよね』

「あらあら、熱心ねえ。鉄也が聞いたたら大喜びしそつよ」

『ははは、鉄也さんを誘ったらそいつらが泣きを見る事になります  
よ』

甲児の冗談に二人は声を揃えて笑った。  
だが、二人は気付かなかった。  
後ろに忍び寄っている存在に。

「誰が喜ぶんだ？」

『あ！居たの？鉄也さん』

「ふつ、随分水臭い事言うじゃないか甲児くん」

其処には車椅子に乗った一人の青年が居た。  
彼の名は『剣鉄也』。

此処科学要塞研究所の所長でありかつて偉大な勇者『グレートマジ

ンガー』に乗っていた戦士である。  
だが、今は戦士を退き此処の所長と教導官の日々を送っている。  
ちなみにかなりの鬼教官である。

「それなら是非鉄心やアインハルトも連れて行こう」

『そいつありがたいぜ！ついでにヴィヴィオや龍二も連れて行っても良いかい？』

「ああ、構わないぞ。どうせ此処最近あいつら暇を持て余しているからな」

事実平和になったために彼等は一応暇を持て余す時間が生まれたのだ。

最もそんなときでも特訓は欠かさない。

暇な時間を過ごす事など鉄也が断じて許す筈がないのだ。

『了解だぜ。んじゃ集合は熱海のくろがね屋って事で』

「くろがね屋か。懐かしいな。他に面子は行くのか？」

『一応声をかけてみるつもりだぜ。只全員が集まるのはちょっと厳しいかもな』

甲児が苦笑いを浮かべる。

今皆それぞれ生活を送っているのだ。

自身の鍛錬、平和な世界を維持する為の活動、新しい芽の育成など。さまざまな事を行っている。

それが今の現状なのだ。

『そつだ！折角だしお父さんも誘ってみるか』

「な！お父さんをか？大丈夫か？」

『平気だろう。おそらくあいつらも事情知ってるだろうし』

手をひらひらさせて言う甲児である。  
しかしそれがまさかあの事件になるうとは誰も夢にも思わないのであった。

(チエンジ！酔仙)

「ここが地球か？随分のんびりした所だな？」(ジヨン)

「前に行った東京はこんなじゃあなかったよ？もつと64番街に近い感じ」

もの凄く都会だったけどここは田舎だね？」(リン)

「あはははは、まあ否定はしないけどね」(なのは)

そして、在来線で熱海に向かう俺達、電車内からはずっと海が見えていて綺麗だった。

地球って綺麗な所だと思う。

『熱海〜熱海〜』

「お、着いたみたいだぞ？」(ブランドン)

「今日の泊まりはあそこだよ？」(なのは)

校長先生の指さした先には、小高い丘の上に純和風のかなり大きい旅館があった。

「観光しながらあそこまで歩きだからね？」(なのは)

「うう、ちょっとお腹減った」(イスズ)

旅館へ向かって歩くうちに見つけてしまった。  
大食い挑戦の店を……

「校長先生！挑戦しても良いですよね？」（アカネ

「まあ仕方ないか？でもこのお店潰れたかも？」（なのは

そう、この団体にはナカジマシスターズが5人もいる。

無限の食欲を誇る彼女たちはいつでも食欲を暴走させる事が出来るのだ。

「名物巨大海鮮丼、1時間で全部食べられたら5000円差仕上げます？」

食べられなかったら15000円頂きます？」

なんか随分舐めた店だった。

「私達は見てるだけね？」（なのは

それは最早井と言うより洗面器と言った方が良い位巨大な器だった。  
それに大量のご飯、その上にこれでもかと言わんばかりの色々な刺

身、

巨大な器にギガ盛りされたとんでも無い量の料理だった。

ナカジマシスターズはもう食欲が暴走している。

「……いっただきまーす」「……」

「見てるだけって言ったけど見ない方が良いかも？」（なのは

「その意見に賛成」(クロスリード)

それは吐き気がする位おぞましい光景だった。  
どうやったたらそんな速さでそんなに大量に食べられるのだろう？  
見ていた何人かは吐き気を催したようだ。

10分後……

「いや、儲かった儲かった」

彼女たちは5000円を手にほくほく顔だった。  
その後ろで店の主人が叫んでいた「もう二度と来るな」と……

「まあ軽いおやつ程度には丁度良かったかな？」(モエギ)

「一体こいつらの腹の中はどうなってるんだよ？」(ヒビキ)

「そう言う事は余り考えたくない」(カティ)

そしてまた俺達は歩き出す。

「こいつらと食事したくない……」(ジョン)

「は、吐き気が……」(リン)

そして「くろがねや」に到着した。

「いざっしやいませ」

「な、なんか随分ガラの悪そうな番頭さんだね？」（マリー

「そう言う事言わないの、今夜はここでお世話になるんだから？」  
（なのは

そして部屋割り、

松の間：なのは、リン、ナギ、マリー、ツグミ

竹の間：モエギ、アカネ、イスズ、カティ

梅の間：クロスリード、ヒビキ、アード、ラフロ、

草の間：ジョン、ブラントン、バルンタイン、ジョニー、ジャック

まあ、問題を起こしそうなのは竹の間と草の間だ。

「向こうはまだ来てないみたいね？じゃあ、今の内に説明しとくね？

私達はこれから箱根山に向かいます。そこで練習試合とある程度の基礎訓練などを行います。

夜は宴会があるからね？」（なのは

「先生、何故箱根山なんですか？」（ジョン

「あそこにはね、天然の結界があるの、ちょっとやさつとの魔法じやあ破る事は不可能だわ？

私のデイバインバスターB？でも傷を付けるのがやつとの位頑丈だから、

少々大きい魔法を使っても平気よ？周りへの被害を気にせずに練習が可能だわ」（なのは

そう、スクールの海上訓練施設でもそこまで強力な結界は持っていない。

まあ、街とかに被害が出ないようにそれに広い訓練場にして、バリアと結界で何重にもして安全を確保している。

一体どうやったたらそんな結果が出来るのだろうか？

などと話している所にあの人達がやってきた。

「こんにちわ、お久しぶりね？もう山駆けに行ってきたんだ？」  
（  
なのは

） change sibugaki

「こんにちわ、お久しぶりね？もう山駆けに行って来たんだ？」

なのはがそう言う方向には山駆けを終えて額の汗を拭いながらやってくる甲児が居た。

彼の他には二人の青年が居た。

誠児と鉄心の二人である。

「よ、久しぶりだななのはちゃん。しっかしお互い老けたなあ」

「い、いきなり失礼な事言うなんて、デリカシーの無い人ねえ」

「本当ね、女心分かってないのかしら？」

甲児のその一言を聞くや否や女子生徒達がひそひそと耳打ちしだす。

「父さん、いきなりその発言はないよ」

「そつだぜ甲児さん、その場合は黙ってスルーするのが基本だろう？」

「良いんだよ。俺は気にしないし」

誠児と鉄心が隣から声を掛けるも甲児はスルーしている。

すると、甲児はスクールの面々を見てある事に気づく。

「ありゃ？ヴァロットの奴は来てないのか？」

「うん、今回は私と生徒達だけで来たの」  
「なあんだ、折角だし飲み明かそうと思ったんだけどなあ」

ヴァロットが来ない事を知り甲児は残念がる。

だが、聞いていた生徒達は度肝を抜かれる思いであった。  
押しも押されぬ英雄的存在であるヴァロットを呼び捨てで呼ぶのだから。

それが出来る人間は彼と親しい人間か余程の馬鹿位な者であろう。

「こ、校長先生・・・誰なんです？この軽薄そうな人は？」

我慢出来ずにリンが尋ねる。  
するとなのはは振り返った。

「あ、そうか。皆にはまだ説明してなかったね。この人は私達とは別のミッドチルダと地球を守った人。  
言い換えるとこの世界の英雄的存在よ」

「止せよなのはちゃん。俺は只の青年だよ」

余程ほめられてくすぐったかったのか甲児が照れくさそうに頭を掻く。

そして軽く咳払いをして生徒達の方を向いた。

「んじゃ、改めて自己紹介させてくれ。俺の名は兜甲児。地球出身で今は二つの世界を又に駆ける科学者だ」

「それで、僕はその息子の兜誠児って言います」

「俺は剣鉄心だ。暫くの間だけど宜しくな」

甲児たちは自己紹介をした。



それを見てジョン達も返すように自己紹介をする。

「ジョン・ハミルトンだ。ま、宜しくな」

「ラフロ・イグだ。俺の魂に共感したら是非このヘアースタイルにしてくれ！」

「アード・ベックだ。ま、仲良くしようって事で」

「バランタイン・ファイネストだ。野郎に興味はないけど、宜しく」

「ジョニー・ウォーカーだ。あんたら良い体つきしてるなあ。手合わせの時間が楽しみだよ」

「ジャック・ダニエルだ。しかしあんたら魔力無いのか？かなり低い気がするけど？」

「ブランドン・ゴールドだ。可愛い子が居たら是非紹介してくれよな」

「リン・ヤマザキです。先ほどは失礼な発言をしてすみませんでした」

「カティ・サークです。数日の間ですが宜しく」

「イスズ・ナカジマです。お互い頑張りましょう！」

「マリー・ボーンです。どうぞ宜しく」

「ツグミ・ナカジマです。宜しく願います」

「ナギ・ナカジマです。よ、宜しく願います」

「クロスリード・カマンサックです。コーチとして今回の合宿に参加しました。

数日間と言う短い期間ですが宜しく願います」

「ヒビキ・ヤマザキです。同じくコーチとして来ました。宜しく願います。

但し！妹に手を出したりしたら承知しませんので其処は宜しく」

多少紆余曲折はあった物の一同が自己紹介を終える。

「さてと、んじゃまずは体をあつためる為に俺達の走ったコースを走るとすつか。お前らまだ走れるだろう？」

甲児は後ろに居る誠児たちに尋ねる。

誠児達と言えは準備万端と言った感じに柔軟をこなしている。

「いつでもいいよ。父さん」

「俺達は何回でも走れるぜ。甲児さん」

「へいへい、相変わらず元気なガキ共だこつて」

半ば呆れるかの様に甲児は呟く。

そしてスクールの生徒達を引き連れて再び山駆けを行った。

最初は平坦なコースであった。

アスレチックコースと思えばいいだろう。

これくらいなら楽勝だと生徒達は思えた。

「そう言えば、さつき貴方達が言ってたあれって何？」

走りながらカティは鉄心に尋ねた。

相当気になっているようだ。

「ああ、あれか。あれつてのは俺達の世界にある『マジンガー』の事だよ」

「マジンガー？何それ」

「簡単に言つとロボットの事だよ」

誠児が付け足す。

だが、それを聞いた途端生徒のほとんどが驚く。

「ロボットって・・・それまんま質量兵器じゃないの？」

「そんなもの持ってて管理局は黙ってないの？ってか、この世界に管理局はないの？」

「ありますよ。でも、そんなに変ですか？」

誠児と鉄心が揃って首を傾げる。

無理もない話である。

スクールの生徒達にとって質量兵器はタブーなのだ。

それにまさか乗ろうとしているとは驚きも良い所である。

「話は変わるけど、此处は凄く空気が綺麗ねえ、

私達の居た東京は放射能とかで大変なのに此处にはそれらが全く感じられないわ」

「ああ、僕達の世界じゃもうかなり前に原子力は廃止されましたよ」

「え？原子力が廃止！？」

それには驚きであった。

現にエネルギーでかなり深刻化していると言つご時世なのにこの世界では原子力が廃止されていると言つのだ。

一体なぜなのか？

「原子力が廃止・・・じゃあ一体何のエネルギーを使ってるんだ？」

「俺達の世界には『光子力』があるからなあ。原子力に頼る必要が無いんだよ」

（チエンジ！酔仙）

「さてと、話すと長くなるんで、先に山駆けに行くぞ？」

またその話は後であればいい、まずはどれ位体力があるか見せて貰おうか？」

甲児にそう言われてそれぞれに準備運動をする生徒達、  
子難しい話より、まずは相手の実力が知りたい所だった。

「良いねえ〜かなり鍛えてるじゃないか？」

甲児が嬉しそうにニヤリと笑う。

そして一同山駆けに出た。

『光子力』ってなんなんだろう？そう考えながら走るジョン、その時だった。

ピンッ　　バシユッ　　バシユッ

「うおっっ、アブねえ！」

鋼糸を引っ掛けて矢が飛んできた。

しかも確実に殺すようなコースで飛んでくる。

「きゃあああああああ」(カティ

丸太が飛んでくる。

それに少しずつ傾斜がきつくなり出していた。

「おーい気を付けろよ、ここから先は気を抜くとマジで死ぬぞ？」

(甲児

「この辺りは地元の人でも絶対に近付かないんだ。

迷い込んで生きて帰った人間は居ないから、「帰らずの山」って呼ばれているし」(誠児

それはスクールのアスレチックコースなんて目じゃあないほど過激なトラップコースだった。

それも確実に殺すセッティングにしてある。ちよつとでも気を抜けば即あの世行きだ。

それにこくたまにだが動物や人間の白骨死体まで……. どんだけ過激なんだよ？

ここを走りきるには野生動物以上の危険回避能力が要求される。

「誰だよ？こんな過激なコースを造つたのは？」（ラフロ

「俺達だよ、尤も設計者は別にいるが？」（甲児

そう、このコースを設計したのは剣鉄矢と兜雷二だ。

「おい、気が付いたか？あいつら2往復目なのに息一つ切らしてないぞ？」（ヒビキ

「それに何て足腰してるんだ？鍛え方が半端無い」（クロスリード

「2往復目じゃあないぞ？5往復目だ」（鉄心

このコース過激なだけじゃあなく、距離も長い、

スクールのアスレチックコースなんて可愛く見えるほど長い距離、ただ危険なだけじゃあなく、心理的にも追い詰めるように設計が成されている。

「ほう？初めてでこのコースを走りきるか？流石に良く鍛えてるな？」（甲児

もつすぐ頂上だった。

片道4〜5キロか？随分長い山駆けのコースだ。  
これでまだ半分、下りはスピードが乗る分危険度は更に高い。

「やっと頂上だあ〜」（ジョン）

ボコッ

「うあああああああああああ！」

落とし穴だった。

「こりゃ死んだだろ？」（甲児）

「まだ死んでない！」（ジョン）

ジョンは穴の底に仕掛けられた竹槍の上に着地していた。  
しかも逆立ちで指先一本で着地を決めていた。  
あの逆立ち修行がこんな所で成果を発揮する。

「なかなかやるじゃないか？」（鉄心）

私達も驚いた、まさかゴールの内側に最後のトラップがあるなんて思わなかったし、  
ジョンが先頭で引っかかってくれなかったら私達が落ちていたかも知れない。

でも、まだ帰りがある、一体何処まで危険なんだろう？このコース。

そしてまた「くろがねや」まで駆け下りていく生徒達、  
そんな様子を木々の間から見ていた老人が居た。

彼の口元がニヤリと歪む、実に楽しそうだ。

「じゃあ休憩して早昼食べたら箱根山だよ？」（なのは

そう、本日のメインイベントが待っていた。

(change sibugaki)

地獄とも言える山駆けを終えて一同はくろがね屋に戻ってきていた。

「ふいっ、終わった終わったあ」

「流石に5往復となると少しこたえますね」

「ったく、お前等若い連中に付き合うのは楽じゃねえぜ。少しはこの体力も考えろってんだ！」

鉄心は腹を摩り、誠児は額の汗を拭っていた。

それに対し甲児は腰辺りを叩きながら少し疲れた顔をしている。

まあ甲児にとっては少しキツイ筈である。

甲児ももう40の親父である。

それが十代の若者の足についていこうなどと言うのはかなり無理があった。

しかし甲児とてまだまだ若い連中に負ける訳にはいかない。

其処は年長者の意地である。

だが、それとは対照的にスクールのメンバーは皆生きた心地がしない思いで目の前を歩く三人を見ていた。

「あ・・・あの人達・・・化け物かよ・・・俺達の倍以上走ってるつてのに全く疲れた様子すら見せてねえ」

「もつと凄いのはあの甲児さんって人だよ。年的にはなのはさんと同じ位だつてのにあのコースを走って平気な顔してるなんて」

「一体何なのこの人達・・・一体どんな鍛え方したらあんな体力が

身につくって言うの？」

一同は甲児らを見てそう思った。

地獄と呼ぶにふさわしい山駆けを終えても尚ピンピンしている三人特に鉄心は何か物足りなそうな顔をしている。

「な、なあ・・・あんたら何時もこんな地獄の山駆けやってるのか？」

フラフラな足取りでジョンが鉄心に尋ねる。

「はあ？あれで地獄？おいおい、こんなまだまだ序の口だぜえ。

こんなんで地獄って言ったら父さんや姉ちゃん達に笑われちまうよ」

鉄心の言う父とは勿論剣鉄也の事である。

そして、鉄心は確かに言った。

『こんなまだまだ序の口』・・・だと。

それは即ち彼等は今の山駆けを遥かに凌ぐ特訓をしていると言う事なのだ。

其処までしなければそのマジンガーに乗る事が出来ないと言うのだろつ。

つくづくそのマジンガーとは恐ろしい代物である。

「なあ、教えてくれないか？そのマジンガーってのは一体どんな口ポットなんだ？」

疑問に思ったジャックが尋ねる。

それに対して誠児は歩きながら答える事にした。



「まあ、簡単に言っと『神にも悪魔にもなれる存在』ですよ」「こいつの説明じゃ分かりづらいだろう。俺が説明するよ」

誠児に代わり甲児が説明した。

マジンガーとは即ち甲児の祖父『兜十蔵』が作り上げたロボット・  
・嫌、超<sup>スーパー</sup>ロボットである。

全身を超合金Zで硬め動力源は光子力を使う。

その性能は常識を遙かに凌駕しており、

ミッド曰く『もし甲児達が介入していなければマジンガーを作り出せるには短くて100年、長くて1000年かかる』  
と言われている代物なのである。

「そ、そんなに凄いロボットなんですか？」

「實力はどの位なんです？」

「うーん・・・そうだなあ・・・あんたらで分かりやすく言つなら  
・  
・

それ1体居れば次元世界を手玉に取れるって言えば分かるな」

それを聞いた途端、皆あんぐりと口を開ける始末であった。  
考えられない。

地球と言つ言わば辺境の星で作られたロボットがまさかミッドチルダを滅ぼせる程の力を持っていると言われているのだから。

「で、でもミッドチルダには次元艦隊があるんですよ!?!?それを含めての事なんですか？」

「そうだけ。お前等の世界の艦隊なら1時間あれば全滅させられる程の力がある。だから神にも悪魔にもなれるんだ」

恐ろしい話である。

そんな恐ろしい力を持った質量兵器は自分達の世界では確認されていないのだ。

もし機会があれば是非それを見てみたい。  
そう思えた。

「ま、その代わりと言っちゃなんだが、こつちの世界じゃお前等みたいなの化け物じみた魔道師は居ないんだけどな」

「へ？そうなんですか？」

「はい、僕の魔力ランクはCランクなんです」

「んで、俺がDランク」

誠児と鉄心がそう言う。

その言葉が更に驚かされた。

二人ともジョンやリン達より遥かに魔力が低いのだ。

「ちなみに俺の魔力ランクはFランクだ」

甲児は更に低かった。

最早あるか無いか分からない程微々たる量しかないのだ。

それはつまり、あの山駆けは自力で走ったと言う事になる。

魔力強化など一切していないであれだけの事をする。

凄まじい連中である。

「でも、そんな凄いロボットがあったらテロリストとかが狙うんじゃないんですか？」

「俺達の世界にはもうテロリストは殆ど居ないぜ」

「へ？」

その言葉に皆は素っ頓狂な声をあげる。

自分達の世界で最も苦勞しているテロリストがこの世界には居ない

というのだ。

では何故マジンガーが存在しているのだろうか？

過ぎたる力は争いを生む。

それは過去に証明された事である。

にも関わらずこの世界は平和そのものである。

そして、その理由は甲児の口から語られた。

「俺達がマジンガーを使う理由・・・それは外宇宙、異世界、

はては別次元から襲ってくる脅威から地球、ミッドチルダ、果ては次元世界全てを守る為に使うんだ」

「僕達人間の力だけでは全ての次元世界を守るのは不可能なんです。だから僕達はマジンガーと言う力を使うんです」

「それを使いこなす為に俺達はこうして特訓してるんだ」

甲児たちの世界は絶えず外世界からやってくる侵略者に狙われているのだ。

それは過去にもあった。

光子力エネルギーを巡る悪の科学者との戦い。

遙か過去から蘇った巨大帝国との死闘。

外宇宙からやってきた侵略者。

それらを撃退するのに全てマジンガーが使われていた。

だが、本当の戦いはこれからであった。

「そもそも俺達とミッドは本来は巡り合わない世界だったんだ。だけど・・・あの時に俺達は出会ったんだ」

それは今から去る事20年も昔、かつて甲児が19歳の頃、人類初の試みである『転移装置』の実験の際であった。

初の人物の転移を行うとしたその時、転移装置が謎の事故を起こし甲児達は魔法世界『ミッドチルダ』に訪れたのだ。

そして、その世界では地球での戦い以上の壮絶な戦いが待ち受けていた。

それこそ、過去の因縁が生み出した恐るべき敵『機甲帝国』であった。

「機甲帝国？」

「俺達の世界じゃ聞かない名前だなあ」

「そもそも、宇宙からの侵略者だなんて、まんまSFの話ですよ  
え」

スクールのメンバーからしてみれば信じられない話である。

しかしそれがこの世界では現実なのだ。

機甲帝国は魔法世界ミッドチルダを征服し、人類を奴隷化する為に恐るべき兵器『機甲獣』を作り上げた。

20mを越す巨体にビルを薙ぎ倒すパワー、そして何より恐ろしいのは魔力を無効化する『大型AMF』の内臓である。

これにより魔力に頼り切っていた管理局の魔道師達は成す術もなく機甲獣に蹴散らされてしまったのだ。

質量兵器もなく、魔力攻撃しかない管理局にとって、機甲獣は正に天敵であった。

その時であった。

甲児達がやってきて、そしてマジンガーを使い機甲獣を圧倒したのだ。

「その機甲獣って恐ろしい敵なんですね」

「俺達の世界に出てきたらと思うとぞつとぞつするよ」

ブランドンの言葉に皆が頷く。

だが、其処へ甲児がにやりとする。

「その点は心配ない。前に俺はお前達の世界に言ってきたな。

その際にもしそんな奴らが来た時のための解決策を置いてきた」

「解決策？」

「AMFつてのは確かに魔力を遮断する厄介な代物だが弱点もあるんだ。

それは超合金Zや光子力エネルギーから発せられる粒子『Z粒子』に弱い事だ」

それは殆ど偶然の発見であった。

甲児達の乗るマジンガーが機甲獣と肉弾戦を行っている際にたまたま撃った魔弾が機甲獣の装甲を貫いたのだ。

それを見た甲児が疑問に感じ調べた所、

マジンガーの装甲とエネルギーの中から発せられる粒子を浴びるとAMFは効力を失い消滅してしまうと言う事実が発見されたのだ。

しかもこのZ粒子は人体に殆ど無害であり危険性も無いと言うのでデバイスに組み込む事も可能であり、

これにより魔道師達も機甲獣に対抗する事が出来るようになったのである。

「すげえ、AMFにそんな弱点があったなんて」

「ああ、俺はそのデータをそっちの世界の知り合いに少し送ったんだ。

最もZ粒子はそれ以外使い道がないから悪用しようにも無駄だけだな」

甲児の言うとおりである。

Z粒子とは所謂零れ粕の様な物であり遮断以外に使い道は殆どないのだ。

「それじゃ、戦いは甲児さん達の圧勝に終わったんですね？」  
「嫌、戦いは最初は俺達が有利だった……だけど、俺は其処で恐ろしい事実を知ったんだ」

甲児は其処で顔色を暗くした。

それは、その機甲帝国の実態である。

実は、機甲帝国を築き上げたのは甲児の曾祖父である『兜原蔵』であつたのだ。

つまり、この戦いの発端は兜家にあつたのだ。

更に機甲帝国は機甲獣を遙かに上回る敵『合成獣』更には悪のマジンガーである『デビルマジンガー』を作り上げ、

更に地球で倒した敵を全て蘇生させ戦力に加える事で一気に管理局、敷いては機動六課を追い詰めていったのだ。

戦力差は9対1。

誰の目から見ても絶望的な結果である。

「マジンガーを上回るマジンガー……悪魔の化身」

「そんな恐ろしいのが敵に居たってのに、どうやって勝ったんです？」

「それは、俺の死んだ母さんが残した力があつたからなんだ」

甲児の母『兜翼』は神秘の都『アルハザード』に飛ばされる。

其処で彼女は自身の科学の知識とアルハザードの神秘の技術を用いて最強のマジンガーを作り上げた。

それが魔神皇帝、即ち『マジンカイザー』である。

但しその設計には複数の鍵が必要となる。

一つはデビルマジンガーと同時期に設計されたもう一つのプロトマジンガー『ゴッドマジンガー』の設計図。

更にマジンガーの補助ブーストである『ゴッドスクランダー』の設計図。

この二つを合わせる事で設計図が浮かび上がるのだ。  
そして、その開発にはもう一つ、マジンガーが必要だと言う事。  
それらが揃う事でマジンカイザーは初めて作る事が出来るのだ。  
甲児は地球、ミッドチルダ、そしてアルハザードの三つの力が結集  
して完成したマジンガーを操りデビルマジンガーを蹴散らし、  
最終的に機甲帝国を滅ぼしたのである。  
そして、この戦いこそその後起こる長きに渡る戦いの、そして魔  
道師と魔神との出会いのきっかけであったのだ。

「とまあ、この後にもあるんだけどとりあえずこんな所だ」

「す、スケールがでか過ぎる」

「な、何だか夢物語みたい」

話を聞き終えた時、皆ポカンとした表情を浮かべていた。  
それを見た甲児が盛大に笑う。

「ハハハ、まあ元の世界に戻ったって他人に話さない事だな。

きつとおかしな奴だと笑われるぜ。それに、俺達からしてみればお  
前等だつて凄いぜ」

「え？」

「お前等の魔力だよ。俺達には到底身につけられない程凄い魔力を  
持つてやがる。」

それに皆良い目をしてやがる。逆に羨ましい位だぜ」

「そ、そんなあ」

「事実、僕達の世界では貴方達のような強い魔力を持った魔道師はそ  
んなに居ないんです」

「まあ、一長一短つて奴だな」

鉄心がオチをつける。

何も全てがこちらの世界が勝っているわけではない。

この世界では常軌を逸した存在がある代わりに魔力値が低いのだ。そして、こちらの世界ではそれこそ星を破壊出来る程の魔力を持った魔導師達を作れる代わりにその常軌を逸した機械の力がない。どちらも欠けている物がある。

まるで抜け落ちたピースのせいで完成出来なかったジグソーパズルである。

「でも、それでも良いと俺は思うんだ。完璧な世界なんてない。皆違うからこそ世界ってのは美しいんだと思う」

「甲児さん」

「考えても見ろ。見渡す限り美人ばかりだと最初はうれしいかもしれないけど何時か飽きちまうよ。」

「だけど不細工ばかりだと逆に気が滅入っちゃう。半分ずつある方がありがたいってなもんだぜ」

「父さん、それ説明になってない気がするんだけど」

変な解釈をする甲児に誠児が呆れた目を向ける。

そして、一部の男子が甲児に共感する思いを抱いた。

『ああ、この人も仲間なのだなあ』・・・と。

やがてそうこうしている間に一同はくるがね屋に辿り着く。

再び強面の番頭の横を通り過ぎて廊下を歩き、客間に辿り着く。

其処には既に何人が居た。

「お帰り、ほう・・・どうやら早速客人と会ったみたいだな」

甲児達を出迎えたのは青年であった。

紫の髪に黄金色の瞳をした男性。





取り敢えず早い昼食を取りながら説明を聞く一同、

「まあ最初にシュレディンガーの3定理から説明しよう……」(甲児

シュレディンガーの3定理・それは三つの理論から成り立つ。

パラレルパラドクス理論(シュレディンガーの猫の定理)

? 人生の選択肢(どんな些細な事でも選択肢になりうる場合)

その人の選択肢を中心に無限にパラレルワールドが生成され続ける。

? 無限に生成され続けるパラレルワールドは何時までも存在し続ける事は出来ず、

別のパラレルワールドや他人のパラレルワールドに吸収統合され続ける。

? 統合され続ける世界に置いて、統合出来ずに元の世界とは別の世界になって行く事があり、

大凡3三つの世界に成長する。

? この三つの世界を通常は行き来する事は出来ない。(条件が揃えば可能)

また自分と同一人物が3人いるというのはこの理論の為

次元因果律論

? 一つの世界に干渉してその世界に影響を与えると同時に別の世界にも影響を及ぼす理論

? 一つの世界に与えた影響が他の世界に別々の影響を与える時、その結果によっては統合出来ない世界がさらに生まれる理論、

? 統合した一つの世界が減る時、他の二つの世界に影響を及ぼさないように

統合出来なかった世界が支え続ける理論又は統合出来なかった世界が減んだ世界に取って代わる理論

### 次元存在確率論

? 同一時空間内に同一個体が2個以上存在する事は出来ない。

? 同一個体が存在すると存在衝突という現象が起きる。

存在衝突とは、同一時空間内に同一個体が二つ以上存在出来ない場合、パラドクスを解消する為に、

一つの個体がもう一つの存在を消滅させようとして衝突が起きる現象。

存在衝突が起きた場合、途轍もないエネルギーが発生し、その世界全てを消滅させる。

例えば、物質衝突による反応消滅が起こったとしよう、

1gのアルミニウムが反応消滅した場合のエネルギーは、

およそ10万トンの海水を1秒で蒸発させるほどだが、

存在衝突の場合はその $10 \times 10$ 億乗倍のエネルギーが発生する

? もし、一つの世界に置いてその同一個体が消滅した時、又は同一

個体でなくなつた時

別の世界の同一個体は別の世界への移動が可能となる。

以上の3定理を持ってシュレディンガーの3定理という。

いかなる存在もこの定理を無視する事は普通出来ない。

どんなに魔法が発達しようとしてどんなに科学が発達しようとして、  
変える事の出来ない絶対的な定理である。

「そ、そんな馬鹿な、その理論が正しければ俺達はここに存在出来なくなる。

それ以前にこちらの世界に来られる事自体おかしな話になる」(クロスリード)

「だが現実には来られているし、消滅もしていない、何故だと思っ  
？」(甲児)

話が難しすぎてまだ殆ど理解出来ていない一同、  
でもこれだけははつきり分かる。自分達はシュレディンガーの3定理から外れていると……

「よく分かりませんが、3定理が僕らには働いていないのだと思います」(クロスリード)

「その通りだ、ここは三つの流れから外れて統合されなかつた世界。  
もう少し分かり易く言うなら、パラレルパラドクス世界という最も  
大きい世界があつて、

その一つ一つの中にそれぞれ異なる次元世界があるような物だ。

そして、無限に枝分かれする世界は大凡三つの流れの世界に統合さ

れ続ける。

一つはYESの世界、二つ目はNOの世界、三つ目はそのどちらでもない世界、

大体この流れに統合され続けていくんだが、どうしても統合出来ない世界が出てくる。

それがこの世界なんだ、そして偶然にもそちらの世界と行き来出来るようになった。

それはそちらの世界が3定理から外れた世界だからだ」(甲児)

「3定理から外れた世界？」(クロスリード)

「そつだ、実はシュレインガーの3定理を完全無視出来る能力者が居るんだ。

石動能力いすゞぎと言つてな、時間の流れに関係なく、

現在・過去・未来・パラレルパドクス世界全てに干渉出来るんだ。それを発動する時、世界の有り様全てを歪めてしまう。

一度歪められてしまった世界は三つの流れから外れてもう二度と統合されなくなるんだ。

しかも、シュレインガーの3定理の影響を受けなくなる」(甲児)

「そんな馬鹿な、世界の有り様その物、

ひいては次元世界でさえその全てを変えてしまうなんて神にだって出来るはず無いのに！」(ヒビキ)

「出来るんだよ、神をも超えた神以上の存在、

そんな人間が居るからこうやって俺達は出会う事が出来るんだ」(

甲児)

「そんな人間が本当に居るんですか？」(カティ)

「居るんだよ、意外と身近な所に」(甲児)

「意外と身近な所？」(リン)

「高町なのはの兄、高町恭也、今は月村恭也だったか？」

彼が石動能力者だ。彼はもう何度もその能力を使い世界の有り様を変え、

君達のいや、こちらの世界にさえ干渉してきた。

だから君達の世界と行き来が出来るようになった」(甲児)

そう、あの転送機の事故、あれはあの瞬間石動能力者がその能力を発動したから起きた事だった。

一同の目が校長先生に集まる。

「いったいこの人の家族はどうなってるんだああああああああああああああああああ！」

どうも凄すぎるといつかあまりにも凄すぎて最早話にもならないとんでも無い家族だ。

サムライマスターにして”武神”高町士郎、最強の剣士高町美由希、神を超えた神 月村恭也、職業魔王！高町なのは、どう考えても可笑しすぎる。

高町家に手を出したらどうなる事か？管理局ですら消される気がする。

「一体どう言う家族なんですか？」(ジョン)

「わ、私に言われても困るな、別に普通の家族だし、それが当たり前だったし」(なのは)

それが当たり前って時点で可笑しすぎるだろ！と一同は心の中で突っ込んだ。

校長先生には常識その物が通用しないみたいだ。

「って話している間に随分食ったな？」（甲児）

そう、ナカジマシスターズが居るところなる。

とんでも無い食事量だった。

「じゃあ箱根山に行こうか？クロス君、お願いね？」（なのは）

みんな転送で箱根山に移動……出来なかった。

取り残されたのが二人、甲児と誠二は走って一同を追いかけるしなかった。

転送魔法でさえ通用しないのだ。

「転送して貰えないって不便だ！」（甲児）

ハアハアゼイゼイ言いながら二人は一同に追い付いてくる。

「一体どう言う体力してるんだよ？本当に人間か？」（アード）

それから一同腹ごなしをして準備体操、練習試合に備える。

「じゃあ、誰から行く？」（なのは）

「はい、俺が行きます！」（ジョン）

「じゃあ俺が相手をしよう」

そう言ったのは誠二だった。  
5m程離れて睨み合う、今まさに戦いの火ぶたが切って落とされようとしていた。

「始め！」

「食らえ！」（ジョン）

ジョンは居竦みを放った。

「喝！」（誠二）

居竦みは効かなかった。

「渦廻斬輪蹴！」  
うずまわしざんりんげり

（sibugakiのターン）

「嘘！居竦みが通じない？」

スクールのメンバーにとっては衝撃であった。

それもそうである。

本来居竦みを食らえば大抵の者は闘争心を失うか失神してしまう。だが、それをたった15歳の少年は掛け声一つで撥ね退けてしまったのだ。

それにはかけたジョン自身も驚かされた。

「今のつて鬼殺しでしょ？僕と同じ年でそれを習得したのは凄いよ。でも僕には効かないよ」



ニヤリと微笑む誠児。

その間も互いの拳のやりとりが続く。

お互いに攻め手の距離での打ち合いが続いているのだ。

その光景を皆が見ていた。

「一体どう言う神経してるんだ？あの居竦みを通じない何て・・・あの誠児って相当鈍感なのか？」

「そうじゃねえよ。お前等の世界で言う居竦みだっけか？こっちは鬼殺しって言うんだけどな。」

誠児は若くしてそれを習得出来た逸材なんだ。最も、それも苦難の道だったけどな」

甲児は語る。

それは今から5年も前である。

誠児がまだ10歳だった頃、地球には破壊獣と言う強大な怪物が暴れまわっていた。

その被害は甚大な物であり多くの人々が死んでしまった。

その死傷者の中には誠児や鉄心のクラスメイトや友達も居た。

彼等は幼くして人の死を体験したのだ。

潰れそうになつた心を引き戻したのは他でもない、彼等の両親であった。

幾度にも渡る死闘を制してきた甲児達だからこそ二人を連れ戻す事が出来たのだ。

それから二人はこれ以上の殺戮を許さない。

そう言う信念の元に甲児の叔父である兜雷蔵に弟子入りしたのだ。

それこそが今の誠児の強さなのである。

「そうだったのか、あいつも相当苦労してたんだなあ」

バランタインの呟きを聞いて他の生徒達も同様に頷く。

科学は発展し、この世界では光子力と言うエネルギーが幅を利かせて平和な世界に見えていた。

だが、その裏には強大にして凶悪な侵略者の魔の手に常に狙われていると言う事があるのだ。

それに対抗する為に彼等は常に力を求めるのだ。人々を守るため、そして侵略者を叩きのめす為に。

「しかし息子が化け物並の強さを持つてるって事は親父も相当な化け物なんだなあ」

「お、おい！」

ふと男子生徒の誰かの呟きを聞いた途端、甲児の顔が重く沈んだ。そんな甲児を見てなのはが慌てる。

「う、ご免ね甲児くん、気を悪くしないで」

「良いんだ、折角だ。お前等にも見せてやるよ。俺がどうして化け物並なのかってのを」

そう言つて主室に甲児は上着を脱ぐ。

その下には薄着のランニングシャツ一枚であった。

其処から見られるのは鍛え上げられた肉体に無数の傷跡、そして更に驚かされたのは右肩に彫られた刺青であった。

「この模様・・・もしかして！」

「そうだ、これはお前等の世界でもあるだろう」<sup>エクリプス</sup>『ECウィルス』の名残だ」

驚きであった。

まさかこの世界にもECウィルスの被害者が居て尚且つまだこうして生きていられるだなんて。

「と言っても、俺もこれを食らった時は相当苦労したぜ。何せ意識がぶっ飛んで殺意しか沸かなかったんだからな」

甲児は話す。

それは今から遡る事9年前。

丁度ECウイルスが出始めた頃であった。

甲児は戦闘中にこのウイルスに感染してしまい暴走状態に陥ってしまった。

しかも乗っていたのがマシンカイザー。

暴走したマシンカイザーは出力を限界以上にまで引き上げたのだ。

そのまま放置すれば大爆発を起こし次元世界全てを飲み込む巨大な次元渦が出来上がる程の。

「そ、そんなにマシンカイザーって凄い出力を持つてるんですか？」

「ああ、だから俺もカイザーを使うのはここぞって時だけにしたいんだ。あれを使いこなすのは骨だからな」

あの甲児でさえカイザーを扱うのは至難の業なのだ。

他の人間ではまず扱う事など出来ない代物である。

「お、勝負が動いたな」

いそいそと甲児が上着を羽織ながらジョンと誠児の戦いを見る。

其処では丁度ジョンが誠児に対し技を仕掛けた所であった。

「渦廻斬輪蹴」  
うずまわしざんりんげり

ジョンが叫び技を放つ。

だが・・・

「甘い！」

その技を誠児は容易く受け流す。

そのせいで僅かだがジョンに隙が生まれる。

其処へすかさず誠児が叩き込んだ。

両足を強く地面に踏みしめて力を為、全てのエネルギーを右拳に溜め込み放った。

「奥義！天波光拳！」

誠児の叫びと共に溜め込んだエネルギーが巨大な拳の形となってジョン目掛けて飛んできた。

「うおおお！」

咄嗟にジョンはそれを紙一重でかわした。

だが、その際に感じ取った威圧感に冷や汗を出した。

（な、何だ今の一撃は！あれだけ肉眼で見られたつてのに魔力が全く感じられない！どうやって出したってんだあ！？）

どうにか一撃KOは免れた物のジョン自身に相当なプレッシャーが掛かったのは言うまでもなかった。

（チェンジ！酔仙）

「何今の？ジョンのナックルキャノンにそっくりだけど魔力は全くなかった」（リン）

「よく見ておきなさい、あれが”気”よ、魔力とは全く別のエネルギー、

でも肉体を強化し、考えられない攻撃力を発揮する事も可能なの」  
（なのは

（やべえ、こいつ化け物クラスの強さだ、まともによっても勝てるかどうかわからねえ！）（ジヨン

「今度はこちらから行こうかな？」（誠児

その瞬間誠児の姿が歪んで消える。

ジヨンも瞬歩を発動する。

誰も目で追えない速度で組み手が始まる。

打ち合う一瞬、速度が落ちて残像が出来る。あちこちで打ち合う一瞬の残像が出来ては消える。

そして速度が落ちてきた。また嫌らしい距離を開けて向き合っていた。

「こいつ速い！」（ジヨン

「そつちもやるじゃないか？」（誠児

「こつなつたら散弾拳！」

散弾拳、それはペガサス流星拳のように見える魔力弾が相手を襲つた広範囲攻撃で避けられるようなよりはなない。

ドドドドドドドドドドドドオオオオオオオオオオオオオオオオオ





その目の前で誠児ががつくりと片膝を付いた。

「恐らく居合い突きだろう?」(甲児)

そう受け止めようとした瞬間、その圧倒的な破壊力の前にジヨンはとても受け止められない事を悟った。

そして、一撃を受ける瞬間右手を受けから引き抜いてそこからマッハ拳を打ち出したのだ。

まさに居合いだった。その一撃は誠児の腹を捕らえていたのだ。ただ、その威力の差が勝敗を分けたただけだった。

「じゃあ、今度は俺がやるのか?」(鉄心)

「俺が行こう」

そう言って名乗りを上げたのはアード・ベックだった。

ひゅおおおおおおおつ

棍が空気を切り裂く音が凄い、彼は棍術と太極拳を使う。

「ほう、これは面白そうな対決じゃな?」

「あ、雷蔵さん、おひさしぶりです」(なのは)

(change sibugaki)

「ほう、どうやら次は鉄心のようじゃな」(雷蔵)

白髪の老人はそう呟いた。



外見からして年齢は既に80を越えている事は予想出来た。しかしその体から伺える鍛え上げられた肉体はとても老人とは思えない作りであった。

まるで生まれてからずっと格闘術を仕込んできたかのような・・・

「あの、この人は？」（リン）

「あ、紹介が遅れちゃったね。この人が誠児君と鉄心君のお師匠さん」（なのは）

「左様。わしこそが『兜流格闘術』第18代目伝承者の兜雷蔵じゃ」（雷蔵）

スクールメンバーの前で雷蔵が胸を張って言う。

厚い胸板が胴着の上からでも見て取れる。

相当な筋力の持ち主である。

しかし、訪れたのは雷蔵だけではなかった。

「ふう、どうやら間に合ったようだな」（鉄也）

「鉄也さん！」（甲児）

雷蔵に続いて現れたのは車椅子に乗ってやってきた青年である。

彼は剣鉄也。

甲児と同じマジンガーのパイロットであったが、数年前の戦いにより重症を負い今は車椅子生活を送っている。

「今鉄心の試合が始まるところだよ」（甲児）

「そうか、良い時に来れたもんだ」（鉄也）

間に合った事に安堵する鉄也。

そんな鉄也になのはは疑問を感じていた。

「あの、鉄也さん・・・どうして車椅子なんですか？」（なのは）  
「ああ、一昔前にあった戦いでやられちゃってな」（鉄也）

鉄也は話した。

それは今から遡る事約5年前の事。

突如として地球に現れた新たな敵『破壊獣』と鉄也の乗るグレート  
マジンガーは戦闘を行ったのだ。

幸い破壊獣を退ける事は出来た物の、その代償として鉄也は下半身  
が麻痺してしまい車椅子生活を送る事となってしまったのだ。

それから必死にリハビリを行ってきたのだが、既に鉄也の体はボロ  
ボロになっており、最早回復は絶望的と言われていたのである。

「そんな事があつたんですね」（なのは）

なのはは思わずしんみりとした。

自分達が居ない間にこの世界では激しい死闘が行われていたのだ。

そしてその結果が今目の前に居る鉄也である。

幸い命に別状は無い物のもうマジンガーに乗る事は出来ないような  
のだ。

だが、哀れむスクールメンバーに対し鉄也はフツと微笑んだ。

「心配は無用だ。俺の偉大な勇者としての戦いは終わったが、剣鉄  
也としての戦いはまだまだ続くんだ。

闘えなくても闘う者達を育成する事は出来る。今俺は高町と同じ道  
を歩んでいるのだ」（鉄也）

笑みを浮かべながら鉄也は言う。

だが、その横で何故か甲児と誠児は苦笑いを浮かべていた。

「なあ、何でお前そんな変な笑い方してるんだ？」（ラフロ）

「鉄也さんは確かに優秀な教導官なんですけど、物凄く厳しいんですよ。」

別名『鬼教官』って言われてる程ですから。僕達が走ってきたあのコースだって鉄也さんが作ったんですよ」(誠児)

「『鬼』通り越して『悪魔』ね」(カティ)

思わずそう呟いた。

そうこうしている間に既に試合は始まっていた。

「はあああ！」(アード)

アードの棍がうなりを上げて振り回される。

風を切り全てを薙ぎ倒すかの様な程の勢いで振るわれる凄まじい勢いの一撃である。

触れれば忽ち全てを薙ぎ倒せるだろう。

だが、その棍を鉄心はヒラリとかわしていた。

「どうしたどうしたあ？そんなトク臭くちや俺には当たらないぜえ」

(鉄心)

「こいつ、どういう神経してるんだ？」(アード)

アードは疑問に思えた。

棍の振りを鉄心は余裕でかわしているのだ。

中には紙一重、皮一枚の距離で振るわれるのもある。

なのに鉄心は涼しい顔をしている。

眉毛一つ動かさないうで笑いながらその棍の一撃をかわし続けているのだ。

「あゝらら、またあいつの悪い癖が出やがった」(甲児)

「悪い癖？何ですかそれって」(ジョン)

「鉄心君は調子に乗りやすい所があるんだ。それに僕と違って戦いに本気を出さない事が多いんだよ」(誠児)

誠児の言葉に皆はあんぐりとなった。

嫌、呆れたと言った方が良さだろうか。

今こうしてアードが必死になって闘っていると言つのに鉄心と言えば遊び半分で闘っていると言つのだ。

だが、それで彼の連撃をかわしているとすれば相当な事である。

もし鉄心が本気を出せば一瞬で勝負が決する事は間違いない筈である。

「やれやれ、これではあの若者が余りにも不憫じゃ。仕方あるまい・  
・ほれ、来なさい」(雷蔵)

雷蔵が後ろを向いて手招きする。

するとそれに導かれるように二人の少女がやってきた。

一人はライトグリーンの髪に目の色が違うオッドアイの少女である。

もう一人は驚く事なのだがなのはそっくりの少女であった。

「わっ！なのはさんがもう一人！しかも若い！？」(ジョン)

「ジョン君、後でお話しようね」(なのは)

なのはの言葉は置いておいてジョンは勿論殆どのメンバーがその少女を見て驚いた。

本当にそっくりなのだ。

唯一違うのと言えは瞳の色位だが他は殆どそっくりである。

まるで生き写し、ドツペルゲンガーであった。

「よ、お前等も来たんだな。アインハルトちゃんなのは2号」(甲児)

「はい、雷蔵様に案内して貰いました」(アインハルト)

「それより甲児さん！そのなのは2号つての止めて下さい！私にはちゃんと」『このは』つて名前があるんですから」(このは)

「ははは、悪い悪い・・・さてと」(甲児)

甲児は視線を鉄心達の方に向ける。

そして大きく息を吸い・・・声を放った。

「おおい鉄心！お前の大好きな彼女が見に来てるぞお！ちゃんとやれえ！」(甲児)

「え？マジ！？」(鉄心)

甲児の言葉に反応して鉄心が振り向いた。

其処に居たのは鉄心に向かい多少控えめに手を振るアインハルトの姿があった。

その姿を見た途端鉄心はとてつもない幸福感に包まれた。

だが、それが油断となり鉄心の後頭部に棍の一撃がぶちあたる。

「ゲエツ！！！」

相当痛かったのだろう。

それを食らった鉄心が蹲り頭を抑えた。

そして涙目になりながらアードを睨む。

「てめえ！よくもアインハルトちゃんの前で恥かかせてくれたなあ！覚悟しやがれ！！！」

その時まで大した構えをしなかった鉄心が此処に来てしつかりとした構えを取り始めたのだ。

「やれやれ、やっと本気になったか。世話の焼けるガキだぜ」（甲児）

「悪かったな」（鉄也）

ボソリと呟く甲児にバツの悪い顔をする鉄也なのであった。

（チェンジ！酔仙）

「なんか可笑しいぞ？」

それに気が付いたのはジョンだった。

アードの棍はモロに喰らえばほぼ即死レベルの威力、普通あれを食ってただで済むはずがない。痛い程度で済んだら可笑しいのだ。

「一体どう言う鍛え方してやがる？」

アードは心底怖かった。

自信を持って放った一撃をモロに喰ったはずなのに全く効いていない。

ちよつと頭を押さえてうずくまったものの、すぐに構えを取り直す。

「極纏直刺！」

猛烈な刺突技が鉄心を襲う。

まともに食えば体を貫通するほどの突き技、しかし当たらない。

「あれは柳の体術」（なのは）

そう、甲冑組み打ちによく見られる防御体術の一つ「柳葉揺らし」

どんな攻撃も紙一重で絶対に当たらない。  
しかもアードはそのまま距離を詰められた。

「間合いに入れば棍は使えないんだよね？」（鉄心）

棍の間合いの内側にあっさりと入られた。

そして其処に強烈な正拳突き、アードが崩れ落ちて勝負が決まる。

「おいおい、兜砕きは可哀想だろ？」（甲児）

そう、超威力の正拳突き、まともに耐えられる物じゃあなかった。

「次、ブラッド、行ってこい」（クロスリード）

ブラッドVS鉄心

開始10秒で終わる、兜砕きを受けてブラッド敗退。

「次、バランティン行ってこい」

バキッツ ドゴオオッツ

たった2発に沈む、

「次、モエギ行ってこい」

バキッツ

今度は一撃だった。

「そろそろ俺にもやらせてくれよ」（誠児）

「次、アカネ行ってこい」

その瞬間誠児の姿が歪んで消える。

「神速勝負とは面白い！」

アマネも神速を発動し着いていく、速さは互角、  
こうなると技の破壊力勝負なのだが……

「雷徹！」

それを避けて上に飛ばれる。

「朱雀！」

上からの踵落としをモロに喰らって地面に撃ち込まれる。

「マリー、行ってこい」

マリーは姿を霞ませやがて消え失せる。

誠児も流石に焦ったろう？消える相手とは戦った事が殆ど無い。  
目を閉じ、気配を探り出方を窺う、今までのタイプとはまるで違う  
相手、

実にやりにくい。

「通背け……」

ボゴッ



通背拳にカウンターで出した裏拳がマリーを捕らえた。

背後からの通背拳は気配を感じた瞬間にカウンターで返されていた。

「今のは危なかったぜ？」

「そろそろ代わってくれよ？」（鉄心

「じゃあ、リン、行ってこい」

「疾風一迅！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ

命中した、しかし……まるで平然と断っている鉄心、全然効いていない。

「奥義、玄武」

「これならどうだ！重破剛練斬！」

ガキイイイイン

「何て硬い体をしてるの？」

「無駄だ、この体は弾丸を受けても無傷だ。その程度の攻撃じゃあ傷一つ付かん」

トンッ

軽く突かれた瞬間、リンは崩れ落ちた。

考えられない衝撃が体を貫通していた。

「奥義青龍」

その後、順番に挑んだものの、誰一人勝てる者はなく、死屍累々たる状態となったスクールの生徒達、

「弱い、弱すぎるぞ！」（鉄心）

「最初の奴はそこそこ強かったけど、何だよ？後は全然ダメじゃん？」（誠児）

まさか、ここまで実力差が有ろうとは？  
まるで相手にならなかった。

「強すぎるから自信を無くすなよ？」ヴァロットさんにそう言われた事を思い出すクロスリード、  
まともにやって勝てるのかそう言う生やさしい相手じゃあなかった。

この二人、途轍もない化け物だった。

ただ収穫だったのは、インターミドルに出てくる選手はここまでレベルが高くないとの事だった。

もしかしたら練習次第では勝てるかも知れない、彼らはこの負けを糧にどんどん強くなる。

今度こそ彼らに勝つ為に、それを目標に練習に励む日々が始まるうとしていた。

「所で校長先生、この人達誰ですか？後で紹介して下さいよ？」（  
ジョン）

(change sibugaki)

「話をする前にそろそろ旅館に戻るとするか」

甲児はふと腕時計に目をやる。

時刻は午後四時。季節は初冬。日は傾き夕暮れから夜になりかけている。そろそろ肌寒さを感じる頃である。

「急がないといかんのお。此処らは日が沈むと氷点下まで下がるからのお」

「此処、本当に日本？」

余りの環境の厳しさに思わずジヨンは呟いた。

しかしその呟きは他のスクールメンバーも同じく思えた。

と、言う訳で下山しようと思ったのだが、如何せん先ほどの模擬戦でコテンパンにされたメンバーは最早動く事すら困難な状態である。

「しょうがねえなあ」

甲児が溜息混じりに懐から小型の携帯電話を取り出し連絡をする。

すると数分足らずで皆の元に一台の送迎バスが現れた。

大きさに全員乗っても余裕な程の大きさである。

そのバスが皆の元で停車するとドアから運転手と思われる人物が降りてきた。

「いらつしやいませえ」

其処から現れたのは一人の男であった。

テング口ハットを被り派手な色の布を体に巻いたいかにもメキシカ

ンな男であった。

頬はこけており長細い感じで目蓋は半分閉じてるのか眠たそうな顔をした変な男であった。

「悪いなジャンゴ。こいつら下山出来そうにねえからくるがね屋まで乗っけてつてくれよ」

「やくれやくれ、面倒ごとはご免なんだがな、まあ、客の頼みとあっちゃあ仕方ねえやあ。さっさと乗ってくんなあ」

間延びした口調でジャンゴが入り口を指差す。

とりあえず自力で乗れる者は後にして乗れない者を先にバスの中に放り込み適当な席に座らせる。

それで全員が乗り終わるとジャンゴが最後に運転席に座り扉を閉じる。

「んじゃあ行きますかあ・・・死出の旅路へ・・・」

『！！！！！！！』

ジャンゴの何気ないその一言を聞いた途端スクールの殆どのメンバーが凍りつく思いをした。

それを見たジャンゴが気をよくしたのかニヤリと笑う。

「ヘツヘツヘエ、冗談でさあよお。まあなんだな、あんたらみたいなからかい甲斐のある連中が居ると楽しくて良いねえ」

終始ご満悦に笑いながらバスを走らせるジャンゴ。

だが、甲児らこの世界の住人以外は笑ってはいられなかった。

原因は勿論ジャンゴである。

彼の異様な雰囲気飲まれそうになったのは勿論だが、何よりもその格好である。

明らかに温泉宿とは場違いな格好なのだ。  
そして、ちらりと見えたのだが、ジャンゴが羽織ってる布の下には、  
無数の『実弾』が装填されていた。  
どうやらこの世界の日本には銃刀法違反は無いようだ。

\*\*\*

やがて、バスは最初に訪れた宿『くろがね屋』に辿り着く。

そして辿り着くなり再びクロスの強面のお出迎えがありそれに相変  
わらず肝を冷やす思いがした。

間違いなくあの男に睨まれたら明日の朝日を拝む事は適わない事間  
違いない筈である。

そう思いながら一同は旅館の入り口の扉を開き中に入る。

すると其処には一人の女性が座り深く頭を下げこちらを出迎えて  
くれた。

「ようこそ、くろがね屋へ。当旅館の女将の『錦織翼』と申します」  
頭を上げて自己紹介をする女将。

その女将の顔を見た途端初めて見た者達は時間の止まる思いがした  
そうである。

「す、すげえ美人」

「こんな綺麗な人が女将さんなのかあ」

「ま、毎日通いたい」

男性陣の呟きがこだまする。

そのたびに甲児はニヤリとする。

「ま、積もる話はとりあえず風呂に入って汗を流してから飯でも食いながらしようって事で」

甲児がそう言う事で一同はある一種の開放感を覚えた。

やっと地獄から開放されると。

実際この旅館の温泉は正に極楽の一言であった。

広々とした露天風呂が其処にあり和の雰囲気が目一杯に映るのだ。

「でっけえ風呂だなあ」

「そりゃ露天風呂だからなあ・・・しかしでかいよなあ」

等などと、おのおのがそれぞれの感想を述べながら汗を流して風呂に浸かっていく。

「あちちっ、殴られた箇所染みる！」

「にしても、あの二人まるで化け物並だったよなあ。まるでロシエツト一佐に絞られてるみたいだったよ」

「それはねえだろう。あいつの方が遥かに強いぞ」

『！！！』

雑談を楽しんでいる時横を向くと其処には先ほど模擬戦を観戦していた甲児が既に湯船に浸かっていた。

「って、甲児さん何時の間に！」  
「最初から入ってたぞ」

ジヨンの問いに甲児がしれつと応える。  
恐ろしく素早い。

とても40目前の親父とは思えない程である。

しかしそれは彼の体つきからも見て取れた。

全身にガツチリと鍛えられた筋肉が見えており、その上にさまざま  
な大きさの傷が見える。

その傷が彼の歩んでいた道が決して平坦な道でなかった事を物語る。

だが、何よりも目が行ったのは甲児の右肩に彫られた刺青である。

かつてスクールメンバーの居る次元世界にも起こった『ECウイルス』。

感染すれば人を殺さなければ生きていけない殺人ウイルスである。

それに彼、甲児は感染したのだ。

だが、今はこうして無事に生きている。

不思議な事でもあった。

「甲児さん、どうして甲児さんはウイルスから助かったんですか？」

「俺の弟分が助けてくれたんだよ」

甲児が思い出す様に語ろうとした時であった。

ふと、隣の湯から楽しそうな笑い声が響く。

その声に男性陣は振り向く。

視線の先は勿論男達にとつての桃源郷である『女湯』。

そして其処に今入っているのはうら若き乙女達である。

(こ、これは・・・絶好のチャンス！)

(だ、だが・・・隣にはあの化け物の親父が・・・)

(しかし、覗きたい・・・覗きに行きたい)

ジョン、バラントイン、ブラントンの三人の思いがそのまま遙か壁の向こうに見える女湯に注がれる。

覗きに行きたい、だが隣にはあの化け物兜誠児の父親である兜甲児が居るのだ。

下手な行為をすれば彼に締め上げられる危険性がある。

そう危惧していたのだが・・・

「お前等・・・覗くか？」

「「「は？」「」」

いきなりの甲児の発言に三人は揃って素っ頓狂な声を上げる。

「惚けるなつて。覗きたいんだろつ？顔に書いてあるぜ」

「ま、マジっすか」

思わず湯船で顔を洗うジョン。

しかしそんな事したつて今更遅しである。

そんな三人を囲んで甲児が小声で話しをする。

「良いか、男にとつちやあ女湯つてなあ桃源郷みたいなもんよ。

覗かない手はないぜ。特に今はうら若きピチピチの可愛い子ちゃん達が入つてる。これを逃す手はねえつてもんだぜ」

「さ、流石甲児さん！俺、あんたに一生ついていきます！」

間違つた意味で尊敬の念を持ってしまったジョン。

良いのかそれで？

とまあ、それは置いておいて、甲児を筆頭に四人は女湯の壁の前に来ていた。



「んで、どうやって覗くんですか？甲児さん」

「ふっ、任せておけて、俺はこれでもこの旅館の隅々を知り尽くしてるからよ。何処をどうやれば覗けるかなんて朝飯前よ」

そう言つて三人に手招きして導く甲児。

そして四人が辿り着いたのは、何と女湯に飾られている狸の置物の中である。

「こ、こんな場所があつたなんて・・・うおっ！丸見え！」

「しっ、大声出すな！見つかつちまうじゃねえか・・・うひよっ！溜まらん」

「くく、最高の眺めだなあ。甲児さんも中々悪じゃないっすか」

「うう、良い眺めだあ。カメラ持つてくれば良かったぜえ」

四人がそう呟きながら狭い狸の置物の中で押し合いへし合い状態で女湯を眺めていた。

そんな彼らの事など汁知らずな女性陣はと言うと・・・

「うう、まさか私の通背拳があんな簡単に返されるなんて」

湯船につかりながらマリーが愚痴っていた。

内容は今日の模擬戦の事である。

「それを言うなら私だってあんだだけ打ち込んだのにビクともしないって、正直自信失しそうよ」

リンが自信の利き手を見てそう呟く。

相手は鉄心。確かに技は命中した。だが相手は全く効かない顔で立っている。

正直本当に同じ人間なのかと疑いたくなる程である。

「それを言ったら私だって」

「私も・・・」

等と同じ感じで呟くメンバーの皆様。

どうやら相当に堪えたようだ。

だが、この挫折がきつと彼女達の明日を繋ぐ重要な通過点となるであろう。

だからこそこうしてこの世界に来たのだ。

「ねえ、このはちゃんもアインハルトちゃんもあの二人と同じ特訓してるの?」

リンが気になり一緒に入っていたこのはとアインハルトに問う。

それに二人は軽く頷く。

「うん、でも私達兜家の血縁者じゃないから奥義とかは伝承させてもらいないんだ」(このは)

「え?奥義を伝承させて貰えない?」(リン)

「はい、兜流格闘術は本来門外不出の流派でして、本当なら血縁者以外の者は教えを請う事も許されません。」

ですが雷蔵さんに子供が居ないということなので若い私達にもこうして教えてくれるんです。

でも奥義までは教えてくれませんが」(アインハルト)

会話を聞きながらリンは思った。

それほどまでに厳重に守ってきた流派なのだ。

あれだけの實力があるのも頷ける。

もしあの流派が世間に出回り、悪しき者がそれを使えば、忽ち世界は崩壊してしまう。

だからこそ今の今まで兜流格闘術は封印されていたのだろう。  
そう思えた。  
その時であった。

ガタン！

音がした。

不自然な音である。

皆湯船に浸かっていると云うのに何故か洗い場の方から音がした。  
振り向くと其処には狸の置物が置かれていた。

結構大きい。

しかしおかしい。

先ほどまであんな置物があったであろうか？

ふと疑問に思うリン。

ガタン！

また音がした。

今度はハッキリ見た。

狸の置物である。狸の置物が動いたのだ。

明らかにあの中に誰か居る。そしてその中の人物は特定出来た。

「またお前等かあゝ馬鹿ああ！」

リンが怒鳴り桶を掴んで投げ飛ばす。

それが狸の置物に命中し音を立てて置物が砕け散る。

中から現れたのは文字通りジョン、バルンティン、ブラントン、そして甲児の4人であった。

「やべっ！ばれた」

「逃げる！捕まったら偉い目にあつぞ！」

四人は直ちに逃げようとした。

だが、その四人の体に突如として細い鋼線が巻きつく。

「な、なんじゃこりゃあ！」

「しまった！遅かったか！」

ブラントンは突然体に巻きついた糸に驚き、甲児は顔が青ざめながら舌打ちした。

そんな彼らの前に一人の老婆が現れる。

手には『Z』と彫られた細い糸の束がある。

「やれやれえ、血気盛んなのは良いけどねえ、もう少し年を考えなさいな坊や達」

「き、菊姉さん！頼む。見逃してくれ」

甲児が必死に頭を何度も下げる。

明らかに甲児が何かを恐れている感じた。

それを見たお菊姉さんはニヤリとする。

「それは私じゃなくて、この人に言いなさいな」

「ま、まさか・・・」

甲児の顔が真っ青になる。

そんな甲児の目の前に現れたのは真っ赤なオーラを放ちながら腕を鳴らしてやってくる女性であった。

「甲児くん。いい年して覗きなんて・・・覚悟は良いわねえ、其処の子達も」

『『ビクッ！』』』

女性の睨みで三人は身震いした。  
まるで居竦みを食らったようである。  
そして隣では甲児が歯をガチガチ震わせて涙目になっている。

「さ、さやかさくん。頼む！もうしないから許してくれえ」

「うふふ、だくめ、今日と言う今日は覚悟しなさい」

そう言いながらお菊姉さんから『超合金Z製の糸』を受け取り覗き魔4人を引きずって去っていく。  
それから4人の断末魔の悲鳴がくるがね屋中に木霊したのは言うまでもない。  
それを見ていた女性陣は思った。

「この世界って女性も強いんだなあ・・・」と。

(チエンジ！酔仙)

ここはくるがねやの宴会場、今から豪華夕食な訳だが、其処に似つかわしくない4人が居る。

ボロボロになって一体どうしたの？って言う状態だ。

まあ、言わずもがな覗きのお仕置きである。

そして宴会は始まった。

昼間あの馬鹿みたいな食べっぷりを見ているので巨大な鍋料理が用意され、

ナカジマスターズにも対応している所は流石だ。

「みんな、今日の負けを明日の勝ちに繋げるように、よく反省する

「なんだよ？」（なのは）

「自信を無くすなよ？お前らが弱いんじゃない、うちの二人が強かっただけの事だ」（甲児）

そう言われてもちっとも嬉しくない生徒達。

「全く、凹まないの、凹むんだつたら何故負けたのか考えなさい、自分の何が悪かったのか？」（なのは）

「そうだぜ？格闘技なんてじゃんけんと同じだ。

この技には勝ってもこの技には勝てないって言う組合せはいくらでも存在するんだ。

でも、そんなじゃんけんにも確実に勝てる方法がある」（甲児）

「えっ、そんな方法があるの？」（リン）

「確実に後出しする事だ。格闘技はじゃんけんじゃないんだ、後出ししてはいけないなんてルールはない。

何処で後出しするかを組み立てても大切なんだぜ？」（甲児）

そう、生徒達に足りなかった事は相手を分析する分析力と、技の組み立てだった。

甲児は「後出し」という表現でそれを指摘しているのだ。

実は、誠児や鉄心を倒す技なら生徒達も持っていたのだ。

ただ、自分達の強さに慢心し、技の組み立てが成っていなかった。

相手を分析的確な技を選択する事、其処まで持っていく詰め将棋こそ、

戦いに於いて最も必要な事だった。力押し一辺倒では絶対に勝てないのである。

みんなそれを理解したようだ。  
考えてみれば倒せる技の組合せや、パターンならいくらでもあった。  
でもあの時、雰囲気にも飲まれていたからか全くそれが出来ていなか  
った。

それに明らかに実戦経験が違う、スクールに入ってまだ実戦経験の  
ない彼らと、  
戦場をくぐり抜けてきた二人の差、それがはっきりと勝敗になって  
現れたのだ。

「もう、料理が冷めちゃうわよ？」

それぞれ反省すると食べ始める。  
大人グループは飲み始めた。

（ねえ、あの子達の部屋は？）

（杉の間だって？）

（ねえ、例のあれ持ってきてる？）

（勿論、遅効性バ　ア　ラ）

（じゃあ、作戦開始ね？）

良からぬ念話を飛ばしているのはナカジマシスターズ、  
彼女たちは愛想を振りまきながら、誠児と鉄心に近付く、

（うん、なかなか良い体してるわね？）

浴衣の上からでも分かる鍛え上げられた肉体。

(むふっ今夜が楽しみ)

「しかし、校長先生も甲児さんもお酒強いわあ、化け物だよ？」  
イスズ

流石に大人グループは凄い飲みっぷりだった。

そんな中、一人まだ反省しているのはジョン、あそこは受けるよりかわすべきだった。

渾身のマツハ拳なら充分に倒す事は出来ていた相手、相手の攻撃を舐めすぎていた。

どう言う質の技かを判断せずに受けに回った事が負けに繋がった。

(俺はまだ甘すぎる)

そんな事を重いながら一人黙々と食べ、黙々と反省する。

やっぱりどう考えて勝てた試合、それを落とす自分の甘さ、勝負への執念が足りないかと反省した。

そんなこんなで宴会も無事終わり、部屋へ引き上げる事になった。

「みんなー明日は朝6時から山駆けだよ、寝坊しないようにね？」

翌日は山駆けの後朝食、半日合同練習をして帰る事になっている。

(むふっ、薬は仕込んだ。3〜4時間後には効果が現れるわ?)

(丁度良い時間だね?みんな寝てるだろうし?)



彼女たちの計画が進行しつつあった。

そして深夜、彼女たちが動き出す。

「可笑しい、眠れない、それ所かもう朝勃ち？」（鉄心）

「もしかして眠れないのか？」（誠児）

「なんか体が可笑しい」（鉄心）

その時だった。そつと部屋に侵入してくる気配が三つ、二人が身構える。

寝たふりをしながら様子を窺う。

その気配は布団にもぐ込んできた。

二人ともこんな経験は初めてだった。

女の子がいきなり布団に潜り込んできたのだ。

洗い髪の香りが弾けて鼻をくすぐる。

「えっ、イスズさん？」

「あら、起しっちゃった？」

彼女の目が金色に光っている。

鉄心の方には、アカネとモエギがもぐり込んでいた。

二人とも未知の体験だった。

「こんなに強くて凄いスタミナしてるんですもの、きつとこっちの方も凄いんですよ？」

「お姉さん達が良い事教えて あ・げ・る」

それが何を意味するか分からない二人ではない、ただ、それが本当に自分達の身に起きている事が信じられなかった。

彼女の手がいきなり股間に伸びてくる。

「まあ、これはなかなか良いわ、私のも触ってみて」

彼女たちは浴衣の下は何も付けていなかった。

「や、柔らかい、これがおっぱい……」

「お、俺他に好きな子がいるのに」

でも体は拒否出来ない。

「「「いったきまーす」「」」

まずはお口で、その次に胸で、最後はあそこで蹴られる2本のバナナ、

「で、出る」

「うおおおおおおお、いくううううううう！」

でも1回や2回じゃあ納まらない。

当たり前だ、薬がしっかり効いている。

「こ、これなら満足出来るかも？」

3人が代わる代わる二人を犯す、この前にみたいに簡単にはしおれない二人、これは相当楽しめるかと思った。

バンッ

いきなり襖が開け放たれた。

「君達、そこで何をしてるのかな？ちよつと頭冷やそつか？スタアアアアアアアアライトオオオオオオオオオオオ・ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

チユドオオオオオオオオオオオオオオオ

放たれた一撃は、くろがねやを半壊させ、熱海の街まで大きな被害を出した。

すぐに警察と消防が駆け付ける。

そして警察に引つ張られたのはなのはだった。

翌朝釈放して貰えたものの、彼女と引率だったクロスリード、ヒビキは膨大な始末を書く事になった。

そして彼らは逃げるようにミッドチルダに帰っていったという。

(change sibugaki)

「あつはつはつは！そりゃ災難だったなあ」

翌朝、事件の一切合財を聞いた甲児は腹を抱えて笑っていた。

確かにこれは笑うしかない。  
何しろ自分達も良い想いをしたのだから。  
そして幾ら悔やんでも最早後の祭りである。

「笑い事じゃないよ、父さん！」

「そつだよ！俺なんて大事な初めてをあんな見ず知らずの女達に取られちまつたんだぜえ！」

被害者でもある誠児が涙目になって訴え、鉄心が青筋を浮かべて叫ぶ。

だが、その二人の意見も甲児は聞く耳持たずなのか片耳に指を突っ込んでそつばを向いている。

「でもお前等も良い想いしたんだろつ？」

「うー！」「そ……それは……」

甲児のその一言に二人は押し黙ってしまった。

そう言われると否定が出来ない。

何しろ本当に気持ち良かったのだから。

全てが初めての経験だったのだ。

初めての女性の肌の匂い。

初めての女性の胸の感触。

初めての女性の……

『ボンツ……！』

思い出した途端二人の顔が一気に真っ赤になった。

どうやら昨夜の事はまだ脳裏に焼きついているのだろつ。

初的な二人にはかなりハードな夜だったようだ。

「ま、良い経験になったんじゃないかね？これで本命とやる時はかなりリード出来るって訳じゃねえか」

「そ、そう言う物なの？父さん」

首を傾げる誠児。

如何に武術では秀でていてもあつちの方はかなり奥手の様だ。

「当たり前だろう。経験があるのとないのとじゃ雲泥の差なんだぜ。俺だって最初は苦労したぜ。結構スケベだったけどいざやるとなると何すれば良いのかチンプンカンプンだったからよお」

甲児もそう言いながらふと思い出す。

かつてパートナーとして共に戦い、今は愛する妻となったさやかとの初夜の事を。

今までスケベ的な行為は数多くこなしてきたがいざ本番になると流石の甲児もタジタジだったようだ。

それでもこうして一児を設けられたのだからまあやれた事に変わりはないのだろう。

「んで、どうだったんだ？」

「え？何が？」

甲児の問いに誠児達はキョトンとした顔をしていた。

そんな誠児の肩を甲児が肘で小突く。

「惚けるなよお。ナカジマシスターズの感触だよお。どんな風に気持ちよかったんだよお。叔父さんに教えてくれよお。最近の女子のあそこは気持ちよかったのかあ？」

「と・・・父さん！！！！」

「や、やべえ・・・思い出したらまた！！！！」

甲児の悪戯じみた質問に誠児は返答に困り鉄心は思わず股の辺りを押さえる。

どうやら二人にはかなり刺激的な感触だったようだ。

だが、そんな話をしている三名の元に同じ三名が近づいてきた。

「甲児君……何誠児に話してるの？」

「誠児くん……初めてつて何？」

「鉄心くん……一体何があつたの？」

『いいっ！！！』

振り返ると其処には鬼の様な形相で腕を組み睨んでいるさやかがいた。

その両隣には多少困惑した顔で誠児と鉄心を見るのはとアインハルトがいた。

「さ、さやかさん……いやあ、実は二人が昨夜にさああのナカジマシスターズとお……」

『わああああああああああああああああああ！！！！』

事情を説明しようとした甲児を必死に二人が抑える。

その光景を見たさやかの額に青筋が数本浮かび上がる。

そして甲児の襟首をむんずと掴むと面前へと引つ張ってきた。

「話は聞いてるわよ。あれは確かにあの子達の盛んさが原因だったかも知れないけど……だからつて其処まで追求する？」

「だ、だけどさあ……気になるじゃん。俺達のとどう違うのかわてさあ」

さやかの尋問に甲児は人差し指同士を押し付けながらしどろもどろ

に説明する。

その間甲児は視線を動かしながら冷や汗を流している。だが、そんな時であった。

「ねえ、さやかさん。甲児さんとさやかさんの初めてってどんな風でした？」

「え？」

「私も気になります。初めての時はどう言った事をするんですか？」

このはとアインハルトが期待の目を輝かせながらさやかを見る。その目を見たさやかは返答に困った。

とても15歳の少女達に言える話じゃないからだ。

「な、何でそんな事を聞くの？」

「だって、私も誠児くんと初めてをしたいんですもん！」

「私もです！鉄心くんにも初めてをしたいんです！」

なんだかんだ言って二人も一応『初めて』の意味は理解しているようである。

だからこそさやかは返答に困った。

とても朝方に言うネタじゃないからだ。

返答に困ったさやかは・・・

「そ、そうだ！なのはちゃんに聞いてみたら？なのはちゃんも初めて経験してるし」

「そ、そうだなあ！他にも確かフェイトちゃんもいるだろうし、スバルやティアナにも聞いてみるよ」

つられて甲児も名前を挙げる。

俗に言う責任転嫁である。

だが、それを聞いた二人は・・・

「分かりました！早速ママに聞いてみます！」

「私も、フェイトさん達に聞いて来ます！」

と言って勇み足でくるがね屋の中へと消えていった。

その姿を見送った4人は深く溜息をつく。

そして、ふと甲児は気づいた。

「俺・・・この後絶対甲一に殴られるかもなあ」

因みに甲一とは甲児のクローンでフェイトの旦那さんである。（こ  
つちの世界での事だけだ）

何はともあれ、こうして誠児と鉄心は余り望んではないにしても  
『初めて』を経験する事になったのであった。

（チエンジ！酔仙）

「やっぱり勝てない」

帰りの列車の中でジョンはぽつりと漏らした。

どう考えても勝てない、倒せる技なら持っている。

でも、実戦経験が違いすぎる。

どう組み立てても最後には倒されてしまう事しか思い浮かばない。

それにあの体力、どう考えても可笑的。

根本的に鍛え方が違いすぎる。

これだけの人数をたった二人で相手にして全くばてている様子など  
微塵も感じなかった。

倒せる技を持っていても、恐らくは出させて貰えないだろう？



あんな相手にどうやったら勝てるのか？  
どうやったら渾身のマツハ拳を入れられるのかさえ考え付かなかった。

「そう落ち込むなよ、多分あれは俺でも勝てん」

クロスリードがそう声を掛けた。

魔法が通用しなければ恐らく、閉じ込める事も敵わない。  
かといって通用する技があるとしたら徹ぐとあしらいな物だろう？  
でも其処まで持って行ける自信はクロスリードにもなかった。

「やっぱりお前でも勝てんか？」

ヒビキもそう言った。

「あの化け物に勝てる人なんて居るの？」

リンはそう聞いた。

「ヴァロットさんは勝てると言っていたが、あの人以上に無理だろうな？」（クロスリード）

「あの人は別格でしょ？」（リン）

「私の通背拳なら倒せるかも知れないけれど、まず当たらないでしょうね？」（マリー）

「校長先生、あの二人に勝てる自信有りますか？」（ナギ）

「ん〜全くなし」（なのは）

「校長先生でも無理か」（カティ

「でもそれぞれ課題は見えたんじゃない？自分達の欠点が？」（なのは

確かに見えた。

大半の生徒は確実に倒せる技を持っていた。

でも、それが当てられない、その技まで持っていく前に倒されていた。

つまりは組み立てと実戦経験、それがあまりにも違いすぎた。

スクールの模擬戦でもある程度それを養ってはくれる。

しかし、根本的に命を賭けたやり取りの中で育ってきた彼らとは余りに違いすぎた。

どうやったたらその実力差を埋める事が出来るのか？

どうやったたら自分ももっと強くなれるのか？今の自分のに足りない物は何なのか？

この練習試合を通してそれがはっきり分かった一同だった。

「俺は捌いた後の組み立てが成っていない」（ジョン

「俺は棍に頼りすぎていた、もっと拳法を使わないと……」（アード

「それ以前に俺何にもさせてもらえなかったし」（ラフロ

それぞれに課題を見つけていた。

みんな反省する課題はたくさんあったようだ。

でも、これはある意味収穫でもあった。

この反省を次に繋げられたなら、それはある意味大きな実を付ける

結果となるだろう？  
彼らはまた一つ強さの階段を上ったのだ。

（あーあ、夕べは良い所で見つかったね？）（イスズ）

（校長先生にも一服盛っておくべきだった。睡眠薬を……）（モエギ）

（あれはまさかの想定外だったよ）（アカネ）

「ふっ、不埒な事を考えるのが悪い」（カティ）

「もしかしてカティが？」（アカネ）

「普通部屋に一人だけ取り残されたら気付くでしょ？」

それに生徒会としては止めない訳にはいかないですから？」（カティ）

全く何を反省しているのやら、まだ懲りていないナカジマシスタ  
ーズだった。

「しかし、今回は収穫だったな？」

自分がいい気に成りすぎていた事がよく分かった」（クロスリード）

そう、確かに学園では最強だったかも知れない。

でも、魔力が殆ど無い相手に完膚無きまでに負けた。

どれだけ魔力があっても勝てない相手が居る事を知った。

自分が思い描いた理想の強さとは、まだ遙かな遠い先にある物だとはっきり分かった。

「よし、帰ったらもつと厳しい特訓をやるぞ！」

生徒会長の言葉にみんな気合いが入りまくりだった。何としても勝って、ミッドチルダ代表を掴み取る。それがみんなの目標だった。

でも今年のインターミドルは一筋縄では行かない事をまだ知らない一同だった。

特別コラボ小説酔仙×sibugaki 「練習試合」(後書き)

sibugakiさん、ありがとうございました。

次回：スクールに新たな教師達が加わるという計画が持ち上がる。

問題有る人達（前書き）

「確かにこの問題児よりも、もっと問題児な連中ばかりだぞ？」  
（チャチャイ）

「弟子がみんな逃げたのってそっち方面に問題があるんじゃないだ  
ろうか？」（なのは）

「所でそんなリスクを冒してまでも欲しいほど強いんですか？」（  
ティアナ）

## 問題有る人達

「あいつら、覚えてるよ……」(クロスリード)

「一体何枚書いたら良いんだよ……」(ヒビキ)

「文句言ってる暇があったら手を動かす！」(なのは)

今生徒達が地球でやらかした不始末に始末を付ける為、  
3人で始末書を書いていたりする。

「大体校長先生いきなりスターライトは無いでしょう？」

あんな大爆発させるから周りへの被害が大きいんですよ」(クロス  
リード)

「俺達はただの被害者なのになんでこんな事になって居るんだ？」

(ヒビキ)

膨大な量の始末書に辟易な3人だった。

翌日の職員会議、なのははあの話を切り出した。

「何？永全不動八門が？」(佐藤)

「ええ、酷い後継者不足からミッドに引越してくる事になりました。  
た。

それでこの際だからスクールを拡充して今より生徒数を倍に増や  
したいと思います。

それで皆さんに意見が聞きたくて……」(なのは)

「こ、殺される……今度こそ本当に殺される……」（ビリー

ブルブルガクガクなビリー先生、何があったのだろうか？  
昔相当に怖い目に遭わされたようだ。

「私は余り歓迎しないな？相容れない流派もあるし、  
いくら詫びを入れられても昔から鬱陶しかったのよ、  
もうとんでも無くしつこいし、  
月村の血がどうのってだけで殺すとか言って襲ってくるし、  
いっその事滅べば？って思ってたのに」（零

「確かに璃浄葬禍流は世界中で問題を起こしてたからな？  
うちの国でも道教の退魔組織といざこざを起こして宗教戦争寸前ま  
でいったし、

あの時のいざこざを納めるには随分苦勞させられたもんな？」（陳  
「このままこっちに住まわせても良いのだろうか？」（なのは

「確かにここの問題児よりも、もっと問題児な連中ばかりだぞ？」  
（チャチャイ

「弟子がみんな逃げたのってそっち方面に問題があるんじゃないだ  
ろうか？」（なのは

「所でそんなリスクを冒してまでも欲しいほど強いんですか？」（  
ティアナ

「うちのお兄ちゃんは今二度と戦いたくないって言った。  
洒落にならない強さなのは分かってるけど……  
どうも人格的に壊れてるっぽい人達なんだよね？」（なのは



「あたしは反対だ、ここの問題児ですらコントロール出来てないのに、  
そんな奴らコントロール出来る訳無いだろう？これ以上問題を増やさねえで下さいよ」(ヴィータ)

「士郎があと10才若ければ何とかなつたかも知れないが、今の士郎ではちょっと無理だろう？  
ここの卒業生でそれなりの実力者を集めれば、或いは何とかなるかも知れないが？」(佐藤)

「なんか僕らは蚊帳の外だね？」(ロサード)

「うん、ちょっと話について行けそうにない」(ソリス)

「私は逆に面白そうでもいいかもだじょ！」(ピノ)

「面白そうとかそういう問題じゃあないと思うんだけど」(なのは)

「問題児には問題児だじょ」(ピノ)

「まあ、そういう考え方もあるか？少なくともどちらか片方は更生するもんね？」(なのは)

「こんなのはどうだろうか？、まず、教師を担任副担任、講師に分ける。  
各クラス2名の先生が必要になるから、それだけで16人必要になる。

あとは講師にすればいい、まあそれぞれの授業で教えられる人数が減るからその分早く強くできるし、

今よりももつと強い生徒が送り出せるようになる、スクールを拡充するのではなく、充実させる事だ。

でも、それをやるには校長先生にもつと強い指導力を発揮して頂かないといけないけれど……」(佐藤)

「うつつ、そんなにプレッシャーかけないでよ」(なのは)

結局、佐藤先生の案が通る事になった。

スクール拡充計画はスクール充実計画へと形を変えて進行する事になった。

「そっか？それは残念やったなあ？せつかく予算を多めに組んだのに、

それやと人件費が上がる位で、大したことあらへんなあ？

まあ、生徒の資質自体は上がるから歓迎やけど、もつと多くの卒業生が欲しいんよ、

まだまだ戦力不足やさかい、もう少し戦力を充実させたい所なんやけど……」(はやて)

なのはの報告を残念そうに聞くはやてだった。

「でも、卒業生の出世人事もあるしね？上が詰まってくると大変な事になるよ？

今ぐらいのペースが丁度良いのかも知れないね？」(なのは)

「そおやなあ、昔クロノ君にも同じ事を言われたわ」(はやて)

こうして来年からスクールは更なるパワーアップを果たす事になる。

そしてこの話し合いの直後だった。

「……と言う訳や、住む所はすぐにでも手配するよって、……と言う仕事を依頼したいんや、

報酬は10億、それと逮捕出来た場合は賞金も上乘せや、それと分配はそちらで考えてや？」

はやての前には、うかいげんしちゅうりゅう 宇界幻翔流、ほうがさいおちゅうりゅう 峰牙碎皇流、しやまひはへたりゅう 将麒破軍流の3名が集められていた。

そして提示された金額は破格だった。

地球じゃあ滅多に出来ない高額依頼、しかも桁がいつもより二桁多い。

「こ、この金が有れば道場が建てられる……」

彼らは一も二もなくその依頼に飛び付いた。

はやてが彼らに依頼した事、それは怪盗ジャヌヴィアを捕獲しはやての前まで連れてくる事、

都市型テロを計画するにはそれなりの準備が必要なはず、機械兵器を作る工場や大型の倉庫が必要になるはずだ。

そう言った倉庫や工場、敵のアジトを見つけて報告する事の2点だった。

そして、この依頼に成功すれば、最低でも10億、あわよくば何十億という金が入る。

こっちで道場を建てるには充分な金だった。

彼らにとってそれは喉から手が出るほど欲しい金だったのだ。

「よっしゃ、運が向いてきたぜえ」

彼らは依頼を完遂する事が出来るのだろうか？  
そしてはやての心意は何処に？

「くっっ、もう時間がない……」

ヒビキ達は徹夜で受験勉強をする。  
そう、明後日は執務官採用試験だった。

## 問題有る人達（後書き）

次回：執務官採用試験が行われる。

そしてその翌日にはインターカップミッドチルダシリーズが行われる。

## 執務官採用試験の奇跡（前書き）

「これはもしかしたら奇跡の合格率100%有るかも？」

ティアナはほくほく顔で受験生達を見守っていた。

これで今年もボーナス大幅上乘せた、

冬休みは家族で何処かヘリゾートしたいと計画を練るティアナだった。

## 執務官採用試験の奇跡

宇界幻翔流、当主：宇界秀明48才

息子19才が居る、息子の嫁を捜している。忍者の家元ではあるが弟子が居ない。

下忍達も居ない、現在弟子募集中！

峰牙碎皇流、当主：峰牙鷲邇

家族は全員死亡、兄 師鷹は昔 龍と組んであの忌まわしい爆弾

テロを起こし、

御神一族を滅亡寸前にまで追いやった。その時既に峰牙碎皇流を破門になっていたが、

その余波で峰牙碎皇流自体永全不動八門から破門された。

51才現在嫁さん募集中

将麒麟軍流、当主：棋士宣輝

49才娘17才が居る、婿養子を捜している。

御式内を伝えてはいるが大して強くない。

弟子も居らず、普通にサラリーマンをしていたようだ。

でも大震災以降続く不景気により会社が倒産し、

最近はIT関連のアルバイトで生計を立てていた。

娘には御式内と兵法を教えているものの、消滅寸前の流派だったりする。

「そのドククタグはな、発信器になつとるんよ、持っててや？」

24時間以上その場から動かなかつたり、

生命反応が途絶えた時はすぐに救助班が駆け付ける手はずになつてる。

このミッドの中に……この星の中にいる内やつたら相当地下深くと

か、

余程電波を通さない施設の中に入らない限りは、

何処にいても位置を捕捉出来るようになってるから？」（はやて

はやては依頼をする際にドックタグを渡していた。

「やれやれ、いきなり猫に鈴か？」（宇界

「まあ、最後の命綱っちゃあ命綱ではあるが」（棋士

「俺にはこんな物必要ないし、捨てたい所だが捨てたら捨てたで後から五月蠅そうだしな？」（峰牙

「だけど御神は良いよな？この10年で信じられないほど一族を増やしちゃった」（宇界

「さっきのあの子も土郎の教え子らしい、

今はこのミッドチルダの本部長、日本で言ったら内閣総理大臣だ。

それに、孫娘をハラオウン家に嫁がせている。

ハラオウン家当主クロノ・ハラオウンは何でも現在時空管理局長をやっているらしい。

地球で言えばアメリカ大統領だな？」（棋士

「う、羨ましい、と言うか完全に御神に全世界を支配されている気がする」（峰牙

「それだけじゃないぞ、土郎の娘、高町なのはの養子で現在隣国の王様をやっているのが居るらしい。

何でも21年前に大きな事件があってその時に保護した孤児がなんと王族だったらしい」（棋士



「何という強運、それめっちゃめっちゃ凄すぎる？」（峰牙）

「金に権力に名誉まで欲しい物は何でも手に入れてるな？」（宇界）

「しかし学校とは考えたな？学校で教え子を弟子にして増やし、一族に嫁がせる。

その時嫁がせなくても、その子供や孫を一族に嫁がせる約束を取り付けておけば、

教え子の子供の代からはネズミ算式に一族が増える事になる。実に巧い事考えやがった」（峰牙）

「俺達もあそこの教師か講師になれないかな？何とか息子の嫁を確保して後を譲りたいし、

一族を増やすにはあそこが一番だ。そうすれば後を息子に譲って俺は道場を経営する」（宇界）

「もう将来設計かよ？」（峰牙）

「確かに？でもそれにはまず依頼を完遂しないと？」

「金がなけりゃあ何にも出来ん、まずは稼がんと？」（宇界）

「所で、どうやって捜す、次元世界でも相当有名な泥棒らしいが？」（峰牙）

「まあ、情報の収集と作戦の立案は将麒麟軍流しょうきんぐんりゅうに任せるわ、

俺はまず偵察、裏取りに動くから、最後の戦闘は任せたぞ？

でも手加減してやれよ、一般人じゃあお前に触られただけで死んじまうし」（宇界）

「ちつたあ齒応えの有る奴なら良いんだが、軽く度突き倒しただけで死んじまうのが多くてよ、

度付くも何もデコピンの一発で片が付きそうだ」(峰牙)

「だからお前のデコピンは洒落にならねえって？」(棋士)

「しかし、あの本部長は相当なタヌキだな？

この星の中なら何処でも使える携帯電話を渡したんなら、

こんなドックタグいらないだろうに？俺達を相当に監視したいようだ」(峰牙)

「お前が置き忘れるからだろう？それにこの携帯、財布になってるらしい、

こつちじゃあ電子マネーはほぼ100%普及しているらしくてな？

小銭もいらぬ世界らしいぞ？まあ便利な事この上ないが味気ないな？」(宇界)

「誰がタヌキやねん？」(はやて)

実はあのドックタグは盗聴機能も備えている。

そして、要注意人物を監視するのも作戦司令室の業務の一つだったりする。

今はやては作戦司令室のスタッフと3人の会話をモニターしていた。

「くつ、結構難しいな？」(クロスリード)

今2年生の執務官補佐は執務官採用試験を受けていたりする。

クロスリードやヒビキ達生徒会は忙しくて受験勉強が余り出来ないのが現状だった。

でもやるしかない、まあ、学園祭の時バロー口提督から有り難い言

葉を頂いた。

「もし分からなかったら自分が正しいと思う事を書け、自分の正義に照らし合わせて正しければ間違う事はないだろう?」その言葉にどれだけ救われた事か? バローロに感謝しきりのクロスリード達だった。

「次は実技と面接か?」(ヒビキ)

今年もスクールの生徒は厳しい採点官が付いている。と言ってもスクールの卒業生と言う事が多いのだが、この先輩達は愛のある厳しさで受験生達を苦しめる。これもスクールの一つの伝統だったりする。そうやってこの厳しさを乗り越えた者だけが執務官になれるのである。

そして、実技や面接に残っているという事はそれまでの試験に落ちていないという証でもあった。

今年の2年生全員面接まで駒を進めていた。

「これはもしかしたら奇跡の合格率100%有るかも?」

ティアナはほくほく顔で受験生達を見守っていた。

これで今年もボーナス大幅上乘せだ、冬休みは家族で何処かヘリゾートしたいと計画を練るティアナだった。そして奇跡は起きた。

「やりました!なのはさん!全員現役合格です!」

もう、なのはに報告する声が今までに無いテンションだったりする。

今年の2年生の優秀な事、非常に地味ではあるが堅実な生徒が多くて、

将来は名執務官になるだろう事が予想された。

「ふう、何とか終わったな？これで安心して大会に臨める」（クロスリード）

彼は選手ではない、しかしセコンドとして登録されている。

セコンドは3人、クロスリード、ヒビキ、ヴィータがセコンドについて大会を迎える事になっている。

明後日からのミッドチルダシリーズ、過去に類を見ない激戦になる事が予想された。

化け物達が集う強さの競演、誰が優勝するのやら？

そしてここでも奇跡が起きていた。

何と大陸選手権を制したのはプレオだった。

チームTN2Tが全員生き残り、最後の一人もナカジマ家という圧勝ぶりだった。

でもプレオも思う、これが限界だと、

この先は未だ嘗て味わった事の無い超ハイレベルな格闘技の世界、まともにやって勝てる可能性はゼロに近かった。

そして大会前日、プレオは出場選手を知って愕然とする事になる。

招待選手はスクールの生徒だけではない、

そこには高町姉妹（美由希の娘達）の名前があった。

「今年こそ世界選手権にいけると思ったのに……」（プレオ）

それだけじゃあない、知らない名前がいくつもあるがどれも強そうだ。

大半が日本人、恐らくとんでも無い武道家の跡取りだろう？  
洒落にならない強さなのは予想に難くなかった。

「げっ、海人さん出るのかよ？」（ジヨン）

そう与那覇道場の化け物、与那覇海人が招待選手に名を連ねて  
いた。

他にも御神の一族が多く名を連ねている。とてもじゃあ無いが勝て  
る気さえしなかった。

「もう負けられないのに、どうしようっ？」（ジヨン）

## 執務官採用試験の奇跡（後書き）

次回：いよいよ始まるミッドチルダシリーズ、負けられない戦いが幕を開ける。

## ミッドチルダシリーズ開幕！（前書き）

そして翌日、本格的に試合が始まる。

ジョンの相手は別の大陸の大陸王者だった。

## ミッドチルダシリーズ開幕！

棋士逢香 17才

将棋破軍流、当主：棋士宣輝の娘

御式内7段、水鏡、盤上操手、浦霞の使い手、ITを得意として  
いる。

性格に非常に問題がある。山田級のヲタクだ。はやてとは非常に  
馬が合うらしい。

そしてかなりのタヌキでもある。

九角千影 18才

九角閃槍流家元、九角美景（45）の娘、

父親は大震災の時港近くへ救助に向かって津波に飲まれ帰らぬ人  
に……

家や道場は全て津波で失った。弟子の内の何人かも津波で死亡し  
ている。

現在弟子もバラバラになり、母子二人の生活だった。

生活苦から夜逃げするようにしてミッドチルダにやってきた。

貧乏なので非常に金にシビア、その昔、士郎が千影の母美景から  
電車賃を借りている。

何でも帰る電車賃さえなかったとの事、真相は北海道での任務の  
後、

ちよつと金を増やそうとして競馬で擦ってしまい、青函連絡船に  
乗るだけしか金がなかった。

青森まで来た物の、途方に暮れた士郎と恭也はここで金を借りた  
のだ。

その後士郎が借りた金を踏み倒そうとしたので恭也が返しに行っ  
た。

「あの時は非常に恥ずかしかった」と後に恭也氏は語っている。



「つかいたかあき宇界尊章19才

「つかいけんしょうりゅう宇界幻翔流、つかいひであき当主：宇界秀明の息子

現在彼女募集中、他の追従を許さない浦霞の使い手、ただ非常に影が薄い。

その為彼女が出来るなんて事はまずあり得ない。  
父親に連れられてミッドにやってくる。

12月1日午前11時、インターミドル・ミッドチルダシリーズ開幕が開幕した。

まずは開会式、午後からは模範演舞試合エキシビジョンマッチが行われ、1日目は終了する。

エキシビジョンは過去の出場選手の内上位入賞を果たした選手から選ばれる。

と言っても殆どがスクールの卒業生だったりする。

「アステイ、流石に強いなあこの歳になっても衰えるどころか更に切れ味が増しとる。

流石に元世界チャンピオンや？とても子供を8人も生んどるとは思えんで？」（はやて

はやてはモニターで模範演舞試合を見ながら仕事をしていた。

「八神本部長、本局から通信です、クロノ局長かです」

「ああ、今良い所だったのに……」

「はやて、済まないな邪魔したかも知れない。

兼ねてから要請のあった地上防衛計画の一環、疑似モバイルスーツに

ついて、  
地上本部に5機の配備を決定したよ、1番から5番世界に5機ずつ、それぞれ配る事にした。ついては年内に地上本部前に大型ドックの建設を始める。

疑似モビルスーツが5機と運用艦1隻を配備する予定だ。3月までに配備を完了する」(クロノ)

「やっと許可が降りたんや？で？機種はなんや？」(はやて)

「隊長機にストライクE、それ以外はウイングダムだ」(クロノ)

「また随分マニアックな機種やな？」(はやて)

「運用効率を考えればこそその決定だ。ウイングダムならストライクから派生した機体だし、  
装備が共通なんだ。すぐに交換が利く。それに戦場で装備を換装なんて事は非現実的だから、  
運用艦の中での交換となる。そして多彩な装備を持っている機体だ。これだけでも魔導士1000人分近い戦力には成るだろう？でも一つだけ問題があるんだ」(クロノ)

「問題とは？」(はやて)

「パイロットが居ない、本局でパイロットを調達するには限界がある。」

全てのスタッフの調達は各地上本部でやって欲しい。  
恐らく新部隊の立ち上げになるだろう？」(クロノ)

「人事が問題やね？」(はやて)

「まあそう言う事だ」（クロノ）

未だに人手の足りない管理局、人事問題は非常に大変だったりする。

それでも何とか事件までには間に合いそうだ。

はやては年明けまでに新部隊を立ち上げる必要性に迫られた。

そして翌日、本格的に試合が始まる。

ジヨンの相手は別の大陸の大陸王者だった。

「弱い！弱すぎるぞ！普通の正拳突き一発で沈むなよ？あれでも大陸王者かよ？」（ジヨン）

まあ仕方がない。

それだけスクールのレベルが高いのだから？

招待選手や、有力選手は大体3回戦ぐらいから当たる事になっている。

「何よ、こいつ御式内が全く通用しない。同じ御式内同士なのに」

苦戦を強いられているのはナデシコ・ナカジマ（13）で有る。

今年始めて大陸選手権を突破したものの、まともに戦える相手じゃあなかった。

相手は、棋士きしほるか遙香17才だ。

何をしても、どんな攻撃をしてもまるで通用しない、全て読まれていた。

「何をしても無駄よ、あなたは私の術中に堕ちてしまっているの？もう負けるしかないわ？」（遙香）

結局手も足も出せずに完敗した。

プレオをあそこまで苦戦させた彼女がこうも簡単に負けるとは思わなかった。

「やばいよ、あの化け物過ぎだよ？3回戦で当たるし……」(プレオ)

プレオは見えてしまった自分がどうやって負けるのか？  
どう足掻いても勝てる見込みのない事に……

「くっ、同じ槍同士なのに……化け物が……」

まるで次元の違う強さに手も足も出ないのはティントだった。

目の前の相手、九角千影<sup>くすみちかげ</sup>18才、七尺槍を使いこなす化け物だった。

指一本触れる事が出来ずに打ち倒された。

因みに、彼女が使う槍は電池式の簡易デバイスだ。

魔力が無くても非殺傷設定に出来る物だ。大会直前になのはから送られた。

早くもチームTN2Tが二人も消えた。

その余りにレベルの違う強さに武術の奥深さを知るプレオ達、  
やはり、地球からやって来た人達の強さは半端じゃあなかった。

「御神の剣が通用しない？」(ブラッド)

そう、余りに化け物過ぎる相手与那覇海人、その強さは洒落にな  
っていない。

余程強い御神の剣士ならともかく、ブラッドクラスが太刀打ち出来る  
相手じゃあなかった。

彼の戦闘スタイルは空手、しかも気持ちいい位正統派の空手だ。

一応魔力も持つてはいるが医療系に特化している。

「こうなったらこれだ！コレクトアウト！」（ブラッド）

最も強力な攻撃でさえ通用していなかった。

爆煙が晴れると三戦立ちの構え、そう全て耐えきられていた。

まともに攻撃が通用しない、その上その攻撃が重い、

正拳突き一発で動きを止められるブラッド、そこに叩き込まれたのはあの奥義だった。

「不動砂塵爆！」（海人）

「ぐはっっ」

崩れ落ちるブラッド、ガードの上からバリアもあるのにKOされて終わった。

その余りの強さは他の選手もドン引きする位に強かった。

「やべーよ、準決勝に勝ち進めばあの人に当たるよ？勝てねえよ？」  
（ジョン）

男子の部は殆ど彼の優勝で決まりだろうという空気になってきた。

## ミッドチルダシリーズ開幕！（後書き）

次回・出場選手が一人アクシデントで出られなくなる。

そして……大会本部から急遽出場が要請されたのはリンだった。

## リザーバー（前書き）

「皆さんに大変残念なお知らせがあります、本日出場予定だったアルロー選手は子供の命を救う為、

自らの命を投げ出し、今生きる為に必死で戦っています。彼女は我々の誇りです、

試合に出られなくなった彼女の為に、早く彼女が良くなるように祈って上げて下さい。

そして、彼女の代わりにリザーバーを1名招聘しました。リン・ヤマザキ選手です。

倒れたアルロー選手に代わって、力強く戦い抜いてくれる事でしょう」

## リザーバー

インターミドルミッドチルダチャンピオンシップ、開催要項

- 1・選手はDASS公式タグを使用する事
- 2・魔力のない選手は電池式デバイスの使用を許可する
- 3・特殊アイテムの使用を禁止する
- 4・目つぶし、金的攻撃などの基本的反則を禁止する
- 5・周りへの被害の大きいSS級以上の魔導士の参加を禁止する
- 6・エマルジョンコレクトについて、結界陣、防御陣の使用を禁止する

7・特定種族（戦闘機人）の特殊能力の使用を禁止する

8・質量兵器の使用を禁止する

9・試合場への外部からの召喚獣、大型デバイスの持ち込みを禁止する（ただし、その場での生成は許可）

10・相手が倒れた場合はニューラルコーナーへ、倒れた相手に攻撃しない事

タップはギブアップと見なす。タップした相手に攻撃をしない事

11・倒れた場合、意識が有れば10カウントを取る（10カウントノックアウト）

その場で意識がないと判断されれば即ノックアウトとされる

12・アルケミック系魔法・トラップ系魔法の使用禁止

13・反則を犯した場合イエローカードが出される。カード3枚で失格、

なお、2枚目のカードでも同じ反則だったり深刻な反則の場合にはレッドカード一発退場となる

以上のルールを持ってインターカップは開催されている。

ミッドチルダシリーズでは、6大陸の男女上位5名ずつとスクール



の生徒5名ずつ招待選手29名ずつ、つまり男女64名ずつの選手で争われる事になった。

いずれも名の知れた非常に強い選手ばかり、その中に地球の人の名前もかなりあった。

どうやら開催の少し前に引越してきたらしい。そしていきなり招待選手に選ばれている。

相当に強いようだ。

試合日初日は男女それぞれの一回戦の半分が行われ、二日目に残り半分が行われる。

三日目が2回戦、四日目が3回戦ベスト16、5日目が4回戦ベスト8、

6日目の午前が準決勝、午後から決勝戦となる。スクールの模擬戦大会に比べると随分楽な日程である。

そして、決勝に残れば文句なく世界戦に行ける。

残り2名はベストフォーに残っていた選手から選ばれ、後の1人は補欠に回る。

まあ、ベスト4に残ればどうにか世界戦に行く事が出来る訳だ。

試合日初日の夕方だった。

試合場から宿舎のホテルに歩いて移動中だったアルロー・ブリュックト選手（17）は、

道に飛び出してくる小さな子供を見た。車が突っ込んでくる、まだ子供に気が付いていない。

母親が立ち話に夢中で子供から目を離していた。

「危ない！」

思わず彼女は子供に向かって飛び込んでいた。彼女は子供を歩道に向かって突き飛ばす事が出来た物のそこまでだった。

車に跳ね飛ばされてそこからは覚えていない、彼女が意識を取り戻したのは大会が終わってからの事になる。

すぐに救助が駆け付けたものの、状態が酷く高度医療センターに転送されていった。

「酷いわね、緊急手術よ、血算、血ガス、挿管用意！」（シャマル

シャマル先生がその場に来てくれた事が彼女にとって救いだったのかも知れない。

開会本部にも連絡が入った物の、相手選手を不戦勝にするかどうか？もめにもめた。

そしてスクールに連絡が入る。

補欠選手を1名リザーバーとして出して欲しい。

それは大会本部にとって苦渋の決断だった。

不戦勝にするのは簡単だ、でもそれはせっかく試合を楽しみに来てくれる客に申し訳ないし、

相手選手にも申し訳ない、そして何より大会の視聴率が下がる。

仕方なくリザーバーを出す事にしたものの、結構もめた、何処の大陸の誰を選ぶのが困った拳げ句、

スクールの生徒を選ぶのがお手軽で良いと言う事で話がスクールに来た。

「リンちゃん、あなたに出て貰いたい、良いかしら？」（なのは

「えっ、私ですか？」（リン

私は驚いた、さっきの臨時ニューースで選手が一人出場不能になったと言っていたけど、その代わりが私の所に来るなんて思わなかった。でももしかしたら世界戦にまでに出られるかも知れない。地球で経験したとんでも無く強い相手、あの強さに少しでも近付けるなら私は何処までも戦ってみたい！  
こうして私は明日試合に臨む事になった。

「皆さんに大変残念なお知らせがあります、本日出場予定だったアルロー選手は子供の命を救う為、自らの命を投げ出し、今生きる為に必死で戦っています。彼女は我々の誇りです、試合に出られなくなった彼女の為に、早く彼女が良くなるように祈って上げて下さい。」  
そして、彼女の代わりにリザーバーを1名招聘しました。リン・ヤマザキ選手です。  
倒れたアルロー選手に代わって、力強く戦い抜いてくれる事でしょう。」

そう紹介されて私は試合場に出て行く、ちょっと緊張する。でもそれ以上に私はアルロー選手の「代わり」でしかないのだ。この場に立てなかった彼女の代わりに力の限り戦う事、それが今の私の仕事だった。

相手の選手は南半球の大陸の選手、独特のストライクアーツの使い手だ。  
もの凄い身体能力、手足が長くしなやかで抜群のバネを持っている。もしムエタイをやっていたら恐ろしかっただろうな？

「始め！」

「！」

もの凄い速さで突っ込んでくるものの、リンの敵じゃあなかった。奥義「行」の速さにはまるで着いてこられない。

「三つ太刀！」

技が決まってあつという間の勝利だった。

「このまま勝ち抜くと3回戦であの槍使いと当たる。勝てるだろうか？」（リン）

一方スクールサイド、有っては成らない事が起きていた。

ブラッドに続いてカティとラフロまで1回戦負けを喫していた。まさかここまで厳しい戦いになるとは思わなかった。

二人を倒したのは御神一族、御神道場の出身の黒帯だ。

「不味いな？このままではスクールのメンツが保てん、もうこれ以上負ける事は許されんぞ？」（クロスリード）

「地球代表はあれ以上の化け物揃いだそうだ、

お前達はいつらに勝てなけりや世界戦で大恥を掻くぞ？」（ヴィータ）

「これはやばいかも知れない、俺達先輩からどれだけいびられる事か？考えただけでも恐ろしい」（ヒビキ）

既にセコンドは大変な事になっている。

今まで12年の歴史の中で、11回出場して全てスクールの生徒が

大会を制してきた。

特に準決勝以上は全てスクールの生徒だったのに、SSS級の化け物が加わった途端にこの体たらくである。

「一年生に頑張れって言うのも酷だしな？」（クロスリード

「今年の大会、レベル高すぎ」（ヒビキ

会場で「おお」と声上がる。

高町小雪がド派手なKOで勝利を収めていた。

今スクールはかつてないピンチに立たされていた。

## リザーバー（後書き）

次回：2回戦が始まる。その度に数を減らすスクールの生徒達。

## ライバル達の強さ（前書き）

「強いな？御神一族」（クロスリード）

また一人スクールの代表が減ってしまった。  
他は生き残ったようだ。

## ライバル達の強さ

「大陸選手権の雑魚達は粗方消えたな？」（クロスリード

「まだ、それでも半分ぐらいは残っているが」（ヒビキ

そう、今日勝てば3回戦ベスト16だ。

ここまで勝ち残っている主要メンバーは、

女子が、モエギ・ナカジマ、アカネ・ナカジマ、イスズ・ナカジマ、  
マリー・ボーン、

リン・ヤマザキ、高町プレオ、モミジ・ナカジマ、カエデ・ナカジマ  
棋士遙香、九角千影、高町小雪、高町沙由紀、ジャンヌ御神

男子は、ジョン・ハミルトン、バラントイン・ファイネスト、ア  
ード・ベック

与那覇海人、不破貴之、宇界尊章

今回男子は、他の大陸の選手とばかり当たるようだ。

特に見所もなく圧倒的な強さで勝ち抜ける。

問題は女子だ。イスズがジャンヌ御神と当たってしまった。

ジャンヌ御神はフランス生まれの御神一族、強さとしては高町沙  
由紀とほぼ互角、

別名青い目の御神、日仏混血である。使うのは御神の剣そして御式  
内、

イスズはムエタイを使う。

「始め！」



その瞬間ジャンヌの姿が歪んで消える。

「其処だ！」（イスズ

狙い澄ました逆回し蹴りが何かを捕らえた。

「危ない所だったわ」（ジャンヌ

胴衣の袖が切れている。腕に掠っていたようだ。

「マ・トロン！」（イスズ

バキイイイイイイイイイイ

パンチの連打がジャンヌを襲う、

思わずガードしたジャンヌだが、小太刀は碎けて散った。

その連打は途轍もなく重い、しかも手数が多くて捌ききれない。  
溜まらず距離をとる。

「もう少しだったわね？ ライフを削りきれなかったわ？」（イスズ

このまま試合を続けければ、判定では勝てるだろう？

でも相手はそれを許してくれそうにはない、ここからは御式内とム  
エタイの対決になった。

今度はムエタイの方が不利になった。

下手に技を出せば投げられて、関節技に仕留められる。

どうしても慎重に成らざるを得ない。

でもここは攻めないと不味い、イエローカードを出されかねない。

「ハック・コー・エラワン（白神象の首折り）」

相手の膝を踏みつけるように前蹴りを出す。

上手く入った、それを踏み台に膝蹴りを顔面に叩き込む、が、かわされて相手の頬を掠めた。

それでもこの技は終わらない、その状態から肘を相手の後頭部に叩き込むのだ。

「裏投げ！」（ジャンヌ

その肘に会わせて投げ技が来た。

その投げを受け身で流すイスズ、でも放してもらえなかった。

「能禅葛！」（ジャンヌ

関節技だった。

両手で相手の左手の手首、肘、肩を極めた状態で、

左足を相手の首にかけてそのまま地面に叩き付けてへし折る技だった。

まあ、手加減しているので掛けた脚で首を絞めている。

イスズはそのまま絞め落とされた。

「強いな？御神一族」（クロスリード

また一人スクールの代表が減ってしまった。

他は生き残ったようだ。

そして試合三日目、いよいよ本格的な激突が始まった。

本日の組合せ、高町プレオVS棋士遙香、リン・ヤマザキVS九角千影、

ジャンヌ御神VSマリー・ボーン、高町小雪VSモエギ・ナカジマ  
高町沙由紀VSモミジナカジマ  
まさか三日目でこんなに主要なメンバー同士が当たる組合せになる  
とは思わなかった。

そして男子も、バランティンと不破貴之がアード・ベックと宇界  
尊章が当たってしまった。

まずは高町プレオVS棋士遙香  
御式内対決となった。

「ここで御神の剣を使えば多分掴まれて負ける。ママ直伝のあれを  
やるしかない」

プレオはなのは直伝のあの技を使う以外に勝ち目はないと読んで  
いた。

果たして通用する相手なのだろうか？

試合場で二人が見つめ合う。

カーン

ゴングが鳴る、その瞬間遙香はプレオに向かってゆっくりと歩き出  
す。

一方プレオは動けなかった。「居竦み」じゃあない、でも何か別の  
力に体を支配されている。  
体の自由が利いていない。

「奥義、盤上操手操糸」（遙香）

そう、最初に目を合わせた時既に術に掛かっていた。

まさか試合の前から仕掛けられていたとは気が付かなかった。その上その技を会場の誰もが気が付いていない。もうこのまま負けが決定していた。

プレオは絶望的な表情のままやられるのを待つしかなかった。

「気合い入れなさい！」

観客席から怒声が飛ぶ、なのはだった。

その声に我に返るプレオ、そう、その声で技が解けていた。

「動ける！」

その瞬間プレオの姿が歪んで消える。

神速 無拍子 扣歩 徹し、流れるようなコンボが決まる。

崩れ落ちたのは遙香だった。

でも、ここから先はプレオにとって茨の道だった。

次の4回戦あの槍使いかリンのどちらかと当たる。

どちらも相当な強豪、プレオは次の試合を見守るしかなかった。

ライバル達の強さ(後書き)

次回：リン・ヤマザキVS九角千影激しい試合が展開する。

### 3回戦に勝ち残れ！（前書き）

そう、あとは相手をどう間合いに引き込むか？それが駆け引きになりそうだ。

開始線で睨み合う。

### 3回戦に勝ち残れ！

いよいよ私の番だ……なんか胃が痛い。

相手はあの槍使い、七尺槍を使いこなしている。

「リン、示現流の特性を忘れるな、間合いに入ってきた物だけ切り払えば良いんだ。

それ以外の事に目をくれるな、目にすれば対処が遅れる」(ヒビキ

そう、あとは相手をどう間合いに引き込むか？それが駆け引きになりそうだ。

開始線で睨み合う。

カーン

ゴングが鳴った瞬間だった。

リンは追籠を仕掛ける。

「喝！」

どおやら通じないみたい。

かなり強い相手と見た。

千影は槍をビリヤードのように構える。

「奥義、八寸」

間合いの外からだった。

まだ遥かに届かないはずの槍がのびてくる、

リンの肩口を掠めてバリアジャケットが弾けて破れた。

ライフ - 1200 ダメージ中程度の打撲

「今の何？」

槍自体が伸びている訳じゃあないのに技が伸びてくる。

しかも信じられないほど早い突きで突き入れてくる。

間合いさえ掴めない。

「間合いが掴めないって怖いでしょ？あなたはこの恐怖のまま倒されるのよ？」

千影はそう言ってリンを威圧する。

困った、間合いが掴めない以上飛び込む訳にはいかない、

魔法戦を仕掛けるには隙が無さ過ぎる。

でも私は負ける訳にはいかない、私をここに出させてくれたあの選手の為に、

私はここを突破する！世界選手権にまで出てみせる！それが私が誓った事だから！

私は思いつきり後ろに飛び退いて距離をとる。

流石に相手も八寸を撃っては来ない、これだけ距離があると撃てないようだ。

私は飛梅に手を掛ける。

「疾風一迅！」

宮ノ内示現流の居合いから疾風一迅を放つ、

この距離で避けられるのは難しい所だけど、やはり避けられた。扣歩の応用だった。



「重破剛練斬！」

本命はこつちだ。

疾風一迅を放ったあと振り抜いた刀をそのまま左肩に担いですぐに放てる2撃目の技、

それが重破剛練斬、消費魔力は大きいけれど、

このタイミングで出されたらすぐに2発目の扣歩で避ける事は不可能だったりする。

扣歩は単発な技で、連続使用が出来ない技だ。

まあそれでも足捌きをもと凄く早くして連続的に使っているように見せるぐらいの事は出来る。

しかし避けられた。千影は床を強く突いてその反動を利用して斜め後ろに飛んでいた。

「ぐつ避けられた」

「い、今は危なかった、貰っていたら終わっていた。

違う魔法を連発出来る魔導士なんて居ないって聞いてたのに、話が違っじゃない？」

ライフ-40 ごく僅かのダメージ

当たらなくてもこの威力、今は相当やばかった。

リンは蜻蛉の構えで千影を睨む、有る程度離れるとお互いの技は通用しない。

かと言って間合いの内側に入れなければリンは勝てない。

しかし相手はかなりの手練れ、簡単に間合いには入らせてくれない。

また千影が槍を構えて近付いてくる。

不意にリンが構えを変えた。

刀を中段正中に構える北辰一刀流の構えだ。

「奥義、八寸！」

「奥義、巻上げ！」

その瞬間、鮮やかに槍が宙を舞った。

「三ツ太刀！」

リンの後ろで千影が崩れ落ちて試合が終わる。

相手の心臓を狙ってくる八寸は、よく見れば下から弾き上げやすい技だった。

其処へ北辰一刀流にもある奥義巻上げが綺麗に決まった。

そして柄物を失った千影にはもう為すすべがなかった。

リン、3回戦を突破する。

次はプレオと4回戦で当たる。御神の剣との勝負だ。

プレオもこの勝負を冷や汗を垂らしながら見ていた。

もの凄いハイレベルな試合だった。

どちらも気を抜いたら、命を落とすかと思うほど危険な技を繰り出している。

果たして今のプレオでこの二人に勝てるかどうか？

それは全く分からないギリギリの所だった。

「じゃあ、私の番ね？」

マリーはアップを終えると試合場に向かう。

相手はジャンヌ御神、フランス生まれの御神一族、洒落にならない強さの相手だ。

彼女は試合場に向かう時から既に霞み始めていた。

「霞み技か？」（ジャンヌ

厄介な相手だった。

一応自分も霞み技の真似事ぐらいは出来る。

でもここまで本格的な霞み技はまだ出来ない。

いくら魔力がないと言っても、霞み技はかなり難しい技術なのだ。

余り得意でない為、最近は練習さえしていなかった。

元々霞み技は相手から姿を隠して逃げる為の技、相手に発見されない為の技術だったりする。

そして格闘技の4大奥義の一つでもある。そう簡単に極める事は出来ない。

カーン！

ゴングが鳴った。

その音が鳴り止まぬうちに、マリーは忽然と姿を消す。

こうなるともう見つけれられない。

（この子のパターンはここから発頸か通背拳が来るはず）

ジャンヌはそう分析していた。

だから目を閉じ気配を読み、マリーの気配を感じようと神経を研ぎ澄ます。

バシッ

発頸などではなかった。

足を払われていた。

「金剛搗確！」こんごうたつきたい（太極拳の一手、膝の上に乗せた頭を裏拳で打ち砕く）

倒れる瞬間、頭を下から膝蹴りが、上から裏拳が挟み撃ちにする。ジャンヌ御神は脳を揺らされ立ち上がる事は出来なかった。マリー4回戦に駒を進める。

3 回戦に勝ち残れ！（後書き）

次回：試合はどんどん進む。他は誰が勝ち残ったのか？

最強の姉妹（前書き）

「こりゃ男子は望み薄だな？準決勝で全滅、って所だろう？」（ヒ  
ビキ

「もっと仲間を信じてやれよ、アードは決勝まで残るかもな？」（  
グイータ

## 最強の姉妹

高町小雪VSモエギ・ナカジマ

御神の剣VS御式内杖術、どちらも御式内を使いこなす。

高町小雪は次期御神の正当後継者でもある。

女子の部の優勝候補でもある。

モエギも話には聞いている。

最強のサムライの一族、その中の最強中の最強、

まともに戦って勝てる相手ではない事も分かっている。

「何処までやれるか分からないけれど、やれるだけの事はやる」

二人が開始線で睨み合う。

カーン

ゴングが鳴り止まぬうちにモエギは崩れ落ちた。

いきなりの閃だった。何の反応もさせてもらえぬうちに試合が終わってしまった。

高町沙由紀VSモミジ・ナカジマ

御神の剣対決だった。

カーン

その瞬間お互いの姿が歪んで消える。

試合場のあちこちでもの凄い撃ち合いが起きている。

音と飛び散る火花と残像だけが戦いの激しさを物語る。

次の瞬間、モミジは打ち倒されて試合が終わった。

2段神速からの雷徹だった。

これでチームTN2Tはプレオだけが生き残った事になる。

余りにレベルの高い試合に、観客は呆然だった。

そして男子の部が始まる。

ジョン、海人は順調に勝ち抜け、ベストエイトに駒を進める。

バランティンVS不破貴之

御式内対御神の剣（不破流）、これもまた面白い対決だった。

カーン

ゴングが鳴った瞬間、バランティンは神速を発動して飛び込んでいく、

相手も神速で対応する。どうやら速さは互角、

ただ知っている技という面に於いて相手に部が有りすぎる。

「くっ、オリジナルの剣技じゃあ御神の剣に歯が立たない！」（バランティン

全く持つてその通りだった、まだ初步の型を習い始めたばかりのバランティンに対して、

相手は何年もの間技を磨き込んできただけ有る。とても敵うような相手じゃなかった。

二人が動きを止めた時、バランティンが崩れ落ちて試合が終わった。



アード・ベックVS宇界尊章

太極拳・棍術VS御式内・忍法と言う面白い組合せ、宇界は今の所忍法は見せていない。

かなり実力は高いと見た。

ヒュオオオオオオオオオオオオ

アードの棍が唸りを上げる。

舞花棍はソリス先生や陳先生と同レベルだ。

しかも入場してきた時からずっと舞花棍をやって相手を待っている。其処へ宇界尊章も入場してくる。

「やりにくいなあ、中国拳法だし棍だよ？」

そう、彼にとってやりにくい相手だった。

カーン

容赦なくゴングが鳴る。

その瞬間、宇界尊章は霞んで消えた。

そう、忍者ならよく使う霞み技だった。

「風拳斬雲！」

纏糸頸の状態から棍を振り回して無数の真空刃を飛ばす奥義だった。

アードは全方位に風拳斬雲を放って見せた。

「ぐあっっ」

いくら消えていても其処にいない訳じゃあない。

尊章は数十発を受けて片膝を突く、ダメージ裂傷・全身に43カ所、ライフ-7800ダメージ大  
全身に激しく痛みが再現される。実戦だったら重傷は免れない。

「極纏直刺！」

動けなくなった所に必殺の一撃、その一撃が宇界尊章の腹を捕らえていた。

実戦ならほぼ即死レベルの衝撃、宇界はここで意識を手放した。

圧倒的な強さを見せ付けてアード・ベックベストエイトに進出する。

「何だ、男子はベスト4決定じゃないか？」（クロスリード

そう、ここで他の雑魚達4人が勝ち上がっていた為、明日のベス

ト8は、

ジョン、海人、アード、不破貴之の4人が勝ち残る事がほぼ決定していた。

「こりゃ男子は望み薄だな？準決勝で全滅、って所だろう？」（ヒビキ

「もっと仲間を信じてやれよ、アードは決勝まで残るかもな？」（グイータ

そう、最後の砦はアードだったりする。

そして、女子はもっと深刻だった。

多分決勝は高町姉妹になるだろう事が予想に明るい。

まあ、とにかく準決勝に残れば世界戦は確実なのだが、この10年、スクールの生徒が優勝を逃すなんて事はなかった。今、その伝統が途切れようとしている。それは極めて由々しき事態だった。

## 最強の姉妹（後書き）

次回：ベスト4の戦いを前にそれぞれ何を思うのか？

## ブレオ破れる(前書き)

結局神速1回分無駄になった。

これはやりにくい、リンの強い視線に気圧されて踏み込めない。

## プレオ破れる

さて今日はベストエイトの激突。

高町プレオ、リン・ヤマザキ、マリー・ボーン、高町小雪、高町沙由紀と雑魚が3人、

注目は、高町プレオVSリン・ヤマザキだった。後は雑魚が消えるだけなので大したことはない。

流石のプレオも今日ばかりは負ける覚悟をしなければならなかった。実はプレオ自身、まだ出来ない技がたくさんあるのだ。

神速は出来るけど、2段や閃はまだ出来ないし、居竦みも破れない。水鏡は出来るけど、盤上操手までは至っていない。

実力は拮抗しているけれど、相手には居竦みに当たる追籠がある。簡単には手が出せない。

リンはこの試合プレオが相手で本当に良かったと胸をなで下ろした。

出来れば雑魚の人達と当たりたかったけど、まあそれは仕方ない事だった。

その次にマシな位の相手、実力は拮抗している。

倒せない事はないけれど、油断は成らない。

そして呼び出しが掛かる。

居合い構えで試合に臨むリン、相手がどう出てくるのかを窺いながら後の先を取る作戦のようだ。

カーン

ゴングが鳴る。

その瞬間、プレオの姿が歪んで消える。

リンはまだ動かない、静かにいつでも抜く体勢のまま相手を待ちかまえた。

だがプレオは斬りかかれなかった。

いくら早く動いてもまるで隙がなかった。

飛び込んだ瞬間一撃で倒される、その居合いと言う余りに早い剣技の前では為すすべがないからだ。

結局神速1回分無駄になった。

これはやりにくい、リンの強い視線に気圧されて踏み込めない。

「くう、強いよ、予想を遥かに超えてるよ」

プレオはどうにも攻め倦ねる。

それが自然と嫌らしい距離になって二人の間を分かつ。

(こつなつたら、何とか読むしかない！)

プレオが目を合わせようとした瞬間だった。

強烈な殺気を叩き込まれ其処へ居合いの一撃が入ってしまった。

そう、追籠だった。リンは始めから追籠を狙っていたのだ。

連続で気当たりを入れていれば相手は攻め倦ねる、

そうすれば必ず水鏡に出るだろうと……

ここまで圧倒的な強さで勝ち上がってきたプレオでさえ勝てなかった。

それだけスクールの生徒は強いのだが、更にその上を行く高町姉妹が居る。

プレオはその遥かに高い頂を感じる事となった。

そして明日は午前中に準決勝、午後から決勝になる。  
組合せはこうなった。

高町小雪VSマリー・ポーン、高町沙由紀VSリン・ヤマザキ

与那覇海人VSジョン・ハミルトン、不破貴之VSアード・ベック

スクール全滅の危機だった。

その夜、緊急ミーティングが開かれる。

「これは由々しき事態である、

このままではこの10年の伝統がここで終わってしまう事になる」  
(クロスリード)

そう、ここまで10年間無敗だったスクールの生徒達、今その無敗伝説が終わろうとしていた。

まあ、今更選手に頑張れと言っても仕方のない事なのだが、せめて準決勝全滅だけはしてくれろなと檄が飛ぶ。

「負けるつもりはないけど、あの人には勝てねーよ」(ジョン)

そう、ジョンと海人は同い年、

ただほんの数ヶ月誕生日が違うだけの年下ではあるものの、この実力差は余りに大きかった。

ジョンはまだ空手を始めて1年にも成らないが、海人は12年というキャリアがある。

全ての奥義を究め、自在に使いこなしている。

道場一強いとも言われる(与那覇輝馬先生を除いてだが)



それだけ強いからこそ、ジョンも年下相手に気を使っているのだ。

「ジョン、あいつの攻略法はないのか？」（アード

「有ったら俺の方が教えて欲しい」（ジョン

スー先生曰く、「海人は空手の申し子」と言うだけ有ってその強さは抜きに出ている。

アードは既に決勝戦を意識した作戦を立てているようだ。明日の不破貴之戦は何か攻略の糸口を見つけたようだ。

女子の部はもっと深刻だった。

剣技だけなら生徒会長よりも強い高町小雪、どう見てもマリーには荷が重すぎる。

リンも高町沙由紀が相手である。2段神速には対応出来ないし、それに付き合えば間違いなく即負けが決定する。勝てる見込みのない相手、絶望的な見通しだった。

「リンは良いよ、まだ攻略法があるから」（ジョン

「えっ、攻略法何てあるの」（リン

「居合いがあるじゃん、

あれマツハ拳と同じでタイミングさえ合えば神速封じになるじゃん、俺がブラッドをぶっ飛ばした時みたいに」（ジョン

そう、神速は強引に止められた時、その反動が大きいという欠点がある。

タイミングさえ合えば、強烈な一撃を真正面から叩き付けて止めれば、

その反動で相手の足を奪う事が出来る。

私はその時始めて気が付いた。

ジョンの能力の怖さに、相手の弱点を見つける事に極めて特化している事に、

そう、言われてみればその通りだった。

神速系の技を強引に止めてしまうほどの攻撃は、例え受け止められ  
たとしても、

相手にかなりのダメージを与える事が出来る。私はそれに賭けるし  
かなかった。

「ブラッドさん、今から2時間だけ付き合ってください、

もしかしたら明日の試合用に必殺技が出来るかも知れません」(リン

「おいおい、そんな付け焼き刃で勝てるような相手じゃあないぞ？」

(ブラッド

「付け焼き刃でも何でもやるしかないんです。

それしか勝つ方法はないんですから」(リン

それから2時間、クロスリードや先生方も手伝ってリンの特訓が  
開始された。

2時間後……

「ヒビキ、お前の妹本当に化け物だな？」(ブラッド

「はは、まさかあんな事を考え付くなんて思わなかったよ」(ヒビキ

「こっちの消耗も考えて欲しいぜ？」(クロスリード

協力を申し出た者はボロボロにされていた。

リンは高町沙由紀対策を考え付いたようだ。

これが明日の本番で何処まで生かせるか？それが課題だったりする。

ブレオ破れる(後書き)

次回：準決勝が始まる。

## クラッシュエミュレート(前書き)

一瞬だけ現れたマリーは小雪の足に蹴りを入れるとまた消える。実に嫌らしい攻撃だった。そう、まともによっても勝つ事など出来ない。

でも、精神的に削りまくって勝つという嫌らしい作戦だった。

## クラッシュエミュレート

さあ今日は最終日、インターミドルミッドチルダシリーズも今日で終わりである。

今日は午前中に準決勝、午後から決勝が行われる。

組合せは以下の通りだ。

高町小雪VSマリー・ポーン、高町沙由紀VSリン・ヤマザキ

与那覇海人VSジョン・ハミルトン、不破貴之VSアード・ベック

無神経な評論家達はスクール全滅の危機を語る。

もう、女子の部は高町小雪、男子の部は与那覇海人で決まりだろうと語っていた。

まあ、確かにそうだ。でも、そう簡単には終わらない。

勝てないにしても、それなりに苦戦させて存在感だけは示してみせる！

朝、一発目の試合は注目の高町小雪VSマリー・ポーン  
もう会場は満員御礼だった。

両者が入場してくる。

マリーはいつもの如く霞み始めている。

(消えられる前に全て終わらす)(小雪)

小雪はこの厄介な相手を一瞬で仕留める作戦を立てていた。  
お互い開始線に着いた時、マリーは相当薄く霞んでいた。

カーン

ゴングが鳴ったその瞬間、小雪は閃を仕掛ける。しかし、間に合わなかった。マリーは消え失せていた。こうなるとやりにくい小雪、完全に防戦に回らざるを得ない。

そう、御神の剣にとってこう言う防戦が一番苦手だったりする。下手に動けば余分な体力を消耗する、それにどこからどう仕掛けてくるのか？予想も付かない。

1分、まだ仕掛けてこない、2分、まだ仕掛けない。小雪は苛立ってきた。そう精神的に削られ始めていた。そろそろ3分、このまま何もしなければそろそろマリーにイエローカードが出る。

その時だった。

ビシッ

一瞬だけ現れたマリーは小雪の足に蹴りを入れるとまた消える。実に嫌らしい攻撃だった。そう、まともによっても勝つ事など出来ない。

でも、精神的に削りまくって勝つという嫌らしい作戦だった。

また1分、2分と時間が経つ、3分ギリギリの所で仕掛けてきた。また同じ所に蹴りを入れて離脱する。

今度は30秒ほどで蹴りを仕掛けてきた。

1発の威力など大したことがない、十分に耐えられる威力だ。でも、気配を感じた時には一発貰っている。

マリーは一撃入れた瞬間にはすぐに消えて離脱を繰り返す。

（このままじゃあ埒が空かない、削られ続けて時間切れで判定負けする。

始めから判定狙いだっただか？）（小雪

そう、このまま削られるだけだと試合時間が過ぎれば判定負けは確実だ。

かといって有効な手段と言えば無拍子だけだが、それを許さない絶妙な速さで消える相手、

小雪は必死に作戦を考える。

ビシッ

また同じ所へ蹴りを入れて離脱される。

（こうなったら、イチかバチかの扣歩で背後を取るしかない。次の蹴りが勝負！）

次の瞬間、斜め後ろに気配、小雪は無拍子からの扣歩を入れようとした。

「足が動かない？」

そう、マリーは始めからこれを狙っていた。

クラッシュエミュレートだった。

同じ所に弱い打撃を積み重ねる事で徐々にクラッシュエミュレートを発生させていたのだ。

確かに弱い打撲としか判定されない蹴り、でもそれを寸分違わず積み重ねると、



ダメージの蓄積を計算されてクラッシュエミュレート判定される。

そう、これはヴァロットの授けた作戦だった。

前日彼女はヴァロットの所へ相談に来ていたのだ。

「あの、どうやったらああ言う強い相手に勝てるのでしょうか？」  
(マリー)

「今から鍛えた所でもう間に合わんさ、だが、頭を使え、  
アイディアなら試合当日でもいくらでも間に合うんだ。」

ルールに縛られるのではなく、ルールを最大限利用するんだ」(ヴァロット)

クラッシュエミュレートは既に骨折レベルと判定されていた。  
痛みによるライフの半減を1分当たり600とカウントされライフ  
がどんどん減っている。

ライフは残り半分を切っていた。

ビシッ

また寸分変わらず同じ蹴り、でも痛みがまるで違う、  
そう骨折を再現した痛みが蹴られた部分から発生する。

もの凄く痛い。そして相手はそれが分かかっていて容赦なく蹴ってくる。

痛みが増せば削られるライフがどんどん大きくなる。

実戦なら何とも無い蹴り、しかし、ルールという奴は残酷だ。

小雪は今までこう言う汚い戦い方をする相手と戦った事がなかった。  
そして今、無敗の伝説が終わろうとしている。

どんどんライフを削られている。

消えては現れ、その瞬間に蹴りを入れられて離脱される。

とても、反撃するだけの力は残されていなかった。

ビシッ

一撃の奪われるライフが2000を超えろ。

もう神速を発動する事さえ敵わず、飛び込んできた相手にカウンタを一撃入れるのがやっとだが、それすら敵わない。足を封じられた御神は羽をもがれた鳥の如く弱かった。

(このまま削り倒す)(マリー

試合時間一杯を掛けてマリーは小雪を徹底的に削って判定勝ちした。

まさか高町小雪が負けるなんて誰が想像しただろうか？

彼女はマリーに負けた訳じゃあない、ルールに負けていたのだ。ルールを良く把握していなかったのが命取りだった。

マリー決勝に駒を進める。

## クラッシュ・エミュレート (後書き)

次回：男子第一試合、ジョンは海人に勝つ事が出来るだろうか？

真・正拳突き（前書き）

「ジョン、お前は道場で何を習った？空手の神髄を忘れたか？」

海人はそうジョンに言葉を投げかける。

そう、ジョンは勝とうとする余りに忘れていた。

空手は常に一撃必殺でなければならぬ、手数に頼って削り勝つなど合っては成らないのだと。

そう、お互い一撃で勝負を決する事、彼はそれを望んでいたのだ。

## 真・正拳突き

まさかマリーがあんな作戦で小雪さんを倒すとは思わなかった。見ていて背筋が寒くなる。決勝戦、恐らく私とマリーの対決になるだろう？

マリーって本当に容赦ないな？

さて、今度は男子の第1試合、与那覇海人とジョンが激突する。ジョンにとって手も足も出せない相手、この実力差をどう埋めるのが勝利の鍵となる。

俺はマリーの勝利に自分の活路を見出していた。手数で勝負して、クラッシュエミュレートに持っていく、そこから一気にラッシュを掛ける。でも、それが通じる相手だろうか？

二人が開始線で睨み合う。

コオオオオオオオオオオオオオオオオツ×2

二人同時に息吹を始める。

カーン

ゴングが鳴った瞬間、二人ともその場に残像を残してまっすぐに突撃していた。

試合場のど真ん中でお互い技を繰り出し合う。

「「渦廻斬輪蹴！」」  
うずまわしざんりんけり

お互いの技が相殺し合う。

「ジョン、なかなかやるじゃあないか？」（海人

「まだまだですよ、まだ俺じゃあんたには勝てない、今のだって削られるライフの量は俺の方が多かった」（ジョン

お互い技を繰り出し、それを捌き合う。

そうしていてもやはりお互いの技の重さ、防御力の差がライフの量となって現れる。

「こうなったら」

ジョンが後ろに飛び退いて距離を取る。

「散弾拳！」

これなら逃げられずに喰らう事となる。

それでもまるで効いていない、三戦立さんちんたちで凌がれる。

「ライフは？」

ジョンはちらつと電光掲示板に目をやる。

僅か50ポイントのダメージ、このまま魔法を使っても自分が魔力切れするだけだった。

ジョンは相手の防御力の高さに驚かされる。

「くそう、削り勝てねえ」

「ジョン、お前は道場で何を習った？空手の神髄を忘れたか？」

海人はそうジョンに言葉を投げかける。

そう、ジョンは勝とうとする余りに忘れていた。

空手は常に一撃必殺でなければならぬ、手数に頼って削り勝つなど合っては成らないのだと。

そう、お互い一撃で勝負を決する事、彼はそれを望んでいたのだ。

「ジョン、お前に見せてやろう、空手の最終奥義を！」

海人が距離を詰める。

そこから繰り出されたのはごく普通の正拳突きだった。

でも、ジョンは避ける事も防御する事も出来なかった。

何をされたかさえ分からずにジョンは崩れ落ちて試合が終わる。

「恐ろしい、あの歳であれを使う奴が居ようとは？」

試合を観戦に来ていた高町士郎はついそう呟いた。

私は驚いた、ジョンが軽い正拳突きに簡単に倒された。

何故避けられなかったのか？何故防御出来なかったのかさっぱり分からなかった。

試合を見ていた殆どの人間が気付かなかっただろうか？この正拳突きの真の恐ろしさを？

試合後の事だった。

「海人さん、一体何をしたんですか？」（ジョン）

ジョンは自分がされた事を全く覚えていなかった。

いや、認識出来ていなかった。

「最終奥義、真・正拳突きだ」

「真・正拳突き？」

「あの突きには気配も殺気も全く無いんだ。だからどんな達人を持ってしても、避ける事も防御する事も不可能で為すすべ無く喰らってしまう。そう言う技なんだ」

そう、空手の最終奥義、それは一撃必殺を極めたその行き着く先にあつた真の正拳突きだった。

どんな達人を持ってしても不可避な一撃、喰らえば確実に倒れる一撃だった。

ジヨンはそれを受けていたのだ。後から教えられてその恐ろしさにゾツとしたジヨンだった。

（因みにこの技はあの範馬裕次郎が唯一手傷を負わされた技でもある）

「ジヨン、お前は俺が10年掛けて体得した事を1〜2年で体得しようとしている。

その才能が羨ましいよ、お前は……お前なら出来るだろう？

この正拳突きを超えるもつと高いステージの技に辿り着く事が……」

海人はそう言って控え室に戻っていった。

ジヨンはアードが海人に確実に倒される事を確信した。

次は私の試合だった。

相手は高町沙由紀、あの無敵の剣士高町小雪の妹、まだ閃は出来ていないようだけど2段がある。



御式内だつて相当な腕だ。でも、今回は私が勝たせて貰う。  
私は夕べの特訓の成果を見せるべく、試合場に向かった。

**真・正拳突き（後書き）**

次回、男女それぞれの準決勝第2試合が行われる。

## 抜刀爆裂剣（前書き）

そう、相手はスピード勝負を要求しているのだ。

御神に対してスピード勝負を挑む、無謀とも言える事だが、

逆にそれを制すると言つ事は自分の方が早いという証明にも成る。

## 抜刀爆裂剣

高町沙由紀VSリン・ヤマザキ

注目の一戦だった。方や最強を誇る剣士の妹、

方や10年連続世界チャンピオンを排出するスクールの生徒、

どっちが勝つのか分からない。

ただ実力は拮抗していてとても面白い試合だと誰もが認識している。

二人が試合場に姿を見せる。

お互い負けられない試合、高町家も御神一族としても後が無く、  
スクールとしても後のない試合だった。

リンは開始線に着くとすぐに居合いの構えを取る。

いつでもどうぞ？と言う意思表示だ。

神速が勝つのか？居合いが勝つのか？勝負は一瞬で決まる。

(こうなったらいきなり2段で仕留めるしかない) (沙由紀)

そう、相手はスピード勝負を要求しているのだ。

御神に対してスピード勝負を挑む、無謀とも言える事だが、

逆にそれを制すると言う事は自分の方が早いという証明にも成る。

開始線で睨み合う二人、リンはデバイスに魔力を込める。

カーン

ゴングが鳴った瞬間、勢いよく神速を発動する沙由紀、しかし……

ドゴオウウウウウウウウウウウウウウウ

もの凄い爆発と共に神速を止められ後ろに弾き飛ばされた。

何が起きたのかさえ分からない。あの時確かに刀が光っていたのは覚えてる。

それが何故？確かにガードしたはずだった。

でも、致命傷レベルの一撃を確かに貰ってしまった。

神速を止められた反動と、クラッシュエミュレートが同時に体に襲ってくる。

もう、まともに動く事すら出来なかった。ライフは残り100ちよつとしかない。

「もう反撃する力は残っていないようね？」（リン）

そう言つて頭に一撃入れると試合が決していた。

「今の技は？」

見ている誰もが驚いただろう？

超神速の抜刀居合い、しかも相手にぶつかった瞬間爆発していた。

そうこれはジョンの爆裂拳の応用だった。

疾風一迅と爆裂拳の中間のような技、バスターを纏つて一撃叩き込んでいた。

しかもそれだけではない。

居合いの加速に更に砲撃を付加する事で剣速を更に上げていたのだ。

鞘に魔力を込め、砲撃と共に剣を打ち出す事で居合いを加速、

刀の方にはバスターを纏わせて何重にも重い衝撃を発生させる新しい必殺技だった。

恐らく、練習を積みめば閃にも引けを取らない必殺技になるだろう？  
速さを制する新たな必殺技をリンは「抜刀爆裂剣」と名付けた。

これで、決勝戦リンVSマリー再びとなった。  
そして男子の第2試合が行われる。

不破貴之VSアード・ベック  
御神の剣VS太極拳・棍術

ヒュオオオオオオオオオオオオオオオ

アードは入場してきた時から舞花棍をしていた。

御神一族最後の砦である不破貴之、もう負けられなかった。  
お互い開始線で睨み合う。

カーン

「極纏直刺！」

ゴングと同時に一撃撃ち込んできた。

神速に行かせない為であり、この一撃で全てを終わらせる為だった。  
貴之は思わず小太刀でブロックする。

しかし、その小太刀をぶち折られリング外まで飛ばされていた。

ただの棍じゃあなかった、両端に石突き、如意棒だった。

そう、アードの棍は如意棒にも変化するのだ。

その変化を気付かせない為に舞花棍をやりながら入場し、そのまま  
一撃に繋げたのだった。

貴之は立ち上がれなかった。

モロに鳩尾に一撃入ってしまったていた。

ライフはごく僅かに残っていたものの、試合続行不可能で負けを宣告された。

アード・ベック決勝戦に駒を進める。

しかし、相手はあの化け物だ。

果たして何処まで戦えるやら？

意外と試合時間が掛からずに試合が終わった物の、

選手の回復時間であるとして午後2時からの決勝戦が優先される。

「ねえ、ジョン、何故あんな緩い正拳が避けられなかったの？」  
リン

私はジョンに聞いてみた。

「あれは避けられる物じゃねえよ、殺気も気配も全くないんだ。

気配で動きを読む俺達にとって全く避けられない正拳なのさ。

どんな達人でも絶対に避けられないと海人さんは言ってたよ」  
（ジョン）

それを聞いた全員が戦慄する。

そう、例え来ると分かっても絶対に避けられない。

それが如何に恐ろしい事かその言葉でよく分かる。

勝つ事など不可能なのだ。

「それに、あれは何年もひたすら正拳突き of 練習を積んで、

それこそバカみたいに、ただひたすら正拳突き of 練習を積み重ねて、

一撃必殺を極めて極めて、極め抜いた向こう側にある技だ。

とてもすぐに真似の出来る技じゃあねえよ、あの人の凄さがよく分かったよ」

ジョンは遠くを見るような目でそれを語った。

そう、一つの事を極めて極めて極め抜いた向こう側とは、

それだけ高く遠い頂きだった。ジョンはその高く遠い頂を眩しそうに見上げていた。

私は思った。ジョンには自分の目指すべき目標が見えている。私は何を指したら、誰を目標にしたらいいのだろうか？

私はそれを思いながらお昼を食べた。



## 抜刀爆裂剣（後書き）

次回：いよいよ決勝戦、今年のインターミドルは誰が優勝するのか？

優勝と友情と（前書き）

「うーんどうだろ？たまに副作用でそうなる人もいるけどね？

まあ、ちよっと食費が増えたり子宝に恵まれたりするだけだから？」

（シヤマル

「えっそれってどう言う事？」（アルロー

「それがね、もの凄い大食らいになると、時々痴女になるんです」

（リン

## 優勝と友情と

さて午後から、決勝戦。

まずは男子から、こちらはもう注目もされていません、もう優勝が決まっているような物だから。

与那覇海人VSアード・ベック

生徒会最後の砦はこの人なのだが、とても勝てる気はしない。二人が開始線で睨み合う。

カーン

「極纏直刺！」

アードはいきなり勝負に出ていた。

「今の一撃、申し分ない、だが相手が悪かったな？」

海人はその一撃を掴んでいた。

普通なら弾かれてしまっただけで掴めないはずの極纏直刺を考えられない握力で掴んで止めた。

「これで逃げられまい」

そう、魔導士にとって自らデバイスを手放すという事は死に直結する。

だから絶対に放すなと教えられている。

「つりゃ」

アードは正拳突きに飛ばされて観客席前の壁に叩き付けられてそのまま終わった。

余りの実力差に誰も声を上げることなく終わってしまった。

そして女子の部が始まる。

先ほど高町姉妹を汚い作戦の末に破ったマリー、圧倒的な破壊力で叩き潰したリン、この二人一体どちらが勝つのだろうか？

二人が入場してくる。

マリーは霞む事がもうお約束だった。

リンは居合いの構えで開始線に着く、こちらもお約束だ。

カーン

「疾風一迅！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオ

水平に抜かれた居合いから放たれたのは疾風一迅、

しかも、短い距離に広範囲に広がっていた。

マリーはいきなりの疾風一迅に逃げ場を失い喰らうしかなかった。

一気にライフが削られる。

そう、リンは疾風一迅の威力と打ち方を調節し、広範囲攻撃に切り替えていたのだ。

その範囲は両角120度になる。

ダメージ、裂傷、熱傷、打撲、 - 12 / 500、ライフ残量2、

霞み技を使っているマリーにとって激しい動きや魔法を使う事は不可能だった。

為すすべ無く疾風一迅の餌食になった。

でも、まだ踏み止まれたのは、受け身と化頸の併用だった。

これがもし、広範囲攻撃でない疾風一迅だったら完全に終わっていただろう？

リング外に飛ばされて姿を見せたものの、また歩いてリングに戻る。

そしてまた霞み始めた。

「させない！」

リンが奥義「行」で突っ込んできた。

「重切！」

完全に消える前に重い一撃、避ける事の出来なかったマリーはそこで意識を手放した。

リン、ミッドチルダを制する！

こうして、今年のミッドチルダ代表が決まった。

優勝、男子：与那覇海人、女子：リン・ヤマザキ

ミッドチルダ代表、

男子：与那覇海人、アード・ベック、ジョン・ハミルトン、補欠：不破貴之、宇界尊章

女子：リン・ヤマザキ、マリー・ボーン、高町小雪、補欠：高町沙由紀、高町プレオ

「えっ、俺レギュラーで世界戦に出られるんですか？」（ジョン

「なんだ聞いてなかったのか？どの世界も男女3人ずつの代表で個人戦を戦うんだ。」

その男女のうち一人を外して団体戦があるからな？それに準決勝まで残れば、

ほぼレギュラー確定なんだ。悪くても確実に補欠になる。

最後の一人は優勝者の指名で決まるんだよ。ルールぐらい覚えとこな？」（ヴィータ

そう、ジョン達は既に世界戦の切符を手にしていた。

しかもそれに全く気が付いていなかった。

これでジョン達はまた忙しい特訓漬けの日々が確定してしまった。

丁度表彰式が終わった頃だった。

「ここは何処……私は一体……」

「あら、気が付いたみたいね？大丈夫？私分かる？」

「ここは何処ですか？あなたは？」

「ここは高度医療センター外科病棟よ、良かったわ、もう心配ないわよ」

アルロー・ブリュット（17）は意識を取り戻していた。

シヤマルの呼びかけに受け答えする。

包帯だらけの顔、体の自由もまだ利いていない。

でもどうやら自分は生きているという事だけははっきり分かる。

「あの、あの子はどうなったんですか？」

「平気よ、擦り剥いただけで大したこと無かったわ、あなたのお陰よ、

でもね、余り無茶をしないで、命は一つしかない大切な物なのよ、あなたが亡くなれば悲しむ人は数多くいるの、それを忘れないでね？」

シヤマルの暖かい言葉に涙がこぼれ落ちる。

病室の外にいた家族や、あの子供の両親もお見舞いに来てくれた。た。

彼女は生きている事のおかげがえの無さを噛み締める事になった。

「所で大会はどうなったの？」（アルロー

「大丈夫、あなたの代わりに出場したりザーバーが優勝したわ、もうすぐ報告に来てくれるかもね？」

私は表彰式が終わるとすぐにナギに転送して貰った。高度医療センターへ、そしてすぐに病室に駆け付ける。

コンコン

「どつぞ」

「こんにちは、初めまして、リン・ヤマザキと言います」

「まさか本当にお見舞いに来てくれるなんて？」

「私はあなたにお礼が言いたかったから、だから来たんです。私に出場の機会を与えて貰えたから優勝出来た。だからなんです」

それから、話す事1時間、うち解け合う二人だった。

「そうなんだ？スクールってそんなに強い人の集まりなんだ？」

「実はあの時の代表決定戦では負けちゃって、補欠だったんです。それでリザーバーに登録されて、まさか出られるとは思ってなかったんです」

「でも、凄いわね、選手になれなくてもちゃんと努力してた。だから誰よりも強く成れたのね？」

「はい！」

「でも、私は無理そう、もうこの体じゃあストライクアーツなんて出来そうにないから……」

コンコン

「あ、シャマル先生！」

「さっきの件なんだけど、あなたの体の機能回復手術、出来るわよ、医療費は車の持ち主の保険から出るから心配ないわ、もう少し体力が回復したら再手術になるけどね？」（シャマル

「えっ、私の体元に戻るんですか？」（アルロー

「ええ、大丈夫よ、今は戦闘機人のパーツを移植する事で、



前よりパワーアップする位になれるわよ?」(シャマル)

「シャマル先生、それってナカジマさん達にみたいにならない?」  
(リン)

「う〜んどうだろ? たまに副作用でそうなる人もいるけどね?

まあ、ちよっと食費が増えたり子宝に恵まれたりするだけだから?」

(シャマル)

「えっそれってどう言う事?」(アルロー)

「それがね、もの凄い大食らいになるのと、時々痴女になるんです」  
(リン)

「リンちゃん、痴女は言い過ぎよ」(シャマル)

「事実、ナカジマさん達よってたかって男の子を犯してるし、  
みんなの見てる前でやっちゃうし、あれは凄かったんだから?」  
(リン)

「ま、またやったんだ?」(シャマル)

思わず噴いたのはアルローだった。

「なんかスクールってもの凄く楽しそう!」(アルロー)

「ええ、楽しい所ですよ、基本的にバカしか居ないけど、  
みんなで格闘技やって、バカやって、青春するには最高の所だと思います!」(リン)

「決めた、手術受ける、良くなったら必ず遊びに行くね？」（アル）  
「」

「うん、待ってる」（リン）

こうして二人の間に友情が芽生えた。

優勝と友情と（後書き）

次回：プレオ様の15才の誕生日、

## プレオの誕生日（前書き）

今日は翠屋は貸し切り、高町家以外にカエデやモミジ、ティント、フェイトさん一家も来ている。

「みんな、ありがとう！」

そう、プレオがなのはの所に来てもう12年の時が経っていた。

## プレオの誕生日

12月8日（祝）聖オリヴィエの聖誕祭である。  
この日、高町家は午前中、聖王教会のミサに出席、  
午後遅くからは翠屋でプレオの誕生日パーティーだったりする。

「プレオ、15才のお誕生日おめでとう！」（なのは

「ありがとう、ママ」

今日は翠屋は貸し切り、高町家以外にカエデやモミジ、ティント、  
フェイトさん一家も来ている。

「みんな、ありがとう！」

そう、プレオがなのはの所に来てもう12年の時が経っていた。

「お姉ちゃんは15で即位宣言したんだよね？」

「そうだよ、始めは嫌がってたんだけど、  
結局自分の成すべき事に目覚めたからかな？  
だから、みんなに慕われる良い王様に成れた。  
プレオも見習わないとね？」（なのは

「うっ、そう振る？」

ちよっと困ってしまうプレオ、本人としてはまだ其処までの自覚  
がないようだ。

「所であんた達、今年卒業だけど、進路はどうするの？」

「……勿論スクール！」

「やっぱりそう来る？でも将来は確実に武装隊だよ、

インターミドルも良くて2回しか出られなくなるよ？」（なのは

「うん、分かってるよ、でもスクールの方が世界戦に出られる確率は高いから、

そっちに掛けたいんだ？世界戦にレギュラーで出て優勝するのが夢だから」

プレオ達は世界を制するのを夢見てスクールに入学を希望していた。

「しかし残念だったね？もし小雪ちゃん達が出てなかったらレギュラーだったのに？」（なのは

「でもスクールの人強すぎだよ、まさか小雪さんが負けるなんて思わなかったし」（プレオ

「うっ、あれはルールに負けたの、実戦だったら勝ってるわ？」（

小雪

「ルールをきちんと把握しないからやられるんです」（なのは

「しっかしなのは生徒は本当に凄いね、

まさかうちの小雪がやられるとは思わなかったよ？」（美由希

「まあね？でも生き残ったのは殆ど1年生って言うのも驚きだった

けどね？

本当にあの子達鍛え甲斐があるわ、休み明けはもつとしごいてあげるわ？」（なのは

黒い笑いを浮かべるのはにドン引きするプレオ達、やっぱりマは怖いと思った。

その時だった。店の中に転送魔法陣、出てきたのはアプリリア、リイン、アギトの3人、

「ごめんなさいです、部隊長忙しくて来られないから代わりに来ました！」（アプリリア

「はやてちゃんもです、人事の問題で大変な事になってるすう〜」（リイン

「シグナムもだ、まあ仕方ねえな？新部隊を立ち上げる為だ」（アギト

4月人事の詰めの為、非常に忙しいらしい、この所連日打ち合わせに余念がないようだ。

それに合わせて、今地上本部前の海岸に大型ドックを建設している。4月までに完成させるべく今急ピッチで工事が始まっていた。

「はい、これプレゼントですう〜」（リイン

彼女たちはそれぞれにプレゼントを預かってきていた。

「所でもう聞いていると思うけど、例の予言が回避されたのは知ってるな？」（アギト

「うん、ヴィヴィオから聞いてるよ」（なのは）

「そうなるサポートパラドクスの発生が怖い、今年の6月みたいな事がまた起きるかも知れない」（アギト）

「まあ、それに対応出来る新部隊の増設なんですけどね？  
はやてちゃんが考えてるのは？」（リイン）

サポートパラドクス：一つの運命を変えた事によって発生するその運命と同等規模の新たな運命、シミュレインガーの次元因果律理論による。

つまり、予言された事その物を発生時に叩き潰すのではなく、遙か以前に叩き潰してしまうと、その運命の代わりに新たな出来事が発生してしまう事になる。

実は前年の冬に同じような事が起き、バロー口達はその運命を叩き潰していた。

「多分大丈夫よ、みんなが居るから、うちの卒業生達はそんなにヤワじゃあないわ」（なのは）

そう、なのはの言うとおり、この所の卒業生達の活躍は目を見張る物がある。

みんなあの悲しみを胸にどんどん強くなり、その強さの頂点に立つ男を誰もが信頼している。

その結末がどんな犯罪も許すことなく、どんな大きな事件であろうと解決してきた。

地に落ちていた管理局の信用を取り戻し、徐々に信頼を寄せられるまでになってきた。



「だからこそその新部隊なのですよ？」（リイン）

「新部隊ってどんな？」（フェイト）

「例のガンダム部隊ですう〜でもパイロットが居ないんです。普通の人がユニゾンリンクシステム使ったら死にますから？適性のある人でないと使えませんし、

それで居てパイロットの出来る人って意外と居ないんですよ」（リイン）

「それに部隊のスタッフ全員地上本部で揃えなきゃならねえ、艦長資格を持った提督が必要になるしな？艦橋スタッフとか、整備士とかメンテスタッフとか全然足りねえんだよ」（アギト）

「それでうちの副部隊長にオフィサーが来てるんです、艦長資格持ってますし、

提督資格も来年から有りますし、部隊長に滅茶苦茶鍛えられていますから、

良い部隊長になりますよ、でも後任人事がえらい事で、今はやてさんも部隊長も困ってるです」（アプリリア）

「なんか凄く大変そうだね？私も人事で随分悩んだもんね？それに加えて、来年からスクールも大きく体勢が変わるし、教えられる武術も思いつきり増えるから、生徒は更にパワーアップするわ」（なのは）

「えっ、新しい武術って？」（プレオ）

「まだプレオには言ってなかったね？」

御神の剣を含む流派が全部で八つあるんだよ？

それでそれを総称して永全不動八門って呼ぶの、みんな遠い親戚に当たるんだけど、その人達を地球から呼んだんだ。新一年生からはもつと強い子達が増えるよ、もしかしたら全員SSSも夢じゃないかも？」（なのは

そう、プレオ達は次の4月から途轍もないライバル達と切磋琢磨する事になる。

スクールは、またパワーアップする事になる。

「インターミドルにも出てたでしょ？あの槍の子とか、プレオの事を動けなくしたあの子とか、他にも何人か出てたんだけどね？」

そう、プレオも充分にその強さを味わっている。

あの試合の時、なのはが相手の反則を見抜いて助けてくれなかったら、

多分あそこで終わっていた試合、もの凄く苦い思い出だった。

そしてそんな武術が新たに仲間に加わる。

それはプレオにとつても新たな強さとの出会いになる、

まだ見ぬライバル達の存在に目を輝かせるプレオだった。

こうしてプレオの誕生日は過ぎていった。

所で、切り分けられたケーキを前に目を輝かせているのはリイン達、

そう、ちっちゃくなるとそれだけケーキはでかくな成る訳で、とつても幸せな状態になる。

ただでさえ美味い翠屋のケーキを心ゆくまで堪能する3人だった。

「そうそう、来週の模擬戦大会出るんでしょ？」（なのは

「そだよ？」（プレオ）

「今度は覚悟しといた方が良いわよ、  
みんな強さの桁が二桁上がっているからね？」（なのは）

その言葉に、戦慄を覚えるプレオ達だった。

## ブレオの誕生日（後書き）

次回：新部隊の人事はどうなった？

## 人事（前書き）

「そうですね、第2スクールとかを作るぐらいなら職人養成所を作るべきかと思えます。

まずは満遍なく人材不足を解消する方が世界の治安維持には近道かと思えますよ？」（ヴァロット）

「私も同感だ、いくら戦力があっても、それを支えるスタッフが居なければその戦力は役に立たない」（シグナム）

## 人事

ブレオ達が誕生日会をしている頃、こちらは地上本部第22会議室

「ブラシカの整備ドックもこの港に合わせて建設するつもりだ。

どうだろうか？メンテスタッフを2隻の船で共用出来ないだろうか？」（シグナム

「まあ、普段は暇してる連中ばかりだし、良いと言えば良いですが、出勤が相次ぐと人手が足りなくなります、

それにあの疑似モビルスーツが増える分増員しないと追いつかない」  
（ヴァロット

そう、必要最低限の人数しか居ないスペシャルフォースにとって、これ以上人を取られるのは非常に不味い事だった。

「まあ、疑似モビルスーツのメンテは、  
専用スタッフをハラーナ社の方から回して貰える事に話が付きそう  
や、

後は戦艦のメンテスタッフと艦橋スタッフ、パイロットや」（はやて

「しかし、未だに人材不足とは困った物だな？」（ヴァロット

「本局の整備ドックも火の車や、人材が全然足りてへん、

事務職とかは一杯余ってるんだけど、整備士とかの職人が足りへんの  
や」（はやて

「もう少しクラナガン大学の工学部とか、

工業惑星なんかに予算を付けた方が良くないですか？

そう言う所で人材育成して貰わないと、  
スタッフを取られたらこっちも困りますよ？」（ヴァロット

「デバイスマスターとかは結構おるんやけど、  
やっぱり専門の大型魔導機をいじれる職人はおらんから困るわ」（は  
やて

「俺はアマネを取られてしまっのが痛いな？  
スペシャルフォースに執務官資格を持った奴が他にいないんだよな  
？」（ヴァロット

「人事部長、何とかありませんかね？」（シグナム

「うっ、そう言われましても……」（人事部長

其処にいる全員重く長いため息をつく、  
武装隊はスクールからの供給で随分人事が回るようになってきたも  
のの、  
まだメンテスタッフなどの職人が足りていない管理局だった。

「スクールみたいに職人を養成する学校を作らんとアカンなあ？」  
（はやて

「それが良いかと思いません。  
次元航行隊も酷いメンテスタッフ不足だと聞いてますからね？  
だからメンテスタッフを乗せていない船も多いし、  
ドックは常に順番待ちの船でえらい事になっている。  
もっと職人を供給しない事にはパンクしちゃいますよ」（ヴァロット

「頭の痛い問題やて、まずは全世界の治安維持を目標に頑張ってた

んやけど、

まだ人材不足の部署がいくらでも有るんや、予算も其処まである訳でも無し、

きつついわあ、ほんま」(はやて

「そうですね、第2スクールとかを作るぐらいなら職人養成所を作るべきかと思えます。

まずは満遍なく人材不足を解消する方が世界の治安維持には近道かと思えますよ？」(ヴァロット

「私も同感だ、いくら戦力があっても、

それを支えるスタッフが居なければその戦力は役に立たない」(シグナム

「うう、改革への道はまだ遠しか？」(はやて

「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なりって、  
士郎先生に教えて貰った言葉ですけどね、

結局は人材有つての平和じゃあないでしょうか？  
どんなに戦力を作った所でそれを支える人がいなければ何にも出来ない

結局、全ては人材に支えられて居るんですよ？」(ヴァロット

「それ武田信玄の言葉やで？御式内の伝説の使い手だった大昔の人や」(はやて

結局、戦艦のメンテスタッフをブラシカと共用し、

今まで海底に停泊していたブラシカは専用ドックに移る事で話が付いた。

そして、スクール拡充計画に使われるはずだった予算がかなり余っ



ていた為、  
新たに職人養成所を作る為の準備資金に回される事となった。  
準備期間1年を持ってその翌年から開校する予定で職人学校も動き  
始めた。  
また管理局改革も少しずつ充実し始めていた。

「……と言う訳や、どうやヴァイス君、先生やってみいへんか？  
ヴァイス君ならバイクからへり、戦艦まで大型機械のメンテ経験有  
るやろ？  
それにジェノサイダーはもう返上や、そろそろ歳やし、次の代に譲  
るべきや」

突然呼び出されたヴァイスは職人学校の教師への転属を打診され  
ていた。

「ちょっと待って下さい本部長、俺もうすぐ1尉になるのに降格人  
事ですか？」

「階級はそのまま一尉で行くよ、役職は教務主任や」

「うっ、ちょっと考えさせて下さい、明日には返事しますので」

その夜、ヴァイスはティアナと話し合った。

「あら、良いじゃない？教える事は教えられる事、  
学ぶ事は楽しいって校長先生も言ってたし、  
危険な仕事より向いてると思うわよ？」

結局、ヴァイスは職人学校の教師になる事を了解した。

「アマネさん、4月人事で正式に新部隊の部隊長が決まったよ？」

アマローネは4月から新部隊の部隊長に栄転する事が決まった。

「苦節10年、とうとうこの日が来たのね。私もこれで出世街道に乗れるわ。」

でも、誰か嫁にもろて。」（アマローネ

「そうそう、アマネさん、来週の金曜合コンセッティングしてあるから空けといてね？」

そろそろ売れ残っている奴らの整理をしないとイケないからな？」

「どう言う意味ですか？それは？」

「いや、何、まだ結婚出来てない奴らの出会いの場を作ってやろうって言うだけの事さ、

もしかしたら結婚相手の一人や二人見つかるかも知れないぜ？」

ヴァロットはそう言ってニヤリと笑う。

「何？ヴァロットから呼び出し？」  
「たく書類の整理が忙しいこの時期に？」

「なんだ冬休みの前日じゃないか？まあ、仕事の方は早めに済ませば問題ないか？」（バローロ

「えっ、ヴァロットから呼び出し？」（エリカ

「みたいですね？私の所にも来ましたよ」（リオ

「えっ、合コンですか？分かりました」（アンナ

「何？合コン？絶対行く！」（峰牙驚邏

いろんな所に連絡が入っていた。

## 人事（後書き）

次回：その頃スクールでは？

### 第13期生徒会（前書き）

俺は全ての経緯を説明し、予言やサポートパラドクスの話をした上で問いかけた。

全員、その話の重さに啞然とするばかりだった。

「そんな、私達のミスがそのまま同級生の命に繋がるなんて聞いてないよ、

そんな責任を問われても無理だよ、そんな恐ろしい事出来ないよ？」

（サクラ

### 第13期生徒会

ヴァロット達が喧々諤々やっていた頃、スクールでは……

「何？予言が回避された？」（クロスリード）

「ああ、教会の方から連絡があつた」（ヒビキ）

生徒会が集合し、会議を開いていた。

「これでジョン達は楽になつたな？」（アード）

「いや、その逆なんだ。もっと厳しくなつたとしか言いようがない」（ヒビキ）

「それどう言う事？」（カティ）

「サポートパラドクスと言って、一つの運命を事前に潰してしまうと、

その代わりの運命が準備されてしまうんだ。

起きると予言された事件が発生時に叩き潰せばそれで終わりなんだが、

発生する前に潰すとそれに置き換わる物が発生する。

運命とはそう言う物なのだそうだ」（クロスリード）

「そんな、それじゃあ何の為に努力してるのか分からないよ」（イース）

「だからこそ、どんな運命が来ようが、

それを真正面から叩き潰せるだけの力を持たないとダメなんだ。実際、今年の6月に起きた事件は本来別の事件が起きるはずだった。それをバローロさん達が全力で叩き潰した結果なんだ」(クロスリード)

「じゃあ、次の4月から5月にはまた大きな事件が起きるって事？」  
(アヤメ)

「そうなるな？しかもサポートパラドクスには予言がない、これは非常に厄介な事だ」(ヒビキ)

「じゃあ、やっぱりジョン達を鍛え続けるのか？」(ラフロ)

「そうなるな？そろそろ次の生徒会を決めさせようと思う」(クロスリード)

そして、ジョン、リン、マリーが呼ばれた。

「一体何の用ですか？いきなり呼び出して？」(ジョン)

「済まん、お前達に重要な決定を伝えねば成らん、次期生徒会人事についてだ」(ヒビキ)

「会長はジョン、お前だ」(クロスリード)

「そして副会長はリンお前だ」(ヒビキ)

私達はその言葉に動揺する。

今まで恐れていた事、考えたくない事がとうとうやってきた。

「マリーは会計だな？残りのメンバーはお前達に人選を任せる」  
アード

そして予言の回避とサポートパラドクスの事が伝えられた。

「まあ、早めにメンバーを決めてしまつて世界戦に望む事だ、  
研修は年明けからになる。」（ラフロ

ジョン達は呆然としながら生徒会室を後にした。

「どつしどつ？」（リン

「取り敢えず、学食にみんなを呼ぼう？そこで話し合おう？」（ジ  
ョン

こうして、学食に呼び出されたのは、ジョニー、ジャック、ブラ  
ントン、

デュワーズ、エヴァン、バラントイン、フェイマス、ジム、ヘンリ  
ー、

ツバキ、ツグミ、サクラ、ナギの13人、

「えっ、ジョンが会長？」（ブラントン

「リンは副会長なのね？」（デュワーズ

「そう言う事だ、それでこのメンバーの中から残りの役員を選びた  
い。

了解して貰えるだろうか？」（ジョン

俺は全ての経緯を説明し、予言やサポートパラドクスの話をした



上で問いかけた。

全員、その話の重さに唾然とするばかりだった。

「そんな、私達のミスがそのまま同級生の命に繋がるなんて聞いてないよ、

そんな責任を問われても無理だよ、そんな恐ろしい事出来ないよ？」

（サクラ

「それが現実なんだ、

あの慰霊碑はヴァロットさんがもう二度とそう言う事が無いように願いを込めて建てた物だ。

今の会長達もそれを分かっている、

どれだけ辛い事かを知っていてその責任を果たして居るんだ。

俺達もその責任を果たす時が来たんだ。俺一人じゃ無理だ。

だから、俺に力を貸して欲しい、俺に付いてきて欲しい」（ジョン

私は驚いた、あのジョンがここまで弱音を言うとは思わなかった。

それで周りに助けを求めるとは思わなかった。

でも、それはジョンが命の重さを知ってるから、絶対に誰も死なせたくないから、

そのことに真正面から向き合っているから出てきた言葉だった。

「ジョンは誰にも嘘を付いたりしない」「マリーの言葉の意味がよく分かる。

一人で出来なければ素直に周りに助けを求め、嘘や誤魔化しなどしない、

人にも自分にも嘘を付いたりしない。

だから私達は付いていく事が出来る、ジョンにだったら会長を任せなくても問題ない。

お兄ちゃんやクロスさん達の考えていた事がよく分かった。

「うん、ジョンを信じるよ、今は信じて付いていくしかないんだ」  
(ブランドン)

「そうだ、ジョン一人じゃあ何も出来やしないけど、俺達が居たら何とかなるかも知れない」(バルンタイン)

「みんな……」(ジョン)

「だから泣くなよ、それより早い事決めて練習しないと？  
もうこれでこのチームで模擬戦大会には出られないんだから？」  
(ヘンリー)

そう、今までのチームでの模擬戦大会は来週が最後になる。  
私達は、これを最後に生徒会チームとして再編成されるのだ。

そして、私達は話し合った。

生徒会長：ジョン・ハミルトン

副会長：リン・ヤマザキ

第一書記：デュワーズ・ホワイト

第二書記：ブランドン・ゴールド

第一会計：マリー・ポーン

第二会計：エヴァン・ウィリアムス

第一庶務：ヘンリー・マツケンナ

第二庶務：ツグミ・ナカジマ

夕方まで話し合った末にこんな感じで落ち着いた。

生徒会Aチーム、ジョン(FA)、ツグミ(GW)、ヘンリー(C  
G)、ブランドン(FB)

生徒会Bチーム、マリー（FA）、リン（GW）、デュワーズ（C  
G）、エヴァン（FB）

チーム編成はこうなった。

3月からはこのチームで行く事になる。

ジョンは人事案を生徒会に報告すると、すぐに最後の模擬戦大会の準備に入った。

## 第13期生徒会（後書き）

次回：最後の模擬戦大会を前に皆さん色々と忙しいようです。

開幕、模擬戦大会冬の陣（前書き）

「優勝候補は生徒会チームだな？他には？一年のトップ4チームも侮れないけど、

大していないようだ、ん？チーム御神？」

とんでも無い優勝候補が居た。

高町小雪、高町沙由紀、不破貴之、ジャンヌ御神、御神道場の四天王が揃い踏みだった。

## 開幕、模擬戦大会冬の陣

後三日で模擬戦大会。

俺達は最後の大会に向けて練習に励む、

もう、このチームで戦う事はない、これが最後になるからだ。

この大会、会長達にこの前の借りを返して是非優勝したい所だ。

「ぐはっ、ジョン強すぎ、いつの間にこんなに強くなったんだよ？」

(ジョン)

「そうか？俺はまだ本気じゃあないんだが、本気ならもっと大変な事になっているし」(ジョン)

そう、この所のジョンの成長ぶりに周りがついて行けてないよう  
だ。

「まあいいさ、基本俺が先頭で全て仕留めるから、撃ち漏らした奴  
だけ片付けてくれれば」(ジョン)

ジョンはミッドチルダ大会に出た事で、自分の目指すべき目標を、  
超えるべき強さを見つけていた。

その途轍もなく高い目標にジョンは再び挑む為に日々努力を積むの  
だった。

一方こちらは月村家、

「え？拓也ももう結婚？」(雫)

そしてがつくりと落ち込む隼先生、

これはやばい事になってきた。

そろそろ自分も決めないと一人行かず後家が決定してしまう。

そう言えばロシエット一佐の設定した合コンのお誘いが来ていた。

(こつなつたらこの合コンに全てを賭けよう?)

彼女は今度の合コンに全てを賭ける事にした。

因みに、拓也の結婚式は年が明けてすぐだそうである。

更に翠屋、

「年明けから一週間は休業ね?今の内に材料を揃えないと大変な事になりそうだし」

美由希さんと桃子さんはウェディングケーキの準備で大忙しだ。

再びスクール、

「流石に最強のツートップが居ると楽だわ」

デュワーズ達はリン達の成長に手応えを感じている。

「まあ、生徒会チームに勝てるとは思えないけど、これなら準決勝には残れそうよ!」

リン達のチームはかなり手応えを感じているようだ。

こっちは与那覇道場、  
インターミドルの決勝戦翌日から、入門者が後を絶たない。  
新たに300人近い入門者を獲得していた。

「やっぱり優勝すると宣伝効果が違うね？」（スー

「これで経営状況もかなり改善したな？」（輝馬

そんなこんなでどんどん時間が過ぎていく、気が付けばもう明日は模擬戦大会だった。

「あれ？ジョンの奴まだ一人で練習してる？」（バランタイン

遅くなっても、一人黙々と正拳突きを練習をするジョン、  
ただひたすらにその動きを体に覚え込ませる。

そう、全ての基本である正拳突き、それを極めない事にはあの最終奥義に至る事は出来ない。

ジョンはただひたすらに最終奥義を身に付けるべく練習に汗を流している。

明日は模擬戦大会だった。

練習が終わると俺は明日の組合せを確認する。

レギュレーションはこの前と同じ、特殊アイテム禁止やナカジマ家の一部にISを禁止された者、

一部のアルケミック技や強制転送、強制召喚の禁止などだった。

「何だ？まずは雑魚チームからか？」

そう、今回は一般参加のトーナメント戦、128チームで争う。



しかも、一般参加の雑魚チームだ。

「優勝候補は生徒会チームだな？他には？一年のトップ4チームも侮れないけど、

大していないようだ、ん？チーム御神？」

とんでも無い優勝候補が居た。

高町小雪、高町沙由紀、不破貴之、ジャン又御神、御神道場の四天王が揃い踏みだった。

トーナメント表を見る限り、このチームとは決勝まで当たらない。

決勝は生徒会Aチームかチーム御神のどちらかと当たりそうだ。

準決勝まで勝ち進めば、リン達のチームと当たるだろう？

まず順調に勝ち進んでくるとしてベストエイトでチームTN2Tと当たる可能性が高い。

今回は、其処まで勝ち上がってくる事が出来るのだろうか？相当厳しい戦いが予想される。

そして翌日。

いつもの事ながら訓練場の前に長蛇の列、インターミドル以上だな？スクールの人気の高さが伺える。

毎度の如く、限定1000枚の入場券は瞬く間に売りきれぬ。

まあ、この人達のお陰でスクールの修理代は何とかなっているのだ。

「さあ、始まりましたガチンコ模擬戦大会冬の陣！

司会兼審判長は高町なのはと」

「解説はスペシャルフォース部隊長のヴァンサン・ロシエットでお送りしております」

「私もおるで？」（はやて

「本部長また来たんすか？」（ヴァロット

「今回は視察を兼ねてと、大会終了後に皆さんに重要なお知らせがあつて来たんや」（はやて

「重要なお知らせ？」（なのは

「まあ、終わってからの楽しみや」（はやて

本部長は、何かサプライズを準備しているようだ。

そして、容赦なく大会は始まった。

**開幕、模擬戦大会冬の陣（後書き）**

次回：それぞれに大会は進む、

## チームワーク（前書き）

なかなか頭の切れる所が良いな？

まともにガチンコせずによく相手を倒している。

あれなら消耗も少ないし、楽に勝つ事が出来る。

## チームワーク

「さあ、始まりましたガチンコ模擬戦大会冬の陣！  
司会兼審判長は高町なのはと」

「解説はスペシャルフォー스部隊長のヴァンサン・ロシエットでお送りしております」

こうして始まった今年最後の模擬戦大会、何処のチームも成長著しい。

一般参加の多くは卒業生達、レギュレーションとしては卒業生は1チーム二人までとしている。

学期末の大会は128チームによるトーナメント戦、負けたらそれで終わりである。

初日は1回戦のみ、二日目は2回戦と3回戦、三日目が4回戦、決勝まで行われる。

俺達は1回戦、6期と7期の先輩チームと当たる。

でも弱すぎた、居竦みで全員動けなくなった所を一人ずつ殴り倒していく、

あっさり1回戦を突破していた。

私達はエルセアのチーム473と当たった。

ヴィラ・エミール執務官率いるエルセアのエリートチーム

強いのは分かっている。李氏八極拳と崑吾剣の使い手、非常に厄介だ。

「まったく、アステイ2号に居竦み使いつて最悪じゃない！」（ヴィラ

このチーム、消える相手と追籠に全く対応出来ていなかった。あつという間に仕留められる。

「弱っ！」

思わずそんな言葉が出てしまう。

でも仕方がない、先輩達の話によるとスクールのレベルは毎年上がっているという。

1期2期の頃は突出して強い人は居たけれど全体的なレベルはもっと低かったという。

最近では模擬戦大会のレベルが上がり、洒落にならない強さなのだろうか？

今のスクールの生徒は洒落にならない強さで、現場では一騎当千とまで言われている。

まあ、スペシャルフォースの部隊長みたいな化け物もいる訳で、犯罪者からは特に恐れられている。

「強えーよお前ら」

多くの先輩達がそう言い残して去っていく、

一回戦の大半はスクールの生徒が勝利を収めた。

他も順当に勝ち進んでいる。

ただ怖いのはやはりチーム御神だ。

試合時間僅かに3秒というむちゃくちゃな強さ、流石に1年の下位チームでは太刀打ち出来ない。

チームTN2Tも勝ち抜けたようだ。

こうして一日目1回戦は順当に勝ち上がる事が出来た。

「さあ、今日は二日目、2回戦と3回戦だよ？ここでベスト16が決まるからね？」(なのは)

「流石に今日からは違いますね？レベルの高い試合が多くなります」  
(ヴァロット)

「1年生が随分生き残ってるなあ？」(はやて)

そして2回戦が始まる。

「なんでこんな所で当たるかなあ？」(プレオ)

「私も当たりたくなかったよ？」(ツバキ)

そう、チームTN2Tはナカジマシスターズ7と当たってしまった。

(ティント、パワー勝負はダメだよ、向こうの方が上だから、トラップ潰しと援護射撃に徹底してね？)(プレオ)

(了解)

(取り敢えず、全員エマルジョンコレクトを待機モードで装備ね？必要に応じて使えばいいから？後はプログラム任せね？)(カエデ)

((了解))

「始め！」

「クラスタアアアアバレット！」（テイント

トラップ潰しの砲撃が打ち上げられ、細かく分かれて落ちてくる。そしてうねうねと立ち上がるトラップバインド、最早お約束だった。

爆煙が晴れないうちに突っ込むモミジとプレオ、飛び込まれてしまえば水鏡や吐納を使っている暇はない。相手の先頭は拳法、その後ろは空手だ。

モミジがツバキと、プレオがツグミと対峙する。

お互い間合いギリギリの距離、一歩踏み込めば即組み手が始まる距離だ。

「アクセルシューター・シューウウウウウトオツ」

後ろから16発のアクセルシューターが飛んでくる。

それはプレオ達に命中するかに見えた。しかし、それが体を貫通する。

そう、補助魔法陣を貼り付けていた。

背中から吸い込んで腹から出す戦法、ヴァロットが昔見せた手だ。

突然目の前に現れるシューター、避けられるような物じゃあなかつた。

仲良く8発ずつを喰らって倒れるツバキとツグミ、起きあがるうとした所にそれぞれ峰打ちを喰らって撃墜される。

「おお、これは凄いなあ？まさかこんな所であれの再現を見るとは思わなんだわ？」（はやて

「どおやら俺の戦い方をかなり研究したようだな？



あのタイミングであれをやられたら避ける事は難しいだろう?」「  
ヴァロット

「しかし、危なっかしい作戦ね? 僅かでも的を外したら自分が喰ら  
うよあれを?」「(なのは

「あれは相当にお互いを信用していないと出来ないだろう?」「(ヴ  
アロット

さて、残り二人、プレオがナギと、モミジがサクラと対峙する。  
この距離ではまともな砲撃が出来ないサクラが為すすべ無く倒され  
た。

でもナギがありつたけの転送魔法陣と補助魔法陣を出して、  
プレオに攻撃をさせないようにガードしている。

攻め倦ねるプレオ、しかし、モミジもティントもカエデも前にや  
ってくる。

完全に囲まれたナギ、これ以上抵抗出来ずに降伏した。

「やるなあ? プレオ達、2年生の中堅ぐらいの実力はあるで?」「  
はやて

「まあ、かなり伸びてきたわね? それに抜群のチームワークをして  
いる」「(なのは

「なかなか頭の切れる所が良いな?

まともにガチンコせずに上手く相手を倒している。

あれなら消耗も少ないし、楽に勝つ事が出来る。

だがこの先だ。今日は多分勝ち残るかも知れないが、

明日はそう簡単には勝たせて貰えないぞ? 明日はベスト16からの

戦いになる。

ここまで残ると最早強豪以外に生き残っていないからな？  
相当キツイ戦いになるぞ？」（ヴァロット

こうして、どんどん試合が進む。

時に巨大な魔法が炸裂し、時に激しい技の応酬が観客を沸かせる。  
殆どの試合が、インターミドルの世界戦レベル。

その圧倒的な試合に観客達は酔いしれる。

そして恙無く二日目を終了した。

この時点でベスト16にはかなりの強豪チームが残った。

ベスト16組合せ

- 第1試合 1年AチームVSチームN2
- 第2試合 チームWW4VS1年Fチーム
- 第3試合 チームTN2TVS2年Fチーム
- 第4試合 1年BチームVS2年Cチーム
- 第5試合 生徒会BチームVS2年Gチーム
- 第6試合 1年CチームVSチーム御神
- 第7試合 チームハウンドVS1年Kチーム
- 第8試合 生徒会AチームVS2年Mチーム

## チームワーク（後書き）

次回：いよいよ三日目、過酷な試合が始まる。

## 作戦力（前書き）

「今のは凄いなあ、爆発に紛れて転移しよった」（はやて

「うん、今のは作戦がいいよね？爆発で見えなくなる瞬間を狙う所が上手いよね？」（なのは

「それだけじゃあない、あの瞬間全員で転移した事が上手い。

敵陣内なら間違いなく安全だ。其処を見抜いていた所が上手かった」

（ヴァロット

## 作戦力

「さあ、今日は最終日、ベスト16の試合からだよ?」(なのは

「まあ4回戦は順当に行くだろう?だが、

ベストエイトからは読めない試合が多いな?」(ヴァロット

「じゃあ第1試合いつてみよう?」(なのは

こうして三日目が始まる。

俺達はチームN2と当たるも、

まだ居竦みに対応できていなかったため楽勝で次に駒を進める。

まあ、そんな感じでベスト16は恙無く順当に勝ち残る所が勝ち残った。

### ベスト8組合せ

第1試合 1年AチームVSチームWW4

第2試合 チームTN2TVS1年Bチーム

第3試合 生徒会BチームVSチーム御神

第4試合 チームハウンドVS生徒会Aチーム

良い組合せだ、俺達のチームは決勝まで優勝候補とは当たらない。しかも、優勝候補の4チームが準決勝までに潰し有ってくれる。これはもしかしたら優勝出来るかも知れない。

私達はラッキーだと思う、ジョン達のチームに勝てれば決勝には進出出来る。

まずは目の前の鬱陶しい後輩達に一泡吹かせて勝つ事だ。

「じゃあそろそろ始めるよ！」（なのは

第一試合、俺達はチームWW4と当たる。

あのハーベイの居るチームだ。

既にあのB-29が上空高く飛んでいる、これは鬱陶しそうだ。

「始め！」

「エーラ、アトミックブレイカーだ！」

その瞬間、上空のエーラから魔力弾が1発落とされる。

それは収束しながら落ちてきた。

ジョン達の上空で補助魔法陣に飲まれる寸前大爆発した。

核爆発を思わせる巨大な爆発が起きる。

これがハーベイの必殺技だった。

中期収束型砲撃、収束しながら飛んで来て大爆発する。

でも爆煙が晴れた時、其処には誰もいなかった。

「ホーミングバレット！」（ジャック

斜め後ろから全員にホーミングバレットが浴びせられる。

そう、ジョン達は全員で敵陣に転移という戦法に出ていた。

「滅掌雷轟貫手！」（ジョニー

メーヌが撃墜される。

「マッハ拳！」（ジョン



「でもここで負けたくないよね？」（ティント

「じゃあ、第2試合行ってみようか？」（なのは

「始め！」

容赦なく始まった試合、すぐにマリーが霞んで消える。  
でもお互い動かない。

「サウザンドアロー！」

デュワーズが敵陣に矢の雨を降らす。  
やっぱり立ち上がるトラップバインド、  
しかもセンターとフルバックの前後にも仕掛けていた。

「ホーミングバレット！」

ティントがホーミングバレットを返す。  
仕掛けたトラップは全て消滅した。

これで花道が空いたものお互いに突っ込まない。  
そう、リンは迎撃体勢で待っている。下手に神速で突っ込めばそれこそ思っ壺だ。

暫く睨み合いが続く、なかなか動きそうにない。

「通背拳！」

マリーがいきなりカエデの懐に現れる。  
そして通背拳が決まっていた。カエデ撃墜。



「このお！地獄花！」

ティントが奥義を繰り出すもマリーは消えていた。  
これでは当たらない。

その瞬間直後ろから強烈な衝撃、ティントも撃墜される。  
リンがティントの直後ろに転送されていた。  
そこから居合いの一撃を繰り出していた。

プレオはモミジと二人背中をかばい合うしかなかった。  
完全に挟まれた。前からは砲撃、後ろからは斬撃、しかもエマルジ  
ヨンシールドさえ無い。

「重切！」

リンの重い一撃を十字受けして受け止めるプレオ、  
とてもじゃあ無いが片手で止められるような物じゃあなかった。

「通背拳！」

いきなりモミジの懐に現れたマリー、そこから渾身の通背拳をお  
見舞いする。

その一撃は背中合わせになっていたプレオまで纏めてKOしていた。

「やっぱりこのチームも強いわね？」（なのは

「あの通背拳は厄介だな？衝撃が貫通するから何人重なっていよう  
とも纏めてKOできる。」

壁の向こうの敵でさえ倒す事が可能な打撃なのだから」（ヴァロット

「それにしても成長しとるなあ？」

あの作戦は一人を餌に時間差でもう一人送り込んだのが上手い。それに二人倒した後は挟み撃ちに出来る。囲まれたらもう終わりや？」（はやて

「ああ、それにマリーの使い方が上手い。

プレオ様達はあのホーミングバレットの後に動かなかったのが失敗だった。

睨み合えばその間にマリーの接近を許してしまう。

かと言って神速で突っ込む事も出来ない。

完全に詰め将棋に嵌められましたね？」（ヴァロット

こうして準決勝第一試合はジョン達のチームとリン達のチームが激突する事になった。

これで3回目の対戦である。

作戦力（後書き）

次回生徒会BチームV Sチーム御神、どちらが勝つのか？

## アフロ再び（前書き）

「それ僕の髪の毛だよ？」（アフロ

そう、ラフロのアフロ魔法だった。

## アフロ再び

第3試合 生徒会BチームVSチーム御神  
優勝候補の一角同士がまさかベストエイトでぶつかるとは思わなかった。

チーム御神は此処まで3秒以内という極めて短い試合時間で相手を倒してきた。

強さは折紙付き、センターやフルバックを持たず、全員いきなり斬り込んでくる。

しかも神速は2段になるとトラップがその意味を成さない。

あまりの速さの為駆け抜けた後ろでトラップが立ち上がったたりするのだ。

此処まで圧倒的な速さで一気に相手チームを叩き潰して勝ち上がってきた。

一方生徒会Bチームは前衛二人の力押しによって勝ち上がってきたチームだった。

まだ実力の2割も見せていない。

そして作戦タイム、

「今度は一筋縄では行かないチームね？」（小雪）

「前から突っ込むと見せかけて横から切りかかるっか？」（沙由紀）

「いや、回り込んで後ろからの方が安全だろう？」

「防御さえ潰してしまえば勝ったも同然だ」（貴之）

「じゃあそのプランで行きましょう」(小雪)

「多分向こうはフルバックとセンターを狙ってくるだろう?」(ヒビキ)

「大丈夫、やられない為のプランならある。」

ヒビキは自分の仕事をしてくれればそれで良い、今回は迎撃戦だから」(ラフロ)

「分かった、そうさせて貰おう」(ヒビキ)

そして開始線で睨み合う。

チーム御神は横一線の突撃体勢、高町姉妹が両端にいる。この体勢なら囲んで殲滅する作戦だ。

一方生徒会Bチームはツートップ体勢、

ヒビキとアヤメはそれぞれ居合いとジャイアントインパクトの体勢、完全に迎え撃つ気だ。

その5m後ろにグレンが、更に3m後ろにラフロが居る。

「始め!」

「六面防御陣!アフロ発動!」

いきなり神速に出られる前に防御に出た生徒会チーム、

その隙を作る為にヒビキとアヤメが御神チームを牽制していた。

六面防御陣に入るグレン、更にその後ろには巨大アフロ、シュールな光景だった。

「しまった。まさか此処まで守りに入られるとは？」（小雪）

「くっそー突っ込めない！」（貴之）

「前の二人を三人で頼む、私は後ろ二人を倒す！」（小雪）

もう神速は使えない、ゆっくりと近付いてくる小雪達、

その瞬間、防御陣に穴が空いてグレンがマシンガンショットで迎撃する。

でも当たらない。流石に御神、その一瞬だけ神速を発動してかわす。

（狙いはまず召喚士！）

ジャンヌがアヤメに、貴之がヒビキに、小雪がアフロに斬り掛かる……

斬り掛かれなかった。極限に細い鋼系の様な物がそれぞれの手足に巻き付いていた。

沙由紀も動きを封じられていた。

「何だこれは？仕込みは禁止じゃあなかったのか？」（小雪）

「それ僕の髪の毛だよ？」（アフロ）

そう、ラフロのアフロ魔法だった。

長い髪の毛を一本ずつあらゆる方向に伸ばしていたのだ。

ラフロの髪の毛は最大展開すると半径50mをカバー出来る。

そう、一本ずつなら殆ど見えないし気付かれることなく罫を張る事が出来る。

彼らは4人ともその範囲に入っていたのだ。

それがいつの間にか手足に巻き付いていた。

そして斬り掛かろうとした瞬間両手両足を一纏めに拘束したのだ  
た。

もうどんな事をしても手足を引き離す事は無理だった。  
ラフロの髪の毛はピアノ線と同等の強度があるのだ。  
そして段々とアフロの方に引きずられていく4人、  
其処へ更に大量の髪の毛が巻き付いて締め上げる。

「汗臭い！」（小雪）

「きもちわるいよ〜！」（沙由紀）

「く、苦しい！」（貴之）

「油っぽくてべたべたする！」（ジャンヌ）

4人は精神的に攻められた挙げ句、絞め落とされた。

「何度見てもキモイわあ〜」（はやて）

「あ、あれは喰らいたくない！」（なのは）

「あ、あれは精神的にキツイ物があるな？暫くトラウマになるぞ？」  
（ヴァロット）

「でも、また見事なトラップだったね？」（なのは）

「アフロ魔法にあんなバリエーションがあつたとは驚きだな？  
何にも知らずに近付くのは危険だ」（ヴァロット）

「前の3人が完全にデコイやったね？」



しかしこつも簡単に御神の剣士が負けるとは思わなんだわあ〜」  
はやて

「見事なデコイ作戦だったな？教科書に載せたいぐらいだ」  
（ヴァ  
ロット

「くっそー、次の試合まで取っておきたかったんだが、  
これで奥の手ももう無いし、新しい作戦を何か考え付かないと……」  
（ラフロ

私は見ていて思った。

あれに勝てるのは今の所生徒会長とジョンだけだと……

第4試合 チームハウンドVS生徒会Aチーム

言わずもがな圧倒的な試合過ぎて最早実況する暇もなく、  
あつという間に生徒会Aチームが勝利を収め、準決勝に駒を進めた。

## アフロ再び（後書き）

次回：準決勝第1試合、1年AチームVS1年Bチームどっちが勝つか？

### 三度目の激突（前書き）

次の試合は1年AチームVS1年Bチーム、これで3度目だろうか？  
このチームがぶつかるのは？

### 三度目の激突

「では此処でお昼の休憩に入ります。  
午後からは準決勝、決勝を行います」(なのは)

そしてお昼の休憩に、その間に選手は回復を図り、次の試合の作戦を立てる。

次の試合は1年AチームVS1年Bチーム、これで3度目だろうか？  
このチームがぶつかるとは？

軽めの食事を摂りながら、ジョン達は作戦を練る。

「マリーに接近を許すと怖いよね？」(ブランドン)

「だが向こうの生命線はマリーだ。エヴァンじゃあない」(ジョン)

「でも最初にマリーを倒すのは無理でしょ？」(ジャック)

「いや、出来る。と言つかやる方法を思い付いた。

マリーさえ倒してしまえば攻撃力は半分以下だ。俺に任せて貰おう」  
(ジョン)

「じゃあ、その後は殲滅戦だね？」(ジョニー)

「まあ、そう言う事だ」(ジョン)

何やら良からぬ作戦を思い付いたようだ。

「ねえ、どうする？」(リン)



「まさか！あんなに離れた所にトラップボムってどう言う事や？」  
（はやて

「ジョンの奴仕掛けるのが上手くなつたな？」

クロスもそうだけど、トラップボムはかなり離れた所にも設置可能なんですよ、

仕掛ける瞬間を見抜いていないと何処にどう仕掛けられたか分からないし、

気が付いた時には爆発している。途轍もなく厄介な魔法なんですよ」

（ヴァロット

「あの子恐ろしいわね？完全に相手をコントロールしてる。

あれじゃあ勝てない、完全に術中に嵌ってしまったら勝てる物じゃあないわ？」（なのは

（不味い、私達も動く事が出来ない。

周りの何処にトラップボムがあるか分からない）（リン

「不味い！六面防御陣！」（エヴァン

リン達は防御陣の中に避難した。

こうなればトラップ攻撃も砲撃も通用しない。

何にも攻撃を受けない代わりに何にも出来ないけれど？

「あれ？エヴァ、その補助魔法陣どうしたの？」（リン

エヴァンの頭の上に補助魔法陣が浮かんでいた。

「コレクトアウト！」（ブランドン



「ジョンの奴かなり伸びて居る。とんでも無い指揮官適性だ」(ヒ  
ビキ

「俺達もうかうかしてられないな？」(ラフロ

「しかし、今の試合は凄かったなあ？

この10年破られた事の無かった防御陣が破れるなんて始めて見た  
わ」(はやて

「全くだ、作った本人が言うのも何だが、

力比べ以外でこんな破り方をされるとは思っても見なかった」(ヴ  
アロツト

「外からの攻撃には強くても、内側に入られてしまうと案外弱い物  
なのね？」(なのは

ジョン達は早々と決勝進出を決めた。



### 三度目の激突（後書き）

次回：生徒会同士の戦いもまた凄い物になる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7903v/>

---

魔法戦記リリカルなのはSchool? ~ 10年後の物語 ~

2012年1月6日17時52分発行